テンプレ通りに進めたい

嘴広鴻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テンプレ通りに進めたい

【Ｎコード】
Ｎ２１９５Ｒ

【作者名】
嘴広鴻

【あらすじ】
欲しいもの？　平穏です。
テンプレ？　いいじゃないですか、テンプレ通りに進めたいんですよ。
ネギに転生することになりました。
しかし、神さまにわがままを言ったためにちょっと違うことに・・・。

この作品は「我がスプリングフィールドの魔法はァァァァァァア

アア、世界一ィィィイイイ！！！」の提供でお送りします。

第一章『魔法先生ネギま?』編完結しました。

続けて第二章『魔法先生ネギま!』編に進みます。

プロローグ1

それは剣と言うにはあまりにも大きすぎた。

大きくぶ厚く重く、そして大雑把すぎた。

それは正に鉄塊だった。

目覚めたら真っ白い空間にいて、目の前に馬鹿デカイ剣があった。

何ですか、この状況？

「あなたには転生をしてもらいます」

ちょっ、剣が喋った？

ますます何ですか、この状況？

それなりに二次創作とか見てるけど、

この状況で出てくるなら“ゼウス”とか名乗る神様とかでしょう。

「テンプレ通りならつまらないと思って」

そんな気遣い結構です。
というか転生先はベルセルクの世界ですか？
ごろごろ死亡フラグが転がっているからすぐ死にそうなんですが？

「いやいや、違うよ。
この剣は私の趣味。ベルセルク関係はもう出てこないと思うよ。
転生先世界は“魔法先生ネギま！”の世界。
しかも主人公の“ネギ・スプリングフィールド”になってもらいます」

“ネギま”、ですか。
知っていますけどＢ○○Ｋ○ＦＦの立ち読みでですし、就職してからは漫画から遠ざかっていたから、大まかな流れしか覚えてないですね。

それよりあれですか？　転生するにあたって何か特殊能力とか貰えるんですか？

「それはもちろん。条件というか無理なこともあるけど」

条件？

「自分はあまり力がないからね。

強力すぎる力を与えられないってのがまず一つ」

えーと、それはつまり“無限の魔力”とか“アカシックレコードへの接続”とかそんなのですかね？　あとは“創造の力”とか？

「そんな感じで捉えてもらえば大丈夫」

了解です。神様みたいなチートすぎる能力は無理なのか。
まず一つってことはまだあるんですよね。

「うん、もう一つが先輩方が他の人たちに与えた能力は無理ということ。
それとあなたがこの時点で知らない能力も駄目」

……先輩方？　他の人たち？
なんか嫌な予感がするんですが、一体どういうものですかね？

「そのままの通りの意味だけど？
二次創作見てんならわかるでしょ？」

すいません、思いっきり嫌な予感が増大したんですけど。
具体的にいうとどういうのが駄目なんですかね？

「あなたの知っているものだけでいいかな？
漫画でいうと“ドラえもん”と“ドラゴンボール”と……（省略）……ロボット系は“スパロボ”に出てくるのは全部駄目ということで」

駄目ということで、じゃないでしょう？
こんな縛りでどういう能力を貰えばいいんですか？

「他の人も使わないようなニッチな能力を知っとけば良かったのに。
色んな本を読まないからだよ」

……何で自分のせいにされるんでしょうか？
というかこの縛りで一体自分にどうしろと？

「テンプレ通りならつまらないと思って」

そんな気遣い結構です。
どんな能力ならＯＫなんですか？

「さっきから疑問符ばっかりだね、あなたは。

しょうがないぁ……。えーと、これなら先輩方も渡してないかな？」

お、能力貰えるんですか。
この際どんな能力でもいいから貰えるものは貰いましょう。

「“もやしもん”」

……は？

「だから、“もやしもん”の能力。
“菌やウィルスが肉眼で見え、指で掴んだり、会話することも出来るという不思議な能力”（ウィキペディアより）」

……もう少し考えさせてください。

プロローグ1（後書き）

続けてプロローグ2と第一話を投稿予定です。
能力はもやしもんではありません。

＃　3／20　修正しました
＃　5／20　全話「・・・」を「…」に修正しました

プロローグ2

というわけで能力は“ガンダムＵＣ”のＭＳ（モビルスーツ）の再現ということでお願いします。
あ、もちろんビームライフルとかの武器も使用できるようにしてくださいね。
ニュータイプじゃないですけどファンネルも使用可能でお願いします。

「いやいや、それは駄目だよ。
ガンダム使っている人いるよ」

何を言ってるんですか。
ロボット系はスパロボに出てくるのは駄目と言われただけですよ。
ガンダムＵＣはまだスパロボに参戦していません。
ルール違反してるわけじゃありません。
それにガンダム“ＵＣ”を使っている人はいないでしょう。

「えー、確かにそうみたいだけど。
あなたアニメ版でしか知らないでしょう？」

いいんですよ、それで。
じゃあオッケイということで。
そういうことにしてくださいよっ！

「テンプレ通りならつまらないと思わない？」

まったくもって思いません。
テンプレ通り、良いじゃないですか。
王道こそが至高の道ですよ。
というかそういう茨の道は他の人に任せてください。

「……面白くないなぁ」

あなたを楽しませるためにいるんじゃありません！

「……ま、いいか。
あとはこっちでなんとかしましょう」

あれ？　意外とあっさりＯＫ貰えた。
てっきり駄目だと言われると思ったのに。

「いや、ちゃんと私は駄目だと言ったよ。
まあ、確かに私の説明ミスもあったからさ。
テンプレ通りならつまらないと思うけど」

ふう、何とかなったか。
でも、よくよく考えたらもやしもんの能力でも良かったかな？
魔法薬作るのに役立つかもしれなかったし……。

いや、初志貫徹だ。ベルセルクの世界よりはマシだとはいえ、死亡フラグは主人公なら赤松ワールドでも結構あるんだ。
戦闘に役立つ能力でなければ。

「……確認するよ。
転生先世界は“魔法先生ネギま！”の並行世界。
転生するのは“ネギ・スプリングフィールド”。
与える能力は“ガンダムＵＣのＭＳ（モビルスーツ）の再現能力”でいいんだね。
それと“完全魔法無効化能力”もあげるよ。説明ミスのお詫びだよ。
大丈夫、ちゃんとモビルスーツの再現能力と組み合わせて違和感がないようにするから」

いいんですか？　太っ腹ですねぇ、ありがたく頂戴しておきます。
それで全部ＯＫです。

“ガンダムUCのMS（モビルスーツ）の再現能力”については後ほど設定でも投稿してください。

「メタな発言はやめなさい。
弐集院先生に転生先変えるよ」

すいません、もうしません。

「なら早速転生してもらいましょうか。
それと最後に聞きたいことがあるんだけど」

なんでしょうか？

「テンプレ通りならつまらないと思わない？」

……まったくもって思いません。
あ、何か目の前が真っ暗になってきた。

プロローグ２（後書き）

“ガンダムＵＣのＭＳ（モビルスーツ）の再現能力”

……ぶっちゃけあまり役に立ちません。
ただミネバ様がかわいかったから使いたかっただけです。

＃　３／２０　修正しました
＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

設定

神さま？から貰った能力
“「ガンダムＵＣ」のＭＳ（モビルスーツ）の再現能力”

再現といっても１０ｍ以上のＭＳ（モビルスーツ）を再現するのではありません。
高音・Ｄ・グッドマンの影の使い魔のように、体の周囲に魔力を纏って装甲を作って再現します。

ビームライフルなどの武器は“魔力弾”、“完全魔法無効化弾”、“武装解除弾”などを撃ち出します。
クシャトリヤのファンネル、ユニコーンのＮＴ－Ｄ（ニュータイプ・デストロイヤー）などの特殊武器・システム以外は全機共通に使用可能。

メリットしては攻撃・防御・移動も全て無詠唱でモビルスーツでまかなえること。
デメリットとしてはモビルスーツ展開中は他の魔法が使えないこと。

再現できるＭＳ（モビルスーツ）は

ＲＧＺ－９５　リゼル
ＮＺ－６６６　クシャトリヤ
ＭＳＮ－０６Ｓ　シナンジュ
ＲＸ－０　ユニコーンガンダム
ＭＳＮ－００１Ａ１　デルタプラス

再現するには始動キーのあとにＭＳ（モビルスーツ）名を入れる

『ラス・テル　マ・スキル　マギステル　〇〇〇〇〇』

Ｆａｔｅ風ステータス（通常状態ネギをランクＥとして基準）
お遊びなので大体こんな感じとして考えてください。

リゼル
筋力　Ｄ
魔力　Ｃ
耐久　Ｄ
敏捷　Ｃ

リゼル（変形時）

筋力　E
魔力　C
耐久　E
敏捷　C＋（直線運動のみ、細かい動きはランクE）

特徴：下位変形可能機

クシャトリヤ
筋力　B
魔力　A
耐久　A
敏捷　D

特徴：ファンネル使用可能

シナンジュ
筋力　B
魔力　B
耐久　B
敏捷　A

特徴：単純に強い

ユニコーンガンダム

筋力　B
魔力　B
耐久　B
敏捷　B

ユニコーンガンダム（ニュータイプ・デストロイヤー）（NT－D発動時）
筋力　B＋
魔力　EX
耐久　B
敏捷　EX
特徴：NT－D（ニュータイプ・デストロイヤー）システム使用可能

デルタプラス
筋力　C
魔力　C
耐久　C
敏捷　B

デルタプラス（変形時）
筋力　D
魔力　C
耐久　D
敏捷　B＋（直線運動のみ、細かい動きはランクE）

特徴：上位変形可能機

武器・システム性能

バルカン砲
　一発が『魔法の射手』の1割弱程度の威力
　防御せずに当たると痛いが、逆に言えば防御したら簡単に防げる威力
　連射性は良いが威力が弱いので、牽制ぐらいにしか使えない

ビーム・ガトリングガン
　一発が『魔法の射手』の5割程度の威力

「いいぞ、ベイベー！
　逃げる奴は“完全なる世界”だ！！
　逃げない奴はよく訓練された“完全なる世界”だ！！
　ホント魔法世界は地獄だぜ！　フゥハハハーハァー　！！！」

と叫んでぶっ放すのが吉

ファンネル

一発が『魔法の射手』と同程度の威力
クシャトリヤでのみ使用でき、視認可能範囲以内なら遠隔操作が可能

ビーム・ライフル
一発が『魔法の射手』の3倍程度の威力
当たり所がよければ一撃で相手を倒すことが出来るぐらい
『魔法の射手』の威力が右ストレートなら、ビーム・ライフルは後回し蹴りぐらい

ビーム・ランチャー
一発が『魔法の射手』の5倍程度の威力
ロング・ビーム・サーベルとしても使用可能

ハイパー・バズーカ
榴弾式だと一発が『魔法の射手』の5倍程度の威力
散弾式だと一発が『魔法の射手』の1割強程度の威力

他にも煙幕式や対エヴァ用の花粉式などもあり

メガ・ビーム・ランチャー
一発が『魔法の射手』の１０倍程度の威力
ただし、銃自体が大きく、扱いづらい
ガンダムＵＣでは後述のビーム・マグナムと同程度の威力

ビーム・マグナム
ガンダムＵＣでは前述のメガ・ビーム・ランチャーと同程度の威力
この作中では、専用の“マグナム弾”に魔法を詰め、それを撃ちだす
要するに“魔弾銃”

詰められた魔法が強いほど貯めが必要で、連射性が落ちる
『魔法の射手』なら貯めは必要ないが、『雷の暴風』クラスなら1秒近く必要
だが、逆に言えば『雷の暴風』クラスの魔法を1秒で連射できる

他にも『雷の暴風』クラスの魔力を詰めた“武装解除弾”なども作成可能

ＮＴ－Ｄシステム（ニュータイプ・デストロイヤー）
作中ではＭＭ－Ｄ（マギステル・マギ・デストロイヤー）
ガンダムＵＣではニュータイプを感知しないと起動できないが、作中では任意で可能

リミッターを外し、超高機動戦闘が可能
発動時には、相手の誘導弾・自動操縦式使い魔などのコントロールを奪える

自動操縦式使い魔のコントロールは高音・Ｄ・グッドマンの影の使い魔を例にとると
高音本体と接触しているタイプ　↓　コントロール奪取ＮＧ
高音本体と接触してないタイプ　↓　コントロール奪取ＯＫ

これらはウィキペディアと自身の妄想を参考に作りました。
というかシナンジュってバルカンついていたんですね。
クシャトリヤの出力はユニコーンやシナンジュの5倍ぐらいあるのか……。

そしてNT－D（ニュータイプ・デストロイヤー）発動時のユニコーンの出力と推力が測定不能ｗ
そこにシビれる！　あこがれるゥ！

＃　3／20、「ガンダムUC　ｅｐｉｓｏｄｅ3：ラプラスの亡霊」　観劇後に修正・追加しました。
＃　5／17、よく調べたところ、スタークジェガンがガンダムUCの初出ではなかったので使用不可としました。
＃　5／20　全話「・・・」を「…」に修正しました

第一話　悪魔襲撃の日

こんばんは。
ネギ・スプリングフィールドに転生した××××です。
前世の自分なんてもうどうでもいいですけどね。

悪魔に村を襲撃されました。
ドカンドカンと音が響き、悪魔がどんどんと消し飛ばされています。
余波の衝撃波とか飛んでくる石とか酷いです。物陰に隠れないと危険ですね。
魔法ってのは凄いですねぇ。
自分もそのうち使えるようになるかもしれないと思うだけでわくわくします。

さて、簡単に悪魔襲撃までのことをご報告しますと、
原作との違いは自分がナギを強く求めていないってことぐらいでしょうか。
会ってみたいとは思いますけどね。
普通に遊んで、普通に魔法の勉強して、普通に暮らしていました。
池で溺れたりしてません。

スタン爺さんはいい人ですね、ぶっきらぼうだけど。
悪魔に対する備えとかは特にしませんでした。
自分の力はまだ把握できていませんですし、未来がどう変わるかわかりませんでしたから。

ただ、スタン爺さん達が石にされると思うと黙っていることに罪悪感がわきましたね。
だからスタン爺さんの肩を叩いたりして祖父孝行してました。
只の自己満足でしかありませんが。

そして悪魔襲撃の日。
スタン爺さんが自分を庇って石にされました。
そしてヘルマン卿が自分を石にしようとしています。
マズった。原作とは流れが違う。自分が原作のネギとは違う生活をしているせいか。
原作の細かいところなんて覚えてないですよ。

「ネギッ！！」

あ、ネカネ姉さん。
原作では助かったはずのネカネ姉さんまで石にされる。
神さま？（というか結局あの剣誰なんだ？）に原作知識もくださいと頼んどけば良かった。
そうすればこんな展開にならなかったのに。
転生だ、ヒャッホイなんて浮かれてた自分が情けない。

「『雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）』ッ！！！」

……。

……。

……は？

ネカネ姉さん何してるんですか？
無詠唱の『雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）』ですか？

ヘルマン卿が吹っ飛ばされたんですが？

「大丈夫っ！？　ネギッ！？」

いえ、大丈夫です。助けてくれてありがとうございます。スタン爺さんは石になってますけど。

……ではなくて何でネカネ姉さんがあんな強力な魔法を？

何ですか、この状況？

「安心して、私が守ってあげるから。
二代目“千の呪文の男（サウザンドマスター）”の名は伊達じゃないわ」

……どうしてこうなった？

待て待て待て、本当にどういうこと？

……。

……。

……はっ！？

思いだせ、あの神さま？の発言を。

プロローグ１

＞「いやいや、違うよ。

＞　この剣は私の趣味。ベルセルク関係はもう出てこないと思うよ。

＞　転生先世界は“魔法先生ネギま！”の世界。

＞　しかも主人公の“ネギ・スプリングフィールド”になってもらいます」

プロローグ２

＞「……確認するよ。

＞　転生先世界は“魔法先生ネギま！”の並行世界。

＞　転生するのは“ネギ・スプリングフィールド”。
＞　与える能力は“「ガンダムＵＣ」のモビルスーツの再現”」

プロローグ１
＞　転生先世界は“魔法先生ネギま！”の世界。

プロローグ２
＞　転生先世界は“魔法先生ネギま！”の並行世界。

後になって「並行」が付け足されている！？
じゃあ何か？　この世界は原作とは違うってことか？
無理矢理“ガンダムＵＣのＭＳ（モビルスーツ）の再現能力”なんて貰ったせいか？
“完全魔法無効化能力”なんてものをタダでくれることに疑問を持つべきだった。
オマケを貰った嬉しさに「並行」なんて言葉が付け足されていることに気付かなかった。
そんなうまい話があるわけないのに……。

嫌がらせのつもりか、あの神さま？は。
いや、面白くするためなんだろうなぁ。

……どうしよう？

「我がスプリングフィールドの魔法はァァァァァァアアア、世界一ィィィイイイイ！！！」

……ネカネ姉さんが壊れた。

いや、自分が知らなかっただけで既に壊れていたのか。

あ、音と光の発生源がもう一つ増えた。ナギが参戦したのか。

うわぁ、悪魔が可哀想になってきたよ。

飛んでくる石つぶてを避けるため、石になったスタン爺さんの陰に隠れ、これからどうしようかと考えます。

……どうしようもないな、うん。

後のことは流れに任せるしかない。

ガンッ！！　ドサッ！！

ん？　一際デカイ音がして何か地面に落ちた音が。

って、ちょ、髭が折れてる！？
石になったスタン爺さんの髭が折れてる！？
もうやめて！　ナギもネカネ姉さんももうやめて！
スタン爺さんと悪魔のライフはもう０よ。もう勝負はついたのよ！

第一話　悪魔襲撃の日（後書き）

書き溜め分これにて終了です。
以後の更新は不定期です。

作者は二次創作初体験です。
御意見・御感想お待ちしております。

＃　３／２０　修正しました
＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第二話　メルディアナ魔法学校での日々

こんにちは、ネギです。
あの後ナギは二言三言の言葉を交わし、杖を置いて何処かにいきました。
その間自分は折れたスタン爺さんの髭とネカネ姉さんの豹変振りにガタガタと震えているだけでした。
大人達は悪魔のせいだと思ってましたが……。

やっぱりこの世界は少しばかり違っています。
アーニャのご両親は無事でした。
それでもスタン爺さんを含め結構な犠牲者が出たみたいです。
そのために避難も兼ね、早いですが魔法学校に入学しました。

原作通り2年の飛び級をし、一応主席として頑張ってます。

転生前は大人でしたし、このネギ・スプリングフィールドの体がチートみたいなものですからね。
優秀な体でよかった。前世の体ならついていけなかったですよ。
そして今は魔法の実技練習中、ネカネ姉さんが見本を見せてくれています。

「スプリングフィールドは!!!　地上最強ォォ!!!」

あ、相手役の先生吹っ飛んだ。
いつものことですね。

何だかネカネ姉さんは戦闘関係になると性格が変わるそうです。
悪魔襲撃の日まで自分は戦闘関係に関わっていなかったから気付かなかったんですね。
ネカネ姉さんはメルディアナ魔法学校の非常勤教師兼ＮＧＯをして暮らしています。
聞いたところによると何でも“千の呪文の女（サウザンドマスター）”として大活躍とか。
テロリスト（多分“完全なる世界”）をバッタバッタと薙ぎ倒しているそうです。

……もしかして、村襲われたのネカネ姉さんのせいじゃね？

そうそう、罠にかかっていたアルベール・カモミールのカモ君なんですが、原作と性格は違いませんでした。
原作と変わらないのはスタン爺さんに続いて二人目?だ、と喜んでいたんですが、周りが違っているのを失念していました。
具体的に言うとネカネ姉さん。

度重なる下着ドロにぶちぎれたネカネ姉さんは、カモ君をどこかに連れて行きました。

そして帰ってきたカモ君にはナニが無くなっていました。
……去勢されたようです。無茶しやがって。

今度からはカモ君ではなくアルちゃんと呼びなさい、とネカネ姉さんに厳命されました。

「ネギ、今日の授業はこれで終わりよ。帰りましょう」

イエス、マムッ!!!
お願いですから、その頬についた返り血を拭ってください。

「ネギ、今夜も石化治療薬の実験？
あなたの気持ちもわかるけど、ほどほどにしないと駄目よ」

大丈夫、無理なんてしてません。
実験中はネカネ姉さんも控えてくれるから逆に気が楽です。
でも学校の禁書庫の本も全部読んだしなぁ。正直手詰まりです。
麻帆良の図書館島に望みを託します。
あ、禁書庫は見てみたい、とネカネ姉さんに相談したらその日のうちに許可を貰ってきてくれました。
学校長が痔の手術とかの名目で一週間ほど入院しましたがね。
復帰した学校長は何故か総入れ歯になってました。痔の手術じゃなかったようです。
……ま、些細なことでしょう。

「ネギ、ネカネ姉さん」

あ、アーニャ、……とアルちゃん
……えーと、そのリボンかわいいね。アルちゃん。

「はい、ありがとうございます。お兄様」

「でしょー、アルちゃんに似合うと思って買ったのよ」

この一人と一匹は仲が良いです。アルちゃんは一応自分の使い魔のはずなんですが。
最初アーニャは毛虫のごとくカモ君を嫌っていました。
しかし、カモ君がアルちゃんになって、ネカネ姉さんの調教が終わってからは急に仲が良くなりました。
何でしょう、この違和感を感じないはずの空気なのに感じてしまう違和感は。
ああ、自分が原作を知っている転生者だからですね。
スタン爺さんに逢いたいなぁ。すごく逢いたいなぁ。石化治療薬早く完成しないかなぁ。
アーニャは原作よりはお淑やかに育ってます。ご両親が無事だったせいですかね。ツンデレなのは相変わらず変わりませんが。

「もうすぐ卒業ね」

そうだね、アーニャ。
卒業試験はどうなるんだろうね。

……やっぱり麻帆良で先生するのかなぁ。原作キャラには興味があるけどキャラ崩壊がどうなっているのか不安だ。
全員男だったらどうしよう……。

いや、そんなことはあるまい、皆少しずつ変だとはいえ、そこまで極端な原作との乖離はあるまい。
この前ウェールズに来たタカミチ本人に確認したところ、タカミチが女子中学校の先生をしているのは確かなんだ。

タカミチはタバコを吸っていないのが原作との違いでした。他にもあるかもしれないけど数回会っただけじゃわかりません。
麻帆良の図書館島には行きたいけどキャラ崩壊を見るのは嫌です。
まあ、卒業試験内容を変えるなんて無理でしょうけど。

……ネカネ姉さんに頼めば出来るかもしれませんが。

“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”対策に今からマグナム弾を貯めとかなきゃ。

学園結界があるならＭＭ（マギステル・マギ・デストロイヤー）Ｄシステムで何とかなるでしょう。

第二話　メルディアナ魔法学校での日々（後書き）

何でカモ君は“アルベール”ってフランス風な名前なんですかね？
イギリス風なら“アルバート”なのに。
フランス出身？

＃　３／２０　修正しました
＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第三話　卒業　これからのこと

こんにちは、ネギです。
只今メルディアナ魔法学校卒業式の真っ最中。
ちなみにちゃんと主席でした。
学校長の話が長いです。

さて、修行内容が麻帆良学園本校女子中等学校で先生になる、ということを前提にこれからのことを考えましょうか。

これから起きる大きな事件としては、

1. 期末テスト
2. 桜通りの吸血鬼事件
3. 京都修学旅行

4．ヘルマン卿襲撃事件
5．麻帆良学園祭

といったところですね。

その後の“魔法世界編”は最悪の場合、そもそも魔法世界に行かなきゃいいんですから、“5．麻帆良学園祭”が終了してから考えましょう。

そんな先のこと考えてもその前に躓くかもしれないし、なるべく情報を多く手に入れてから考えるべきです。

さて、“1．期末テスト”は問題ないですね。

ちゃんと勉強させておいて、最下位だったら自分がクビになって新田先生が新しい担任になるかも？　とか言っといたら勝手に頑張ってくれるでしょう。

２－Ａは真面目にやらないだけで潜在能力はありますからね。……キャラ崩壊さえしていなければ。

日本語の勉強は終了済みなので、原作より早く行って実際に２－Ａの人達を見てから細かいことを決めましょうか。

“2．桜通りの吸血鬼事件”はどうしましょうかね。

二次創作のテンプレ通りならば、事前にエヴァさんと取引するなりして身の安全を保障して貰い、尚且つエヴァさんとの繋がりを作っておく、といった所でしょうか。
もしくは学園長にチクるか。ああ、それとナギの情報をエヴァさんに売りますか。

一応戦闘になる可能性を考えて、『雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）』クラスの魔力を込めた、ユニコーンガンダムのビーム・マグナムのマグナム弾を１００個ほど、一日の最後に余った魔力を込めてシコシコと作製しておきました。
この貰った能力で一番使えるのはエネルギーパックを作れることですね。
もし戦闘になったら油断している内にＭＭ（マギステル・マギ・デストロイヤー）－Ｄ発動させて、速攻で最大火力を御見舞いしましょう。
おそらく何とかなるはず。
まあ、エヴァさんの“女子供は殺さない”というポリシーからして死の危険はないですから。

タカミチ辺りからエヴァさんとナギの関係を聞いておいて、

「タカミチから聞きました。女性にそんなことするなんて最低な駄目親父です。
駄目親父がしたことの責任は僕がとります。
どうぞ僕の血を吸って呪いを解いてください」

とか土下座しながら謝れば、きっと命だけは助けてくれるでしょう。
むしろ庇護対象としてみてくれるかもしれません。あの人なんだ

かんだいって甘いし。

ネカネ姉さんという核地雷が近くにあるせいでフェミニストとして有名になりましたから、動機としては変に思われないでしょう。

タカミチも知ってることですからね。

戦闘は最後の手段です。平和的な方法を考えましょう。

“3．京都修学旅行”は出来れば“2．桜通りの吸血鬼事件”の際に、エヴァさんの『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』と“学園結界”を解除して貸しを作っておき、その縁で手伝ってもらうのがいいんですが。

でも、この旅行は死亡フラグ満載で嫌なんですよねぇ。

エヴァさんいないと原作ではネギ死んじゃってたろうし。

これは“2．桜通りの吸血鬼事件”の結果次第ですか。エヴァさんとの関係が良好なら原作通りで行きましょう。

……エヴァさんとの関係が悪かったら、木乃香さんには申し訳ありませんが病気にでもなってもらいましょうか。

木乃香さんがいなければ危険度はガクっと下がるでしょう。

魔法薬の成績はメルディアナ魔法学校史上最高の成績です。一週間ぐらい寝込ませる薬なんて簡単ですよ。

いっそのことクラス全員を寝込ませて修学旅行を中止させますか。

テンプレ通りに進めたい、そう考えていた時期が自分にもありま

した。
木乃香さん、あなたはいい人なんでしょうが、あなたの父上と祖父上がいけないのですよ。

“４．ヘルマン卿襲撃事件”は“３．京都修学旅行”の結果次第ですね。
というか、ヘルマン卿ってネカネ姉さんに吹っ飛ばされたあとに封印されたとは聞いてないんですが、その後どうなってるんでしょうか？

魂ごと消滅させたとか言われても、ネカネ姉さんなら不思議じゃないんですが。
あとで確認しておきましょう。ついでにネカネ姉さんに注意しておいてもらいましょう。

まあ、ヘルマン卿じゃないのが襲撃してくる可能性もありますけどね。
とはいえ原作の目的はネギと明日菜さんの実力調査ですし、修学旅行のときに明日菜さんがフェイトに知られず、エヴァさん無双で自分の影が薄ければ来ない可能性のほうが高いですね。

“５．麻帆良学園祭”はどうしましょう？
学園祭中は超さんと葉加瀬さんには入院してもらいますか。何かそれが一番手っ取り早い気がしてきたな。
というか考えがドンドン物騒になってきてませんか、自分？
オコジョにされるのも嫌ですしねぇ。
１と３と５は日付が決まってますから、向こうで出来た生徒や先生達との関係を踏まえて考えましょう。
それからでも遅くないです。

まずは“２．桜通りの吸血鬼事件”解決に全力を注ぎましょう。
あの事件が今後どうなるかの山場です。

あ、ようやく学校長の話終わった。

「メルディアナ魔法学校卒業生代表！　ネギ・スプリングフィールド！」

さて、卒業証書貰いに行きますか。

「卒業おめでとう、ネギ、アーニャ」

「おめでとうございます。お兄様、アーニャお姉様」

ありがとうございます。ネカネ姉さん、……アルちゃん。
これからが大変ですけどね。
どういう修行なんでしょう？
えーっと、なになに？“日本の学校で教師をやること”、だそうです。

……原作通りですか。
最悪アリアドネーとかメガロメセンブリア逝きを考えていましたからね。
それに比べたら問題ありません。

「なんですってぇーーー！！！」

うお、ビックリした。
アーニャ、そんな大きな声出さなくても。
確かに子供の僕が教師をするってのは変だけどね。

「なんで私の修行が“日本の学校で生徒をやること”なのよーーー！！！」

……え、アーニャも来るの？

第三話　卒業　これからのこと（後書き）

ネギ、テンプレ通りに進めるのをあきらめる、の巻。
ネカネ姉さんのキャラ崩壊っぷりを見てからは、ネギの頭の中は“もうどうにでもな～れ～☆”状態です。

アーニャが麻帆良に来るのには意味を考えてあります。
1～5の事件の終わり方もおおまかに考えてあります。
もう少しお付き合いください。
御意見・御感想お待ちしております。
次回の更新は2、3日はかかると思います。

＃　3／20　修正しました
＃　5／20　全話「・・・」を「…」に修正しました

第四話　麻帆良学園

こんにちは、ネギです。
前世もあわせて初めて飛行機に乗りました。
耳鳴りが酷いです。

あの後暴れだしたアーニャを落ち着かせ、学校長に話を聞きにいったのですが、学校長は既に逃亡済みでした。
それを知ったネカネ姉さんの笑顔が忘れられません。
置手紙があったので見てみると、お世話になる麻帆良学園の連絡先が書かれていました。

アーニャは自分の影響で日本に興味はあったものの、日本語まで話せるなんてことは当然なかったので日本語のお勉強中です。
生徒であるアーニャとは違い、自分は教師をするということなので、アルちゃんをアーニャに預けて日本へ先に行きます。
色々と手続きがありますし、アルちゃんを最初から連れて行くつもりなのでペット可の住居をお願いしたところ、

「なら早めにきて、自分で気に入ったところを探しなさい」

と言われました。

初っ端から原作と違ってきてます。
麻帆良学園の学園長とも電話で話したのですが、自分を早く麻帆良に来させたいそうです。より詳しく言うならアーニャより先に来させたいそうです。
……なーんかありますねぇ。

あ、そうそうヘルマン卿は封印されていませんでした。
吹っ飛ばされた際に普通に消えたそうです。魂まで消滅してるわけじゃなさそうですね。
まあ、知らない悪魔が来るよりも対策を立てやすいので悪くはありません。

そんなこんなで麻帆良学園に到着しました。
ちなみに出迎えはタカミチでした。
まあ、平日の昼間ですからね。明日菜さんたちは普通に学校でしょう。

平日の昼間になんで担任の先生であるお前がいるんだ、このデスメガネ？

と聞きたいところですが自重します。

「どうも、ご無沙汰しています。久しぶりです、タカミチ」

「やあ、大きくなったね、ネギ君。
そんなにかしこまらなくても大丈夫だよ」

「いえ、習った日本語がこういうものなので。
変えろと言われた方が困ってしまいます」

「ＨＡＨＡＨＡ、そうなのかい。それでは改めて。
ようこそ、麻帆良学園へ。ネギ・スプリングフィールド君」

などと会話しつつ、目的地に向かいます。
初めて「」で台詞を喋った気がしますが置いておきましょう。
久しぶりの日本だけど麻帆良だからですかね？　前世の記憶にある日本とは違うなぁ……。

……うわぁ、やっぱりぬらりひょんだよ、学園長は。
二次創作のテンプレならここで

「うわ！？　ぬらりひょん！？」

とでも叫ぶのでしょうが、やめておきましょう。
ここはもう麻帆良です。どんなキャラ崩壊が待ち受けているかわかりません。
どこに地雷が埋まっているかわからない今、穏便に済ませることが出来るならそれに越したことはありません。

そして今後の打ち合わせ。
自分は教育実習生としてタカミチが担任をしている２－Ａの担任補佐をするようです。
……原作からやっぱり違ってきてます。タカミチが出張ばかりなのは変わらないようですが。

三学期開始と同時に担任補佐として赴任ですか。

それまでは日本の学校のことや書類の書き方、麻帆良のことなどを勉強すると。

アーニャが転校生として麻帆良にやってくるのもそのぐらいになるので、同時のタイミングで就任と転校ということになりそうです。

……勉強に時間かけすぎです。その間になーんかありますね。

タカミチが2－Aのホームルームのために退席した後、茶をご馳走になりながら世間話をします。

羊羹うめぇ。

「……ところでネギ君や、ちょっと会ってほしい人がいるのだがいいかね？」

「は？　別に僕は構いませんが……」

来ましたよ。なーんかあると思ってたら、なーんか来ましたよ。
誰だ？　このタイミングで自分と会うような人なんかいるか？

「なに。君のお父さん。
ナギ・スプリングフィールドの知り合いじゃよ……」

ナギの知り合い？　アルビレオ・イマとか？　というかなんで声が暗いの？
いや、図書館島の奥深くにいて、出て来れないはずですよね。
あの人原作でも変態っぽいから、キャラ崩壊の倍率ドンで更なる変態化してたらどうしましょう？
やべ、カモ君のことアルちゃんって呼んでるけど、あの変態が「アルちゃん」という呼び名に反応したらどうしよう……。

ノックのあとにガチャ、と扉が開いて入ってきたのは……刀子先生、とシスター・シャークティー？　案内役か？
その後から入ってきたのは、小柄で、金色の長い髪で、美しいというよりは愛らしい、だけど数年後には絶世の美女と呼ばれるであろう、麻帆良学園本校女子中等学校の制服に身を包んだ少女でした。

……もしかしなくてもエヴァさんじゃね？　闇の福音じゃね？

やけに力の篭った目で自分を睨みつけてくるこの人って、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルさんじゃね？
何ですか、この状況？　エヴァさんがなんでこの時点でネギと会うんですか？

「この子はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。さっきも言った通りナギの知り合いじゃよ。
高畑先生が担任をしておる２－Ａの生徒でもある」

「そ、そうですか。初めまして、ネギ・スプリングフィールドです。三学期からですが２－Ａの担任補佐として赴任することになりました。これからよろしくお願いします」

……。

……。

……反応がありません。

自分を睨みつけてくるだけです。

「えーっと、父の知り合いということですが、一体どういうご関係なんでしょうってヒィッ！！！」

ちょ、地雷踏んだ。なんかよくわかんないけど地雷踏んだ。
殺気混じった。自分を睨みつけてくる視線に殺気が混じってきました。
なんか変なこと口にしましたか？　自分？

「そう睨みつけるのはやめなさい。ネギ君が怯えてしまっているじゃろうに。
エヴァ、この子がナギの息子であるネギ・スプリングフィールド君じゃ」

助けて！　ぬらりひょん！（野比の○太風に）
って、眼鏡しか共通点無いじゃないか！？
いや、現実逃避はここまでにしましょう。
やばいぞ、これは。エヴァさんに敵としてロックオンされてそうだ。

「……れが」

イエス、マムッ！！！
なんでございましょうか！？

「いったい！？　誰が！？　ナギの息子だぁっ！？」

ヒィッ、そんなこと仰られましてもミス・マグダウェル。子どもは親を選べません。
いったいナギはエヴァさんになにをやったんだぁっ！？

「私にとってこのぼーやは！！！
どこの誰とも知らぬ泥棒猫の子どもでしかないわっ！！！」

ワーニンッ！　ワーニンッ！　ワーニンッ！
そっちですね！？　ナギのことじゃなくて、そのお相手のことなんですね！？
キャラ崩壊来ました！　よりにもよってエヴァさんですか！？

しかも“泥棒猫”発言！　もしかして“ヤンデレ”ですかぁっ！？

何それ！？　“ヤンデレ”な“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”なんて最悪の組み合わせだ！

第四話　麻帆良学園（後書き）

次回、“闇の福音がこんなに〇〇〇〇わけがない”
よろしくお願いします。

＃　３／２０　修正しました
＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第五話　闇の福音がこんなに〇〇〇〇わけがない

「……一体、どういうことなのだ？」

全然自分にもわかりません。何故、ゴゴゴゴゴ、と夜叉のオーラを放っているエヴァさんが目の前にいるのかわかりません。

今すぐウェールズに帰りたいなぁ。

「１５年前だぞ、１５年前……！」

アーニャの買い物に付き合って荷物持ちにされたいなぁ。ネカネ姉さんの魔法実技授業で校庭の隅でガタガタふるえて命乞いしたいなぁ。アルちゃんの原作から思いっきり離れたしおらしさで微妙な気持ちになりたいなぁ。

……まだアルちゃんに“お兄様”って呼ばれるのは違和感があるんですよね。

「私がナギに『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』をかけられたのが15年前。そのときに3年経ったら解きに来るといわれた。
そしてこのぼーやは9歳だ」

現実逃避してる場合じゃありませんね。いつでも逃げれる準備しないと。
というか学園長たちは何を考えてるんだ？
刀子先生とシスター・シャークティーは気の毒そうな顔してこちらを見てくるだけだし。

「私にかけた呪いを解く暇はないくせに、子どもをつくる暇はあったというのか……！」

タカミチ！？　タカミチは何処に！？
自分の担任している生徒なんだからなんとかしてくださいよ！

「……待ってたのに」

はい、うちの駄目親父が申し訳ありませんでした。土下座して謝りますから許してください。

まだあの駄目親父はコッソリ生きてるんです。想いをぶつけるのはそちらにしてください。

って、アレ？　……エヴァさん泣いてる？

「待ってたのに、待ってたのに、待ってたのに。ずっとずっと待ってたのに。
ちゃんとナギの言うとおりに学園の警備員としても頑張ったのに。

……どうしてナギは私に会いに来てくれないの？」

……きっと夏休みの宿題をしない男子中学生のごとく伸ばし伸ばしにしていて、遂にはいけなくなったんでしょう。
いや、というか泣かないで。そんなボロボロという形容詞が似合う涙を流さないでください。

「来れないなら一言ぐらいあってもいいのに。
電話でも、手紙でも、人伝でも、なんでもいいから……ぅぐっ、

ぇぐっ」

刀子先生とシスター・シャークティーがエヴァさんを宥めはじめました。
お願いですから自分のこの混乱具合も宥めて欲しいです。
そしてタカミチ、いつの間に部屋に入ってきた？

「ぅぐっ、料理もできるように、ぇぐっ、なったのに。
……洗濯も、掃除もちゃんとできるようになったのに……ぅ、
ううぅぅぅ！！！」

崩れ落ちるエヴァさんを刀子先生とシスター・シャークティーが支えて心配しています。
お願いですから自分のこの混乱具合も心配して欲しいです。

……エヴァさんが家事一般の勉強？　キャラ崩壊しすぎじゃね？
ヤンデレっぽい感じがなくなったのは助かりますが。

「すまんのぉ、ネギ君。我慢すると約束してたのじゃが……。
これでは君もなんのことかわからんじゃろう。

説明するから刀子先生とシスター・シャークティーはエヴァを別室に……」

「い、いえ。僕が別の部屋に行きましょう。
とにかく今はマグダウェルさんを落ち着かせてください。

タカミチは事情をわかっているんですか？　わかってるんなら説明をお願いします」

とにかく今すぐ混沌としたこの部屋から脱出させてください。それだけが私の望みです。

「すまないね、ネギ君」

「いえ、とにかく説明をお願いします、タカミチ。
父さんが関わっているのはなんとなくわかりましたが……」

「ああ、実はエヴァはね……」

タカミチから説明してもらいましたが、エヴァさんがこの学園に来るきっかけは原作と変わらないようです。
ただし、原作と違うのはこっから。

エヴァさんは見事に恋する乙女になったようです。
「ナギに頼まれたから」の理由で学園の警備員として頑張り、「ナギにおいしい料理を食べさせたいから」の理由で料理を頑張り、ｅｔｃｅｔｃ。
エヴァさんは見事に恋する乙女になったようです。

……どうしてこうなった？

そして3年経って、呪いを解きにナギが来なくても「ナギにはなにか理由があったんだ」と健気に待ち続け、更にナギ死亡の噂が流れても「ナギが死ぬはずがない」と健気に待ち続けました。

が、それもナギの息子である自分、ネギ・スプリングフィールド

の存在を知るまで。
自分の事を聞いたエヴァさんは理解するまで数分かかり、理解した瞬間気絶したそうです。
よくよく考えてみればエヴァさんに対して酷い話ですよね。

“あ……ありのままに起こった事を話すぞ！

「私はナギに「待っていろ」と言われて待っていたら、
いつのまにかナギは他の女と子どもをつくっていた」

な……何を言っているのかわからないと思うが、
私もどういうことなのかわからなかった。

頭がどうにかなりそうだった……。
「男の甲斐性」だとか「裏切り」とかそんなチャチなもんじゃあ、断じてない。
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぞ……”

といった感じでしょうか？
……ハナっからそういう関係じゃなかったんじゃね？　というツッコミはしない方がいいですね。

あ、学園結界はちゃんとエヴァさんの能力を封じているそうです。
といっても封印したのは攻撃力だけで、不死性に関しては封じてないそうです。

え？　なんで不死性に関しては封じてないのかって？

……自殺防止だそうです。　キャラ崩壊しすぎじゃね？

「はあ、そういう事情だったんですか……」

麻帆良に来た初日でもうお腹一杯なんですが。

「そ、それでエヴァにかかっている『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』を解くためにネギ君に協力して欲しいんだ」

「協力ですか？　事情を聞いた以上それは構いません。というか是非とも協力させてください。血を提供すればいいんですか？」

「いいのかい？　ありがとう、助かるよ。さっきも言ったとおり彼女は１５年もの間、ずっと中学生を繰り返していてね。せめて『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』からだけでも解放してあげたいんだ。」

……うちの駄目親父が申し訳ありません。誠心誠意『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』解呪に協力させていただきます。

「高畑先生、ネギ君。エヴァンジェリンが落ち着いたそうです」

ノックして部屋に入ってきたのは黒い肌でタラコ唇の長身男性。ガンドルフィーニ先生ですね。

……この人いわゆる“正義の魔法使い”志望で頭が固いんでしたっけ？

そんな人がこの件で文句もなさそうに動いてるってことは、エヴ

ァさんはこの学園に受け入れられてるっぽいですね。
特に刀子先生やシスター・シャークティーみたいな女性陣は完璧味方になっているでしょう。

あ、ガンドルフィーニ先生にも幼い娘さんがいるんだったっけ？だったら他人事じゃないですね。そんな仕打ちを自分の娘にされたら怒るでしょうし。

「さっきは済まなかったな、ぼーや……」

学園長室に戻ってきた自分たちを迎えたのは、泣き止んだエヴァさんでした。
だけど目がまだ赤く、腫れぼったいています。よっぽどナギのこと好きだったんでしょうねぇ。

「……本当はわかっていたんだ。実際ナギと私はなにもなかったんだからな。
助けてもらったときに手を繋いだぐらいで、あとは頭を撫でてもらえるだけだった。
でも、……それでも、私はナギのことが……ぅぐっ」

お願いですからもう泣かないでください。泣きたいのはこちらです。
だけどその泣き顔にキュンと来た駄目人間な自分でした。
なんでこんなに原作と違って可愛くなってるんだ？　闇の福音がこんなに可愛いわけがない。
駄目だ、この人。早くなんとかしないと……。

待て、慌てるな。これはテンプレの通りだ。
エヴァさんの呪いを解き、１５年間もこの学園に縛りつけた駄目親父の所業を謝るのはテンプレ通りだ。
そしてエヴァさんと良い関係を築き、京都修学旅行での事件を手伝ってもらうのもテンプレ通りだ。

何も問題はありません。
自分はテンプレ通りに進めています。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさんっ！！！」

キリッとした声を出し、エヴァさんの前に進んでしっかりと目と目を合わせます。
そして自分は、

「タカミチから聞きました。女性にそんなことするなんて最低な駄目親父です。
駄目親父がしたことの責任は僕がとります。
どうぞ僕の血を吸って呪いを解いてください」

と土下座して謝りました。

……。

……。

……テンプレ通り、ですよね？

第五話　闇の福音がこんなに〇〇〇〇わけがない（後書き）

“闇の福音がこんなに可愛いわけがない”、の巻。
わいは２－Ａ生徒の中でエヴァが一番好きなんや！！！

＃　３／２０　修正しました
＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第六話　家族

「……ぅ、ふぁ、もうちょっと優しく……」

こんばんは、初めて血を吸われる感覚に戸惑って、変な声を上げてるネギです。

エヴァさんの甘い声だと思いましたか？　残念。僕ですよ、僕。

あの後、自分がしばらくホテル暮らしをして住居を探すことをエヴァさんに知られたところ、エヴァさんの家に居候させてもらえることになりました。

アーニャとアルちゃんが麻帆良に来たら、彼女たちも一緒に住ん

でいいそうです。
おそらく学園長たちはこれを狙っていたんでしょうね。何も言いませんでしたし。
タカミチはすぐに出張しなければいけないらしく、自分の面倒はみていられないそうですから。

これから定期的にエヴァさんに血を提供しなければならないので、食生活を含めてエヴァさんが面倒見てくれることになりました。
本当にエヴァさんは料理を習っていたみたいです。茶々丸さんの手を借りずに、とても美味しい料理をご馳走してくれました。
……本当にキャラ変わってるなぁ。
むしろ、このエヴァさんが自分の好みに思いっきり直球でストライクだったので、一緒に生活できてラッキーなんですが。

でもマズイです。エヴァさんが可愛くてクラクラしてきました。
エヴァさんはソファーに座った自分と向かい合った状態から、首筋に歯を突き立てて血を吸っています。
さっきから「エヴァさんの髪の毛サラサラしてるなぁ」とか、「エヴァさんは良い匂いするなぁ」とかしか考えられません。

エヴァさんの背中に手を回して抱きしめたらあったかくて気持ちいいんだろうなぁ……。

「んひゃっ！！！」

うわ、血を吸い終わったエヴァさんに首筋舐められたら変な声出してしまいました。
邪な考えを見抜かれたのでしょうか？

「ふう、美味しかったよ、ぼーや。ありがとう。
だけど疲れてるんじゃないか？　ちょっと血が濁っているぞ」

確かに疲れてましたけど、この数分で更に疲れました。
子どもでよかった。大人だったら絶対エヴァさんに反応してしまいます。

「確かにちょっと疲れてます。
初めて飛行機に乗って、初めてウェールズの外に出ましたから」

「そうか、すまないな。それなのに血を吸わせてもらって。
ああ、血を失ったばかりなんだからあまり動くな。水分を摂ったほうがいい。

茶々丸、ぼーやに飲み物を」

「了解しました。少々お待ちください」

……茶々丸さんは原作とは変わりがないようです。
まあ、茶々丸さんは原作中に成長して、どんどん機械っぽさがなくなっていくというか、人間になっていきますからね。
これからどんな風に変化していくかわかりません。
せっかく一緒に暮らせるんです。キャラ崩壊しないように気をつけて見守っていきましょう。

「さっきも言ったが血を提供してくれてありがとう。
さすがに中学生を15年も続けていると飽きてしまったからな。
この学園から出て行く気はないが、『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』は解除しておきたい」

「そんなに気にしないでください。血でよかったらいくらでも提供しますよ。
駄目親父の仕出かしたことの償いです。マグダウェルさん」

自分の隣に腰を下ろしたエヴァさんに御礼を言われます。
いえいえ、エヴァさんとは仲良くなりたいですからね。
京都修学旅行のときにはよろしくお願いしますよ。

「顔色が悪いな。少し血を吸いすぎたかもしれん。
……ほら横になるといい」

うおっ！！！　エヴァさんの膝枕キタコレ！！！　しかも頭も撫でられています。
駄目だ。顔が赤くなるのが止められません。

「……それと“マグダウェルさん”という呼び方はやめろ。
これからは家族として一緒に生活していくんだ。
家族を名字で呼ぶなんておかしいだろう」

「は、はい。ありがとうございます」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ。
エヴァさんの優しい声と太ももの感触に引き込まれそうになります。

マズイ、本気で惚れそうだ。

なんでナギはエヴァさんを振ったんだ。勿体なさすぎる。

チラとエヴァさんの顔を見上げると目が合い、ニッコリと笑いかけられました。

「“お母さん”と呼んでくれてもいいんだぞ？」

「坊ちゃま。紅茶をお持ちしました。
砂糖とミルクはどうしますか？」

「……いえ、さすがにそれはお断りします。エヴァさん。
砂糖はいりません。ミルクたっぷりでお願いします。
それと“坊ちゃま”は止めてください。茶々丸さん」

そういうオチだと思ったよコンチクショウ！！！
クソッ！　なんて並行世界だ！
ぜんぜんナギのこと諦めてないなぁ、この人は！！！

「な、何故だ！？　何故“お母さん”と呼んでくれないのだ！？」

「しかし坊ちゃま。
坊ちゃまはマスターの御子息となられる御方ですので、“坊ちゃま”と呼ぶのは当然のことかと」

「この幼い姿がいけないのか！？

確かに実年齢は６００歳を超えているとはいえ、同じくらいの年齢に見える女性を母と呼ぶのは抵抗があるかもしれんな。

安心しろ、ぼーや。そんなもの幻術を使えば何とでもなる！！！」

「いえいえいえいえ！　そういうことじゃありません」

「ならばどういうことなのだ！？　私はぼーやの母に相応しくないとでもいうのか！？」

ああ、もう。どうすりゃいいんだこの人は！？
これから世話になること考えると機嫌損ねるのは後が怖いし。
ていうか泣きそうにならないでください。お願いします。

「ぼ、僕は3学期から教育実習生として、エヴァさんたちのクラスの担任補佐をすることになっています。
そんな僕が生徒のことを“お母さん”と呼んだり、生徒に“坊ちゃま”と呼ばれるのはおかしいと思います」

「た、確かにそうだが。……く、それでも、せっかく……」

「僕はここへ修行のためにやってきました。

それなのにエヴァさんに甘えてしまったら修行になりません。
僕のことを考えていただけるならお願いします、エヴァさん」

「む、むううぅぅ……。ぼーやがそこまでいうならしょうがない。
ちゃんと学校では“ネギ先生”と呼んでやろう。茶々丸、お前もだ」

「了解しました。学校では坊ちゃまのことを“ネギ先生”とお呼びします」

「いえ……。坊ちゃまと呼ぶことをやめて欲しいんですが」

２－Ａ連中にばれたら絶対大騒ぎになってしまいます。

「さて、今日はもうお開きだ。
明日はぼーやの身の回りのものを買いにいかなければならないからな。忙しくなるぞ。
風呂に入って早めに休むとしよう」

無視ですか……。

いいですよ、もう。もう疲れました。好きにしてください。

「よし、では一緒に風呂に入ろうか？」

「お断りしますっ！！！」

「な、何故っ！？　くっ、これが反抗期というやつなのか！？
私は諦めんぞ。必ずぼーやに“お母さん”と呼ばれてみせる！！！」

クソッ！　なんて並行世界だ！

第六話　家族（後書き）

とりあえずエヴァ編は終了しました。

２－Ａ生徒の大幅な改変はエヴァとあと一人。

もう影も形もないキャラを考えています。

他は変えないか、変えても良い意味で変えることになると思います。

作者はハッピーエンドが好きなので。

＃　３／２０　修正しました

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第七話　麻帆良での生活？

おはようございます、ネギです。
朝起きたらエヴァさんがニコニコと微笑みながら自分を見ていました。
寝顔を見られていたようです。勘弁してください。
朝食を頂いた後、身の回りのものを買いに行くこととなりました。

「こんなに少なくていいのか？
やはり私がお金を出すから、もうちょっと揃えたほうがいいのではないか？
遠慮することはない。学園の警備員として１５年間働いてきたから蓄えはある」

「いえいえいえいえいえ！　大丈夫です！
そこまではご迷惑かけられませんです」

……ああ、もうこの人は。
過保護ぶりはネカネ姉さん以上です。キャラ崩壊しすぎでしょう。

ちなみに今エヴァさんは幻術を使って大人の姿になっています。
平日の昼間なので子どもの姿で買い物をしていたら補導されてしまうから、と言われましたが、母親気分を味わいたいだけでしょう。
自分と手を繋いでニコニコとご機嫌です。

「ふむ、そうか。
まあ、今日全て揃えなくてもいいからな。欲しいものや必要になったものがあったらいつでも言うがいい。
また買いに来よう、一緒にな。

茶々丸、お前は家に買ったものを置いて来い。
私たちは少し休憩したら麻帆良を散策するとしよう。ぼーやの見たがっていた図書館島や世界樹でも見に行こうか」

「了解しました。マスター」

「わかりました。
すいません。お願いしますね、茶々丸さん」

ふう、ネカネ姉さんやアーニャで慣れてるとはいえ、着せ替え人形にされるのは疲れます。
アルちゃんが使い魔になってからは、生贄が増えたので少しは楽になりましたが。

「……もしかしてエヴァンジェリンか？
何をやっているんだ、学校サボって？」

いつのまにか学校が終わる時間となっていたようです。
オープンカフェで休憩していたら制服姿の背の高い、褐色の肌とストレートロングの黒髪と三白眼が特徴的な女子に話しかけられました。

龍宮マナさん、ですね。
おお、２－Ａ生徒と会うことが出来ました。

「アルカナか。なに、このぼーやの買い物だよ。説明されただろう。このぼーやがネギ・スプリングフィールドだ。」

……アルカナ？　龍宮じゃなくて？

いや、本名は“マナ・アルカナ”だったはずだからいいのか。

とはいえ原作と違いがありますね。

「今のエヴァさんのことがわかるということは関係者の方ですか？」

今のエヴァさんは幻術使って大人になっていますからね。

ということは原作通りに龍宮さん、じゃなかった。アルカナさんは魔法関係者ということです。

「ああ、マナ・アルカナという。

エヴァンジェリンとはクラスメイトで、警備員としても働いているから同僚でもある。

君がネギ・スプリングフィールドか。話は聞いている。３学期からよろしく頼む」

「はい、3学期から2－Aの担任補佐として赴任するネギ・スプリングフィールドです。
こちらこそよろしくお願いします」

「アルカナは中学生ながら傭兵紛いのことをしていてな。
普通の魔法先生よりも頼りになる。覚えておくといい。
といっても、なにか頼むとなると依頼料が発生するから気をつけておけ」

「はは、酷い言い方だな。ま、初回は安くしておこう。
何かあったら気軽に依頼をくれればいい」

「はい、そのときはお願いしますね」

ふむ、エヴァさんがここまで言うなら原作通りアルカナさんは頼りになるということですね。是非とも仲良くなりたいところです。
……ふう、エヴァさん本気でナギのこと諦めてくれないかなぁ。
マジで惚れそうなんですけど、どうしましょう？
やはり新しい恋に生きるしかありませんかね？
アルカナさんみたいなクールビューティーは好みの女性ですし、頑張ってみましょうか。

「コウキと待ち合わせしていてな。同席しても構わないだろうか？」

はい、新しい恋は5秒で終わりを告げました、コンチクショウ。

……恋人さん生きてたんですか、そうですか。

「そういえばおめでとう、エヴァンジェリン。“登校地獄”が解呪できるんだって？

3年になったら修学旅行があるけど、それには行けるのかい？」

「ああ、ぼーやから血を分けてもらえることになってな。

修学旅行か。まあ、半年近くあるなら多分大丈夫だろう」

修学旅行でエヴァさんが参戦してくれる確率がアップしました。
死亡確率がこれでグンッと減りましたね。久しぶりの嬉しい知らせです。

「それはよかった。私からも礼を言うよ、ネギ君」

「いえいえ、僕の駄目親父が仕出かしたことへの償いですよ。
御礼を言われることではありません」

なんだかアルカナさんが原作よりも優しいというか柔らかいというか、少し感じが違うように思います。
恋人さんが生きてるからでしょうかね？　なんだか幸せそうです。

……ネカネ姉さんみたいな極端なキャラ崩壊は嫌ですが、こういう風にキャラが幸せそうになっているのなら嬉しくなりますね。

あ、そういえば住居が決まったことネカネ姉さんたちに知らせないとなぁ。
一応“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”の家だし、一緒に住むアーニャへはネカネ姉さんから伝えてもらうことにしましょうか。
ネカネ姉さんならおそらくエヴァさんの事情は知っているでしょ

うから。

その後、アルカナさんと別れ、図書館島や世界樹を見に行き、麻帆良をブラブラと散策しました。

当然一日では回りきれず、回れていないところはまたエヴァさんと出かけることとなりました。

……どうせ、大人姿のエヴァさんと一緒に行くことになるんだろうなぁ。

まあ、子ども姿のときに２－Ａ生徒と会うとどうなるかわかりませんから、丁度良いといえば丁度良いんですが。

現在日本時間１８：３０。

イギリスとの時差は９時間ですから、ネカネ姉さんに電話しても時間的に大丈夫でしょう。

ＮＧＯとして世界中飛び回っているネカネ姉さんは携帯電話を持っているのでそれに掛けてみます。

ｐｒｒｒｒｒ……、ｐｒｒｒｒｒ……、ｐｒｒｒｒｒ……、

prrrrr……。

なかなか出ませんね。非常勤教師もやっているから今授業中でしょうか？

……お、繋がった。

「やあ、どうしたんだい？　ネギ君？」

「……。

……。

……ネカネ姉さんの携帯に掛けたんですけど、なんでタカミチがでるんですか？」

昨日エヴァさんとの話し合いが終わった後、出張に出たはずのタ

カミチが何故？
しかも、なんか後がうるさいし。ガヤガヤと騒いでる音がします。

「いや、ネカネさんなら今寝ていてね。
ディスプレイ表示でネギ君からの電話とわかったけど、起きそうにないから代わりに僕がでたんだよ」

「寝ているってなんですか！？
何でネカネ姉さんが寝ているところにタカミチがいるんですか！？」

ちょ！？　何があった！？

「え？　いやいやいやいや！　変な意味じゃないよ！
昨日大きな仕事が終わってね。それでＮＧＯの皆で宴会を始めたらしいんだ。
遅れた僕は仕事が終わった後にこちらに着いたんだよ。
だから、せめて後始末ぐらいはしようと思って、酔っている皆の世話をしているんだよ」

……焦った。

タカミチを“兄さん”と呼ばなきゃいけなくなるかもしれないと本気で焦った。
ヘタしたら明日菜さんがヤンデレとなってネカネ姉さんとガチンコバトルになるかもしれないし、自分に悪感情を持たれるかもしれませんから助かった。

「エヴァさんの家にお世話になることをネカネ姉さんに知らせようと思ったのですが。
それとアーニャにそのことをネカネ姉さんから伝えてもらおうかと」

「ああ、そういうことか。
僕の方からも伝えておくけど、明日ぐらいにもう一度電話するといい。そのときならネカネさんも復活しているだろう。
ネカネさんはエヴァのことを知っている。大騒ぎになることはないから安心していいよ」

やっぱり知っていましたか。
ＮＧＯとしてタカミチと一緒に働いているネカネ姉さんなら知っていると思ってましたが。
それならアーニャのフォローは任せることが出来そうですね。

「それにしてもウェールズはもう朝の9時でしょう。まだ宴会をしているんですか？」

「ああ、ここはウェールズではなくてトルコのイスタンブールだよ。現地時間では昼の11時になるかな。
仕事が終わったのが夜で、その後始末が一段落着いたのが深夜でね。
宴会が始まったのは今日の夜明け前からなんだ」

「そんなに朝早くから宴会って……。もう皆さんいい年した大人でしょうに」

「ハハハ……耳が痛いね。けど、今回だけは勘弁してくれないか。事後処理がまだ残っているけど、何年にもわたった仕事がようやく片付いてね。皆ハイテンションなんだよ。
その事後処理というのも油断出来るわけじゃないけどね」

後から聞こえてくる声もなんだか弾んでますしね。……なんだか吐いてる音も聞こえますけど。

「オエエエェェーーー！！！」「おーい、こいつ吐いたぞ！」「タカミチ！　バケツ持ってきて！」「相変わらず酒に弱いなぁ、ハハハハハ！」「いやぁ、私この仕事が終わったら恋人にプロポーズしようと思っていましてね」「おお！　おめでとう」「アーウェルンクスの首、獲ったどーーー！！！」「酒なくなったぞ！？」「タカミチ！　酒買ってきて！」「これで終わりましたね」「ああ、早く子どもたちに逢いたいよ」「子どもが生まれたんでしたっけ？」「うん、男の子と女の子の双子だよ」「イスタンブール魔法協会の人来てるんだけどどうするー？」「タカミチ！　説明してきて！」

……。

……。

……今、変なの聞こえませんでした？

「ああ、もう大変だ。
それじゃあ、ネカネさんが起きたら伝えておくよ。エヴァと仲良くね」

「ちょ！　ちょっとタカミチ！！！　待ってくだ「ブチッ！」さい……」

……。

……。

……えーと？

死亡フラグを叩き潰した人がいて何よりです。うん。

第七話　麻帆良での生活？（後書き）

＃　３／２０　修正しました
＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第八話　麻帆良での生活？

こんにちは、ネギです。
今日もエヴァさんは学校をサボって自分の面倒を見てくれようとしてましたが、

「ええ!?　エヴァさんって不良だったんですか!?」

という言葉で一人の時間をようやく手に入れました。
現在、エヴァさんと茶々丸さんは学校に行ってます。

……あの人、悪い男に騙されるタイプの女性ですね。
その悪い男というのが、自分の実の父親であることに心が折れそうになりますが。

「ケケケケケ。オ前ガ言エルコトカヨ」

「人聞きの悪いことを言わないでください、チャチャゼロさん。

僕のどこがあの駄目親父と似てるんですか？
僕はただエヴァさんに質問しただけですよ」

一人の時間は手に入れましたが、残念ながら一人と一体の時間になってしまいました。エヴァさんより護衛役を命じられたチャチャゼロさんです。
とはいえ“坊ちゃま”と呼んでくる茶々丸さんが付いてくるよりは、チャチャゼロさんの方が気楽です。

「アノ男ヨリムシロ悪インジャネーカ？　ゴ主人ニモ呆レタモンダゼ」

「この件については実の父よりも、育ての姉の方に責任があるかもしれませんがね」

「……“破壊ノ魔女”ニ育テラレタンダッタカ、オ前ハ」

「何でいきなりそんな憐れんだ表情になるんですか？」

ネカネ姉さんはいったい何をやっているんですか？
“破壊ノ魔女”という名前は初めて聞きました。身内に魔女が多

いですね、自分には。

「午前は図書館島探索です。人前では喋らないでくださいよ」

「ワカッテルヨ。寝テルカラ何カアッタラ起コセ」

「……護衛の意味ないじゃないですか」

なんでこんな人形で、原作と一緒だなぁ、とホッとしなきゃいかんのでしょうか？

昨日は入り口から中を見渡したぐらいで、本格的な探索はこれからです。

といっても今日だけでは図書館島の一般人進入可能区域をぐるっと回るぐらいしか出来ないでしょうが。

昼になり、家に戻って茶々丸さんが用意しておいてくれた昼食をレンジでチンして食べます。
午後は家の裏手で魔力制御の自主訓練です。
日本に着てから訓練をサボっていましたから、基礎から訓練し直しです。
くしゃみで武装解除発動なんてことはありませんが、それでも基礎は大事ですからね。

近いうちにエヴァさんに弟子入りしなきゃいけませんが、弟子にしてくれますかね？
「ぼーやが戦う必要はない！　私が守ってやろう！」と断られるかもしれません。
キャラ崩壊しすぎです、あの人は。

うまい言い訳を考えとかないといけません。
「守りたい人がいるんです！」のようなことをヘタに言ったら、

「なんと！　ぼーやは私を守ってくれるのか！
私を母と受け入れてくれたんだな！」

とか誤変換して暴走される危険性があります。
キャラ崩壊しすぎです、あの人は。

「地味ナ訓練シテンダナ。ソレジャ退屈ダロウ。ヨシ、オレガ相手シテヤロウ、実戦形式デナ」

「お断りします。チャチャゼロさん。エヴァさんの『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』が解呪されるまでは血の無駄遣いはできませんから」

2時間ほど訓練し、しばらく休憩した後は魔法の勉強ですが、ボールペンのインクがきれてしまいました。

予備のボールペンは持ち歩いていますが、散歩がてら買いに行くことにします。

ちょうど下校時刻と重なっているので2－A生徒を見かけるかもしれません。

……いました。いましたよ、多分。2－A生徒らしき人とすれ

違いました。
“せっちゃん”と“このちゃん”で呼びあっていましたから、近衛木乃香さんと桜咲刹那さんでしょうか？
“このちゃん”が京都弁で喋っていたし、そうだと思うんですが。

疑問系なのは日傘を差していて、顔がうまく見えなかったからです。
あの二人が近衛木乃香さんと桜咲刹那さんだったとしたら。原作との違いはまず仲の良さなんですが。

ふむ、“せっちゃん”は標準語で話してたことから、原作通りに中学からこっちに来たんですかね？
小学生で一緒に来たんなら、おそらく2人とも京都弁を話してるでしょう。

そして“せっちゃん”の髪の毛が白かったです。
確か烏族と人間のハーフでアルビノなんでしたよね。原作でも染めてるようなことといってましたので。

むう、木乃香さんは刹那さん生まれのこと、ひいては魔法を知ってるんでしょうか？
それともただアルビノということをバラしてるだけ？
修学旅行に関わってくるかもしれないから、注意しておきましょう。

それと“せっちゃん”はあきらかに関係者でしたね。
“せっちゃん”が差している日傘が、その、なんというか、長かったです。１m以上ありました。
具体的にいうと野太刀ぐらいありました。
しかもなんだか日傘の柄が妙に曲線を描いていました。

……仕込み傘？

まあ、日光に弱いアルビノだから日傘を差すのは怪しまれないし、護衛としては悪くないんでしょうかね？

ボールペンを買って家に帰って勉強していたところ、日が暮れた頃にエヴァさんたちが帰ってきました。

「お帰りなさい、エヴァさん」

と挨拶したところ、何故かエヴァさんが悶絶しました。
その後何回か「お帰りなさい」を言わされました。
何がしたいんでしょうか、この人は？

「遅くなってすまなかったな。
ジジイに昨日学校をサボったことを注意されてな」

「学校サボっちゃ駄目ですよ、エヴァさん。
僕の面倒を見てくれるのは嬉しいですが、そのせいでエヴァさんが不良になったら悲しいです」

「いやいやいやいや！　私は不良なんかじゃないぞ！
ちゃんとこれからは学校に行くさ。
ふふっ、ぼーやに「お帰りなさい」といわれるのも悪くないからな」

……それでさっき悶絶してたんですか。

「そうだ、ジジイから伝言があったぞ。
タカミチが日曜日には帰ってくるらしくてな。
月曜から本格的な先生になるための準備を始めるそうだ。
それまでは麻帆良に慣れておけ、だとさ」

ようやくきましたか。
さーて、原作との剥離はどうなりますかねぇ？

「ぼーやが担任補佐か。悪くないな。
しかし、３学期になったら担任補佐とはいえ、３１人の生徒の面倒を見ることになるんだ。それは生徒の一生を左右することだからな。
頑張るんだぞ」

キャラ崩壊しすぎです、この人は。

第八話　麻帆良での生活？（後書き）

チャチャゼロの台詞が書き難すぎます。
とはいえ全部カタカナにすると読みづらいので、ひらがな部分をカタカナにしました。
もしひらがなのままの台詞があったらご指摘お願いします。

当初の予定通りにエヴァをヤンデレにして、
「ナギの悪口を言ったから」の理由でチャチャゼロを壊しておけばよかったと後悔してます。

エヴァや茶々丸が変で、チャチャゼロが常識を持っているのが二次創作のテンプレの一つだったんで、
「いっそのことチャチャゼロ壊しておくか！」と思いました。思ってしまいました。

「だ、だって。チャチャゼロがナギの悪口を言ったから……（／／）」

と顔を赤らめて、チャチャゼロを焼却処分したことをデレて打ち明けるエヴァってかわいいですかね？

次回、宣言通りに影も形のない２－Ａキャラが……。

＃　３／２０　修正しました

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第九話　２－Ａ生徒

こんにちは、ネギです。
先生になるための教育が始まろうとしています。
教師役は帰ってきたタカミチです。

「すまないね。仕事が忙しくて、先週はネギ君を放っておいてしまった」

「いえ、エヴァさんには良くしてもらってましたから。
でもなんというか、ネカネ姉さんが増えたみたいでしたけどね」

「ははは、大変だね」

「それと茶々丸さんが僕のことを“坊ちゃま”って呼ぶの何とかできませんかね？」

「……僕の方からも少し自重するように言っておくよ」

切に願います。いや、本当に。

「さて、おさらいだけど、ネギ君には3学期から2－Aの担任補佐をしてもらう。
担任は僕だから、要するに僕の補佐だね」

「はい。
しかし、9歳の僕が先生で、14歳の生徒にものを教えるというのはおかしな話ですね。
しかも幼馴染で同級生だったアーニャまで2－Aに生徒として転校してきますし。
麻帆良じゃなかったら、こんな修行できなかったですね」

「そ、そうだね。でも大丈夫だよネギ君。
アーニャ君のことは君の方がよく知っているだろうし、2－A生徒も皆良い子だから。
補佐とはいえ、君は3学期から31人もの生徒の指導をすることになる。
大変だけど、とてもやりがいのある仕事だよ」

……そのやりがいのある仕事を出張ばっかでほったらかしてたのはどこのどいつだ？　このデスメガネ。

――――――――――――――――――――――――――――――

学校のことや教師の仕事、書類の書き方などを教わり、只今休憩中です。

原作ネギはコーヒー嫌いらしいですが、自分は好きです。
ウェールズじゃ紅茶ばっかりだったから新鮮でいいですね。

「麻帆良は広いですね。先週だけじゃ半分も見て回れませんでしたよ」

「まあ、ここは広いからね。じゃあ、今度の休みにでも、僕と一緒に回ろうか。」

「それは嬉しいんですが、ＮＧＯの仕事は大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ、先週のでほとんど終わってね。
事後処理を油断しなければ良いだけな段階まで来たんだ」

……本当に首を獲ったんでしょうか？
だとしたら京都修学旅行のみならず、これ以降の死亡フラグが軒並み倒れたのですが。
でも、絶対何かあるよなぁ。そんな甘い話があるわけがないはずです。

「まあ、向こうで出来ない仕事を、僕がここでするんだけどね」

向こうで出来ない仕事？　どういう意味でしょうか？

「でも正直、エヴァさんに「お母さんと呼んでくれてもいいんだぞ」と言われたときは参りましたよ。
多分麻帆良を回るときに一緒についてきますね、あの人は」

「あはは、まったくエヴァは……」

「まあ、嫌なことなら嫌と自分で言いますけどね。
駄目親父がしでかしたことの贖罪と思えば、あんな美人に面倒みてもらうことなんてむしろ幸運なことです」

「……嫌なことじゃないということは、エヴァに“お母さん”になって欲しいのかい？」

ん？　なんか空気が変わりましたよ？

「嫌じゃないというより慣れてるだけですよ。
ネカネ姉さんと今まで一緒に暮らしてましたからね」

「ああ、そういうことか。ネギ君も大変だったねぇ。

……“本当のお母さん”には会ってみたいとは思わないのかい？
エヴァの件があってから、ナギのことは“駄目親父”としか言ってないのはしょうがないとしても」

タカミチから見捨てられたぞ、ナギ。というか同情すんな、タカミチ。
どうせタカミチも昔はナギの無茶に巻き込まれたりしたんだろうし、エヴァさんのことを知っているのだからしょうがないんでしょうけどね。
……しかし“本当のお母さん”か。

「まあ、興味はありますね。どんな人だったのか？」

「……それだけなのかい？」

「今のところはそうですね。
母親の話は聞けたことないんでどういう人かもわかりませんし。
何らかの事情があって僕には言えないってことなんでしょうけど。
会えるなら会ってみたいとは思いますけどね」

美人ですしね、あの人。
「お母さーん！」と抱きついて胸に顔をうずめたいです。

「まあ、それに今は先生になることで手一杯ですから。２－Ａ生徒の方が興味あります」

「……そうかい。２－Ａ生徒は皆良い子だから大丈夫だよ。
……ネギ君」

「はい？」

「楽しみにしていてくれ」

？　そりゃ楽しみですけどね。

「ところで２－Ａ生徒といえば、マナ・アルカナさんに先日お会いしましたよ。
こちら側の関係者だそうですね。エヴァさんといいアルカナさんといい、２－Ａには関係者が多いのですか？」

「ああ、他のクラスに比べれば多いね。
まあ、関係者というかアクの強い娘たちが多いんだけど……。
そうだ、クラス名簿を見てみるかい？」

「そうですね、ぜひお願いします」

お、クラス名簿を見れるんですか。
よし、これで２－Ａ生徒のことが少しわかります。

……キャラ崩壊してなきゃいいなぁ。

ふうむ、一目見てわかる違いはやはり桜咲刹那さんですか。
良く見れば、他にも何人か見た目でわかる違いがありますね。

出席番号２番：明石　祐奈

巨乳。以上終わり。

もう既に巨乳になっていますね。写真でもわかります。眼福です、はい。

出席番号８番：神楽坂　明日菜

ツインテールじゃありません。

あとなんだかキリッとしてます。（、・ω・′）キリッと。

バカレンジャーじゃないのでしょうか？　それとも見た目だけ？

バカレンジャーじゃなかったら期末テストが楽なのですが。

出席番号１５番：桜咲　刹那

やはり先日見たのは刹那さんでしたね。

写真に写っている刹那さんの髪の毛が白いです。

それに確か原作では剣道部に所属してたはずですが、図書館探検部になっていますね。護衛優先？

出席番号１９番：長瀬　楓

……書き込みの“バルタン”ってなにさ？

出席番号２４番：長谷川　千雨

……その猫耳はナンデスカ？

オタク趣味丸出し！？　ちうたんがこんなになってるなんて！！！

クソッ！　なんて並行世界だ！

出席番号２９番：四葉　五月

あれ？　この人が発するオーラって、コアラのオーラじゃありませんでしたっけ？

なんか写真でもわかるぐらいに、カンガルーのオーラを発してるんですが。

まあ、どちらもオーストラリア原産の動物ですからそんな違いはないんでしょうが。

でもこのカンガルー、この前図鑑で見たプロプレオプスに似てるような気がしますが……。ま、気のせいでしょう。

……気のせいですよね？

なんだか出席番号２９番の人でどっと疲れたんですが。
一応出席番号１から３０番まで見たんですが。
でもまだなんか違和感があります。なんだろう？
タカミチの書き込みも特には変わってないようなんですが。

出席番号１３番：近衛　木乃香

……確か原作では占い研究部？　研究会？に入ってませんでしたっけ？
この世界では部活は図書館探検部だけですね。
魔法のことは知らないのでしょうか？　それとも知っているからこそ占い研究会？に入っていない？
魔法を既に知っている可能性がありますね。

出席番号１８番：龍宮　マナ

あれ？　マナ・アルカナさんでは？　書き込みが龍宮神社養子？
龍宮神社に世話になっているのは変わらないようですね。
恋人さんが龍宮コウキさんなんだから、その関係で身寄りのない
アルカナさんが養子に入ったということでしょうか？

……というより、同棲中？
恋人さんと結婚したら龍宮と名乗るようになったりして。
むしろ結婚しないうちは龍宮と名乗らない意気込みのつもりかな？

ケッ、世の中に存在するカップルなんて滅びればいいのに。

出席番号３０番：ザジ・レイニーデイ

この人は変わっていてもわからんなぁ……って、あれ？
ん？　んんん？　これはおかしいぞ。

「あの、タカミチ。

３学期になったら“３１”人の生徒の指導をするんですよね？」

「うん？　そうだけど。どうかしたのかい？」

出席番号３０番：ザジ・レイニーデイ

出席番号の最後が“３０”番。

「……この名簿には“３０”人しか載っていないのですが？」

そうだ、これがおかしいんだ。

「やだなぁ、ネギ君。

アーニャ君を入れて“３１”人じゃないか」

出席番号１８番：龍宮　マナ

出席番号１９番：長瀬　楓

超鈴音いねぇじゃん。

第九話　２－Ａ生徒（後書き）

はい、宣言通り影も形もないキャラです。
超鈴音が文字通り、影も形もないキャラでした。
アーニャを転校させるのも“３１”人のミスリードのためでした。

……いや、すいませんでした。なぜこうなったかご説明します。

ハッピーエンドにしたいなぁ。
←
でも、超がいると未来は不幸になってるんだよなぁ。
←
ふむ、ならば超が過去に来る理由を変えよう。
←
ネカネが密かに企てていた「逆光源氏計画」が成功し、ネギはネカネと結婚してしまう羽目となった。
だが、それでもハーレムを諦めることが出来なかったネギは、子孫として生まれる超に遺言を残すのであった。

「僕をネカネ姉さんの魔の手から救え」と。

そして残酷な過去を変えるために、超は過去へと向かう……。

（作中ネギのお姉様好きはこの名残です）

←

それ、なんて「ドラ○もん」？

の○太＝ネギ？　ドラ○もん＝超？　却下だ却下。

←

実はいいんちょ以上のショタコンであった超は、ご先祖であるネギの写真を一目見たときに心を奪われた。

そしてネギと結婚するために、超は過去へと向かう……。

←

何そのカオス？　却下だ却下。

←

むう、どうしよう。……そうだ、閃いたぞ！！！

←

なに嘴広鴻？　「超が未来から来ると誰かが不幸になる」？

嘴広鴻、それは無理矢理超の出番を作ろうとするからだよ。逆に考えるんだ。

「超が未来から来なくてもいいさ」

と考えるんだ。

←

ふむ。これで誰も不幸にならずに済む。

こんな解決法を考えたのは自分以外に誰もいまい。ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ。

……。

……。

……麻帆良学園祭編、完っ！！！

なお、「出番のない超が不幸なんじゃね？」という意見は却下します。

多分こんなアホなネタ書いたのは自分だけだと思いますが、もしこのネタが被っているところをご存知でしたらご一報お願いします。
直ちに修正いたします。

＃　３／２０　修正しました
＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第十話　黒執事

こんにちは、ネギです。
メガロメセンブリアで政変が起こったそうです。まほネットで大騒ぎになっていました。
学園長やタカミチは何故かニヤついていましたが。

「その魔法式は違いますな、ネギ様」

「えーと、こうですかね？　ヴィルさん」

そして自分は今、ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン元伯爵に石化魔法を教わってます。

というか、ヘルマン卿が教育されすぎです。自分をネギ様と呼ぶなんて……。

……どうしてこうなった？

いや、自分の不用意な一言のせいなんですけどね。

「ぼーや、今日はもう休め。根を詰めすぎたら出来るものも出来ないぞ」

「はい、そうですね。もうこんな時間ですし」

それは図書館島から本を借りて、石化魔法の勉強をしていたときでした。
石化魔法を学んで、それを取っ掛かりに石化治療薬を作るつもりだったのです。
しかし、悪魔の石化魔法なんてものは禁書にも載ってなく、自分で研究するしかありませんでした。

「役に立てなくてすまないな、ぼーや。治療魔法は苦手でな」

「いえ、大丈夫ですよ」

「そうか、悪魔によって石化された人間をを治すなんて一朝一夕ではいかないんだ。
あせらずじっくりやるといい。
明日はせっかくの休日なんだ。また麻帆良を一緒に見て回ろう。

……今度はタカミチ抜きでな」

「あはは、そうですね。気分転換も必要ですし。
でも、やはり難しいですね。麻帆良の図書館島にあった本でも、“今までの方法では出来ない”ということの証明しかできてません。
まあ、間違いを減らすという意味では成功なんですけどね。正解

があるかどうかわからないのが痛いですが」

この次の言葉がいけなかったのです。

ごめんなさい、ヘルマン卿。

「いっそのこと、村の皆を石にした悪魔を召喚して、そいつに石化魔法を教わりましょうか」

「……。

……。

……その手があったか。さすがだな、ぼーや。

ふむ、せっかくの休日だが、明日の麻帆良巡りは中止することにしよう。

確か伯爵級の悪魔だったな。

私とタカミチとジジイ、あとガンドルフィーニと刀子がいれば問題ないな。

あと結界を作るために一応瀬流彦も呼んでおこうか」

……は？　あなたは何を言ってるんですか？

いや、そんだけいればオーバーキルでしょうけど。

「よし、ではちょっと連絡してくる。

ぼーやはもう寝ろ。明日は忙しくなるからな」

……どうしてこうなった！？

そして、次の日。
エヴァさんの別荘に、自分たちと5人の先生が集まってヘルマン卿を召喚しました。

「魂ごと消滅させられたくなかったら、この子に石化魔法を教えろ」

「何を言ってるんだ、君たちは？」

短いやり取りの後、契約という名の拷問が開始されました。
特にガンドルフィーニ先生が凄かったです。嫌なことでもあったんでしょうか？

召喚→消滅→召喚→消滅→召喚→消滅→召喚→消滅→召喚→消滅→以下エンドレス

という拷問がその後しばらく続きました。
消滅といっても魂ごとの消滅ではないので何度でも召喚させられます。
ごめんなさい、ヘルマン卿。

このエンドレスエイトが1日続いたころ、ヘルマン卿が何も喋らなくなりました。
別荘から出れる時間にもなったのですが、

「このままじゃ埒があかないな。ぼーやは一度外へ出ろ。
これからは大人の時間だ」

というエヴァさんの言葉によって、自分はガンドルフィーニ先生と刀子先生、瀬流彦先生と一緒に外に出ることになりました。

……多分自分が見ていることで少しは手加減してたんでしょうね。
ごめんなさい、ヘルマン卿。
別荘の外であなたの無事を祈ってます。
エヴァさんとタカミチ、学園長という麻帆良三強をそこに残していく自分を許してください。

その後自分は3人の先生と休日を過ごしてました。

そしてここで衝撃の事実が発覚。
刀子先生は離婚してないそうです。
子どもはまだいないそうですが、仲睦まじいらしいです。夜には夕飯の準備があるので帰っていきました。
原作では離婚したせいで、再婚焦っていましたからね。良いことです。

ちなみに名字は“葛葉”でした。
はて？　原作では離婚後も名字を変えなかったのでしょうか？

刀子先生と別れた後、自分とガンドルフィーニ先生と瀬流彦先生の男3人で夕食にいきました。
ガンドルフィーニ先生は家に帰りづらいそうです。

家族仲が悪いのか？　と不安になりましたが、何でも幼稚園の娘さんに彼氏が出来たそうです。ませてますね。
家に帰って娘さんと話しても、彼の話ばっかりでいたたまれなくなるそうです。

強くもないのに酒を飲み、自分たちに愚痴をこぼしてました。
ヘルマン卿に八つ当たりした結果、少しは気が晴れたようです。
原作と違うのですが、これは良いことなんでしょうか？　悪いことなんでしょうか？

そろそろ帰らないといけないので、と瀬流彦先生にガンドルフィーニ先生を任して帰りました。
瀬流彦先生は縋るような目で自分を見てましたが無視です。頑張れ、瀬流彦先生。

朝起きたら、目の前に黒い執事がいました。

「おはようございます、ネギ様」

……ごめんなさい、ヘルマン卿。
自分はあなたを助けることが出来ませんでした。

まあ、外で無事を祈っていただけなんですけど。

エヴァさんに聞いたところ、教育が終わったので執事として働くそうです。

ダンディーなので執事姿が似合ってます。

石化魔法も自分に教えてくれるみたいですから、一緒に住むのは全然構わないのですが……。

「ネギ様。私めのことは“ヴィル”とお呼びください」

「……はい、これからよろしくお願いします。ヴィルさん」

……。

……。

……この流れって自分が悪いんでしょうか？

これから発言するときは、もっとしっかりと考えてからすることにします。

第十話　黒執事（後書き）

ネギ、迂闊な発言で悪魔を無間地獄に落とす、の巻。

今日まで様子を見ていましたが、第九話のネタが被っているところは無さそうです。
このまま超鈴音を登場させずに進めていきます。

刀子先生の名字なのですがこれは独自設定です。
旧姓がどうなのかわからないので、こういうことにしておきました。
もし、旧姓がわかる人がいらっしゃったら教えてください。青山？

＃　３／２０　修正しました
＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第十一話　弟子入り

こんにちは、ネギです。
今日はエヴァさんやタカミチと休日恒例の麻帆良巡りです。
昼食のため、最近オープンした店に入ろうとしたところ、

「このスープを作ったのは誰だぁっ！！！」

と厨房に殴り込む、カンガルーのオーラを背負った少女に遭遇しました。

……。

……。

……嘘だっ！！！

「む、四葉先生があんなに怒るとは。この店はハズレか。
別の店に行くとしよう」

「そうだね。四葉先生があんなに怒るなんて滅多にないことだよ」

「……え!?　あの人先生なんですか!?
２－Ａ生徒の名簿で見た覚えがあるんですけど!?」

どうしてこうなった!?

「いや、確かに四葉五月は２－Ａの生徒だが、あの方は私の料理の先生でな。
この学園にきてから１５年間料理の修行をしてきたが、１４歳のあの方にまったくかなわん」

「あまり言いたくない話なんだけどね。
学生食堂の職員が食材のコストを黙って下げ、その差額をポケッ

トに入れる事件があったんだよ。
それを四葉先生が一口食べただけで見破ってね。おかげで解決できたんだよ。
それ以来、四葉先生には頭が上がらなくてね」

「私は四葉先生が部長をしている料理クラブに所属していてな。
試食会ともなると参加者が抽選で選ばれるほど盛況になるよ」

……もしかしそのクラブ名って、“美〇倶楽部”とかいいませんかね？
いや、やっぱりなんでもないです。

しょうがないのでエヴァさん行き着けのオープンカフェで食事することにしました。
エヴァさんが気に入るだけあって美味しいです。
それにしても原作と違ってきてしまいましたね。どうしましょう？

原作の大きな事件といえば以下の5つですね。

1．期末テスト
2．桜通りの吸血鬼事件
3．京都修学旅行
4．ヘルマン卿襲撃事件
5．麻帆良学園祭

……あれ？　1と3以外終わってね？

いや、まだ“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”が壊滅したとは限りません。
だとすると4はまだ発生する可能性がありますね。

“2．桜通りの吸血鬼事件”はエヴァさんとは仲が良好ですし、起こるとしても命の危険はない訓練のようなものでしょう。
もしかしたらエヴァさんが、

「どうして“お母さん”って呼んでくれないんだぁっ！！！」

とかヤンデレになる可能性があるので、十分に気をつけておきますが。

“３．京都修学旅行”の事件は西と東の対立が原因ですから、“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”がいなくても起こる可能性が高いです。
やはりエヴァさんの封印を解いて、修学旅行に着いて来てもらわないといけません。

あ、でもタカミチが担任のままなんだからタカミチも来ることになりますね。
エヴァさんが来れない場合、タカミチを頼ることにしましょうか。
とはいえフェイトが本当にいないなら危険度は激減しましたね。

“４．ヘルマン卿襲撃事件”は……。

まあ、ヴィルさんが執事になってしまいましたけどね。
他の人が襲ってくる可能性があるから京都修学旅行の結果次第なのは変わらずですか。

ああ、そうだ。
ヴィルさんから教わった石化魔法を発展させた石化治療魔法は、年明けまでには完成しそうです。
完成したらアーニャやアルちゃんを迎えに行くのに合わせ、村の

皆を治してしまいますか。冬休みには里帰りです。

他の転生者の皆さんはヘルマン卿を監禁したり、魔法を使うのを観察したりして、石化治療法を見つけるのがテンプレなんですが。

何が悲しゅうて石化させた張本人に協力してもらってるんでしょうか、自分は？

自分はただテンプレ通りに進めたいだけなのに。

“5．麻帆良学園祭”は超さんいないから普通に楽しめますかね？

それとも別の人が超さんの役割を果たすんでしょうか？

ま、それなりに気をつけておきましょう。

あ、忘れてた。原作が始まる前から武術を学ぼうと思ってたんですよ。

今の自分はいわゆる後衛の“魔法使い”型の分類になります。

ネカネ姉さんの魔法授業のおかげで、患者には事欠きませんでしたから治癒魔法も得意ですし、砲台として『雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）』なんかをぶっ放すことも出来ます。

MS（モビルスーツ）再現能力による戦闘機さながらの高機動戦闘も出来るんですが、屋内などの限定された空間ではその特性を生かせません。

それにMS（モビルスーツ）形態になると生身より小回りが効かなくなる分、懐に入られると弱いです。

MS（モビルスーツ）形態では高機動戦闘に持ち込んで、ファンネルやビーム・マグナムを乱射しまくるのが良さそうですね。

やはりそうなると接近戦の技術が欲しくなります。

ビーム・サーベルを使用した剣術でもいいかな、とも思ったんですが、神鳴流に比べたらどうしても見劣りしてしまいます。

原作と同じ中国拳法でも良いのですが、どうせなら原作オリジナルの技を学びたいと思ったのです。

「そういえばタカミチ。お願いがあるんですけど」

「ん？　何だい？」

「待て、ぼーや。何故タカミチに頼るんだ。

何か願い事があるんなら私に言え」

いえ、ただ単に『居合い拳』を学びたいだけです。
『居合い拳』ってかっこよくね？

「麻帆良に着てからは、教師になるための勉強と石化治療魔法の勉強で篭りっぱなしです。
その２つも目処が付いてきたので、体力作りも兼ねて体を動かしたいんですよ。
教師をするにも体力が必要でしょうし、エヴァさんにも「根を詰めすぎたら出来るものも出来ないぞ」と怒られてしまいました」

「む、確かにそんなこと言った覚えがあるな……」

「それに昔、タカミチがパンチで滝を割るの見せてくれたことあったじゃないですか。
実は結構あれに憧れていたんですよ。
せっかくタカミチと一緒に仕事出来ることになったんだし、タカミチの時間の都合が良ければ僕に武術を教えてくれませんか？」

「あはは、そんなこと言われると嬉しくなっちゃうね。

うん、いいよ。出張の予定も当分無いし、ネギ君に武術を教えてあげよう」

“憧れていた”の一言で上機嫌になりましたね。ちょろいもんです。

一方エヴァさんは不機嫌になってます。ついでにエヴァさんへの弟子入りもお願いしてみますか。

タカミチが側にいるなら、エヴァさんが暴走しても何とか止めてくれるでしょう。

「それとエヴァさんには、魔法を実際に運用する技術を教えて欲しいんです。

基礎はみっちり勉強したので自信がありますが、如何せん実際に魔法を扱う経験が僕にはありません」

「！　ああ、勿論構わんぞ。

ぼーやは基礎がしっかりしてるからな。今更基礎勉強はいらんだろう。

そーなると、ぼーやほど魔力に恵まれた者に魔法を教えることが出来るのは、学園の中では私かジジイくらいだろう」

「ありがとうございます。

石化治療魔法の勉強がありますので、本格的な弟子入りは村の皆の治療が済んでからでいいですか？」

よし、エヴァさんへの弟子入りＯＫです。
これで武術はタカミチ、魔法はエヴァさんに弟子入りです。

“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”相手に警戒しすぎるに越したことはないですからね。
それにこの肉体は修行すれば修行するだけ強くなっていきますから、修行のし甲斐があります。
なんだか転生してから勉強や修行が楽しくなりましたよ。

第十一話　弟子入り（後書き）

風邪引いてこの一週間ダウンしてました。
久しぶりに書いてみましたが、なんだか微妙な出来な気がしてきます。
もしかしたらこの話は後で推敲し直すかもしれません。
とりあえずで申し訳ありませんが、待っていてくれている人のために生存報告を兼ねて更新します。

＃　３／２０　修正しました
＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第十二話　アスナ

おはようございます、ネギです。
ヴィルさんの使う完全石化魔法を習得しました。
あとは、この魔法を研究して石化治療魔法を完成させるだけです。

そして、皆さん。
ランニング中に神楽坂明日菜さんが煙草を自販機で買っているところを目撃したんですが、どうしましょう？

そっか、この時代タスポなんてものはないですよね……。

じゃなくて、どういうこと？

えーと、原作のタカミチが煙草吸う切欠は、明日菜さんが望んだからなんですよね。

ガトウさんの面影の為に。
この世界のタカミチは煙草吸ってませんでしたけど。

……自分で吸うから別にタカミチは吸わなくてもいいや、ってことですか？
クラス名簿の明日菜さんの写真は（・ω・）キリッとしてましたが、もしかして不良ですか？

「さっきから何こっち見てるのかしら？」

やば、気付かれた。

「……あら？　あなた、もしかして“ネギ・スプリングフィールド”？」

「は、はい。そうです」

お？　馬鹿っぽくないですよ。
記憶有りの状態なんでしょうか？

「そう。タカミチから聞いてるわ。
２－Ａの神楽坂明日菜よ。３学期からはよろしくね」

「はい。これは御丁寧にありがとうございます。
３学期から２－Ａの担任補佐として赴任することになりましたネギ・スプリングフィールドです。
どうかよろしくお願いします」

「……ナギとは随分違うのね。
タカミチが武術を教えることになったと張り切ってたけど、ラニング中かしら」

ナギ知ってるってことは記憶有りですね。なんというかクールな方です。
“明日菜さん”というより“アスナさん”って感じです。
やっぱり原作でバカレッドになったのって、記憶を消したからなんでしょうか？

というかタカミチを呼び捨てですか。

……既にタカミチと恋人になってるとか言わないでしょうね。

「はい。ランニングです。
神楽坂さんは、その、……何で煙草を？」

「え？　……ああ、そのことで見てたのね。
先生になるんだから当たり前か。
安心していいわよ。これはお父さんに頼まれただけだから」

……お父さん？

「そうなんですか、失礼しました。
知らぬこととはいえ変な想像して申し訳ありません」

「かまわないわ。先生になるというなら、その方が良いと思うし」

「ありがとうございます。神楽坂さんはこちら側の関係者なんですね。
その、……神楽坂さんは自分の父と知り合いなんですか？
タカミチのことも名前で呼んでるみたいですし」

「……そうなんだけど、何も聞いてないのかしら？
だとしたら私からあまり言うべきことではないのだけれど。
タカミチとは子供のころからの付き合いね。お父さんがタカミチの師匠だから。
ちゃんと学校では“先生”と呼んでいるから安心しなさい」

……お父さんがタカミチの師匠？
タカミチの師匠っていったら、“ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ”ですか。
生きてたんですか、あの人。

そうか、だからタカミチは煙草吸っていないのか。
ガトウさんが生きてるなら、アスナさんがタカミチに煙草を吸うようにお願いしませんね。

「……そうなんですか。
でしたら結構です。変なこと聞いて申し訳ありません。」

「そのうち全てわかるから、焦らずに待っていなさい。」

「はい、わかりました。むしろその方がありがたいです。

正直、麻帆良に来てから色んなことがありすぎたので」

ふむ、ガトウさんが生存ですか。
イスタンブールで“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”らしきテロリストを潰したのも、ガトウさんが関係してるんですかね？
元凄腕捜査官だったらしいですし。
うむ、頼りになる人が増えたのはいいことです。

「ああ、あなたも大変みたいね。
そういえば悪かったわね。
悪魔狩るのには私も声がかかったけど、中間テスト前だから断ったわ」

「……え？　神楽坂さんも、ですか？」

「一応タカミチの妹弟子だからね。だからあなたは私の甥弟子になるのかしら？
まあ、技術はタカミチのほうが上ね。
だけど気と魔力量は私のほうが圧倒的に多いから、それを差し引けば互角。
あと数年で私が上、といったところかしら」

「……いえ。エヴァさんとタカミチと学園長でオーバーキルでし

たのでお気遣いなく」

「そう、それじゃランニング頑張りなさいね。
私はお父さんに煙草を届けに行かなきゃならないから」

……アスナさんがタカミチと互角？
いや、ウェスペルタティア王家の血筋引いてるから才能はあるだろうし、麻帆良に来てから護身も兼ねてずっと修行してたとしたらおかしくはないですね。

うわー、“完全魔法無効化能力”持ったタカミチが殴りかかってくると考えたら最悪です。
物理攻撃しか効かないからラカンさんぐらいしか勝てないのでは？

それにしても、クールな明日菜さん、っていうのもアリですね。

第十二話　アスナ（後書き）

ちょっと短めです。
明日菜のことを気にしてる人が多いみたいなので、予定を変更して早めに出しました。
ガトウさん生存です。作者はハッピーエンドが好きなので。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第十三話　学園長

こんにちは、ネギです。
もうすぐ2学期も終わりというときに石化治療魔法が完成しました。
ただ、消費魔力が多いので今すぐウェールズに帰って村の皆の治療というわけにはいきません。
これから毎晩マグナム弾に石化治療魔法を詰め込む作業が始まります。

年明けには数も揃うので、アーニャとアルちゃんを迎えに行くときに村の皆の治療も行います。
いや、良かった良かった。ヴィルさんには感謝してます。

「それは良かったのぉ。
伯爵級悪魔による石化の治療方法の確立なんて前代未聞じゃよ」

「はい、ありがとうございます。学園長。
これも学園長がエヴァさんたちと一緒にヴィルさんと“お話し”

してくれたおかげです」

うんうん、あれはあくまで“お話し”です。
けっして拷問とかじゃナイデスヨ。

現在学園長室で経過を報告中です。
ウェールズに一時帰省する許可も貰わないといけませんし、ちょうどタカミチも緊急の出張とかで時間が空いたのでした。
さすが学園長室。いいお茶といい和菓子です。

「ほっほっほ、なあに。たやすいことじゃよ。
ところでそのヴィルさんはどうかね？　何か悪さをしていないかね？」

「いえ、毎日一生懸命働いてくれてますよ。
チャチャゼロさんも遊び相手が増えたと喜んでいます」

ごめんなさい、ヴィルさん。
自分はあなたを見捨ててます。

「しかし、その若さでたいしたものじゃ。ネギ君は治療魔法に適正があるのかの？
今回のことはネギ君にもいい経験となったじゃろう。
ナギのような英雄と憧れるのもいいが、治療魔法使いとして人々の役に立つのも“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”への道じゃ。
今回のことを糧として、より自分に向いた道を探すとよかろう」

「そうですね。その道もいいと思います。
ただ今はやること全てが新鮮に感じるため、色々なことを経験してみたいという気持ちがあります」

「そうじゃろうな。
まあ、若いのだから今のうちに色々なことを経験してみなさい。
焦ることはないのじゃ。君はまだ１０歳にもなってないのじゃからな」

エヴァさんのことやタカミチのこと、それに2人の修行でどんなことをしてるかも話しました。
いいですね、この感じ。落ち着きます。

何で学園長やヴィルさんみたいなジジイやオッサンの側が一番落ち着くのか、という疑問は心の奥深くに閉まっておきましょう。
エヴァさんマジで“お母さん”って呼ばれること諦めてくれない

かなぁ。茶々丸さんは“坊ちゃま”言うの止めてくれないかなぁ。

……フゥ。マズイ、疲れてます。

「大丈夫かね、ネギ君？
何だか疲れているようじゃが」

「いえ、疲れている、……というわけではないです。
ただ気が抜けたといいますか、正直麻帆良に来てこんなに早く石化治療魔法が完成するなんて思ってもいませんでしたから。
現実感があまり感じられませんね」

「ふむ、そうなのかね。あまり無理はしないようにお願いするぞい。
ゆっくり休むとしなさい。

おお、そうじゃ。このあと何か予定はあるかの？」

「いえ、特にありませんね。夕飯までに家に帰ればいいだけです。
エヴァさんは料理クラブの集まりだし、茶々丸さんは定期メンテナンス。
ヴィルさんは留守番で、チャチャゼロさんは僕のカバンで寝てますから、久しぶりにゆっくり一人で麻帆良でも巡ろうかと思ってま

した。」

「麻帆良巡りか。良かったらワシの孫娘達と一緒にどうかね？
今ちょうど見合い用の写真を撮っていてな。もうすぐこちらに顔を出すじゃろう」

学園長の見合い好きは相変わらずですか。
孫娘達ということは刹那さんも一緒ですかね？

「学園長のお孫さんというと２－Ａの近衛木乃香さんですか？
僕自身としては構わないのですが、僕は担任補佐とはいえ３学期から教師となります。
教師と生徒が遊びにいくというのは問題ないのですか？」

「フォフォフォ、大丈夫じゃよ。
まだ教師になったわけじゃないし、９歳の君と遊びに行っても問題あるまい。
まあ、さすがに赴任した後では困るがの。特定の生徒を贔屓したように思われたら困るからの。

予行演習と思ってくれればよいのじゃ。
木乃香達は騒がしい２－Ａの中では比較的大人しいほうでの。
もし木乃香達だけを相手するのでも駄目だとすると、３学期に２－Ａ生徒全員相手するのは無理じゃろう。

聞いたところによると、ネギ君は幼馴染の女の子ぐらいとしか女の子と過ごしたことはないそうじゃないか。
ここは一つ練習と思って木乃香達と麻帆良巡りを楽しんできなさい」

「アハハ……。確かにそうかもしれませんね。
では木乃香さん達が了承していただけたらお願いします」

「こちらからお願いするのじゃよ。
木乃香は女子校育ちでの。
男に慣れてしまっても困るが、無菌培養では将来が心配なのじゃよ。
すまないが練習相手になってくれい」

「いえいえ、構いませんよ。
僕も木乃香さん達に2－A生徒を相手取る練習台になってもらうのですから」

木乃香さん達と会うことになりました。
さて、木乃香さんと刹那さんはどう違っているのでしょうか？

刹那さんはアルビノであることを隠してないようでしたが、それ

でも木乃香さんが魔法を知っているとは限りません。
ここは慎重に行きましょう。
このちゃんＬＯＶＥな刹那さんの前で変なことしたら斬られてしまうかもしれません。
何も知らない子供を装っていきましょう。

コンコンとノックの音がしました。
木乃香さん達でしょうか？

「入りなさい」

「失礼します。学園長。
本国でこの前の政変の続きが起こったようです。
何でも大部分の元老院議員が拘束されたそうです」

……ナンデスカ、ソレ？
明石教授らしき人が言ってることがわかりません。

「これっ！　入ってきていきなりなんじゃ！？
ここにはネギ君もおるのじゃぞ！」

「え？　ネギ君が？
って、ああ、すみません。椅子に隠れて見えませんでした」

……どうせ僕は小さいですよ。何も知らない子供ですから。

第十三話　学園長（後書き）

今回あまり話は動いていません。
ネギはヘルマン卿をボコった学園長に怯えています。
アンチとかにならないように人生の先達として学園長を書いてみました。
でも木乃香に見合いさせるのが好きなのは変わっていません。

次回、“木乃香と刹那”。
先に最終話が出来てしまったのですがどうしたらいいのでしょうか？

御意見・御感想お待ちしております。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第十四話　木乃香と刹那

こんにちは、ネギです。
学園長室から退出して、木乃香さん達を待っています。

退出する際に学園長たちが

「……ゲーデル議員が……」「……高畑先生がうまく……」
「……これで……」

とか話し合っていました。

そういえば何でタカミチは緊急の出張なんかあったんでしょうか？
前にＮＧＯの仕事はほとんど終わったようなこと言ってたんですが……。

……まあ、気にしませんし、わかりません。
自分は何も知らない子供ですから。アハハ……。

「君がネギ君？」

呼ばれて振り返ってみると私服姿の木乃香さんと刹那さんが立っていました。
相変わらず刹那さんは白い髪で、やけに柄が曲線を描いている長い日傘を差しています。

木乃香さんは、……あれ？
この前はすれ違っただけでしたからわかりませんでしたが、魔力が感じられません。

「はい、ネギ・スプリングフィールドです。
初めまして、近衛木乃香さんですか？」

「そうやよー。日本語うまいのやね。
英語そんなにわからへんからドキドキしてたわー」

「大丈夫だと言ったでしょう、このちゃん。

ネギ先生は教師になるために麻帆良に来られた方ですから。
初めまして、私は桜咲刹那と申します」

「初めまして桜咲刹那さん。
２－Ａの担任補佐となることはご存知のようですね。
３学期からよろしくお願いします。

とはいえまだ教師ではありませんので、“先生”とつけなくても構いませんよ。
僕の方が年下ですし」

「いえ、そういうわけには参りません」

「せっちゃんは固いんやからー。ネギ君が困っておるえ。
それにしても大変やな、ネギ君も。
そんなに小さいのに学校の先生になるなんて。

お爺ちゃんから聞いたから、今日は麻帆良を案内してあげるえ。
ネギ君はどこか行ってみたいところとかあるん？」

刹那さんが裏の関係者っぽいのは立ち居振る舞いからして確定なんですが、木乃香さんのほうがわかりません。
自分のような子供が教師になることを聞いても動じてませんが、原作でも似たような感じでしたからねぇ。

かといって、迂闊な発言をしたら刹那さんに斬られそうです。
だって、せっちゃん常に日傘の手元を握ってるから常に臨戦態勢なんですもん。

やばい。この傘なんかやばいです。
よくよく見ると傘生地が妙に分厚いです。完璧に日光遮ってます。
……防弾繊維（ケブラー）？　どこの戦闘メイドですか？
“お嬢様の名に誓い、すべての変態に白刃を”、ですか？
竹刀袋に真剣入れてるよりやばいです。

「はい、今日はよろしくお願いします。近衛さん、桜咲さん。
そうですね、出来れば生徒の皆さんが普段遊ぶようなところをお願いします。
タカミチやエヴァさんと何回か麻帆良巡りしてますけど、生徒の皆さんが行くようなところは行ったことないんですよ。」

まあ、いいです。自分は何も見てないですし想像してないです。

そしてエヴァさんの名前を出しても無反応ですか。

それに女の子と麻帆良巡りするのは楽しみです。
今までエヴァさんやタカミチとしかしてませんでしたからね。
あの2人と一緒だと落ち着いたところしか回りませんから、若者が普段遊ぶようなところは全然行かないんですよ。

しかも木乃香さんや刹那さんのような美少女と麻帆良巡り出来るなんてラッキーです。

2人と一緒に色々なところに遊びにいきました。
ボウリングしたりカラオケしたり、この刹那さんは原作と違ってこういう遊びも慣れているみたいです。
“このちゃん”“せっちゃん”と呼び合って、まるで普通の女子中学生のようでした。

2－A生徒のことも教えてくれました。
“バカレンジャー”ならぬ“バカ四天王”がクラスにはいるそう

です。
神楽坂明日菜さんがバカ連中から外れています。
会ったときにバカっぽくないと思ってましたが、やはりそうなんですね。

ということは原作でバカレッドになったのって、無理矢理記憶を消したからですか。
確かタカミチがアスナさんの記憶を消したはずですが、魔法が使えないタカミチは魔法符か何か使ったんでしょう。
だけどアスナさんが持つ“完全魔法無効化能力”が変な風に働いて、頭がパーになってしまったということですかね？

……タカミチ。余計なことしやがって。
というかあのクールなアスナ姫がバカレッドになるのって、そりゃなんか理由ありますよね。

ちなみに刹那さんも木乃香さんに勉強を教えてもらっているので、原作と違い中の上クラスらしいです。
とはいえクラスのテスト成績が万年最下位なのは変わらないそうですが。

まあ、ブービーとは数点の差なので、ちょっと頑張れば期末テストは最下位脱出できそうです。
3学期からアーニャも来ますから、より平均点がアップするでしょう。

よし、期末テストはこれで勝てます。

「今日はありがとうございました。
ウェールズではこんな風に遊んだことなかったので楽しかったです」

「それはわかります。
私も中学になるまで京都に住んでいたのですが、麻帆良に来てからこういう遊びをするようになりましたから」

木乃香さんが御手洗いに行ってるので刹那さんと2人きりです。
今のうちに木乃香さんが魔法関係者かどうか聞くことにします。

しかし、どうやって聞きましょう？　迂闊に聞くと地雷踏みそうです。
やはり日傘にツッコミ入れて、そこから話を広げていくべきですかね。

「ところで聞いてもいいでしょうか？
その日傘、何というか、……変わってますね？　柄が妙に曲が

っていますし」

「ふふふ、聞かれると思ってました。
何度かこの傘を見て、微妙な表情をしてましたものね」

バレテーラ。

いや、しかしセーフです。
刹那さんの表情を見る限り、ツッコミ入れてなかったら逆に失望されてた感じです。

「多分、ネギ先生が想像されているのであっていると思います。
誤解無いように伝えておきますが、私はこのかお嬢様の護衛なのです」

「桜咲さんはこちら側の関係者なのですか？」

「はい。
警備員としては働いていませんが、魔法の関係者ではあります。

このちゃん。近衛木乃香様は、関東魔法協会の理事である学園長の孫であるだけはないのです。
関東魔法協会に並ぶ日本の魔術団体、関西呪術協会の長の御息女

でもあるのです」

「ええ、それは聞いたことがあります。
確か関西呪術協会の長は近衛詠春さんで、僕の父とも知り合いだそうですね」

「そう聞いています。
私はネギ先生の父君とはお会いしたことはありませんが、長が“紅き翼（アラルブラ）”時代のことを話しているのを聞いたことがあります」

「そうですか。
是非機会があれば父の話を聞かせていただきたいですね。

……しかし、関西呪術協会の長の御息女というなら、何故麻帆良にいるのですか？
それに近衛さんから魔力とかは感じられませんでしたが、魔法関係者ではないということなのでしょうか？」

そうだ、そこが問題です。
魔力が感じられないということは、原作ではナギ以上と言われた才能がないということでしょうか？

「いえ、お嬢様は魔法のことはご存知ですよ。

魔力が感じられないのは魔力を封印する魔法具を使っているからです。
魔法の修行をなさるときは外してます」

「……そうなんですか。まったく気づきませんでした」

「魔力を封印しているのは、お嬢様の魔力が強大すぎるからです。話によると先生の父君である“千の呪文の男（サウザンドマスター）”よりも強大だとか。強すぎる力は災いを呼ぶ、とのことで一人前になるまでは必要なとき以外は魔力を封印なされているのです。

お嬢様が麻帆良にいる理由は東と西の友好のためです。長の御息女であるお嬢様が西洋魔術を習い、将来の東と西の友好の架け橋となるようにと。
悪く言ってしまえば人質という表現になってしまいますが」

「そ、そうなんですか！？　……人質、ですか。
その、近衛さんはそのことはご存知なのですか？
それに近衛さんが西洋魔術師になったら、将来の関西呪術協会の長には誰が？」

……驚きました。こんなはっきり言うなんて。
え？　大丈夫なの？　人質なんてとっちゃって？
東と西の仲が悪いどころの話じゃないのでは？

「大丈夫ですよ。
関西呪術協会の長にはお嬢様の弟君がつくことになるでしょう。
弟君の北斗様はネギ先生と同い年ですね」

……弟？　北斗？
新キャラ登場ですか！？

「それに先ほどの理由は後付けなのですよ。
長はその、……子煩悩といいますか、お嬢様に非常に甘いといいますか」

確かに原作でもそんな感じでしたよね。
というか学園長も金槌で頭殴られても何も言わないとか、あの２人木乃香さんに甘すぎです。

「それを憂いた奥様が「これでは木乃香のためにならない」と仰られまして。
お嬢様を学園長がいらっしゃる麻帆良に留学させることになされたのです」

奥様ってことは、木乃香さんのお母さんご存命というわけですか。
弟さんが生まれているということなら、そりゃお母さんも生きてますよねー。

あれですか？
学園長と長が原作で木乃香さんに駄々甘だったのは、娘と妻の忘れ形見だったからですか。

「それで長も落ち着かれまして、今は精力的に関西呪術協会の長の勤めを果たしておられます。
といっても口が悪いものは奥様の方が長だと揶揄しますが……」

元から婿養子でしたからねー。
弟さんが自分と同い年ということは9歳。
木乃香さんが小学生のときに麻帆良に来たということですから、

その頃にはもう弟さんは生まれてますね。
東のことが嫌いな西の強硬派も、男の子が西に残るならまあいいか、とでも思ったんでしょうか。

確か原作で西と東の仲の悪さの原因の一つに、西の長の一人娘である木乃香さんが東にいる、というのがあったはずです。
でも弟さんがいて西に残っているということから、修学旅行で木乃香さんを取り戻そうとする強硬派がいない可能性がありますね。

“千の呪文の男（サウザンドマスター）”よりも強大な魔力というのは惜しいでしょうが、古い組織なだけに長になるのは女性より男性優先なのでしょう。
そもそも男性優先じゃなかったら婿養子なんて取らず、木乃香さんの母親が長になってます。

弟さんの才能がどれほどのものなのかわかりませんが、西に木乃香さんが残っていたら、

“実力重視の姉派　ＶＳ　慣習重視の弟派”

なんて内部抗争に発展する恐れすらあります。

そう考えると、木乃香さんを麻帆良に留学させるというのは長の親馬鹿だけが原因とは考えられませんね。
これはあくまでも自分の想像の話ですが……。

「お待たせー。次はどこに行く？」

まあ、京都修学旅行の安全が高まったのは良いことです。
せっかくの休日です。今は美少女2人とのデートを楽しむことにしましょう。

「そういえばエヴァちゃんが「ぼーやに“お母さん”と呼ばれてみせる！！！」って張り切ってたけど、呼んであげないのかえ～？」

「こ、このちゃん……」

「……その話題はマジで勘弁してください」

エヴァさん、もしかして２－Ａで自分のこと話してるんじゃないでしょうね？

帰ったら問い詰めなければ。

第十四話　木乃香と刹那（後書き）

「木乃香と刹那」というサブタイトルなのに、せっちゃんばっかりです。
せっちゃん好きということもありますが、京都弁がわからないのです。
書き辛い書き辛い思ってたら、こんな風になってしまいました。
看板に偽り有りです、ごめんなさい。ｏｒｚ

別にせっちゃんは“ヤンデレ”とか“猟犬”だったりするわけではありません。
“アルビノ”↓“日光に弱い”↓“日傘”↓“仕込み傘”と思いついただけです。
このちゃんのスキンシップに慣れている分、原作よりテンパったりすることが少ないぐらいでしょうか。

弟の名前は

“詠春”でググる↓“詠春拳　－　Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ”がトップ↓“ブルース・リー”が使ってた↓“ホワタァー！”↓“ケンシロウ”↓“北斗神拳”↓“北斗”

といった感じで連想ゲームで決めました。

特に意味はなく、今後の重要キャラとなるわけではありません。
というか今後出る予定もありませんｗｗｗ

なんだかハッピーエンド好きとはいえ、ガトウといい木乃香母といい、生存キャラが多すぎでしょうか？
木乃香母の名前を知らないので、作中では“奥様”で通しました。
もしかしたらこのオチは、前話あとがき予告の「木乃香と刹那」から予想されてた方がいらっしゃるかもしれませんね。

作者なりに木乃香が麻帆良にいても問題ない理由を作ってみましたが、いかがでしょうか？

それにしても誰かのヤンデレ化を望んでる方がいるみたいだけどどうしましょう。
誰か考えてみますか。具体的には修学旅行での出番が限りなく低くなった天ヶ崎千草とかｗ

御意見・御感想お待ちしております。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第十五話　クリスマス

「今日は待ちに待ったクリスマスだぞっ、ぼーや！！！」

吸血鬼がクリスマス祝うなよ。
テンション高いですね、この人は。

「ちゃんとご馳走も用意したぞ！
七面鳥のローストもクリスマス・プティングも用意した。
味は四葉先生からのお墨付きだっ！！！」

ちゃんとアーニャやネカネ姉さんにクリスマスカード届いたのかなぁ。
とはいえウェールズはまだ朝の８時ですから、郵便はまだ配達されていないですかね？

「……こ、このクリスマス・プティングはぼーやが家に来てすぐに作ったものだ。

熟成されていて美味しいぞ！！！」

あとで電話しないと駄目ですね。
考えてみれば手紙ばっかりで、2人の声を聞いてません。
日本とイギリスの時差が9時間と言うのが中途半端なんですよねぇ。

「え、えと、……ク、クリスマスツリーも大きいのを用意したんだが、大きすぎてしまってな。家に入らなかったんだよ、ハッハッハ。
家の外に置いてあるから見に行かないか？」

そういえばアルちゃんどうしてるんでしょうか？
いくらアーニャとの仲が良いといっても、アルちゃんは自分の使い魔ですからね。
アーニャに任せっぱなしだと主人として駄目です。

うん、電話したときに声を聞かせてもらいましょう。
今の自分ならアルちゃんにも自然に接することが出来る気がします。

「……タ、タカミチに採ってきてもらったんだが、タカミチは馬鹿だな。家の大きさがわかっておらん。
どーせ、ぼーやに良いところを見せようと考えたんだろう」

「タカミチは張り切りすぎると空回りするらしいですからね。
尤も「木乃香の弟は9歳か。そのぐらいの年頃の男の子から“お母さん”と呼ばれるにはどうしたらいいのだろう?」なんて、よりにもよって教室で相談する人よりはマシじゃないですか?」

「……私が悪かった」

絶望した!!!

エヴァさんが自分の母の座を狙っているということが、既に2−Aに知られていることに絶望したっ!!!

しかも、よりにもよって朝倉和美(パパラッチ)さんに得意満面に語るとは何事ですか!?

「エヴァさん、僕は言いましたよね。
担任補佐となる僕が生徒のことを“お母さん”と呼ぶのはおかしいって」

「……う、うん」

「じゃあ、何でそんな相談を教室でするんですか？」

「い、いやな。
木乃香が弟のこと話していてな。９歳という難しい年頃なんだそうだ。
実家に電話をしても「恥ずかしい」といって電話に出てくれないとか。
その話から色々と話が弾んでいって……、その、なんだな」

どうしたらいいんでしょうか、この状況？
木乃香さんと刹那さんと遊び終わった後、家に帰りエヴァさんを問い詰めたら目を逸らされました。
やっぱり喋ってたようです。

それからアスナさんや木乃香さん達と連絡を取って状況を調べたところ、エヴァさんは朝倉和美（パパラッチ）さんに色々と語っていたようです。
それ以来、エヴァさんとはクリスマスの今日まで会話しませんでした。

「ハア、２－Ａはお祭り好きと聞いてますけど、その相談の結果どうなったんですか？」

「ぼ、ぼーやの話題で持ちきりになったぞ。
きっとクラスの皆は３学期からぼーやのことを暖かく迎えてくれるはずだ、ハッハッハ。

……ごめんなさい」

「事態の沈静化をエヴァさんにお願いしたいのですが」

「……わかった、なんとかやってみる」

おそらく今晩、幼女なサンタクロースが２－Ａ生徒に暗示というプレゼントを振りまくことになるでしょう。
それとアスナさんや木乃香さん達、アルカナさんに口止めしておかなければいけませんね。

「お願いしますね、エヴァさん。
ではこれをどうぞ。一緒に住んでるので手渡しですがクリスマスカードです」

「！　くれるのか!?　ありがとう、ぼーや!!!」

「はい、エヴァさんにはお世話になってますからね。
昼は簡単なものしか食べてないのでお腹がすきました。少し早いですけど夕飯にしましょうか」

何だか最近自分が“まるで駄目な男の子”、略して“マダオ”になってきたような気がしますけど、

……気のせいですよね？

「……そんな感じでさ。毎日色々大変だよ」

「ふーん。まさか“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”と一緒に暮らすことになるなんて夢にも思わなかったけど、優しそうな人でよかったわ」

クリスマスパーティーを一時中座してアーニャに電話してます。
アーニャの声を聞くのも久しぶりです。

「アハハ、まあエヴァさんの噂が噂だからね。
アーニャのことはエヴァさんに話したけど、

「ぼーやの妹のような子なら私にとって娘のようなものだ。ちゃんと面倒みてやろう」

って言ってくれてるから大丈夫だよ」

「ちょっと！　なんで私が妹なのよ!?　あんたの方が年下でしょーが!?」

「ん?　えーと、背丈からいくとそうなるかな?」

「くっ！　ネギ本当に背が伸びたんでしょうね!?
帰ってきたとき全然変ってなかったら怒るからね!?」

「いや、本当に日本に来てから急に伸びたんだよ。
日本のご飯が美味しいせいかな?　ウェールズにいるときよりたくさん食べるようになったし、武術も始めたからね。
ウェールズにいたときより健康的な生活を送ってるよ」

本当に背が伸びてます。この数ヶ月で５ｃｍは伸びましたね。やはり日本のご飯が美味しいからです。
メルディアナ魔法学院の食事は流石イギリスというか、大味でしたから。
前世が日本人の自分には合わなかったのです。

「まあいいわ。
それより本当に村の皆を治せるようになったんでしょうね？」

「大丈夫だよ。ヴィルさんに手伝って貰ったおかげで無事に完成した。
ねずみ相手の動物実験でも成功したよ」

「その“ヴィルさん”ってのが信用できないんでしょーが！
村の皆を石にした張本人なんでしょう！？」

アーニャの言うことは尤もです。
尤もなんですが。

「……アーニャ。
もし“３人のネカネ姉さんにフルボッコにされた人が「何でもしますから許してください」と言った”ら信じるだろう？」

「……ごめん。それは確かに信じるわ」

「大丈夫だよ。
生まれ変わったヴィルさんは、毎日涙を流してエヴァさんの下で働いてるから」

「それって、……いや、なんでもないわ」

「うん。年明けにウェールズに帰るから待っててね。
タカミチも一緒に着いてきてくれて、アーニャが麻帆良に来る準備も手伝ってくれるってさ」

「あら、そうなの？
そういえばそのときにネギにお客様が来るらしいわよ。おじいちゃんが言ってたわ」

……お客様？　誰でしょう？
まあ、向こうで会えばわかりますね

「うん？　ああ、ごめんね。
アルちゃんもネギとお話したいわよね」

「お久しぶりです、お兄様。無理はなされていませんか？
お兄様は自分のことを忘れるときがありますからお気を付けください」

「……うん、大丈夫だよ。……アル、ちゃん」

さっき「今の自分ならアルちゃんにも自然に接することが出来る気がします」とキッパリ言ったばっかりだったのに、スミマセン。
ありゃウソでした。

次の日の朝、外に出たらサンタクロースの格好したタカミチが氷漬けになっていました。
そういえば、確か２４日はクラスのクリスマス・イヴ・パーティーに参加して、２５日はこちらに顔を出すと言ってましたけど、結局顔を出しませんでしたね。

思えば昨日の夕飯のときに魔法の発動らしきものを感じました。
どうやらエヴァさんのトラップに引っかかってしまったようです。
エヴァさんとタカミチは仲が良いのか悪いのかわかりません。

……とりあえず家の中に運び込んでおきますか。

第十五話　クリスマス（後書き）

季節外れのクリスマス編終了です。

「ガトウといい木乃香母といい、生存キャラが多すぎでしょうか？」

と前回書きましたが、ツッコミが入る前にこの場で謝りたいと思います。

“龍宮コウキ”も生存させてたのを素で忘れてましたｗｗｗ

先日読み返していて「あ。」と思いましたね、ハッハッハ。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第十六話　おおみそか

こんばんは、マダオです。じゃなくて、ネギです
エヴァさんは無事に２－Ａ生徒に暗示をかけることが出来たそうです。

といっても、アスナさん達のような魔法関係者は無理でした。
アルカナさんと会ったとき、ニヤニヤと笑いかけられてしまいました。

……憎しみで世界を滅ぼすことが出来たらいいのに。
アスナさんや木乃香さん達が慰めてくれたのが唯一の救いです。

そういえば確か、春日美空さんも魔法生徒でしたか。
３学期が始まる前に是非お話しないと駄目ですね。あの人悪戯好きですし。フフフフ……。

春日美空さん、あなた覚悟してる人ですよね。

人に悪戯しようとするって事は、
逆に悪戯されるかもしれないという危険を、
常に覚悟している人ってわけですよね。

「フォッフォッフォ、大変じゃったのう、ネギ君」

「まったく、しょうがないなぁエヴァは」

「笑い事じゃないですよ、学園長、タカミチ」

現在12月31日23時30分、学園長の家でコタツに入ってヌクヌクとしてます。
考えてみると、日本に来て畳の部屋で過ごすのは初めてです。
なんで学園長の家で年越しするのかというと、エヴァさんのトラ

ップにはまり、氷像としてクリスマスの夜を過ごすことになったタカミチのためです。
『咸卦法』全開のタカミチと、自分が渡したクリスマスカードを誇らしげに見せびらかすエヴァさんの睨み合いはガクブルものでした。

このままでは正月をどこで過ごすか決める麻帆良大戦が始まりそうだったので、

「せっかく日本に来たので、年越しは日本風に過ごしたいです」

と自分がお願いして、学園長の家にお邪魔することとなりました。

何かもう、何も知らない子供の振りをするの疲れてきました。コ○ン君の気持ちが良くわかります。
エヴァさんとタカミチは喧嘩仲間というか何というか、仲悪いわけじゃないんですけどねぇ。
元同級生の悪友って感じです。

まあ、それはいいんですが、

「しかし、エヴァンジェリンも本当に変わったなぁ。最初会ったときの“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”と呼ばれていた時代とは大違いだ。
まさか彼女が作る年越しソバを食べるなんて考えたこともなかったぞ」

「ハハハ、師匠は出張ばっかりで、たまにしかエヴァと会ってなかったスからね。
僕は同級生でしたから、毎日のように見てたらアレが普通と思うようになったスよ」

「しかし、今のキティも大変可愛らしいのですが、昔のキティが懐かしいですね。
ちょっとからかっただけで顔を真っ赤にして怒ったのに、今では逆に惚気てくる始末です。
からかいがいがなくなってしまいました」

「からかうのは勘弁して欲しいの、アル。
お主がからかった後始末に何度苦労したと思っている」

何でガトウさんとアルさんが一緒に年越ししてるんでしょう？
学園長の家で普通に紹介されて、普通に一緒に年越しすることになりました。

原作を知っている身としては違和感しか感じられません。

いや、自分もどういうことか聞きたかったですよ。でもね、

「始めまして、ネギ君。
神楽坂ガトウだ。昔は“ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ”って名前で君のお父さんと一緒に働いていたんだ。
娘のアスナとは会ったんだってな、よろしく頼む」

「こんばんは、ネギ君。
アルビレオ・イマといいます。私も君のお父さんの仲間ですよ」

「……え？　はい、ネギ・スプリングフィールドです」

で会話が終わりましたよ。どう聞けっていうのです？

そしてタカミチのガトウさんに対する口調にも違和感バリバリです。原作通りなんですけどね。
若い頃のタカミチならともかく、今のタカミチの老け顔で「～ス～」とか正直似合わないッス。

それにしてもこの部屋平均年齢高いですね。
台所でソバ茹でてるエヴァさんも加われば文字通り1桁跳ね上がりますが。

……ミカン甘ぇ。

「ネギ君、どうしたんだい？」

いきなり通常モード戻んな、タカミチ。
それともアッチの口調が通常モードなんですかね？

「いや、ちょっと現実逃避を少しばかり。

そんなにエヴァさんは今と昔で違うんですか？」

「ああ、昔のエヴァンジェリンを知らない君を置いてきぼりにしてたな、すまん」

「そうですねぇ。
違うことは違うんですが、あまり本質的には変わってないでしょうね。
今まで威嚇ばかりしてきた子猫が甘えてくれるようになった、という感じでしょうか」

「そんなところじゃろうな。
それに今年はアスナ君や木乃香達といった事情を知っている子がクラスメイトに多い上、ネギ君の協力のおかげで『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』が解呪できるからのぉ。
より明るくなったわい」

「そうなんですか。
そういえばアスナさん達は一緒じゃないんですね。クラスの人達と年越しをするのでしょうか？」

「ん？　アスナは龍宮神社でアルバイトって言ってたぞ。
何だ、ネギ君。アスナに興味あるのか？」

「いやいや、ネギ君が興味あるのは木乃香じゃな。大和撫子の言葉がピッタリじゃからの。この前デートもしたのじゃし。
ちなみに木乃香もアルバイトじゃな。刹那君に巫女服を着せたいとか言っておったぞ。」

「……大和撫子は友人に巫女服を着せたいとか言わないと思いますよ、学園長」

巫女服いいですね。特にクールなアスナさんの巫女服姿は見てみたいです。
よし、初詣に龍宮神社に行くとしましょう。

「１０歳にもなっていないのにそんなこと考えたことありませんよ。皆さん美人だと思いますけどね。
僕よりもタカミチはどうなんですか？　もう３０じゃないですか」

でもぼく萌えとかわかんなーい。９さいだもん。
……うん、無いですね、このキャラは。

とりあえずタカミチを生贄に捧げておくことにします。

「お、そうだな。タカミチどうなんだ？
確か同僚の女教師と茶飲んでるの見かけたこと何回かあったぞ」

「ちょ、何言ってんスか、師匠。ネギ君の前で」

「しずな先生のことじゃな。高畑君も隅に置けないのぉ」

「フフフ、あの小さかったタカミチ君にも春が来たのですか」

よし、このメンバーだったらタカミチも弄られる側です。
タカミチを生贄にして、自分は安全圏にいましょう。

「おーい、ソバ運ぶの手伝ってくれー」

あ、年越しソバだ。

「じゃ、僕が行ってきますのでお話しを続けていてください」

「おお、頼む。
ホラ、キリキリ吐け。師匠命令だ」

「ちょ、ネギ君！　マジで勘弁してくださいっス、師匠！」

「フフフ、ネギ君もちゃっかりしてますねぇ」

「高畑君はもうちょっと搦め手に強くなればいいのじゃがのう」

これ以上狼の群れがいる部屋にいられますか！
自分は台所に逃げさせてもらいます！

「これを運べばいいんですか？」

「ああ、重いから気をつけてな」

そういえばソバって日本に来て初めて食べますかね？
エヴァさんの料理は洋食が多いからしょうがないんですが。
今度エヴァさんに頼んで日本料理も作ってもらいましょうかね。

「フフフ……」

「エヴァさん、どうしたんですか？」

「いや何、こうやって手伝ってもらうところなんて“親子”っぽいなと思ってな。
そう思わないか、ぼーや？」

「ア、アハハ……、どうなんでしょうか？」

……狼の群れから逃げれたと思ってたら、虎穴に逃げてたでござる。コンチクショウ。

「明けましておめでとうございます。
今年からよろしくお願いします」

「明けましておめでとう。
何、ぼーやならうまくやれるさ」

「明けましておめでとうございます。
うん、大丈夫だよ。僕もフォローするからさ」

「明けましておめでとう。
フォッフォッフォ、期待しておるぞ、ネギ君」

「明けましておめでとうございます。
私は普段は図書館島の奥にいますので、たまに顔を出してくださいね。
まだ療養中なのであまり役に立てませんが、相談くらいには乗れますよ」

「明けましておめでとう。
アルにはあまり相談しない方がいいんじゃないのか？
ネギ君がアルの影響を受けたらどうする？」

除夜の鐘が鳴り終わり、２００３年が始まりました。
原作開始の年です。冬休みが終わるまでは時間があるとはいえ、ドキドキします。いよいよです。

「ネギ君は来週にウェールズに帰るんだったな」

「はい、村の皆の治療のために。
それと3学期から修行で麻帆良中に通うことになった幼馴染の迎えです」

「僕もそれに着いていくっス、師匠」

……この口調のタカミチだと。春日美空さん出てきたときに困りますね。
いや、メタな話はやめておきましょう。

「それにしても、伯爵級悪魔による石化すら治すことが出来る石化治療魔法ですか。
興味深いですね」

「うむ、それだけのことで“偉大な魔法使い（マギステル・マギ）”と呼ばれても正直おかしくないぞい」

「いえいえ、ヴィルさんの手助けがあっての話ですよ。
自分一人じゃこんなに早く出来ませんでした」

それと学園長達によるヴィルさんへの“お話し”ですね。
いや、思い出しちゃ駄目だ、自分。
自分が魔法球から出た後のことは、自分は何も知らないんですから。

「ぼーやは謙虚だな。
しかし、度が過ぎれば力が無い者にとっては嫌味にしか聞こえん。
確かに私達の助けがあったとはいえ、“ヴィルから石化魔法を教わる”というそもそもの発想はぼーやのものなんだ。
それは誇るべきだろう」

いや、発想というより、ただの冗談のつもりだったんですが……。

でもそういうことにしておかないと、ヴィルさんが冗談のせいで無間地獄に落ちてしまったことになるので黙ってますけどね。

「ネギ君は柔軟な発想が出来るのですね。それは魔法使いとして良いことです。

ナギのように何でもかんでも力技で済ませるというのは本当はいけないことですから」

「確かにそうだな。

例のプランだって、ネギ君の発想からヒントを得たんだろう」

……例のプラン？

「例のプランってなんですか？」

「そうか、ネギ君には話していなかったね。

まだ詳しくは話せないんだけど、今“魔法世界”では問題があってね。

それを解決するヒントを、昔ネギ君と話したときに貰ったんだよ。

ヒントというより直球な答えだったんだけど」

“魔法世界”の問題？　それって、火星の魔力枯渇による“魔法世界の崩壊”のことですよね？

自分いったいタカミチに何言った？

“魔法世界の崩壊”を食い止めるような話なんかしてませんよ？

火星のテラフォーミングとか、そんなチートオリ主じゃないですよ。世界樹の力を使う能力なんかも持ってないですよ。自分は。

「それは初耳だな。

というよりぼーや自身もなんのことかわかっていないぞ」

「ハハハ、まあ話せるときになったら話すよ。僕よりも説明に向いている人もいるし。

大丈夫だよ、悪いどころか良い話だし。今は村の皆のことを考えていればいいよ」

「は、はあ、そうですか。わかりました。

その内話してくださいね」

駄目だ、さっぱりわかりません。

いいです。この並行世界は自分の知っている原作とは違うんです

から、わからないことがあって当然でしょう。うん、そうです。
今はタカミチの言うとおりに村の皆の治療を考えてましょう。
諦めても、そこで人生終了ではありません。

「ま、なんにせよ。せっかくの里帰りだ。ゆっくりとしてくるがいいじゃろ。
お姉さんや幼馴染にその伸びた背を見せてきなさい」

「はい、アーニャやアルちゃんにも久しぶりに会いますから楽しみです」

「……“アルちゃん”、ですか？」

やば、地雷踏んだ。
“アルさん”が“アルちゃん”に反応しました。

第十六話　おおみそか（後書き）

自分で書いといてなんですが、本当にこのタカミチの口調が違和感ありすぎです。
原作でもガトウさんと最後に話すシーンがこんな感じだったので、間違ってはいないはずだとは思うのですが、何故か間違っているとしか思えません。

“魔法世界”云々については、作者なりの“魔法世界の崩壊”の対処のことです。
ご都合主義な方法ですので恐縮ですが、近いうちに明かされますので楽しみにお待ちになってください。

あえて言うなら

「パンが無ければ、ケーキを食べればいいじゃない」

的な発想です。

出来れば感想でのネタバレ的な予想はお控えください。

御意見・御感想お待ちしております。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第十七話　元日

「明けましておめでとうございます。
わあ、これが巫女服ですか。巫女服サイコーーー！（きれいですね）」

「明けましておめでとう。
……何か邪念を感じたんだが？」

「？　マナちゃん、どうしたん？」

「明けましておめでとうございます、ネギ先生。
早いですね、まだ7時前ですよ」

「明けましておめでとう。
お父さん達はどうしたの？　一緒に年越しするって聞いていたけど」

学園長から提供という名の強奪をされた秘蔵のお酒のせいで、アルさんを除いて全員夢の中です。
吸血鬼であるエヴァさんすら二日酔いで動けないとか、いったい

どんな酒を集めてたんですか、学園長？
特にタカミチは尋問のため、次から次へと飲まされてグロッキーです。

こんな有様ではおせちを食べることが出来そうにないので、台所を借りて適当に朝食を作ってアルさんと食べました。エヴァさん達用に雑炊も作っておいたので、起きたら勝手に食べてくれるでしょう。
アルさんもかなり飲んでいたんですがケロッとしていました。やはり普通の人間ではないみたいです。
ちなみにアルさんは朝食を食べ終わるとカメラを持ってニヤリと笑い、エヴァさんが二日酔いで苦しんでいる部屋に消えていきました。おそらくうんうん唸っている寝顔を撮られることとなるでしょう。

自分は朝早くから龍宮神社へと参拝です。遅くなったら混むでしょうからね。

「皆さんまだ寝てますよ。今朝までずっと飲んでたみたいです。多分昼過ぎてからでないと起きないですね。僕は途中で寝ましたから大丈夫でしたけど。
特にタカミチは随分とガトウさんに飲まされていたみたいです。
僕は朝早くに目を覚ましたので、散歩がてら参拝です。

皆さんがここでアルバイトしてるって聞きましたので」

アルさんが写真を撮るのを止めなかったアリバイ作りじゃナイデスヨ。

「そうなの？　まったく、いい年して何してるんだか。帰ったらキツク言っておかないと。

まあいいわ、あなた日本初めてなんでしょう。参拝の仕方とかわかるのかしら？」

そう言って、溜息ついたのはアスナさん。

下ろしたオレンジの髪が巫女服の白に映えて似合ってます。

原作の元気一杯な性格も良いですが、このクールな性格も良いですね。しかも微かに笑っているのが非常に、非常に良いです。

表情だけで「もう、しょうがないなぁ。お父さんは」と考えてるのがわかります。呆れるだけじゃない、隠しきれない親娘愛を感じます。

明石祐奈さんみたくベッタリじゃないみたいですけど、お父さん大好き人間みたいです。

「そういえばそうだな。
神楽坂はこれから休憩だろう。案内してあげたらどうだ？
この時間帯ならまだ参拝客も少ないだろうから、少しぐらい休憩を伸ばしても構わないよ」

原作でも巫女服を着ていたアルカナさんは着慣れているようで、ビシッときまってます。まるで本当の巫女さんのようです。

あ、いえ、本当に巫女さんです。巫女さんですから、その袂に入れた手を出してください。撃鉄が鳴る音なんか聞いてませんから。
エキゾチックな美しさが、合わないと思われそうな巫女服に逆に合っています。体型が目立たない和服のはずなのに、中学生と思えないグラマラスなボディを隠しきれていません。
やっぱり、年齢詐ゲフン、ゲフン……。

「久しぶりやなー、ネギ君。また今度一緒に遊びにいこな。
残念やけどさっき休憩終わったばかりやから、今は案内出来ひんわ」

ＴＨＥ・正統派巫女さんの木乃香さん。やはり大和撫子はいいですね。
和服を普段から着慣れているせいか、歩き方が他のアルバイト巫女さんとは違います。“しずしず”という擬音が似合う歩き方です。

巫女服の紅白と絹のような長い黒髪のコントラストがいいです。というか関西呪術協会の長の娘が巫女やってる神社って凄くご利益ありそうです。よし、後で御神籤引きましょう。

「そういえばウェールズに一時帰郷なさるらしいですね。事情を聞きました。おめでとうございます、ネギ先生」

いつものサイドポニーテールじゃなく、髪を下ろしている刹那さん。何だか髪を下ろしていると幼く見えます。

アルビノなので肌も髪も雪のように白く、目がルビーのように赤いのですが、それがまた巫女服の白と赤に合っています。

原作でのキリッとした表情も良いですが、この柔らかい表情も素敵です。原作では木乃香さんぐらいにしか見せないような笑顔を振りまいてくれます。

この人も和服は剣道着などで着慣れているためか、本職の巫女さんのように見えます。

烏族の女の子の巫女服に似た服は背中が開いているんでしたっけ？　そっちも機会があるのなら是非とも見てみたいものです。

でもアルバイトのときぐらいはその仕込み日傘は置いておきましょうよ。お願いですから。

「甘酒です、どうぞアスナさん」

「悪いわね。頂くわ」

「いえいえ、案内してくれるんですからこれぐらい。エヴァさんと学園長からお年玉も頂いたことですし。
まあ、9歳とはいえ今年から社会人になるので、お年玉貰うのも変な話ですが」

「ウフフ、貰える間は貰っておきなさい。
大人になったら貰いたくても貰えなくなるのだから」

勿論頂戴できるものはものはありがたく頂戴しますよ。
グロッキーな状態でもお年玉をくれるためだけに起きてきたエヴァさんと学園長には感服します。

タカミチとガトウさん？　誰でしたっけ、その人達？

「そういえば、遅くなったけどおめでとう。故郷の人達を元に戻せるんですってね」

「はい、ありがとうございます。
来週にもウェールズに戻って、村の皆を元に戻すことになりました」

「9歳の身空で大したものだわ。若いって凄いわよねぇ。
うちのクラスにも凄いのがいるけど、あなたもその一人なのかしらね」

いや、あなたも若いでしょう？　って言おうと思いましたけど、そういえばこのアスナさん記憶があるんでした。
“黄昏の姫御子”として成長を阻害されていたためか、実年齢と見た目があってないんですよね。
２０年前の大戦時には既に子供の姿で、“自分と同じで実際の年齢と見た目が違うかもしれない”というようなことをアルさんが言ってましたし。

むむ！　となると、エヴァさんと同じロリババアというわけです

ね、わかります。

「……何か不愉快なこと考えなかったかしら？」

「え！？　いえいえいえいえいえ！　クラスの凄い人って誰かな？、と思っただけですよ。
今年、じゃなくて去年のウルティマホラチャンピオンの古菲さんとか、茶々丸さんを作った葉加瀬さんとか色々いるみたいですし」

「ああ、そうね。確かにたくさん凄いのがいるわねぇ。
というか、あなたが世話になっているエヴァンジェリンがその筆頭じゃないかしら？」

……そういえばそうでした。
普段のエヴァさん見てると全然そう思えないんですよね。原作知っていると尚更です。

「んー。家でのエヴァさん見てると全然そう思えないのが困るんですよね」

「そうかもしれないわね。あなたに“お母さん”と呼ばれるために四苦八苦している姿を見ていると確かに無理だわ。
でも、ウェールズから帰ってきたら魔法使いとして弟子になるんでしょう。そうなったらそんなこと言えないわよ。エヴァンジェリンは魔法に関しては厳しいからね」

頑張りなさい、と頭を撫でられました。ナデナデ、と。

……ポッ。

ハッ！　いけないいけない。危うく惚れるところでした。
くそっ！　アスナさんがナデポのスキルを持っているなんて、さすがは“黄昏の姫御子”です。

まあ、冗談はともかく。いいなぁ。こんな風に撫でられるのって。
ネカネ姉さんは抱きしめながら撫でてくるし、エヴァさんは何だか目が血走ってるんですよね。

タカミチ？　男に撫でられて喜ぶ趣味はないですよ。
こんな風に穏やかに撫でてくれるのって、アーニャのお母さんぐらいでした。

それにしても、魔法使いとしての弟子になるのもエヴァさん言いふらしているみたいですねぇ。
帰ったらエヴァさんと少しお話しないといけないようです、フフフフフ。

「？　どうしたの？　いきなり笑っちゃって」

「え、いや、ありがとうございます。教師だけでなく魔法の修行も頑張ります
こんな風に撫でられるのって久しぶりで。何だかアスナさんは“お姉さん”みたいだなぁ、って思いまして」

「……そう。そう思ってくれるの。

でも、教師になる人がそんなこと言っていいのかしら。それにエヴァンジェリンが聞いたら怒るわよ」

確かにそうですね。

「アスナのことは“お姉さん”と思うのに、何で私のことは“お母さん”って思ってくれないんだーーー！！！」

とか騒ぎそうです。

でも、それより何かを思い出してるようなアスナさんが気になります。ナギやアリカ姫のことを思い出しているのでしょうか？

「ハハハ、そうですね。このことは秘密にしてください」

「わかってるわよ。
あなたもエヴァンジェリンの前でそんなこと言わないでね。あの子が暴れると大変なんだから。

……もう少し撫でてあげるから」

アスナさんに引き寄せられ、そのまま頭を撫でてもらいました。
頭がちょうど胸に当たる位置なのが役得です。

ネカネ姉さんやエヴァさんみたいな感じじゃなく、軽く触られるような感じが気持ちいいです。何だか“慈しむ”という言葉が浮かんできました。

眠くなってきたなぁ。1時に寝て、6時前に起きましたからね。9歳の子供の体にはキツイです。

原作と違ってガトウさん達は生きてるのに、原作通りにナギやアリカ姫はいませんでした。

原作通りにメルディアナ魔法学院に入るまで自分は一人ぼっちでした。

アーニャやアーニャの両親、スタン爺さんもいましたけど、アーニャに甘えるわけにはいかないし、アーニャの両親やスタン爺さんはやはりどこか自分に遠慮していたようでした。

まあ、アーニャの両親をとるわけにもいかないし、スタン爺さんはツンデレでしたからしょうがないですけど。

この世界が並行世界ということを知った後、キャラ崩壊していたことに気づいたネカネ姉さんにも甘えることが出来ませんでした。

もちろんネカネ姉さんは自分のことを弟として愛してくれているということはわかります。

それでも何だか戻れなくなりそうで怖くて、甘えることが出来ませんでした。

それからは何が起こるかわからないこの並行世界に対処するために、勉強と修行の毎日でした。
男に甘える趣味は無いのでタカミチには甘えませんでしたし、エヴァさんに甘えたら負けかな、と思ったので甘えませんでした。

前世の最後が大人だったから甘えるのが恥ずかしいし、甘えなくても大人なんだから自分は大丈夫と思っていました。
でも、子供の体に引きずられて、大人のときに食べられたものが食べられなくなったみたいに、甘えなくても大丈夫だったのが本当は甘えたい、と心の底で僕は思っていたのかもしれません。

いや、思っていたのでしょう。

僕は今、アスナさんに甘えていたいです。

「アスナさん」

「なに？」

「もうちょっと、撫でてもらっていいですか？」

「……ええ、いいわよ」

ナデナデ、と頭が撫でられます。

参拝とかはまだだけど、このまま眠っちゃってもいいかなぁ？

第十七話　元日（後書き）

作者の好みがバレてしまうお話。

年上の綺麗なお姉さんは好きですか？

ちょっと今までと違って最後はシリアス風味でしょうか？

“優しい”と“甘い”は全然違うもので、昨今有名なモンペとかを考えると、“甘い”には良くないイメージもあるかもしれません。それでも他人に迷惑をかけないことを条件とするなら、“甘える”ということは優しいことだと思います。

次回更新は少し遅れます。

おそらく再来週までを目標に更新しますので、よろしくお願いします。

御意見・御感想お待ちしております。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第十八話　石化治療

こんにちは、アスナさんによりかかって寝てたところをアルさんに激写されたネギです。コンチクショウ。

アスナさんに甘えていたらいつの間にか寝ており、アルカナさんや木乃香さん達にニヤニヤと笑われながら見つめられていました。刹那さんはニヤニヤではなく、微笑ましいものを見るような目だったのが逆に恥ずかしかったです。

アルさんにはエヴァさんに見せないようにお願いしておきましたけど、どうなるかわかりません。朝倉和美（パパラッチ）さんでなかったことに感謝すべきでしょうか？

これでしばらくからかわれるんでしょう。ま、アスナさんに甘えることが出来たのは役得だったからいいですけど。

「と、いうわけでウェールズに帰ってきました」

「最近何だかネギ君性格変わってないかい？」

エヴァさんの家に住んで、２－Ａ生徒や元“紅き翼（アラルブラ）”の人達と一緒に数ヶ月過ごしたら誰でもこうなりますよ、タカミチ。

あ、そういえば、図書館島に行ったときに図書館探検部の人達を見かけました。まだ関わるのは早いと思って遠目から見ただけでしたけど、あまり原作と変わっていないようでした。

のどかさんはやはり男性恐怖症みたいですが、あののどかな雰囲気は変わっていませんでした。

夕映さんはトラップはずしたり理屈っぽかったりしてました。

パルさん？　やっぱりＧＫＢＲみたいな触覚持って、時折何か叫んでいましたよ。やば、アンサイクロペディアの“ＧＫＢＲ”の項目思い出しちゃったよ。

のどかさんのあののどかな雰囲気はいいなぁ。原作ネギが好きになる気持ちもわかります。何で自分の周りにいるのはのどかさんの対極な雰囲気を持つ人ばかりなんでしょうか？

「そんなことはどうでもいいのですよ、タカミチ。

アーニャが迎えに来てくれている筈なのですが……。あ、いましたね。

一般人も多くいる空港の中で、あんなトンガリ帽子を被っている

のはアーニャ以外の何者でもないでしょう。まったく、一般人への秘匿はどうなっているんだか」

「……やっぱり変わったよ、ネギ君。
うん、今まで忙しすぎたんだよ。今日で石化治療も終わるんだ。麻帆良に帰ったらゆっくりと休もう。
3学期からは先生をしなきゃいけないけど、冬休みの間ぐらい休んでもバチは当たらないさ。ゆっくり麻帆良散策でもして心を休めるんだ」

何でそんな憐れんだ表情になるんですか、タカミチ？
僕は何も変わっていませんよ。今なら浮遊術を使って空を飛ぶことが出来る気分なんですから。

それに麻帆良散策しても心は休まりませんよ。エヴァさんとタカミチが何をするかわかりませんからね。

「やあ、小さくなったね、アーニャ」

「誰が豆粒チビかぁっ！？」

この怒りよう、やっぱりアーニャです。センスの悪い小さな錬金術師の幻影が見えた気がしますが気のせいでしょう。

でも、本当に小さくなったなぁ、アーニャ。

それとも自分の背が大きくなっただけですかね？　ハッハッハ。

「そんなこと言ってないよ、アーニャ。

それにしても日本語がうまくなったね。それなら日本に行っても大丈夫だよ。

それから、ただいま。アーニャ」

「久しぶりだね、アーニャ君」

「……お帰りなさい、ネギ。お久しぶりです、タカミチさん。

ちゃんと日本語を勉強したんだから当たり前でしょう。

く、本当に背伸びてるわね。その靴もしかしてシークレットブーツだったりしない？

ネカネ姉さんは急な出張が入ったから来てないわよ。多分帰りは再来週になるから会えないと思うわ。だから手紙か何か残しておきなさい。

それとおじいちゃんに治療魔法かけてあげて。ネカネ姉さんに出張を伝えたせいでまた酷い目にあったみたい。

学校の保険医ですら匙を投げたわ」

……おじいちゃん、無茶しやがって。

それと、嫉妬は見苦しいよ、アーニャ。

「ふーん、そうなんだ。

まあ、村の皆の石化治療が終わった後で余裕があったら治療魔法をかけるよ。いつものことで慣れてるから、数日ぐらい放っておいても大丈夫でしょ。

多分持ってきたマグナム弾で大丈夫だと思うけどね」

「……二人とも。それは本当にいつものことなのかい？」

メルディアナ魔法学校では日常茶飯事だぜ！

さて、それでは早速村の皆を元に戻すとしますか。

スタン爺さん達と会うのは本当に久しぶりです。あちらからしてみたらそんなことないんでしょうが。

バキューーーン！　バキューーーン！

ビーム・マグナムを撃つ音がメルディアナ魔法学校の地下に響き渡る。

マグナム弾は、もとは魔法を封じ込めるためにつくられた特殊な弾丸。石化治療の魔法が放たれる。

このビーム・マグナムは味方には“治療魔法”を込めて撃ち、敵には“攻撃魔法”を込めて撃つ。撃つときの擬音は「バキューーーン！」。

目標を狙い撃つように、無駄弾は撃たないように、ゆっくりと狙いをつけるのがここでのたしなみ。

もちろん、射撃が苦手なのにガナーザ○ウォーリアに乗るなどといった、「必中」が使えるリアル系パイロットなど存在しない。といった具合に、正に絵に描いたような（ＯＯ（ダブルオー）的な）“スナイパーらしさ”が求められている。

バキューーーン！　バキューーーン！

「……ねぇ、ネギ。いくら治療魔法とはいえ、その銃で村の皆を撃つのやめてくれないかしら？
　というか説明も無しでいきなりぶっ放したときは本当に驚いたんだけど」

「石化を治してくれたのはありがたいんじゃがの。
　気づいたら、目の前にこちらにデカイ銃を向けた大きくなったぼーずがいる、という状況は理解できんかったわい」

　はいはい、あと十数人で村の皆全員を治せるから待ってくださいね。アーニャ、スタン爺さん。
　そんな“マァムがダイに向かってキアリクを込めた魔弾銃を撃ったときのポップ”みたいな顔はやめてください、傷つきますから。

　タカミチもそんな　ｏｒｚ　みたいな体勢とってると服が汚れますよ。
　なにブツブツと「……育て方間違った……」「……ネカネさんの馬鹿野郎……」「……様に似てると思ってたのに……」

みたいな独り言してるんですか？
あとでネカネ姉さんにチクリますよ。それに顔はともかく、性格は母親似だと思いますけど？

バキューーーン！　バキューーーン！

「便利なんだから良いじゃないですか。
魔法符なんかより汎用性高いですよ。魔法込めればいいだけだからタダですし、遠距離の相手にも効果あるし」

「確かに便利そうじゃが、銃で治療魔法を撃たれる相手のことも考えてくれんかのぉ。生きた心地がせんわ」

起きたばっかりのスタン爺さんの目が点になってましたもんね。
スタン爺さんが無事に回復したのを確認した後、続けて他の村の皆に狙いを定めたら、『アーニャ・フレイム・ナックル』食らったのはビックリしましたけど。
何もいきなり殴らなくてもいいでしょうに。

バキューーーン！　バキューーーン！

「……はい、これで全員終わりました。
改めて聞きますけど、村の皆は問題無いですね？」

「あ、ああ。治った人から上に待機している治療魔法使いに見てもらっているけど、特に異常は見られないそうだよ。
ただ、悪魔との戦いで怪我をしたまま石化された人達がいるから、その人達の治療があるけどね。
おめでとう、ネギ君。君は村の皆を無事に治せたんだよ」

「そうですか。お待たせしました、スタンお爺ちゃん。
遅くなりましたけど、ようやく皆を治すことが出来ました」

……あ、やば。何か涙でてきそうです。

「う、うむ。
儂からしたら、あの日のことはつい先程のことにしか思えんのじゃがの。ぼーず達がこんなに大きくなっていると月日が流れているということがわかるわい。
ありがとう、ぼーず。良く頑張ったな」

えへへ、褒められました。
スタン爺さんの顔が何故か引き攣りそうなのは気にしないことにしておきます。「やっぱりナギの子か」と小さな声で呟いているのも気にしないことにしておきます。

「それじゃ、上にいきましょうか。
パーティーの一つもできればいいんですが、全員の怪我の治療が終わるまでお預けです」

「そうじゃの。ここにいてもしょうがない。
腹が減ったから食事にでもしよう。そのときにぼーずが今までどんな風に暮らしていたか教えておくれ」

「終わったねー、アーニャ」

「そうね、ネギ。
まあ、魔法使いとしての最終修行は始まってすらいないけどね」

村の皆の石化治療が遂に終わりました。
怪我してる人が完治するまで最長で2週間ということなので、冬休みが終わる前に麻帆良に帰らなければならないから、パーティーなどはまた次の機会になりそうです。
夏休みに帰省したときでしょうか。
今は用意された部屋でダラダラとしてます。

「村の皆が無事に治って良かったねー、アーニャ」

「そうね、ネギ。
私のお母さんは石になってた知り合いに「老けたわね」って言われたせいで怒ってたけど」

石になっているときは歳をとらないからねぇ。
村に自分の他に子供がいなかったから大丈夫だったけど、ドラクエ？のように親と子供が１０歳差になったりする可能性があったんだよなぁ。
そういえば、この世界だったら石化魔法使えば、コールドスリープ技術なんかいらないんじゃね？

「明日はどうするの、ネギ？」

「うーん？　何だかお客様に会わなきゃ駄目らしいねぇ。
アーニャは日本に行く準備は出来てるのー？」

「大丈夫よ。というかアンタだらけ過ぎよ。
まあ、気持ちはわかるけどね」

「なーんか何にも考えられないし、動きたくないんだよねぇ。燃え尽き症候群ってやつかなー？」

「ちょ！？　アンタこれから学校の先生になるんでしょーが！？」

だいじょーぶ、だいじょーぶ。
明日になったら本気出すから。

眠くなってきたなぁ。でも確かに、これから原作がいよいよ始まるんですよねぇ。

麻帆良に帰ったら頑張らないと。

でも、今日ぐらいはゆっくりと休むことにしましょう。

あ、おじいちゃんに治療魔法かけてあげるの忘れてた。

……ま、いっか。

第十八話　石化治療（後書き）

石化治療編終了しました。
仕事が忙しくて今週一杯は無理かと思いましたが、思ったより早く仕事が一段落しました。
今週と来週が終わればゴールデンウィークなのですが、やっぱり仕事がこれから忙しくなりそうです。次回更新はゴールデンウィーク前を目指します。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第十九話　魔法世界

「久しぶりじゃの、ネギ。
石化治療魔法で村の皆を治すとは見事じゃ。背もこんなに大きくなって。
日本には“男子三日会わざれば刮目して見よ”ということわざがあるが、まさしくその通りじゃ」

「久しぶりも何も、今朝治療魔法かけてあげたでしょ？」

「ちょ！　いいから話をあわせてあげなさい！
おじいちゃんもいろいろ大変なんだから」

「そ、そうですよ、お兄様。
学校長は毎日激務をこなしておられるのでお疲れなのです」

ム、確かにそうですね。おそらく校長というのは激務なのでしょう。
数ヶ月前に比べ、大分やつれているし髪の毛も薄くなっています。
きっとどこかの英雄と同じ二つ名を持っている部下？との関係に悩んでいるのでしょう。

それと昨日アルちゃんいないと思ってたら、妹さんに会いに行ってたそうです。数日後には自分と一緒に日本へ出発しますからね。家族水入らずで過ごせたそうで何よりです。

そうだ、石化治療魔法の研究も終わったし、今度毛生え薬の研究でもしてみましょうか。

完成したらおじいちゃんだけでなく近衛学園長にもプレゼントしましょうかね。あの人も頭頂部にしか髪の毛無いし。

……オエ、学園長の頭が髪の毛に覆われるのを想像したら変なことになりました。

あの頭で髪の毛フサフサってどこのエイリアンだよ!?

「どうしたの？
顔色が急に悪くなったけど、治療魔法で疲れたの？」

「いや、何でもないよ、アーニャ。ちょっと変な想像が浮かんできただけだよ」

でも怖いもの見たさで作ってみたい自分がいます。
くそ、静まるんだ、自分の好奇心。たかが好奇心のために麻帆良にエイリアンを誕生させる気かぁっ！！！

「ア、アハハ……、
お久しぶりです、学校長」

「うむ、高畑殿か。久しぶりですな。
ネギがお世話になっているようでありがとうございます。コノエモンにも感謝しているとお伝えくだされ」

「はい。お伝えしておきます。
それでですが……」

「承知しておる。
既に隣の部屋でお待ちになっておられる」

……いや、一応作っておくべきか。何かあったときの切り札となるかもしれません。
いざというときは「僕の要求が受け入れられない場合、学園長の頭を髪の毛でフサフサにする！」とでも宣言したら、おそらく学園関係者は僕に屈服するでしょう。

どこの誰が好き好んでエイリアンを見てみたいと思いますか。

「お、お客様？
え、えと。私は席を外したほうがいいの？」

「ふむ、アーニャなら構わんと思うがの」

「大丈夫ですよ。別に秘密の話をするわけではないですから」

あ、でも木乃香さんから泣いて止めさせられそうですね。
そもそもいくらぬらりひょんとはいえ、木乃香さんの実？の祖父であるのですから木乃香さんにも害が及ぶ可能性があります。
木乃香さん泣かせるのは本意じゃないし、やっぱりやめておきましょう。

「それではネギ君、君に会いたいという人がいてね」

「うむ、それでは呼んでくるとしよう。
アーニャ、悪いが６人分お茶を用意してきてくれるかの」

「わかったわ、おじいちゃん」

む、考え込んでいたらいつの間にか話が進んでいました。
お客様ですか。誰でしょう？　正月にアルさんとガトウさんに会ったから、今度はラカンさんとか？

別室行きとなると思いましたが、おじいちゃんが茶を2つ持って隣の部屋に行き、入れ替わりにお客様が来ました。

コード〇アスのマオ！？　マズイ、心が読まれるぞぉーーー！！
！　じゃなかった。

「はじめまして。ネギ・スプリングフィールド君。
私はクルト・ゲーデルといいます。メガロメセンブリアの元老院

議員をやっているものです」

「ちなみにクルトは元“紅き翼（アラルブラ）”でもあってね。僕達の仲間であるんだ。確か前に少し話したよね。
もちろんナギとも知り合いだよ。」

「はじめまして。ネギ・スプリングフィールドです」

クルトさんでした。“紅き翼（アラルブラ）”関連と予想していたのは少し当たりましたね。
ま、そもそもラカンさんがこんなところに来るわけないですか。

「は、はじめまして！
ネギの幼馴染のアンナ・ユーリエウナ・ココロウァです」

「はじめまして。
ネギお兄様の使い魔であるオコジョ妖精のアルです」

「ハハハ、そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ、ミス・ココロウァ。
オコジョ妖精の使い魔ですか。知り合いに同じ“アル”がいるのでアルちゃんとお呼びしましょう」

さすがのアーニャも本国の元老院議員ともなると気後れしてる感じですね。

というか、そもそもこの人何でここに来たんだ？

「フム、ネギ君は落ち着いていますね。１０歳なのに立派なことです」

顔は笑っていますが、探ってくるような感じですね。原作同様に腹黒で何か企んでいるんでしょうか？

敵対するつもりはありませんが、舐められるのも困ります。駒にされる気はありませんから。

というわけでちょっと牽制しておきましょう。

「ありがとうございます。

ゲーデル議員のことは以前タカミチから話を聞かせていただきました。“紅き翼（アラルブラ）”の中でも年が近いから特に仲が良いそうですね。

……それとアルビレオ・イマさんからもいろいろと聞きました」

ヒキッ！　そんな擬音がしてクルトさんの顔が引き攣りました。
アルさんから、ということが嫌だったんでしょう。

フハハハハ、正月のときに魔法世界編のためにといろいろアルさんから聞いてるんですよ。
なにせアルさんは小さいときのクルトさんを知っていますからねぇ。

いくら戦争孤児で天才児とはいえ、子供らしい微笑ましい出来事や失敗談が無いわけがありません。
しかも悪戯好きなアルさんです。もちろん小さいときのクルトさんやタカミチもその悪戯の被害にあっています。

「ちなみにタカミチの小さいときの話もいろいろと聞いてます」

タカミチの顔色も変わりました。アーニャは何のことかわかっていないようでハテナ顔ですが。

「……ア、アハハ。どんな話を聞いたのか気になりますね。ま、それは次回の話の種にでも。
立ち話もなんですから座って話しましょう。短い話というわけじゃありませんので」

ハッハッハ、顔が引き攣ったままですよ、クルトさん。

「しかし、元老院議員ともあろう方が僕に一体何の御用でしょう？別に特別なことはしていないと思うのですが」

「何を言ってるんですか、ネギ君は。昨日、伯爵級悪魔によって石化された人達を治療したばかりでしょうに」

「ええ、それは確かにそうなんですが。ウェールズに帰ったら来客があるとはクリスマスのころから聞いてました。もっともお客様がゲーデル議員とは知りませんでしたが」

「……ま、確かに。私が来たのは石化治療とは別件です。別に悪い話というわけではありませんので安心してください。

それとネギ君に会ってみたいというのはありました。タカミチからは聞いていたのですが、結局今になるまで会う機会がありませんでしたからね。

ハハハ、何でも“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”から「お母さんと呼んでくれ」と言われて困っているらしいですね」

タカミチ!?　何てことを言いふらしているのですか!?

それとエヴァさんとの関係を把握することが目的ですかね？

将来、自分を英雄として祭り上げるならエヴァさんは邪魔になってしまうでしょう。

ましてや“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”をお母さん呼ばわりしてたら英雄になんかなれるわけありません。

「……ええ、まあ。

父との関係からお世話になっています」

「ネギ君も大変ですねぇ」

「ええ、まあ。

でも、さすがに見た目同い年のエヴァさんを母と呼ぶ気はないですよ。

母ではなく、恋人としてなら話は別ですけどね」

あの人、自分の好みにジャストミートしてます。
今のところエヴァさんとアスナさんが好感度ＴＯＰ２です。
なんかアーニャが「ブフォッ！」と紅茶を噴き出しましたが無視です。
アーニャの対面に座ってたタカミチが紅茶まみれになりましたが、それも無視です。

「！　……ほ、ほほう。
ネギ君はもう人生のパートナー探しをしてるんですか。少し気が早くありませんか？」

「あら？　お姉さまが増えるのですか？」

「ハハハ、そこまで深く考えているわけじゃありませんよ。それにエヴァさんは父一筋でしょうし。
でも、ウチの駄目親父ながら、あそこまで深く想われるのはうらやましいと思いますけどね。
自分もあんな風に女性から想われるような男になりたいと思います。

はい、タカミチ。このハンカチ使っていいよ。
アーニャもそんなはしたない事しないでよ」

「ア、アンタがいきなりとんでもないこと言うからでしょーがっ！！！
アルちゃんも変なこと言わないの！！！」

「ハ、ハハハ……。大人びていてネギ君は１０歳とは思えませんね。
まあ、何かあったら私にも言ってください。できる限り力になりますよ」

「はい。そのときはよろしくお願いします」

「さて、そろそろ本題に入りましょうか。
私がネギ君と会うために現実世界までやってきたのは、ネギ君に渡すものがあるからなのですよ」

「渡すもの……ですか？」

何でしょう？　タカミチがニコニコ笑っているから変なものじゃないのでしょうが。
クルトさんが持ってきた鞄から一枚の紙を取り出してますが、…

……ラカンさん持ってた『闇の魔法（マギア・エレベア）』習得用の巻物とかじゃないですね？

「それでは改めまして。ネギ・スプリングフィールド君！」

「はい」

巻物じゃない、ただの一枚の分厚い紙ですね。いったいなんなんでしょう？

「君は“魔法世界崩壊を回避するための火星－水星間魔力輸送プロジェクト”に多大な貢献をしました。
よってその栄誉をたたえ、ここに賞状を送り功績をたたえます。
メガロメセンブリア元老院議員　クルト・ゲーデルより

はい、おめでとうございます。これが表彰状です」

……“魔法世界崩壊を回避するための火星－水星間魔力輸送プロジェクト”ォ？

「あ、ありがとうございます。
と言いたいところなのですが、自分にはさっぱり事情がわかりません」

「そ、そうよ。
魔法世界崩壊って何よ？　ネギがいつそんな凄いことしたのよ」

「落ち着いてください。これから説明しますので。
というよりタカミチから説明されてないのですか？」

……ああ、そういえば正月にそれらしきことを言われた気がし

ますね。

「しょうがないだろ。まだ一応機密だったんだ。
公式発表されるまでネギ君に言うわけにはいかないだろう」

「いや、確かにそうだが。
どうせ今日表彰するとわかってたんだから、前もって言っておいてもいいじゃないか」

おまえたちは何言ってるんだタカミチにクルトさんーーッ！！！
言い訳はともかく理由を言えーーーッ！！！

「いや、スイマセン。
まず魔法世界崩壊についてから説明しますね。
実は魔法世界崩壊は２０年前の“大分烈戦争（ベルム・スキスマティクム）”にも関係してくるのですよ」

クルトさんとタカミチから説明してもらいました。
魔法世界は火星にあること。その魔法世界は火星の魔力枯渇により、いずれ崩壊してしまうこと。“大分烈戦争（ベルム・スキスマティクム）”が起こった理由。“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”のことなどなど。
もうネタバレのオンパレードです。

「それで魔法世界の崩壊は避けられないため、クルトはせめて幻想ではない人間だけでも生き延びさせようと対策を練っていたんだ」

「ええ。
しかし、平和裏に現実世界に６７００万人もの人間を移り住ませるなんてのは不可能です。そんなことしたら現実世界と戦争になるでしょう。
また、いくら幻想とはいえ、他の１０億以上いる人達を見捨てることもできませんでした」

「そのときだよ。５年前にネギ君が言ったことを覚えているかい？」

「いえ、そんな昔のことは良く憶えていないです」

「ハハハ、まだ4歳だったから無理もないね。ネギ君はね、

「火星に住めなくなったら、水星か金星に住めばいいじゃない」

って言ったんだよ」

……ッ!?　確かにそんなこと言った覚えがあります!!!

「え、えーと、もしかして僕が宇宙についての本を読んでいたときのですか?」

「思い出したのかい?　そのときだよ。

ネギ君が火星のことについて書かれていたページを読んでいたね。

そして、“火星は地球が人でいっぱいになったときの移住先になりうる可能性を秘めている”、と書かれていることから話が続いてね。僕が

「地球が人でいっぱいになって、火星も人でいっぱいになって住むところがなくなったらどうする?」

と聞いたんだよ」

「……その答えが「水星か金星に住めばいいじゃない」？
ネギ、アンタって大物なの？　それともただの馬鹿なの？」

「で、でもアーニャお姉さま。
それで魔法世界の崩壊は避けることができたのだから、凄いことだと思いますけど……」

ありがとう、アルちゃん。
でも、自分と目を合わせてその台詞を言って欲しかったな。というか馬鹿ということを否定して欲しいんだけど。

「まあ、実際に水星や金星に移り住むことはできませんけどね。できるかもしれませんが時間が足りません。
しかし、私達はネギ君の言葉がキッカケで気づいたのです。
“魔法世界が火星の魔力枯渇により崩壊してしまうのなら、火星に魔力を足せばいいではないか”、と」

凄い力技ですね。「パンが無ければ、パンを持ってくればいいじゃない」ぐらい力技です。

そんなんできたら誰も飢え死にしないんだよっ！！！

「そして研究を重ね、遂に火星－水星間で魔力輸送できるゲートを開発することができました。
今はまだ魔法世界崩壊に対処できる規模ではありませんが、数を増やすなり、もっと大型ゲートにするなり手はあります。
おそらくあと数年で魔法世界崩壊を防げるだけの魔力を確保できるでしょう」

「まあ、あくまで延命処置にすぎないけどね。
しかし、水星の魔力を使えば多分千年単位で延命可能だ。他に金星もあるし。
その間に抜本的な対策を考えるさ」

千年あれば十分すぎるでしょうねー。

「というわけで、これがその表彰状です。
ネギ君は歴史に残る事件を解決するキッカケを作ったんですよ。
誇っていいことです」

うわぁ。魔法世界編もいつの間にか終わってたよ。

「さて、ネギ君はこれで“魔法世界崩壊の阻止”と“伯爵級悪魔による石化の治療”という2つのことを成し遂げました」

すいません。

“魔法世界崩壊の阻止”は何でもない雑談で、“伯爵級悪魔による石化の治療”はただの冗談だったんですが。

「片方だけでも凄いのに、一気に2つの偉業を達成するなんてなんて前例がないよ。

おそらく10歳という最年少の“偉大な魔法使い（マギステル・マギ）”の誕生となるね」

まだ、“先生になる”という魔法使いとしての修行は始まってすらいないんですけど……。

しかも“魔法世界崩壊の阻止”はアイディアだけで自分何もしてないですよね。

「……そこで少し聞きたいのですが。
先ほどの説明に出てきた“アリカ・アナルキア・エンテオフュシア”という女性についてどう思いますか？」

「？　どう思うか、ですか？　それは具体的にどういう意味でしょうか？
顔はまほネットで写真見たことあるから美人だと思いますけど」

母親のことを聞く？
アリカ姫のことは確か一人前になるまで話さない約束を“紅き翼（アラルブラ）”の間でしていたのでは？

「そういうことではなくて、……そうですね。
世界を救うために自らの国を滅ぼした、ということについてはどう思います？」

「いや、世界が滅びたら、自らの国も結局滅びますよね。他に手がなかったのならしょうがないのでは？
あくまで、その空中都市オスティアの墜落の被害にあっていない

人間の考えることですけど」

「それでは“災厄の魔女”と呼ばれていることについてはどう思います？」

「政情不安を鎮めるためのスケープゴートという役割を受け入れて処刑されたのは駄目だと思います。

助かったウェスペルタティア王国の人達のことを考えるなら、何としても生き残るべきだったと思います。今でも難民として苦労している人達を助けるために何としても。

メガロメセンブリア元老院に“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”の黒幕として処刑されそうなら無実を証明し、むしろ冤罪をかけられそうになったのを逆手にとって難民の人達を保護させるよう、努力すべきだったと思います」

「……ネギ君は結構あくどいのですね。

要するに“冤罪かけたのをばらされたくなかったら、難民を保護しろ”と元老院を脅迫すべきだったというのですか？」

「まあ、さっきの説明を聞いただけでの感想です。

実際にはそんなうまくいかないとは思いますから、子供の戯言と聞き逃してください」

「いえ、なかなか興味深い話でしたよ。

ネギ君は……、性格はあまりナギに似てないのですね」

「どうなんでしょう？　実際に会ったことは一度しかないから自分としてはわかりません。
まあ、周りから聞いた話からすると、確かに似てないかもしれませんね」

「いや、僕からすると結構ナギに似てると思うよ……」

何でたそがれているんですか、タカミチ？
自分のどこがあの駄目親父と似てるというんですか？

「しかし、何でそんなことを聞くんですか？
もしかして「9を救うために1を切り捨てられるか？」という、
“偉大な魔法使い（マギステル・マギ）”になるための心構えですか？」

「い、いや、そういうわけじゃないんだけど。
クルト、もうはっきり言ってもいいだろう？」

「そうだな。ネギ君なら大丈夫だろう」

え？　えええ？　バラすの？　アリカ姫が母親ってことバラすの？
どういうこと？　まだ一人前になってないですよ？

「……実は、ネギ君。
君のお母さんは、先ほどから話に出ていた“アリカ・アナルキア・エンテオフュシア”という人なんだよ」

バラしちゃったよ、タカミチ。
ちょっと待って。どういうこと？　自分が一人前になるまで話さない約束でしょ？

えーっと。何て答えよう？
どういう状況か全然わからない。とりあえず茶を濁しておきますか。

「そ、そうなんですか？
あの“二股眉毛”の人が僕のお母さんなのですか？」

何アホなことを言ってるんだ、自分はーーーーー！！！！！！
駄目だ。自分でもテンパリすぎているのがわかります。

ああ！　タカミチとクルトさんが崩れ落ちた！
アーニャとアルちゃんはわけもわからずポカンとしている！

駄目だこの混沌、早く何とかしないと！

と。その時、

「アリカ殿ーーーーー！！！！！」

と、ガラスが「ガッシャーーーン！」と割れる音と共に、おじいちゃんの叫び声が隣の部屋から聞こえました。

って、えええぇぇーーーーっ！？

「な、何事ですか！？　いったい！？」

「ネ、ネギ君っ！！！
実は隣の部屋にそのアリカ様がいたんですよっ！！！」

「実はアリカ様は処刑されるときにナギさんに助けられて、それからナギさんと結婚して君が生まれたんだ！

さっきの話にあった元老院と“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”のせいで君と離れ離れにならなければいけなかったんだけど、その元凶を先日叩き潰し終わったから君に会いに来たんだよっ！！！」

やべぇっ！！！

母親の目の前で“二股眉毛”呼ばわりしちゃった！！！

隣の部屋に踏み込むと割れた窓と、そこから外を見ているおじいちゃんがいました。外で土煙が舞っているのが見えます。

窓ブチ破って外へ出たんですか！？

そうですよね。

いくら一人前になるまで話さない約束してあっても、会えるようになったらそりゃ会いますよね。

元老院も“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”も既に叩き潰しましたもんね。もう障害は何も無いですよね。

って、そんなこと考えている暇はありません。

急いで追いかけないと！

第十九話　魔法世界（後書き）

前話ではアルちゃんのこと素で忘れてました。ゴメンナサイ。
それとコー○ギアスのマオとクルト（悪役モード）って顔似てません？　性格は似てませんけど。

むしろ似てたら怖いです。

クルト「私ねぇ、現実世界に家を建てたんですよ。
白くて、奇麗な、とても大きな家。
だけど、現実世界に行くにはゲートを通らなくちゃいけないんです。
でも、アリカ様をゲートに持ち込むには大きすぎます。
だから、コンパクトにしてあげます。
これなら、あっという間ですよ」

とか怖すぎるｗ
何てこと書いてるんだ、自分はｗ

最終話も連続更新します。
“二股眉毛”？　私は謝らない。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

最終話　ハッピーエンド

「やあ、ネギ君久しぶりだね。」

「どうも、久しぶりですタカミチ。二月振りぐらいですか」

「そのぐらいになるね。何の本を読んでいるんだい？」

「宇宙についての本ですよ。今は火星の項目を読んでます。
火星は地球が人でいっぱいになったときの移住先になりうる可能性を秘めている、とか書かれててますね」

「……4歳なのに難しい本読んでるんだねぇ」

「いえ、それほどでも。
でも実際どうなんですかね？
本当に火星なんかに人が住めるようになるんでしょうか？」

「え？　いや、……ハハハ。どうなんだろうね？
何百年後かには住めるようになってるかもしれないよ。

それに気づかないだけで火星人がもう住んでるかもしれないさ」

「タコみたいな火星人ですか？　会ってみたいとは思えませんね。
それに何百年後に住めるようになっても、どうせまた火星も人で
一杯になっちゃうんじゃないでしょうか？」

「そうだね。人はどんどん増えていくから……。

そうなったらどうする？
地球が人でいっぱいになって、火星も人でいっぱいになって住む
ところがなくなったら？」

「火星に住めなくなったら、水星か金星に住めばいいじゃない」

「……その発想はなかった」

「……我が子ながら突飛な発想をする子じゃの」

「ハハハ、確かにネギ君はときに誰も思いつかない発想をしますね。石化治療魔法の件も、石化させた当の悪魔を召喚して解呪法を教えてもらう、なんてことは他の誰も考え付きませんよ」

「なるほど、変わった発想だ、タカミチ。しかし、その変わった発想をキッカケとして、現実世界に迷惑をかけずに魔法世界の生き物全てを生き延びさせることが出来るんだ。ネギ君には感謝すべきだよ」

「まだじゃろう、クルト。まだ間に合うかどうかはわからぬ」

「は、確かに。しかし、ネギ君の発想からヒントを得ることができ、研究の結果、水星の魔力を使えば火星が延命可能なことがわかりました。

ゲートを火星と水星との間で繋ぎ、魔力枯渇寸前の火星に水星の魔力を流し込む。言ってしまえばこれだけですからね。
まあ、魔力のみ輸送可能なゲートを繋ぐのには苦労しましたが、それもあと2、3年あれば完成するでしょう。
魔法使い人口６７００万人のメガロメセンブリア連合は伊達じゃありませんし、アリアドネーのセラス総長の協力も確約してあります」

「そして、水星の魔力を使いきるまでに地球に魔法世界のことを知ってもらい、魔力枯渇の心配がない現実世界の移住先を見つける。
もしくは現実世界の人間と魔法世界の人間の婚姻政策をとり、純粋な魔法世界人をいなくする。片親が現実世界の人間なら、ネギ君のように現実世界の人間となりますからね。
まあ、水星の魔力を使い切るまでに千年単位の時間があるということなので大丈夫でしょう。他に金星もありますし。
その頃には人類は宇宙に進出しているでしょう」

「じゃが、のんびりすることは出来ぬ。水星をこの火星のように食い潰すことは断じてしてはならぬのじゃ。
といっても、焦って現実世界と事を構えるようなことだけは避けなければいかないがの」

「ご安心ください、アリカ様。
元老院の老害共はすべて牢に叩き込みましたし、ヘラス帝国もテオドラ皇女殿下のおかげでこのプロジェクトに賛成してくれています」

「ふむ、今度テオドラに礼を言わなければな」

「問題は魔法世界の皆がこの現実を受け入れることが出来るかどうかですか」

「焦ることはないぞ、タカミチ。そのためにも元老院を掃除したのだからな。
もちろん“紅き翼（アラルブラ）”の面々にも手伝ってもらう。英雄が話せば受け入れる可能性も高まる。お前もしばらくは客寄せパンダになってもらうぞ」

「……しかし、アリカ様の名誉挽回は本当に後回しにしてよろしいのですか？」

「くどいぞ、クルト。
私のことなどより、今はオスティアの民を含めた魔法世界に生きるものを優先すべきだ。
そのために余計な混乱は起こすべきではない」

「そうだぞ、クルト。
それにアリカ様の気持ちも考えて差し上げろよ。ようやくネギ君に会えるんだぞ」

「……そうじゃな。もしかしたら私は早くネギに会いたいだけかもしれんの。
名誉回復などどうでもいい。ただネギ会いたいだけなのに、魔法世界のことを言い訳にしているだけじゃ」

「それは……、仕方がないではありませんか。
ネギ君を危険なことから離すために、お産みになってすぐネギ君と離れなければいけなかったのです。母君として当然の気持ちでございましょう。
反アリカ様の元老院議員や“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”がいなくなった今、もう何も憚ることはありません」

「そうです。せめてネギ君の麻帆良での修行が終わるまでは一緒にいてあげてください。
火星－水星間ゲートが完成後、今までの真実とネギ君のおかげで魔法世界が救われることを発表すれば名誉挽回どころの騒ぎではなくなります。
それからはむしろ、急がしすぎて母子としての時間がとれなくなるかもしれませんからね。ゆっくり出来るうちにゆっくりしてください」

「……母か。ずっと放っておいてしまった私に、ネギの母と名乗る資格はないというのに。
麻帆良でネギの面倒を見てくれている“闇の福音”のほうがネギの母を名乗る資格があるじゃろうな」

「アリカ様っ！」

「そんなことありません！
大人びた子だといえ、まだネギ君は9歳です。まだまだ母親が必要です。
それに僕はネギ君の口から「母親に会ってみたい」という言葉を聞きました」

「……それは母親が“災厄の魔女”と知らないからであろう。

いや、わかっておる。
まず何よりも先にネギに会わなければならぬ。そしてずっと放っておいたことは謝らなければ。
もしかしたら許してくれぬかもしれぬし、“災厄の魔女”が母親だということを拒否するかもしれぬ。ネギにはその権利がある。
だが、そうだとしても私のほうからネギを避けていいわけではない」

「大丈夫ですよ、アリカ様。ネギ君はそんな子じゃありません。
もうすぐです。“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”相手の事後処理に追われていたナギももうすぐ余裕が出来るでしょう。
そうすれば親子三人で暮らすことが出来ますよ。
それに母親が“災厄の魔女”でも大丈夫です。従姉に“破壊の魔女”がいますから」

「……タカミチ、それは慰めにならんぞ」

「フ、まあネギのことはともかく。
ナギのことについては“闇の福音”と決着をつけねばならぬがの。
ネギについては何か言う資格は私になくとも、ナギのことについては何か言う資格は私にあるのじゃ」

「（……タカミチ、麻帆良学園大丈夫か？）」

「（……学園長に結界強化するように進言しておく）」

「えーっと、それでは明日、僕とクルトが隣の部屋でネギ君に会います。
アリカ様はこの部屋で現在のネギ君をご覧ください。それとなくアリカ様の事情を説明して、アリカ様のことをどう思うかも聞き出しますので」

「それと表彰状も渡さなければいけませんね。ネギ君まで英雄として祭り上げるようなことにするのは不本意なのですが。
まあ、本人が知らずとも、ネギ君が魔法世界崩壊の回避に多大な貢献をしたということは事実なのですし、今回の石化治療の件も別枠で何かしないといけませんね。
正直、英雄に祭り上げるようなプロパガンダを行わなくても、事実を発表するだけで十分な気がしますよ。

ああ、それにしても楽しみです。タカミチと違って私はネギ君と直接会ったことはありませんでしたからね。
私はこのために元老院議員の特権を使って、無理矢理地球まで来たのです」

「頼むぞ。
……もしもネギが私に会いたくないようだったら、私のことは死んだことにしておいてくれ。

それとクルト。公私混同はやめるのじゃ」

「も、申し訳ありません」

「ハハハ、大丈夫ですって。アリカ様。
それよりネギ君と会うための心構えをお願いしますよ。ネギ君のことは写真でご覧になったでしょうが、近くにいるとなるとまた別でしょう。
御対面のときに、感動のあまり何も話せなくなる、なんてことのないようにお願いします」

「わかっておる。覚悟も出来ている。
何で放っておいたのかと罵倒される覚悟も、“災厄の魔女”が母親ということを拒否される覚悟もな。

……だが、それでも許されるのなら、ネギの母としてありたいのじゃ」

逢いたい。逢って抱きしめたい。
もうあの子は10歳になるのか。手離したときはまだ小さな赤ん

坊だったのに。

私達のせいで寂しい思いをさせてしまった。辛い目にあわせてしまった。

預けていた村が元老院の手によって襲撃され、ナギが間一髪のところで助け出したとき、あの子はただただ震えていたという。

私のせいだ。

“災厄の魔女”である私が生きていることを望まず、あの子が私の子であることを許容できなかった元老院が村を襲わせた。

私の子であるということだけで、あの子は故郷を滅ぼされた。

もし、あの子が事実を知ったらどう思うだろうか？　私のことを憎む？　いや、タカミチの話から聞いたあの子の性格だと、自分自身を責めるだろう。

「僕のせいで、村の皆を巻き込んでしまった」、と。

そんなことはないというのに。全ては私達のせいだ。あの子に一切責任はない。

幸せだった。

ナギに救い出され、ナギと一緒になった。

王家の人間としてではなく、一人の人間として。ナギと夫婦として穏やかというには騒がしい、それでも幸せな時を過ごすことが出

来た。

幸せだった。
あの子を産むことが出来た。
初めてあの子を抱き上げたときのことは今でも憶えてる。ナギに抱き締められながら、あの子を胸に抱いているときはもう何も他にいらなかった。

私とナギとあの子の3人で幸せになれると思っていた。だが、その幸せも長くは続かなかった。

英雄である“千の呪文の男（サウザンドマスター）”と呼ばれたナギに子供が出来れば、否が応でも注目の的になる。それと同時にあの子を産んだ私にも注目が集まるだろう。
実際、あの子が生まれたのを知った、事情を知る元老院議員が不穏な動きを見せたらしい。

当然だ。
死んだはずの“災厄の魔女”がナギの子供を産んだことなど、彼奴らにとって衆目に知られてはいけないことなのだから。

また、ちょうどその頃に、生き残っていた“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”の残

党が何か企んでいることも判明した。
“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”との戦いになったとき、あの子はナギにとって効果的な人質となっただろう。

魔法世界の崩壊が迫っていることもあった。
崩壊の危機のときにはあの子は大人になっているだろう。
下手をすればあの子は英雄として元老院に祭り上げられ、魔法世界の崩壊に立ち向かうことになるかもしれない。だが、これは私達の世代で解決すべきことなのだ。

極めつけは、あの子が“完全魔法無効化能力”を持って生まれてきたことだった。
ナギがあの子をあやそうとして浮遊術をあの子に使ったとき、魔法が無効化されてしまったのだ。

あの子は私の子。つまりウェスペルタティア王家の血を引いている。王家の血筋にしばしば生じる“完全魔法無効化能力”を持つ特別な子供、“黄昏の姫御子”となる可能性はあったのだ。
だが、私は自分の子供が“黄昏の姫御子”として生まれてくるなんて考えてもいなかった。

絶望した。
アスナがどんな扱いを受けていたか知っていた私は絶望の淵に立

たされた。
アスナのことを放っておいた罰だとでもいうのだろうか。あの子に何の罪があろうか。私を罰せればいいのに。

ああ、これは私にとっての最大級の罰か。
自分の子が不幸になるのが、母にとっての最大の不幸だ。

このままではあの子は元老院に利用されるか、それともアスナのように“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”の目的のために魔法世界を滅ぼす礎とされるかのどちらかだった。
そんなことはさせない。あの子をそんな目にあわせてたまるものか。
アスナのことは放っておいたのに、自分の子供がそういう目にあうのは嫌なのか。自分で自分の浅ましさに吐き気を感じた。それでも私はあの子を守る。私はあの子の母親なのだから。

もう私もナギもあの子の側にはいれなかった。
私が側にいると元老院からの干渉があるかもしれない。ナギが側にいると“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”との戦いに巻き込むかもしれない。
ナギと相談した結果、ナギの故郷の村に預けるほかに手立てはなかった。

それでもあの子が隠れていられるのは１０年ぐらいだろう。

ナギの息子だ。魔法に関わらせないなんてことは出来ない。そんなことを言ったらそれこそ元老院から干渉があるだろう。

あの子が一人前になる前に、あの子が世に出てくる前に、あの子の“敵”を滅ぼさなければならない。

私の子であるあの子を許容出来ない元老院と“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”を滅ぼさなければならない。

ああ、何て可哀想な子なのだろうか。

私達のせいで、私達の戦いに巻き込んでしまった。生きていくのに余計なものを背負わせてしまった。

まだ私達の顔も憶えていないだろうに、独りにしてしまった。

泣くのはまだ早い。

あの子が私達のことをどう思うかはわからない。それでも私はあの子を守る。私はあの子の母親なのだから。

恨まれるかもしれない。

憎まれるかもしれない。

それとも何とも想ってくれないのかもしれない。

私達があの子の側にいないのは事実なのだから。捨てたと思われ

ても仕方あるまい。

世界を救うために自らの国を滅ぼした私だが、今は違う。
今の私はあの子の母親だ。

あの子を守るためなら何でもしよう。

あの子を守るためならあの子に恨まれよう。

あの子を守るためならあの子に憎まれよう。

あの子を守るためならあの子に何とも想われなくとも構わない。

あの子のためなら“本当の災厄の魔女”にさえなろう。

あの子を守るためなら世界さえ滅ぼそう

そして、遂に終わった。

クルトやガトウ達のおかげで元老院の老害共を排除できた。
ネギの故郷を襲わせた証拠も見つけた。とりあえず牢屋にぶち込んでおいたが、そのうち魔法世界全域に発表しようと思う。
あの子に手を出すとは大それたことをしてくれたものだ。自分のしたことを思い知るがいい。

“赤き翼（アラルブラ）”も再集結したので“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”を壊滅できた。
大戦時にも戦ったらしき首領格の白髪の少年を、１０年前にイスタンブールで倒した。ナギとラカンの２人でフルボッコにしたらしい。卑怯とは言うまいな。
あとはプチプチと残党を潰していくだけだった。

何よりもあの子のおかげで“魔法世界の崩壊”すら回避できることになった。

これであの子に逢うことができる。親子として過ごすことができる。あの子とナギと私の３人でまた暮らすことができる。
けれど、あの子は私のことをどう思うのだろうか？

タカミチから聞いたところによると、ナギのことはだらしのない駄目親父と思っているらしいが、別段嫌っているわけではないようだ。

従姉であるネカネの影響か女性に優しいらしく、“闇の福音”に対するナギの所業を良く思っていないが、それでもナギのことはよく周りから話を聞いていたようだった。

けれど、私のことは？

母親のことも周りに聞いていたらしいが、私が母であることをばらせないために口止めするしかなかった。

いくら聞いても言葉を濁されていたためか、そのうち聞くことをやめたらしい。

恨んでいるのだろうか？　憎んでいるのだろうか？　何とも想ってすらくれないのだろうか？

あの子の側にいなかったのは事実だ。あの子のためだといえ、独りぼっちにさせたのは事実なのだ。

逢いたい。逢って抱きしめたい。

でも、それ以上に拒絶されるのが怖い。

それでもあの子に逢わなければならない。

ナギは着いて来てくれると言ってくれたが、事後処理がまだ終わってないので断った。何より、母としての義務を放棄した私が一人で決着をつけなければならないことなのだ。

落ち着け。

今はあの子がどういう子なのか知るのが先決だ。クルトとタカミチが隣の部屋で話す。ただし、その結果次第では、私はあの子に逢えない。

その覚悟はあるが、体の震えが止まらない。

それでも許されるならあの子の母でありたい

全てはあの子の心に任せよう。何で放っておいたのかと罵倒される覚悟も、“災厄の魔女”が母親ということを拒否される覚悟もした。

ああ、願わくば、あの子が“お母さん”と呼んでくれますように……。

「それでも“二股眉毛”などと呼ばれる覚悟はしておらなかったのじゃーーーーー！！！！！」

“あ……ありのままに起こった事を話します！

「僕は「もうすぐ原作が始まる」と覚悟を決めていたら、
いつのまにか原作が終わっていました」

な……何を言っているのかわからないと思いますが、
僕もどういうことなのかわかりませんでした。

頭がどうにかなりそうでした……。

「テンプレ通り」だとか「原作ブレイク」とかそんなチャチなもんじゃあ、断じてありません。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わいました……”

じゃなくて、

「待ってください！！！　お母さーーーん！！！」

あ、“お母さん”という言葉に少し反応しました。
ってか足速すぎです。王家の魔力をフルに使って逃走されると追いつけません。
くそっ、面倒臭いな。あの二股眉毛。

「ええい！　しょうがない！

ラス・テル・マ・スキル・マギステル　『ユニコーンガンダム』！

そしてＭＭ（マギステル・マギ・デストロイヤー）－Ｄシステム発動！！！」

自分の体に魔力を纏って“ユニコーンガンダム”となり、一気に突撃します！！！
“ガンダムＵＣのＭＳ（モビルスーツ）の再現能力”を作中で最初に使うのが母親との追いかけっこというのが情けないです。

……原作終了ってことは、もしかして“ガンダムＵＣのＭＳ（モビルスーツ）の再現能力”を作内で使うのはこれが最初で最後ですか！？

「くるでない！　こんな二股眉毛を追いかけてくるでない！！！」

「いいから待って下さい！！！

……捕まえたーーーーー！！！！！」

ガシッ！　ギャリギャリギャリ

もみじおろし!?

やば、捕まえたはいいけど止まれずに押し倒してしまいました。
その際お母さんと地面で擦れる音が物凄い勢いで聞こえてきましたが、……あ、魔力障壁で無事でした。

流石はウェスペルタティア王家の魔力。
あやうくお母さんの顔が見れなくなるところでした。危ない危ない。

「ぅぐっ、見ないで、お願いだから見ないで……。
こんな二股眉毛なんて見ないで……」

顔を両手で覆って、泣きながら呟きつづけています。
手を顔から剥がそうとしても王家の魔力を使ってブーストしてい

るのか、全然剥がせません。今の自分はＭＭ（マギステル・マギ・デストロイヤー）ＩＤ発動で筋力Ｂ＋なんですけど。

……王家の魔力マジパネェっす。

このままずっとお母さんの顔が見れないかもしれません。
はあ、何とか捕まえることが出来ましたけど、どうしましょ？

「ネギくーーーーん、アリカ様ーーー！！！」「アリカ様ーーーーーーーー！！！」

ようやくタカミチとクルトさんが追いついてきました。
どうすればいいんだ、この状況？　とりあえずお母さんを宥めますかね。

「『解除』、……ふぅ。

えーっと、はじめまして？　ネギです。
とりあえず顔を見せてくださいよ、お母さん」

……。

……。

……こっち見ろや。

駄目だこの人、泣いてるばかりで全然こっち見てくれません。

原作と剥離しすぎなんですけど、これから修正効きますかね？
無理ですね、そうですね。

これから学校戻って、アーニャ達に事情説明して、麻帆良に帰ってエヴァさんに事情説明して……。
忙しくなりそうです。教師もやんなくちゃいけないし。

……もう……諦めちゃってもいい……かなァ……。

いいや、今考えるのよしましょう。
今はお母さんの胸に顔をうずめましょう。

うん、それがいいです。

しかし、いくら並行世界とはいえ、ここまで違うとは思ってませんでしたよ。
テンプレ通りに進めるとかそんな次元の話じゃないですね。
自分なんかが主役になろうと考えたのが間違いなのです。
まあ、これはこれでハッピーエンドなんでいいでしょう。

この先は原作とは全然違うストーリーが続いていきますけど、自分の話はひとまずこれにて終了。

それでは皆様、いつかまた会う日まで……。

最終話　ハッピーエンド（後書き）

この世界のネギにはまだ原作と違うお話が続いていきます。
それは「小ネタ」として台本形式で少しばかり投稿しようと思います。

“二股眉毛”に関してはウィキにこれを書いた人を責めてください。作者はこれをみてからアリカ姫のことを二股眉毛としか見れなくなったのです。
いや、キャラとしては大好きです。ネギがポヨから“幻灯のサーカス”で見せられたときのアリカ姫なんか滅茶苦茶萌えました。
ただ、出番のたびに眉毛を確認してしまうようになったのです。

皆様いかがでしたでしょうか？
初投稿ゆえに至らないところが多々あったと思いますが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

元から初作品は短めにするつもりでした。広げすぎた風呂敷を畳めなくなるのを防ぐためです。
プロローグや設定を抜かして全２０話、長くもなく短くもなくといったところだと思います。
今まで考えていたネタをツラツラと書き殴っていったため、これ以上続けたら収拾がつかなくなりそうでした。

この作品は最終話のアリカの独白を除き、全てネギの一人称視点で進めていきました。
次回作は主人公以外のキャラの視点もいれた、二人称、三人称視点にチャレンジしていきたいと思います。
あとバトル要素もチャレンジしたいと思います。

それとせっかく作った設定が全然使われませんでしたので、次回作でも使っていこうと思います。
というか、この世界のネギを“強くてニューゲーム”で原作世界に放り込もうかと思っています。

ここまでのお話を“魔法先生ネギま?編”として第一章にし、第二章として“魔法先生ネギま!編”を作っていきたいと思います。

ハーレムとか書いてみたいです。この作品の記憶有り成長アスナの評判が良かったから、これもまた次章で使おうかと思います。

……べ、別に新たに設定を考えるのがめんどくさいとからじゃないからねっ!!!

これからは更新速度が落ちていくと思いますが、それでも週一か週二更新は目指します。
それでは皆様、いつかまた会う日まで……。

御意見・御感想をお待ちしております。

今回の反省点
フェイト殺っちゃってからどんどんずれていきましたｗｗｗ

「火星に住めなくなったら、水星か金星に住めばいいじゃない」

作者なりに考えた斬新（笑）な方法だと思ったのですがどうでしょうか？
まあ、移り住むのは難しいだろうから、魔力だけの移動となりましたが。
火星の魔力が枯渇したのなら、水星か金星の魔力を使えばいい、というエコ精神にたいして真っ向から喧嘩売ってる考えです。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

その後の話・小ネタ

【昼ドラ注意報？】

エヴァ「……。

……。

……」

アリカ「……。

……。

……」

ネギ「ネギですが家の空気が修羅場です」

アーニャ「ウェールズ帰りたい」

【その頃のナギ】

ナギ「なあ、ジャック。
“ネギが一人前になるまではアリカのことは教えない”って約束したよな」

ラカン「それがどうしたよ？」

ナギ「いや、一人前になる前にアリカと会わせたけど、その約束どうしたらいいと思う？」

ラカン「ん？　ああ……、えーと。
んじゃ、俺たちで一人前にすりゃいいんじゃね？」

【これからがほんとうの地獄だ……】

ナギ「というわけで俺たちが鍛えてやるぜ。
なーに、親子のスキンシップってやつだ」

アリカ「頑張るがいい、ナギ。
失った父の威厳というものを取り戻すのじゃ」

ラカン「最近退屈してたからなぁ。
いい暇つぶしになりそうだぜ」

タカミチ「参ったなぁ。ネギ君は僕の弟子なのに。
これは皆さんに負けられない修行をしないと」

クルト「タカミチだけにネギ君を任せていられるか。
戦闘だけでなく、立派な大人になれるように教育してあげましょう」

ガトウ「タカミチも弟子を取るようになったか。
しょうがない、俺も孫弟子の面倒を見てやるかね」

アル「おやおや、ネギ君も大変ですねぇ。
ああ、私も参加しましょう。フフフフ……」

エヴァ「何を言ってるお前たち。ぼーやは私の弟子だ。
お前たちのような馬鹿者共に鍛えられたら、
ぼーやの命がいくつあっても足りん。
ぼーやには私のオリジナル魔法、『闇の魔法（マギア・エレベア）』を教えてやろう」

アスナ「私は『咸卦法』ぐらいしか教えられないわよ」

ネギ「＼（＾ｏ＾）／」

【期末テスト】

ネギ「来週から期末テストかぁ。
皆さん頑張ってくれるといいんですけど」

エヴァ「くくく、安心しろぼーや。手は打ってある」

ネギ「え？　クラスの皆さんで勉強会か何かするんですか？」

エヴァ「いや、さっきクラス全員に夢の中で勉強する魔法をかけてきた。
夢の中のテストで満点をとるまで決して目が覚めないやつをな」

ネギ「今すぐ解除してきてください」

エヴァ「な、何故だっ！？」

【修学旅行】

ナギ「京都も久しぶりだなぁ」

アリカ「前来たのはいつだったかの？」

ネギ「……何で一緒に来てるんですか？」

【昼ドラ注意報？】

千草「奥様がいるから長が振り向いてくれないんどすっ！！！」

刹那「何だ！？　貴様はっ！！！」

木乃香「母さまになにするんやっ！！！」

ネギ「（キャラ崩壊しすぎじゃね？）」

―――――――

月詠「このかお嬢様がいるから刹那先輩が振り向いてくれないんどすっ！！！」

木乃香「何や！？　あんたは！！！」

刹那「このちゃんになにするんやっ！！！」

ネギ「（あんま変わってないですね）」

【犬上家】

小太郎「……」

ナギ「ハッハッハッ。まさか京都で
「“千の呪文（サウザンドマスター）の男”、勝負や！！！」と挑まれるとはなぁ。
こういう無鉄砲なガキは嫌いじゃないぜ」

アリカ「もう少し手加減してやればよかろうに」

ネギ「とりあえず地面から引っこ抜いておきますね」

【羽毛布団】

木乃香「新しい布団買ったらグッスリ眠れたわぁ」

アスナ「へぇ、そうなの」

木乃香「そういえばなぁ。ウチ、天狗の逸話を聞いたとき
「天狗の羽で羽毛布団作ったらどうなるんやろ？」と思ったわ」

刹那「……くっ！」

ネギ「決意固めたような表情しないでください」

【羽毛布団の羽毛は羽根じゃない】

木乃香「まあ、羽毛布団は鳥の羽じゃなくて、鳥の胸元の毛使うんやけどな」

刹那「！！！」

アスナ「羽根を使った羽根布団というのもあるけど？」

刹那「！　それですっ！」

ネギ「それじゃないです」

【闇の魔法（マギア・エレベア）？】

ネギ「ラス・テル・マ・スキル・マギステル

汝がためにユピテル王の恩寵あれ、『治癒（クーラ）』！

固定、掌握、魔力充填、術式兵装『自動治癒（リジェネ）』！！！」

エヴァ「治癒魔法を体内に取り込む？
　そんなことやったことなかったな」

アル「あなたはそんなことしなくても平気ですからね」

アスナ「でもこれって“闇”の魔法と言うのかしら？」

【所詮は浅知恵】

アル「凄い回復力ですね。
　真祖の吸血鬼であるあなたとまではいきませんが」

エヴァ「……まあ、そうなんだが」

アスナ「？　どうしたの？」

ナギ「おい、お前殴ったら俺の方も回復するぞ」

ネギ「え？」

エヴァ「そりゃ、そうだろうな」

【抱き枕には丁度良い】

アスナ「でもこの状態のネギを抱いて寝るのはいいわね」

アリカ「回復魔法を常時かけられているようなものじゃからのう。
　　アスナ、明日は私じゃぞ」

エヴァ「明後日は私だ」

ネギ「……反応しちゃ駄目だ反応しちゃ駄目だ
　反応しちゃ駄目だ反応しちゃ駄目だ反応しちゃ駄目だ
　反応しちゃ駄目だ反応しちゃ駄目だ……」

アル「では明々後日は私で」

【ウルティマホラ（別名：“紅き翼（アラルブラ）”最強決定戦）】

司会「それでは、１回戦の対戦組み合わせの発表です！

第一試合　アンナ・ユーリエウナ・ココロウァ　ＶＳ　神楽坂ガトウ

第二試合　タカミチ・Ｔ・高畑　ＶＳ　ネギ・スプリングフィールド

第三試合　神楽坂明日菜　ＶＳ　桜咲刹那

第四試合　エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル　ＶＳ　ネカネ・スプリングフィールド

第五試合　長瀬楓　ＶＳ　近衛詠春

第六試合　アルビレオ・イマ　ＶＳ　クルト・ゲーデル

第七試合　ジャック・ラカン　ＶＳ　犬上小太郎

第八試合　ナギ・スプリングフィールド　ＶＳ　古菲

となります。第一試合開始は３０分後です」

アーニャ「＼（＾ｏ＾）／」

ネギ「＼（＾ｏ＾）／」

刹那「＼（＾ｏ＾）／」

小太郎「＼（＾ｏ＾）／」

マナ「……私はコウキと約束あるから」

【昼ドラ注意報？】

エヴァ「……。

……。

……」

ネカネ「……。

……。

……」

ネギ「ネギですが会場の空気が修羅場です」

アリカ「（いつぞやの私らを見ているようじゃ）」

【無知とは罪】

古菲「ネギ先生の父親らしいアルが、手加減しないアルヨ」

ネギ「（その人相手にするのはやばいです。古菲さん）」

楓「拙者は木乃香殿の父君が相手でござるか」

ネギ「（西の長が何で来てるんですか？）」

結局、２回戦第四試合

ジャック・ラカン　ＶＳ　ナギ・スプリングフィールド

で会場が崩壊して大会中止になりました。

【“紅き翼（アラルブラ）”同窓会】

詠春「皆、久しぶりだな」

ナギ「詠春老けたなぁ」

ラカン「久しぶりじゃねえか」

アル「今皆でネギ君鍛えてるんですけど、あなたもやりません？」

ネカネ「あ、私も参加します」

ネギ「……え？」

【父親越え】

ネギ「つ、遂に勝てた……」

アリカ「おお、凄いぞ、ネギ。
早くも父親越えするとは。流石私の子じゃ」

ナギ「皆で色々教えすぎたぜ……」

詠春「神鳴流の飲み込みも早かったよ」

タカミチ「やれやれ、まさか“無音拳”まで使えるようになるとはね」

アル「では次に
“ネギ君パーティー（仮）”　ＶＳ　“紅き翼（アラルブラ）”のパーティー戦ですね」

ラカン「まあ、一人じゃ出来ること少なぇからな。
早くパートナー見つけてこいや」

ネギ「……え？」

【僕と仮契約して、“魔法使い（ミニステル・マギ）の従者”になってよ】

ネギ「小太郎君、木乃香さん、刹那さん、楓さん、古菲さん、アーニャ。
僕と仮契約しませんか？
今なら“紅き翼（アラルブラ）”に修行をつけてもらえる特典付きですよ」

小太郎「ワリィ、流石に無理や」

木乃香「ウチ、将来西に戻るから、
“魔法使い（ミニストラ・マギ）の従者”になるなんて無理や！！！」

刹那「わ、私はこのちゃんの護衛ですので」

楓「したくないでござる！！！
　絶対に仮契約したくないでござる！！！」

古菲「ワタシ故郷に帰ろうと思ってるアルヨ！！！」

アーニャ「私もウェールズに帰るわっ！！！」

【契約とってこいって言ってんだろ！　出来なかったら自腹しろや！！！】

ネギ「……」

ナギ「おいおい、パートナーまだ見つかってないのかよ」

ラカン「じゃあ、とりあえず一対多の戦闘方法を教えておくか」

アル「“ネギ君パーティー（独り）” ＶＳ “紅き翼（アラルブラ）” ですね」

【平穏】

のどか「ネ、ネギ先生（せんせー）。

最近お疲れのようですけど大丈夫ですか？」

ネギ「フフフ、まだ大丈夫ですよ……」

のどか「そ、そうなんですか。私に出来ることあったら言ってくださいね」

ネギ「（……流石に巻き込めません）」

―――――――――――――――――――――――――――――――

【大戦関係者同窓会】

テオドラ「アリカ、久しぶりじゃの」

リカード「まったく。大戦の後始末がこんなに長く掛かるとはなぁ」

セラス「この面子が顔を合わせるのも何年振りでしょう」

ナギ「おう、あんたらか。世話を掛けたなぁ」

アル「今皆でネギ君鍛えてるんですけど、あなた方もやりませんか？」

ネギ「……え？」

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

【決意】

ネギ「……一人でやるしかないっ！」

アスナ「何だか追い込まれてる目してるけど、大丈夫かしら？」

アリカ「そろそろナギとアルを〆ておくか」

【色々ともう駄目かもしれない】

ネギ「！　そうだ！

『咸卦法』と『闇の魔法（マギア・エレベア）』と『契約執行（シム・イプセ・パルス）』と『戦いの歌（カントゥス・ベラークス）』

を同時に発動させれば！！！」

アリカ「『契約執行』と『戦いの歌』を同時発動させても意味ないと思うがの」

アスナ「……もう休みなさいな」

茶々丸「最近坊ちゃまの目が濁っているように見えます」

【仮契約】

ネギ（霊体）「『仮契約（パクティオー）』っ！！！」

ネギ（肉体）「……」

エヴァ「自分（霊体）と自分（肉体）で仮契約しただと！？」

アル「しかも『闇の魔法（マギア・エレベア）』でわざと肉体を魔族化させてからですか。
ここまでいくと、もう霊体と肉体で別人といっていいかもしれませんから、
他人との契約扱いになるんでしょう」

アリカ「そんなこと試した者は誰もおらんじゃろうな」

ナギ「なんでぇ、あいつパートナーも見つけれないのかよ」

アスナ「……パートナー見つけられないのはナギたちのせいだと思うけど」

―――――――――――――――――――――――――――――――

【仮契約カード】

ネギ「称号は“独りぼっちの一角獣”。

アーティファクトは“白紙仮契約（おためしけいやく）カード”と“空飛ぶゲタ（サブフライトシステム）”？

徳性は“希望”。方位は“中央”。

色調は“白”と“赤”。星辰性は“彗星”。

……“白”い“独りぼっちの一角獣”で“赤”い“彗星”？

色々混じってますね」

【“白紙仮契約（おためしけいやく）カード”】

契約主と従者の名前欄が空白で、他には何も書かれていない仮契約カード

“契約者と従者のどちらかに、ネギ・スプリングフィールドの名前を入れること”、

“名前欄に、自分の血で、自分の名前を、自分で書くこと”で契約成立

契約者と従者を交換して、同じ人間で相互に主従となるのは不可能
契約者と従者を交換する場合は一度契約を破棄すること
ただし、“本当の仮契約カード”を使用して相互に主従となるのは可能
何枚でも作成可能

“従者への魔力供給”、“従者の召喚”、
“念話”、“防御力アップ”は使用可能

“潜在能力の発現”、“アーティファクトの召喚”
“衣装の登録”は使用不可能

ネギ「……自分一人だけじゃ意味なくね？」

【“空飛ぶゲタ（サブフライトシステム）”】

1機のみ発現可能
ジェット噴射なので後進不可能
大きさは縦長の約2？
長谷川千雨が気づけない程度の認識阻害、微弱な魔法障壁が常時発動
簡単な自立行動が可能
仮契約した人間なら操縦可能
“白紙仮契約（おためしけいやく）カード”の仮契約者も操縦可能

アスナ「あら、“空飛ぶゲタ（サブフライトシステム）”は面白いわね」

アリカ「うむ、風を切って空を飛ぶのは気持ちいいの」

ネギ「対“紅き翼（アラルブラ）”には役に立ちませんけどね」

【卒業式】

ネギ「ふう、３－Ａの皆さんとも今日でお別れですか。
魔法使いとしての修行も無事に終わりました。
今となっては良い思い出です」

エヴァ「ふむ、最後の卒業式となると感慨深いものだな」

アスナ「初めてにしては良い教師だったわよ、ネギ」

アリカ「やっとネギの晴れ舞台を見ることが出来たのじゃ」

ナギ「よーし、じゃあこれからネギの卒業試験を始めるか」

ラカン「全力で来いよ、でなけりゃ死んじまうぜぇ」

アル「準備する期間はたっぷりありましたからね。
どのような手を使ってくるのか楽しみです」

タカミチ「大丈夫。ネギ君なら僕達にだって負けないさ」

クルト「今日は何と良き日でしょうか。
ネギ君が一人前となるためのお手伝いが出来るなんて……
…」

詠春「木乃香も大学までこちらにいるからね。
何かあったときのために、ネギ君には一人前になってもらわ
ないと」

ガトウ「（……ここら辺一帯に何か仕掛けてあるな）」

ネギ「……」

【対“紅き翼（アラルブラ）”】

エヴァ「強制転移魔法で深海１０００ｍへ全員転移させ、詠唱出来ない上、水圧で身動き取れないところを各個撃破か」

ヴィルさん「ＭＳ（モビルスーツ）というのは厄介ですな。水中でも息は出来るし、水圧にも耐えれる。魔法はマグナム弾とやらで代用可能ですか」

ネギ「それでも死人が出ない“紅き翼（アラルブラ）”ってマジパネェっす」

アリカ「（本気で殺す気だったのかの？）」

アスナ「（いや、勝つことしか考えてなかったんじゃない？）」

茶々丸「（坊ちゃまのお顔が、やけに晴れ晴れとしてます）」

チャチャゼロ「ケケケ、イイ感ジニ壊レテ来タナァ」

【ネギから見た関係】

エヴァ　「本当に初恋だったかもしれない」

アスナ　「姉さん。でも、もしかしたら恋かもしれない」

アリカ　「二股眉毛、じゃなかった。妹とか欲しいです」

ネカネ　「戦闘さえしなければいい人なんだけど……」

ナギ　「駄目親父死ね」

ラカン　「筋肉達磨死ね」

アル　「変態死ね」

タカミチ　「デスメガネ死ね」

クルト　「仕事しろや、元老院議員」

詠春　「仕事しろや、西の長」

ガトウ　「煙草吸いすぎで肺ガンになりやがれ」

テオドラ　「年考えろ、じゃじゃ馬皇女」

アーニャ　「僕と仮契約して、“魔法使い(ミニストラ・マギ)の従者”になってよ」

小太郎　「僕と仮契約して、“魔法使い(ミニステル・マギ)の従者”になってよ」

刹那　「僕と仮契約して、“魔法使い(ミニストラ・マギ)の従者”になってよ」

木乃香　「僕と仮契約して、“魔法使い(ミニストラ・マギ)の従者”になってよ」

楓　「僕と仮契約して、“魔法使い(ミニストラ・マギ)の従者”になってよ」

古菲　「僕と仮契約して、“魔法使い(ミニストラ・マギ)の従者”になってよ」

アルちゃん　「ノーコメントでお願いします」

ヴィルさん　「何でこの人の側が一番安心するんでしょう？」

茶々丸　「坊ちゃま言うな」

スタン　「治ってくれて良かったです」

のどか　「のどかさん、マジ天使。

でも、だからこそ巻き込めない　ｏｒｚ」

【相手から見た関係】

エヴァ　「結局“お母さん”って呼んでくれなかった　ｏｒｚ」

アスナ　「……弟みたいなものよ」

アリカ　「結局あんまり甘えてくれなかった　ｏｒｚ」

ネカネ　「良い子に育ってくれて嬉しいわ」

ナギ　「俺がガキの頃はもっと元気良かったんだけどなぁ」

ラカン　「面白いガキに育ったぜ」

アル　「この子は私が育てました。フフフフ……」

タカミチ　「この子は僕が育てた」

クルト　「この子は私が育てた」

詠春　「木乃香の婿にはまだ早いですね……」

ガトウ　「アスナを嫁にやるにはまだ早いな……」

テオドラ　「やけに冷めた目で見られるのぉ」

アーニャ　「こっち見んな」

小太郎　「こっち見んな」

木乃香　「こっち見んな」

刹那　「こっち見んな」

楓　「こっち見んな」

古菲　「こっち見んな」

アルちゃん　「何で微妙な目で見られるんでしょう？」

ヴィルさん　「ネギ様のおかげで私には被害が来ないので……」

茶々丸　「……私でよければ」

スタン　「会うたびに逞しくなっていくのぉ」↑何も知らない人

のどか　「……えへ、また逢えないかなぁ。ネギ先生（せんせー）」

【『咸卦法』と『闇の魔法（マギア・エレベア）』の同時発動は出来るようになりました】

ネギ「遂に“偉大な魔法使い（マギステル・マギ）”と呼ばれることとなりました。
悪魔による石化魔法の治療方法の確立が評価されたみたいです。

それに“紅き翼（アラルブラ）”相手にガチンコ勝負しても、
勝つとまではいかないでも逃げきれるようになりました。

戦闘・治癒・その他諸々全部一流です。

まさに人生勝ち組。テンプレ通りな転生人生ですねぇ。ハッハッハッ。

“転生チートうぜぇ”とか感想で書かれたらどうしましょう？」

ヴィルさん「……涙をお拭きください。ネギ様」

ネギ「……こんな人生勝ち組なテンプレ転生人生より、
　平穏が欲しかったです　ｏｒｚ」

―――――――――――――――――――――――――

【それに結局パートナーになってくれる人はいませんでしたとさ】

アリカ「早く孫の顔が見たいのじゃがのぉ……」

ネギ「１１歳相手に無茶言わないでください。
　それか自分でもう一人作ってください。
　出来れば妹が欲しいです」

ナギ「パートナーになってくれるのがいないって、
　お前ハブられてんじゃねーのか？」

ネギ「パートナー出来ないのあんたらのせいでしょーがっ！！！」

アスナ「……本屋ちゃんはあなたに気があるみたいだったけど」

ネギ「のどかさんみたいな天使を、
　こんなヤクザな世界に巻き込めるわけないじゃないですか！！！」

アスナ「……」

茶々丸「……」

ネギ「（原作ネギがうらやましいです）」

？？？「その願い、叶えてあげましょう」

ネギ「……え？」

プロローグ

おはようございます。朝起きたら赤ん坊になってたネギです。

夢の中で変な声が聞こえたんですよ。

「元気〜？

この前原作ネギがうらやましいって言ってたでしょ。私は優しいからその願いを叶えてあげるよ。今度は原作世界のネギに転生だ。

あくまで今の君の魂をコピーして貼り付けるだけだから、さっきまで過ごしてた並行世界のことは気にしなくていいよ。

能力は今まで同じ。といっても赤ん坊からやり直すから肉体は鍛えなおしてね。修行で拡張した魔力とかはそのまんまだよ。

ま、わがまま言っちゃ駄目だということで。それじゃ頑張ってね♪」

あれですか？

やっぱり最初にわがまま言ったのがムカついていたんですね。余計なことしやがってコンチクショウ！

ああ、もう！

せっかく“紅き翼（アラルブラ）”による修行（ごうもん）から抜け出すことができたと思ったのに！

またやり直しですか！？　最悪だ！

しかも死亡フラグが何気にある原作世界。

これだったら“紅き翼（アラルブラ）”による修行（ごうもん）の方が……修行（もん）の方が辛いな、これだったら。

ハア、しょうがない。グダグダ言ってもしょうがないし頑張りますか。

とはいえ、やってられないですよ。

「ネギ～！　夕御飯出来たわよ～！」

「は～い！　ネカネ姉さん！」

原作世界サイコーーーッ！！！

やっぱりネカネ姉さんはこうでなきゃいけませんね。ウン。

エヴァさんとガチンコバトルするネカネ姉さんなんてどこにも存

在しないんや！

さて、序盤の山場の悪魔襲撃なのですが。原作より早くメルディアナ魔法学校に入学することで回避しました。

ネギ「僕も来年から魔法学校に通うんでしょ？
　見学に行ってみたいよ～」
←
ネカネ「あら、そうなの？　じゃあ校長先生に頼んであげる」
←
校長「よく来たの、ネギ。
　どれ、少し魔法を試してみるかね？」
←
ネギ「プラクテ・ビギ・ナル　（全力全開の）『火よ灯れ（アールデスカット）』！」
←
ネカネ「キャンプファイヤー！？」
←
校長「あ～あ～髭がぁ～髭がぁ～！！」

←

アーニャ「覗きこんでいたおじいちゃんが黒焦げに！」

ってなことをしたら、「このガキ、ちゃんとした魔法を早く覚えさせないとヤベェ！」となり、早い入学を認められました。

“紅き翼（アラルブラ）”の修行（ごうもん）のおかげで、魔力量は木乃香さんを超えてましたからね。そりゃ全力全開でやれば火柱も立つというものです。

……今思えばなんであの修行（ごうもん）生き延びられたんだろ？

それとゴメンね、おじいちゃん。わざとだったんだよ。

でも、おじいちゃんの尊い犠牲のおかげで村の皆が助かったんだから、笑って許してね。

ちゃんとそのあと治癒魔法もかけてあげたから大丈夫でしょ。全力全開で『治癒（クーラ）』かけたら髭がとんでもなく伸びたけど、別に問題ないよね。

元老院もさすがに魔法学校を襲わせるのはやめたらしく、平穏な日々でした。

長期休暇で里帰りしたときに、スタン爺さんからナギの杖を“入学祝い”の名目でプレゼントされました。ナギはちゃんと来てたようです。

自分は村にいませんでしたけどね。わざわざご苦労さんです。

この杖は魔法媒体として優秀ですから、精々使わさせてもらいま

す。

並行世界の詠春さんから習った神鳴流もこの杖で練習しましょう。神鳴流は武器を選びませんから杖で大丈夫です。ステッキ術も練習しておきますかね。

そうだ！

“紅き翼（アラルブラ）”に関する映像をまほネットで取り寄せましょう。きっとドキュメンタリーか何かで、実際の“紅き翼（アラルブラ）”が戦闘している映像があるでしょうから、神鳴流はその映像を見て見様見真似の自己流で練習したことにしておきます。

それとタカミチから『咸卦法』と『居合い拳』を見せてもらっておきましょう。となると腕輪型か指輪型の魔法媒体も用意しておかないといけませんね。

あとは『闇の魔法（マギア・エレベア）』もエヴァさんのことをまほネットで調べておいて、そこから研究したことにしておきます。

これでアリバイ作りは完璧です。

なんとか原作開始前にはある程度並行世界のときの力を取り戻せるでしょう。おそらく、並行世界のときの自分が“１０”だとしたら、“６”と“７”の中間ぐらいには取り戻せます。

年齢不相応な戦闘力になりますが、バグキャラということで勘弁してください。

「ネギ、アンタまた山へ修行に行くの？」

「そうだけど。どうかしたの、アーニャ？」

「成績が良いからって調子に乗っちゃだめよ。アンタってば頭が良い割りに、変なところで抜けてるんだから」

「ずっと学校に入ると気が滅入るよ。たまには外で思いっきり羽根を伸ばしたい時だってあるんだよ。
それに学校の中だったら派手なことできないし」

「……くれぐれも山火事なんかには気をつけなさいよ。
アンタはおじいちゃんをコンガリ焼いた前科があるんだからね」

根に持ってますね、アーニャ。
まあ、幼いアーニャにはあの光景は酷だったかもしれません。
村を襲われないようにするためとはいえ、少しはアーニャのことも考えてあげるべきでした。

……アレのせいで原作より火炎魔法が苦手になったせいか、『アーニャ・フレイム・～』がまだ一度もされてないことは嬉しい誤算でしたけどね。

自分が治癒魔法も得意なせいか、アーニャも張り合うように治癒魔法の練習をしています。多分これもおじいちゃんの尊い犠牲のおかげでしょう。

「わかってるよ。気をつけるから大丈夫だよ。お土産は何が良い？　多分ユリの花がそろそろ綺麗に咲いていると思うけど」

「す、好きにしなさいよ！

……気に入ったら貰ってあげるわ」

「そんじゃ、イノシシでも狩ってくることにするよ」

「！　こ、このバカァーーーッ！！！」

アーニャは可愛いなぁ、ハッハッハ。

「冗談だよ。
じゃ、行ってくるからネカネ姉さんと仲良くね。
それともアーニャも一緒に行く？」

「フン！　行かないわよ！

……いってらっしゃい」

とりあえずヴィルさんクラスを相手に出来るような力をつけたら、山篭りを行うことにしました。
もしかしたら元老院は自分殺すの諦めていないかなぁ～と思ったので、諦めていなかったときに誘い出すためです。
こうして山篭りするようになったのなら、魔法学校にいるときよりも山篭りしているときを狙うでしょうからね。
いつ来るかわからない刺客より、いつ来るかわかる刺客の方が対処しやすいです。

それに、自分のせいで魔法学校の関係者を巻き込んだらいけませんからね。
……『千の雷（キリアキブル・アストラペー）』に巻き込んだら大多数の人が死んじゃいますし。
もちろん転移魔法は使えるし、転移魔法符も持ってきてありますので、逃げる準備も万端です。

万端だったんですが、全然来ませんね。一応優秀な成績を修めているので、始末するより“英雄の息子”として利用することにしたんでしょうか？

来ないなら来ないで全然構いませんし、来ないんだったら修行をするだけだからいいんですけどね。

あ、ユリ発見。

アーニャとネカネ姉さんへのお土産にしましょう。

……食べ切れなかったイノシシ肉もお土産にしましょうか。

プロローグ（後書き）

第二章スタートです。

ネギは“紅き翼（アラルブラ）”の修行（ごうもん）のせいでサバイバル知識なども豊富になりました。

G．W．中にも何回か更新したいと思います。

御意見・御感想お待ちしております。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第一話　メルディアナ魔法学校での日々

――――アンナ・ユーリエウナ・ココロウァ――――

私には幼馴染がいる。
名前をネギ・スプリングフィールドといい、世界を救った英雄であるナギ・スプリングフィールドの息子だ。

といっても、私はネギのお父さんであるナギさんと会ったことはないし、世界を救ったと言われてもピンと来ない。
だから私にとっては結局、“英雄の息子のネギ”ではなく、“幼馴染のネギ”。
ナギさんも“世界を救った英雄”ではなく、会ったこともない“ネギのお父さん”でしかない。

そのネギだけど、変わった男の子だった。
変わったというよりチグハグな感じな男の子というべきか。なんだかアンバランスなのだ。

興味のあることは力を尽くし、他のことはおろそかになる。
学校の勉強だってそうだった。
初めて使った魔法で火柱を立て、治療魔法を使っておじいちゃんの焼き切れた髭を伸ばした。普通、治療魔法で髭は伸びないハズなのに。
まあ、治療魔法のことはともかく。
魔法学校は大騒ぎになり、急遽ネギを魔法学校に入学させることになった。

当然ね。
あんなのを村で野放しにしてたら、村がいつ火事になるかわからない。
上級魔法を試しに唱えてみて、アッサリそれが発動して村が破壊されることすら有り得るわ。

……というか学校で実際あったし。
空に向かって唱えていたから被害はなかったけどね。

そんなことがあって、ネギは学校の教師の期待を一身に背負うことになった。
背負うことになったのだけど、本人はまったく気にしていなかった。というより気づいてさえいなかったのかもしれない。

教師が難しい魔法を勉強させようとしても、

「知るかバカ！　そんなことより治療魔法だ！」

などとワケのわからないことをのたまって、治療魔法の練習ばっかりしていた。

３ヶ月ほど練習したら誰も治療魔法はネギに敵わなくなっていた。

きっとネギはおじいちゃんに火傷を負わせたことを、ずっと気にしていたんだと思う。

私が風邪を引いて寝込んだときも、寝ずに看病してくれていたこともあったし。

……お返しにネギが風邪で寝込んだとき、私も看病してあげようと思っているのは私だけの秘密だ。

といっても今だにネギは風邪を引いたことがないのだけれど。

治癒魔法の勉強が終わった後、

「便利そうだから」

という理由で転移魔法の勉強を始めた。

確かに転移魔法は便利で、長期休暇で村に戻るのも楽になった。

というか長期休暇以外でもたまに村に帰っている。だって、1秒で着くんだもん。

しかし、あとになって考えたら転移魔法を覚えさせたのは失敗だった。

ネギの行動範囲がとんでもなく広くなってしまったのだ。

おかげでネギは“山篭り”なんて妙な趣味に目覚めてしまった。

そのせいでネギに会いにタカミチさんが初めて来たときは、山の中を探し回った挙句に先に学校に戻ってきて来客を知らされたネギに迎えに来られる、という踏んだり蹴ったりな目にあってしまった。

ネギの転移魔法で一緒に帰ってきたタカミチさんの悄気た顔はしばらく忘れることが出来なかったわよ。

ウチのネギがごめんなさい。

おじいちゃんやネカネ姉さん、それに私がいくら言っても“山篭り”をやめようとしない。

でも何故か、

「買い物に行くから、今度の休みは付き合って」

とか頼むと、山篭りを休んで一緒に買い物に行ってくれる。それ

もアッサリと。

でも教師なんかが適当な理由で山篭りに行かせないようにしても断ってしまう。

山篭りをやめて付き合ってもらえるのは私とネカネ姉さん、それとたまにおじいちゃんの3人ぐらいだ。

後輩に治療魔法を教えるとかの名目なら行かないときもある。

ドネットさんが言うには、“ネギにはネギ独自の判断基準があって、それに忠実に動いている”、ということだった。

他人が“是”とするものでもネギが“否”と思えば否定し、他人が“否”とするものでもネギが“是”と思えば肯定する。

ネギ的には「危険だからやめなさい」は“否”で、「買い物に付き合って」は“是”らしいけど、私にはネギの判断基準がわからない。というか誰にもわからないと思う。

常識をちゃんと持っていて普段は普通なのに、何故かときたまトンチンカンな答えを出すのだ。

おじいちゃんが言うには

「違うように見えて、それでも根っこはナギ似」

ネカネ姉さんが言うには
「もうちょっと落ち着いてくれるといいんだけど」

ドネットさんが言うには
「何考えているかわからない猫みたいな子」

スタンお爺ちゃんが言うには
「話が通じる分、ナギよりもある意味面倒」

要するにネギはボケボケなのだ。
やっぱりネギには私が付いていないとダメみたい。

というか山篭りのお土産がバラの花束ってなんなのよ。
結局「綺麗に咲いていたから」という理由で、特に深い意味はなかったらしいけどね。

……ふ、深い意味って、別に変な事考えたわけじゃないんだからねっ！！！

しかし、来週で私達は魔法学校を卒業することになる。
私もネギも一年の飛び級、といってもネギは普通より１１ヶ月早く入学して同級生だったので、同時に卒業することとなる。

これから一人前になるための修行内容がお告げによって決まる。
私は一人でも大丈夫だけど、ネギはどこか抜けているから心配だわ。アイツは一人でもやっていけるのかしら？

この前なんか、『皇帝たる不死鳥（インペラトル・フェニックス）』とかいう、火の鳥を放つ魔法を開発して喜んでいたりするし。
新魔法を開発するなんてのは凄いことだけど、“退屈だったから”という理由で開発するのはどうかと思うわ。

――ネギ・スプリングフィールド――

今のは『燃える天空（ウーラニア・フロゴーシス）』ではありません。『奈落の業火（インケンディウム・ゲヘナエ）』です。

……さすがに『魔法の射手（サギタ・マギカ）』で『燃える天空（ウーラニア・フロゴーシス）』以上の威力を出すのは無理です。

だいたい戦闘の勘を取り戻せました。

麻帆良に行っても、全力状態のエヴァさんから逃げ切れるぐらいのことは出来ます。転移魔法もありますしね。

まあ、エヴァさんに対しては『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』の解呪に協力すれば悪くはされないでしょう。並行世界で解呪した知識もありますし。

「ほい、チェックメイト」

「ぬお！　待つんじゃ、ぼーず！」

そんなとき、気晴らしにスタン爺さんとチェスを打っています。

親衛騎団の作成は無理でしたね～。

頭数少ないのを何とかしたかったんですけど。

やはり知能を持って、自律行動可能な駒なんてものは作れません。

「それにしてもぼーずもあと一週間で卒業か。月日が流れるのは早いもんじゃな。
しかし、村にいていいのか？　てっきり魔法の研究とかずっとしてるもんだと思っておったぞ」

「あと一週間で卒業だからだよ。一週間じゃ時間足りないからね。うっかり研究始めたせいで、研究に興が乗って卒業式サボることにもなりかねないし」

「……あまりネカネに心配かけさせないようにするんじゃぞ」

「わかってるよ。だからここでゆっくり休暇とってるんじゃない。僕としても今まで急ぎすぎてた感があるのは思っていたからね。卒業までの一週間ぐらい、ゆっくり休暇とってもバチはあたらないでしょ」

『カイザーフェニックス』の再現は難しかったですね。威力も『燃える天空（ウーラニア・フロゴーシス）』の方が強いから完璧なネタ技になりましたが。

『天地魔闘の構え』も無理でした。

ただその過程で、魔法を術式固定状態で手に持っておいて、それ

を敵に叩きつける戦闘方法を開発しました。
『風花・風障壁（フランス・パリエース・アエリアーレス）』を使えば『フェニックスウィング』もどきが使えます。
悪戯心で『雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）』の固定状態をイノシシに飲み込ませたら凄いスプラッタなことになりましたが。

……ラカンさん相手でも通じるだろうなぁ。確実に死ぬでしょうけど。

「イノシシとか熊を狩ってくるのは、ゆっくりしてるうちに入らないと思うんじゃが」

「だったらスタンお爺ちゃんの腰の治療もしなくていいのかな？」

「ぐぬっ！　……まったく可愛げがなくなりおって。
小さいときの純真なぼーずはいったいどこに行ったんじゃ？」

ハイハイ、と生返事を返しながら駒を初期状態に戻します。

もうすぐ卒業です。
麻帆良に行ったら頑張りますか。

並行世界と違って明日菜さんはバカレッドだし、刹那さんもポストバカレンジャーだから期末テストが面倒臭いですねぇ。
早めにバカレンジャーの皆さんと刹那さんに勉強頑張ってもらうようにしましょうか。

第一話　メルディアナ魔法学校での日々（後書き）

“インペラトル”とはラテン語で“皇帝”の意味。

……いや、この前“ダイの大冒険”全巻読み返したものでw
自分で考えておいてなんですが、固定状態の魔法を相手に飲み込ませるってエグくないですか？。

ネギはアーニャに対して意識的に優しくしておりますが、“アーニャによる看病”などの好感度を上げるイベントは素でスルーしています。
ここらへんが「どこか抜けている」と言われている理由です。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第二話　卒業

――メルディアナ魔法学校校長――

我が校には一人の天才児がいる。
名前をネギ・スプリングフィールドといい、世界を救った英雄であるナギ・スプリングフィールドの息子じゃ。

初めて唱えた魔法で大人すら出せそうにない火柱を立て、治療魔法を3ヶ月勉強しただけでワシを含めた教師の誰よりも上達した。
魔力量もナギ・スプリングフィールド以上のものを持ち、それに驕ることなく貪欲に勉強を欠かさない。

これだけ聞くと本当に天才児なのじゃが、同時にあの子は天災児でもあった。

初めて唱えた魔法で火柱を立てたのはいいのじゃが、そのおかげでわしはコンガリと焼かれてしまった。

いや、それはまあいい。
誰もあんなことになるなんて思ってもいなかったし、それこそ初めて魔法を試したネギでは予想することは出来なかったじゃろう。
事故が起こった責任はその場にいた大人、つまりわしにある。
ナギの息子なんだから、同じようにとんでもないことを仕出かすかもしれないのを失念していたわしの責任じゃろう。

英雄であるナギの息子でもあるということで、教師の期待も大きかった。
じゃが、ネギはそんなこと全然気にしないでマイペースに日々を過ごしていった。
ナギは狭苦しいのが嫌なのか魔法学校を中退して世界を巡った。
それに比べたらネギはマシなのじゃが、それでも“我を貫き通す”ということについてはナギと一緒じゃ。
やはりネギは“ナギの息子”なのだと思わされることが何度もあった。

教師が何を言おうと、まず治療魔法を勉強し始めたのが良い例じゃ。おそらくわしを焼いたことを悪いと思ったのじゃろう。
必死に勉強したため、わずか3歳のうちに治療魔法は学校の誰よりも上達し、教師を唖然とさせていた。
おかげで治療魔法の教師が自信をなくし、実家へ帰ろうとしたのを説得しなければならなかった。
別にネギが悪いわけではないのじゃが。

だが、後輩へ治療魔法を実践して見せるためとはいえ、自分の腕を切り落とそうとするのはどうかと思うのじゃが。

「優れた治癒術者は千切れた腕を接合したり、欠損した部位を復活させたりすら出来るそうなんですけど、先輩は出来るんですか？」

「やってみようか？」

何でこの会話で自分の腕を切り落とそうとするんじゃ？

あれじゃな。

ネギ的には指に軽く切り傷つけるのと、腕を切り落とすのは同程度の事なんじゃろうな。「治せるから別にどっちでもいいや」ぐらいの。

実際ネギの実力なら治せるじゃろうし。

あの子は常識を持っているようなのじゃが、その尺度が違いすぎる。

“治療魔法で治せる傷を自分に付けて、治療魔法の練習をする”、というのはよくある治療魔法の練習での常識なのじゃが。

ネギと他人の間では、“治療魔法で治せる傷”という尺度が違うのじゃろう。

慌てて止めたからよかったのじゃが、止めておらなかったら後輩

がトラウマになるところじゃったぞ。
　１０歳にもなっていない子供の目の前で腕を切り落とそうなんて、少しは考えて事を行なって欲しいのう。

……そういうネギもまだ１０歳になっておらんのじゃがな。
　全員がネギのように肝っ玉が座っているというか、ズレているワケじゃないんじゃ。
　ここら辺が理由でアーニャに「どこか抜けてる」と言われているんじゃろうな。

　魔力量の多さは……、両親のおかげじゃろうな。
　父親がただでさえ出鱈目に魔力が大きかったナギで、母君がウェスペルタティア王家の御方。
　突然変異のバグキャラと脈々と魔法世界最古の血を受け継いできた血筋の御方の息子。サラブレッドと呼んでいいのかどうか……。

　そんなネギも遂に卒業することとなった。
　問題となったのは卒業後の一人前となるための修行場所じゃ。

元老院は本国によこせ、と言ってくるがそんなことは出来んかった。

大方都合の良い英雄に祭り上げるつもりじゃろう。

祭り上げられるだけならまだ良い。しかし、あのネギの性格では元老院すら相手にしないじゃろうな。

元老院とは悪い関係しか築けないであろうから、元老院にとって都合の良い英雄として使い潰されるか、ブチ切れたネギが元老院を潰すか。

いくらネギとはいえ元老院には勝てないじゃろうから、使い潰されるのがオチじゃ。

……さすがに元老院には勝てない、じゃろうな？

しかも、スタンの話では過去にネギの殺害計画があり、それを知ったナギがネギを助けるために村に来たということじゃ。

あいにく、その頃にはネギは入学しておったがの。ネギの杖はそのときにナギが置いていったものだという。

そんな企みがあったと知った以上、本国にネギはやれん。

アリアドネーという手も考えた。

「学ぶ意思があるもの」はたとえ魔物や犯罪者であっても捕らえることは禁止されている、というアリアドネーならばネギでも問題なかろう。ナギと共に大戦を戦ったセラス総長がいるから安心じゃしな。

しかし、問題なさ過ぎて逆に不安になってしまう。あの探求者の巣窟にネギを放り込んだらどうなるか？

「混ぜるな危険」。……そんな言葉が浮かび上がってきたわい。

たとえ危険なことにならなくても、あの研究するのに環境の良いアリアドネーに行かせると研究に熱中して引き篭るのではなかろうか？

となると、やはり日本の麻帆良しかなかった。

あそこはナギの知り合いでもあるコノエモンが学園長を務めておるし、“紅き翼（アラルブラ）”のタカミチ殿もおる。あの2人ならネギに悪いようにせんじゃろう。

コノエモンの悪フザケは心配じゃがの。

ネギも麻帆良の図書館島に興味を持っていたので、ネギ自身は特に反対しないじゃろう。元から果たす義務は果たす性格じゃしな。

“教師になる”というのは気になるが、後輩にモノを教えるのは上手じゃったから問題あるまい。

というか“生徒になる”というのはあの性格だと無理じゃろうな。ネギの先生になる方が気の毒になるわい。

……決してコノエモンに押し付けようとは考えておらんぞ。

他に選択肢がないだけじゃ。

もう少しネギがシッカリしてくれていれば、こんな心配しなくて済んだんじゃがのう。

思わずそんなことが心に浮かびながら、ネギに卒業証書を渡すわしじゃった。

――ネギ・スプリングフィールド――

こんにちは。卒業証書を渡されたときのおじいちゃんがした憐れんだ目が気になるネギです。

アレ？　もしかして本国行き？

並行世界のときと同じくらいの成績におさえ、時系列を乱さない卒業時期になるようにちゃんと調節したんですけど。
まあ、卒業証書を見てみればわかりますね。

そういえば、卒業式である今日の朝まで村にいたんですが、昨日の夜にスタン爺さんから

「実はナギは生きている。その杖はナギのものなんじゃ。
ぼーずが魔法学校に入学したあとにナギがこの村に来たんじゃ」

と、告白されました。

そういえばそれを知っておかないと、エヴァさんと良好な関係を築けないかもしれませんね。
原作でもナギが生きていることを知ったからこそ、ネギに協力しようと思ったかもしれないですし。
まあ、それが全てではないですけど、少しは関係あるでしょうね。

ありがとう、スタン爺さん。

さて、そろそろ浮かび上がってくるでしょう。
ちゃんと原作通りでしょうか？

「ネギ何て書いてあった？
私はロンドンで占い師よ」

「修行の地はどこだったの？」

「今浮かびあがるとこ」

ハイハイ、……えーと。お、よかったよかった。
ちゃんと原作と一緒です。

「“日本で教師をすること”、だってさ」

「……ハ？　な、何よソレ！？」

「校長！
“先生”ってどーゆーことですか！？」

「ほう……。“先生”か……」

「何かのマチガイではないのですか！？
１０歳で先生など無理です！」

「そうよ！
ネギったらただでさえ治療魔法の実践で腕を切り落とそうとするボケで……！！！」

「しかし卒業証書にそう書いてあるなら、決まったことじゃ。
確かにネギを外に出すのは心配じゃが、“偉大な魔法使い（マギステル・マギ）”になるためには、頑張って修行してくるしかないのう。

……でも、あまり頑張りすぎるでないぞ」

あれ？　原作とセリフ違わね？
まあ、このくらいの乖離なら問題ないでしょうけど、何か自分変な事やりましたっけ？

さーて、荷造りとかしないといけないし、日本語はもう話せますけど、出来れば原作開始時期と同じくらいに行きたいですねぇ。
ま、それは麻帆良との話し合い次第ですか。とりあえずタカミチと連絡とってみましょう。

あ、しまった。
タカミチはもう自分が日本語話せるの知ってるんだった。となる

と原作より行くの早まりますかね。

第二話　卒業（後書き）

ネギは“紅き翼（アラルブラ）”の修行（ごうもん）のおかげで、怪我に対する常識が失われています。

「腕がちぎれた？　くっつければいいじゃん。
腹に穴が開いた？　塞げばいいじゃん」

ですが本人にとっては普通のつもりです。

そんなこと“紅き翼（アラルブラ）”の修行（ごうもん）では日常茶飯事だぜ！

校長のネギに対する感想はぶっちゃけると

「魔法に関しては天才だけど、アホの子」

ぐらいに思われています。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第三話　麻帆良学園到着

――ネギ・スプリングフィールド――

おはようございます。ネギです。
麻帆良に到着しました。やはり耳鳴りがするので飛行機は慣れません。
というか原作のネギは元気ありますよね。到着して直に授業をするって。

それにしても懐かしいなぁ、麻帆良学園。
何だかんだいって１０年ぶりですか。

「高畑先生！
高畑先生！
高畑先生！
高畑先生！
高畑先生！
高畑先生！
高畑先生！

高畑先生！
高畑先生！

ワンッ！！！」

……それにしても懐かしいなぁ、アスナさん（ＮＯＴ明日菜さん）。

もう、あの人とは会えないんですね。
タカミチめ、余計なことしやがって。

やはり明日菜さんは明日菜さんということなんですね。

それにしても、まさか寒波で一週間も空港が閉鎖されるとは思っていませんでした。
冬休み中に麻帆良へ移動しておいて、いろいろ準備しようと思っていたのがパアになりましたよ。
時期的に原作より早く来れはしましたけどね。

「えーと、次は逆立ちして開脚の上……」

現実逃避してないでさっさと行きましょうか。

――――神楽坂明日菜――――

ううううぅ～～～！
木乃香ったら、騙してくれちゃって。何が「好きな人の名前を～」よ。もうっ。
おかげで注目集めちゃったじゃない。

「ところで木乃香。
今日こそは新任の先生って本当に来るんでしょうね？」

「大丈夫やよ、アスナ。
今朝、ちゃんと日本に到着したっておじいちゃんに連絡あったみたいやし。

しゃあないやん。ずっとイギリスの天気が悪くて飛行機が出なかったらしいやん。
3学期の始業式に間に合ったのは良かったけどなぁ」

「確かに飛行機が飛ばなかったのならしょうがないけどね。
ま、おかげでそのことを伝えに来てくれた高畑先生と会えたから悪くなかったけど」

ああ、冬休み中だったのに高畑先生に会えたのはラッキーだったわ。
しかも空振りになったことを謝ってくれて、「ありがとう、スマナイね」と頭も撫でてくれたし。ウフフ。
どうせだったら今日も来なくてもいいかしら。そしたら高畑先生がまた来てくれるかも。

「アスナー、顔が変になっておるえ。高畑先生のこと考えるのはええけど、ほどほどになー。
ほら、あの子微妙な顔をしてこっち見てるえ」

「べ、別に変な顔なんかしてないわよっ！」

何てこと言うのよ、木乃香ったら。
ただ高畑先生のコト考えてただけなのに。

……って、子供？

「失礼します。
神楽坂明日菜さんと近衛木乃香さんですか？」

「は、はいっ！　そうです」

話しかけてきたのは変な長い杖を持って、バッグを載せた大きいキャリーケースをゴロゴロと引き摺っていた、……子供？

子供よね？　背がクラスの鳴滝姉妹ぐらいしかないし。
でも、子供とは思えない感じが何故かするわね。それに私達が待っていたのは新任の先生の筈。

「そ、そうやよ。
えーと、ぼ、坊…アナタはどちらさん？」

「はい、ネギ・スプリングフィールドと申します。
今日はわざわざ案内をしていただけるということで、御迷惑をお

掛けします」

「あ、いえ。……お安いご用ですえ」

木乃香も戸惑っているわね。

やっぱり、この子が新任の先生なのかしら？
それともただ背が低くて童顔なだけ？
留学生がクラスにいるといっても、あまり外国の人達の顔がわかるわけじゃないし。

「おひさしぶりでーす！！　ネギ君！」

高畑先生！　こんな朝早くから会えるなんてラッキー…じゃなかった。
丁度いいところに。

「おひさしぶりです、タカミチ。
半年振りぐらいですね。これからよろしくお願いします」

「麻帆良学園にようこそ。
いい所でしょう？　“ネギ先生”？」

「えー？
やっぱり新任の先生なん？」

「はい、それでは改めまして。
この度この学校で英語の教師をやることになりました、ネギ・スプリングフィールドです」

こ、この子が新任の先生!?
やっぱり見た目より年食ってるのかしら？

――近衛木乃香――

ビックリしたわー。あんな小さい子が先生なんて。
やっぱり外見通りの年やったみたいやね。それにしても１０歳で先生になるなんて凄いなぁ。

「アハハ、自分が子供というのはわかっていますからね。
別に“スプリングフィールド先生”なんて無理して呼ばなくても構いませんよ」

「ええの？
じゃあ、“ネギ君”って呼ばせてもらうなー」

「い、いいんでしょうか？」

「ネギ君がそういうなら構わないさ。
確かに元から無理があることなんだし、ネギ君が先生として立派に務めていると思ったら“ネギ先生”と呼んであげてくれないかい」

「は、はいっ！　高畑先生！！！」

アスナは相変わらずやなー。もう全然ネギ君のことは目に入ってないわ。

にしてもネギ君が担任補佐かー。
確かに高畑先生は出張多くて、ホームルームが自習になることも多かったからなー。保護者からクレームでも来たんかも。

「最初はネギ君が担任になる話もあったんだけどね。
流石にそれは無理があるということで僕が担任のままで、ネギ君が担任補佐となってくれることになってね」

「そ、そんな話があったんですか!?
ハァァァ～、よかったぁ～」

「話題に上っただけですよ。
僕のような子供が担任になるのは無理がありますし。3学期からいきなり担任が変わるなんて、生徒の皆さんにとって良いこととは思えませんからね。
学園長の冗談兼、僕が天狗になってないかを調べるための話だったみたいですよ」

「そ、そうみたいだね。
学園長はたまにオフザケが過ぎるから困ったもんだよ。ハッハッハ……」

なーんか高畑先生の反応怪しいなぁー。

もしかしておじいちゃん本気だったんやないかな？

そんでネギ君に正論言われて、「実は君を試すつもりだったんじゃ！」で誤魔化したんやろ。

……まーたネギ君に“ウチと見合いせんか”とか聞くやろうから、とりあえず金槌用意しておこか。

「着いたえ。あの部屋が学園長室や」

「はい、ありがとうございます」

この子緊張とかしてなさそうやね。

大人っぽいと思ってたけど、本当に１０歳なんかな？

「ネギ君、ところで気になってたんやけど？」

「？　なんですか？」

「このバッグって中に何か居るん？

たまにゴソゴソ動いてるけど」

「そういえば鳴き声らしきのも聞こえてくるわね」

そうなんや。
ネギ君が引き摺っているキャリーケースの上に載せてあるバッグ。
ゴソゴソ動いて、鳴き声も聞こえるんや。

「ああ、僕がウェールズで飼ってたペットです。ホラ」

ペラ、とネギ君がバッグをめくると、そこにはイタチみたいなちっちゃくて真っ白な動物がおった。

やーん、かわえーなぁ。
指近づけるとスンスンと匂い嗅いでる。ホレホレ。

「フェレット……かしら？
ＴＶでみたのより丸っこいわね」

「オコジョですよ。
オコジョもフェレットもイタチ科ですので仲間ですね。ちなみに

カワウソやラッコなんかも同じイタチ科の仲間です。
昔、罠にかかっていたのを助けたのがキッカケで飼うことになりまして」

あ、指舐められた。大人しいなぁ、この子。
確かイタチ科の動物は、かわええ顔して実は凶暴なこともあるみたいやのに。

「この子の名前はなんてーの？
オス？　メス？」

「名前は“アルちゃん”といいます。
“元”男の子です」

あら？　何かこの子ビクついたわ。
ネギ君もさっきまでと同じ笑顔のはずなんやけど、ちょっと怖い雰囲気になったし。
どうかしたんかな？

ま、かわえーからええか。
よろしくなー、“アルちゃん”。

第三話　麻帆良学園到着（後書き）

本来、明日菜やネギは木乃香のことは“このか”と平仮名で名前を呼んでいますが、読みやすいようにこの作品では“木乃香”とさせていただきます。

忠実に原作に沿った方が良いと思うのですが、読みやすさ優先にします。

漫画だったら吹き出しの中のセリフ数が少ないので、平仮名でも十分読みやすいと思いますが、こういう形式ですと平仮名では読みにくいと思いますので。

他にも読み方を変えることもあるかもしれませんが、なるべく変えないようにしたいと思います。

さすがに“のどか”を“長閑”には出来ませんしねｗ

それにしても、原作でネギはカモを逃がしたことを怒られていますが、オコジョ妖精って食べたりするんでしょうか？

違いますよね？

ただネギがオコジョ妖精だったことを伝えていないだけで、人語を話すオコジョ妖精を食べたりしませんよね？

少なくとも、自分は食べたくないなぁｗ

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第四話　初日？　１０年前に通過済

――――高畑・Ｔ・タカミチ――――

「電話では何回か話したが、直接会うのはこれがはじめてじゃの。メルディアナの校長からよく聞いておるよ。麻帆良にようこそ、ネギ・スプリングフィールド君」

「はい、はじめまして。近衛学園長。ネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします」

僕の目の前に大きくなったネギ君がいる。
半年見ないうちに、また大きくなったなぁ。やはりこの年頃の子供の成長は早いものだ。

それにしても、ネギ君と同僚になるとはね。
学園長とメルディアナの校長から事情を聞くまではそんなこと思いもしなかったな。

思えばネギ君と初めて会ったのは、もう6年も前になるのか。
元老院によるネギ君の暗殺計画があったことを知った僕は、急ぎウェールズに向かった。
その前からネギ君のことは聞いていたし、“とある事情”で通常より早く魔法学校に入学したことも聞き及んでいた。
“とある事情”の中身を聞くまではネギ君の暗殺計画のせいだと思ったけど、まさかネギ君が校長を燃やしたせいだとは思わなかったな。ハハハ。
まあ、ナギの息子らしいといえば息子らしいのかな。

「ところでネギ君には彼女はおるのか？
どーじゃな？　うちの孫娘(このか)なぞ」

「ややわ、じいちゃん」

ガスッ！　そんな音がして学園長の頭に金槌が突き刺さる。
教師としてなら注意しなくてはいけないけど、学園長だから別にいいか。

ネギ君と友達になった僕は、時間があればウェールズに行ってネギ君の顔を見るようになった。
ナギとあの御方の忘れ形見が大きくなっていくのを見るのは楽し

かったし、校長の話ではナギが生きているかもしれないということも聞けた。
魔法を使えない僕には魔法を教えてあげることは出来なかったけど、少しばかり武術を教えることが出来た。

……まさか『咸卦法』を3ヵ月で習得するとは思っていなかったけどねぇ。

ネギ君に『咸卦法』を見てみたいと言われたので見せてあげたら、3ヵ月後に次会ったときには既に習得してたなんて。
思わず咥えてた煙草を落として、落ち葉を延焼させるとこだったよ。
僕は覚えるのに苦労したのになぁ。

それからもネギ君は綿が水を吸収するようにどんどん成長していった。
ネギ君もナギと同じ、バグキャラかな。

そういえば、ネギ君に麻帆良では魚釣りならともかく、狩りはしないように言っておかないといけないな。
たくましいのはいいことだけど、ナイフ一本でイノシシを解体する4歳児ってのはインパクトがありすぎて、どうかと思ったよ。美味しかったけどね。
まあ、ナギも魔法世界でトカゲ肉をサバイバルで料理していたっていうし、そんなところも似てるのかな?

「そうそう、もう一つ」

しまった。

昔を思い返していたらいつの間にか話が終わりそうだった。

昔を懐かしむってコトは、僕もやっぱりもうトシなのかなぁ。ハハハ。

「木乃香、アスナちゃん。

ネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの」

「え!?　ど、どういうことですか、学園長先生!?」

「ウチは別にえーけど?」

「学園長。いくらなんでも女子寮に僕が入るのはマズイのでは?

独身者用の職員寮とかはないのですか?」

「確かにタカミチ君が入っているような独身者用の職員寮はあるし、空き部屋もあることはあるんじゃがのう。そこはペット禁止なのじゃよ。

それにいくら先生といっても、１０歳の君を独り暮らしさせるわけにはいかんじゃろ。
タカミチ君は出張が多いから任せるわけにもいかんし、何より２人暮らしには狭いじゃろうからな」

「う、年齢を言われると僕には何も反論できません。
僕としては家事能力はあるつもりですが、１０歳の僕が独り暮らしをして火事でも起こしたら、責任問題どころの話じゃなくなりますからね」

「そういうことじゃ。フォフォフォ」

……ネギ君なら大丈夫だろうけど、ここは黙っておいた方がいいだろうな。
というかネギ君なら野宿でも大丈夫なんだよね。

よく僕とネギ君の２人でキャンプに行ったけど、弟や息子がいればあんな感じなのかな？

「ええやろ、アスナ。
かわえーよ、この子」

「も、もう！　しょうがないわね！」

「申し訳ありません。お世話になります。
出来るだけ家事もお手伝いしますので」

「ありがとう、スマナイね。アスナ君、木乃香君。
僕からも礼を言うよ」

「ハ、ハイッ！
この子のことは私にお任せください、高畑先生！！！」

ハハハ、相変わらずアスナ君は元気がいいなあ。
この2人に任せておけばネギ君は大丈夫かな。

「へー、ネギ君料理出来るんや。
どーゆーの作るん？　イギリス料理？　……イギリス、料理？」

「イギリス料理といえばイギリス料理ですね。一応イギリスにも料理はありますよ。
プティングとかパイとか。スコーンとかも焼けますけど、オーブンが無いと難しいですね。
あとはキャンプなんかで作るサバイバル料理とかも出来ます」

「ちっちゃいのに凄いなぁ。
アスナより出来るんちゃうか？」

「私だって少しは出来るわよ！」

「あとはハンティングで獲った獲物の解体ですかね。
ウサギとかイノシシとかカモとか」

「へ？　へ～？　そう……なんや？」

……ウン、あとでキツク言っておかないといけないな。

まあ、日本と外国だったら文化の違いもあって狩猟の認識が違うから、しょうがないといえばしょうがないのかもしれないけど。
日本だったら２０歳以上の狩猟免許を持った猟友会関係しか狩猟は出来ないけど、欧米だったら子供でも普通に狩猟する地域があるしね。

「魚料理はあんまり自信ないですね。
釣った川魚を捌いて塩焼きか、フィッシュアンドチップスを作れるぐらいです」

「フィッシュアンドチップス？
聞いたことあるえ。日本で知られてるイギリス料理の中でも一番有名やないかな」

「あと料理法知ってるのは“ウナギのゼリー寄せ”とかですかね」

「“ウナギのゼリー寄せ”？　何よソレ？」

それはやめておくんだ、ネギ君。

――ネギ・スプリングフィールド――

「神楽坂さん達は先に教室に戻っていなさい。

９：３０から始業式のために順次体育館に移動開始。それまでは教室待機なんだけど、質問時間でほとんど潰れるでしょうね。
今のうちに自己紹介を考えておくといいわ」

「僕は用があるので先に体育館に行ってるよ。
時間になったらしずな先生と一緒に、生徒達を体育館に連れてきてくれ」

「あ、神楽坂さん、近衛さん。
案内ありがとうございました。これからよろしくお願いしますね」

「うん、よろしくなー」

「わかってるわよ。
そ、それでは高畑先生！　また後で！」

原作通り、明日菜さんと木乃香さんの部屋に居候させてもらうことになりました。
アルちゃんは他の荷物と一緒に学園長室に置いてきたままですけど大丈夫でしょう。

「ハイ、これがクラス名簿。

早くみんなの顔と名前を覚えられるといいわね」

……よし！

ちゃんと超鈴音さんが存在しています！

前の世界では彼女がいなかったことが一番驚きましたからねぇ。

あ、いや、一番驚いたのはさっちゃんでしたっけ。

何であのコアラの人がベ〇ータに並ぶツンデレキャラみたくなったんでしょうか？

「どうしたの？　緊張してるのかしら？」

「ちょっとしてますけど、大丈夫です」

前の世界のトラウマが疼いてましたなんて言えません。

さて、それではノックして、ドアを開けましょうか。もちろん教室に入らず、開けるだけです。

ガラッ！　ボトッ！

目の前に黒板消しが落ちてきました。
ドア開けただけなんで目の前に。

「……」

パスッ！　と足元に落ちた黒板消しを見つめ、

「……」

その先に仕掛けられていたロープやバケツを見つめ、

「……」

沈黙している２－Ａ生徒を見つめ、

「……」

最後に沈黙しているしずな先生を見つめて一言。

「引っかかった方が良かったですかね？」

「……ど、どうかしらね？」

「じゃあ、やり直しますのでテイク２お願いします」

落ちた黒板消しをドアに挟みながらドアを閉めます。
そしてドアを閉め終わると、後ろ側のドアへ瞬動を使って移動。

「え！？　ちょっと待ってよ！！！」

「はい、何ですか？」

話は聞かせて貰いました！
あなた達皆図書館島送りですっ！！！

「!?　今度は後のドアから!?　ってヘブッ!?」

「アララ。駄目じゃないですか、鳴滝風香さん。
目の前で仕掛けた黒板消しトラップに引っかかるなんて」

「お、お姉ちゃん、大丈夫!?　ってキャア!?」

「ふ、ふみかーーー!!!」

うわぁ。
風香さんを助けようとした史伽さんがロープに引っかかり、矢の掃射を受けてバケツが顔に嵌まったみたいです。かわいそうに。

残念ですが２－Ａの皆さん。
あなた達が仕掛ける悪戯など、自分が既に１０年前に通過した場所なのです!!!

……そういうところは並行世界では無くなっていて欲しかったんですけど、残念ながら前の並行世界でもありましたね、コンチクショウ。

「目に、目にチョークの粉入ったー！」「うえー、びしょ濡れですー」「ちょっと、二人とも大丈夫ー？」「衛生兵（メディーック）！　衛生兵（メディーック）！！！」「何やってんのよ、もう！」

おっと。昔を懐かしむよりも事態を収拾しなきゃいけませんね。始業式の前にある程度の質問タイムも用意しておかないと、式の最中でも私語が止まらないかもしれないですし。

まずはチョークの粉まみれになった風香さんと、バケツの水で濡れ鼠になった史伽さんを着替えさせますか。

いや～、それにしてもアレですね。

「わぁ、大惨事」

「いや、お前のせいだろう」

エヴァさんに突っ込まれた！？

第四話　初日？　１０年前に通過済（後書き）

“ウナギのゼリー寄せ”。
一度は怖いもの見たさで食べてみたいですｗ

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第五話　初日？　なげやり

――近衛木乃香――

「今日からこの学校で英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。
３学期の間だけですけど、よろしくお願いします」

あのトラップ騒ぎの後、ネギ君の自己紹介になったんや。
やっぱりネギ君しっかりしとるなー。テキパキとふーちゃんとふみちゃんをジャージに着替えさせてたし。
全然物怖じしてないわぁ。

続いて始業式が始まるまでは質問タイムとなったんやけど。

「キャァァッ」「か、かわいいーーー！」「何歳なの～～～！？」
「どっから来たの！？」「何人！？」「今どこに住んでるの！？」
「ねえ、君ってば頭いいの」「あーん、カワイーーー！」

いやぁ、ネギ君皆に揉みくちゃにされてて、全然質問タイムになってないわぁ。
ネギ君大人気やなぁ。
かわえーからわかるけど。

「大変ねぇ、あの子」

「あれ？　アスナは混じらんの？」

「子供は好きじゃないの。
それにあの中に突っ込んでいくのは疲れるわよ」

まあ、そうやな。
それにウチらは夜になったらゆっくり話せるしなぁ。

「ハイハイ！
歓迎していただけるのは有り難いのですが、このままだったら始業式の時間になってしまいます！　一度皆さん席に戻ってください！
質問のある人はそれからです！」

おんや？　揉みくちゃになってたネギ君がいつの間にか復活しておる。
慣れてんかなぁ？　揉みくちゃにされていたときもニコニコと笑って表情崩しておらへんかったけど。
あれが英国紳士って奴かいな？

「ハーイ！
だったらまず２－Ａ報道部の私、朝倉和美が進行させてもらうよー！

それではネギ先生、まず簡単なプロフィールをお願いします」

「えーと、名前は先ほど言ったとおりネギ・スプリングフィールドです。
イギリスのウェールズ出身で、今年で１０歳になります。去年の7月に大学を卒業しました。
特技はステッキ術です。護身を兼ねて修行してました。
趣味はトレッキングです。住んでいたのが山奥だったので、山歩きをよくしていました」

ハア、ネギ君凄いわぁ。
本当に大学卒業してるんやねぇ。

それにステッキ術？

そういえば長い杖持ってたなぁ。アレ使うんやろか？

「ほほぉ、先生は杖術使いアルか。
今度手合わせするアルよ」

「いえいえ。
それなりに自信はありますけど、あくまで護身術の一環ですよ」

「謙遜するなアル。
歩き方見ても結構な使い手とわかるアルよ」

「ハハハ、ありがとうございます。
古菲さんは中国武術研究会に所属してるんですよね？
近いうちに部活巡りをしようと思ってますので、そのときにでも是非」

「よし、約束したアルよ。
というかよく私の名前と部活わかたアルね？」

「クラス名簿を見たので名前と顔と所属部活ぐらいはわかります」

そんな感じで質問タイムも順調に進んでった。
えへへ、これからおもろくなりそうやなぁ。

ん？　手紙回ってきたえ？
えーと、ナニナニ？

「始業式後、ネギ先生歓迎会するよん！
各自の分担は××××××（以下略）」

おー、そうやね。せっかくやから歓迎会せなもったいないなぁ。
ウチは買い出しやね。
ほなら、アスナにも付き合ってもらおーか。

――神楽坂明日菜――

ハアア～～～。皆はしゃぎすぎよ。
いくら新しい担任補佐にあんな小さい子供がきたからって。
まあ、年のせいか、カワイイ顔してるから皆がはしゃぐのもわかるけど。

といっても、私は高畑先生みたいな大人な男性が好きだから、あそこまで騒がないけどね。

しかし、よかったぁ～。
高畑先生が担任辞めなくて。

木乃香には悪いけど、あの学園長ならあのネギって子でもアッサリ担任にしそうだから怖いわ。
この事はあの子に感謝しておこうかしら。

それにしても、たとえ１０歳の子供とはいえ、男を女子寮に住まわせるって学園長は何考えてるのかしら。
まあ、子供を独り暮らしさせるわけにはいかないってのはわかるし、学費とかの件でお世話になってるからしょうがないのかしら。

これがあの子じゃなくて高畑先生と暮らせるんなら大歓迎なんだけどなぁ……。

……無理ね。
ちょっと想像しただけで顔が赤くなったのがわかるわ。

そういえば、あの子は高畑先生のコト名前で呼んでたわね。
高畑先生が独身用職員寮に住んでなければ、一緒に住まわせるようなことも言ってたし。
もしかして昔からの知り合い？

……夜にでも少しあの子、イヤ、ネギ先生にお話しを聞かせてもらおうかしら。

居候させてあげるんだから、宿泊代のかわりにいろいろとお話しは聞かせてもらわないとねぇ。
具体的には高畑先生の好みなんかを。ウフフフ。

「あ」

って、あら？
ネギ先生じゃない。
始業式終わったら職員室に挨拶しに行ってたみたいだけど終わったのかしら。なら、ついでに歓迎会に連れて行きましょう。
でも、なに見ているのかしら？　目線の先には……、本屋ちゃん？

危ないわね。
たくさんの本持ってグラついてるのに、階段降りてるなんて。

って、本屋ちゃんが足を捻ったのかバランス崩した！？
あの高さで落ちたらケガじゃすまないわよ！　ここからじゃ、受け止めるのは間に合わない！

「！！　やっぱし！」

「きゃあああああ！」

それを見たネギ先生は、今日始めて会ったときから常に持ち歩い

ていた、自分の身長よりも長い杖を本屋ちゃんに向けて構え、

「ハァッ！」

という掛け声と共に、

ブン投げた！

って、えええぇぇっーーーーー！？

何やってんのよっ、あの子はーーーーーー！？

ビュオン！　そんな擬音が聞こえてきそうな勢いで投げられた杖は、
ガスッ！　と石垣の隙間に突き刺さった！

そして丁度その上に本屋ちゃんが落ちてきて、杖を中心にしてクルリと一回転半。
その隙に本屋ちゃんがあの杖を掴めたら良かったんだけど、それでも地面に落ちるまでの時間稼ぎは出来たみたい。
投げると同時に駆け出していたネギ先生が先に本屋ちゃんの下に到着していて、落ちてきた本屋ちゃんを受け止めたわ。

……ふう～、間一髪だったわね。
ネギ先生が杖投げたときは何かと思ったけど。

ネギ先生ったら槍投げでもやってたのかしら？

って、こうしちゃいられないわね。受け止めれたのは見たけど、一応無事を確認しなきゃ。
少なくとも本屋ちゃんは目を回してそうね。

「ちょっと。
２人とも大丈夫？」

「あ、神楽坂さん」

「……う、せ、先生？」

「見てたわよ。
大丈夫？　２人ともケガとかしてない？　立てる？」

「僕は大丈夫です。
宮崎さんは大丈夫ですか？」

「ハ、ハイ。大丈夫です。ありがとうございます。

……って、はううぅ～～～、お、降ろしてください～～～」

あら、テンパっちゃってるわね。
よくよく考えてみれば、本屋ちゃんって今ネギ先生にお姫様抱っこされてるものね。

恥ずかしがりやの本屋ちゃんならそりゃテンパるか。

「み、宮崎さん！　顔真っ赤ですよ！
大丈夫ですか!?　保健室行きますか!?」

「い、いえ！　大丈夫ですぅ！」

逆効果だから顔近づけるのはやめなさい。
見た感じ大丈夫そうね。安心したわ。

とりあえず2人共落ち着かせてから歓迎会に連れて行きましょうか。
まったく、3学期初日だっていうのにドタバタな日になっちゃったわねぇ。

本屋ちゃんにケガがなかったのは良かったけどね。

「それにしても凄いわね、ネギ先生。
杖をあんな風に投げて本屋ちゃんを助けるなんて。
槍投げでもやってたの?」

「ええ、イノシシとかウサギ狩るのにやってましたね」

イノシシは槍ぐらいの大型のエモノじゃないと致命傷与えられないんですよねー、ハッハッハ、と朗らかに笑う１０歳児。

陸上競技じゃなくてハンティング？　何か間違ってないかしら？

……変な子。

「宮崎さん立てますか？
神楽坂さん、申し訳ありませんけど本拾うの手伝ってあげていただけますか？」

僕は杖をとってきますので、と垂直に立っている石垣をロッククライミングのように両手両足を使って登っていく１０歳児（スーツ・革靴着用）。

野生的なインテリ。

……いや、インテリな野生児。
それがネギ先生に抱いた私の感想だった。

第五話　初日？　なげやり（後書き）

ちなみにイノシシ狩りに『巨人（ティタノクトノン）ころし？　暴風の螺旋槍』使ったら、イノシシが木っ端微塵になりました。

『雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）』の固定状態を飲み込まされたり木っ端微塵にされたりと、ウェールズのイノシシ涙目です。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第六話　初日？　自業自得

――――神楽坂明日菜――――

「ようこそ！
ネギ先生ーーーっ！」

ようやく歓迎会の始まりね。
あの後、図書館島まで本屋ちゃんの本を運ぶの手伝ったら遅くなっちゃったわ。

ネギ先生も大変ねぇ。あっという間に皆に囲まれちゃったわ。
さて、お腹もすいたし。私は超包子特製肉まんでも食べてましょうか。

「あのーーー……、
ネギせんせい……」

「あ、宮崎さん」

「あのーー、さっきはそのーー、
危ない所を助けていただいて、そのーー、あのーー、
これはお礼です、図書券……」

本屋ちゃんが男性に積極的に話しかけるところなんてはじめて見たわね。
いくら助けられたからって、１０歳の男の子に頬染めるなんて……。
もしかして、もしかするのかしら？

「センセ。
私からもコレを……、記念です」

って、何やってんのよーーー！？
あのバカいんちょーーー！！！
銅像をプレゼントするなんてバカじゃないの！？

「やあ、ネギ君。
教師生活初日、おつかれさまだったね」

「あ、タカミチにしずな先生まで」

た、高畑先生!?
やっぱりあの子、高畑先生のコト名前で呼んでるのね。
名前で呼ぶってことは、やっぱり昔からの知り合いで親しいのかしら!?

「え、えーと、ネギ先生?
高畑先生のコト名前で呼んでるけど、知り合いなの?」

「あ、神楽坂さん、先ほどはお疲れ様です。
ええ、タカミチとは6年前から、僕が3歳のときからの知り合いです」

「ウン、ネギ君のお父さんは僕の先輩でね。
それがキッカケでネギ君と友達になったんだよ」

ろ、6年前からの知り合い!?
しかも親が友人同士!?

「タカミチがウェールズに来たときは一緒にキャンプとかしたんですよ。
日本のこともタカミチから聞いてて、前から興味を持ってました」

「そうだね。
ウェールズの夜空は、麻帆良の夜空とまた違う感じがしてね。
2人で夜空を見上げながら、夜通し話し込んだりしたもんだよ。
おかげで翌朝つらくなっちゃって、ネギ君のお姉さんに「子供に徹夜させるな」って怒られたこともあったよ、ハハハ」

「僕にとってタカミチは“お兄さん”って感じですね。一人っ子でしたし。
もっとも年からいくと“お兄さん”じゃなくて“おじさん”って感じですけど」

「酷いな、ネギ君。
僕はまだまだ若いさ」

アハハ、と朗らかに笑いあう2人。

夜通し話し込む仲！
それなら、私の知らない高畑先生のコトも知ってそうね！
ウフフフ、今晩は寝かせないわよ、ネギ先生！（尋問的な意味で）

「ちょっと、アスナさん!?　どーゆーことですか!?
ネギ先生と相部屋だなんて!?」

うげっ、いんちょにロックオンされた。
知らないわよ～、そんなこと。
学園長先生に言ってよね。

――――ネギ・スプリングフィールド――――

歓迎会終了後、今日からお世話になる明日菜さんと木乃香さんの部屋に移動しました。
エヴァさんの家とはまた違った感じですよね。

「実は神楽坂さんのコト、以前にタカミチから聞いたことがあるんですよ」

「え!?
た、高畑先生は私のこと何て言ってたの!?
キリキリ吐きなさい、ネギ!」

「“妹みたいな子”って言ってました!」

「グハッ!
……い、妹みたいな子」

あ、死んだ。

明日菜さんは元気良いですねぇ、何か良いことでもあったんでしょうか？
タカミチについて話してたら、いつの間にか“ネギ先生”から“ネギ”にランクダウンしてたし。
まあ、親愛度でいったらランクアップですかね？

「アスナのことは放っておいてえーよ。
どーせいつものことやし」

「恋する乙女は大変ですねぇ」

「ちょっ！？　何言ってんのよネギ！
何でわかったのよ！？」

「神楽坂さん見てたらタカミチ以外の人は誰だってわかると思います」

「まあなぁ、高畑先生はアスナがずっと見てるコト気づいてる様子は全然あらへんな。
高畑先生ちょっと鈍感すぎるんやないかな？」

「あ、やっぱりそうなんですか？　近衛さん。
神楽坂さんには悪いですけど、鈍感というよりそういう対象で見ていないんでしょうね」

「“近衛”って名字じゃなくて“木乃香”って名前で呼んで～な、ネギ君」

「わかりました、木乃香さん」

「……アンタら。
他人事だと思って好き勝手言ってくれるわねぇ。
というか、そういう対象で見ていないってどーゆーことよっ！？」

いや、でもねぇ。
タカミチと話してる限り、ホントに脈ないんですよね。

「う～ん、タカミチは最初の印象引き摺るというか、あまりその人の印象を変えないトコロがあるんですよね。
神楽坂さんは小学校の頃からタカミチと付き合いがあるんですよね？
タカミチにはいつまで経っても小さいときの神楽坂さんの印象があるんだと思います」

「だったらどうすりゃいいのよーーー！？」

諦めたら？
諦めて恋終了しちゃいなＹＯ！
どうせ無理なんだから。

「いや、家族の話で神楽坂さんの話に及んだんですけどね。
神楽坂さんのこと語るタカミチは父性愛みたいなものに溢れていましたよ」

「あ、“愛”！？　……エヘヘ、そんな高畑先生ったら。
って、“愛”ということは喜ぶべきだけど、父親としての愛だったら私の気持ちはどうすればいいのよ！？」

「……あ、そうだ。思い出しました。
神楽坂さんの話のとき、タカミチに「学校の長期休みにでも、神楽坂さんを一緒にウェールズに連れて来ればいいのに」って言ったんですよ」

「高畑先生と一緒にウェールズ旅行！？
ナイスよ、ネギ！　よくそんな提案してくれたわね！」

「でもアスナは外国なんか行ったことあらへんやん？」

「ええ、タカミチが言うには「アルバイトと補習があるから無理だね」ってことでした」

「グハァッッッ！！！」

「アルバイトはともかく、補習はアスナの自業自得やん」

「タカミチは後見人としていろいろな経験を積んで欲しかったみたいですけど、学費を自分で少しでも稼ぐという神楽坂さんの意思を尊重しているみたいですよ」

「……私のバカぁ。

もういいわ。もう寝る。明日もバイトあるし。

いろいろ話してくれてありがと。

それとネギ。私のことも名字じゃなくて名前で呼んでもいいわよ。

一緒に暮らすんだから名字で呼ばれるのはわずらわしいわ」

「あ、はい。
おやすみなさい、明日菜さん」

「そうやねー。
もう遅いし、ネギ君も明日から授業があるんやからもう寝よか」

「そうですね。
じゃ、ちょっと柔軟体操したら寝ます」

ふむ、体が鈍らないうちに修行場所見つけないといけませんね。
前の世界だったらエヴァさんの家の周りで修行できましたけど、女子寮に住むとなると難しいです。
とりあえず、しばらくは派手な修行は中止して、体操や筋力トレーニングみたいな一般人に見せても大丈夫なもので済ませるしかないですね。

「おお～、ネギ君体柔らかいんやなぁ。
ぺったり地面にお腹くっついとるやん」

「ホントね。
何？　体操でもやってるの？」

「いえ、昔からの習慣ですよ。
体が硬かったら、運動するのに差し支えますからね」

「……ハンティングといい、本屋ちゃん助けたときの投げ槍といい。
多芸なのね」

「アハハ。
僕が住んでいたところは娯楽施設とかなかったですし、子供も少なかったですからね。
必然的に山で遊ぶのが多かったんですよ。

そうだ、明日菜さん。
明日の授業前にお時間いただけますか？
宮崎さんが落ちた階段の危険性を学園長に訴えますので、目撃者として証言お願いします」

「あー、その話のどかから聞いたえ。
確かにあそこの階段って手摺とかなんもないからなー」

「別にいいわよ。
またあんなこと起きたら困るからね」

「お願いします。
ちなみにタカミチに事情を話したんですけど、タカミチも同行してくれるそうです」

「!?　私に任せなさい！
シッカリ学園長に危険性を訴えるわ！」

……扱いやすいなぁ。
まあ、こういう真っ直ぐな明日菜さんも逆に新鮮ですね。
前の世界だったらクールなアスナさんでしたから。

「なぁ、ネギ君。
ちょっと背中押してみてもええかな」

「え？　別に構いませんけど」

「お？　おおおぉぉ～～～。
凄いなぁ。ウチはそんなに体柔らないからうらやましいわぁ」

「毎日やってればこんな風にできますよ。継続は力なりです。
ただし、柔軟体操するときは強く押したり引っ張ったりして関節に負担掛けちゃ駄目です。

アレって要するに関節技かけてるのと一緒ですから、関節壊しちゃいます」

「へ～、そうなんや」

「え？　そうだったの？
なんかその方が良く伸びるような感じしてたんだけど」

いや、本当にそうなんですよ。
やりすぎると間接が逆に硬くなるそうです。

「……ネギ君。
背中あったかいなぁ」

「は？
ああ、僕は基礎体温が高いみたいなんです。
だから寒い日なんかは従姉のお姉さんに、湯たんぽ代わりの抱き枕にされることが多かったですね」

あと、たまにアーニャとも。

「さ、寒いから今日は一緒に寝るわよっ！！！
変なコトしたら怒るからねっ！！！」

とか赤い顔して言われました。ごっちゃんです。

「あ、ええなぁ、それ。
確かにあったかそうや」

「イギリスは緯度でいうと北海道より北にありますからね。樺太ぐらいです。だから寒いんですよ。
麻帆良に来て日本はあったかいと思いましたね」

「へ～、そうなんだ。

……ところで“いど”ってなんだっけ？」

「……」

「な、なによ！？
そんな驚いた顔しないでよ！」

ごめんなさい。バカレッド舐めてました。

期末テストは思いっきり苦労しそうです。
ああ、アスナさんが懐かしい……。

「……えいやっ！」

「グエッ！」

ギュム。と木乃香さんに圧し掛かられました。
木乃香さんってたまに衝動的に変なコトしますね。

「あ～、ホントや。
ネギ君あったか～い」

「何やってんのよ、木乃香」

「……あの、さすがに苦しいんですけど。
いくらなんでも体操中はやめてください」

「え？　体操中やなかったらえーの？」

「え？」

「え？」

「それじゃ、ネギ君一緒に寝よっか。
ソファーで寝るなんてやっぱアカンわ」

「木乃香、湯たんぽ代わりが欲しいだけじゃ……、イヤ、いいわ。
好きにしなさいな」

「あの、僕一応先生なんですが」

「女子寮の女子生徒の部屋に泊まるんやから、今更そんなこと言うても無意味やで」

返す言葉もございません。

というか、胸当たってます。

これで木乃香さんから「当ててんやよ」とか言われたら首吊りま

すけどね。

「明日菜さんから一言」

「諦めなさい。
どうせ2、3日で木乃香も飽きるわよ」

「じゃ、布団に入ろうえ。
……って、ネギ君結構重いんやねぇ。体もガッシリしてるし」

「え？　ええ。
えーと、身長が１４０ｃｍで体重が３９ｋｇです。ちなみに体脂肪率は一ケタです。

というか、引き摺らないでください、木乃香さん。
わかりましたから。自分で歩きますから」

こ、之は何事ぞ!?
フラグですか？　いつの間にか木乃香さんフラグ立ててたんですか？

いや、違いますね。

木乃香さんの目はそんな恋する乙女の目じゃありません。
どちらかというと、“ペットの犬と一緒の布団で寝ようとする女の子”って感じです。

あるェ～？
原作のネギより子供っぽくないはずなのに木乃香さんのこの反応はなんなんでしょうか？

第六話　初日？　自業自得（後書き）

原作のネギより子供っぽくないネギ。
ただし大人っぽいというわけではなく、むしろ愛玩動物っぽくなってます。
そりゃ合計２０年もコ○ン君みたいなエセ少年生活送っていたら、保護欲かきたてられそうな雰囲気が素で染み付いてしまいます。

ちなみに寿命を１００歳としたら、１０歳というの年齢は体感時間で人生の５０％以上を占めているそうです。
つまり１０歳までを2回繰り返せば、体感時間的に１００歳越しちゃってるんですよね。

魔法使いってレベルじゃねーぞっ！！！

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第七話　母を訪ねて２５５０里

――――エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル――――

「やあ、エヴァ」

誰かと思えばタカミチか。
手に酒瓶らしきものを数本持っているが。

「それはジジイからか？」

「そうだよ。
あまり学園長から巻き上げないであげてくれよ」

知らんな。賭け囲碁に乗るジジイが悪い。

「持ってきたはいいけど、エヴァは持ち帰れるのか？
１升瓶が４本あるけど」

む、１升瓶が４本。
１０ｋｇ近いな。
今の封印されている私では一苦労だ。

しょうがない。

「私の家まで運べ。タカミチ」

「言うと思った」

「やかましい。
茶々丸に言って茶の一つでもくれてやる」

……うむ、銘柄を確認したが良い酒だ。
さすがジジイ秘蔵の酒なだけはある。

今夜はこれで一杯。

日本酒なら夕食は和食で…といきたいところだが、残念ながらこの酒はお預けだな。

「ところでエヴァ。
風邪の方は大丈夫かい？」

「微妙だな。
昨日の夜から微熱が続いているが、経験的に少し酷くなりそうだ。
本当なら今日だって、茶道部の学期初めのミーティングがなかったら休むつもりだったんだがな」

くそぅ……。
この“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”と呼ばれた私が風邪を引くことになるとは。

毎回毎回、風邪や花粉症になる度に憂鬱になってくる。
それもこれも全部ナギのせいだ。

……そういえばナギといえば。

「おい、タカミチ。
あのぼーやは本当にナギの息子なのか？
顔は確かにナギそっくりだが、性格が違いすぎるだろう？」

3学期から2－Aの担任補佐としてナギの息子である、ネギ・スプリングフィールドが赴任してきた。
最初はナギの息子だというからどんな破天荒な奴かと思えば、どこにでもいそうなただの子供だった。

いや、10歳で教師の真似事をしているだけで、ただの子供というのは間違いなのだがな。
まだ3日しか経っていないが、落ち着いて教師の仕事もこなせているし、ウチの騒がしい連中も上手に手懐けているようだ。

「ハハハ、言われると思ったよ。
大丈夫。ネギ君は確かにナギの息子だよ。

普通より早く入学した上に飛び級しているからね。
年上に囲まれる生活には慣れているのさ。
実際、向こうの学校でもネギ君より年下の子は、3つ4つ下の学年にならないといなかったらしいからね」

「フン。血のせいか才能もあるようだな。
確か『咸卦法』も既に使えると聞いたが、本当なのか？」

「……本当だよ。
ネギ君に『咸卦法』を見せるようにせがまれたから見せたんだけど、3ヶ月後に次会ったときにはもう覚えていたよ。

……何年もかかった僕はやっぱり才能ないのかなぁ」

大の大人が落ち込むな。

だいたい『咸卦法』は究極技法と言われるだけあって習得が難しい。

もし『咸卦法』が出来るなら、それだけで凄い話なのだぞ。

「魔力の制御も完璧だ。

事前にあのぼーやが関係者だと言われていなければ、おそらく普通の魔法使いでは気づけんぞ」

「ああ、ネギ君はよくハンティングするからね。

獲物に気づかれないようにしていたら、自然とああなったらしい。

本気でネギ君が気配を消すと、僕でもわからなくなる。

昔、ウェールズでネギ君と2人でかくれんぼで遊んだこともあるけど、結局見つけれなかったよ」

そこら辺は実にナギの息子っぽいな。

というか、タカミチほどの熟練者から隠れきることの出来るなんて、あのぼーやはいったい何なんだ?

「ま、ネギ君がナギの息子だってことはそのうちわかるよ」

「なんだ。
あのぼーやは猫被っているのか？」

「いや、ネギ君のはただの天然。
ナギはわざとやるけど、ネギ君は素でやる」

……やけに実感篭った声で言うのだな。なんか遠い目しているし。

そんなに『咸卦法』をアッサリ覚えられたこと気にしているのか？
タカミチの奴、出張多くて疲れているんじゃないのか？

「そういえば、酒４本とは多くないか？
確かジジイとの賭けでは２本の筈だったんだが？」

「ああ、2本は貢物だってさ。
ちゃんと今夜の集まりには出てくれよ」

……今夜の集まり？

ああ、魔法関係者の顔合わせのことか。
そういえば今日だったな。

麻帆良にはあのぼーやのように、日本以外からも魔法関係者が先生や生徒としてやってくる。

日本と海外では1年のタイムスケジュールが違う。
ぼーやのように3学期からの赴任となるようなのがいるから、こんな時期にも顔合わせをすることになってしまう。

「エヴァだって面倒臭いのは嫌だろう。
前みたいに、勘違いした人がエヴァを闇討ちしようとするみたいなことは」

「確かに後片付けは面倒臭かったな。
茶々丸もまだいなかったから、私が後片付けしなければならなかった」

「僕も手伝っただろう」

「お前が一番私の家を壊したんだろうが。
いくらなんでも『豪殺・居合い拳』を家の近くで撃つんじゃない」

「いやぁ、あのときはついウッカリ。
修行のおかげで、ようやくガトウさんに近づけたと実感してた日々だったから。

「フン。
襲ってきた生徒は本国送りだったか？」

「本国送りというか、魔法世界の実家に戻ったって感じだね。
まあ、魔法世界で育った人はエヴァの噂を聞いたせいでノイローゼになるのは仕方ないんじゃないのかな。
気の弱そうな子だったし、「麻帆良が“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”に乗っ取られている」なんて勘違いして、“殺られる前に殺れ”って思ったらしいよ。

流石は魔法世界のナマハゲ」

「泣きながら襲ってきたのはそういう理由だったのか。

あと次ナマハゲ言ったら殺すぞ」

むしろ、アレだぞ。
“家族か何かを人質にとられていて、私を襲うように脅迫された”とかそんな感じだったぞ。
家を壊された怒りよりも、泣きながら襲い掛かられるという困惑の方が大きかったな。
子供だったから殺すわけにもいかなかったし。

「そんなわけで学園長も、エヴァのことも少しは情報公開にする気になったらしいよ」

「確かにわずらわしいのは減ったな。
今日はあのぼーやも来るのか？」

「いや、ネギ君は来ない。
教師としての仕事に合格してから魔法関係者に引き合わせるのが学園長の考えみたいだよ」

フム、それは何よりだ。
ぼーやの血を利用して『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』の解呪を考えているが、まだ早い。
ぼーやの性格なども把握しなければならないし、やはり麻帆良の

大停電になるまでは待つべきだな。

今の段階で私が“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”と知られると、ぼーやが何をするかわからん。

その意味ではまだぼーやとは裏では顔をあわせるべきではない。

まだ大人しくしている時期だ。

……ジジイは何か企んでいるかもしれんが。

まあいい、ゆっくり計画を練ることにしよう。

そんなこんなで家に着いたな。

「よし、地下のワインセラーに運べ。

そしたら帰れ」

「茶の一杯ぐらい飲ませてくれよ」

「フン。

茶々丸、今帰った。

茶を2つ頼む」

「お帰りなさいませ。マスター。
そして、いらっしゃいませ。高畑先生」

「お帰りなさい。マグダウェルさん。お邪魔してますね。
タカミチ？　どうしてここに？」

……。

……。

……何でぼーやが家にいる？

「……ネギ君どうしたんだい？
あれ？　ズボンは？」

む、よく見ればぼーやはズボンを穿いておらず、バスタオルを腰に巻いている。
そして茶々丸はというと、ぼーやのものらしきズボンにアイロンをかけている。

……何があった？

「とりあえず事情を説明しろ。

いや、その前にタカミチは酒を地下のワインセラーに運べ。
ぼー…ネギ先生はズボンを穿け。

話しはそれからだ」

「あ、ああ。わかったよ」

「ちょうどアイロンも終了いたしました」

「ありがとうございます。絡繰さん」

――――高畑・T・タカミチ――――

「つまり、

川に流されていた猫を茶々丸が助けようとしたが、
それをネギ先生が代わりに川へ入って助け、
そのお礼にズボンの洗濯をした。

ということか」

「そうです。
この1月の寒い中に、川の中へ生徒を入らせるわけにはいきませんから」

「ネギ先生。私はガイノイドです。
ですので、そのようなことは気になさらずとも……」

ハハハ、ネギ君らしいや。
最初は何事かと思ったけど、聞いてみれば単純な話だった

「……フム。
茶々丸が世話になったようだな。
礼を言おう。ネギ先生」

「いえいえ、教師として当然のことです。
それと申し訳ありません。家主の了解を得ずに家に入ってしまいました」

「いや、構わん。
そのまま帰るわけにもいかなかっただろう。
茶々丸が世話になっておいて、その借りを返さないわけにはいくまい」

そこら辺の貸し借りのことはエヴァもしっかりしてるからな。
最初はナギのかけた『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』の件でエヴァがネギ君にどう対応するか心配だったけど、これなら大丈夫そうだ。

「さて、それではお暇させて頂きます。
絡繰さん、お茶ご馳走様でした。日本に来て久々に美味しい紅茶が飲めました」

「いえ。
こちらこそお世話になりました。ネギ先生」

「タカミチ。
お前も茶を飲んだんだから、もう帰れ」

「ハイハイ。
それじゃ、ネギ君。一緒に帰ろうか」

ネギ君とエヴァがこんなに早く接触することになるとは思わなかったけど、悪い出会いではないから良かったかな。
とりあえず学園長には一言伝えておくか。

「そういえばマグダウェルさん。
その、……失礼なことかもしれませんが、一つお聞きしたいことがあるのですが？」

「……その質問の内容次第だな」

エヴァが“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”であることの確認か？
ネギ君だから、エヴァが“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”だということを知っても別に何もしなさそうだけど。

エヴァも気にしてない振りをしているけど、茶を飲みながら居住まいを正して聞く体勢をとっている。

「言ってみろ。ネギ先生」

さて、何が出てくるかな？
あまり大きいことにならないといいけど。

「マグダウェルさんって、“僕のお母さん”だったりしますか？」

「ブフォッ！！！」

……大きいことだった。

あまりの突拍子の無さにエヴァも飲んでいた茶を吹き出すほどだった。

というか、なんでそんな発想をするんだ。ネギ君？

「マ、マスター。
大丈夫ですか？」

「ゲホッ、ゲホッ……。
き、気管に茶が入った……。」

「……あー、大丈夫ですか？
とりあえず今の反応でわかりましたので、もう結構です。
失礼なこと聞いて申しわけありませんでした」

いや、投げっぱなしにして帰ろうとするなよ、ネギ君。
これでエヴァもネギ君の天然さがわかっただろうなぁ。

「待てっ！　変なこと口走っておいて、さっさと帰ろうとするな！
何でそんなこと聞いたのか説明しろ！　ぼーやっ！

タカミチも呆れてないでぼーやを捕まえろっ！」

いや、僕が呆れてるのはネギ君の天然さなんだが。
ネギ君がどうやってあんな発想に到ったか興味があるから捕まえるけどね。

第七話　母を訪ねて２５５０里（後書き）

もちろんネギは狙ってやってます。
狙ってやってるのもありますが、素でやってるのもあります。
むしろソッチのほうが多いかもしれません。

エヴァに「貴女は僕のお母さんなんですか！？」と聞くようなネギは、今まであまり見てない気がします。

オマケ・没ネタ

ネギ「は、はじめまして。お母さん！
僕ネギです。
お母さんの子供のネギ・スプリングフィールドです。
ようやく会えました……」

エヴァ「ブフォッ！！！
な、何をほざいているんだお前は！？」

ネギ「え！？　そんなっ！？

お父さんからそうだって……」

エヴァ「……ナ、ナギがだと」

ネギ「はい。
これがお父さんの（筆跡を真似て捏造した）手紙です」

エヴァ「み、見せてみろっ！」

ナギ「エヴァへ

呪いを解けに行けなくて悪い。
おそらくネギから話を聞いてワケがわからないと思う。
ネギは俺の息子ではなく、
違法研究で作り出された俺のクローンだ。
研究所を潰したときに保護し、俺の息子ということにした。

エヴァには悪いが、ネギの面倒を見てやって欲しい。
頼める相手が他にいないんだ。

ネギにはエヴァのことを母と伝えてある。
お前に会いにいけるのはいつになるかわからない。
だが、もし次会えたときは、１５年前に言えなかったコトを言うよ」

エヴァ「……」

ネギ「……もしかして、ぼ、僕のお母さんじゃないんですか？」

エヴァ「いや！
私がぼーやの母だ！　遠慮なく“お母さん”と呼ぶがいい！！！」

ネギ「（ニヤッ）お母さーーーん！！！」

※　しばらくは面白いことになりそうだけど、あとで構成に困ると思うので没にしました。

＃　５／２０　全話「・・・」を「…」に修正しました

第八話　その名は迷探偵ネギ

――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル――

「さて、ぼーや。
なんであんなこと聞いてきたのか答えてもらおうか？」

「いつの間にか“ネギ先生”から“ぼーや”に呼び方が変わっていますね」

そんなことはどうでもいいっ！
ええい、タカミチが言ってた「素でやる」というのはこの事か！？

「えーと、まず間違いないと思いますが、一応確認しておきます。
マグダウェルさんは僕の父に倒されたといわれている、“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさんですよね？」

アッサリと聞いてくるな。恐れもせず震えもせずに。
馬鹿なのか大物なのか。

「そうだ。
私は“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”と呼ばれたエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。

ぼーやこそよくわかったな。
今の私は封印されていて、一般人と変わりはないはずだぞ」

「え？　隠す気あったんですか？」

名前も変えていないのに？　と本気で不思議がる顔をするぼーや。
……カワイらしい顔なのに、ムカつくのは何故だろう？

「そ、それでネギ君はどうしてエヴァがお母さんだなんて思ったんだい？」

「んー、というより候補が数人しかいなくて、そのうちの一人がエヴァさんだったんですよ。
理由としましては……」

ぼーやの理由とはこうだ。

?:ぼーやの母は表に出ることの出来ない人物ではないか?

?:今まで聞いたナギの性格からして、ナギはそんなこと気にしなさそう?

?:ぼーやが生まれる前にナギと関わりがあった女性で、表に出ることの出来ない人物は?

?:ナギに倒されたという私がまだ生きている事実は?

?は確かにそうだろうな。

ナギは良くも悪くも有名人だ。

そのナギが結婚したとなると騒ぎになって、その相手も有名になるはず。

しかし、まほネットにもそんな情報は無く、それどころか自分の情報すらあまり無かったという。

まるで隠されているかのように。

それと世話になっている村人や祖父に聞いても一切教えてくれなかったらしい。
そのことから考えると、確かにぼーやの母は表に出ることの出来ないのだろうな。

？も当たっている。
というか、ナギがそんなこと気にするような繊細な性格をしているわけがない。

じゃあ、なんで私には靡かなかった？
……くそぅ、どうせその頃には相手がいたんだろうな。

？と？もわかる。
私とナギが出会ったのは15年前だし、私は表に出ることが出来ない。
それに私が生きているというのも事実なのだから。

「そんなわけで、もしかしたらマグダウェルさんは父と恋仲だったんじゃないかな？　と思ったんですよ。
少なくともマグダウェルさんが封印されただけということは、そこまで悪い関係ではなかったと思うんですよね」

ほ、ほほう……。
私とナギが恋仲か。
別にぼーやはそのことに嫌悪感は抱いておらんようだな。

マ、マズイ。
紅茶のカップを持つ手が震えている。

落ち着け。落ち着くんだ私の右腕。

「悪い関係だったら封印せずに、ブン殴って消滅させていたと思いますし」

「……ああ、ナギならそうするかもしれないね」

……ナギなら確かにそうだろうなぁ。
思えば、よく1ヶ月も付き纏えたもんだ。

「で、もし父とマグダウェルさんの間に子供でも生まれていたとしたら、きっと世間から隠されると思うんですよ。僕みたいに。
そして、その母のことは子供にも明かすことは出来ないでしょう。

マグダウェルさんには失礼ですけど、“英雄”と“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”の子供なんて、他の大人にとっては危険な不確定要素ですから。
その子供は最悪、殺されることだって有り得ます。」

……確かにそうだろうな。
もし、ナギが私を受け入れてくれてたとしても、世間からの迫害は収まることは無いだろう。

突飛なぼーやの話ではあるが、ありえない話しではないと考えてもおかしくはない。

「ちなみにネカネ姉さんを母親候補と疑ったこともあります」

「ネ、ネカネさんは君の従姉！
つまり、ナギにとって姪だろうっ！？」

「だからですよ。
“英雄”が姪を孕ませたとなったら絶対に公には出来ないでしょう。
それに、ネカネ姉さんって僕に激甘というか、ベッタリじゃないですか」

「た、確かにネカネさんは君に甘いが…」

「大丈夫ですよ。“こともあります”と言ったじゃないですか。
そもそもネカネ姉さんは処女ですよ。
材料に処女の血が必要な魔法薬作るとき、自分の血を使ってましたから。
それに僕を産むには年齢が足りないでしょうし、小さいときの馬鹿な考えですよ。

まあ、僕の父なら血が繋がっていようと犯罪者だろうと、惚れた女性ならその気持ちを貫く気がしますけどね」

「……え、えーと」

「？　どうしました、タカミチ？」

……凄いことを考えるな、このぼーやは。
１０歳の考えることじゃないぞ。

しかし、私とナギが恋仲で、ぼーやの母親だと……？
ぼ、ぼーやはなかなか悪くない考え方をするな。ウン。

「まあ、もしかしたらさっき言った事情なのではないかな、と１厘

ぐらい思ってました。
やっぱり違いましたけどね」

1厘!?　0.1%!?

「なんでそんなに低いんだっ!?
私がナギと恋仲だったらおかしいのかっ!?」

「お、落ち着くんだ、エヴァ!」

「え?　いや、マグダウェルさんが僕の母だという可能性のほうです」

「何故だっ!?」

「僕を見るマグダウェルさんの目ですね。
父のことで何か思うことがあって見られていたのでしょうが、母が子を見るような目ではないです」

視線に気づかれていたのか。

確かにナギの息子ということで、何かと見てしまっていたのは確かだが。

「……よくわかったな。
確かに私はぼーやを見ていた」

「狩りをしていると視線に敏感になるんですよね。
獣は人間より可視範囲が広いですし」

どうしようか？
このぼーやに搦め手は通じなさそうだな。
天然さで搦め手に気づかずに突っ切りそうだ。
いっそのこと、『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』のことをバラすか。

「そんなことは別に聞いておらん。
私がぼーやを見ていたのは、１５年前にナギからかけられた『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』を解呪するためにいろいろと考えていてな」

「父がかけた『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』、ですか？
……なんかバグってそうですね？」

「な、なんでそう思うんだい？」

「え？

いや、１５年前にかけられたのなら、今でも中学生やってるのは変でしょう？

小学校１年生から始めたとしても、もう大学生になっているはずじゃないですか。

というか僕の父がかけたものなんですよね？」

お前はナギのことをどー思ってるんだ？

“ナギの仕業＝バグ”の方程式が成り立つなんて。

「アンチョコ見ないと魔法唱えられない人です」

「人の心を読むな。

……間違ってはいないがな。

『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』の方もその通りだ。私は中学生を１５年間ずっと繰り返している。

そして『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』のときも、確かにアンチョコ見ながら呪文を詠唱していたな」

「……ネギ君はナギのことをそんな風に思っていたのか」

「いや、祖父や父の知り合いの村の人に聞くと僕の父ってそんな感じなんですよ。
で、父と直接会ったことのない人達に聞くと“英雄”って言ってました。

どちらを信じるかと聞かれれば、僕は前者を信じます」

……変わったぼーやだな。
少なくともただの正義バカではなさそうだ。

聞こえの良い他人の言葉ではなく、耳障りな知り合いの言葉を信じるのか。

どうしようか？
当初の予定通りこのぼーやの血を頂くのはいいが、この感じなら協力してくれるかもしれんな。
ぼーやを襲って敵対するよりも、素直に協力を要請するべきか？

実戦経験もないぼーやと戦っても負けるとは思わん。
しかし、少し接してみてわかったが、このぼーやはいろんな意味で手強そうだ。

……私のことをどう思うか、少し探りを入れてみるか。

「それにしても落ち着いているのだな。
この“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”が怖くないのか？」

「そうですね。
敵対したら怖そうですけど、敵対しなかったら怖そうじゃないですね」

「しかし、私は過去に何人もの人間を殺している。
そんな私を放っておいていいのか？」

「えー？
マグダウェルさんは少なくとも５００年以上は生きてますよね？
そんな昔の人だったら、現代の人間と倫理観が違って当然なんじゃないですか？
今は人を殺していないのなら、別にいいと思いますよ。

過去に人を食べたドラゴンがいたとしても、洞窟の中でジッとしてるなら手出ししようとは思いません」

「私をドラゴン扱いするか。間違っていそうで間違っていないな。
だが私は賞金首だった。６００万ドルという高額のな。
そしてその首を狙ってきた賞金稼ぎ達を何人も返り討ちにした」

「安いですよ。
先進国の戦車1台の半分ぐらいしかないじゃないですか。
それに賞金稼ぎなら、返り討ちで殺される覚悟はしていたでしょう。
友人だったのならともかく、獲物に返り討ちにされた狩人の仇討ちをしようとは思いません」

……タカミチ。
このぼーやはいったいどんな教育を受けてきたんだ？

正義の魔法使いの考え方じゃないぞ。
それこそ獲物の命を奪ってきた狩人の考え方だ。

そういえば故郷ではよく動物を狩っていたそうだな。
だからこんな考え方をするのか？

しかし、まいった。
この考え方だったら、自発的な協力を期待するというのは難しいかもしれん。
私が“悪の魔法使い”であることを気にしないのなら、私が『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』の呪いに苛まれていることも気にしなさそうだ。

「父親の仕出かしたことの責任を取れ。
ナギは3年で解くと言っていたんだ」

と迫っても、

「僕は父じゃありません」

で終わらせそうだ。

理由が有ったらどんなことでもするが、逆に理由が無かったらどんなことでもしないタイプだ。
力尽くでいくのはタカミチが隣にいるから無理だし、対価を用意してから協力してもらうべきか？

「……あの、ネギ先生」

「何ですか、絡繰さん？」

「私を助けて頂いたのは、マスターと接触するためなのですか？」

「そんなことありません。
絡繰さんを冷たい川の中へ入らせたくなかったからです」

「……あ、ありがとうございます。
しかし、先ほども言った通り、私はガイノイドですので……」

「ストップです。
ガイノイドとか人間とか関係ありません。
僕は助けようと思ったから助けただけです」

茶々丸には優しいのだな。
なんか素直に頼めば、協力をしてくれそうな気がしてきた。

「……ところで“ガイノイド”って“ロボット”のことですか？
絡繰さんは何処となく確かにロボットっぽいですけど？」

「わかっていなかったのかっ！？」

駄目だ、このぼーや。
早く何とかしろ、タカミチ。

「ぼ、僕がかいっ！？」

「お前はこのぼーやの担任だろうが！
ああ、お前の言った通り、このぼーやは確かにナギの息子だよ。
むしろナギより酷いわっ！」

「な、何てこと言うのですか、マグダウェルさん！
僕は父より酷くなんかないですよ！」

「ふ、２人と落ち着いてくれ。
それにネギ君は生徒じゃなくて教師だぞ。

……それでネギ君はどうするんだい？」

「どうする、とは？」

「エヴァのことだよ。
確認するけど、エヴァが“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”であっても問題にする気はないんだよね？」

「それは勿論です。
マグダウェルさんは２－Ａの生徒ですよ」

それは正直ありがたい。
このぼーやの相手をするのは疲れる。
どうしたらこんな子供に育つんだ？

「では『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』のことは？」

「？　別にどうもしないですよ？」

「え！？
ネギ君はてっきり解呪するのに協力すると思っていたのだけど…

……」

これしきのことで困惑するなタカミチ。
お前はこのぼーやのことがわかっておらん。

「じゃあ、私が『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』の解呪に協力してくれと頼んだら？」

「別に構いませんけど？
ああ、解呪のために生贄が必要だとか、非人道的なことだったらお断りしますが」

……やはりな。
そうか。ぼーやはそういう人間なのか。

「君が何を言っているのか分からないよ、ネギ君」

「要するにだ、タカミチ。
このぼーやは“礼には礼を”、だということだ。

ようやくこのぼーやの分からないところが分かるようになってき

た。
天然が混じっているから、分かり難い事この上ないがな。
頼まれ事は、頼まれたら、する。
だが、頼まれなかったら、しない。
例え話になるが、
２つの村があって、その２つとも盗賊の被害に悩まされているとする。
片方の村は助けを求めてきて、片方の村は泣き寝入りしている。
タカミチのような正義の魔法使いは両方助けるが、ぼーやは助けを求めてきている方しか助けん、ということだ」
「他にすることなかったら、ちゃんと両方助けますよ」
「だが、優先順位はつけるだろう？
ぼーやなら先に助けを求めている方を助けるはずだ。
そもそも“他にすることなかったら”という言葉が出てくるだけでおかしい」
「……まぁ。助けを求められているんならそうですね」
助けられる側にも礼儀を求めているな。

ただの甘ちゃんではないぞ、このぼーや。

「し、しかし、初日の宮崎君を助けたのは……」

「アホ。
階段から落ちるような咄嗟の事態で助けを求められるわけなかろう。
宮崎のどかは歓迎会のときにぼーやへお礼をちゃんと言っていたが、もし言ってなかったとしたら……。

そうだな。
もし、同じことがあっても助けることは助けるだろうが、他に危険な目にあっているのがいたらソッチ優先して助けるだろうな。

そうだろう、ぼーや？
無礼者と礼儀者の二者択一だったら、礼儀者の方を助けるだろう？」

「それは確かにそうですね」

フン、正義の魔法使いのジレンマを平気で無視するぼーやだ。
たとえ思っていたとしても、普通の正義の魔法使いでは口に出せ

んぞ。

「では私は何故助けていただけたのですか？
私はネギ先生に助けを求めておらず、むしろ一度は助けていただくことをお断りしたのですが」

「それはぼーやのワガママだ。
ぼーやが茶々丸を助けたかったから助けた。それだけだ。
ぼーや自身がさっき言っていただろう」

私の『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』の解呪についても同じことだ。
緊急性がなく、大事なことならば、ちゃんと礼儀を弁えて協力を願い出るべきだというわけだな。

“正義”だろうが“悪”だろうが、礼儀を持って接してくるものには礼儀を持って接し、礼儀を持たないで接してくるものには上辺だけの対応か。
そして、自分のやりたいことは、やりたいようにやる。
私とはまた違ったタイプだな。

……アルの奴に近いのか？　もう少し快楽主義者になったらそうなりそうだ。
でも、とんでもないことをするのはナギや筋肉達磨（ジャック・ラカン）みたいだし、

生真面目なところはタカミチや詠春に似ている。
“紅き翼（アラルブラ）”の集大成みたいなぼーやだな。

「なら、ぼーや。
さっきも言ったが、『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』の解呪に協力してくれ。頼む」

「さっきも言いましたけど、別に構いませんよ。
ただし、非人道的なことでの解決はしませんし、担任補佐としての仕事の方を優先しますので、そこはご了承ください」

「……エヴァが「頼む」なんて言うなんて。
2人だけで分かり合えているのが不安だなぁ」

安心しろ、タカミチ。
このぼーやの根っこは正義の魔法使いと同じだ。

ただ、正義（オマエラ）の魔法使い以上に“厳しい”だけだ。

――――高畑・T・タカミチ――――

正義の魔法使い以上に“厳しい”だけ。

エヴァの言葉が心に残る。

確かにネギ君は“正義”とか“悪”以前に、“生きる”ということに“厳しい”のかもしれないなぁ。

それと母親についての推理も的外れというわけではない。

片手間程度で探しているみたいだけど、どうしたらいいかな?

「そ、それではネギ先生をエヴァンジェリンの家に置いてきたままなのですか?」

「大丈夫ですよ、ガンドルフィーニ先生。

仲良くなったみたいですし、エヴァはネギ君を客人として扱っていました。

むしろエヴァの方がネギ君を苦手としているかもしれませんね」

僕は学園長に事態の報告をするために先に帰った。
ネギ君は少し残って『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』について調べるようだった。

「待たせたの。
皆揃っておるかな？」

「いえ、まだエヴァは来ていませんね」

魔法関係者の集まりの時刻になったが、まだエヴァは来ていない。
もしかして、『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』の解呪に熱中しているのかな？

「迎えに行ったほうがいいのではありませんか？
ネギ先生を“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”の家に置いていくなんて、高畑先生はいったい何をお考えですの！？」

「まあ、待ちなさい。グッドマン君。
タカミチ君から報告を受けた後に、メルディアナ魔法学校の校長に電話したんじゃがな」

「そ、それはマズイのではないのですか、学園長！？
ネギ先生はメルディアナからの大事な預かりものですよ」

「いや、むしろ謝られてしもうたわい」

「……は？」

向こうの校長もネギ君には苦労していたからなぁ。
というか、ネギ君の被害者第一号が向こうの校長だし。

「この件に関してはあちらとしても問題とする気はなく、麻帆良に一任させてもらえるそうじゃ」

「そ、それは何よりですが……。
よろしいのですか？」

「よろしいも何も、まずはネギ君と話してみないことには始まらんのぉ」

「ああ、それなら大丈夫です。
今日診察して、『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』を解呪出来るかどうか調べ、出来るようだったら学園長に相談しに行くって言ってました。
出来なかったら話はそこで終わりですからね。許可を貰う前にまず解呪出来るか調べるそうです。
解呪出来るにせよ出来ないにせよ、明日にでも学園長に会いに行くと思います」

「フム。そうかの。
何でもメルディアナ魔法学校の校長の話では、“納得は出来ないけど理解は出来る”ということをネギ君はよくするそうじゃ。“理解は出来るけど納得は出来ない”の方かの？
明日、ネギ君とよく話し合ってみるとするとしよう」

個人的には『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』は何とかしてあげたいんだけどね。

さすがに中学生をずっと続けているのは気の毒だしなぁ。
せめて、高校や大学に入ることが出来れば、少しはエヴァも学校に行くのに張り合いが持てるんだろうけど。

「ま、ネギ君の話を聞く前に、今夜のうちにエヴァと少し話してみるかの。

……ム。
話しをしていたら到着したようじゃな」

「失礼します。
申し訳ありません。遅れてしまいました」

絡繰君か。
エヴァもようやく来てくれ……は？

「ちわ～、ネギ屋で～す。
エヴァさんお届けに上がりました～」

……ネ、ネギ君？

「……や、やぁ、ネギ君。
こんな夜中に出歩いてどうしたんじゃ？」

「あ、学園長。
ちょうどよかったです。明日少しお時間いただけますか？
それとエヴァさんお届けに上がりました」

よくよく見れば、ネギ君はエヴァをおんぶしている。
いつの間にかエヴァのこと名前で呼んでるし。
僕が帰った後、何があったんだろう？

そのおんぶされているエヴァはというと、

ネギ君のスーツをシッカリと強く握り締め、
ネギ君の肩に顎を乗せて幸せそうな顔で眠っており、

……ネギ君のスーツの染みになるぐらい涎を垂らしている。

「「「「「「……」」」」」」

誰も何も言えない。
僕もこんなエヴァを見たのは初めてだった。

「……あれ？
もしかして、ここにいる皆さんって関係者の方ですか？」

「あ、ああ。
その通りだ。ネギ先せ「コレッ！　ガンドルフィーニ先生！」
あっ！？　も、申し訳ありません！」

バラしちゃったよ、ガンドルフィーニ先生。
無理ないけど。

「……とりあえずエヴァを起こしてから、話しを聞かせてくれんかのう」

ネギ君。
今度はいったい何をしたんだ？

第八話　その名は迷探偵ネギ（後書き）

ちなみにこの考え方に至ったのは、並行世界では頼んでも誰も結局パートナーになってくれなかったからです。
ネギ君グレちゃいました。

ネギの考え方で敵に対する対応は、

礼儀を弁えた敵　　↓　名乗り終わるまで待つ
礼儀を弁えない敵　↓　名乗り終わる前にフルボッコ

のような感じです。

５／２１　修正しました

第九話　あなたと合体したい

――――ネギ・スプリングフィールド――――

「のわあああぁぁぁーーーっ！！！」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに……」

さすが吸血鬼。
夜になると元気になりますね。

あんなに地面をゴロゴロと転がりまわる元気がでるなんて。

「……そろそろ説明してくれんかの」

「ジ、ジジイ！？
違うんだ！　別に私はぼーやの背中が気持ち良くて寝てたわけじゃないんだ！

ぼーやっ！
さっきのアレをコイツラに見せろ！」

「え？
嫌ですよ。アレは未完成だからあまり見せたくないって言ったじゃないですか」

「ええい、ゴチャゴチャ言うな！
いいからさっさと見せ…って冷たっ！？」

痛いですよ。強く肩を掴まないでください。
それに冷たいも何もそれは、

「エヴァさんの涎じゃないですか」

スーツに涎の染みが……。
スーツ2着しか持ってないんですけど。

「違うっ！　違うんだぁっ！」

「ああ、マスターがあんなに元気そうに……」

「よかったですね。茶々丸さん」

「ウッサイ！　このボケロボッ！
巻いてやる、巻いてやるぞっ！」

「マ、マスター。
そんなに強く巻かれたら……」

ああっ！　茶々丸さんがエヴァさんの八つ当たりに！
わざと狙ってやってる僕ですけど、エヴァさんの茶々丸さんに対する処遇は酷いと思います。

「ネギ君。
何があったか話してくれないかな？」

「簡単に言いますと、エヴァさんおんぶしてたら眠っちゃっただけですよ」

「違うぞっ、タカミチ！
ええいっ、ぼーやはスーツを脱げっ！
茶々丸はそれをクリーニングしてこい！」

はいはい。
染みになって困るのは僕ですから渡しますよ。

「それではよろしくお願いします。茶々丸さん」

「お任せください。ネギ先生。
ネギ先生もマスターのことをよろしくお願いします」

任せてください。茶々丸さん。
それにしても一日でスーツの上下が駄目になるとは……。

いやあ、本当は茶々丸さんと仲良くなるだけのつもりだったのに。
エヴァさんとの本格的な関係を持つのは、原作通りの3年になってからするつもりだったんですがね。
タカミチが側にいれば手荒なことにはならないと踏んで、勝負に出たのは間違いではなかったようです。

“僕のお母さんですか？”という爆弾発言で会話の主導権をとれたのが良かったですね。
あとは“父と恋仲だったのでは？”発言ですか。

あの人何だかんだいって、自分に向けられる好意に弱いですからね。
僕がエヴァさんを悪く思ってないのが分かれば、手荒なことはしてこないと見て正解でした。
仲良くなれて良かったです。

「ハァハァ……」

「大丈夫ですか、エヴァさん？」

「……ぼーやのせいだろうがぁ」

あ、いけね。
苛めすぎた？

「もういいかの？」

「僕はいつでも構いませんよ」

「……好きにしろ」

拗ねないで下さいよ。
今度ミスド買ってきてあげますから。

え？　吸血鬼違い？

「それでは始めるとしよう。

ガンドルフィーニ先生がバラしてしまったので、もう言ってしまうとする。
ここにいるのは魔法関係者の者達じゃ。全員ではないがの。

今日は顔合わせじゃな。
ネギ君のようにタイムスケジュールの関係で3学期から赴任や転校してくるものがおるので、こんな時期にも顔合わせをしておるんじゃよ」

「う、ううぅ……。
申し訳ありません」

ガンドルフィーニ先生が縮こまっています。
まあ、ほとんどの先生は呆気にとられて反応すら出来ませんでしたからねぇ。

「僕は呼ばれていなかったと思うのですが……」

「その通りじゃ。
ネギ君にはまず、魔法使いの修行である“教師の仕事”に専念して欲しかったからの。
慣れるまでしばらくは内緒にしておくつもりじゃった」

ああ、成程ね。
そういうことですか。

「……多分皆が気になっておるだろうから、ネギ君達の説明を先にしてもらおうかの」

「顔合わせはよろしいのですか？」

「あれだけ騒ぎを起こしておいて何を言うておるんじゃ。皆気になって顔合わせどころではないぞい」

ウンウン、と皆さん頷いていますね。

確かにあんなエヴァさん見たことないんでしょうねぇ。

「あ～、ジジイ。

『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』はとりあえず、修学旅行のような学外活動が出来るのが判明した。

ただし、ぼーやの協力があればの話だがな。

完全な解呪は出来るかどうかはまだわからん。

もう少し時間が欲しいそうだ」

実を言うと方法は知ってるんですよね。

前の世界の経験ありますから。

ただ方法は知っていても、あの固結びになってるスパゲッティコードを解くのがメンドイのは変わらないだけで。

「はい。４月にある修学旅行には、エヴァさんを連れて行くことが出来ると思います。
聞けば今まで１５年間の間ずっと、麻帆良から出ることが出来なかったとか……。
いくらなんでもそれは不憫なので完全解呪の研究の前に、ある程度呪いの修正をして学外活動を出来るようにします」

「ほほお！
わしも解呪を試したことがあるのじゃが、修正すら出来んかったぞい。
凄いのお、ネギ君」

おお！　と周りからも歓声が。

解呪出来ることへの驚嘆7、エヴァさんの呪いを解くことへの不安3といったところですか。
ガンドルフィーニ先生は、……まだ縮こまっていますね。

「そのことについては後日、ゆっくりと時間をとって聞くとするかの。

今話すには時間が足りんわい。

……で、さっきのことは聞かんほうがええのかの？
ネギ君は“未完成”と言うておったが」

「駄目だ。見せろ。
アレをコイツラに見せろ」

「エヴァ……、あまり強制しない方が」

「あー、いや。
まあ、別にいいですよ」

ちょっと苛めすぎちゃいましたし。
少しは機嫌とっておきましょう。

「いいのかい、ネギ君？」

「未完成というか、もう少し別のものにも発展させられそうな感じなだけで。
一応それ自体は完成しています」

「言っておくが本当に凄いぞ。
私でも出来ん」

エヴァさん必死ですね。

「む、エヴァがそこまで言うとは。
では見せてもらおうかの」

「ええと、誰か怪我してる人はいらっしゃいますか？
直接的な治療魔法ではないのですけど」

「ふむ、誰かおらんか？」

「あ、なら私が……。
今日の体育の授業で手をぶつけてしまいまして。

私は聖ウルスラ女子高等学校1年の高音・D・グッドマンと申します。ネギ先生」

あ、脱げ女さんだ。

こうして見ると美人さんなんだけど、脱げちゃうのがなぁ。

「それでは患部を出しておいてください。
直接グッドマンさんに魔法をかけるわけではないので、リラックスしていてください」

さて、それではやりますか。
皆に見えるよう、ゆっくりやっていくよ！

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル
汝がためにユピテル王の恩寵あれ、『治癒（クーラ）』！　術式固定！」

まず、左手に『治癒（クーラ）』を固定状態で待機させておきます。

「むおっ！？　それは『闇の魔法（マギア・エレベア）』！？
どういうことじゃ、エヴァンジェリン！？
何故ネギ君が『闇の魔法（マギア・エレベア）』を使えるのじゃ！？」

「私じゃないぞ。
ぼーやが自分で勝手に覚えてたんだ。
それより見てろ。これからだ」

そして右手に“気”を集めて固定し、
「右手に“気”、左手に“魔法”」
最後にこの2つを合わせ、
「“気”と“魔法”の合一、『闇の咸卦法』」

「……あれは、『咸卦法』じゃないぞ」

「そうだ。
お前の使う『咸卦法』は“気”と“魔力”を融合させて爆発的な力を得る究極技法だ。
だがぼーやは『咸卦法』と『闇の魔法（マギア・エレベア）』を組み合わせ、“気”と“魔法”を融合させたんだ」

「……これが“納得は出来ないけど理解は出来る”かの？
それとも“理解は出来るけど納得は出来ない”じゃろうか？」

「術式兵装『咸卦治癒（マイティガード）』！」

はい、完成です。
名前の通り、プロテスやらシェルやらリジェネっぽいのがこれでかかります。
相手に触れれば、相手も回復します。

「お待たせしました、グッドマンさん。
患部はどちらですか？」

「……ハ、ハイ！
ひ、左手首です」

それではちょっとお手を拝借。
僕の手で脱…高音さんの少し腫れている左手首を優しく包み込みます。

「どうですか、グッドマンさん？」

「あ、温かいですわ、ネギ先生。
痛みも引いてきました」

「ほほお……。
こんなの初めて見たわい。
気と魔法の両方での同時治療か」

「ああ、気と魔力は反発するから同時には使えない筈だがな。
だがぼーやが融合させているから、反発せずに対象を回復させている。
単体の治療よりも掛算的に効力がアップしているな」

「ちなみに風邪とかも治せますよ。
治すというより、自己回復力を促進させた結果で治るみたいですけど」

だから僕はこれ覚えてから風邪引いたことないんですよね。
あれ？　なんかフラグが倒れた気がするのは気のせいかな？

「おい、高音・D・グッドマン。
ぼーやにおんぶしてもらえ」

「!?　な、何を言われるんですか、貴女は!?」

「いいからやれ」

「しかし、こんな人前でなど。
それにネギ先生の小柄の体では重いでしょうに」

「あ、僕は大丈夫ですよ。
『咸卦法』の身体能力向上のおかげで、女性の1人や2人は楽に背負えます」

役得、役得♪
さあ、胸を背中に当てるがいい!

「10歳相手に照れるな」

「うっ!

た、確かにネギ先生は１０歳ですから……。
わかりましたわ。それでは失礼いたします。ネギ先生」

「はいはい、どうぞ」

ギュム、ポニュン！
擬音をつけるとしたらこんな感じです。

「どうだ、高音・Ｄ・グッドマン。
ぼーやの身体は気持ちいいだろう。クックック」

「変な言い方はしないで下さい！
……で、ですが、確かに気持ちいいといいますか安心するといいますか、小さいときに親におんぶしてもらったのを思い出しますね」

「この『咸卦治癒（マイティガード）』は、密着すればするほど効果が伝わりやすくなります。
『咸卦法』の利点だけではなく、怪我の治療、体力回復促進、魔力回復促進、気回復促進などがあります。
戦闘関係だけでなく、美肌、シミ、ソバカス、肌荒れ、冷え性などにも効果があるらしいです」

「そうか。
だからエヴァはネギ君におんぶされていたのか」

「……その通りだ。
おかげで私の風邪もすっかり治った」

これのおかげで元々美人だったネカネ姉さんがますます綺麗になりました。
ドネットさんも２０代前半に見えるようになりました。
あの人アラフォーなのに、元々２０代後半くらいには見えていましたがね。

というか、葛葉先生達女性教師陣が凄い目でコッチ見てるんですけど！？　メッチャ怖いんですけど！？
高音さんの僕にしがみつく力も増したんですけど！？
グエェッ！

「凄いのぉ。
念のために聞いておくが、副作用とかはないんじゃろうな」

「こ、この出力だったら問題ありません。
ただ、出力を上げすぎると問題があります。

あまり水を上げすぎると草木が枯れるように、過度に出力を上げすぎると生体組織を破壊してしまうんです」

これでダメージを与えると回復不能な傷となります。
要するに『過剰回復呪文（マホイミ）』です。
エヴァさんなら患部を切り落として根元から再生することも出来るのでしょうが、普通の人間だったら無理ですね。

この術の問題点はまだあります。
出力弱いと、相手を攻撃しても相手が回復しちゃうんです。
いくら殴っても死なないので、ハッキリ言って拷問です。

で、出力強いと『閃華裂光拳』が常時発動してしまいます。

いやあ、実を言うと、カモ君はこれのせいでアルちゃんになってしまったんですよ。
ネカネ姉さんの下着を盗んだおしおきにちょっとナニを握り潰してたら、うっかり出力間違って治せなくなっちゃいまして。

「あ、いけね。やっちゃった」

って思いました。アハハ。

ちなみに潰したときは「プチュギュッ！」って感じでしたね。

「この『闇の咸卦法』の利点は方向性を持って能力を強化させることが出来ることですね。

『咸卦法』は全体的に能力強化しますけど、『治癒（クーラ）』を合成したら見ての通り回復能力に特化、『戦いの歌（カントゥス・ベラークス）』を合成したら運動能力に特化出来ます」

「……それにしても『闇の魔法（マギア・エレベア）』と『咸卦法』を組み合わせたから『闇の咸卦法』か。

正直、安直すぎる名前だと思うぞ？」

え？

わかりやすいんだからいいじゃないですか。

――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル――

敵にしなくて良かった、と安心すればいいのだろうか？
それとも味方となったせいで、コッチが振り回されそうなのを心配すればいいのだろうか？

「こんなの開発してみたんですけど、どう思います？」

と、いきなり『闇の咸卦法』を見せられたときは、正直心底驚いた。
『闇の魔法（マギア・エレベア）』は禁呪と言われるだけあって、人の身体で扱える技法ではない。
ぼーやは私の逸話を聞いて自己流で覚えたらしいが、「反動は大丈夫なのか」と聞いてみたが、

「え？　『闇の魔法（マギア・エレベア）』の反動？
何です、それ？」

馬鹿か、ぼーやは。

気づいてないのではなく、本気で扱いこなせているみたいだ。
『闇の魔法（マギア・エレベア）』を使うには、善も悪も全てを飲み込む度量が必要なのだが、きっとあのぼーやは「細かいことはいいんですよ！」で終わらせたな。

ああ、タカミチが疲れた感じで遠い目をしていた気持ちが良く分かる。
『咸卦法』をアッサリ覚えられたタカミチもこんな気持ちだったんだろうなぁ。

平気で『闇の魔法（マギア・エレベア）』扱っているので、ポテンシャルはナギより上かもしれんな。
いくらナギでも１０歳であそこまでは出来なかっただろう。

それとも『咸卦法』を併用していることで良い影響を及ぼしているのか？
今度ジックリぼーやと魔法について話してみるとするか。

そのぼーやはというと、魔法関係者に囲まれて大変そうだ。
特に女の魔法先生が凄いな。『咸卦治癒（マイティガード）』の効能を狙ってぼーやに触りまくっている。
ぼーやが少し引いているぐらいだ。

奴らは“英雄の後継者”になれるように見えるぼーやの出現に大喜びのようだが、果たしてそう上手くいくかな？
あのぼーやは一筋縄ではいかないぞ。

現にタカミチは浮かない顔をしている。
これから大変だということに気づいているんだろう。

ま、私には麻帆良の教師共がどうなろうと関係ない。
『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』が解かれるまでぼーやに何かあると大変だから、少しは様子を見るが……ム、この反応は。

「オイ、ジジイ」

「？　なんじゃ、エヴァンジ「「「「「ピリリリッーーーー！」」」」」ぬお！？　何事じゃ！？」

感じ取った反応のことをジジイに伝えようとすると同時に、ジジイたちが持っている携帯電話が一斉に鳴った。
ちゃんと監視当番の奴らも気づいたか。

「エヴァッ！？」

「ああ、侵入者だ。
数は…2か3。
数が少ないし、反応も小さいからコソ泥だろうな」

たまにこういう奴らが沸いて出てくる。
狙いは図書館島か？

東西の対立が激しい数十年前は、直接西がちょっかいをかけてきたらしいが、科学文明が発達した現代ではそれも収まっている。
こんな街中で魔法を隠せるわけないからな。“魔法の秘匿”は東西変わらずの共通認識だ。
今の東西の対立はそれこそ冷戦さながらの静かなる戦争だ。

そして残った侵入者は、要するに泥棒。
まあ、麻帆良はいろいろと魔法関係でも貴重なものが保管されているからしょうがないのだろうが。

あとは世界樹の魔力に引かれて集まってきた、人ならぬものたち。
同じクラスの桜咲刹那は神鳴流を修めているため、たまにその対応を依頼されるらしい。
魔を払うのは神鳴流の専売特許だからな。

「おかしい。重要な施設には向かっていないぞ。
アッサリと見つかっているし、コッチは陽動か？」

「フム、陽動の可能性があるのなら、どんな事態にも対応出来るように戦力は残しつつ、尚且つ迅速に対応するために戦力をある程度ばらまく必要があるの」

矛盾した言い方だがその通りだな。
一箇所に固まっていたら咄嗟の対応が遅れるが、戦力を分散させたら戦力が足りなくなる可能性がある。

「それでは、タカミチ君はここにわしと残ってくれ。もしものときの予備戦力とする。
そうじゃな……、ガンドルフィーニ先生！
君の班が侵入者の確保に当たっとくれ。
残りの者はそれぞれの担当場所で待機。周辺を監視しつつ、いつでも動けるようにの」

「私も行こう。
今日は良い気分なんだ。たまには自発的に協力してやるよ」

フフフ、『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』が解けると分かったら気が楽になった。
それにぼーやにはみっともない姿を見せてしまったからな。
少し見返してやろうではないか。

「では行くぞ。
ついてこい、ガンドルフィーニ。

ハァッ！　って…へぶっ！？」

「！？
エヴァさん、どうしたんですかっ！？」

くぉっ！　飛ぼうと思っても飛べなかった。
顔面を思いっきり地面に打ち付けてしまった。

しまった。今夜は三日月にも満たない月齢だ。力が全然使えん。
茶々丸は……、ぼーやのスーツを洗濯に行かせてるんだった。

「だ、大丈夫か……？
エヴァンジェリン……」

見るな。私をそんな憐れんだ目で見るんじゃない！
ガンドルフィーニ。お前は私を凶悪犯だと思っているはずだろう！
高音・D・グッドマンも佐倉愛衣も信じられないようなものを見る目で私を見るな！

「エヴァさん、今治しますよ」

ぼーやの『咸卦治癒（マイティガード）』で痛みが引いていく。
直接顔を触られるのが少しくすぐったいが、今はそんなこと気にしておれん。

「くそぉっ、茶々丸がいれば……」

「僕がエヴァさんを連れて行きますよ。
僕のスーツを洗濯するために茶々丸さんはここにいないのですから、茶々丸さんの代わりぐらいは務めます。
茶々丸さんにはエヴァさんのことをよろしくお願いされましたからね」

「お、おい。ネギ先生。
いくらなんでも危険だ」

「大丈夫です。
ラス・テル・マ・スキル・マギステル　『リゼル』！」

ム！？
ぼーやが魔法を唱えると、ぼーやの身体が紺青色の装甲に覆われ、茶々丸よりも更にロボットっぽい姿に変身した。
『闇の咸卦法』だけでなく、こんなオリジナル魔法を使えるのか！？

「日本に来ることになってから急遽開発したオリジナル魔法です。
認識阻害の魔法もかかっていますし、最悪これなら一般人に見られた場合でも魔法とは思われません！」

確かにこの姿見て“魔法使い”を思いつくのはおらんだろうな。
でも、何か根本的に間違ってないか？

ガションガション！　とぼーやの身体が折りたたみ、今度は飛行機のような形に変形した。

「乗ってください。
目的地までエスコートします」

「フン、いいだろう。ぼーやなら問題あるまい。
さあ、私を戦場まで連れて行け！」

「待ちたまえ、ネギ先生！
何で、こんなのを」

「日本といったらロボットアニメでしょう！」

「そういう意味じゃないっ！」

ガンドルフィーニも大変だな。
私もこのぼーやには苦労したからよくわかる。

しかし、明らかにこのぼーやはお前達より強いぞ。

「よし、アッチの方向だ」

「はい。しっかり掴まっていてくださいよ。
ネギ・スプリングフィールド、『リゼル』、行きまーす！」

ギュオン！

あっという間に加速して、世界樹前広場から抜け出る。
ちゃんと認識阻害もかかっているし、障壁があるためか風圧がこない。
相変わらず、よくわからんぼーやだ。

さて、それではこのぼーやに“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”の力を見せてやろう。

第九話　あなたと合体したい（後書き）

オリジナル技法出来ました。
『闇の咸卦法』です。そのまんまですね。

作中の説明通り、『咸卦法』が“気”と“魔力”の合成なら、『闇の咸卦法』は“気”と“魔法”の合成です。

今までどこかで使われていそうな設定ですけど、多分使われていないと思います……。
少なくとも“闇の咸卦法”でググっても出てきませんでした。
もし、被っているところがありましたら教えてください。

ちなみに、第一章の“その後の話・小ネタ”の【闇の魔法（マギア・エレベア）？】付近や【『咸卦法』と『闇の魔法（マギア・エレベア）』の同時発動は出来るようになりました】等が伏線でした。
出すことを予想してた人はいましたでしょうか？

それと、西の術者が麻帆良に攻めてくるような設定はこの作品ではありません。
というか、そんな事実があったらネギを西にやったりしないでしょう。

そもそもあんな広大な麻帆良を数百人程度では守りきれない上、“昼のうちに麻帆良に一般人として入り込めばいいじゃん”とかいろいろ卑怯な事が思い浮かんできたので、東西の関係は冷戦となりました。

もしかして私は腹黒いのでしょうか？

ちなみに、せっちゃんも警備員としては働かずに、このちゃん護衛優先です。

原作において、学園祭前のネギと魔法関係者との顔合わせの際に、魔法先生がたくさん居たことを「私も知りませんでした」という発言を刹那がしているので、あまり魔法関係者との接点は無いのでは？

龍宮隊長とは仕事を何度かする仲ということらしいので、学園長からの依頼があれば神鳴流を振るう傭兵のような感じでしょうか？

ただし、無報酬。

モビルスーツ紹介（Ｗｉｋｉから抜粋＋個人的感想）

『リゼル』

正式名称「“Ｒｅ”ｆｉｎｅ“Ｚ”ｅｔａ Ｇｕｎｄａｍ“Ｅ”ｓｃｏｒｔ“Ｌ”ｅａｄｅｒ（リファイン・ゼータ・ガンダム・エスコート・リーダー）」

頭文字の略称からＲｅＺＥＬ（リゼル）と通称される。

バックウェポンシステムによる準変形機構ではなく、メタスのよ

うな変形機構を持ち、その名が示すようにバックパックにジェガンを牽引できるグリップが設けられており、サブフライトシステムとしても運用できる。

メガ・ビーム・ランチャーとスピードを抜けば「変形しなければただのジェガン、変形してもただのメタス」でしかないらしいが、作者としては好みのモビルスーツ。

造形的にデルタプラスよりも好みです。

第十話　高畑・T・タカミチの憂鬱

――――高畑・T・タカミチ――――

「それでは昨日のことを話し合おうとするかの。
皆忌憚のない意見を言っとくれ」

昨日の騒ぎから一晩たった。
無事に侵入者も捕まえたのだけど、ネギ君の処遇が問題になった。

ハア、ネギ君は次から次へとまったくもう……。

「まず、昨日の侵入者騒ぎのことを改めて簡単に説明しますと、私達が駆けつけたときには既に終わっていました。
ネギ君達、侵入者双方に怪我はありませんでした」

「フム、それはなによりじゃ。
しかし、ネギ君のことは如何しようかのお……」

「学園長！
まさかネギ先生を警備に参加させるおつもりではないでしょうな！？
彼はまだ１０歳ですよ！」

「待ってください、ガンドルフィーニ先生。
ネギ先生は裏の事情を知ってしまいました。少なくとも私達の方からも説明した方がいいのではないでしょうか？
１０歳だからといって、蚊帳の外にするわけにはいかないでしょう。

それに警備に参加させなくとも、治療チームとして働いてもらえばいいのではないですか？
おそらく彼は麻帆良でもトップクラスの治癒術士ですよ」

「……葛葉。顔がニヤついているぞ」

いつになくご機嫌で肌が艶々としているなぁ、葛葉先生。
ネギ君の『咸卦治癒（マイティガード）』がそんなに気に入ったのかな？

「僕は葛葉先生に賛成ですね。
ネギ君は頭が良いし勘も鋭いですから、秘密にすべきもの以外は話した方がいいと思います。

それに身を守るぐらいの実力はあるでしょうしね」

というか、事情説明しておかないと、身を守るために過剰反応しそうなんだよね。

へたしたら女子寮を気づかないうちに結界で覆っていたとかありえそうだし。

「よろしい。事情は説明することにしておこう。

今日これからネギ君が来る予定なので、そのときに説明する。

しかし、警備に参加させるのは早いじゃろ。

教師としての仕事もちゃんと出来ていると報告は受けておるが、まだ始まったばかりだしの。

……そうじゃなぁ。

我々の手で負えない怪我人が出たときはもちろん手伝ってもらうしかないが、基本的には治療チームにも不参加じゃ。

確かにトップクラスどころか最高の治癒術士かもしれんが、昨日の様子では怪我人以外の患者が殺到しそうじゃからの。

しばらくは様子見じゃ。教師の仕事に専念してもらう」

「そんなっ！？」

絶望しないでくださいよ、葛葉先生。
しかし、様子見か……。
なんか不安だな。

「学園長。
基本的にそれで大丈夫だと思いますが、ネギ君に首輪をつけた方がいいと思います」

「どういうことじゃな、タカミチ君？」

「エヴァの手助けをしたようにネギ君の性格からして、彼の方から危険なコトに首を突っ込む可能性があると思います。
危ない目にあっている人や困っている人がいたら、きっとネギ君はその人を助けるでしょう」

「……フム、確かにそれはありそうじゃな」

「ですので、……そうですね。
“女子寮の警備”を任せたらどうでしょうか？

もし侵入者が女子寮に攻撃してきたら、どちらにせよそこに住んでるネギ君は防衛のために戦わざるをえないでしょう。
それならば最初から女子寮の警備を任せて、その場から動かさないようにした方がいいと思います」

女子寮に攻めてくる敵なんかそもそもいないけどね。
ネギ君に鎖に繋がっている首輪をつけるほうが大事だ。

「なるほど。それなら安全ではないでしょうか。
侵入者などの異常事態が発生した場合はネギ先生にも連絡が伝わるようにしておいて、本人に警戒するようにしておいてもらえばいいでしょう」

「そうですね。
それにネギ先生は木乃香お嬢さまと同室です。
今まで危険なことはありませんでしたが、木乃香お嬢さまを守る人間が多いに越したことはありません」

「私もそれでいいと思う。
何もないとは思うが、警戒しているのとしていないのでは大きな差があるからな」

「女子寮の警備か。
ウチの娘も寮に住んでるし、それなら安心できるな。」

ガンドルフィーニ先生、葛葉先生、神多羅木先生、明石教授から賛成の声が上がる。
他の先生方も特に反対は無いようだ。

「フム、よかろう。
ネギ君には女子寮の警備をお願いするとしよう。
ただし、あくまで異常事態が発生した場合のみであって、普段は教師の仕事のみとする。

……しかし、ネギ君は戦いの仕方を知っておるんじゃろうか？
女子寮を燃やされでもしたら大変じゃぞ」

「……確かにそうですね。
メルディアナでも今は戦闘方法なんかは教えていないようですし」

あの気配遮断からしてむしろ暗殺向き？
瞬動もおそろしく静かに出来るんだよね。

でも、昨日のモビルスーツというのは僕も初めて見たしな。
日本に来ることになってから開発したとか言ってたな。

「昨日中断した顔合わせを今日やり直すのですよね？

でしたら、そのときに誰かと模擬戦でもしてもらえばよいのでは？」

「それもそうじゃな。
中断したとはいえ、昨日で顔合わせは大体終わっとるから問題ないじゃろ。
こういうのに顔を出さない連中も、興味を持って出てくるかもしれんしの。

よし、時間も経ったしこんなとこじゃろ。それではこれにて解散。
模擬戦の話を皆に広めておいておくれ。そしたら皆興味を持って見にくるじゃろ。
タカミチ君はネギ君を呼んどくれ。彼からも事情は聞いておきたいしの」

ふう、何とか無事終わったな。
まさかネギ君が来てから4日でこんな事態になるとは思ってもいなかった。
別にネギ君自身が悪いことしたわけじゃないんだけど、ネギ君の運が悪いのかなぁ。

コンコン、とドアがノックされた。
ネギ君が来たのか。

「学園長、ネギ・スプリングフィールドです」

「おお、開いとるよ。入りたまえ。
わざわざすまんの。聞きたいことがあるのでな」

そういえば昨日は結構夜遅くまで残らせてしまったけど、大丈夫だったかな。
ちゃんと授業の補佐はしてくれてたけど、無理をしていないといいが。

「いえ。
僕の方からも学園長にお伝えすることがありまして」

エヴァの件かな？
『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』のコトで何かあったんだろうか？

「ウチのクラスの相坂さんを成仏させようと思うんですけどいいですか？」

「フォッ！？
何を言っとるんじゃ、ネギ君！？」

「いや、調べてみたら６０年ぐらい幽霊やってるみたいじゃないですか。
早く成仏させてあげないと可哀想ですよ」

……ハア、ネギ君は次から次へとまったくもう……。

――――龍宮真名――――

「龍宮。
お前も来たのか」

「刹那か、お前もこんな集まりに出るなんて珍しい。
護衛はいいのか？」

「少しぐらいなら大丈夫だ。
式神も置いてきている」

麻帆良にいる限り滅多なことはないだろうがな。
いつもはこういうのに顔を出さない刹那が出てくるとはね。
さすがに近衛と一緒に暮らしているネギ先生のことは気になったのか。

「それにしても本当なのか？
ネギ先生がもう裏の事情を知ってしまい、しかも女子寮の警備を担当するというのは」

「本当だ。
昨日の顔合わせは私も出なかったが、大騒ぎだったらしい。
女子寮の警備というのはあくまで建前の話だな。
学園長達もネギ先生を危険な目には遭わせたくないようだ」

「確かに今まで女子寮が攻められたことなんかなかったからな。
逆に安全といえば安全か」

それにしても、あの小さなネギ先生がね。
確かに私の魔眼でも、魔力や気のゆらぎがまったく見えないほど落ち着いていたが、まさかエヴァンジェリンの『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』も解呪することが出来るとは。
今日の模擬戦とやらで、ネギ先生の実力が少しはわかるといいが。

「聞いた話によると、ネギ先生の治療魔法は凄いらしいな。
怪我だけでなく、風邪などの病気も治癒出来るらしい」

「ああ、高畑先生の使う『咸卦法』と、エヴァンジェリンの使う『

闇の魔法（マギア・エレベア）』を組み合わせた技法らしいが、詳しいことは直接見てみないと何とも言えないな」

「問題無いならそれでいい。
木乃香お嬢さまに何かあったときでも安心だ」

やれやれ、相変わらず近衛命のようだな。
近衛はお前が頑張っていることを知らないのに健気なものだ。

「何でも、メルディアナの校長を魔法のコントロールに失敗したせいで大火傷を負わせ、それから治療魔法の勉強に力をいれていたようだ」

「ちょっと学園長と話をしてくる」

待て、落ち着け刹那。
刀を握り締めるんじゃない。覚悟を決めた顔をするんじゃない。

「大丈夫だ。ネギ先生の魔力制御は私の眼から見ても完璧だ。
それにさっきの話はネギ先生が3歳の頃の話だぞ。
しかも、生まれて初めて使った魔法での話だ」

「……3歳でか？」

「ああ、凄い魔力を秘めているらしい。それこそ近衛よりも多いらしいぞ。
初めての魔法ということで、その魔力を力一杯振り切ったせいで事故が起こったんだ。
初級魔法の『火よ灯れ（アールデスカット）』がキャンプファイヤーのような火柱になったそうだ。
ちなみに魔力総量は私が魔眼で見ても分からなかった」

「その上『咸卦法』も使えるというのか……」

「体術もそれなりに出来るみたいだな。
ホラ、初日にステッキ術を使うと言っていただろう」

「……それが本当なら末恐ろしいな。
確かにネギ先生の歩き方には隙が無かった」

「ナイフ一本で熊の解体を出来るらしい。
もちろん気も魔法も使わずにな」

「……別の意味で木乃香お嬢さまの近くにいるのが不安になってきた」

その気持ちは良く分かる。
メルディアナ魔法学校長の言によると、
“天災を引き起こす天才児”
そんなものはただの大袈裟な噂じゃないかと、２－Ａ相手に教師をしているネギ先生を見てたら思っていたが、こんな騒ぎを引き起こすとなると噂ではなかったようだな。

「……皆揃っておるようじゃの」

噂をすれば、学園長や高畑先生と一緒にネギ先生の御到着か。
相変わらずの笑顔で、教壇に立っているときとなんら変わりない。
違うのはオコジョを肩に乗せているぐらいか。
これだけ見てると普通の子供なのに。

あ、コッチに気づいたネギ先生が笑いながら小さく手を振ってきた。
フフフ、ああいうところは子供らしくてカワイイな。

それにしても、私達がいることには驚いていないな。
もしかして既に気づかれていたのか？

まあ、エヴァンジェリンのように魔法関係者がいるというのは予想していたかもしれんな。

……それにしても、学園長と高畑先生はやけに疲れた顔していないか？

――――桜咲刹那――――

「……というわけで、これからよろしくお願いします。
普段の警備に参加できませんが、怪我人が出たら言ってください。
大抵の怪我なら治癒できますので。
それと、この子は僕の使い魔でオコジョ妖精のアルちゃんといいます。この子もよろしくお願いします」

パチパチ、と拍手が鳴る。
相変わらず物怖じしない子だ。
何人もの魔法先生から視線を浴びているのに、まったくそれを気にしていない。
多分ウチのクラスの大半よりは大人っぽいのではないのだろうか。

……それにしても、こんなに魔法関係者の顔を見るのは始めてだ。
というか、瀬流彦先生も魔法先生だったんですか……。

「ウム。
といっても、怪我以外のことでネギ先生の手を煩わせてはいかんぞい」

刀子さん達女性が数人崩れ落ちたがどうしたのだろうか？
男性教師は微妙な顔して苦笑いしているし。

「刹那もあと１０年たてばわかるさ」

「なんのことだ？」

「いや、なに。
とにかく崩れ落ちた人たちには事情は聞いてやるな。
大人にはいろいろあるんだよ」

確かに大人になればいろいろしがらみがあるのはわかるが、大人っぽい龍宮がそういうと説得力があるな。
やっぱりこいつは年齢詐し「何か不愉快なことを思わなかったか？」思ってない思ってない。
だからコメカミから銃をどけてくれ。

「さて、それではお待ちかねの模擬戦といこうかの。

ネギ先生の相手になってくれるのはいないかの」

いよいよか。
この模擬戦の結果次第なら大分安心できるようになるんだが。
一緒の部屋に暮らしているネギ先生が頼りになれば、護衛としても期待できる。

……10歳の子供に期待することではないのはわかっているけど。

なんにせよ、怪我のないようにだけはお願いしたいな。
怪我をしたら、お嬢さまが悲しまれる。
弟が出来たみたいで、お嬢さまもたいそうお喜びのことだし。

「では私がやろう。
昨日ぼーやには情けない姿も見せてしまったからな。
ここで汚名返上しておこうか」

エヴァンジェリンさんが!?

あの人がこんなことに参加するなんて思ってもいなかったな。

「よろしいんですか？
まだ封印は効いてますから、本来の実力を発揮できないのでは？
しかも、今夜は三日月ですらないですよ」

「ぼーやに心配されるほど落ちぶれてはいないさ。
確かに今の私の状態は、人間と吸血鬼の悪いところが重なっているような状態だがな。

構わんだろう、ジジイ。
言っておくが、私も金の卵を産む鶏を殺すほど馬鹿ではないぞ」

「……フム、ネギ君は構わないかね？」

「僕は問題ありません。
ただし、さすがにエヴァさん相手なら手加減抜きでいかせていただきますよ。
封印されている故の弱点を容赦なく突かせていただきます」

「構わんぞ。
むしろ手加減するような甘っちょろいことは言うな。
人生はいつも準備不足の連続だ。常に手持ちの材料で前に進む癖をつけておくがいい。

フフ……、私は自分の力で切り抜ける男が好きだぞ？　ぼーや……♪」

……仲良いんだな、あの2人。
エヴァンジェリンさんがあんな風に話すのを初めて見た。

しかし、いくら封印されて本来の実力を発揮できないとはいえ、エヴァンジェリンさん相手ではネギ先生も辛いだろうな。
どこまで食らいつけるのかが見所だ。

……それにしても、

「“封印されている故の弱点”か。どんなのがあるかな？」

「……私だったら魔力不足を突くかな。
今のエヴァンジェリンは魔法薬を補助にして魔法を使っている。
遠距離からネチネチと攻撃をして、魔法薬の枯渇を狙うとかな」

そんなところか。
確かに迂闊に近寄るのは危険だな。

「ああ、茶々丸も参戦させる。
別に問題ないだろう、ぼーや？」

「問題ありません。
主人と従者でセットですからね」

「1対2かい？　それはマズイんじゃないかい、エヴァ？」

いくらなんでもそれは無理なのでは？
子供ならではの無鉄砲さが出たのか？

「そのかわり準備の時間は与えてやる。
『闇の咸卦法』やモビルスーツとやらを展開させるなら待つぞ。

私としても純粋にぼーやの力を知りたいと思っているしな」

「いいんですか？
それなら遠慮なく、
術式兵装『咸卦治癒（マイティガード）』！

並びにラス・テル・マ・スキル・マギステル　『シナンジュ』！」

「ほお！？　同時発動か！？」

あれが『闇の咸卦法』か……。
術の展開速度がとても速いな。
無詠唱魔法も使えるみたいだし、『闇の咸卦法』発動に1秒もかかっていないぞ。

しかも、ネギ先生の後の詠唱が終わると、ネギ先生は赤い装甲に覆われてロボットっぽくなった。
ふむ、確かに魔法の発動は恐ろしく洗練されているな。

「……ウルスラのグッドマン先輩の操影術に似ているな」

「あれは……魔力で編んでいるのか？」

「見た感じそのようだ。装甲を結構な魔力で構成している。生半可な攻撃では効かんだろう。
体中にスラスターがつけられている。おそらくあそこから魔力を噴射して瞬動のように移動するのではないかな？
攻撃方法は手に持っている銃を使うのだろう」

へえ、普通の西洋魔術師とも違った戦い方をするのだな。
武装は腰の裏側と右手に大型の銃を１丁ずつ。あとは左腕の盾か。
でも、おそらく他にもあるだろうな。

「……昨日の『リゼル』とやらとは違うな。
ジジイ、結界を張らせろ」

「そうじゃな、瀬流彦君頼む」

「その間にルールを決めておこうか。ぼーや。
制限時間は１０分。結界を壊すような大技は無し。戦闘範囲は今から張られる結界の内部のみ」

そんなところだろうな。長引いてもアレだし。

しかし、それならエヴァンジェリンさんの魔法薬の枯渇を狙えなくなる。

“結界を壊すような大技は無し”というのはエヴァンジェリンさんには関係ないので、少しネギ先生の行動を狭めたのか。

このルール、エヴァンジェリンさんに少し有利だ。

「だから、ぼーや。
“学園の外に出て、そこから対軍勢用魔法を打ち込む”とかは無しだぞ」

「……わかりました」

「え？　そんなことしないよね、ネギ君？」

え？　「わかってます」じゃなくて「わかりました」？
答えるまでの沈黙が長かったのは何故？

というか、銃の弾を入れ替えないでください。
何を考えていたんですか、ネギ先生！

あ、今度はバズーカを出現させた。
右手に持ってた銃を左手に持ち替えて、右手にバズーカを持った。

「クックック。
そういうところが好きだぞ、ぼーや」

「煽らないでくれよ、エヴァ」

「その“ぼーや”ってのやめてくださいよー」

「フン、私に勝てたら名前で呼んでやるよ」

「あ、いいんですか？」

「構わんさ。
むしろ私に勝てるようなやつをぼーやとは呼びたくない。
……で？
それなら私が勝ったらぼーやは何をくれるんだ？」

「僕が負けても血ぐらいしかあげられませんけど……」

「ほう？　いいのか？」

「コ、コラ、ネギ君。
大丈夫かい、そんな約束して？」

「大丈夫ですよ、タカミチ。
ご飯をシッカリ食べて、『咸卦治癒（マイティガード）』が発動した状態で寝れば、
1日1リットルぐらい吸われても平気です」

「……」

「……いや。さすがにそこまではいらんぞ」

……。

……。

……本当にネギ先生が木乃香お嬢さまの近くにいて大丈夫なんだろうか？

第十話　高畑・T・タカミチの憂鬱（後書き）

相坂さよを成仏させるネギって斬新じゃね！？
と、思ってしまいましたが、流石に可哀想なのでやめておきましたw

タカミチのネギに対する印象は
“好奇心が強い、ドーベルマン並みの能力を持ったチワワ”
のような感じです。
甘噛みされただけで大惨事。

次回からバトル初挑戦です。

ちなみにマナが言及したモビルスーツの耐久は
ランクＥ：通常のネギの魔法抵抗力と同じくらい
ランクＤ：『武装解除（エクサルマティオー）』級の魔法を防げる
ランクＣ：『魔法の射手（サギタ・マギカ）』級の魔法を防げる
ランクＢ：『白き雷（フルグラティオー・アルビカンス）』級の魔法を防げる
ランクＡ：『雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）』級の魔法を防げる

ランクＥＸ：『千の雷（キリアキプル・アストラペー）』級の魔法を防げる

といった感じです。

もちろん個人の魔力によって威力の差があるので、一概には同じではありません。

また、モビルスーツの耐久力に関わらず、シールドの耐久力はランクＡ。

『ユニコーンガンダム』の『Ｉフィールド発生装置付シールド』はランクＥＸです。

ちなみに、高音の『黒衣の夜想曲（ノクトウルナ・ニグレーディニス）』は『雷華崩拳』を防いでましたので、ランクＣの上位といったところでしょうか。

第十一話　模擬戦？　赤い彗星

――桜咲刹那――

模擬戦が始まる。
思えば、エヴァンジェリンさんが戦うところを見るのは初めてだ。

麻帆良に入学する際に学園長から“お嬢様の事を考えるなら絶対にエヴァンジェリンさんには手出ししないように”、と言いつけられていたので、エヴァンジェリンさんとは同じクラスでもあまり接点はなかった。
“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”と呼ばれた彼女とネギ先生はどう戦うのか？

「学園長。
結界の準備が終わりました」

「ウム、それではお互い準備はいいかの？」

「いいぞ」

「よろしくお願いします。ネギ先生」

「あ、いえいえ。
こちらこそよろしくお願いします」

……ネギ先生と茶々丸さんはいつでも変わりないな。
いつでも自然体というか緊張感がないというか。
ロボットである茶々丸さんはわかるが、その茶々丸さんと同じなネギ先生っていったい……。

結界は半径５０ｍぐらいのドーム状。
ネギ先生とエヴァンジェリンさん達は１０ｍほど間合いをおいて対峙している。

「観客の皆は自己責任で怪我のないようにの。
もし、怪我が怖いなら結界の外に出るとよかろう。遠くからこの模擬戦を見ることになってしまうが。

よし、皆準備できたようじゃの。
それでは、……始めいっ！！！」

「行きます！　エヴァさん！」

「来い！　ぼーや！」

模擬戦が始まった。
ネギ先生は「行きます！」の言葉とは裏腹に、後退して距離をとりつつ右手のバズーカを3発発射した。
縮地法とまではいかないが、後退するスピードは速い。

対するエヴァンジェリンさんは『魔法の射手（サギタ・マギカ）』で迎撃。
3本の氷の矢が砲弾3発を正確に射抜いた。

やはり彼女の魔法の技量は凄いな。
あんな高速で迫る砲弾を3発とも簡単に迎撃できるなんて。

ム？　射抜かれた砲弾が爆発すると思ったら、3発とも爆発物ではなくて粉末のようなものが中に入っていたらしい。
3色の粉煙が周りに撒き散らされた。

何だアレは？　煙幕のようだが視界はあまり悪くならない。

「魔力探知の妨害作用をするものだな。
あの粉が撒き散らされたら、魔眼にノイズが見えるようになった。
きっと念話の妨害もするんじゃないかな？」

「まずはエヴァンジェリンさんと茶々丸さんの連携を断つのか。
１０歳の子供らしくない戦い方だな。魔法使いより龍宮の戦い方に近いのか？」

「かもしれんな」

冷静な戦い方だ。
力押しだけではなく、搦め手も使って戦えるのか。
その方がお嬢さまのためにも安心といえば安心だが。

「花粉症の人やニンニクの匂いが嫌いな人は結界の外に出ていてくださいねー！」

「ちょっ！？　ぼ、ぼーやっ！？」

は？　ニ、ニンニク？

「逃げるぞ刹那っ！！！」

え！？　ま、待ってくれ、龍宮！！！

――近衛木乃香――

「……ハァ、やっと終わったぁ～～～」

「あ、今日のノルマ終わったん？
じゃ、ご飯にしよか」

「お願い木乃香～。
今は動きたくないの～」

ネギ君来てからアスナは勉強頑張るよーなった。
やっぱり１０歳の外国人の子供のネギ君に英語を教わるならともかく、国語すら教わるのはマズイと思たんやろな。

ネギ君ってやっぱり頭ええなぁ～。
担当の英語だけでなくて５教科全部出来るって。

「今日ネギは先生方の集まりに出るんだっけ？」

「そうやよ。だから夕飯はいらないらしいわ」

「いいなぁ～。高畑先生もいるんだろうなぁ～。
私も高畑先生と食事したいなぁ～」

「しかし、周り大人ばっかで大丈夫やろか？
お酒とかも出るやろうし、酔っ払いに絡まれないといいけど」

「大丈夫でしょ。
ネギはシッカリしているし」

そうやな。
ネギ君はシッカリしてるよなぁ。
アスナに勉強頑張らせたのも良い例や。

アスナの成績や新聞配達のアルバイトのことを知ったネギ君は、
一言こう言った。

「高校には留年というものがありますよ」

聞いたアスナは石になってたわ。

確かになぁ。
エスカレータ式で高校には上がれるとはいえ、そこで留年したらどうしようもないわ。
留年したら学費や生活費が余計にかかってまうしな。

他にも日本の中学卒業、高校卒業、大学卒業で就職した場合のそれぞれ生涯賃金なんか挙げていって、このままではアカンということをアスナに教えていった。

「日本には“急がば回れ”という言葉があります。
目先のことに囚われず、将来のことを見据えて考えてください」

そないなことを言われたアスナは珍しく一晩中考え込んでたわ。

結局、新聞配達のアルバイトは続けるけど、次の期末テストで最低でも５００位以内に入らなかったら、アルバイトは考え直すということになってもうた。
あのアスナの様子やったら、多分アルバイト辞めることにするんやろな。

他のバカレンジャーの皆にも話をしたみたいやな。

まきちゃん（バカピンク）は高校では赤点とったら部活の大会に出れんこと知ったら愕然としてたわ。新体操頑張ってるからなぁ。

ゆえ（バカブラック）は図書館探検部、くー（バカイエロー）へも中国武術研究会って部活してるから他人事やないしな。赤点で部活出席停止にされたら困るやろうし。

楓（バカブルー）はさんぽ部だから堪えてなかったみたいやけど、「保護者に連絡行くかも？」とネギ君がボソリと言うたら焦ってたわ。

「修行のために麻帆良に来ているので、そんなこと知られたら困るでござる」

「じゃあ、修行（べんきょう）頑張ってください」

で撃沈されたけど。

ま、皆が勉強頑張ってくれるならええーけどな。

高校に入ったはいいけど、留年して違う学年になるのはさすがに嫌やわ。

……ネギ君はせっちゃんも問題あるようなことも言うてたなぁ。

せっちゃん大丈夫なんやろか？

剣道部とかで忙しいんやろうけど、せっちゃんが留年して後輩になったらもっと会えなくなってまう。

ウチになんか出来ることないんやろか？

それにしても、ネギ君は１０歳とは思えんわ。
あんな風に年上相手にも真正面から向かい合って、自分の意見を言えるなんて凄いなぁ。

ネギ君のおかげでアスナも勉強頑張るようになったし、ウチもネギ君を見習って真正面からせっちゃんに立ち向かってみよかなぁ。

――――高畑・Ｔ・タカミチ――――

ネギ君は相変わらず卑怯だなぁ。
……卑怯というか手段を選ばないというか。

「エヴァンジェリンの負けですね」

「そうだね。
龍宮君と刹那君もコッチに逃げてきたのかい」

「さすがにニンニク臭くなるのはちょっと……。
というか、ネギ先生のあの動きは何なんですか？」

あの3発の砲弾はそれぞれ魔力探知・念話妨害煙幕、ニンニク粉末、花粉の3つだったらしい。
おかげでエヴァはニンニクの匂いと再発した花粉症に悩まされた上、絡繰君への指示を口で叫んでしなければならないために、ネギ君に先手を取られ続けている。

絡繰君は逃げるネギ君を追って接近戦に持ち込もうとしているが、まったくネギ君を捕まえられない。
エヴァはたまに絡繰君の援護射撃を試みているが、花粉とニンニク粉末でそれどころではないようだ。

ネギ君は絡繰君を軽くあしらいながら、左手の銃でエヴァの魔法障壁を何度も撃ち抜いている。
エヴァの魔法障壁をあんなに簡単に撃ち抜くなんて……。

魔法障壁を撃ち抜かれる度に、エヴァは花粉とニンニク粉末の被害を受ける。
『氷盾』ならネギ君の銃を防げるんだろうけど、『氷盾』を唱える暇をネギ君は与えない。

確かに真正面からエヴァと戦っても勝機は薄いからしょうがないんだろうけど、ここまでくるとエヴァが可哀想だ。

「くそっ！　ぼーやっ！
いつの間にこんなモノを用意したっ！？」

「この魔法を開発したときにですっ！
ちなみにこれは本物じゃなくて、こういう匂いがする物質化した魔素です。あとには残らないから大丈夫ですよ！
他にもワサビや唐辛子等の用意もしてますけど！？」

「ゲホッ、ゴホッ、いらんわっ！
さっさと捕まえろ！　茶々丸！！！」

「は、はい！
マスター……」

絡繰君では無理だろう。２人には機動力に差がありすぎる。
絡繰君は背中と足裏のスラスターでネギ君を追っているが、ネギ

君は背中や脛、肩などの全身についているスラスターで逃げ回っている。
ネギ君は物理法則をまるで無視したような動きをしているな。

「あんな動き、普通出来るわけないですよ。
目に見える分、縮地法よりは遅いんでしょうが、動きが自由すぎます」

「ああ。というか、よくネギ先生はあんな動きをして平気だな。
自由機動というより変態機動の域に達しているぞ。あんな機動をしては身体が持たないだろうに」

「多分、『咸卦治癒（マイティガード）』の効果だろうね。
『咸卦治癒（マイティガード）』を発動していると、儀式魔法に匹敵するほどの回復魔法を常にかけられている状態になるらしいんだ。
多少手荒な動きをしても大丈夫らしい」

ダメージを受けても、片っ端からどんどん自動で治していくみたいだからね。

お？　エヴァが虎の子の魔法薬を取り出した。
大技で勝負に出るつもりか？　確かにこのままではジリ貧だしね。

「マズイぞ、エヴァンジェリン。
それは誘いだ」

「どういうことだ、龍宮？」

「ああ、さっきからネギ君は絡繰君をあしらっているだけで、彼女には攻撃していない。
おそらく怪我をさせないように手加減しているな。
エヴァは花粉やニンニクのせいで冷静になれていない」

「いや、あんなことされたら誰だって冷静になれないと思いますよ」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！
来たれ氷精　闇の精！
闇を従え　吹雪け　常夜の氷雪！」

『闇の吹雪』か！
今のエヴァの状態なら、ありったけの魔法薬を使ってあの魔法一発が精一杯だな。
エヴァの詠唱に気づいたネギ君が、バズーカをエヴァに向かって

連射するが間に合わない。

「『闇の吹雪（ニウィス・テンペスタース・オブスクランス）』ッ！！！」

エヴァの魔法が放たれた。

ネギ君が撃ったバズーカの弾を飲み込んで、真っ直ぐネギ君に迫る。

飲み込まれた弾は爆発し、煙を撒き散らして視界を悪くする。

煙幕かっ！？

直進した『闇の吹雪』を食らったネギ君は爆発した。……って、ええええぇぇっ！？

「ちょ！？　ネギ先生っ！？」

「大丈夫だ2人とも。あの爆発はネギ先生のものじゃない。

腰の裏に付いていた白い円柱を切り離して、先に『闇の吹雪（ニウィス・テンペスタース・オブスクランス）』にぶつけて爆発させたんだ。

おそらく魔力タンクじゃないかな？」

さすがは龍宮君。狙撃手だけあって目がいいな。
少し焦っちゃったよ。

戦況はわからない。
バズーカの煙幕とその魔力タンクらしきものの爆発で視界が悪い。
聞こえてくる音も絡繰君のスラスター音のみだ。

あ、それが狙いか！？

「茶々丸っ！　下だっ！！！」

エヴァの叫びと同時に、絡繰君が身体の中心を撃ち抜かれた。
と思ったら、あれは『魔法の射手』の『戒めの風矢』か。
絡繰君が捕まったな。

煙の中から出てきたネギ君は既にバズーカを捨てていて、腰につけていた銃を持っていた。

あれで『戒めの風矢』を撃ったのか？

そのまま落ちてくる絡繰君を受け止め、もう一度零距離で射撃したけど空砲だったみたいだ。

弾丸が撃発されたけど、何も起こらなかった。

「ハイ、これで茶々丸さん撃破です」

「……くうぅっ！」

「も、申し訳ありません。マスター」

「あと４分ありますけど、茶々丸さんはこれで退場でいいですね。結界の外に運びますので、ちょっと待っててください」

「さっさとしろっ！

……コイツラは父子揃ってニンニクを……っ！」

絡繰君がコッチに運ばれてくる。
怪我はないようで何よりだ。

「大丈夫ですか、茶々丸さん？
タカミチ、茶々丸さんのことお願いしますね」

「ああ、わかったよ。ネギ君」

「ありがとうございます。ネギ先生。
お、重くないでしょうか、私……」

「？　大丈夫ですけど？」

絡繰君がやけに動揺しているな。こんな絡繰君は初めて見た。
ネギ君にお姫様抱っこされているからかな？

「それじゃ、いってきますね」

「い、いってらっしゃいませ」

「頑張るんだよ、もう少しだ」

「頑張ってください。ネギ先生」

「いやあ、凄いね。ネギ先生」

でも、あんまり頑張り過ぎないようにね。
あとが大変だから。

「……あ？」

「どうした、龍宮？」

「エヴァンジェリンの背後から、
……サングラスとガスマスクして手榴弾を持ったオコジョが接近している」

「「……君（お前）は何を言っているんだ！？」」

「ほ、本当だっ！！！」

って、よく見ると本当だったっ！？
エヴァー、後ろ後ろーーー！！！

――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル――

……油断した。

あのぼーやを相手にするのだから油断するつもりはなかったが、それでもまだあのぼーやを甘く見てた。

ええいっ！　父子揃ってニンニクを使ってくるとはっ！
花粉症で悩まされていることは昨日、『咸卦治癒（マイティガード）』の治療中にウッカリ言った覚えがあるが、ニンニクのことは一言も喋ってないぞ。

やっぱり、あのぼーやはナギの息子だ。
発想が同じじゃないかっ！

クソッ！
あの『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』をかけられたときの思い出がフラッシュバックしたせいで冷静になれず、茶々丸を撃破されてしまった。

『闇の吹雪（ニウィス・テンペスタース・オブスクランス）』が防がれた以上、魔法はもう通じん。
となると、人形使いの技法である糸を使って何とかするしかあるまい。
ぼーやがもう少し近づいてきて、隙が出来れば……。

「お待たせしました、エヴァさん」

「なに、大丈夫だ。
今来たところだよ」

「そうですか。お待たせしたようで申し訳ありません。
デートの続きといきましょうか。美術館と遊園地のどちらがお好きですか？」

「さてな？
麻帆良内にある美術館には行ったことがあるが、遊園地には行ったことはないのでな」

「奇遇ですね。
僕も遊園地に行ったことないです。
一度ジェットコースターとやらに乗ってみたいものです」

ジェットコースターよりもお前のあの動きの方が面白いだろうよ。
何なんだ！？　あの変態機動は！？

「……あれ？
そういえば僕って美術館にも行ったことないぞ。
というか、イギリス出身なのに大英博物館にすら行ったことない……」

それは勿体無い。って、そうじゃないっ！
駄目だ、あのぼーやはやっぱり天然だ……。

「そうか。
それなら私に勝てたら、私がぼーやに美術館へエスコートされてやろう」

「あ、是非お願いします」

「フン、正直驚いたぞ。
私の封印があるとはいえ、まさか2対1でここまでやられるとは。
ぼーやを甘く見ていたつもりはなかったが、それでも警戒が足りなかったらしいな」

……あと、２ｍ。

「いえいえ。僕が不利なわけじゃないですよ。
主人と従者がセットなのが当然なら、
もちろん主人と使い魔だってセットですから」

ピンッ！　と、安全ピンを抜くような音が背後から聞こえた。
それと同時にぼーやが突っ込んできたから、振り向こうにも振り向けないっ！

魔力探知妨害煙幕で気づけなかった。
ぼーやの使い魔のオコジョ妖精か！？

自分の背後から頭の上を通り越して投げられた、手榴弾らしきものが落ちてくる。
マズイっ！！！　と思った瞬間には目の前が真っ白になった。

閃光弾かっ！？

「クッ！　『氷盾（レフレクション）』！！！」

目を閉じながら張っていた糸の罠を発動させ、同時に『氷盾（レフレクション）』を目の前に発現させる。
しかし、糸の罠にぼーやが引っかかった感触はない。

視力の戻った私の目に見えたのは、真っ二つに切り裂かれた『氷盾（レフレクシオー）』と、私の腹に銃口を押し付けているぼーやだった。

次の瞬間、腹に魔法が当たる感触があり、『戒めの風矢（アエール・カプトゥーラエ）』で私は捕縛されてしまった。

くそっ、やられた。

ハハッ、やっぱり、このぼーやはお前の息子だよ。

なあ、ナギ……。

第十一話　模擬戦？　赤い彗星（後書き）

初バトルでした。
擬音とか苦手なのであまり臨場感はない感じでしたが、いかがでしたでしょうか？
なるべく戦闘状況がわかるように書いたつもりだったのですが……。
もう少しバトルが続いていきますので、もう少しお付き合いください。

え？　相変わらず、ここのネギは腹黒い？
ハハハ、何を仰るウサギさん。
ここのネギはアルちゃん用にちゃんとガスマスクとサングラスを用意しておくような、使い魔想いの主人でございますことよ？

それにしても、原作もいよいよ終盤ですね。
まあ、第一章は別に修正とかはするつもりはありません。“並行世界だからいいんだよっ！”の精神でお許しください。

それと魔法世界人は地球に来れないことが判明してしまいました。
ネギ「つまり、前世でのラカンさんの修行（ごうもん）はなかったことになるん

ですね！」

ラカン「ああ？　んなモン気合でなんとかしたぜ、バカヤロウ」

ネギ「……悪魔が減ると思ったのに　ｏｒｚ」

並行世界だからいいんだよっ！！！

そして設定するのを忘れていましたが、ネギの原作知識は“単行本３２巻まで”とさせて頂きます。最終決戦直前までですね。

でも、大分うろ覚えの部分もあり、完璧ではありません。

モビルスーツ紹介（Ｗｉｋｉから抜粋＋個人的感想）

『シナンジュ』

パイロットの脳波に反応する特殊構造材「サイコフレーム」を採用したニュータイプ専用機。

ただし、ファンネルなどのサイコミュ兵器は搭載しておらず、それを代価にパイロットの操縦イメージをＭＳへダイレクトに反映出来る様、ＭＳ単体としての基本性能、機体制動を極限にまで突き詰めて設計されている。

背面と脹脛側面の推力偏向スラスターの他、全身に多数のスラスターを装備し、いかなる姿勢においても高い機動性を発揮する。

作者的にサザビーよりシナンジュのほうが好きです。
特殊能力無しで機体性能に特化させるとかに燃えます。

今回の戦闘は、ガンダムUC第二話の影響というかアイデアを頂いたところがあります。ガンダムUCを見たことがある人は簡単に分かるでしょうw
気になった人は、レンタルビデオ屋にGO!!!

第十二話　模擬戦？　一角獣

――――ガンドルフィーニ――――

「先程の戦い方はいったいなんですの!?
もう少し正々堂々と真正面から戦うことは出来ないのですか、ネギ先生!?」

「そ、そんなっ!?　エヴァさん相手に真正面から戦って勝てるわけないじゃないですか。
それにグッドマンさんは、こんな小さなアルちゃんに茶々丸さんとガチンコ勝負させろと言うんですか!?
いくらなんでも酷いですっ!」

「えっ!?
そ、そういう意味ではありませんわ」

「お姉様。
それは無理だと思いますけど……」

「お兄様……。
わ、私頑張ります！」

「大丈夫だよ、アルちゃん！　そんなことさせないからねっ！
アルちゃんは、アルちゃんが出来ることで僕を助けてくれればいいんだよ」

「違いますっ！
愛衣もそんな目で私を見ないでっ……」

高音君がネギ先生に突っかかっているが、ネギ先生の純真な瞳に見つめられて困っている。
確かに高音君からすると、ネギ先生の戦い方は魔法使いらしくなくて邪道に見えているんだろう。

私はＣＱＣで戦うからネギ先生と同じで正道的な魔法使いの戦い方とは言えないし、ＣＱＣの技術を磨くために警察の訓練などに参加したこともあるから、閃光弾などの利点を良く知っている。
だから、あまりネギ先生を非難するようなことは言えないなぁ。

「それにしても、あんな負け方したのによく彼女（エヴァンジェリン）は怒らないですね」

「そうだな、瀬流彦君
でも、黙ってネギ先生におんぶされたままってのも怖いぞ」

「大丈夫ですよ、ガンドルフィーニ先生。
エヴァはプライド高いですから、負けた後でどうこう言ったりしません。
それにネギ君の「真正面から戦って勝てるわけない」って言葉に反応してましたしね。
それと、昔のことを思い出してるんじゃないですか？」

昔？　ネギ先生の父親の“千の呪文の男（サウザンドマスター）”のことか？
それこそ父子2代に渡って負け越したのに平気なのか？
顔を赤く染めてネギ先生の服を握り締めているが、本当に大丈夫なのだろうか？

それにしてもネギ先生には驚いた。
まさか封印されている状態とはいえ、“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”に勝ってしまうとは。
魔力がないために彼女の使った魔法はほとんどが初級魔法だけだったが、それでもその錬度は恐るべきものだった。

昨日の『闇の咸卦法』も凄いものだったが、あのモビルスーツとやらも凄いな。

さすがは“千の呪文の男（サウザンドマスター）”の息子。
彼はおそらく将来、優秀な“偉大な魔法使い（マギステル・マギ）”になるだろう。

「ネギ先生。すいません、ちょっと失礼します。
エヴァンジェリンさんの最後の氷の盾を、いったい何で斬ったんですか？」

「……ム、桜咲刹那、いきなりなんだ？

そういえば私は目を閉じていたから見てないな。
ぼー…、ネギ。お前どうやって『氷盾（レフレクシオー）』を真っ二つに斬り裂いた？
残った魔法薬全部使って作ったから、けっこう堅いはずだったんだが」

「ああ、あれはこの剣で斬ったんですよ」

ネギ先生がそういうと、手のひらに乗るぐらいの小さな棒が現れた。
そしてそれを掴むと、ブォンという音と共に棒の先から光が伸び、光の剣となった。
ふうむ、銃だけでなく、接近戦用の武器もあるのか……。

「……これは、『魔法の射手（サギタ・マギカ）』か？」

「さすがはエヴァさん。
そうです。これは『魔法の射手（サギタ・マギカ）』を利用して剣にしてます。
今のこれは光属性ですけど、火、水、氷、雷、その他様々な属性で剣を作れます。
“ビームサーベル”って呼んでますけどね」

「銃も同じだったね、ネギ先生」

「その通りですよ、龍宮さん。
あの銃も『魔法の射手（サギタ・マギカ）』を利用して弾を撃ちだしてます。いろいろと応用が利きますよ。
最後に止めを刺すときに使った銃は、特殊な弾丸を使って魔法を撃ちだすことが出来るんです。
威力を強めた『戒めの風矢（アエール・カプトゥーラエ）』や『雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）』とか、いろいろな魔法を詰め込むことが出来ます」

「それは便利そうだね」

「あ、あのっ！
確かにその剣も凄いのですが……」

「落ち着きなさい、刹那。
ネギ先生。先程エヴァンジェリンの氷の盾を斬ったのは、京都神鳴流の『斬岩剣』ではありませんか？」

「あ、やっぱり京都神鳴流の方から見たらわかってしまいますか？
桜咲さんはタカミチから京都神鳴流と伺っていましたが、葛葉先生もそうなんですね」

「やっぱり！？
ネギ先生はどうして神鳴流を使えるのですか！？」

京都神鳴流！？
何故そんなものをネギ先生が使える？
振り向いて高畑先生を見るが、彼も困惑している様子だった。
葛葉先生や桜咲君のように学園にも京都神鳴流を使えるものがいるから、必ずしも門外不出というわけではないだろうが。

「ビデオで見ました」

「「ハ？」」

「いや、だから。
ビデオで見ました」

「何を言っているんだお前は？」

「いや、ホントですよ。エヴァさん。
父が所属していた“紅き翼（アラルブラ）”の映像を見たことがあるのですが、
その中に京都神鳴流を使う方がいたんですよ。
青山詠春さんという方で、葛葉先生や桜咲さんの方が詳しいと思いますけど」

「え、ええ」「それは、確かに……」

「で、その映像の中に戦闘のダイジェストシーン特集がありまして。
それを見て自己流で練習しました」

「……それで？」

「？　それだけですけど？」

「ビデオ見ただけで覚えたんですかっ！？」

……ネギ先生は優秀なんだが、ちょっとなんかズレてるな。

自分のことを大したことないとでも思っているのかもしれん。

まあ、今までメルディアナ魔法学校から出てきたことがないらしいから、世間知らずなのはしょうがないのかもしれないな。

「人の話を聞いてくださいっ！！！」

あ、高音君がキレてしまった。

「ネギ先生！

どうしてあんな戦い方をなさるのですかっ！？」

「“あんな”と言われましても……。

僕は今のが初めての戦いだったんですけど」

「ほお、ネギの初めての相手は私だったのか」

「初めてだったのに、あんなに強かったんですか！？」

「今まで修行は自己流でしてましたけどね」

「だったら何故もう少しマシな戦い方をなさらないんですか！？
それこそ貴方の父上であるナギ・スプリングフィールドが所属した“紅き翼（アラルブラ）”の戦い方を見習うとか」

「いやいや、出来ませんよ。そんなこと。
まあ、今だったらそれに近いことは出来るでしょうけど、修行を始めた3歳のときでは“紅き翼（アラルブラ）”みたいなバグキャラ連中の戦い方を見習ってもどうしようもないです。
ちゃんと現実的な修行をしないと……」

「うっ……、確かにそれはそうなのですが」

「まあ、そうだろうな。
というか、3歳児があんなこと出来たら一般の魔法使いの出る幕がないな」

「そもそもメルディアナには魔法戦闘の授業とかはありませんし、図書館にも戦闘教本とかはあまり無かったですからねぇ。
しょうがないから、警察や軍隊で使用する教育資料を参考にして

修行しました」

なるほど、だからあんな戦い方をするのか。
道理で閃光弾とか催涙弾とかの利点を知ってるわけだ。

でもどうやって手に入れたんだ、そんなもの？

「ネギ。それならあのモビルスーツはなんだ？
あんなもの、どこの警察も軍隊も使ってないぞ」

「昨日言ったとおり、アレは日本に来ることになってから急遽開発、というか完成させたものです。それ以前から考えてはいたんですけどね。
コンセプトとしては「魔法使いは最強になるのではなく、最強のものを生み出せばいい」ってところです。
魔法って便利ですけど、詠唱時間とか弱点があるじゃないですか」

「確かにそうですね。
無詠唱魔法もありますけど、詠唱魔法に比べたら随分と落ちてしまいます。
でも、そのためにお姉様にとっての私みたいな、“魔法使い（ミニストラ・マギ）の従者”というものがいるんですけど……」

「つまり、ネギ先生は。
一人で戦い抜くためにモビルスーツを開発したのですか？」

「いえ、そんなことありませんよ、桜咲さん。
ただ単に、「攻撃も防御も移動も魔法一つで出来たら便利だなぁ」と思ったんです」

「……メルディアナの校長先生が仰っていたことがよくわかりました」

「私としては“納得は出来ないけど理解は出来る”だな」

「龍宮、これは“理解は出来るけど納得は出来ない”の方じゃないのか？」

「“理解は出来ないし、納得も出来ません”っ！
次は私達がお相手しますわっ！　魔法使いの戦い方というものを見せてご覧にいれましょう！」

「お、お姉様！？
私“達”って、私も入っているんですかぁっ！？」

おいおい、高音君。
それはいくらなんでも無理だろう……。

――龍宮真名――

結局、次はネギ先生とグッドマン先輩主従の模擬戦となった。
従者の佐倉は最後まで渋っていたが、ネギ先生が

「怪我したらちゃんと治しますよ。
むしろ明日に残らないよう『咸卦治癒（マイティガード）』で治します」

と言ったら、アッサリＯＫした。

ちなみに、その次は葛葉先生が相手をすることになった。
ネギ先生の「『咸卦治癒（マイティガード）』で治します」発言で凄いヤル気が出たらしい。

大人の女性は大変だな。私にはその苦労はまだわからないが。

……本当だぞ。

「お姉様、いったいどうするんですか？
さっきの戦いみたいな、ネギ先生のモビルスーツの動きは捕らえることはできませんよ」

「わかってます。
私が『黒衣の夜想曲（ノクトゥルナ・ニグレーディニス）』で仕掛け、『百の影槍（ケントゥム・ランケアエ・ウンブラエ）』でネギ先生をで追い込みます。
愛衣は無詠唱の『魔法の射手（サギタ・マギカ）』を数を撃って牽制しつつ、タイミングを見計らって『紅き焔（フラグランティア・ルビカンス）』を撃ちなさい」

「え？　それは危険なのでは？
『紫炎の捕らえ手（カプトゥス・フランメウス）』の方が……」

「大丈夫よ。ネギ先生がわざと爆発を起こして身を隠したときのこ

とを思い出しなさい。
ネギ先生はあんな爆発の至近距離にいたのに、傷一つなく無事だったわ。それに先程のネギ先生のお話では、モビルスーツは“防御”も出来るということです。
だから、『魔法の射手（サギタ・マギカ）』や『紫炎の捕らえ手（カプトゥス・フランメウス）』程度では効かないと思ったほうがいいわ」

フム、妥当な判断だ。
確かにあの爆発で平気なら、『魔法の射手（サギタ・マギカ）』で勝負をつけるのは無理だろう。
さて、ネギ先生はどう戦うのかな？

「打ち合わせは終わりましたか？
それとルールは先程と同じでいいですか？」

「ええ、構いませんわ。
どうぞ、モビルスーツを展開なさってください」

「それではお言葉に甘えます。
グッドマンさんも『黒衣の夜想曲（ノクトゥルナ・ニグレーディニス）』とやらを展開してください。
どうせ展開前に勝負を決めるなんてことはしないつもりですから。

ラス・テル・マ・スキル・マギステル　『ユニコーンガンダム』！」

へえ、先程の『シナンジュ』とは違うモビルスーツだ。
所々灰色部分があるが、全身真っ白な装甲。そして“ユニコーン”の名前の通り、額に一本角が生えている。
武器は腰の銃が1丁、あとは左手のシールドか。
それとビームサーベルも持ってるだろうな。

「……ネギ先生は何種類のモビルスーツを使えるのですか？」

「5種類ですね。
昨日の『リゼル』とさっきの『シナンジュ』、そしてこの『ユニコーンガンダム』。
あとの2つはまた別の機会にでも。

用途ごとによって使い分けます。
そうですねぇ、あえて言うなら“輸送機”と“巡航機”と“戦闘機”と“戦闘爆撃機”、あとは……“特殊機”といった感じでしょうか」

「ちなみにそれはなんですの？」

「“特殊機”ですよ。

どこが“特殊”なのかはまだ秘密です」

……“特殊機”というのがまた不安になってくる。
どうせネギ先生のことだろうから、とんでもなく“特殊”なのだろうな。
グッドマン先輩も嫌そうな顔をしているし。

「それではタカミチ、開始の合図をお願いします」

「わかったよ。お互いに怪我のないようにね。
……ネギ君はちゃんと手加減すること。

それでは、……始めっ！」

「行きますわよっ！
『黒衣の夜想曲（ノクトゥルナ・ニグレーディニス）』ッ！」

開始の合図と共に、使い魔を背後に展開したグッドマン先輩がネ

ギ先生に突っ込んでいった。
対するネギ先生は右手にビームサーベルを装備しつつ、突っ込んでくるグッドマン先輩ではなくその背後の佐倉さんに向けて、頭部から機関砲のように魔力弾を連続して撃った。
あんなところにも武装があったのか。

「きゃあ！」

撃った弾はあくまで牽制だったらしく、佐倉さんの魔法障壁にアッサリと弾かれていた。
だが、無詠唱の『魔法の射手（サギタ・マギカ）』を撃とうしていた佐倉さんには奇襲で、ネギ先生に突っ込むグッドマン先輩の援護を出来ないでいる。

「愛衣っ！
……くっ、ハァッ！」

ネギ先生に接近したグッドマン先輩が攻撃を仕掛けたために佐倉さんへの攻撃が止んだが、ネギ先生はその攻撃をヒョイッとかわす。
さっきの『シナンジュ』よりは遅いが、それでもなかなか早い。

グッドマン先輩が身体に纏っている使い魔のパンチなどは回避し、時折放たれる『影の槍』をビームサーベルで切り払っている。

やはり体術もできるようで、手加減しているのにグッドマン先輩を軽くあしらっている。
生まれつき持っていた魔力量やモビルスーツにおんぶに抱っこされているわけではないようだ。

「お、お姉様！
その位置だったら援護できません！」

そして佐倉さんは、ずっとグッドマン先輩の援護を出来ないままになっている。
ネギ先生が佐倉さんの射線上に、常にグッドマン先輩を置くように戦っているからだ。
あの位置関係だったらネギ先生へ魔法を撃っても、グッドマン先輩に当たる恐れがある。

それに気づいたグッドマン先輩がネギ先生から距離をとろうとしても、自らグッドマン先輩に接近するか、グッドマン先輩を佐倉さんへの盾に出来るような位置に移動する。

「……戦い慣れているように見えるな。

本当にこの模擬戦が初めてなのか？」

「本当ですよ。
お兄様の対人戦はコレが初めてです」

「おや、アルちゃん。ネギ先生の手伝いはいいのかな？
それと“対人戦が初めて”ということは、“人以外”となら戦ったことがあるのかい？」

「ええ。今回は私がいなくとも平気だそうです。
それと“対人戦”以外では、ウェールズで熊やイノシシなどと少々」

「そういえばそんなこと言ってましたっけ。
……木乃香お嬢さまに変な影響与えなければいいのだが」

「それだけではあるまい。
ネギは獣相手だけではなく、ちゃんと対人戦の修行もちゃんとしていたんだろう。
魔法使いとしてではなく、現代の人間としてな。

そうだろう？　……えーと、アル……ちゃん？」

「はい。先程も言ったように、お兄様は軍隊や警察の資料で対人戦

の勉強をいたしました。
　現代のそれらの戦い方は魔法戦にも役に立つようで、お兄様は「基本は皆同じなんだ」と言っていましたね」

まあ、そうだな。
となると、ネギ先生は魔法を絶対のものとして思っておらず、むしろ道具の一つとして思ってそうだな。

「……」

「？　どうかなさいましたか？
エヴァンジェリン様？」

「……イヤ、なんでもない。
（どうしよう？
ネギの使い魔だし、躾もちゃんとされていて礼儀正しいから、“小動物”とか“オコジョ”とかで呼ぶのは可哀想だ。
でも“アル”と呼び捨てにすると、あの変態（アル）と被ってしまう。その方がもっと可哀想だ。
となると、やはり“ちゃん”付け？　しかし、それは私のキャラではないぞ？）」

？　なに考えてるんだ、エヴァンジェリンは？

――――高音・Ｄ・グッドマン――――

……強い。

かれこれ５分以上攻撃を仕掛けていますが、まったく当たりません。

ネギ先生は防御と回避するだけで攻撃してきません。明らかに手加減されていますわ。

「……グッドマンさんって、体術に関しては素人ですか？」

「な、なんですか。いきなりっ！？

確かに専門的に習ったことはありませんが」

「ああ、やっぱり。
その背後にいる使い魔がパンチをするとき、同時にグッドマンさんもパンチする動作なされていますけど。正直、素人のパンチでどこ狙っているか丸分かりなんですよ。
だから簡単に避けることができます」

くっ、そういうことですか。
これは今後改善すべきですわねっ！

「サ、『魔法の射手（サギタ・マギカ）・炎の三矢（セリエス・イグニス）』ッ！」

なんとか援護できる位置に移動した愛衣の攻撃も、ビームサーベルで切り払われるか、頭から発射される魔力弾で迎撃されてしまいます。
このまま時間切れを狙うつもりかしら？

そうはいきません。
例え敵わなくとも、せめて一矢報います！

「愛衣っ、仕掛けます。準備なさい！
『影よ（ウンブラエ）』！」

「はいっ！
ネイプル・メイプル・アラモード！」

「お？　複数の使い魔の使役ですか？」

影の使い魔を5体召喚します。
あまり多かったら攻撃するのにお互い邪魔になるので、このぐらいでいいでしょう。

「『百の影槍（ケントゥム・ランケアエ・ウンブラエ）』！」

「ものみな焼き尽くす浄北の炎　破壊の王にして再生の徴よ　我が手に宿りて敵を喰らえ！」

5体の使い魔と共に、『百の影槍（ケントゥム・ランケアエ・ウンブラエ）』で仕掛けます。
ネギ先生は左手にもビームサーベルを持って二刀流で迎撃するようですが、それだけでは防げません！

「ハァッ！」

クッ、しかし、さすがはネギ先生。
こちらの攻撃は一撃も当たることなく、『百の影槍（ケントゥム・ランケアエ・ウンブラエ）』のほとんどが切り払われ、使い魔も2体倒されました。
しかし、残りは迎撃できないらしく、わざと空けておいた隙間から強引に突破するようです。

「愛衣っ！」

「ハイッ、お姉様！　『紅き焔（フラグランティア・ルビカンス）』ッ！」

待ち構えていた愛衣が、ネギ先生に向かって『紅き焔（フラグランティア・ルビカンス）』を放ちました。
直撃コース！　これなら回避できない！
ネギ先生は盾を構えますが、これでダメージを与えられるでしょう！

バシュウウウッ！！！

……ハ？

「ま、魔法がっ！？」

「かき消された！？」

そんなっ！？

盾に当たった『紅き焔（フラグランティア・ルビカンス）』がかき消された！？

『魔法の射手（サギタ・マギカ）』ならともかく、中級魔法の『紅き焔（フラグランティア・ルビカンス）』まで効かないのですかっ！？

詠唱魔法での防御ならともかく、あらかじめ持っていた盾で防がれるとは思いませんでした。

これでは愛衣の攻撃が何も通じないということに……。

「『影よ（ウンブラエ）』！」

愛衣と合流して出せるだけの使い魔を壁役として出しますが、正直打つ手がありません。

愛衣の魔法は効かないし、私の『黒衣の夜想曲（ノクトウルナ・ニグレーディニス）』ではネギ先生を捕らえれません。

……いったいどうすれば？

「今のは良かったですよ。

でも、『紅き焔（フラグランティア・ルビカンス）』を撃って気を抜いたのは駄目ですね。

グッドマンさんもそういうときは追撃してこないと。せっかくの遠隔操作式の使い魔なんですし」

「クッ……。

何故攻撃してこないのですか、ネギ先生！？

私達には攻撃する価値すらないということですか！？」

「そういうわけじゃありません。

ただ、ちょっと気になることが……」

「なんですか、いったい！？」

「グッドマンさんは影で衣服を編んで防御力を上げていると思うんですが、気絶とかしたらどうなるんですか？」

「……それは、編んでいる服は……なくなってしまいますわ」

「そうですよね。
僕のモビルスーツもそういうのですし。

で、服変わったら、肩とか露出するようになりましたけど、その下って何か着てますか？
というか、なんで制服のときより露出が多く？　防御服なんだから全身を覆えばいいのに……」

……う。

私のこの魔法は通常で防御力3倍、肌に密着させれば7倍になりますので、最大の防御力を得るために今は肌に密着させています。
つまり、この下は何も着けていません。
気絶してしまったら、この模擬戦を見ている周りの大勢の魔法先生達に肌を見られることに……。

！！　そのことに気づいた愛衣がカクカクと震えだしてしまいました。

「まあ、女の人と戦うのはイヤだと言うつもりはありませんが、女の人を裸に剥くのはさすがに勘弁して欲しいんですけど……」

「あ、ありがとうございましゅ。ネギ先生（しぇんしぇい）……」

め、愛衣が幼児退行してますわ！？

ネギ先生が本気を出さなかったのは私のせいですか！？

……私の負けですわね。

自分のことだけではなく、戦う相手のことすら考えることが出来るなんて。

思えば、私は“頭が固い”と注意されたことがありますわ。

もっと視野を広く持つべきですわね。

自らの視点に凝り固まってしまうのは、確かに“偉大な魔法使い（マギステル・マギ）”としてふさわしくありません。

これからは自分のことだけでなく、相手のことも考えて行動することにしましょう。

フフ、まさか１０歳のネギ先生に教わることになるとは。

感謝しますわ、ネギ先生。

「というわけで、グッドマンさんを気絶させずに取り押さえようと思います」

……え？　続けるのですか？

――瀬流彦――

ネギ先生はやはり紳士だなぁ。コレが英国紳士って奴かな？

高音君にはこの模擬戦が良い経験になったろうね。
頭の固い方のガンドルフィーニ先生でさえも、たまに高音君に頭が固いことを注意するぐらいだったんだから。

「やっぱりネギ先生はズレているな」

「ああ、さっきのグッドマン先輩の顔からすると、もう少し待てば負けを認めていただろうな。
なんか感動していたみたいだし」

「そうだな。
ガキだからしょうがないが、ネギは女心がわからないタイプだろう」

「しょ、しょうがないんじゃないかな。
ネギ君はまだ１０歳なんだし……、ハハハ……」

……まあ、１０歳だからねぇ。
１０歳であんなに戦闘能力があるのは驚きだけど。
僕じゃ絶対勝てそうにないな。

「さて、それではいきますよ。怪我はさせませんから、安心してください。
“ＭＭ－Ｄ”システム発動」

“ＭＭ－Ｄ”システム？
ネギ先生がそう言った瞬間、モビルスーツが変形、イヤ、変身した。
全身の装甲が展開し、顔を覆っていた白いのっぺらぼうなフェイスガードが上がり、その下から人の顔のように見えるフェイスガードがまた現れた。
そして、ユニコーンの名の通り額に生えていた一本角がＶ字に割れて金色に、展開した装甲の露出部分が赤く光りだした。

……カッコ良いじゃないか！
昨日もそれらしきこと言ってたけど、ネギ先生ってロボットアニメとか好きなのかな？
１０歳らしいところもあるね。ウン。

「この魔力は……」

「ネギ先生が“特殊機”と言ったのはこのことか」

「イヤ、どうせネギのことだ。
絶対まだ何か他にあるぞ」

「ネギ君だからねぇ……」

最近、高畑先生っていろいろと諦めかけてない？

ゾワッ！

フェイスガードの人の目に見える部分が光ったと思ったら、急に違和感というか悪寒が体中に走った。
なんだ今の？　感じたのは僕だけじゃないらしく、周りの皆もキョロキョロと辺りを見回している。

そうこうしている間に、ネギ先生が動いた。
高音君達を右手で指差した後、掌を上に向けて力強く握り締める。

その瞬間、ネギ先生と対峙していた筈の１５体の高音君の使い魔が、ゆっくり高音君達の方へと振り返り始めた。

「!?　『影よ（ウンブラエ）』ッ!?」

「お、お姉しゃま……!?
なんでしゅか、いったい!?」

どうやら高音君が動かしているわけではないようだ。
まさか、ネギ先生が!?
他人の使い魔を操ることが出来るとでもいうのか!?

「『影よ（ウンブラエ）』ッ!
……そ、そんな」

「お姉しゃま……キャアッ!」

影の使い魔が高音君達を襲い始めた。
佐倉君は３体の使い魔に襲われた。１体に箒を奪われ、もう２体

で身体を拘束された。

「め、愛衣っ！
クッ、私がわからないのですかぁっ！！！」

身に纏っている使い魔本体は高音君のコントロール下にあるらしく、高音君は使い魔本体で襲い掛かってきた残り１２体の使い魔へ応戦しているが、あまり持たないだろう。
なによりネギ先生がそんな隙を見逃すはずがない。

左腕に装備していた盾を捨て、両手でビームサーベルを構えたネギ先生がその場から忽然と姿を消したと思うと、赤い光が走って高音君の横を通り過ぎた。
通り過ぎた後に残ったのは、上半身と下半身の２つに断たれた使い魔本体だった。

……瞬動、なのかな？

高音君は使い魔本体を失ったので使い魔に取り押さえられている。
佐倉君も既に取り押さえられているし、コレで勝負ありだろう。
と、思ったら、１０体の使い魔でグッドマン君達をグルリと囲んで壁を作った。これでグッドマン君達の様子が見えなくなってしまった。

「……僕の勝ちです。
大丈夫ですよね？　グッドマンさん意識ありますよね？　服脱げたりしてないですよね？」

「……だ、大丈夫ですわ。
ですから早く使い魔を退けてくださいまし」

「わかりました。
とりあえず使い魔がお二人の周りに壁になってますので、落ち着いたら教えてください」

「あ、ありがとうございましゅ。ネギ先生（しぇんしぇい）……」

これが“特殊機”の力か……。
他人の使い魔のコントロールを奪ったり、凄いことを出来るんだなぁ。ネギ先生は。

……それにしても、幼児退行気味の佐倉君は大丈夫かな？

第十二話　模擬戦？　一角獣（後書き）

エヴァンジェリンが“逆光源氏計画”を企み始めたようです。

ちなみに、ナギが生きているだろうということをエヴァに話していません。

それどころか“学園結界”で力を封印されていることも話していませんｗ

モビルスーツ紹介（Ｗｉｋｉから抜粋＋個人的感想）

『ユニコーンガンダム』

パイロットの精神波に反応する構造材「サイコフレーム」で機体の駆動式内骨格「ムーバブルフレーム」全てを構築した史上初のフルサイコフレーム機であり、極めて高い機体追従性を発揮する。

通常は、一角獣（ユニコーン）の名の由来である額のブレードアンテナである一本角とフェイスガードに覆われたゴーグル状のカメラアイが特徴の「ユニコーンモード」で運用される。

限界稼動状態では、全身の装甲が展開し体格も一回り拡張、ブレードアンテナがＶ字型に割れガンダムタイプの顔が現れ、「デストロイモード」に変身する。

この際、露出したサイコフレームが眩く発光するのが特徴である。

インテンション・オートマチック・システムというパイロットの

感応波を拾い上げ、行動に直結することができるシステムを搭載している。
連動する機体のフル・サイコフレームに直接思考を反映させることで、実際に操縦するよりも速く機体を動かすことができ、パイロットは操縦をすることなく考えるだけで、その動作がダイレクトに機体に反応される。

最初、雑誌で「ユニコーンモード」の画像を見たときは正直微妙な感じでしたけど、「デストロイモード」は格好良いのではないでしょうか。
シナンジュのほうが好きですがねｗ
この作品での「デストロイモード」は、常に“瞬動”クラスの速さで自由自在に動けるが、同時に『咸卦治癒（マイティガード）』を発動してないと3分でバタンキュー、といった感じです。

詳しくはガンダムＵＣの第三話をご覧ください。

※　８／７　“ＭＭ－Ｄ”システム発動時の表現を修正しました。

第十三話　模擬戦？　四枚羽根

――近衛近右衛門――

「……皆、どう思うね？」

今は模擬戦を小休止し、魔法先生を集めてネギ先生のことについての話し合いじゃ。

さすがはナギの息子というか、まさか封印されているとはいえエヴァンジェリンにすら勝ってしまうとはのう。

しかし、あまりにも我々とは違う戦い方をするのが困ってしまうわい。

「……まあ、しょうがないのではないでしょうか。

ネギ君は自己流で修行したらしいですし」

……タカミチ君や。

君は以前からネギ先生と付き合いあったのじゃから、先にネギ先

生の性格に気づいておいて欲しかったの。

「そうですね。結果的に模擬戦の相手は誰も怪我をしていません。言い方は悪いですが、ネギ先生は“目的のためには手段を選ばない”タイプのようです。その“手段”は我々とは随分と違いますが、“目的”は我々と同じだと思います」

「その“手段”もおそらく、ネギ先生は卑怯などとは意識していないでしょう。ネギ先生が修行の参考にしたという警察や軍隊での常識なら、別に非難される戦い方ではありません。それに“目的”の方だって、むしろ我々より優しいのではないですか？敵味方両方を怪我させずに模擬戦を終わらせたのですから」

「ウチの娘がネギ先生のことを“素直な子”と言ってたのがわかる気がしますね。良い意味でも悪い意味でも純真なんだと思います」

ふうむ、特にネギ先生を非難する意見はないようじゃな。アチラで佐倉君をおんぶしているネギ先生を見ていると、性根はとても優しい子だとわかるしのう。

「ただ、ちょっとズレてますよね……」

「悪い子なワケではなく、むしろ良い子なんでしょうけど……」

「とっている行動も間違っているわけではないのですが……」

「魔力探知・念話妨害煙幕ならともかく、ニンニク粉末と花粉はねぇ……」

「でも警察では催涙弾なんかを実際に使ったりします。
それを参考にしたと言われると、否定しにくいですなぁ……」

「ですよねぇ。
まさか、「警察の方が間違っているんだ」なんて言えるワケないですし……」

「なんか違うんですよねぇ……」

「それに使い魔のオコジョ妖精を奇襲に使うのは……」

「いや、ネギ先生が言った通り、主人と従者がセットなら主人と使

い魔もセットでしょう。
あの使い魔のことを隠していたならともかく、ネギ先生が自己紹介のときに一緒に紹介しておりましたし……」

「確かに。
エヴァンジェリンが従者と一緒に戦うのなら、自分も使い魔と一緒に戦っていいと思うのでは……」

困ったのう。
皆もどう言えば良いかわからんようじゃ。
才能がありすぎるというの困りものじゃの。

この場にいる全員が、ネギ先生以上の結果で模擬戦を終わらすことは無理じゃろう。
グッドマン君達ならともかく、エヴァンジェリンをお互いに無傷で取り押さえることなぞワシでも出来ん。
だからネギ先生を非難できるというわけじゃないのじゃが……。

それでもなんか違うんじゃよなぁ。
こんなことならメルディアナでちゃんと戦闘方法を教えておいて欲しかったわい。

「学園長。とりあえず話はここまでで良いのではないですか？

ネギ君の性格のことは皆これで分かりました。ネギ君が麻帆良に来てまだ4日目ですので、時間はタップリあります。
今急いで結論を出さなくてもいいでしょう」

「それもそうじゃの。
次は葛葉先生がネギ君の相手をするんじゃったか。

……すまんが、神多羅木先生も一緒に相手してくれんかの？」

「魔法先生2人がかりですか！？」

「3戦目ですよ、次は。
いくらなんでも無理なのでは？」

「問題なかろう。『咸卦治癒（マイティガード）』のおかげで元気一杯のようじゃし。
今までの模擬戦はエヴァンジェリンやグッドマン君といった女性だけじゃった。じゃから、男性相手にはどう戦うか見ておきたいのじゃよ。
タカミチ君の話では、ネギ先生はフェミニストらしいということじゃが？」

「そうですね。家族と呼べる人は従姉であるネカネさんぐらいで、他に親しくしていたのは幼馴染の女の子のアーニャ君だけみたいでした。

そのせいか、女性には優しく接していたと思います」

「まさか、“男性相手だったら手加減せずに戦う”なんてことはないじゃろうが、一応の」

「……ネギ君ですもんねぇ」

――ネギ・スプリングフィールド――

葛葉先生がアップを始めたようです。

……『咸卦治癒（マイティガード）』はやっぱり秘密にしておいたほうが良かったかな？

その他の先生方は僕の戦い方についてまだ話し合い中。

自己流ならしょうがないよ派　ＶＳ　そうだとしても外道すぎるよ派
の２つに別れてヒソヒソと議論中です。

「そんなに僕の戦い方って変わってるんですかね？」

「……まあ、ネギの戦い方は“普通の魔法使いの戦い方”ではないのは確かだな」

「私はネギ先生のような戦い方をする人のデータを持っていません」

「自己流で修行して、そこまで戦えるのならいいんじゃないかな。これから“普通の魔法使いの戦い方”も教わっていけばいいんだし。なあ？」

「え！？
わ、私は神鳴流の剣士であって、西洋魔術師ではないのでなんとも……。ねえ？」

「……こ、今回のコトは良い勉強とさせていただきますわ」

「……」

こっちみろや。

まあ、ワザとそういう戦い方してますけどね。

これで「ネギ君だからしょうがない」という認識が、魔法関係者に出来てくれると後で楽になるんですが。

“普段から挙動不審だったら、怪しいことしても誰も怪しまない”って水着で白衣のお医者さんも言ってましたし。

「難しいですねぇ。

魔法バレのことを考えたら、『魔法の射手（サギタ・マギカ）』とかは見られたらアウトです。

『戦いの歌（カントゥス・ベラークス）』使って肉弾戦すればいいですけど、僕みたいな子供が肉弾戦で凄すぎたら変です」

「一応いろいろと考えてはいるんだね。

それでロボットみたくなったのかい？」

「茶々丸よりロボットらしいからなぁ」

「マスター。私は正確にはガイノイドです」

「ええ。モビルスーツを見て、“魔法”を思いつく人はいないでしょう。
それに盾とか背中に“麻帆良大工学部”とか書いておけば、麻帆良のノリならモビルスーツすら見られても平気な気がします」

「……否定できないのが怖いですね」

「私も去年の学園祭の際に使い魔を巡回に使いましたが、仮装と思われて大丈夫でしたわ」

「モビルスーツを展開するにも、魔法と思われない動作があった方がいいですかね？
ベルトにカード挿し込んで、「変身！」と叫ぶとか」

「……」

それはそれで面白そうだな。
でも、仮面ライダーはあまり知らないんですよねぇ。
小太郎君と被る気がしますし。

「……ところで、もしかして佐倉さん寝てません？」

「もしかしなくとも寝ているね」

「……すー……すー……」

「め、愛衣っ！　起きなさい！」

「！　ひゃ、ひゃい！」

「……そんなにネギ先生の背中は気持ち良いんですか？」

「なんだ、興味あるのか？
だったらおんぶしてもらえ」

「え？
……それはさすがに恥ずかしいです」

「エヴァンジェリンも寝てしまったらしいね。
道連れが欲しいのかい？」

「……ぐぬ」

「あ、ありがとうございました！
もう平気ですぅ！」

「いえいえ、どういたしまして。
皆さんは気持ち良くなるみたいですけど、自分ではわからないんですよねぇ。『咸卦治癒（マイティガード）』発動中は、眠らなくても平気になるぐらい身体の調子が良くなるだけなので」

そのおかげで、前世では都合の良い抱き枕にされていましたよ。
役得だったから別にいいですけどね。

「そういえばネギ先生。
さっきの“ＭＭ－Ｄ”システムとはどういう意味なんだい？」

「……“マギステル・マギ－ドライブ”システムという意味ですよ。
ぶっちゃけて言えば“リミッター外し”ですね。あのシステムが発動すると肉体のことを考えずに行動できます。
『咸卦治癒（マイティガード）』を併用して使えば大丈夫ですけど、『咸卦治癒（マイティガード）』無

しで発動したら3分が限界です」

言えない……。

本当は“マギステル・マギ一デストロイヤー”だなんて、高音さん達の目の前ではさすがに言えません……。

――桜咲刹那――

また模擬戦が始まる。

これで三戦目だ。よくネギ先生は体力が持つものだ。

……そんなに『咸卦治癒（マイティガード）』とは凄いのだろうか？

そういえば佐倉さんの肌ツヤが良くなった気が……。

しかし、次の相手は刀子さんと神多羅木先生の魔法先生のコンビ

だ。
刀子さんは神鳴流の剣士。ネギ先生は接近戦はどこまで戦えるのだろう？
それにいくら神鳴流の技を使えるからと言っても、映像を見ただけではそううまくはいかないだろうな。
茶々丸さんのときもグッドマン先輩のときもうまい具合に攻撃を避けていたが、さすがに神鳴流剣士相手では逃げ切るのは無理だと思うが……。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル　『クシャトリヤ』」

今度はなんだ？
ネギ先生が、また違うモビルスーツを展開した。
緑と濃緑色で、両肩からそれぞれ前後に大きな羽根が生えているようなモビルスーツだ。
今までのよりも大型だな。銃を今度は持っていないが、神鳴流相手に剣で戦うのだろうか？
盾も持っていない。あの羽根が盾代わりなのかな？

「“戦闘爆撃機”かな？
さきほどの『シナンジュ』や『ユニコーンガンダム』よりは動きは鈍そうだが、その分火力はありそうだ」

「……スマン、龍宮。“巡航機”と“戦闘機”と“戦闘爆撃機”って、なにが違うんだ？
“輸送機”は言葉通りだろうし、“特殊機”は戦いを見たからその特殊さがわかったんだが……」

「ん？　そうだな。
わかりやすくいうと、“巡航機”は長時間・長距離・好燃費で飛べる航空機といったところかな。“コンコルド”とかいう旅客機を聞いたことないか？　アレは音速で飛ぶためにあまり燃費は良くないがな。
“戦闘機”は軍用機と言う意味もあるが、この場合だと対航空機用の航空機だ。おそらくエヴァンジェリンと戦ったときに使用した『シナンジュ』がそうだろう。
“爆撃機”は対地・対艦攻撃を行なう航空機だ。敵の基地や軍艦、戦車などを攻撃目標とする航空機だ。
で、“戦闘爆撃機”は“戦闘機”と“爆撃機”の中間、というか“爆撃も出来る戦闘機”だな」

「それなら昨日の『リゼル』が“輸送機”か。
確かに誰かが上に載れるように背中にグリップが付いていたな。もちろんそれなりに戦闘能力もあったが、『シナンジュ』には遠く及ばなかった」

「へえ、飛行機にもいろいろあるんだな」

「私もそういうのは初めて聞きましたわ」

「私はアメリカにいたときによくＴＶのＣＭで飛行機とかは見ましたけど、そこまでは詳しくないです」

ネギ先生とまではいかなくとも、少しはソッチ側の勉強もすべきかな？

閃光弾とかは確かに便利そうだし……。

しかし、私はあくまで神鳴流の剣士なのだから、あまりそういうのに触れたくないというのが本音だ。

「それでは参ります。ネギ先生」

「フ……、よろしく頼む」

「はい、よろしくお願いします。
アルちゃんは今回も下がっていてね」

「はい。お兄様」

「よし、準備は出来たようじゃの。
それでは、……始めいっ！！！」

学園長の始めの合図と共に、刀子さんは刀を抜きつつネギ先生に接近。神多羅木先生は刀子さんの少し後ろについて注意深く接近している。
流石に今までの戦いを見ていただけに、警戒しているようだった。

対するネギ先生は右に移動しつつ、右手に持ったビームサーベルを大きく振りかぶったが、そこは間合いの外……って、ビームサーベルが伸びた！？

伸びたビームサーベルは刀子さんと神多羅木先生の間に勢い良く振り下ろされた。
この攻撃は2人とも予想外だったらしく、互いに大きく距離をとって回避したみたいだ。
これで2人は分断されてしまったな。

「ファンネルッ！」

ネギ先生がそう叫んだ瞬間、背中側の2枚の羽根から12個の小さなナニカが飛び出した。

なんだアレは？

「凄いですね。
ビームサーベルが一瞬で１３ｍぐらいに伸びました」

「ビームサーベルは『魔法の射手（サギタ・マギカ）』を利用したと仰っていましたわ。
だったら伸ばすのは容易なことでしょう」

「それにしても“ファンネル”ね。
まあ、確かにあれはファンネルだ」

「そうだな。
安直な名前すぎるがな」

「はい、アレはデータによると、ファンネルに形状が似ております」

「み、皆はアレがなにかわかるのか！？」

今まであんなものは見たことはないが、龍宮が知っているという

ことは近代兵器か？
それとも西洋魔術師の武器だろうか？　エヴァンジェリンさんやグッドマンさんが知っているということはソッチかもしれないな。

「……桜咲刹那。
“漏斗”のことを英語で“ファンネル”と言うんだよ」

「スペルは“ｆｕｎｎｅｌ”です」

「ホラ、この前の理科の実験授業で使っただろ」

「そうですわね。
ろ過の実験とかで使うと思いますわよ」

「あと、お料理でも使うことがありますね」

ごめんなさい、しりませんでした。
だからみんなしていわないでください……。

……そんなの日常で使いませんよぅ。
まあ、そう言われると確かに形は漏斗に似ているな。

ム、１２個のファンネルは刀子さんの周りに集まりだした。何をする気だ？

そしてネギ先生は神多羅木先生に突進。せっかく分断させたのだから、まずは後衛を潰す気だろう。

もちろん刀子さんがそんなことをみすみす見逃すはずはなく、神多羅木先生と合流しようとしたのだが、周りのファンネルから光線が発射されて足止めされてしまった。

……あれはまた厄介な。

威力は『魔法の射手（サギタ・マギカ）』とあまり変わらないぐらいだが、ああまで自由自在に動く１２個のファンネルから発射されるとなると対処が難しい。

現に刀子さんは気を込めた刀で光線を弾くなどして対処しているが、神多羅木先生の援護に行けないでいる。行こうとしても出足を潰されてしまうのだ。

あ、ファンネルを『斬空閃』で１個落とした。

でもなかなか次に続けることがで出来ない。

まだ残っている１１個が攻撃してくるし、なにより小さな的が高速で動くので当て難いのだ。

ネギ先生に接近されている神多羅木先生は、フィンガースナップで多数のカマイタチを発生させて迎撃しようとしているが、盾代わりの羽根に全て弾かれている。
無詠唱魔法ではあの防御力を突破できそうにない。

「神鳴流奥義！　『斬岩剣』！」

「『風花・風障壁（フランス・パリエース・アエリアーレス）』！」

ネギ先生の『斬岩剣』と神多羅木先生の『風障壁』がぶつかりあった。
やはりネギ先生の『斬岩剣』は完璧だ。映像を見ただけであそこまで再現できるとは……。

しかし、さすがに『風障壁』は突破できないようだ。
刀子さんもファンネルをもう６つまで落としている。
刀子さんの援護が間に合うか？

「駄目だな。
『風花・風障壁（フランス・パリエース・アエリアーレス）』は１０ｔトラックの衝撃すら防ぎきる優れた対物理防御魔法だ。

しかし、効果は一瞬しかなく、連続使用も不可能と言う弱点がある」

「ですが、マスター。
あの魔法でなければネギ先生の攻撃は防ぎきれなかったでしょう」

「ああ、そうだろうな。
だがネギにはまだ左手が残っている」

そうなのだ。
右手で放った『斬岩剣』は『風障壁』に相殺されてしまったが、ネギ先生は左手に新たなビームサーベルを装備している。

「ハッ！」

「グゥッ！」

ネギ先生の左手の剣が神多羅木先生に当たった瞬間、「パチィッ！」と電気が放電して見えた。おそらく『魔法の射手』の『雷の矢』を利用したスタンガンのようなものだな。
電気ショックで神多羅木先生の動きが止まった。

そしてネギ先生は動きの止まった神多羅木先生の腕を掴んだ。
……あ、魔法発動媒体に使っている指輪を無理矢理外そうとしている。
神多羅木先生は電気ショックのせいで強く抵抗できない。

あーあー、指輪取られてしまったぞ。
神多羅木先生はこれで脱落だな。魔法発動媒体がないと西洋魔術師は戦えないからなぁ。
取った指輪をあさっての方向に投げたと思ったら、投げた先には結界の外のアルちゃんが待っていた。
そしてアルちゃんは指輪を見事にキャッチ。

……相変わらず多芸なオコジョだな。
刀子さんは今ファンネルを全て落とし終わったみたいだが、間に合わなかったみたいだ。

「神多羅木先生っ！」

「スマン、やられた……」

「映像以外の神鳴流剣士は初めてです！」

神多羅木先生は多少痺れが残っているようだが、特に怪我らしい怪我はしていないようだな。刀子さんに片手を上げて謝っている。
ネギ先生は両手に再びビームサーベルを持ち、刀子さんに突進した。
神鳴流剣士と剣で競い合う気だ。

「「神鳴流奥義！　『斬岩剣』っ！！！」」

ネギ先生と刀子さんの『斬岩剣』がぶつかり合う。
両者ほぼ互角の威力だが、ネギ先生が片手持ちであるのに対し、刀子さんは両手持ちで『斬岩剣』を放っていた。
それを考えるとネギ先生の方が威力は上のようだ。
おそらく『咸卦法』の効果とモビルスーツで腕力を底上げしているのだろう。

「くぅっ！
やりますね、ネギ先生！」

「ありがとうございます！
もう少しお付き合いしてください！」

刀子さんも負けておらず、1本の刀でネギ先生の2本のビームサーベルをしのいでいる。
力はネギ先生が上だが、さすがに速さは刀子さんが上のようだ。
2人の剣戟は互角。これは長引きそうだな。

――――龍宮真名――――

いやはや、まさか剣で神鳴流剣士と互角に戦うとは……。
二刀流に慣れてきた葛葉先生が少し優勢になってきたが、それでも6対4ぐらいだ。なにかあればすぐにひっくり返るだろう。
ネギ先生はいろいろと規格外だな。

「刹那、お前だったらネギ先生に勝てるか？」

「……難しいな。
剣だけだったらまだ勝負になるかもしれないが、あのファンネルを援護に使われたら無理だろう」

「なにを言っている。剣だけでもお前では勝てんさ。
茶々丸、ネギのビームサーベルの長さは如何ほどだ？」

「両手の２本とも、刀身が７０ｃｍでずっと固定されています」

「あ、ネギ先生は剣を伸縮させていらっしゃらないということですわね」

そうか。それがあったな。
しかし、刀身が伸縮自在とはまた厄介な。
戦闘中に剣の長さが変わったら、間合いが全然わからないじゃないか。
自己流の修行というのは面倒だな。何も知らない分、誰も考え付かないようなことを仕掛けてくる。

ガキィン！　と大きく剣が合わさる音がしたと思ったら、葛葉先生が大きく後退していた。
息も少し上がっている。やはりあのレベルの立会いは消耗が激しいのだろう。

しかし、ネギ先生は息切れ一つしていない。
『咸卦治癒（マイティガード）』のおかげなのだろうが、持久戦では勝ち目がなさそうだ。

「お美事です、ネギ先生。１０歳でその腕とは……。
本格的に神鳴流を習ってみませんか？　ネギ先生なら当代随一の使い手になれるでしょう」

「……はあ、ありがとうございます」

？　ネギ先生の様子がおかしい？　なにかあったのだろうか？
困惑しているような感じだな。

「……あの、葛葉先生。
ミニスカートで激しい動きはしないほうがいいと思います」

「！？　い、いきなりなにを言うのですか！？」

……ハア。また始まったよ。
今度の被害者は葛葉先生か。

「だって、そうじゃないですか！
とても言いにくいですけど、下着が何度か目に入りましたよ！」

「大声で言わないでください！」

「見られるのが嫌ならズボンにすればいいじゃないですか。それか桜咲さんのように下にスパッツを穿くとか。
というか、神多羅木先生！　相棒なんだから気づいていたんじゃないですか？　だったら言ってあげればよかったのに……」

「ム？　……葛葉は組んだときからこの格好だったからな。
そういうのは気にしないのだと思っていた」

「ちょ！？　どういうことですか、神多羅木先生！？
人をそんな風に思っていたのですか！？」

「グッドマンさんといい葛葉先生といい、なんで皆さん気にしないんでしょう？
２－Ａの皆さんも結構そういうの気にしないし……。

あれ？　もしかして日本の常識がこうなのか？　下着を男性に見られても平気なのか？」

「ち、違います！
見られて平気なんて思っていません！」

違うぞ、ネギ先生。あくまで麻帆良の中だけだ。
２－Ａ連中は女子中だからだよ。
それとネギ先生は子供だから気にされていないだけだ。

「良かった。
私は変だと思われていない……」

「私は違いますよっ！」

「愛衣！　裏切るのですか！？」

「やはりカオスになったな。
……私の服装は大丈夫だよな？」

「幻術を使用した大人のマスターの服装は、ネギ先生に拒否されるかと思います」

エヴァンジェリンの大人の姿はどういう格好をしているのかは気になるが、……私は大丈夫だよな？

それにしても「子供は残酷」という言葉をよく聞くが、その意味がようやくわかった気がする。

ネギ先生に悪気はないんだろうけどなぁ……。

「と、とにかく！

制限時間も残り少ないので、さっさと終わらさせていただきます」

「あ、もう残り1分強しかないですね。

それでは再開しましょうか。そろそろ剣だけではなく、モビルスーツの能力も使わさせて頂きます。

ファンネル」

正面側の羽根から12個のファンネルが飛び出してきた。

背中側の羽根に12個あったんだから、正面側の羽根にもあって当然だな。

両手のビームサーベルも2m近くまで伸び、心なしか太くなって見える。勝負に出るつもりだろう。

対する葛葉先生はファンネルに囲まれる前にネギ先生に瞬動で接近した。

悠長に構えていたらジリ貧だからな。

これでファンネルは使えまい、ネギ先生。

「神鳴流奥義！　『雷鳴剣』っ！！！」

「くぅっ！

この技は初めて見ましたよ！」

葛葉先生の『雷鳴剣』をネギ先生が受け止める。

電気として放電された気が辺りに撒き散らされるが、ネギ先生はモビルスーツのおかげで平気のようだ。

『雷鳴剣』を知らなかったということは、ビデオで見ただけの神鳴流しか使えないということか。

まぁ、それはしょうがないな。

！？　放電が終わった葛葉先生の刀が、ビキビキと音を立てて凍っていく！？

いつの間にかビームサーベルを氷属性にしていたらしい。実際に

見てみると厄介すぎる武器だな。
ちょ！？　しかも羽根の先から腕が出てきたぞ！？　あんなところに隠し腕があったのか！？

２枚の羽根からそれぞれ出てきた２本の腕が凍った刀と葛葉先生の左腕を、ネギ先生の左腕が葛葉先生の右腕を掴んで動きを封じ、残ったネギ先生の右腕が刀身を消したビームサーベルの柄を葛葉先生の腹に押し当てた。
しかも、戻ってきたファンネルが動きを封じられた葛葉先生に照準を当てるのオマケつきだ。
勝負アリだな。

……それにしてもネギ先生はシビアだな。
ファンネルの半分は脱落した筈の神多羅木先生に向いている。
不意打ち防止なんだろうが、１０歳の子供がすることではないぞ。

「チェックメイトです」

「……参りました」

「ウム、其処までじゃ」

終わってみれば、模擬戦はネギ先生の全勝だ。
やれやれ、末恐ろしい子供だな。
これからどうなってくることやら……。

第十三話　模擬戦？　四枚羽根（後書き）

模擬戦編はこれにて終了です。
いやぁ、長かった気がします。
全３話を全６話にしておけばよかったかなｗ

ところで神多羅木先生って魔法発動体って何使っているんでしょうか？
この作品では指輪にしておきましたが、単行本１６巻の刹那＋楓ＶＳ刀子＋神多羅木の戦いの際には、指輪はしていないようにしか見えないんですよね……。

アレですか？　サングラスか咥えてる煙草が発動体なんですか？
『魔法の射手（サギタ・マギカ）』とかはサングラスから発射されるんですか？

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた
カモ：去勢された
鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち
エヴァンジェリン：紅茶吹かされた
バカレンジャー：勉強地獄
学園長：初恋の人を成仏させると言われたせいで胃痛
さよ：知らないうちに成仏させられるところだった

魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という困惑
愛衣：幼児退行させられた
高音：露出狂の嫌疑かけられた
刀子：露出狂の嫌疑かけられた

モビルスーツ紹介（Ｗｉｋｉから抜粋＋個人的感想）

『クシャトリヤ』
ネオ・ジオンが開発した２０ｍ級のサイコミュ搭載型ＭＳ。
ＮＺ－０００　クィン・マンサをもとに設計された機体だが、サイコフレームの使用と複数の機能を集約したバインダーの増設により、クィン・マンサの圧倒的火力と性能をほぼ維持したまま、小型化に成功している。

本機の特徴は、「四枚羽根」というコードネームの由縁となる四枚の大型バインダーにある。
それ自体がＩフィールドジェネレーター内蔵のシールドやＡＭＢＡＣ可動肢として機能するほか、内部にファンネル、メガ粒子砲といった武装を搭載している。
スラスターとしての役割も備えており、ここに複数の機能を集中させることで機体本体の小型化に貢献している。
また、「隠し腕」と呼ばれるサブアームを収納しており、それぞれがビームサーベルを装備している。そのため、背後から斬撃を受けた場合でも、機体を旋回させることなく、後方2枚のバインダー内に収納されたビームサーベルを用いての応戦が可能となっている。

ガンダムＵＣ第一話のスタークジェガンとの戦いが格好良かったです。
というか重武装しすぎｗ　例えは“戦闘爆撃機”じゃなくて、“

爆撃機”でよかったかもしれません。

第十四話　途中加入

――――ネギ・スプリングフィールド――――

「それっ！！
女子高生アタックーーー！！」

「蹴り足ハサミ殺し！」

パァッーーーン！！！

あ、いけね。
バレーボール破裂させちゃった。

「ア、アレは“蹴り足ハサミ殺し”！？」

「知ってるの!?　ゆーな!?」

「“蹴り足ハサミ殺し”とは、敵の打突を肘打ちと膝蹴りで挟み潰す高等技術よっ!!!」

「私も弟の漫画で見たことあるわ!」

――高畑・T・タカミチ――

「本当にごめんなさい」

「いえいえ、大丈夫ですよ。
このボールも古くなってたみたいですからね」

昼休みも終わる頃、職員室に戻って次の授業の準備をしていたら、ネギ君が体育の先生に謝っていた。
何かあったのかな？

「やあ、ネギ君。
何かあったのかい？」

「あ、タカミチ。
昼休みに２－Ａの皆さんとバレーボールしてたんですけど、僕がボールを受けとめたときに破裂しちゃいまして。
体育の先生が言うにはもう古くなってたみたいですけど」

「そうかい。
怪我はないみたいだね。それなら何よりだ」

ネギ君が担任補佐として赴任して、今日でもう2週間が経った。
２－Ａの皆にも受け入れられているようで何よりだ。

女の子の扱いも、ネカネさんやアーニャ君と過ごしていたから落

ち着いて対応している。
メルディアナでも年上の後輩に魔法を教えていたというから、年上相手にも授業もちゃんと出来ている。
まるで教師の経験があるみたいだったな。

「ところでタカミチ。
今日の居残り授業のことですけど」

「うん。前から言っていたように、僕は今日の授業が終わったらしばらく出張に行かなくちゃいけなくてね。
ネギ君には悪いけど、居残り授業と明日からのホームルームをよろしく頼むよ」

「居残り授業は別に構いませんよ。明日菜さんの勉強を夜に少し見てますけど、それでは他の人に不公平でしたからね。
明日からも、何かあったらしずな先生に相談しますから大丈夫です」

「はい。ネギ先生のことは任せてくださいな、高畑先生」

「ハハハ、よろしくお願いします」

アスナ君か。
今日の英語の小テストで良い点数を取ったのには正直驚いちゃったな。
やっぱりアスナ君はやれば出来る子なんだよ。ウン。
ネギ君とも良い関係が築けているようで何よりだ。

「そういえば、タカミチって明日菜さんとデートとかしてるんですか？」

「ブフォッ！！！」

……コーヒー吹いた。
まさか僕もエヴァと同じ目に遭うとは……。

というか職員室で何を言い出すんだ、ネギ君。周りの先生が見ているじゃないか……。
僕はアスナ君の後見人とはいえ、一応教師なんだから。

「アラアラ、ネギ先生。

いったいどこからそのようなお話が出てきたのですか？」

しずな先生が何か怖い……。

よくネギ君は正面からあのプレッシャーを受け止められるな。

よくわからないような顔をしてるけど、本当に気づいていないのか？

「？　ウチのクラスの明石さんが「日本人の女の子の初恋はお父さんなんだよ！」って言ってましたよ？

明石さんは休日に明石教授の部屋の掃除をしたり、デートをしたりして過ごしているそうです。

タカミチは明日菜さんの後見人ですよね。

だったらタカミチは、明日菜さんのお父さんみたいなものじゃないんですか？」

……ああ、なるほど。そういうことか。

よかった。周りの先生からの視線も減って、しずな先生のプレッシャーも小さくなった。

「オホホホホ、そういうことでしたか。

確かに明石さんは明石教授のことが大好きですからねぇ」

「そうですね。
明石教授からも娘自慢を聞かされることもありますし、あの親娘は仲が良いですよね。

ああ、でもそうだなぁ。
アスナ君が小学生の頃はいろいろと遊びに連れて行ったけど、中学生になってからはほとんどないなぁ。

……もしかして、アスナ君に何かあったのかい？」

「特に何かあったというわけじゃないんですけどね。まだ明日菜さんとも2週間しか付き合いがないですし。
でも、学費を早く返すために新聞配達のアルバイトを頑張っているのを見ると、明日菜さんって責任感が強いというか、一人で頑張ろうとしているように見えてしまうんですよね。
タカミチは明日菜さんから弱音とか聞いたことあります？　勉強関連以外で」

ム、最初は何なのかと思ったけど、真面目な話らしい。

……アスナ君の弱音か。
小学生の頃は雪広君とのことをよく愚痴っていたけど、そういえば最近は個人的なそういうのは無かったな。
僕はアスナ君の保護者なのに……。

確かにアスナ君は頑張り屋さんだから、最近はそれに甘えてアスナ君に気を払っていなかったかもしれない。
アスナ君が普通の女の子として暮らしていることに喜んでいたけど、少し平和ボケし過ぎていたな。

何をやっているんだ、僕は。
彼女はガトウさんから託された大事な女の子なんだぞ。

「……ありがとう、ネギ君。
確かにアスナ君が何も言ってこないことに甘えていたかもしれない。これから注意してアスナ君を見てみるよ。
といっても、しばらく出張に行かなきゃいけないから、悪いけどネギ君もアスナ君を見ていてくれないかい？」

「わかってます。明日菜さんにはお世話になっていますからね。
まあ、男性には言えない悩みなんかを持ってた場合だと、しずな先生に力を借りることになると思いますけど。
例えば、恋の悩みとか……」

「ハハハ、その場合は僕でも一緒さ。
しずな先生、そのときはよろしくお願いしますよ」

「フフフ、そのときはお任せくださいな」

「そういえば明日菜さんに彼氏でも出来たら、タカミチはどうします？」
やっぱり「ウチの娘が欲しかったら僕を倒してからにしろ！」とか言うんですか？」

「おいおい、僕はそんなステレオタイプな厳格な父親じゃないよ。アスナ君が選んだ男ならグダグダ言ったりしないさ」

「アラ？　高畑先生は案外子煩悩なタイプだと思いますわよ？」

……まあ、あんまり酷いようなら、僕の『居合い拳』が唸ることになるかもしれないけどね。
きっとアスナ君が選んだ男ならおそらく大丈夫さ、……多分。

しかし、アスナ君に彼氏かぁ……。
中学生なんだから当たり前の話なのかな。

「明日菜さんは「大人の男性」がタイプって言ってましたけどねぇ。明石さんが言っていたことを置いといても、案外タカミチのこと好きなんじゃないですか？
というか、明日菜さんと接する機会がある男性ってタカミチの他

にいます？」

え？

えーっと、同僚の瀬流彦君みたいな男性教師と、……部活は麻帆良女子中の学内の部活だから男性はいないな。それに顧問は僕だし。

あ！　アルバイト先の新聞販売店のお父さん……、って駄目じゃないか！

僕より年上だし、何より既婚者だろ！

……アレ？　そう考えると、アスナ君は男性と接する機会って少ないな。

女子中に通って女子寮暮らし、しかもアルバイトで忙しいとなるとしょうがないのかもしれないけど。

「アラ、ネギ先生の話が現実味を帯びてきましたわね」

「ちょ、からかわないでくださいよ、しずな先生。そんなことあるわけないじゃないですか。

アスナ君は僕にとって、妹というか娘みたいな女の子ですよ」

「……ハァ、駄目ですよ高畑先生。中学生を子供扱いしては。

今のあの子たちは丁度大人と子供の中間で、とても不安定な年頃なのですから。
それに大事なのは高畑先生の気持ちではなく、神楽坂さんの気持ちですわ」

「……う、すいません」

「ア、アハハ……。
ごめんなさい。変な話題振っちゃったみたいですね。
明日菜さんがタカミチのことを男性として好きなのかどうかはわからないのですから、そこまで気にしなくていいのでは？」

「確かにそうですわね。
でも、もし告白されてしまった場合は、子ども扱いをしないで一人の女性として相手を見て、お茶を濁さずにちゃんと返事をなされた方が良いと思いますよ」

「……そうですね。そんなことがあるかどうかわからないですけど……。
もしその時が来たら、真剣に返事をしますよ」

「アラ？　受け入れるのですか？」

「いえいえ。さっきも言ったようにアスナ君は僕にとって、妹とい

うか娘みたいな女の子です。
アスナ君の気持ちは嬉しいですけど、受け入れることは出来ませんよ」

「イヤ、まだ告白されてもいないんだから、別に断ることに決めなくても良いんじゃないかなぁ……なぁんて……、アハハ……」

そうだなぁ。
アスナ君ももう中学生なんだ。そういうのに興味が出てきても当たり前なんだよなぁ。

……おっと、いけない。もうこんな時間か。
早く準備しないと次の授業に間に合わなくなるな。

それと今回の出張から戻ったら、アスナ君と少しゆっくり話してみようかな。
最近はあまり話し合いとかはしてなかったから、丁度良いだろう。

ところで、何でネギ君は「やっちゃったよ……」みたいな顔をしてるんだろう？

――桜咲刹那――

今日の英語の小テストでバカレンジャー全員に負けちゃった……。

最近あの5人は勉強を頑張っていたみたいだけど、負けたのは正直に言ってショックだった。

……ああ、この前のネギ先生の言葉が胸に突き刺さる。

模擬戦からしばらく経った日、朝に夕凪で素振りをしていたらネギ先生がいきなりやってきた。

……一応夕凪を扱っていたので、護符で人払いはしておいたはずだったんだがな。

それにネギ先生が近づいてきたのに全然気がつけなかった。

「おはようございます、桜咲さん。
朝の鍛錬中に申しわけありません。少しお話がしたかったものですから」

「お、おはようございます、ネギ先生」

「学園長から木乃香さんの護衛をしていることは聞きました。僕に手伝えることがあったら遠慮なく相談してくださいね。
いやぁ、木乃香さんのお父さんが“青山詠春”さんだったとは思ってもいませんでしたよ。ああ、木乃香さんに魔法を秘密にしておきたいというのも聞いてますので大丈夫です。
それでなんですが、桜咲さんの成績のことで少々お話が……」

「ハ、ハァ。
……私の成績、ですか？」

「……その、成績落ちきてますよね。
麻帆良に入学当初は“中の上”ぐらいだったんですが、最近は“下の上”と“下の中”の中間ぐらいですよね」

「う！　た、確かに私は勉強があまり得意ではないですが……。木乃香お嬢さまの護衛と腕を磨くための鍛錬もありまして、なかなか勉強する時間が取れないのです……」

「ええ、それはわかります。僕も担任補佐の仕事だけで手一杯だから、他の人たちみたく“魔法先生”として働けていないです。だから二束の草鞋が大変なのはわかります。

しかしですね、エスカレータ式で高校に入学出来ても、高校には“留年”というものがあるんですよ。桜咲さんは徐々に勉強に着いていけなくなったのかもしれませんけど、どんどん成績が下がっていってます。この調子で高校に入っても成績が下がるようなら、おそらく留年しちゃいますよ」

「……りゅ、留年ですか？」

「ええ、そうです。実際問題、留年しちゃったらどうします？　木乃香さんの護衛のために同じクラスにいるんですよね？　留年して学年違うようになったら、護衛に支障が出るんじゃないですか？

まさか学園長に、「このままでは留年してしまいます。木乃香お嬢さまの護衛のために、成績に下駄を履かしてください！」とでもお願いするわけにはいかないでしょう？」

「ま、まさか！？
そのようなこと学園長に頼めるはずありません！！！」

「ですからね、授業はちゃんと受けましょうよ。あとで困るのは桜咲さんですよ。
それに２－Ａにはエヴァさんとか龍宮さんがいるじゃないですか。女子寮にいるときとかならともかく、授業中に何かあったらあの二人も対処してくれるから大丈夫ですよ。
龍宮さんはあとで料金を請求されるかもしれませんが、きっと力を貸してくれます」

「ええ、まあ。確かに龍宮なら報酬を用意すれば力になってくれるでしょう。
しかし、エヴァンジェリンさんが力を貸してくれるとは思えないのですが……」

「何を言っているんですか？
もし教室にいるときに、エヴァさんの目の前で木乃香さんに危害が加わるようなことがあったら、犯人は「“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”なんぞ恐れるに足らず」と言っているのと同じです。
そんなこと、あのプライドの高いエヴァさんが許すわけないでしょう。
まあ、その場合は木乃香さんを守るためではなく、自分をコケにした奴をメるという感じになるでしょうけどね」

「た、確かに……。」

「だから授業時間ぐらいは授業に集中してください。今でも木乃香さんのこと気にしてて、勉強に手が付いていないじゃないですか。今から勉強を頑張れば、高校に入ってからも安心できますよ。それに今はまだ赤点とって補習を受けることはないみたいですけど、もし補習を受けるようなことになったら護衛のほうも大変ですよね」

「それはそうです。正直な話、今でも完璧に木乃香お嬢さまの安全を確保できているというわけではありません。補習なんかを受けるようになった場合は、もっと護衛できなくなってしまいます」

「僕のお世話になっている木乃香さんの部屋には入りにくいでしょうから、まずは放課後に行なわれる居残り授業に参加してみてください。他のバカレンジャーの皆さんも参加予定です。剣道部に参加する時間を削れば大丈夫でしょう。きっと「勉強会に参加したい」と言えば、顧問の先生だって許してくれる筈です。むしろ喜んで送り出してくれる筈です」

「え？　何でそう思うんですか？」

「え？　……べ、別に顧問の先生に話を聞きに行ったわけじゃないデスヨ。
そ、そうだ！　英語だけでなく他の４教科も僕は出来ますので、わからないところがあったら遠慮なく質問してくださいね。
それでは朝の鍛錬中にお邪魔しました！」

――――――――――――――――――――――――――――――――

……ネギ先生の逃げ足は速かったなぁ。
というか、“他のバカレンジャー”ってことは、私もバカレンジャーと思われているのか？

アハハ。バカレンジャーじゃないな。
英語の小テストで負けたんだから、私が下だよなぁ。
悪の組織の下っ端戦闘員だな。

それともアレか？　途中加入の６人目か？
私は何色だ？　緑か？　白か？　銀色か？

フフフフ、きっと白やな。

どーせウチは禁忌の忌み子なんや……。

結局、私は居残り授業に参加することにした。
さすがに学園長に、「このままでは留年してしまいます。木乃香お嬢さまの護衛のために、成績に下駄を履かしてください！」なんか言えない。
それにもし留年してしまったら、私を信じて木乃香お嬢さまの護衛にしてくれた長に何てお詫び申し上げればいいのだろうか？

……何だろう。木乃香お嬢さまが私を見つめていらっしゃる。
そんなとき、以前だったら申し訳なさで心が張り裂けそうになったのに、今は申し訳なさで心が萎みそうになる。
私はどうしてしまったのだろう？　ハハハ、これじゃ護衛失格だな。

イヤ。まずは勉強を頑張らなければ。
もし本当に護衛をクビになってしまったら、私は何をしていいかわからなくなる。

ネギ先生には感謝しなければ。
確かにこのまま高校に進んでいたら、確実に不味いことになっただろう。
最悪なことになる前に解決出来るチャンスを手に入れることが出

来た、と前向きに考えよう。

神楽坂さん達だって勉強を頑張っているんだ。
私だって頑張らなければ。

アレ？　そういえば何で神楽坂さんは落ち込んでいるんだろう？
せっかくの居残り授業なのに。

イヤホンで何かを聞くまでは元気だったのになぁ……。

――神楽坂明日菜――

ああ、協力ありがとうね、ネギ。
大丈夫よ、まだ生きているわ。

テープレコーダー返すわね。

こんなことに貸してくれてありがとう。

ううん。別にネギが悪いわけじゃないわ。
何となくわかっていたことなんだから……。

うん、大丈夫よ、木乃香。
コレぐらいへっちゃらだって……。

……ゴメン、木乃香。今日はネギ貸して頂戴。
え？　抱いて寝たら、暖かくて気持ち良いんでしょ？

大丈夫大丈夫。
明日も新聞配達のアルバイトあるから早めに寝なきゃね。

……。

……。

……終わった。私の恋。

第十四話　途中加入（後書き）

ちょっと短めですね。
とりあえず単行本第1巻分は終了です。
他にもいろいろと進んだり、終わってしまったこともあるようですが……。

細けぇことはいいんだよっ！

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた
カモ：去勢された
鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち
エヴァンジェリン：紅茶吹かされた
バカレンジャー：勉強地獄
学園長：初恋の人を成仏させると言われたせいで胃痛
さよ：知らないうちに成仏させられるところだった
魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という困惑
愛衣：幼児退行させられた
高音：露出狂の嫌疑かけられた
刀子：露出狂の嫌疑かけられた
バレーボール：破裂させられた　↑　ｎｅｗ！
タカミチ：コーヒー吹かされた　↑　ｎｅｗ！
刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任　↑　ｎｅｗ！

明日菜：失恋　↑　ｎｅｗ！

第十五話　部活巡り

――――ネギ・スプリングフィールド――――

「ただいまー。
うー、寒い寒い」

「お帰りなさい、明日菜さん。
休日の朝から新聞配達お疲れ様です」

「お帰り、アスナ。
昨日今日と一段と冷えるなあ。何でもこの冬一番の寒さらしいやえ」

「どーりで寒いわけね。この寒さでミニスカートは辛かったわ。
着替えるのが面倒とはいえ、ズボン穿いていけばよかったわね」

明日菜さんが元気になってよかったなぁ。

この前まで死人みたいになってたし。

いくら頼まれたとはいえ、タカミチに明日菜さんのコトをどう思っているのか聞き出すなんて、やっぱり断ればよかった……。
原作知識で無理ってわかってたんだしなぁ。
あの結果はさすがに罪悪感が沸きましたよ。

……ハァ。
面と向かって振られた原作はこれよか数段マシですね。
告白する前に断られるのがわかってしまった方がダメージは大きいです。

とりあえず“大切な女の子”みたいな言葉をタカミチから引き出そうと思ってたのに、しずな先生の参加で変な方向に持っていかれてしまいました。
しずな先生に悪気は無かったんでしょうけどねぇ……。

？　あれ？
どこからか「お前が言うな」という声が……？

「……えいっ！」

「うわひゃっ！！！」

「あ、コラ。湯たんぽは大人しくしてなさい。
こっちはこの寒い中で新聞配達してきて、すっごい体が冷えてるんだから」

そして失恋した明日菜さんはやけにくっつくようになってきました。
人肌が恋しいんですかね？

僕だけじゃなく、木乃香さんも何かあれば抱きつかれたりしてるので、まだ失恋のショックが尾を引いているようです。
最近寝るときは明日菜さんの抱き枕にされてます。

まあ、しばらくは明日菜さんの好きにさせましょう。
あの明日菜さん見てたら反抗する気が失せました。

「ねー、今日はどうするの？
先週の休みは授業の準備で忙しかったみたいだし、私の勉強も昼は休むんでしょ」

「そうですよ。
最近明日菜さん頑張ってますからね。息抜きも必要です。
夜の勉強はいつも通りしますけど、それまではゆっくりしてください。
他の皆さんも頑張ってますからね。多分、２－Ａは今度の期末テストで最下位脱出できますよ」

「よかったなー、アスナ。
やっぱりアスナはやれば出来るんやよ」

「アハハ、私も最近ようやく勉強の仕方がわかってきた気がするのよね。
ネギがこの部屋に住んでくれてありがたいわ。家庭教師をタダで雇っているみたいなんだもの」

誉めてくれてありがとうございます。
僕も明日菜さんの役に立てて嬉しいですよ。

だからシャツの中に手を入れて、サワサワとお腹を触るのやめてください。
明日菜さんは暖かくて気持ちいいかもしれませんが、僕は普通に冷たくて何よりくすぐったいです。
というか、完璧無意識でやってますよね。

それと勉強頑張るのはいいですけど、失恋のショックで勉強にのめり込むのはマズイと思います。

「最近勉強ばっかりしてた気がするわね。
今日はどうしようかしら？」

「そうやね。ネギ君は何か予定あるん？」

「今日は皆さんの部活を見て回ろうかと思ってます。
担任補佐の仕事にも余裕が出来てきましたので、そろそろ麻帆良巡りをしてみようかなぁ、と。
クラスの皆にも見学に来るよう誘われてますし」

「そういえばくーへとかとそういう約束してたもんなぁ。
あー、今日は図書館探検部の活動はないから、見学して貰えなくて残念やなぁ」

「ええ、中武研は午前に集まりがあるらしいですから、それを覗いて他にも回ってみようと思います」

今の古菲さん相手なら、素の僕でも負けはしないでしょう。

古菲さんが意識的に気の扱いをするようになったら、さすがにコッチも魔力か気を使わないと勝てませんがね。

あー、バイアスロン部って今日やってたかな？
やってたらライフル撃たせて欲しいんだけど……。

剣道部……はやめておきますか。
木乃香さんと一緒に行ったら、刹那さんに何言われるかわかりませんし。

「じゃあ、私が案内してあげるわ。
ネギには勉強を見てもらっているし、そのお礼に少しは面倒見てあげないとね」

「あ、ならウチも着いてくわ。
たまにはそういうのも面白そうやし」

「ありがとうございます。
地図片手に見学しようと思っていたので、案内していただけるのは助かります」

「あー、じゃお弁当作ろうかな。
何かピクニックみたいで楽しいやん」

お弁当かー。
そういえばそういうのはまだ食べてなかったな。
でもなぁ……。

「それは別の機会でもいいですか？
お昼には食べてみたい所があるんですけど」

――――長谷川千雨――――

……ダリィ、腹減った。
昨日は休みの前日だからってうっかり夜更かししすぎた。寝たのが朝方だったからなぁ。
腹が減って目が覚めたのに、買い置きのカロリーメイトとか切ら

しちまってたし……。

それにしても、麻帆良の変なことは遂に極まれりだな。
何なんだよ、１０歳の教師ってのは……。
労働基準法ってのは何処行ったんだよ。

まあ、わざわざイギリスから麻帆良に教師になりに来たっていうぐらいだから、優秀なことは優秀なんだよなぁ。教え方もうまいし。
ヘタしたら高畑より優秀なんじゃねーか？

少なくともあのガキが来たおかげで、高畑が出張ばっかりなせいでホームルームが自習になりまくってた頃よりはマシにはなったんだよなぁ。

あのいつもお祭り騒ぎ状態のクラスを纏め上げているし、バカレンジャーの連中が勉強を頑張るようになったのも凄い。
身体が空いているときは、担当の教科以外のときでも授業補佐としてクラスにいる。
おかげで英語だけでなくて、他の教科の成績も上がってるらしいな。

というか、あのガキの担当は英語なのに、何で国語の成績が一番上がるんだよ？

あのガキが言うには、

「僕が難しいと感じたところを重点的に教えているだけですよ。
あと日本人の国語の先生は日頃から日本語に慣れ親しんでいる分、感覚的になってしまうところがありますからね。
僕は逆に理論的に日本語を学んで、その通りに教えているのでわかりやすいんじゃないでしょうか」

ってことらしいがな。

……まあ、理屈はわからんでもない。クラスの中でも留学生である古の国語の成績が一番上がってるらしいし。
それといくらなんでも１０歳の外国人のガキに国語を教わるのはマズイ、とクラスの連中が思ったのが国語の成績が特に上がった要因だろーな。

くそっ！
あのガキの中身はマトモそうなのに、あのガキの存在自体がマトモじゃないってのが余計に悔しい！

と、思っていた時期が私にもあったよ。

何であのガキが近衛をお姫様抱っこして、神楽坂と一緒にコッチに向かってダッシュしてくんだよ？
愛の逃避行かぁ？

というか、よく近衛を抱っこしてあんな風に走れんな。

「こんにちは、長谷川さん！　丁度いいところに！
古菲さんが来たら僕達はアッチに逃げたと言ってください！」

「こんにちは、ネギ先生…って、ちょっと！？」

私の返事も聞かずに近くの茂みに隠れる3人。
くそっ！　やっぱりあのガキの中身もマトモじゃなかったんだ！

それに古だと？
いったい何なんだよ……って。

……おお……？　古の奴が凄い勢いでコッチに向かってくるぞ？

ああ、厄介ごとに巻き込まれちまった。
早く飯食ってブログの更新しなきゃいけねーのに……。

「長谷川ーーーーー！！！
今ココをネギ坊主達が通っていかなかったアルか！？」

「……あ、ああ。
近衛をお姫様抱っこしてたのに、神楽坂と一緒に凄い速さでアッチに走ってったぞ。」

「教えてくれてありがとうアル！
ネギ坊主！　勝ち逃げは許さないアルよ！！！」

ドドドドド、とすげぇ勢いで走っていく古。

だから何で生身の人間があんなに早く走れるんだよ！？
それに“勝ち逃げ”？　あのガキが中武研部長のデタラメな古に勝ったってのか？

「すいません、長谷川さん。
ご協力感謝します」

「……あー、いえ。別に……」

古が立ち去ってからヒョッコリ出てくるこのガキ。
いや、そのために隠れていたんだからしょうがないんだが、それでも何故かむかついてくる。

相変わらずニコニコと、いつも変わらない表情しやがって。

「しかし、ええんかな？
くーへ怒ってたで？」

「ネギの言ったことはわかるけど、はっきり言ってトンチの類よ」

「ま、大丈夫でしょ。
古菲さんは勝ち逃げと認識されてるみたいですから、予定通りに次の目的地へ行けば古菲さんは怖くないです」

トンチ？　ああ、それならわかる。
どーせこのガキが赴任初日に鳴滝姉妹を嵌めたように、単純な古を嵌めたんだろ。

「……あー、もう行っていいですかね？」

「あ、ありがとうございます、長谷川さん。
……僕達これから昼食なんですけど、もしよろしかったら一緒にどうですか？」

「いえ、結構です」

お前達なんかに付き合っていられるかよ！
私はさっさと飯食って帰ってブログ更新すんだ。この理不尽さを社会に、大衆に訴えるんだよ！

「ちょうど臨時収入があったので奢りますよ。まだあまり長谷川さんとはお話出来てませんでしたし。
どうせ明日菜さんと木乃香さんには案内のお礼にご馳走させていただこうと思っていましたので、助けていただいた長谷川さんもよろしかったら是非どうぞ」

うお！？　食券２００枚ぐらい持ってやがる、このガキ！？
どうやってそんなに手に入れた！？

「うっわー、ネギ太っ腹ぁ。
何でも頼んでいいの？」

「ありがとなー、ネギ君」

「こういうあぶく銭はパァーッと使った方がいいですからね。食べられるんなら構いませんよ。
食べてみたいところがあるので先ずはそこへ行きますが、そのあとは甘味処巡りでも何でもお付き合いします。
あ、ただし、食べきれない分まで頼むのはナシです。もったいないですからね」

……ぐ。
普段はカロリーメイトなんかで過ごしているが、旨いものが嫌いなわけじゃない。
しかもこの前買ったコスプレ材料を奮発したせいで、最近はロクなもの食ってなかったしなぁ……。

てゆーか、本気で腹減った。
飯食いに外に出てきたのに……。

「グウゥ～～～」

「「「あ」」」

屈辱だ！
こんな状況で腹を鳴かすなんて、どこの腹ペコキャラだよ！？

くっ、消すしかない。
もはやこいつらを殺るしか……。

「どうですか、長谷川さん？
古菲さんもまだ辺りを探し回っているでしょうから、一緒に安全な所に行きましょうよ」

……そうだな、まだ古の奴がうろついているかもしれんな。
しかも私がこいつらの手助けをしたとバレたら、面倒なことになりそうだ。
だったらしょうがない、よな。

「……で、超包子（ココ）ですか？」

「ええ。
茶々丸さんや四葉さん達に誘われていましたので」

「いらっしゃいませ、ネギ先生」

……よりにもよって超包子（ココ）かよ！？
確かに旨いものは食えるが、超包子（ココ）なのかよ！？
そもそも中学生が何で屋台を経営出来るんだよ！？

……しかも、だ。

「……あの、ネギ先生。
古がずっとコッチを睨んでいるんですが？」

「大丈夫ですよ。
元々古菲さんはここでウェイトレス兼用心棒としてアルバイトしてる上、四葉さんがいるのなら滅多なことになりません」

なんでこのガキはこんなに平然としているんだよ！？
古のあの目は明らかに殺る目してるだろ！？

てゆーか、古に手招きすんな！　「一緒に昼食どうですか？」とか聞いてんじゃねえっ！

「……これがネギ坊主の護身術アルか？」

「そうですよ～。
護身術の基本は“危険なところに近寄らない”、“安全な場所にいる”ですからね」

「アハハ、そうネ。
そういう意味では確かに超包子（ココ）は最高に安全な場所アルよ」

ハッハッハ、と笑いあう2人。
……やっぱり飯に釣られるんじゃなかった。

「ま、とりあえず注文しちゃいましょう。
長谷川さんが「ワケがわからないよ」みたいな顔をしてますので、その間に説明しましょうか。
古菲さんもお好きなものをどうぞ。たまにはアルバイト先の客になるのもいいのではないですか？」

「……わかったアルよ。負けは負けネ。今更どうこう言ったりしないアル。
でも、さすがにこれはどうかと思うアル」

古が一枚の紙を差し出したが、そこに書かれていたのは

「護身術真髄“逃げるが勝ち”」

だった。

……このガキ、逃げたんか。

「ネギ坊主は酷いアル。
最初の試合は良かったけど、その次のは戦いとは呼べないアルよ」

「私から見たら、最初の試合もよくわかんなかったんだけどね。
１０分の間あんまり動きはなかったし、結局ほとんどが睨み合いだったでしょ？
しかもネギは杖を使ってたけど、くーふぇは素手だったじゃない」

「確かにそうアル。しかし、ネギ坊主の修めている技はあくまで“護身術”。
私が仕掛けようとしても全て出足を潰されてしまっていたアル。
あのまま続けていてもネギ坊主を捕まえられなかったアルね。
一方のネギ坊主はこれが“試合”じゃなかったら、大声で助けを呼ぶだけで良いアルね」

「ふーん、くーへから見たらネギ君って強いんかな？」

「うーん、１０歳ということを考えたら凄いと思うアル。
でも、あくまで１０歳の男の子だから、女でも１４歳の私の方が身体能力は上アルね。私が負けたのは相性の問題と武器の有無、あとは私がネギ坊主を甘く見てたことアルよ。
私としてもあの戦いは良い勉強になったアルよ」

なんだよ、このガキ結局は古に勝ってたのかよ！？
まあ、ガチンコ勝負で勝ったのとは違うし、武器有りで古も甘く見てたらしいからありえなくはないのか。

「おかげで食券儲けさせて頂きました。
古菲さんに賭けてた中武研の人達にもお礼を言っておいてください」

「それで食券をそんなに持ってたんですか。自分が勝つ方に賭けるなんて……。
それに教師が賭け事していいんですか？」

「アハハ、自分が負けるのに賭けて、わざと負けるとかじゃないからいいんですよ。
というか、僕に賭ける人はいなかったので、賭けが不成立になるところでしたし。

教師が賭け事云々は耳が痛いですが、期末テストで２－Ａが１位をとることに一点買いするので多めに見てください。
それに僕はイギリス人ですし」

ああ？　日本人だろーがイギリス人だろーが関係無……
そっか。

このガキってイギリス人か。

イギリス人つったら“クリスマスに雪が降るかどうか？”すら賭けにするぐらいの賭け好きなんだった。ブックメーカーってやつだったな。

賭け事に嫌悪感抱かないのは国民性の違いかね？

「最初の試合は私の負けで納得済みアルよ。けど次のコレはどういうことアルか？」

「まぁなぁ。いきなりネギ君が「わかりました。そこまで言うなら護身術の真髄をお見せしましょう。準備があるので更衣室をお借りします。明日菜さんと木乃香さんは手伝ってください」なんて言うたのに。

更衣室に行って置手紙用意したと思ったら、いきなり窓開けてそっから逃げだすんやもん。

アレにはビックリしたわ」

「いやあ、身を守るための護身術ですからね。そもそも戦う必要がなかったのなら戦いませんよ。

僕も身体を動かすのは好きですし、誰かと競い合うのは嫌いというワケじゃありませんけどね。

でも、あそこで逃げておかないと、何試合もやる羽目になりそうでしたし」

「……う」

「あー、確かにそうなったわね。
くーふぇの目がキラッキラに輝いていたもん」

「むうぅーっ！　わかったアルよ。
ネギ坊主、また日を改めてなら戦ってくれるアルか？」

「程々にお願いしますよ。
僕も仕事があるので」

……やっぱり変なガキだ。
こいつ年齢詐称してんじゃねーのか？

「……あの、ネギ先生。
前から聞きたかったんですけど、何で１０歳なのに麻帆良で教師をやってるんですか？」

「ん？　んー、複雑なようで単純な話なんですがね。
大人達の事情に巻き込まれたんですよ。

僕の父も業界では結構な有名人でして、僕はその後継者と期待されているといいますか、無理矢理にでも後継者にして自分達に都合のいい客寄せパンダにしそうな大人達がいるんですよ。
で、その自分を引き込みたい大人とか、そういうことに巻き込みたくない僕の祖父でもある学校長とか、そもそも常識を勉強させなきゃマズイと思った大人とかの、いろんな大人達の事情と思惑が絡み合った結果ですね。
まあ、引き受けたからには精一杯務めるつもりですけど」

いきなりヘビーな話になりやがった。
このガキはこのガキで結構苦労してんだな。

「元々僕も日本に興味があったから、特に文句もつけませんでしたけどね。
父が京都に住んでいたことがあったらしいですし、タカミチからも日本の話を聞いて興味を持ってましたし、ジャパニメーションも見てましたからね。

でも、麻帆良のようなアニメみたいな町に住むことになるとは思ってもいませんでしたよ」

……アニメみたいな？

「ネ、ネギ先生が予想してたような日本とは違ったんですかね？」

「予想していたといいますか、少なくとも茶々丸さんみたいなロボットと会えるなんて思いませんでしたねー。
さすが日本です。僕の住んでいた田舎とは違いますね。
麻帆良はまるでジャパニメーションに出てくる町のようです。まさかこんな町が現実にあるなんて思いませんでした」

このガキ、アニメと現実がゴッチャになってやがる！？
あ、このガキにしたらゴッチャじゃなくて、アニメみたいな現実が実際にあったということなのか！？

「そ、そうなんですか。
……でも、日本の中では麻帆良も結構変わってる方ですよ。アハハ……」

「まあ、日本も広いですからね。ところ変われば学校も変わってくるでしょうね。
けど僕の住んでいたところに比べれば、麻帆良でも麻帆良以外でも大きく違っているということには変わりないですし」

「ネギ君住んでたトコってどんなんなの？」

「自然に囲まれたところ、と言えば聞こえはいいですが、実際は自然しかない田舎ですね。
どのくらい田舎というと、そうですねぇ……。
あ、僕が日本に来るためにロンドンのヒースロー空港から飛行機に乗ったんですけどね。
そのとき初めて“エレベーター”に乗りました！」

田舎モンだ！
間違いなくこのガキは田舎モンだ！！！

ま、まさかこのガキ。
元々はマトモで麻帆良に違和感を感じていたのに、「日本って凄いんだなぁ」で終わらしてたのか！？　「都会って凄いんだなぁ」で納得してたのか！？

……有り得る。
このシッカリしていそうだけど、根っこは素直すぎるこのガキなら有り得る。

「それとまさか、本当に忍者がいるなんて思ってもいませんでしたね。

頼んだら“分身の術”とか教えてくれませんかねぇ？」

「あー、本人は否定しとるけどなぁ」

「え？　楓ってば本気で隠している気なの？」

畜生！　そうだよな！
忍者がまだいるって本気で信じている外国人もいるらしいからな！

実際にそういうの見たら信じちまうよな！
“分身の術”なんか出来るわけねーだろーがっ！！！

マ、マズイ……。
このままじゃ、このガキの中では麻帆良が普通に分類されちまうぞ。

ヘビーな事情で日本に来た上、こんな異常な所を普通と思い込んじまうなんて、いくらなんでも不憫すぎる！
将来、このガキどうなっちまうんだよ！？

だ、駄目だ、このガキ。
早く何とかしてやらないと……。

「ネギ先生、お待たせしました。杏仁豆腐です」

「ありがとうございます、茶々丸さん」

平然とロボットから杏仁豆腐を受け取ってるんじゃねぇ！
あんなロボットがいるなんておかしいと思わねぇのかよ！？

……無理だよなぁ。まだガキだもんなぁ。
小さなガキに当たり前のように麻帆良を見せ続けていたら、麻帆良を普通と思い込んじまうよなぁ。

ムキ～～～～ッ！
私の普通の学園生活を返せっ！！！
これ以上、このガキを理不尽に汚染するなぁっ！！！

第十五話　部活巡り（後書き）

やっべぇ、ちうたん書いてて楽しいｗ
何だかんだ言ってちうたんは面倒見がいいので、理不尽なことに巻き込まれている純真な子供がいたら見て見ぬ振りは出来ないでしょうｗ

しかし実際のところ、その純真な子供は理不尽に巻き込まれているどころか、逆に理不尽な権化とも言うべき存在なのが残念なのですが。

ちうたんをどうしようかと迷ったのですが、放っておくことも、裏のことを教えるのもここのネギらしくありません。
ということで、裏のことを教えないまま味方になってもらうことにしましたｗ

第十六話　恋する乙女

――――綾瀬夕映――――

「のどかには積極性が足りないのよっ！」

「え？　ええ～？
そ、そんなぁ～」

「ハルナ。
のどかにはのどかのペースがあるのです」

「甘い、甘いよユエっ！
ネギ君みたいな優良物件。そんじょそこらにいるわけないわ！
気を抜いてると、他にとられちゃうわよ！」

ハルナには困ったものです。
どう考えてものどかの性格では、積極的にネギ先生にアタックするなんて無理ではないですか。

「いや～、でもね。本当にネギ君は人気あるよ。ショタコンのいいんちょはともかく、一緒の部屋に住んでる木乃香とアスナはもう家族といっていいぐらいの仲になっているしねぇ。他にも武道四天王であるくーちゃんや刹那さん、龍宮さんもネギ君には一目置いているし、あまり他のクラスメイトと関わらないエヴァちゃんや茶々ちんでさえネギ君とは話すんだよ」

「そういえば、ネギ先生はくーふぇさんに試合で勝ったらしいですね。

次に戦ったらわからないとは言ってましたが……」

「ネ、ネギ先生（せんせー）って強いんだぁ。

私を助けてくれたときも凄かったし……」

確かにネギ先生は人気ありますね。

木乃香さんはネギ先生を弟みたいに可愛がっていますし、アスナさんは凄く落ち込んだときにネギ先生に励ましてもらったらしく、元気になってからはネギ先生とはとても親密になっています。

私は恋愛はまだよくわかりません。

私にとってネギ先生は、妙にこましゃくれた子供という感じなの

ですけどね……。

確かにネギ先生が担任補佐となってから、私を含めて皆の成績が順調に上がっていってます。

ネギ先生に勉強をすることとしないことについてのメリットとデメリットを一つずつ述べられ、それで最終的に勉強することを私は選びました。

確かに補習や居残り授業で読書の時間や図書館探検部の時間を削られるぐらいなら、最初から勉強して補習や居残りを避けるようにしますよ。

しかし、逃げ場を塞がれた後で各々の自主判断に任された、というような手法をとられた感じがするのです。

もとから選択肢が一つしかなかった。でも、自分の判断でそれを選んだことにされた。

そんな気分なのです。

「だから！

のどかはもっとネギ君に積極的にアタックしないと、担任補佐しているクラスの生徒の一人としか見てくれないわよ！」

「い、いいよ～。

私はネギ先生（せんせー）とお話出来る今のままで十分だよ」

「お話っていっても、一日に2、3分もお話出来てないじゃん」

「ハルナ。言っていることはわかりますが、のどかの性格からしてそのようなことが出来るとは思いません。
焦った挙句に悪い結果が出るのがオチです。
それともハルナには何か良い手があるのですか？」

「フッフッフ、よく聞いてくれました。
ここだけの話なんだけどね、ネギ君が今夜いつも私達が使う時間の後に、大浴場の方でお風呂入るんだって。
ネギ君て温泉とか銭湯にいったことがないらしくて、寮長に許可貰って大浴場で広いお風呂を体験するみたいだよっ！！！」

「……ハルナ。もしかしてのどかにネギ先生と混浴しろと言っているのですか？」

「えっ！？　えええぇぇ～～～っ！？
そ、そんなこと出来ないよ！」

「大丈夫大丈夫、水着着て入れば平気でしょ？
しかも、寮長と話しているのを聞いてたときにいいんちょとかも一緒にいたからね。きっといいんちょも混浴狙ってるよ。
ホラ、担任補佐との親睦会ってことでさ～」

「委員長さんもですか……。
となると、ウチのクラスのことですから、きっと他にもネギ先生とお風呂に一緒に入ろうとするのはいるでしょうね」

「で、でも、混浴だなんて……」

「私達も一緒に行ってあげるからさ～。
じゃあ、とりあえず水着持って大浴場行ってさ、他にもお風呂入ろうとしてた人がいたら、のどかも入るってのはどう？」

……フム、そこら辺が落とし所ですかね。
はしたないことをすればネギ先生に引かれる恐れがありますが、のどかの性格を知っているネギ先生なら、周りで騒いでいるクラスメートに引っ張ってこられたと思ってくれるでしょう。
それにこの一件を見逃して、ネギ先生と他の人の親密さが更に上がってしまうと、のどかが入り込む隙間がなくなってしまいます。

「それなら大丈夫ではないですか？
最悪の場合はハルナにせいにすればいいだけですし」

「ちょっ！？　ユエ酷いっ！？」

「（で？　やっぱりいいんちょも来たんだ？）」

「な、何のことですか！？
私はただお風呂の時間がいつもより遅くなってしまっただけですわよ！」

「（大声出すとネギ坊主に気づかれるでござるよ）」

やっぱり多いですね。
委員長さんを始めとして、長谷川さん、鳴滝姉妹の２人、楓さんに千鶴さんとナツミさんがいました。
私達３人を含めて１０人ですか。クラスの三分の一がここにいますね。

「（それにしても、千雨さんがこんなことに参加するとは思ってい

ませんでした）」

「（……いや、いいんちょ見てたらネギ先生が心配になってな。
鳴滝姉妹は長瀬が手綱を取ってくれそうだが、いいんちょが暴走しそうで……）」

「（そのときは千鶴さんにお願いするしかないです）」

「（てゆーか、早乙女の面倒はお前がみとけよ！）」

……きっと大丈夫だと思います。
ハルナはきっとのどかのために頑張ってくれているのだと思うのです。

「何をやっているんだ貴様ら？
風呂で水着なんか着て？」

エヴァンジェリンさん！？　また増えたのですか！？
これ以上増えないように“ネギ・スプリングフィールド入浴中”という張り紙を、“立ち入り禁止”と改竄しておいたのに……。

「（え？　なになに？
エヴァちゃんもネギ君とお風呂入りに来たの！？）」

「？　何のことだ？
ネギがここの風呂を使っているのか？」

「（と、とりあえず声を小さくしてください！）」

知らないのに“立ち入り禁止”を無視して入ってきたのですか。
水着を持ってきていないようですし、本当にただの偶然みたいですね。

エヴァンジェリンさんは寮外に住んでいるのに、たまにこの大浴場を使いに来るんですよね。

「（あ、ネギ先生の服を発見したよ！
丁寧に折り畳まれてるのがネギ先生らしいよね。
……ネギ先生ってトランクス派なんだ）」

「（お姉ちゃん！　駄目だよジロジロ見たら……）」

「（ネ、ネギ先生の下着……）」

「（ちょ！　コラ、いいんちょ！
鼻を押さえながらネギ先生の脱衣カゴに近づくんじゃねぇ！
さすがにそれはヤバイぞ！　那波と村上もいいんちょ押さえるの手伝え！
長瀬は鳴滝姉妹を押さえとけ！）」

「（あいあい。
ホラ、少し落ち着くでござるよ）」

「（アラアラ、あやかったら）」

「（ち、ちづ姉、いいんちょの目がヤバイよ～）」

何ですか、この混沌は……。
こんな面子ではのどかがネギ先生にアピール出来るのでしょうか？
というか、委員長さんと楓さんと千鶴さんのビキニ姿がマズイです。
あの3人はスタイルも良く、かなり露出が多いビキニを着ていま

す。
ネギ先生もやはり男の子なので、ああいう格好が好きかもしれません。

というか、ハルナ！
あなたも大胆なビキニ姿になってるんじゃありません！
あなたはのどかの応援のはずでしょう！

「（や、やっぱり私なんかじゃ……）」

「（大丈夫です、のどか！
のどかの水着は委員長さん達とは違う魅力があります！）」

のどかの水着はセパレーツタイプの水着です。
露出が多いわけではありませんが、清純そうなのどかに似合う可愛らしい水着でしょう。
さあ、勇気を出してネギ先生にアピールするのです！

「フン、まあいい。私は風呂に入りに来ただけなんだ。
先に入らせて貰うぞ」

「って、少しお待ちを！
エヴァンジェリンさん水着はどうなされたんですか！？」

「風呂に水着なんか持ってきてるわけなかろう。
１０歳のガキに裸を見られても、別に何とも思わんしな」

全裸！？　更なる勇者が！？
風呂に水着を着ないで入るなんて、どんだけ凄い勇気をお持ちなんですか！？
さすがにそれはマズイです！

「（べ、別にお風呂に水着を着ないで入るのは普通じゃないかな～？）」

「（そういう問題じゃないよ、のどか！
ここはのどかもエヴァちゃんに負けないために全裸で……）」

「（のどかに何を言ってるですか、ハルナ～～～！）」

「……騒いでないで、入るならさっさと入ってきなさいよ。あんたら」

「あー、やっぱりネギ君の言うとおりに皆入ってきたな～」

アスナさんに木乃香さん……。
まあ、あんだけ騒げば気づかれますか。
というか、何で風呂場のほうから出てくるのですか!?

「ど、どういうことですか、お二人とも!?
まさか既にネギ先生と入浴なされていたなんて……。
抜け駆けですか!?」

「抜け駆けも何も、ネギに頼まれたのよ。「おそらくクラスの人達が大浴場に乱入してくるでしょうから、抑えのために一緒に大浴場に来てくれませんか?」ってね。
１０人も入ってくるとは思ってなかったみたいだけど」

「ちなみにネギ君も水着をちゃんと着てるで」

……う。

さすがはネギ先生。私達のことをよくわかっているのです。

ちなみに明日菜さんと木乃香さんは私と同じ、学校指定のスクール水着でした。

他にも千雨さんとナツミさんと鳴滝姉妹もスクール水着です。

――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル――

……おんぶされたときに身体を触ってわかっていたが、改めて見るとネギの身体はなかなかガッシリとしているな。

もちろん子供特有の柔らかそうな身体も同時に持っており、大人

と子供の身体両方の良い所を合わせたような身体だ。

やれやれ。

本当に広い風呂に入りに来ただけで他意はなかったが、良いものを見ることが出来た。

くっくっく、数年後が楽しみだな。

「エヴァさんて、髪の毛本当に長いですよね。

そんなに長いと洗うのも大変ですね」

「まあな。

いつものことだから慣れているが、それでも時間はかかるな」

結局、茶々丸に水着を持ってこさせたが、それでよかったな。

ネギは何だかんだで紳士だから、水着を着ていないとコッチを見ようともしなかっただろうから。

「……よし。髪を洗うのを手伝え、ネギ」

今日はせっかくだから、ネギに髪を洗わせてみよう。

先日、『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』解呪の研究のために家に来たネギに、「体育の時間に捻った」と言って足をさすらせたのは良かった。

もちろん私は椅子に座って足を組んでネギに足を差し出し、ネギは私の前に跪いて足をさする体勢だ。

他に足をさすらせるための良い体勢がなかったから仕方あるまい。

正直、興奮した。

『咸卦治癒（マイティガード）』を発動させ、跪いて私に奉仕するネギ。

久々に至福な一時を過ごせた。思い返すだけで顔がニヤついてしまう。

膝を擦りむいていたとしたら、「舐めて治せ」と言えたのに残念だ。

何も知らない純真な子供にああいうことをさせるのは、背徳感で背筋がゾクゾクするな。

そういえば、茶々丸はあのときの映像を録画してたかな？

してたら映像を後で見せてもらうとするか。

ああ、ネギを早く私のモノにしたい。

といっても、ナギのときみたいに焦ったら駄目だ。

今の時点でネギに「私のモノになれ」と言っても、おそらく反発するだけだろう。
ネギは天邪鬼っぽいところがあるからな。
だから、ネギの方から告白させる。

ネギの性格だと、コレと決めた女には一途な想いを貫く。
例え私のような忌避される存在だとしてもな。

我侭な性格ゆえに、惚れた女を我侭に愛するだろう。

ああいう我侭な猫みたいな子供を私好みの男に育て上げ、ネギの方から「貴女のモノにしてください」と言わせる。
何ともやりがいのあるゲームではないか。

しかもいろいろとやりすぎてしまったら、ナギのときは封印されるだけで済んだが、ネギの場合だと私の命が危なさそうだ。

だが、それがいい。
このゲーム、ナギを私のモノにするよりも難しそうだ。くっくっく。

「どうした、ネギ？
特別に私の髪に触らせてやろう」

「オホホホホ、何を仰るのですかエヴァンジェリンさん。
髪が洗うのが大変だと仰るのなら、私が手伝って差し上げますわ。
風香さんと史伽さんも手伝ってくださいな」

「はーい、いんちょ」

「手伝ってあげるね、エヴァちゃん」

ちょ！？　待て！？
貴様らには頼んでおらん。
というか、お前の顔に夜叉が見えるぞ、雪広あやか！

「殺してでも　かみをあらう」

な　なにをする　きさまらー！

……フゥ、広い風呂は良い。
家の風呂はここまで大きくないし、広い風呂のために別荘へわざわざ行くのも億劫だ。
だからたまに、この女子寮の大浴場を利用している。

「それにしても、ネギって風呂好きよね。
ちゃんと朝晩2回シャワー浴びてるし」

「いや、実のところあそこまでしなくても平気なんですけどね。
前はキャンプで2、3日お風呂に入らないとかよくありましたし」

「あー、外国人はそうだっていうやね」

「え？　じゃあ、何であんなに頻繁にシャワー浴びるの？」

「日本人は清潔好きと伺っていたからですよ。
しかも女子中学生の相手をするんですからね。そりゃあ清潔さには気をつけますよ。
皆さんから「臭い」とか言われたらショックですし」

そういうところは紳士なんだよなぁ。
足をさすらせたときも私がミニスカートだったから、すぐさま着ていた上着を膝に掛けられたし。

「いやあ！　それにしてもネギ君は幸運だね！
こんな美少女達とお風呂に入れるんだから！」

「ハハハ、そうですね。
水着も似合っていて、皆さん綺麗です」

「それじゃあさ！
この中で一緒に海とかプールに行くとしたら、誰が良い？
あーっと、スクール水着の人は除いてね。誰の水着姿とデートしたい？」

「ハ、ハルナったら、いきなりネギ先生（せんせー）に何言ってるの……」

「あや？　やったらちゃんとした水着を着てくればよかったわぁ」

ム？　となると、候補は私と宮崎のどか、雪広あやか、長瀬楓、那波千鶴、早乙女ハルナの６人か。

……私の勝ちだな！
宮崎のどかはともかく、後ろの４人のような露出が多い水着をネギは好まんはずだ。

「え？　えーっと、そうですねぇ。
皆さんお綺麗ですけど、エヴァさんか宮崎さんですかね」

「そ、そんな！？」

「アラアラ、残念ね。あやか」

「振られてしまったでござるよ」

「よかったですね、のどか」

「はわわわ……、ネギ先生（せんせー）……」

フハハハハ、そうだろうそうだろう。
宮崎のどかも選ばれたのは気になるが、先に名前を呼ばれたのは私の方だ！

「ありゃー、残念。
でも、どうして？　ネギ君てこういうビキニは嫌いなの？」

「いえ、別に嫌いというワケじゃないですよ。皆さん良くお似合いですし、他にどんな水着が良いかと聞かれれば困ってしまいます。
でも、海やプールでデートってことは、他の男性にも見られてしまうことになってしまうじゃないですか。
僕だったらデートする相手がいやらしい目で見られるのは嫌ですね。僕って結構独占欲強いので」

「まあ！　嫌ですわ！
ネギ先生ったら、オホホホホ……」

「お！　言うねぇ、ネギ君！
やっぱりネギ君も男の子だね」

……。

……。

……肉体年齢は１０歳のままなんだよっ！

おのれっ！
幻術さえ使えばこのようなことには！！！

「……つまり私のことは見られても構わないということか、ネギ？」

「そ、そうなんですか……、ネギ先生（せんせー）……？」

「いえ、そういうことではないですよ。エヴァさんも宮崎さんもとても可愛らしいです。

むしろ一緒に歩いて周りの人達に自慢したいですね。「僕はこんな可愛い女の子とデートしているんだぞ」って」

「え？　えへへ……。
そんなぁ、ネギ先生（せんせー）ったら……」

なるほど、そういうことか。
それなら許してやらんでもない。

イイ女を侍らすのはイイ男の証だからな。
ネギがそういう思いを抱いても仕方あるまい。
そしてイイ女の全てを知っているのは自分だけでいいということか。

くっくっく、やはりネギは将来、悪い男に育つだろうな。

「……素でこれなのかよ。
このガキは天然ジゴロか……？」

何をブツブツと言っている、長谷川千雨。

さぁて、これからどうやってネギを私好みの男に育てていこうかな？

とりあえず『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』解呪の研究のために家に定期的にやってくるから、仕掛けるとしたらそのときだな。

あとは私の別荘に招待しておいて、いつでも好きなように使っていいと言っておくか。名目は研究のためとしてな……。

そうすれば煮るなり焼くなり私の好きなように出来る。

くっくっく、感謝するぞ、ナギよ。

『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』を解かずに死んだと聞いたときは恨んだが、最高の置き土産を残していってくれた。

お前がしてくれなかったことは、お前の息子にしてもらうことにしよう。

恨むのならネギを置いて死んだ自分を恨むがいいさ。

ハァーッハッハッハッハッハ！

第十六話　恋する乙女（後書き）

ちなみにエヴァの水着は単行本１１巻のワンピースの水着です。

そしてナギが生きているということはまだエヴァには言ってません。

今でも十分良い関係を築けているし、そもそも原作のように直接会ったわけではないので説得力に欠けると思っているからです。

作者的に、エヴァならこういうこと考えそうだなぁ、と思ったんですが、いかがでしたでしょうか？

そして作者はトランクス派です。

え？　そんなことはどうでもいい？

第十七話　バレンタイン？　乙女達の想い

――――神楽坂明日菜――――

……目が覚めた。
ハァ、今日は新聞配達が休みの日だっていうのに、いつもの時間に起きちゃったわ。習慣って怖いわよね。
どうせなら、バイトの日にこうやって自然に起きられればいいのに。

「……ン……」

そして目の前には、ネギの頭がある。
私の腕はネギを抱き枕のようにガッチリと抱きしめている。

……あの日から、ずっとネギを抱き枕にしてるわね。
いい加減にやめようと思うんだけど、ネギの温もりが気持ち良くてやめることが出来ない。

ネギには迷惑かけちゃったわねぇ。
最初の日なんて、私が寝付くまでずっと背中をポンポンと優しく叩き続けてくれちゃってさ。
１０歳児に甘えるなんて、やっぱりかなり参っちゃってたのよねぇ。

ネギがいてくれて助かったわ。
さすがに木乃香に一緒に寝てくれるように頼むなんて出来ないからね。

そういえばネギのことなんだけど、少しわかったことがある。

夜寝るときは私の方へ顔を向けている状態だったとしても、朝になると私に背中を向けている状態になっているのよね。
コッチ向いて寝るのは恥ずかしいのかしら？　寝る場所を左右入れ替えても、いつの間にか背中を向けてるし。

そしてこの状態でギューっと抱きしめると、寝苦しいのか腕の中から逃げ出そうとする。
ここで抱きしめるのをやめると逃げ出そうとするのもやめるのだけど、このまま抱きしめ続ける。

「……ン、ン～……」

しばらくすると諦めたのか、逃げ出そうとするのをやめる。
そしてネギを抱きしめている私の腕に手を重ねてきて、逆に私の方へ頭を擦りつけてくる。

「……ン……」

そしてまだギューっと抱きしめ続けていると今度は私の方へ振り向いて、甘えるように抱きついてくる。

実を言うと、この甘えてくるような感じのネギの顔が可愛くて好きだ。
いつもは教師をしているためかニコニコと変わらなく笑っているような表情をしているけど、この甘え顔を見ていると作っているような笑顔だったと感じちゃった。
まあ、１０歳で教師をするんだから、多少は表情を作るだろうけどね。

だけど、このときばかりは本当に年相応のあどけない顔をして甘えてくるのだ。

エヘヘ、可愛いなぁ……。

……いんちょみたく、ショタコンじゃないんだけどなぁ。
私が好きなのは高畑先生みたく、大人の男性な筈なんだけど……。

……ハァ、高畑先生。

私って、“大人の男性が好きだから高畑先生を好きになった”んじゃなくて、“高畑先生が好きだから大人の男性が好きだった”みたいね。
渋いオジサマを見ても近頃は全然ドキドキしないし。
きっと渋いオジサマに高畑先生を重ねて見ていたからドキドキしていたのね。

ああ、もう！　どうしたらいいのかしら!?

「……ン、ン～……」

あら、いけない。
ちょっと強く抱きしめすぎたかしら？
ごめんね。よしよし……。

「……ン……」

……うう、もうショタコンでもいいかなぁ。
高畑先生はどうせもう無理なんだし。
あんだけ喧嘩してたいんちょには激怒されるかもしれないけどね。

いつまでもこのままじゃいけなのよねぇ。ずっとネギに甘えてるわけにはいかないし。
それでも、もう少しばかりこの温もりを感じていたいわ。
さすがにあの恋の終わり方はショックだったし……。

……三年生、三年生になったら本気を出すわ。
だから、もう少しこのままで……。

――近衛木乃香――

「それでは、これより臨時２－Ａクラス会議を行ないますわ！」

「いきなりクラス会議って何なのよいいんちょ～？
しかも高畑先生もネギ先生もいないじゃん」

「高畑先生にお願いして、２時間ほどネギ先生を教室に近づけないようにしていただいてます。
今日の会議の議題は、間近に迫った“バレンタインデー”についてです！」

確かにバレンタインデー近いなぁ。

でも、いきなり放課後に残るように言われたけど、そのバレンタインがどうしたんやろ？

それと毎年高畑先生に渡すアスナのチョコ作りの手伝いしてたけど、今年はどないする気なんやろか？

「はーいっ！　私はお父さんとネギ君に渡しまーす！」

「あーっ！　ゆーなズルーイ！
私もネギ先生に渡すーーーっ！」

「のどか、チャンス到来です。
バレンタインで勝負に出るのです」

「は、はわわわわ……」

「静粛に！　静粛に！
そのバレンタインデーに対しての会議ですわ！！！
長谷川さん！　説明をお願いしますわ！！！」

「わ、私かよ！？

いいんちょからしろよ……」

「発案者は長谷川さんでございましょう」

？　なんなんやろ？
ウチもネギ君と一応おじいちゃんに渡して、他の皆にも配ろうかな～。

そ、そしたらせっちゃんにもチョコを自然にあげれるし……。

「あ～、わかったわかった。
発端はいいんちょがバレンタインに企んでた企画だ。
いいんちょはネギ先生のために麻帆良で一番有名な洋菓子店を貸切にして、ネギ先生をそこに招こうとしてたんだよ……」

「え～～！
いいんちょズルイよ。バレンタインデーにネギ先生を独り占めしようなんて……」

「てゆーか、一番有名な洋菓子店ってどこなの？
私達も招待してよ～」

「わ、わかっておりますわ！
ですからこの場で皆さんと会議をしているのでしょう！」

「……話し続けていいか？
いいんちょがそういうことを企んでいたとすると、クラス全員が何かしら企んでいるんじゃないかと思ってな。そうじゃなくてもネギ先生にチョコ渡すような奴が大半だろう。
それでだ、例えば日持ちしないチョコケーキなんかをクラスの皆からたくさん渡されたとしたら、その場合ネギ先生ならどうすると思う？」

あ～、なるほどなぁ。
そういうことかいな。

「きっとネギ君なら、無理してでも皆の分食べるやろうなぁ」

「だろうな。ネギ先生は生徒から貰ったモン捨てるようなことは出来ないだろうし。
まあ、貰う量にもよるだろうが、ヘタしたら食いすぎで腹壊すだろうな」

「そんなことあってはなりませんわ！
ですので！　バレンタインデーは２－Ａ全員で抜け駆け無しのチ

ョコレートパーティーを開くことにいたします！」

「落ち着け、いいんちょ。
バレンタインデー当日はきっとこんないいんちょみたく、騒ぎが大きくなって収拾が収まらないようになるだろうな。
しかもコトが大きくなればなるほど、ネギ先生のホワイトデーの負担がでかくなってくる」

「そうねぇ。
ネギはそういうところは生真面目だから、ヘタしたら“３倍返し”をマトモに信じるかもしれないわね」

「さすがにそれは可哀想……」

「そういうことならチョコレートパーティーに賛成～！」

「ムゥ、せっかくのどかのアピールチャンスだったのですが、そういう事情ならば致し方ないと思うのです」

「そ、そうだね。
ネギ先生（せんせー）がお腹壊したりしたら嫌だもん……」

そういうことならウチも賛成やわ。
ネギ君の歓迎パーティー以来、特にそういうのやっておらへんかったから丁度ええなぁ。

「というわけで、役割分担を決めるぞ。
まあ、“当日のパーティーの準備をするグループ”、“2、3日は持つチョコを作るグループ”、“長期保管出来て、仕事中にもつまむことの出来るチョコを作るグループ”ぐらいでいいと思うが」

「そうですわね。
せっかくのバレンタインですので、パーティーの他にもチョコレートを渡すべきでしょう」

「とりあえず、四葉とか超みたいに料理上手なのと、私みたいに料理に自信無いのに別れてくれ。
それからくじ引きで料理上手がそれぞれにちゃんと入るようにしよう。全員が飯マズだったら悲劇だからな」

「人数はどうするの？」

「バレンタインデー当日のパーティー担当グループが20人、残りが5人ずつでいいと思う。
パーティーは飾り付けとかもいるだろうし、パーティーでチョコだけってのも淋しいので、他にもクラス全員分の料理を作ったりす

るだろうから２０人。
　送るチョコを作るグループはたくさん作りすぎても迷惑だろうからそれぞれ５人ずつ」

「そんなところでしょうね。
　それにしても長谷川さんには感謝いたしますわ！
　こう言ってはなんですが、長谷川さんはどこかクラスメートから一歩引いたところがありましたから、積極的にクラスのことを考えていただけるようになって何よりですわ！
　ネギ先生がいらしてからバカレンジャーの皆様の成績も上がっていますし、本当にネギ先生は２－Ａの救世主で……ま、まさか、長谷川さん！　あなたもネギ先生のことを！？」

「ちげーよっ！
　ネギ先生のことになるといいんちょが暴走するからだろうが！！！
（……クッ、落ち着け。これでいいんだ。
　どうせクラスの奴らに自重しろといっても聞くわけがない。
　だったらコントロール可能な範囲になるように誘導するまでだ。
　いくらなんでも、あのガキが腹壊して寝込んだら可哀想だしな）」

　くじ引きの結果、ウチは“長期保管出来て、仕事中にもつまむこ

との出来るチョコを作るグループ”やったわ。

えーっと、他のグループメンバーは、超りんとエヴァちゃんと千雨ちゃんと、……せっちゃん。

！！！　せっちゃん！？

……せっちゃんと同じグループになってもうた。

チャンスや！　ウチもネギ君見習って、せっちゃんに真正面から立ち向かうんや！

「よかったじゃないか。居残り授業で面倒かけている礼が出来るぞ。なぁ、桜咲刹那（バカホワイト）？」

「グハァッ！！！」

「オヤ、死んだネ」

「生真面目な奴ってメンドイな」

せっちゃーーーんっ!?
死んだらアカンーーーっ!!!

「さて、打ち合わせを始めるネ。
最初に改めて確認しておくけど、料理に自信があるのは私と木乃香サンでいいカナ?」

「私は調理実習レベルだな。
寮でも自炊はしていないし」

「出来んわけではないが、菓子作りは自信があるわけではないな」

「ウチはいつも寮でアスナとネギ君のご飯作っておるえ。ネギ君も手伝ってくれるから、最近は楽になったわぁ。
チョコ作りも去年まで毎年アスナに付き合っていたから、そこそこは出来るえ」

「……」

「返事がないヨ。
ただのしかばね（バカホワイト）のようネ」

……せっちゃんが落ちこんどる。
こんなとき何て言えばいいんやろ？

「ま、イイネ。
なら私と木乃香サンが中心になて作るとして、どういうのを作るのかダヨ」

「やっぱり“仕事中にもつまむことの出来るチョコ”なら、食っても手が汚れたりしないほうがいいな」

「あー、そういうことやな。
じゃあ、仕上げにココアパウダー振り掛けたりするのとかはアカ

ンなぁ」

「となると、銀紙とかで包んだボンボン・ショコラとかだな。
ウィスキーボンボンとかでいいんじゃないのか？」

「……ネギ先生は未成年ですよ」

あ、生き返ってくれたわ。
よかったぁ。あのままだと話しかけることも出来ひんかったからなぁ。

「そういえば確認し忘れていたが、ネギ先生って好き嫌いあるのか？　超包子では出されたモン全部食ってたけどよ。
他にもアレルギーとか大丈夫か？」

「好き嫌いはウチが知る限りあらへんわ。納豆とかもちゃんと食べるし、生卵も平気みたいやえ。
アレルギーは……どうやろ？　そういえば確認し忘れてたわ。
でも、ネギ君の性格なら最初に言っといてくれるちゃうんかな？
少なくともチョコレートは平気やで」

「確かにネギは几帳面というか、生真面目な性格をしているからな。

あったら事前に言っているだろう。
まぁ、一応念のために確認しておいた方がいいな」

「そうやね。ウチが聞き出しておくわ。
そしたら他のグループにも伝えなあかんな」

今や、勇気を出すんや！
ウチから動かなきゃ一生せっちゃんとはこのままになってまう。

「どんなのがええかな～。
……せ、せっちゃんはどんなのがええと思う！？」

「え！？　……わ、私にはわかりません」

「そ、そんな風に言わんと……」

ウチはただせっちゃんと仲良くしたいだけやのに……。

いや、諦めたら駄目や。
せっちゃんがウチを避けても、もっと根気よくアタックするんや！

「あ、あー……。
ウィスキーボンボンはともかく、ボンボン・ショコラというのはいいんじゃないか。まあ、手が汚れるトリュフは駄目だけど、ガナッシュとかプラリネとかならさ。
なぁ、桜咲？」

「……え？　ト、トリュフ？　ガナッシュ？　プ、プラ……ナリア？
トリュフというのはキノコなのでは？」

「「「「……」」」」

「……違っていましたか？」

「……せっちゃん」

「……違てはいないけどネ」

「……お前、本当にわからないのか」

「……トリュフは知っているんだな」

「そ、それぐらい知ってます！　世界三大珍味のキノコでしょう！？」

「ちなみに中華三大珍味は“アワビ”、“フカヒレ”、“ツバメの巣”ヨ。
超包子のような普段向けの屋台では出せないけどネ♪

……。

……。

……ゴメン、バカホワイト舐めてたヨ」

「まぁ、チョコレートのトリュフは、キノコのトリュフに形が似せているからトリュフと呼ばれているのは事実だがな」

「いや、それでも話の流れ的にわかって欲しかったぞ」

アカン！

ウチの話の振り方がおかしかったせいで、変なことになってもうた！

「まぁ、まだ時間もあるし、各々で少し考えてくれればいいヨ。明日また集まて考えよう。
私はこれから当日パーティー担当の五月とかと一緒に、チョコとパーティーに必要な材料費についても調べてみるネ。超包子のツテを使えば畑違いの分野の食材でも安くなる手に入るヨ。
木乃香サン達はお菓子作りの本で難易度を調べて欲しいネ。チョコ作りはさすがの私でも専門外ネ。

それとバカせつな君は少しチョコレート専門店で買い食いしてくるとヨロシ。
今日はコレにて解散ヨ」

「な……バ……？」

「ち、違うんや、超りん！
えと、……せっちゃんは和菓子派なんや！！！」

「……」

「おい。桜咲が死にそうだからそこらでやめとけ。
私はとりあえずネットで適当なチョコ作りの仕方を調べておく」

「せ、せっちゃん！
ならウチと一緒に行こう！　美味しいチョコ売ってる店知ってるえ！」

「け、結構ですっ！
私に構わないでくださーーーいっ！！！」

「せ、せっちゃーーんっ！？」

……あ、行ってもうた。
諦めへん！　ウチはまだこんなんじゃ諦めへん！

小さかったときみたいに、せっちゃんとまた仲良くなるんや！！！

「フン。私は帰るぞ。
何だかチョコの話題をしていたらチョコを食べたくなってきたな」

「……あー、大丈夫か、近衛？」

「う、うん。ありがとう、千雨ちゃん。
ウチは諦めへんわ。ネギ君見習ってせっちゃんに真正面からぶつかってみるって決めたんや。
今までみたいに避けられ続けても諦めへん！」

「詳しい事情はわからんから私からは何も言えないが……。
少なくとも今回のは、“今までみたいな避けられ方”じゃないことは確かだと思うぞ」

「じゃあ、今日みたいの続けていたらせっちゃんと仲良くなれるんかな！？」

「それはやめておいた方がいいヨ」

「お前、本当は桜咲を虐めたいのか？」

え？　……やっぱりアカンのかなぁ？

――桜咲刹那――

……最近調子がおかしい。

ネギ先生に高校での留年の可能性を言われてからだ。

あれから自分でも周りの環境を気にするようになったと思う。

勉強にも力を入れるようになったし、居残り授業に出ているおかげで授業もより良く理解できるようになった。

護衛に力を入れるのは当たり前だが、他のことをおろそかにする言い訳にしてはならない。

よくよく思えば、護衛を言い訳にして周りを拒絶していたところがあったんじゃないだろうか。

しかし、それではいけないことにネギ先生のおかげで気づけた。

留年みたく、護衛をしていく為の前提が根元から崩れるような事だってあるのだから。

そして周りを気にするようになった分、自分と周りの違いがわかるようになってきた。

それでわかったことが一つある。

私は世間知らずだったのだ。

クラスの皆が休み時間に話していることに聞き耳をコッソリ立てたとしても、半分も理解できない。

今日のチョコレートについてだってそうだ。

確かに和菓子の方が好きだからあまりチョコは食べたことはないが、お嬢さま達の反応を見る限りでは知らないほうがおかしいみたいだ。

……以前だったらこんなこと気にしなかったのに。

「……ハァ、ネギ先生」

ネギ先生が来てからこういうことを考えるようになった。

それにしてもあの人は本当に１０歳なんだろうか？

模擬戦とはいえ、一人で魔法先生二人に勝てるほどの戦闘力。

私達に勉強を教えられるほどの学力・知識も豊富に持っている。
しかも、私と違ってクラスの皆から好かれ、良い関係を築けている。

特にエヴァンジェリンさんでさえもネギ先生を対等な存在と見なしている。学園長でさえも下に見ているであろうエヴァンジェリンさんでさえも、だ。
今までのエヴァンジェリンさんなら、こんなバレンタインの企画なんて参加しなかっただろうに。

ネギ先生を見ていると、私なんかちっぽけな存在に思えてくる。
何で10歳という年齢であんなに強くなれたんだろう。
私にネギ先生ぐらいの才能があれば、今よりも木乃香お嬢さまをお守り出来るのに。

……何を情けないことを考えているんだ、私は？

それもこれも私の努力が足りないせいだろう。
それを才能のせいにしてネギ先生を羨むとは……、我ながら恥知らずにも程がある！

きっとネギ先生だって努力してあんなに強くなったんだ。
私だってこれからもっと努力して、いっそう修行を励めばきっと……きっと、そしたら留年しちゃうな。

え!?　ウ、ウチはどないしたらええんや!?

“木乃香お嬢さまの護衛は遂行する”、“護衛に必要な修行もする”。
“両方”やらなアカンのが“護衛”の辛いところや。
でも、その二つをこなす覚悟ならあったんや。

せやけど、“勉強”もせなアカンのはいくらなんでも無理やわ。
今の“護衛”と“修行”だけでも大変やのに、“勉強”もやなんて……。

アカン。やっぱりネギ先生の才能が欲しいわ。
“強さ”の才能はええから、せめて“勉強”の才能だけでも欲しい。

……ああ、ウチはどないしたらええんや?

た、助けて。ネギ先生……。

「……ハァ、ネギ先生」

「はい、何ですか？」

「ヒャアァッ！？」

ビ、ビックリしたぁ。

な、何でネギ先生がここに……って、そうか。もう高畑先生の引止めが終わる時間なのか。

「悩み事ですか、桜咲さん？
僕がここまで接近しても気づかれないということは、余程深い悩みのようですね。
よかったら相談に乗りますよ？」

「そんなことは……いえ、お願いしていいですか？
正直、私一人ではどうしていいかわからなかったので……」

一度ネギ先生と話をしてみよう。
何か良い助言を頂けるかもしれないし、ネギ先生という変わった人の視点から見た意見も今後の参考になるだろう。

「構いませんよ。
実を言うと、今日は何故か追い出されるように仕事が早く終わったので時間がとれるんですよ。
前々から桜咲さんは悩みをお持ちのようでしたので、この機会に是非と思いましてね。
まぁ、立ち話もなんですから、どこか店に入りましょう。やっぱり和菓子の店の方がいいですか？」

「……」

「？　……桜咲さん？」

「……チョコレート」

「ハ？」

チョコレートが食べたいです。ネギ先生。

第十七話　バレンタイン？　乙女達の想い（後書き）

せっちゃんがちびせつな君より先に、バカせつなの二つ名を獲得しました。

せっちゃんはチョコレートのこととか全然知らないと思います。というか、自分も今回の話を書くためにチョコレートについて調べるまで、ガナッシュとトリュフの違いがわかりませんでした。プラリネは存在は知っていましたが、名前は知りませんでした。

外国土産のチョコレートを食べたら、甘すぎて歯が痛くなります。やっぱり日本製のお菓子の甘さが丁度いいです。

明日菜はまだ恋愛感情を持っているわけではありません。失恋のショックで弱気になっていますし、気持ち的に木乃香と一緒で、まだペットを抱いて寝るような感じでしょうか。

ちなみに寝ているときのネギは素です。

大人ぶっていても、結局２０年の子供生活で子供っぽさが身体に染み込んじゃっています。

第十八話　バレンタイン？　そうだ　京都、行こう。

――――ネギ・スプリングフィールド――――

タカミチに最近明日菜さんに避けられていることを相談されたんですけど、コレっていったいどうしましょう？
正直に言うべきなのでしょうか？

というか、進路相談室でそんなこと相談しないでくださいよ。

「チョコレートならコーヒーの方がいいですね」

「……あ、お任せいたします」

そんでトボトボと力なく歩いていた刹那さんを拾っちゃったんですけど、コレもいったいどうしましょう？
とりあえず相談を兼ねてお茶に誘ってみたら、チョコレートを食べてみたいとのことでした。
中武研から巻き上げた食券残ってますから構いませんけどね。

「え？　この小さいチョコ一粒で百円？」

「和菓子だって似たようなものでしょう。
老舗だと饅頭一個数百円とかするのありますし」

「あ、確かにそう言われると……」

まぁ、一口で終わること考えたら高いですけどね。
でも、学生も来ることを踏まえた値段設定をしているこの店は、
こういう専門店にしてはかなり安い方ですよ。

そういえば、僕もこっちの世界ではこういう専門店は始めてだなぁ。
前の世界ではエヴァさんに連れていってもらったことありますけど。

「それで、いったい何があったんです？
刹那さんがそこまで落ち込んでいるなんて？」

「……」

「……木乃香さんのことですか？
周りに聞こえないように結界張りますね」

「あ、すいません……」

こりゃ、本気で落ち込んでいますね。
何があったんでしょう？

とりあえず、結界結界。

……前の世界のどこでも騒ぐ駄目親父共のせいで、結界の熟練度がこんなに上がるとは。
再転生して鍛え直したときも、アッサリと勘を取り戻せたし……。

「で？　何か悩み事でも？」

「……その、ネギ先生はどうやってそこまで強くなれたんでしょ

うか？」

「？　んー、僕って強いんですかね？」

「……嫌味ですか？」

「あ、いえ。真面目に聞いてるんですよ。
模擬戦のときも話しましたけど、戦闘と呼べるものはあの日が最初でした。ですから自分がどの位置にいるかわからないんですよ。
あれ以来、模擬戦とかしていないですし。

それにいくらエヴァさん達に勝ったとはいえ、あくまでアレは模擬戦ですからね。本当の殺し合いになったらまた違うでしょう。
まぁ、この前の模擬戦の結果から、少なくとも“中の上”か“上の下”ぐらいはあると思ってますけど」

「ああ、そういうことでしたか。
……申しわけありません。ヒネた言い方をしてしまいまして」

「別に構いません。
桜咲さんは“強さ”について悩んでいるんですか？
僕が言うのも何ですが、１４歳なら仕方が無いところもありますよ。僕達では身体がまだ成長しきっていないのですから」

「それは、まぁ……、私がまだまだ修行中の身であることは承知しています。そちらの“戦いにおける強さ”ではないのです。

……ネギ先生は何でも出来るじゃないですか。戦いでも教師の仕事でも。

それに比べて私は護衛を満足にこなせていないだけでなく、勉強は出来ない上に一般常識まで欠けている始末です」

一般常識に欠けているのは護衛ばっかりしているからじゃないですかね？

あと、麻帆良にいれば自然にそうなっちゃうのでは？

「何でネギ先生は何でそんなに“強い”んですか？　何でそんなに何でも出来るんですか？」

強くならないと駄目親父達の修行（ごうもん）で死んでたからです。

何でも出来るようになったのは駄目親父達のせいでパートナーになってくれる人がおらず、自分独りで全てやらなければいけなかったからです。

って答えられたら楽なんですけど、駄目ですよねぇ。

クソッ、あの駄目親父共めが。今度会ったらブン殴る。

……そういえば学園祭のときのまほら武道会って、合法的に駄目親父ボコれるチャンスじゃね？
参加するつもりなかったですけど、それ考えたら美味しいですね。
優勝賞金一千万円も美味しいし。

エヴァさんの別荘借りて修行を本格的にしたおかげで、前の世界の強さをだいたい取り戻せました。
肉体的にまだ完璧ではないですが、技術的な向上を含めたらむしろ強くなってますね。“紅き翼（アラルブラ）”メンバーを一人相手にするぐらいなら余裕です。

まぁ、それはあとでゆっくり考えますか。

何て答えましょうかね？
刹那さんも本気で迷っているみたいだから、真剣に答えますか。

「一言で言えば、“楽しいから”ですね」

「“楽しいから”、ですか？」

「ええ、桜咲さんは勉強が楽しいと思ったことはありませんか？
修行が楽しいと思ったことはありませんか？

難しい問題を解いたとき達成感を感じることはありませんか？練習を重ねて遂に技を習得できたときは嬉しくなりませんでしたか？」

「……ええ、そういうのはわかります」

「娯楽がなかった田舎で育ったせいもありますけどね。僕にとって修行や勉強は遊びと同じなんです。“好きなものこそ上手なれ”って奴ですよ。

……僕が思いますに、桜咲さんには今まで他の事を考える余裕が無かったんじゃないでしょうか？そして高校という先のことを考え始めたせいで、今までの生活に発生していたけど気づかなかった綻びに気づいてしまい、こうして悩んでいる」

「……そうかもしれません。今までは護衛ばかりに集中していたので考えもしませんでしたが、私は周りを見ていなかったような気がします。ネギ先生と高校のことについての話をしてから、いろいろ物事を考えるようになりました」

カラオケやボーリングもしたことないですもんねぇ。前の世界のこのちゃんせっちゃん知っている分、この世界の木乃香さんと刹那さんのすれ違いにはちょっと心が痛みます。

「そのことに気づいたのなら大丈夫ですよ。
人間とは“人の間”と書きます。独りでやれることは少ないです。
他の人達との触れ合いは護衛には無意味かもしれないですけど、
いつかは役に立つときが来ます。
今は少し歩みを緩めて、辺りを見渡すといいですよ」

「……はい。
しかし、今のままでは“護衛”、“修行”、“勉強”の3つをこなすには時間が足りません」

「確かにそれはキツイですねぇ」

しかし、何でこんなこと思い始めたんでしょう?
何だか普通の女子中学生みたいに弱々しいです。てっきり原作みたいに京都編が終わるまでは、仕事モードのせっちゃんしか見れないと思っていたんですが。

今の刹那さんはまほら武道会でエヴァさんに虐められたときのような顔しています。
エヴァさんの評した“触れれば切れる、抜き身の刀の様な佇まい”がないんですよねぇ。

僕が高校の留年を注意したために周りのことを気にするようになり、エヴァさんの言う“小さな幸せ”に気づいてしまったんですかね？

あとは１０歳の僕があそこまで戦えたことによる自信喪失ですか。

アレ？　どっちにしろ僕のせい？

まぁ、独りぼっちで頑張ることに疑問を持ったのはいいことです。独りでやるしかなかったら、そのうち僕みたいになってしまいますからね。

時間に関してはエヴァさんの別荘を借りればいいんですが、エヴァさんが刹那さんに別荘を貸す理由がないで……あ、もしかしたら、うまくいくかな？

それにしても、自信を失って不安そうなせっちゃんが可愛いです。

でも、とりあえず原作終わるまでは恋愛関係は自重しようと思っているんですよね。

そもそも僕は誰のことが好きなのかもよくわかっていませんし、のどかさんみたいな一般人を原作同様に危険なことに巻き込むのは気が引けます。

ハーレムというものにも憧れますが、前の世界と合わせて彼女いない暦２０年以上の僕が言っても妄想でしかありません。

だから、僕は考えました。

さっさと原作終わらそう、さっさと“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”ぶっつぶそう、と。

原作的にだいたい夏休み終了ぐらいには終わるみたいですからね。だったら焦る必要はありません。夏休みが終わってから、本当に好きな人を探せばいいのです。

何で二次創作の主人公は、わざわざ大変なイベントがある原作時期に恋愛に頑張るんですかね？

さっさとメンドイこと終わらせてから青春送った方が楽しめるでしょうに。

「そういえば、ネギ先生から見て木乃香お嬢さまの護衛についてはどう思います？

ネギ先生が修行の参考にしたという、警察や軍隊の視点から見てです」

「……桜咲さんには申し訳ないですけど、護衛対象を避ける護衛

ってのはマズイと思いますね。
それと、木乃香さんに護衛されている意識がないってのも危ないでしょう。

護衛にとって一番厄介なことは、護衛対象の予期せぬ行動です。
護衛されている人間の一番大切なことは“護衛されていることを意識して、普段通りの生活を送る”ことです。
護衛対象が護衛されていることを知らない場合、護衛対象の好き勝手に動かれることになりますからね」

「……わかって、おります。
しかし、木乃香お嬢さまにはこちらのことには関わって頂きたくないというのが、学園長と西の長のお考えです。
ですので木乃香お嬢さまに私が護衛しているのを知られるわけにはいけません」

「別に裏の事情まで教えなくてもいいじゃないですか。
雪広さんはコチラの関係者じゃないですけど、護衛がコッソリついていますよ。雪広財閥の次女なら当然ですけどね。本人も承知済みでしょう。
雪広さんみたいに、表の世界の護衛をつけるだけでかなり違うと思いますよ。
しかも木乃香さんは元華族である近衛家のお嬢さまです。護衛がついていても誰も不思議には思いません」

「な、なるほど……」

「まぁ、今から護衛をつけるとなると不自然になりますけどね。「何で今更？」という話になりますから。
それと木乃香さんに発信機とかつけてるんですか？
誘拐されたときにそういうのがあると、探し出すのが楽になるんですけど」

「は、発信機？
……いえ、そのようなものは持ち歩いておられないと思います」

「……うーん。何と言いますか。
正直に感想を言ってしまえば、“桜咲さんが満足するための護衛”のように思えてくるんですよね。
桜咲さんは見守っているだけで満足なんでしょうけど、もうちょっとやりようがあると思いますし、やるべきこともあると思います。
本人の安全の事を考えるなら、木乃香さんに秘密でもそういう準備しといた方がいいですよ。携帯電話とかベルトとか靴とかに仕込んでおくとか。

僕でさえいつもつけてるネックレスに発信機仕込んでます。僕に何かあったらアルちゃんが周りの人に事情を説明してくれることになっています。
しかも、この腕時計は実を言うと発信機付きの魔法発動体です。普段はこれ見よがしに父の形見の杖を持ち歩いている上に折りたたみ式の杖も携帯しておいて、更に腕輪型と指輪型の魔法発動体もしていますけどね。
あ、他にこのこと知ってるのアルちゃんだけですから、他の人に言わないでくださいよ」

「……ネギ先生はいったい何と戦っているのですか？」

「あくまで“念のため”ですよ」

「……ハァ」

麻帆良に来てからの自分を知ってる刹那さんだから、こんな理由でも納得してくれますね。

っていうか溜息つくなや。

さすがに元老院対策とは言えませんので、仕方がないんですがね。

「まぁ、木乃香さんのような場合は良い護衛方法を検討するより、元となる原因を解決した方がいいと思います。

原因がはっきりしているのですからね」

「……原因ですか？」

「はい。木乃香さんが狙われる理由は“西の長の娘である木乃香さんが東にいる”ということなのでしょう。
だったら“西に帰ればいい”のです」

「ハ？　し、しかし、お嬢さまには麻帆良に友人もたくさんいます。いきなり帰れというのは酷なのでは？」

「いや、ずっと西にいるわけじゃないですよ。
正月とか夏休みとかに実家に帰省すればいいんですよ。それこそ三連休ぐらいでも京都に帰ってゆっくり出来ますよね。麻帆良から京都の実家までなら数時間で到着できるでしょう。
“いつでも自由に西に帰ってこれる”なら、わざわざ麻帆良に来てまで誘拐企む阿呆はいないです」

「……ど、どうでしょうか？」

「木乃香さんに聞きましたけど、木乃香さんは麻帆良に来てからはあまり京都の実家に帰省はされていないんですよね？
だったら西の人達はやきもきもするでしょうよ。これでは東が木乃香さんを掴んで離さないように思われるのは仕方がないのでは？

とりあえず今度の春休みにでも帰省してみたらどうですか？
不安でしたら僕も着いていきますよ。父が京都で住んでいた家とか、父の盟友である近衛詠春さんとか、僕が京都に行ってもおかしくない名目はたくさんあることですし」

そしたら修学旅行でわざわざ京都に行かなくてすみますしね。
例え襲われたとしても、クラスのことを考えなくていいから気が楽になります。修学旅行はハワイが良いなぁ。
というか、フェイトってもう西にいるのかな？

「わ、私の一存ではそこまでは何とも……」

「譲れるところは譲っていかないと駄目ですよ。
“お前が譲れば私も譲る”という姿勢ではいつまで経っても仲良くなれません。せめて“私が譲るからお前も譲ってくれ”でなければね。
そもそも木乃香さんが実家に帰省することに、何か表向きに問題がありますか？」

「いえ、それはないと思います」

「むしろ西も巻き込んじゃえばいいんですよ。
“木乃香お嬢さまが帰省するので護衛よこしてください”とか、ね。
そこまで露骨に言わなくとも、木乃香さんが「京都駅まで迎えをよこして」と言えば自然に西も護衛出来るでしょう」

「し、しかしお嬢さまに危険なことがあっては……」

「ですが、ずっとこのままというワケにはいかないでしょう。木乃香さんが大人になったらどうします？　木乃香さんが大人になってもずっと麻帆良に留めておくことなんて出来ないでしょう。今のままだったら木乃香さんに関してのことは西と東の仲が悪くなることはあっても、良くなることはないと思いますよ。学園長は木乃香さんを早めに結婚させて西との関係を無くそうとしているのでしょうが、なし崩しに終わらされる西としては納得できないと思います。

言い方が適切かわかりませんが、僕は“臭い物に蓋”ってあまり好きじゃないんですよね。発酵して可燃物質が出来たとしたら始末が大変ですから。

僕としては“臭い物は分解して肥料にして畑に撒く”方がいいと思ってます。

……別に木乃香さんを“臭い物”とおもっているわけじゃないですからね。言葉の綾です」

「え、ええ。わかっております……」

「相変わらず“正義の魔法使い”とは程遠い考えをするんだな。なぁ、ネギ？」

あれ？　エヴァさん？
何でこんなところに？

「担任補佐ともあろうものが、こんなところで生徒とデートか？
いつになったら私を美術館にエスコートしてくれるんだ？」

そういえば模擬戦のときにそんなこと言ってましたね。アレって本気だったんですか？
てっきり、僕の気を引いて糸の罠にかけるための駆け引きだと思っていたんですが。

そういうことなら喜んでお誘いするんですが、「本気だったんですか？」って言ったら怒られそうですねぇ。

「修学旅行に行かなくてもいいのなら、今週の休みにでもどうですか？」

「……イヤ。やっぱりゆっくり待つことにする。
お前もいろいろと大変そうだからな」

「多分、春休みには呪いの修正が終わると思うので、春休みにお誘いします。
それに今の時期はあまり面白い展示をしてないようですからね。
きっと春休みには大きい展示をするんじゃないですか？」

「ム、それもそうだな。今の時期は客が入らんからな。
わかった。春休みのデートを楽しみに待つとするよ」

説得終了。
『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』は便利です。
まぁ、今やってる展示も春休みにやる展示も知りませんが。

「チョコレートが食べたくなってな。
相席しても構わんだろう？」

「僕は構いませんが、桜咲さんは？」

「あ、大丈夫です」

「僕達と同じメニューでいいですか？」

「いいのか？
なら馳走になろう」

「同じテーブルに座って、桜咲さんには奢るのにエヴァさんに奢らないっていうのはないですよ」

「え？　わ、私は自分の分は自分で払います」

「僕教師。あなた達生徒。
ついでにおかわりも注文してきます」

そういことなら麻帆良内の美術館とかのサーチしとかないと。
エヴァさん遊園地に行ったことないって言ってたから、ソチラも一応調べておきましょうか。
きっと童心に戻って、外見相応にはしゃいで遊ぶエヴァさんが見れそうです。

あ、でもさすがに美術館とか遊園地を教師と生徒の二人っきりで行くのはマズイですかね？

年齢詐称薬をまほネットで注文しておきますか。
アレあったら学園祭のときとかも使えそうですし、買っといて損はなさそうですね。

――桜咲刹那――

「え？　刹那さんは『斬魔剣』を使えるんですか？」

「え？　ネギ先生は『斬魔剣・弐の太刀』を使えるのに、『斬魔剣』は使えないんですか？」

というか、宗家である青山家ゆかりの者にしか伝承されないはずの『斬魔剣・弐の太刀』を何故使えるのですか！？

「いや、ビデオに『斬魔剣・弐の太刀』は映っていたんですけど、普通の『斬魔剣』は映ってなかったんですよね。『弐の太刀』があるのだから『壱の太刀』もあるとは思っていましたが。
この前の葛葉先生が使ってきた『雷鳴剣』も知りませんでしたし」

「……そういうことですか」

「……やっぱりネギはネギだな」

そうですね、エヴァンジェリンさん。
ネギ先生はネギ先生なんだから仕方がないんですね。

「是非とも『斬魔剣』と『雷鳴剣』を教えていただけませんか？
それに神鳴流は他にも技があるでしょうから、それも是非」

「え？　それはお世話になってますので構わないのですが、時間が取れなくて……」

「あー、そうですね。
“護衛”、“修行”、“勉強”としなきゃいけませんからねぇ。

……“修行”と“勉強”はエヴァさんの別荘を使えれば問題ないんですけどねぇ」

「？　……別荘、ですか？」

「私が持っている魔法の別荘だよ。現実の１時間が別荘の中では２４時間になる。
まぁ、その分老化が進むということでもあるから若い女にはすすめんがな。一度入ったら中で２４時間過ごさないと外に出られんし」

「僕は背が急に伸びても、多少なら成長期ということで誤魔化せますからね。週に２、３回ですけど使用させて頂いてます。
そこなら時間を気にしなくていいんですが桜咲さんはお嫌ですよね。木乃香さんの護衛もあるでしょうし……。
２４時間ずっと修行しっぱなしというのもアレですから、お礼に勉強を教えることも出来るんですが」

「そういうことなら構いません！
週に２、３回の１時間程度なら、お嬢さまの護衛は龍宮に依頼すれば問題ありません！」

「げ、元気良いですね？
……構いませんか、エヴァさん？　桜咲さんも一緒に別荘へ来ても。
僕としては神鳴流の技に興味がありますし、剣の組み手を桜咲さ

んにお願いしたいのですが。もちろん『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』解呪は遅れたりしませんから」

「……ムゥ。魔法ならともかく、私では神鳴流なんぞ教えることは出来んからな。
まぁ、そういうことなら構わんぞ」

「ありがとうございます！　エヴァさん！」

「な、何……。このぐらいたやすいことだ」

「私からもお礼を申し上げます。エヴァンジェリンさん」

やった！　さっき相談したことを忘れられたのかと一瞬思ってしまったが、ネギ先生の狙いはこれだったんだ。
ありがとうございます、ネギ先生！

これで“修行”と“勉強”の目処が着いた。
老化が早まるとか、修行中の身で神鳴流を教えるとかは少し気になるが、そんなことは大事の前の小事だ。

ネギ先生の剣のお相手をするのは私にとっても修行となる。

ずっと私に掛かりきりというのは無理だろうから自主錬の時間も多いだろうが、それでも修行の時間が増える。

そして何よりネギ先生につきっきりで勉強を教えてもらえる。

他のバカレンジャーの皆には申しわけないが、私が最初のバカレンジャー脱退者にならせてもらおう。

負担は龍宮に対する報酬だが、週に2、3時間ならそう高くないだろう。あとで相談しなければな。

これで当面の目処は着いた。

あとはネギ先生の言ったとおりに木乃香お嬢さまに対する危険を根本的に取り除くことだが、それはまず学園長に相談してみよう。

一介の護衛風情が口に出していいことではないが、他ならぬ木乃香お嬢さまのためだ。学園長だってその気があるのなら協力してくださるだろうし、ネギ先生のお力添えも期待できる。

「そういえばさっき面白そうな話をしていたな。

春休みに京都へ行くのか？」

「あくまで僕の勝手な考えですよ。

木乃香さんのことは今の状態で良いとは思えませんからね。最終的な判断は学園長がするでしょうが」

「フン。どうせジジイが否と答えても、それとなく近衛木乃香を誘導させて京都に帰省させるんだろう？」

「そんなことはしませんよ。
まぁ、僕自身京都に行ってみたいので、居候させてもらっている部屋で京都旅行のパンフレットを見るかもしれませんがね。
……エヴァさんも行きますか？」

「……なん、だと？」

「もちろん木乃香さんのこととは関係無しにです。
さっきも言ったとおり、春休みには呪いの修正は終わるとは思います」

「……行く。絶対行く。
だから春休みまでには絶対呪いの修正を終わらせろ」

「はいはい。努力いたしますよ。
でも、もし木乃香さんの帰省があってそれと被る場合は、何あったらご助力お願いしますよ」

「そのぐらい構わん。
……京都か。
……15年振りの麻帆良の外か」

嬉しそうだなー、エヴァンジェリンさん。
そしてさすがネギ先生。着々と戦力を増やしていく。
私も念のために龍宮へ話を通しておくかな。

「ああ、そういえばエヴァさん。
ウチのクラスの相坂さんのコトですが」

「お？　材料揃ったのか？
しかし、よくアイツのことがわかったな。多分、龍宮マナですら気づいていなかったぞ」

「いや、クラス名簿に名前が書いてある人がずっと来なかったら、そりゃ気になって調べますよ」

「……何のお話ですか？」

「ウチのクラスの幽霊さんのコトです。
そうだ。よかったら桜咲さんも念のために手伝ってくれますか？」

「え？　ウチのクラスの幽霊？
……事情がわからないで何ともいえませんが」

「おいおい。私が言うのもなんだが、アイツは人畜無害な奴だぞ。
それなのに退魔の神鳴流を連れていくのか？」

「あくまで“念のため”ですよ」

ウチのクラスに地縛霊でもいるのか？　全然気づかなかったが…
……。
エヴァンジェリンさんが人畜無害というのなら安全なのだろうが、
お嬢さまの安全のために私の目でも確認しておくべきだな。

――近衛木乃香――

……せっちゃん、楽しそうや。
ウチのことは避けるのに、ネギ君とはあんな風に笑えるんか……。

考えてみればウチは焦りすぎてたわ。
せっちゃんがウチを避けるようになったのは、きっと何か理由があるはずなんや。その理由も知らずにせっちゃんに立ち向かっても、逆にせっちゃんを困らせるだけやった。
まずはせっちゃんがウチを避けるようになった理由を調べんと。
それと何でネギ君ならあんなにせっちゃんと仲良うなれるかも調べなアカンな。

となると、和美ちゃんは……、大事になりそうやからアカンな。
内密に調べてもらわなアカンから、楓に協力を頼もうか。忍者やからきっとこういうのに適任や。
プリンで協力頼めへんかな？

そのあいだにウチはネギ君と話して、どうやったらせっちゃんと仲良くなれるかアドバイスを貰おう。
ネギ君は担任補佐でウチは生徒なんやから、そういう相談にも乗ってくれるやろ。

……そういえば、最近ずっと夜はアスナにネギ君貸してたなぁ。

失恋のショックが大きかったことはわかるけど、ずっとネギ君独り占めというのはずるいわぁ。

しかも、ネギ君が甘えてくる方法見っけたとか言って、そのときのことを惚気てくるし。ウチもネギ君に甘えられたい～。

よし、今日はネギ君と一緒に寝よう。

そんで朝はネギ君より早く起きて、ギューっと抱き締めるんや。

第十八話　バレンタイン？　そうだ　京都、行こう。（後書き）

「さっさと原作を終了させてから青春を謳歌する」

そんな二次創作の根幹を引っ繰り返す発想をする、それがここのネギクオリティ。

ま、そんなこと許すわけありませんがね。

せっちゃんの強化フラグが立ちました。

しかしせっちゃんは、２４時間ずっとネギと二人っきりで修行と勉強になることの意味にまだ気づいていませんｗ

そして忍びという気配遮断のプロがせっちゃんをロックオンしました。

せっちゃんの運命や如何に？

第十九話　バレンタイン？　浮気？調査

――――長瀬楓――――

……プリンに釣られて変なことに巻き込まれてしまったでござる。
それにコレって本当に木乃香殿にお伝えしていいのでござろうか？

「お待たせー、楓。これウチが作ったプリンや。あとで食べてなー。で、どうやったん？」

「食べながら話をしましょうよ。お昼休み終わっちゃうわよ」

おや、アスナ殿まで。
そんなにプリンを見つめても、食後のプリンは渡さないでござるよ。

「それにしてもありがとなー、楓。
せっちゃんの後をつけるなんて大変やったろ」

「刹那に気づかれないように監視するのは確かに大変でござったが、拙者の良い修行にもなったでござるよ。
昨日刹那に動きがあったので報告するでござる」

いいんちょがネギ先生を招こうとした洋菓子店のプリン詰め合わせを頂いたからには、その分シッカリと働かせて頂くでござるよ。
木乃香殿の手作りプリンも美味しいでござるし。

「さて、依頼された当日であるクラス会議の日、つまりおとといは特に何もなかったでござる。
しかし、刹那は昨日の早朝の5時前にエヴァ殿の家を訪れたでござる」

「エヴァちゃんの家？
桜咲さんとエヴァちゃんって付き合いあったっけ？」

「そんな朝早くから悪いなぁ。
またプリン作ってくるわ」

「お願いするでござる。実を言うと、頂いたプリンの詰め合わせは風香と史伽に半分取られてしまったので。
……ここからは少し言いにくいのでござるが、数分後にネギ坊主がエヴァ殿の家に入っていったのでござるよ」

「ネギ君がぁ？」

「ちょ！？　何でよ！？
昨日は確か、ネギは朝早くからランニングに……」

そんなこと拙者に言われても困るでござる。
ただ拙者は見たままのことを報告している故に……。

「そういえばネギ君。
紅茶を飲みにエヴァちゃんの家に何度か行ってたなぁ」

「そんなこと言ってたわね。さすがの木乃香も紅茶には詳しくなかったから。
でも、そんな朝早くから紅茶を飲みに行くわけないし、そもそもランニングと言ってネギは部屋を出てったのよ」

「それで？　２人はエヴァちゃんの家で何してたん？」

「さすがに家の中までは探れなかったでござる。
……ここからは更に言いにくいのでござるが、約一時間後に刹那がエヴァ殿の家から出てきたとき、耳まで真っ赤になるぐらい赤面していたでござる。
しかも、そのときは遠目故にはっきりとは見えなかったが、学校で確認したら肌が物凄くツヤツヤになっていたでござる」

「「……」」

沈黙が怖いでござるよ。
というか無表情のアスナ殿が物凄く怖いでござる。
拙者、こんなアスナ殿の顔は見たことござらん。

「……ネギったら、エヴァちゃんの家で何をやっていたのかしらねぇ」

「……エヴァちゃんて、この前のお風呂でネギ君に髪を洗うのを手伝うように言ってたなぁ」

「エ、エヴァ殿はそのときは起きていなかったようでござる！
刹那が凄い勢いで走り去った後にネギ坊主が出てきたのでござるが、見送りの茶々丸殿にエヴァ殿が寝坊しないようにと言っていたでござるよ！
ネギ坊主はいつもと変わらない様子だったでござる」

「……ふーん。
そう言われれば、確かに昨日のせっちゃんは様子が確かに違うていたなぁ」

「……ネギはあまり変わっていなかったわねぇ。
変わったと言えば、おとといの夜は木乃香がネギと一緒に寝たぐらいかしら？」

「ええやん。
アスナばっかりネギ君独り占めしてズルイわぁ。最初にネギ君と寝てたのはウチなんやで」

怖いでござる。
今からでもこの依頼を取り消してもらうことは出来ないでござるか？

「そんで？　その後はどうなったん？」

無理でござるな。
せめて依頼はちゃんと果たすから、拙者に何かしようとは思わないで欲しいでござる。

「そのあと刹那の後を追ったが、それからは普通でござる。
寮に帰って時間になったら学校へ行き、放課後は拙者やアスナ殿と一緒に居残り授業を出たでござる。
居残り授業終了後は剣道部。その後は寮に戻って食事、自主トレの素振り、入浴、勉強、就寝といった感じでござる。
これが昨日の刹那の一日でござるな」

「最後は普通やなぁ」

「というか、楓ちゃんってば大丈夫なの？
桜咲さんをずっと監視しているなんて」

「いやいや、これも修行の一つでござる。
ただ、拙者はバレンタイン当日パーティー担当グループなので、パーティーが近くなるとソチラを優先させて頂くでござるよ」

「それはわかっとるわ。
改めてありがとうな、楓」

「それにしてもランニングに行くなんて嘘ついてまで、朝早くからエヴァちゃんの家に行くなんて。
ネギったらいったいどうしたのかしらねぇ？」

拙者は何も知らないでござる。
だからその滲み出る殺気はネギ坊主にぶつけて欲しいのでござるが……。

「その話、詳しく聞かせて欲しいのです」

ごっ、ござっ！？
夕映殿！？　千雨殿にのどか殿に古まで！？

う、迂闊でござった。
アスナ殿の殺気に気を取られて、接近する気配に気づかなかった

でござる。

「あー、わりぃ。
立ち聞きするつもりはなかったんだが、偶然飯食いに屋上まで来
ててな。
綾瀬達を押し留めることが出来なかった」

「ネ、ネギ先生（せんせー）がエヴァンジェリンさんと桜咲さんと……」

「シッカリするですよ、のどか。まだそうだと決まったわけじゃあ
りません。
錯乱しないでください。英語のノートを見ても解決策が載ってい
るわけじゃありません」

「アイヤー、何だかとんでもないことを聞いてしまったみたいアル」

の、のどか殿、目が……。
これ以上、コトが大きくなるのは勘弁して欲しいのござるが……
。

――――桜咲刹那――――

「ふ、ふつつかものですが、……よろしくお願いします」

「刹那さんが嫌ならおんぶにしましょうよ」

「……別に嫌という訳ではないのですが。
その、恥ずかしくて……」

私はどうしたらいいんだ？

今、私はエヴァンジェリンさんの別荘にいる。
現実の１時間がこの中では２４時間となり、その分修行出来るのはありがたい。

初めてここを使わせてもらった日は、修行、勉強、ネギ先生との手合わせを行なったのだが、最後のネギ先生との手合わせで力尽きて気絶してしまった。

ネギ先生は本当に強い。

身体能力は私のほうが上だが、剣の腕は私以上。

それに身体能力も『咸卦法』を使われてしまったら、私が気を使った状態よりも上になる。そうでなくとも数年後にはネギ先生の素の状態で上になるだろう。

しかし、まだまだ私も負けてはいられないし、中々良い手合わせが出来たと思う。少なくとも私は得るものがたくさんあった。

そして、気づいたらネギ先生におんぶされていた。

『咸卦治癒（マイティガード）』を使用して、私の疲労をとってくれていたらしい。

それはいい。

それはいいのだが、１０歳の男の子におんぶされて涎を垂らして寝ていた、というのはさすがに恥ずかしすぎる。

ネギ先生が前もって私の顎の下、つまりネギ先生の肩にタオルを置いていなかったら、ネギ先生のシャツがグッショリとなるぐらいの量の涎をだ。

ネギ先生は気にしないと言ってくれたが、その日一日は恥ずかしくてネギ先生の顔をまともに見れなかった。

確かに『咸卦治癒（マイティガード）』というものは凄い。

あれだけの疲労を、たった2時間ほどの休憩で全快できるとは。

しかし、あの気持ち良さは何とかならないだろうか？
あんな気持ち良さだと、疲れた身体だったら絶対に寝てしまう。
それに肌も何だかツヤツヤになるし。

そして今日が2回目の別荘での修行の日で、別荘を出たこの後に学校があるので『咸卦治癒（マイティガード）』で回復させてもらうのだが、『咸卦治癒（マイティガード）』は接触しないと回復しない。
その接触方法でネギ先生と言い争っているのだ。

「僕は別におんぶでも大丈夫ですよ。
『咸卦治癒（マイティガード）』発動中なら寝なくても平気ですから」

「いえ！　さすがにそこまでして頂いては申しわけありません！
私の勉強と修行に付き合って頂き、その上私の体力回復のためにネギ先生が寝ないなんて……」

「でも、僕と一緒に寝るのは嫌なんでしょう？」

「で、ですから！　嫌という訳ではありません。
ネギ先生に抱きつくというのが恥ずかしいのです。
……その、ネギ先生から私に抱きついてきてくれませんか？」

「え？　“抱きつく”より“抱きつかれる”方が恥ずかしくないんですか？」

どっちも恥ずかしいんです！！！

１０歳の男の子に“おんぶされる”、“抱きつく”、“抱きつかれる”なんて、どれを選べばいいんですか！？

『咸卦治癒（マイティガード）』を使わないというのは出来ない。

このまま学校へ行っても途中で力尽きて授業中に寝るだろうし、護衛に差支えがある。

“おんぶされる”は却下！

ネギ先生が休まずに私をおんぶするなんて、そこまで迷惑は掛けられない。

そして残りは“抱きつく”と“抱きつかれる”なんだが、こんなものどっちを選べばいいんだ！？

「というか、さすがの僕でも刹那さんに抱きつくのは恥ずかしいんですけど……」

「ネ、ネギ先生だって“抱きつかれる”より“抱きつく”方が恥ずかしいのではないですか！？」

「いえいえ、僕は１０歳の男の子。刹那さんは１４歳の女の子という違いがあるじゃないですか。
そもそも「体力を回復させてやるから抱きつかせろ」なんてセクハラじゃないですか！？」

「わ、私は別にセクハラだと思いません！」

た、確かに１０歳の男の子には恥ずかしいでしょうけど、１４歳の女の子だって恥ずかしいんです！

「……このままだったら休む時間がなくなります。
ジャンケンで決めましょう。最初はグーの一回こっきり勝負」

「いいでしょう。
負けた方が勝った方に抱きついて寝る。……あいこは？」

「あいこはおんぶです」

「ちょ！？　それズルイです！
あいこだったらやり直しです！」

「僕達だったらずっとあいこになる可能性もあります！」

「く、私達の身体能力なら確かに……。
なら、あいこだったらお互いに抱きつくのです！　それだったら公平でしょう！？」

「……いいでしょう。
それでは、右手に“気”、左手に『戦いの「ちょっと待ったぁっ！　それズル過ぎますよっ！！！」……チェッ」

ええい、ネギ先生にこんな子供っぽいところがあるとは……。
年相応のところがあるんだな。

まぁ、素のネギ先生を曝け出してくれるのは悪い気はしない。
教師としてのネギ先生とは違った魅力があるし。

「……わかりました。
刹那さんも気で強化はなしですよ」

「そのつもりです」

何で来る？
とりあえず私はグーを作っておいて、ネギ先生が手を変化させてきたらチョキに変えよう。

ゴクリ、と唾を飲み込む。緊張するな。

それでは、いざ尋常に！！！

「「最初はグー！　ジャンケンッ！！！」」

「ズルイです。刹那さん後出し狙ってたでしょ？」

「ネギ先生だってそうじゃないですか……」

お互いグーでした。
きっとネギ先生も同じこと考えていたんでしょうね。

「術式兵装『咸卦治癒（マイティガード）』……。
えーっと、それじゃあ、……お休みなさい？」

「何で疑問系なんですか？」

ネギ先生と一緒のベッドに入る……。
……ネギ先生は１０歳ネギ先生は１０歳ネギ先生は１０歳ネギ先生は１０歳ネギ先生は１０歳ネギ先生は

１０歳ネギ先生は１０歳ネギ先生は１０歳ネギ先生は１０歳ネギ先生は１０歳……。
だから何ともない！

「し、失礼します。
……嫌だったら言ってくださいよ。僕はおんぶでも構わないのですから」

「……大丈夫ですよ」

……本当にネギ先生は１０歳なんだなぁ。
私の顔も赤いのだろうが、ネギ先生の顔はそれ以上に真っ赤だ。
このネギ先生見たら、何か逆に落ち着いてきた。

ネギ先生には苦手なものとかはないのかと思っていたが、こういうことは苦手なのか？
でも、木乃香お嬢さまやアスナさんと一緒の布団で寝ているらしいのに。

ギュ、とネギ先生が私の胸に顔をうずめる形で抱きついてくる。
それと同時に『咸卦治癒（マイティガード）』の効果で身体がポカポカとしてくる。

さすがに胸に抱きつかれるのは少し恥ずかしいけど、……別に嫌じゃない。

それでは私もネギ先生を抱きしめないといけないな。

……こういう場合だと、頭と背中に腕を回せばいいのかな？

こ、こうかな？

「ヒャッ！！！」

……ビックリした。

ネギ先生の頭の裏に腕を回したら、ビクリ！　とネギ先生が跳ねた。

「抱きつかれるのは慣れているはずなのでは？」

「……抱きつかれるのは慣れていても、抱きつきながら抱きしめられるのは慣れていません」

その２つに何か違いがあるのだろうか？

胸の中で喋られるのはこそばゆいな。
しかも私に顔を見せたくないのか、ギュウっと抱きついてくる。
この状態だと肌は耳しか見えないが、凄く真っ赤だ。

……カワイイ。
少し私が動くと、小動物みたいにビクつく。

ネギ先生の髪の毛はサラサラしているな。良い匂いもする。
手合わせ後にお互いにシャワーを浴びたが、私は大丈夫かな？
随分と汗をかいてしまったが、ちゃんと匂いが取れているだろうか？

いや、そもそもこの寝巻きに使っているジャージはちゃんと洗濯できていたのだろうか？
いつも洗濯機に放り込んで自動で洗濯していて、素材にあわせた洗濯などはしたことがない。
それに結構長い間使っているから、私の匂いが染み込んでいるかも……。

……マズイ、気になってきた。

「……あの、私の体は変な匂いとかしていませんか？」

「え？　こ、答えなきゃいけませんか？

……変な匂いとかは別にしません。良い匂いです。
あったかくて柔らかくて、……気持ち良いです」

「え？　あ、ありがとうございます……」

そ、そういう意味で聞いたワケじゃないのだけれど、……
…気持ち良いんだ。

……エヘヘ。

ふあ……、眠くなってきた。
エヴァンジェリンさんすら寝てしまったというのは本当だなぁ。
これは誰だって寝てしまう。

ネギ先生との手合わせは疲れた。
起きたら学校なんだし、さっさと眠るか。

これならアッサリと眠れそうだ。
このちゃんがネギ先生を抱き枕にしている気持ちがわかる気がする。

……このちゃん、ウチ頑張るからね。
修行も勉強も頑張って、絶対このちゃんを守るから。

だから、いつまでもこのちゃんは笑っていてね。
このちゃんの笑顔は、絶対にウチが守るから……。

――長瀬楓――

ネ、ネギ坊主と刹那は拙者に恨みでもあるのでござるか？

今日はネギ坊主が顔を赤くし、刹那はニコニコと笑って、二人で手を繋いでエヴァ殿の家から出てくるなんて……。

こんなこと、アスナ殿や木乃香殿にどのように報告すればいいのでござる？

しかも今度からのどか殿たちにまで報告しなければいかぬとは……。

無表情のアスナ殿も怖いでござるが、笑っているだけのはずの木乃香殿も怖いのでござる。

プリンに釣られて変なことに巻き込まれてしまったでござる。

依頼の危険度を見誤るとは、拙者もまだまだ未熟でござる。

……こうなったら腹をくくって、最後まで付き合うしかないでござるな。何とかして木乃香殿達の狙いをネギ坊主達のままにしておかなければ。

ネギ坊主と刹那には悪いが、拙者の身の安全を優先させてもらうでござるよ。

第十九話　バレンタイン？　浮気？調査（後書き）

ピコーーーン！　無表情明日菜というクールアスナ誕生フラグが立ちました。
ただし、選択肢を間違えると明日菜ヤンデレルートに突入しますので注意しましょう。

ピコーーーン！　「いつまでもこのちゃんは笑っていてね」という刹那の願いが（別の意味で）叶うフラグが立ちました。
ただし、選択肢を間違えると木乃香ヤンデレルートに突入しますので注意しましょう。

ピコーーーン！　“空鍋をかき回す”ならぬ“白紙を読書”フラグが立ちました。
ただし、選択肢を間違えるとのどかヤンデレルートに突入しますので注意しましょう。

ピコーーーン！　ネギのヘタレフラグが立ちました。
今までこんな機会がなかったので気づきませんでしたが、子供と意識された上で攻めるのや攻められるのは平気でも、お互いに男女と意識した上で攻めるのや攻められるのは苦手なようです。
体感時間年齢１００歳の魔法使いは伊達じゃありません。
今までは平気だったとしても、相手に意識された途端に恥ずかし

くなることってありますよね。

第二十話　バレンタイン？　贈り物

――長谷川千雨――

ちう　＞　おハローーー（・▽・）ｐ　みんな元気ーーー！？

ちう　＞　ちうは今日も元気だピョーーーン！！！

ちう　＞　今日も大変だったんだよー（＜＞）ｉ

ちうファンＨＩＲＯ　＞　また忍者信じてる外国人の子供？ｗ

通りすがりＢ　＞　１０歳じゃしょうがないんじゃないｗ

ちう　＞　その子自身は悪い子じゃないんだけどね

ちう　＞　ただ周りの子達が常識知らずだから

ちう　＞　その子に悪い影響与えないか、ちう心配なんだー

アイスワールド　＞　さっすがちうタン

ちうファンＨＩＲＯ　＞　まるで天使のように優しいな

ちう　＞　え～～～？　そんなことないよ～～～♪

ちう　＞　でもありがとみんなーーー（＜▽＞）／

ちう　＞　今日はお礼にニューコスチュームをお披露目するよ♪

ああ、至福の時。

何て気持ちいいの……。

あのガキのせいでささくれ立った心が癒される……。

何であのガキはホイホイと女に着いていくんだよ!?

警戒心てモノがねぇのかっ!?

風呂場のときのマグダウェル見てたら、あのガキ狙いってのが一目でわかるだろうがっ!!!

コンコン

しかも今度は桜咲までもかよ。長瀬からの報告では、週3の割合であのガキと一緒にマグダウェルの家に通い詰めてるみたいだし……。

あいつはこういうのに興味ないと思っていたんだがなぁ。

ああ、やっぱりクラスにマトモな奴はいないんだ。

ショタコンがあんなに多いなんて……。

コンコン！

捻くれたガキは嫌いだが、ああまで人を疑うことを知らないような純真すぎるガキも苦手だ。

田舎暮らしとはいえ、何であそこまで世間知らずに育ったのかね？

ドンドン！

いや、世間知らずじゃないな。一応物事は知っている。

ただ疑うことを知らないのと、物分りが良過ぎるだけなんだ……。

「長谷川さ～ん？　いませんか～～～？」

諦めちゃ駄目だ。
あのガキをマトモな道にいさせることが出来るのは私だけなんだ。
クラスの連中が暴れるにしても、何とか日本の普通があああじゃないことを認識させなければ。

「長谷川千雨さ～～～ん！？」

って、さっきからうるせぇな？
何であのガキが私を呼んでるんだよ？

「ちうさ～～～ん？　いませんか～～～？」

……。

……。

……何でさっ！？

「あれぇ？　さっき中から「ちうは今日も元気だピョーーーン！！！」って聞こえたのに……」

げぇっ！？　口に出してたっ！？
キーボード打つときに同時に口に出す癖がっ！？

「んー？　寮長さんに聞いてみるかな？」

ちょ！？　おま！？
待て、このガキャ！！！

「ちょ、ちょっと待てっ！」

「何だ、居たんじゃない……ですか。長谷川さん」

うお！？

首が１８０度ぐらい回って後ろ向きやがった！？　気持ちワリィッ！！！

何だよ？　何かおかしなモンでも……って、ヤベェッ！　コスプレ衣装のままだった！？

「と、とりあえず中へ入れっ！！！」

「え！？　ちょ、ちょっと待ってください！？」

ええい！　抵抗すんな！！！

こんな姿誰かに見られたら、今後外に出られない。

何とかこのガキを口止めしなきゃ……。

「な、何で鍵をかけるんですかぁっ！？」

「いいから！　い、今廊下に他に誰かいたのか！？」

「ヒィッ！？　い、いませんでした、けど……」

よし、それならコイツの口止めをすれば大丈夫だ。

「鍵をかけて監禁なんて……。
長谷川さんなら雪広さんみたいなことはしないと思ってたのに……」

グハァッ！！！
わ、私があの変人共と同レベル！？
ていうか、いいんちょはこのガキを監禁したことあるのかよ！？

「い、いったい何の用なんだ……。
何の用で私の部屋に来たんだ？」

「プ、プリントを届けに来ました。
印刷機の調子がおかしくて、帰りのＨＲに少し間に合わなかったんです。
長谷川さん以外はまだ教室に残っていたから渡せましたけど、長谷川さんは早めにお帰りになられていたので僕が届けに来ました。
別に急ぎのプリントというわけじゃありませんけど、一人だけ渡していないというのはどうかと思って……」

「ああ、そういえば帰りのＨＲにお前はいなかったな。
別にそんな風に怯えんな。取って食うわけじゃないんだから。
……ちょっとお願いしたいことがあってな」

「そ、そうなんですか！？
本当に酷いこととかしないんですか！？」

ああ、もう！　めんどくさいなぁ。
ちょっとコスプレのことを秘密にしてもらいたいだけなのに。
このガキから見たら確かにコスプレは変かもしれないけど、ここまで怯えることは……アレ？

プリントを届けに部屋に来る
←
ノックしても返事がない
←
「ちうは今日も元気だピョーーーン！！！」と奇声が聞こえる
←
更に呼びかけても返事がない
←
戻ろうとしたらコスプレ女が出てくる
←
目をそらした瞬間、部屋に連れ込まれる
←
ドアに鍵をかけられて監禁される
←
「ちょっとお願いしたいことがあってな」　↑　今ココ
←
「アッーーーー！？」　↑　次ココ？

どう見ても不審者です！　本当にありがとうございましたぁっ！！！

「……ま、待ってください、ネギ先生。
落ち着いて話を聞いてください」

「だ、大丈夫です。僕は落ち着いています。
ですから、長谷川さんも落ち着いてください」

怯えんな。ジリジリと後ずさんな。
わかったから。私が悪かったのはわかったから。

よし、良い子だからお姉さんの言うことは聞きなさい。
大丈夫。別に酷いことしないから。……ね？
ほーら、ネットアイドル女王のちうタンの笑顔だよ～♪

だからそんなに怯えんな。コラ。

「……つまり、長谷川さんの趣味はコスプレで、“ちう”というハンドルネームでネットアイドルしてることは秘密にしろ、と？」

「い、いや、そんな命令形じゃなくてですね。恥ずかしいから秘密にして欲しいな～、なんて……」

「別に……構いませんけど」

……完璧に怯えられてる。

ああ、これで私もあの変人集団の仲間入りしちまった。

小さい子供に怯えられるというのはさすがに精神的にキツイ……。

「……フゥ。もう大丈夫です。本当に落ち着きました。誰だって人に秘密にしておきたいこともありますからね。コスプレ趣味を秘密にするのは了解しました。

それと、別に無理して丁寧語を使わなくてもいいですよ」

「あ、別に無理してるわけじゃないんですけど……」

「あと伊達メガネは視力が悪くなるかもしれませんので、あまりしないほうがいいと思います」

「う、……私はメガネつけずに人と会ったりするのは駄目なんです」

「綺麗な顔立ちなのにもったいないです。
そのコスプレも最初見たときはビックリしましたけど、よくよく見れば可愛いらしい衣装ですね。
似合っていて可愛いですよ、長谷川さん。その……バニースーツ？」

いや、確かにウサギをモチーフにした衣装だけど、バニースーツとは違うんじゃないか。
というか、言いよどむってことは、このガキはバニースーツ知ってんのか！？　とんだエロガキだな！？

というか真顔で褒めんなっ！
クソッ、外国人は日本人と違って、オブラートに包まないで直接的に女を褒めるってのは本当らしいな。

「いや、ウサギをモチーフにしたレオタードなどの身体の線が出る衣装がバニースーツの定義らしいので、長谷川さんのその服は定義からするとバニースーツです」

「細けぇんだよっ！　っていうか、ガキがそんな知識持ってる必要はねぇ！
どこのどいつだ!?　お前にそんな知識植え付けたのは!?」

「ゲームとかアニメのキャラによくいるじゃないですか」

「子供がそんな不健全なもの見んなっ！

……おい？　何で目ェそらすんだ？」

「え？　だって不健全なもの見ちゃ駄目だって長谷川さんが……」

「私が不健全だってか!?」

あ、いや。
確かに１０歳の子供にこんな格好は目に毒だが。
それに自分で自分の趣味全否定だよ、おい。

「冗談です。
このぐらいは許してくださいよ。連れ込まれてドアに鍵をかけられたときは本当に怖かったんですから。
……雪広さんのときはお茶に付き合うだけで済みましたけど。」

「か、からかったのかよ、てめぇ……。

……あー、いや。私が悪かったです。この格好見られて慌ててしまいまして。
それといいんちょのことは諦めてください。アレはもう病気の類です」

「はい、わかりました。
この話はこれでお終いにしましょう。僕はわざわざ他の誰かに言い触らしたりしないので安心してください。

それと長谷川さんはさっきの口調の方が、生き生きしていて魅力的ですよ。
猫被りたいのはわかりますけど、事情を知った僕の前ぐらいでは素の長谷川さんを見せていただけると嬉しいです」

「ばっ！？　馬鹿かてめぇ！？
教師が生徒を口説いて良いと思ってんのか！？」

「え？　そういうつもりじゃありませんけど？
ずっと猫被っているのはストレス溜まるでしょう。それに他人がいるならともかく、僕と二人っきりのときはもう取り繕っても無駄なんですから、無理しないで普段の口調を使ってもいいじゃないですか」

「べ、別にお前と二人っきりになんかならないよ……」

「いや、今二人っきりじゃないですか。というか既に普段の口調じゃないですか。
あとは何か相談とかあるときも、その口調で結構ですよ」

「……わかったよ。考えとく。
お前に相談することがあるかどうかはわからないけど……」

……とんだ醜態晒しちまった。
確かにこれ以上取り繕っても、もう無駄以外の何物でもねーんだが……。

「授業に関係ないことでも大丈夫ですよ。部活や家庭、趣味のことでも何でも。
まぁ、僕みたいな子供に相談しようと思っていただければですが。
そのときは精一杯親身になって対応しますので」

「そんな機会があったらな」

「あ、それと長谷川さんはもうちょっと自信を持ってもいいと思いますよ。
せっかく可愛いんですから」

「う、うるさいな。
真顔で褒めるなよ……」

外国人で感性が違うから仕方がないとはいえ、このガキは……。
そもそもハイスペックなウチのクラスの中でも、群を抜いてハイスペックなんだよな、このガキ。
１０才なのに教師として優秀だし、女に囲まれてても紳士だし、風呂場でもいやらしい目で見てこなかったし、ガキの癖に結構いい肉体していたし……。
宮崎やマグダウェルが惚れるのもわかる気がする……って、そうじゃねぇだろ！　何考えてんだ、私は！？

……う、マズイ。

何だか急に恥ずかしくなってきた。私は何でこんな格好を二人っきりでガキに見せてんだ。

「どうしました？
急に顔が赤く……？」

「べ、別に何でもねぇよ……」

「？　あ、もしかしてジロジロと見るの失礼でしたか？」

「た、確かに恥ずかしいことは恥ずかしいが……」

「？　んー……？
ああ、“綺麗な顔立ち”とか“生き生きして魅力的”とかは本心ですからね。
別にお世辞とかで言ったつもりじゃないですよ」

「だ、だから真顔で褒めんなっつーの！」

……外国人で感性が違うから仕方がない外国人で感性が違うから仕方がない外国人で感性が違うから仕方がない外国人で感性が違うから仕方がない外国人で感性が違うから仕方がない……。

駄目だ。考えれば考えるほど意識しちまう……。
じゅ、１０歳のガキ相手に何でこんなに照れてんだよ、私は？

「さて、名残惜しいですが、そろそろ僕はお暇しなきゃいけないです。
このあと学園長と会わなきゃいけなくて……」

な、“名残惜しい”って何だよ！？
もうちょっとここにいたいってのか！？

そ、そうじゃない！　これは世間知らずなガキの戯言だ！
だから私が意識することじゃない！！！

「というわけで、ドアの鍵を開けてもいいでしょうか？　そしてお暇させてもらってもいいでしょうか？
いやぁ、ずっと長谷川さんの姿を拝見していたいのですが、学園長に用事がありまして。残念ですねぇ。名残惜しいですねぇ。
……コスプレのことは誰にも言いませんので」

……え？　あれ？　まだ怯えてる？
そういえばドアに鍵かけて監禁中だったな。
もしかして、今までのは私の機嫌をとるための褒め殺し？

……べ、別に変な勘違いなんかしてねぇからなっ！！！

――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル――

「どうしたんじゃね、ネギ君？
何だか疲れてる顔をしとるが……」

「あ、いえ……。
ちょっと面白半分で首を突っ込んだら、思ったよりも大事になってしまって。
まぁ、無事に解決できたので問題はありませんが」

「ふぅむ。それならよいがの」

「それと金曜日のバレンタインですね。
日本のイベントはある程度勉強してきたので、バレンタインは２－Ａの皆さんで大騒ぎになると思っていたんですが、何故かまったくと言っていいほどバレンタインの話題が出てこないんですよ。
静かなのは結構なんですが、何だか嵐の前の静けさのような気がして、それが逆に恐ろしいというか……。
明日菜さんと木乃香さんが何だかやけにご機嫌なのが唯一の救いです」

「……強く生きるんじゃぞ」

「アッサリと見捨てないでくださいよ。
タカミチも出張から戻るのは１４日の夕方で、それまで僕一人で２－Ａの相手しなきゃいけないのに……」

ハッハッハ。
バレンタインはカオスになるだろうから諦めろ。
諦めたらいろいろと楽になるぞ。

「だから相坂さよのことはバレンタイン後に行なうのか？」

「そうですよ、エヴァさん。
それに相坂さんが乗り移る用の人形は出来てますけど、まほネットに注文した年齢詐称薬がまだ届いていないですしね。
相坂さんには人形に乗り移ってもらって、年齢詐称薬で見た目を誤魔化してもらえれば授業に出ることも出来ます。年齢詐称薬は結局のところ幻術ですからね。
しばらくの間はそれで過ごしてもらい、生活に問題なかったら常時幻術がかかる魔法具でもつけてもらいましょう。
当日は桜咲さんに立会いをしてもらう予定ですが、念のために龍宮さんにも声をかけておきたいです」

「ウム。書類関係の準備は出来ておるよ。
……しかし、龍宮君はどうじゃろ？　そこまで必要かの？　ワシも立ち会うつもりじゃし、戦力が多すぎないかの？
そもそも危険なコトはないと思うのじゃが……」

「龍宮さんには護衛の他に、人形に乗り移った相坂さんを魔眼で見てもらって、問題がないかどうかを確認していただきたいんですよ。
それといくら学園長の同級生だったからって、警戒しないでいいわけじゃありません。
確かに６０年地縛霊やって問題を起こしていないので、危険はないと思いますけどね。あくまで“念のため”です」

「まぁ、龍宮マナの魔眼で見て、問題なければ安心は出来るな。
さすがの私も人形に幽霊を乗り移らせたことはないから、どうなるかはわからん。
あ、私も立ち会うぞ」

「そういうことなら構わんぞい。
ワシの方から依頼しておこう」

「予定としてはバレンタインの夜を考えています。
バレンタインは皆さん祭りのように騒ぐことになるでしょうから、夜になったらわざわざ学校に来るような人はいないでしょう。

しかも、金曜日の放課後なら尚更です」

「わかったぞい。
ワシの方も予定を空けておこう」

うむ。これで相坂さよの話はお終いだ。
これからが本題だな。

「茶々丸さんも入れた僕達6人なら、大抵のことは大丈夫でしょうね。
学園長も何かあったらお手伝いをお願いします」

「ウム。わかっておるわい」

「それとは別に学園長にお聞きしたいことがあるんですけど」

「何かね？　何でも聞いてみなさい、フォッフォッフォ……」

ご機嫌だな、ジジイ。
昔の同級生が救われるとあってはご機嫌にもなるか。

「エヴァさんの力を封印している“学園結界”のことなんですけど？」

「フォッフォッフォ……フォッ！？」

「どういうことなんだ、ジジイ？
返答次第ではタダでは済まさんぞ……」

くそっ！　変だと思っていたが、電力を利用した“学園結界”で私の力を封じていたとは。
てっきりナギの奴が強引に『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』をかけたせいで、私の力も封印されたのだと最近まで思っていた。

ネギが解呪の研究の途中に気づいてくれなくても、茶々丸の調べでだいたい予想は出来ていたがな。
しかし、改めて事実を確認すると腹が立ってくる……。

「エヴァさん、気持ちはわかりますけど、そう怒らないでくださいよ。
まず僕に任せていただける約束でしょう」

「わかってるよ、ネギ。
ジジイ、キリキリと話せ。ネギのおかげでだいたい予想はついているんだ」

「……あー、やっぱり気づいてしまったかの。
ネギ君がエヴァの解呪に取り組んだときから予想はしておったが……」

「エヴァさんは父のかけた『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』のせいだと思っていたみたいですけどね。
僕もそう説明されたために気づくのに遅れてしまいました。僕もまだまだ未熟です。

それで学園長に聞きたいことなんですが、「“学園結界”は15年以上前からあったんですか？」、そして「“学園結界”は目標とした対象のみを封印できますか？」の2点です」

「ム……。それを聞くということは本当に事情が予想できているようじゃの。
答えは「15年以上前からあった」、そして「そんな器用なことは出来ん」、じゃよ」

なるほどな。ネギの予想通りというわけか。
だからといって、ムカつくことには変わらないのだが。

「でしょうねぇ。
エヴァさんが麻帆良に来てから“学園結界”を張ったとしたら、エヴァさんはそのときから力を封じられることになります。
そんなこと、エヴァさんが気づかないわけないです」

「その通りじゃ。
言い訳になってしまうが、エヴァに“学園結界”が効いてるとわかったのは12年前のことなんじゃよ。
ナギが約束通りに3年経っても呪いを解きに来なかったので、ワシの方でも解呪の研究をしたのじゃが、そのときにようやく気づいての。
エヴァがナギに麻帆良にいきなり連れて来られたときには既にこうじゃったので、てっきりナギが封印したのだと思い込んでおったんじゃ」

「学園長もエヴァさんと同じ勘違いしてたんですね。
というか、『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』かけただけなのに、そんな勘違いされる僕の父っていったい……？」

「い、いや、ナギのことだしなぁ……。
なぁ、ジジイ？」

「ま、まぁ、そうじゃの。
ナギだからしょうがないというか……」

「……ハァ、やっぱりデタラメな人なんですね、父は。
僕とは随分違う人のようです」

「「……」」

「え？　何です、この沈黙は？」

突っ込まん。私は絶対突っ込まんぞ。
ジジイ、お前が突っ込め！

あ、目を逸らすな。上司たるお前の役目だろう！

「そ、それでじゃな！
エヴァにそのことを言おうとも思ったのじゃが、その頃のエヴァ

はナギが約束通りに来なかったから荒れておっての。つい言い出せなかったのじゃよ。
エヴァ自身だって、そんなこと言われたら当時の自分がどうしていたか予想つくじゃろ？」

話も逸らすな。

……まぁ、言っていることはわかるがな。
あの頃は確かにナギに裏切られたと思って荒れていたからな。

「それでズルズルと今の今まで言わなかったと？」

「言いにくいのじゃが、そういうことじゃのぉ。
ま、勘弁しておくれ。コッチにも事情があったんじゃ」

「フン！　まあいい……。
どちらにしろ、今まで15年間気づけなかった私も間抜けだったんだからな。

それよりも、やはり私を“学園結界”の対象外にすることは出来んのか？」

「無理じゃ。さっきも言ったが、そんな器用なことは出来ん。“学園結界”は結界内の高位の魔物・妖怪を動けなくするものじゃ。例えば学園地下に石化封印している無名の鬼神なんかのためにの。

そもそも力が封印されているとはいえ、結界内でエヴァが五体満足に動けている方が不思議なんじゃよ。ましてや満月の日では吸血鬼の力を取り戻すなんてことはの。

そのことが原因で、“学園結界”がエヴァに効いているということに気づくのが遅れてしまったのじゃが」

「やっぱりそういうことでしたか。

ホラ、昨日僕が言った通りじゃないですか。エヴァさんが“強すぎる”のが駄目なんですよー」

ハッハッハ。

それは事実なのだが、そこまでハッキリと言うな、ネギ。

しかし、“強すぎる”のがいけないとはな。

フ、参ったな。まさか“強すぎる”せいで、こんな不利益があるとは。

“強すぎる”というのも困ったものだ。

最初にこの事実を知ったときは学園関係者を全員血祭りに上げようかと思ったが、そういう事情なら許してやろう。

「学園長としては、エヴァさんの力を取り戻すのに何か問題はありますか？」

「……個人的にはない。この１５年間でエヴァのことも信用しておるからの。

しかし、この学園の責任者としては無理じゃ。

エヴァ一人のために“学園結界”をやめるわけにはいかんし、エヴァのみを対象外とするような“学園結界”の改変には、エヴァの懸賞金が数十人分はおそらく必要じゃ。さすがにそんな大金は出せん」

「そこまで大事にはしないです。

試してみたいことがあります」

「何じゃね？」

「エヴァさんを封印具で“学園結界”に反応しなくなるぐらいにわざと力を封印します。

それならきっと、今より結果的には力を取り戻せるはずです」

「……フム。実を言うと、そのことはワシも考えついていた。プライドの高いエヴァがそんなこと了承しないじゃろうと見送ったが。

エヴァが構わないのならよいが、いいのかの？」

「構わん。力を1割でも取り戻せれば、花粉症とかに悩まされなくとも済むからな。
ただしネギに封印具を用意させるのが条件だ。ネギなら信頼できるからな」

「既にまほネットで注文済です。年齢詐称薬と一緒に届きます。
エヴァさんには僕の私用や相坂さんのことでも別荘を使わせていただいてるので、それのお礼も兼ねて僕から贈らせて頂きます。
形状はエヴァさんのご希望で指輪型ですが」

「指輪？　ネギ君からの贈り物？
……エヴァ、どの指に嵌めるつもりじゃ？」

「べ、別に左手の薬指に嵌めようとなんか思っておらんぞっ！」

「アハハ、やだなぁ。結婚指輪じゃあるまいし。
左手の小指のサイズで注文しました。僕は知りませんでしたが、左手の小指の指輪には“変化の象徴”という意味があるらしいですね」

……“願いの成就”や“自分の魅力をアピールする”、“チャンスに恵まれる”などの意味もあるが黙っておこう。

クソッ、桜咲刹那に別荘の使用を許可するんじゃなかった。
最近奴のネギを見る目が怪しいぞ。

あのネギが頼みごとをしてきたことに浮かれて、別荘内でネギと二人きりになることを忘れてた。
とりあえず世話役の名目で茶々丸の姉を置いておいたが、いくら治療とはいえ、まさかネギと桜咲刹那が抱きしめあいながら寝ているとは。
まだ変なコトはしていないらしいが、油断は出来ん。

だから桜咲刹那には、ネギから贈られる指輪をジックリと見せてやることにしよう。くっくっく。
ネギを狙ったのは私の方が先なんだからなぁ……。

第二十話　バレンタイン？　贈り物（後書き）

千雨ってムッツリスケベなタイプだと思います。
学園祭のときにネギと仮契約するシーンなんか特にｗ

何で千雨ってコスプレ趣味ばれてなかったんですかね？
キーボード打つときにあんなに大声で騒ぐのに。

それとバレンタインが金曜日ってのはあっていると思います。
修学旅行のときの『いどのえ日記』に“４月２４日木曜日”と書かれていましたので、逆算的に２月１４日は金曜日です。

おしいなぁ。２月１４日が土曜日だったら、“１３日の金曜日”に早めのバレンタインパーティーをするのにｗ
そしたらパーティーをカオスにするのですが……。

“学園結界”についてはオリジナル設定です。
一応不自然ではないように出来たと思います。

しかし、ヘルマンが麻帆良内で戦えた理由に困ってしまいます。
高位の魔物・妖怪はＮＧだけど、高位の悪魔ならＯＫ？　んなわけないか。
フェイトのツテでＭＭ元老院から手に入れた、学園長さえ知らな

い“学園結界”をすり抜ける裏コード的な護符でも持っていたことにしますか……。

そしてもちろん、せっちゃんに立ち会ってもらう＝楓の監視付き、です。

ネギ達の運命は如何に！？

第二十一話　バレンタイン？　女子中学生は見た

――――宮崎のどか――――

『こちら楓、刹那と真名がエヴァ殿、茶々丸殿と正門玄関前で合流したでござる。
拙者は約１ｋｍ先から望遠鏡で監視しているでござるが、もう少し近寄ったら真名に気づかれるでござるよ』

「こちら木乃香、ウチラも学校に行くわ。２０分ぐらいで着くから、それにあわせて合流してな。
ありがとな楓。あとでウチの部屋に来てプリン食べてええで」

「……何で１ｋｍ離れてるのに気づかれるんだよ？」

「龍宮さんも、というのはあまり考えられないですね。
冷静になって考えれば、何か事情があるのでしょうか？」

「そ、そうだよね。
ネギ先生（せんせー）が変なことするわけないもんね」

「……甘いわよ、本屋ちゃん。
ネギが変なこと考えてなくても、相手がそうじゃないとは限らないんだから」

そ、そんなぁ？
は、はわわわわ……、だとすればいったいどうしたら？

せっかく今日のバレンタインパーティーを楽しく終わることが出来たのに……。
私は“2、3日は持つチョコを作るグループ”だったんだけど、他のメンバーの好意でネギ先生（せんせー）にチョコを渡す役を譲ってもらえた。
皆で作ったチョコだけど、渡すときにネギ先生（せんせー）に「ありがとうございます、宮崎さん」ってお礼を言われちゃった。エヘヘ。

「しかし7時過ぎなのに、ネギ坊主は学校に何の用アルネ？」

「さぁ？　本人達に聞いてみないとわからないです。
……ところで何でくーふぇさんもいるのですか？」

「ネギ坊主はあれから全然手合わせしてくれないアル。
ここは一つ弱みを握て、それをネタに手合わせをお願いしようと

思たアルよ」

「くーへ、それ“お願い”やない。“脅迫”や」

「まぁ、ネギなら大丈夫でしょ。
それに弱みになるようなことをネギがしていなければいいんだしねぇ……」

今私と一緒に居るのはユエ、アスナさん、木乃香さん、くーふぇ、千雨さんの5人。ハルナはあのときいなかったし、原稿が忙しいみたいだからハルナには秘密。
あとは刹那さんを監視していた楓さん。……本当にクラスメイトを監視なんてしていいのかな？

木乃香さんの話では、今日のパーティーが終わったあとにネギ先生（せんせー）は用事があるので夕飯はいらない、と言ったみたい。しかも帰りは遅くなって、泊まりになるかもしれないなんて……。
それにあわせて楓さんから刹那さんが外出するという報告があったことで、木乃香さんから全員集合がかかったの。

「で、でもいいのかな？　こんなことして……」

「大丈夫ですよ、のどか。
こんなこともあろうかと、学校の机の中に英語の教科書を忘れておきました。何かあっても言い訳は出来ます」

「奇遇やね、ゆえ。
ウチも実を言うと筆記用具忘れたんよ」

「……怖いよ、お前ら」

「そもそも何で千雨ちゃんまでいるのよ？
確かに事情は知っているけどさ……」

「あのときのお前等の顔見たら放っておけるわけないだろうが。
……おい、誰も刃物なんか持ってきてねぇだろうな？」

「え？　鞄の中にカッターは入ってますけど」

それがどうかしたのかな？

「……宮崎か。まぁ、お前ならきっと大丈夫だな。
他の奴は危険物持ってるんなら置いてけよ。殺人事件なんか起こ

されちゃたまんねぇ」

「殺人事件て何よ？
そもそも危険物なんか持ち歩いてないわよ。楓なら手裏剣とか持ってそうだけど」

「いや、アイツはいい。
非常識な存在だが、ストッパー役が私一人なんて無理ゲーすぎる」

？　どういうことだろ？

「皆さんそろそろお静かに。
騒ぐと校舎内にいる人に気づかれる可能性があるです」

「……学校に着いたはえーけど、夜の学校って不気味やわ。
楓もまだ来ておらんようやな」

学校に着いた。……着いたんだけど、何か怖い。

夜の無人の学校がこんなに怖いなんて思わなかった。
まだ校舎の中に入ったわけでもないのに。

「な、何アルか？　身体が震えてくるアルよ」

「べべべ別に怖くないですよ。
足が震えるのは武者震いというやつなのです……」

「ゆ、ゆえ～、何か変だよ～」

「た、確かにいつもと学校の雰囲気違うとるなぁ……」

「何か寒気も感じるわね……」

「おかしいだろ、コレ。
何で玄関にお札なんか貼ってるんだよ……」

皆もおかしく感じてるみたい。
怖く感じるのは私だけじゃないんだ。あんなに強いくーふぇまで

怖くなってるみたい。
それに玄関にお札まで……お札？

「「「「「えっ？」」」」」

「？　な、何だよ？」

「お札って……どこにあんの？」

「私には見えないアル」

「すすすすいません、私にも見えないです。
ここここうまで暗いと……」

「千雨ちゃん、眼鏡の度あってないんじゃないの？」

「視力は1．2だよ。これは伊達眼鏡だ。
どこも何も、目の前に貼られてんじゃねーかよ」

千雨さんが目の前にあるガラス扉の真ん中を指差すけど……見

えない。
他の皆も見えてないみたい。
お知らせのプリントか何か貼ってあるのかとも思ったけど……。

「遅くなったでござる。
……おや？　全員どうしたでござるか？」

「……何で皆こんな怪しげなお札見えてねーんだよ。
おい、長瀬。ここにお札貼られてるの見えるか？」

「そこにお札？　何のこ……ム？　……あるでござるな。
確かに千雨殿の言われる通りにお札が貼られているでござる。しかしこれは……」

「そうだよな、見えるよな。私だけじゃねーよな。
私は変じゃねーよな？　……って、忍者と同じモン見えてる私の方が明らかに変じゃねーかっ！？」

「落ち着くでござるよ、千雨殿。そんなに騒ぐと誰かに気づかれてしまうでござる。
それに拙者は忍者ではござらん」

「えっ？　楓まで何言ってるのよ？

いったいどこにお札なんて……あった」

ええ？　アスナさんがペタペタと千雨さんが指差したところを触っていたら、急にお札が見えるようになった。
いったいどういうことなの？

「震えが止またアル……」

「あ、本当だ。
怖い感じがなくなったね、ゆえ？」

「ほ、本当ですね。
危うく漏ら……何でもないです」

「何なんだよ、コレは？
オカルトの類か……？」

「あー……、オカルトというか何というか」

何なんだろう、いったい？

ただネギ先生（せんせー）に会いにきただけなのに、変なコトになっちゃった。

いつもと違って、とても怖い感じがする学校。
見えないお札が玄関に貼ってあって、それをアスナさんが剥がすと怖い感じがなくなった。
そのお札が人払いをしていたみたいに……。

まるでこの前読んだライトノベルみたい。

「……あれぇ？
このお札の字、おじいちゃんの筆跡と似とるなぁ」

え？　おじいちゃん？
木乃香さんのおじいちゃんといったら……。

「学園長先生？」

「ウン。おじいちゃんの書を見たことあるけど、それに似とるんよ……。
そういえばチョコ渡したとき、おじいちゃんは今日遅くまで仕事

でチョコを夜食に食べる言うてたなぁ」

「ということは、学園長も校舎内にいますよね……」

「おいおい、学園長まで絡んでるのかよ？」

「どーするアル？　何かヤバイ感じアルよ」

「……いや、ウチはいくで！」

こ、木乃香さんの目が燃えちゃってる……。

大丈夫なのかな？

こんなもの貼ってあったということは、学校の中に誰も入れたくなかったということだから、もしかしたら危険なことがあるんじゃ……。

あ、でもネギ先生（せんせー）がまだ校舎内にいるってことは、もしかしたらネギ先生（せんせー）が危険なことに巻き込まれているかも。

は、はわわわわ……、そうだったらどうしよう？

「あくまでウチラは忘れ物を取りに来ただけや。別に疚しいことなんかあらへん。
もしかしたら、忘れ物を取りに行く途中で変なもの見るかもしれへんけど、あくまでそれは偶然な不幸な事故や」

「おいおい、近衛。
世の中には相手の事情なんか知ったこっちゃない人間なんか、お前が知らないだけでたくさんいてな……」

「……確かにそういう人達はいるかもしれませんが、そんな人達はわざわざ女子中学校を根城にするようなことはしないと思うです」

「それはそうね。
というか、女子中学校を根城にするマフィアなんかいたら、逆にお笑いなんだけど」

「そう言われると、確かに怖がる必要はないかもしれないアル」

「あー、確かにそうでござるが……」

そ、そうだよね。そんな人達がわざわざ麻帆良の女子中なんかに来ないよね。
でも、それだったらこのお札はいったいなんなんだろう？

「ここまで付き合ってくれてありがとな、千雨ちゃん。とりあえず教室までは行ってみることにするわ。
実を言うと、筆記用具忘れたのはわざとやないんよ」

「私も行きます。
ここまで来たなら英語の教科書を取りに行きたいですし」

「ま、学校なら危険なことはないでしょ。
このお札は気になるけどさ……」

「あー……、わかったよ。私も行くよ。
どうせオカルトみたいなものなんて現実にはないはずなんだ。別に怖がる必要なんかねーかんな」

確かに私達が通っている学校に危険なんてないよね。ちょっとぐらいなら大丈夫だよね。

幽霊とかいるわけないし、それに幽霊なんかより新田先生とかのほうが怖いし……。

――ネギ・スプリングフィールド――

『どういうことでしょうね、いったい？』

『な、何故木乃香お嬢さまが夜の学校なんかに……』

『忘れ物、でしょうか……？』

『おい、マズイぞ。楓がコッチを気にしてる。
ネギ先生の認識阻害は大したものだが、即興のものじゃ楓に違和感をもたれるぞ』

『しかし、ネギ先生は現在認識阻害の魔法と私達の念話中継で精一

杯です。
今は息を殺して近衛さんたちが立ち去るのを待つしかないかと……』

『あ、あの人達と本当に友達になれるんですね!?
もうペンスピニングやコンビニの立ち読みで時間潰したりしなくていいんですね!?』

上から僕、刹那さん、アルちゃん、龍宮さん、茶々丸さん、相坂さん。
ちなみにアルちゃんと相坂さん（人形ｖｅｒ：身長約２０ｃｍ）は僕の肩に乗り、他三人は僕の左右と後ろにいて僕の肩に手を乗せて、接触式念話で会話しています。
接触式だと盗聴されなくていいんですけど、相坂さんのはしゃぎっぷりがうるさいです。

「……パーティーのチョコの匂いがまだ染み付いてるね」

「あれ～？　何で教室の明かりついてたのに誰もいないんやろ？」

「この教室だけ消し忘れ、ということはないでしょう。
誰かさっきまでこの教室にいたのは間違いないです」

「別に誰か隠れているわけじゃなさそうねぇ」

「（……教室の隅に違和感を感じるでござる）」

「とりあえず近衛、綾瀬。
筆記用具と英語の教科書を取ってこいよ。自分の机に忘れたんだろ」

何だ、忘れ物ですか。焦った。
てっきりエヴァさんとか学園長かと思って、気づくのに遅れちゃったし。

相坂さんの人形への憑依などの作業がアッサリ終わったあと、エヴァさんは学園長と一緒に学園長室に行きました。
僕が贈った指輪のおかげで少しは力を取り戻すことが出来たので、それを他の魔法先生に説明しに行ったみたいです。
僕や茶々丸さんもついていこうかと提案しましたが、上機嫌なエヴァさんにそれには及ばないと断られました。

きっと今日僕が贈った指輪を見せびらかしにいったんでしょうね。
指輪を贈ってからはエヴァさん凄いご機嫌でしたし。
あとは相坂さんに細かい諸注意や魔法の隠匿のことなどを教えればミッションコンプリートだったんですが……。

『って、あれ？
刹那さん？　確か学園長から貰った魔法符で人払いしてたんじゃ？』

『は、はい！　確かに正面玄関に貼りました。正面玄関に近寄った一般人は学校に入りたくなくなるようになります。
夜はそれ以外の出入り口は封鎖されているはずですが……』

『でも現にここにいるじゃないか。
不良品か？　ケチって学園長手製の魔法符で済ますからだ』

『あれじゃないですか？
アスナ様が持っているのが、学園長から頂いた人払いの魔法符では？』

あ、本当だ。……ということは『完全魔法無効化（マジックキャンセル）』のせいですか？
いや、『完全魔法無効化（マジックキャンセル）』は空間系とかの魔法は無効化できないので、魔法符自体に備わっている“一般人から見えなくなる”という認識阻害は効くから、明日菜さんには魔法符自体が見えないはず。
ということは、適当にドアを触ってたら偶然触った？

……いや、そうか、長谷川さんか。
長谷川さんの認識阻害が効きにくい体質がここに出たのか。
長谷川さんが見つけて、アスナさんが剥がしちゃったのか。

『しかし、式神から何の連絡もなかったのは何故だ？
何かあったら念話してくる手筈になってたのに……』

『……式神？　念話？
あ、ごめんなさい。きっと僕のせいです。
相坂さんが人形に憑依する前に張った結界のせいです。憑依するときに他の浮遊霊とか思念波が偶然悪さしないように、教室の外からの人間外の干渉妨げてました』

『おいおい、ネギ先生。
“過ぎたるは及ばざるが如し”って言葉知ってるかい？』

いやいや、ちゃんと結界張る前に説明しましたよね！？
式神で木乃香さんの護衛してるって聞いてませんよね！？

……まぁ、ちょっと“念のため”にしてはやりすぎかな～、と思ってましたけど。

それとちびせつなの存在忘れてました……。

「それにしても、せっちゃんはどこにいるんやろなぁ？
学校に入ったのは見たんやろ？」

「あい、それは確かに見たでござるよ。
刹那が真名、エヴァ殿、茶々丸殿と一緒に校舎内に入っていくのを確認したでござる」

「気づかれてた、ってことはねーな……。
１ｋｍ以上離れた監視だったんだろ。それで気づかれたら怖えーよ」

「そもそもこの２週間、木乃香さんの依頼でずっと監視していたのですよね。
今日に限って気づかれるということはないと思います」

『……刹那さん？』

『も、申しわけありません！
最近見られているような気がしてましたが、てっきり木乃香お嬢

さまの視線かと思って……』

『さすがにこれは仕方がないよ、ネギ先生。
私でも１ｋｍ以上離れたところからの、殺気のない視線は感じ取れない』

「玄関前で私達騒いじゃったから、それで気づかれちゃったのは……」

「それだったら教室の明かりもちゃんと消すアルよ」

「そうよね。だったら職員室かしら？
確か職員室も明かりついてたわよね」

きっと、はしゃいでた相坂さんを落ち着かせていたときですね。
人形状態で走り回る相坂さんを落ち着かせるのは大変でしたよ。

というか、ずっと刹那さんは楓さんに監視されていたんですか。
となると、朝エヴァさんの家に通っていたことも知られちゃってますかね？

「……いったい職員室で何やっとるんやろなぁ？」

「……まさか、朝にエヴァちゃんの家で刹那さんとしてることを、学校でもしてるわけなんかないわよねぇ」

「は、はわわわわ……、どうしよう～～～」

「お、落ち着くですよ、のどか。
ネギ先生が破廉恥なことしているわけありません」

「でも、朝に逢引して赤い顔して別れて、日が経つごとに刹那の肌がツヤツヤになっていく、というのはどーゆうことアルか？」

バレテーラ。
しかも、かなりヤバイ方向に勘違いされてます。

『……刹那、１０歳児に手を出すのはさすがにマズイと思うぞ』

『ええ！？　ネギ先生と刹那さんって良い仲なんですか！？』

『ち、違う！
ネギ先生に抱きつかれて寝るのが恥ずかしいだけだっ！』

『ちょ！？　僕は別におんぶでもいいって言ったじゃないですか！？』

『……』

『お兄様も恥ずかしがられていましたよね』

いや、あんだけ意識されたら、コッチも意識しちゃうんだよ、アルちゃん。
明日菜さんや木乃香さんは弟とかペットみたいな感じで接してくるから平気だけど、あそこまで恥ずかしがられたらコッチも恥ずかしいんだよ。

「じゃあ、職員室に行ってみようか」

「そうやね。それとおじいちゃんのとこにも行ってみよ」

「結局何もなかったな。
そうだよな。オカルトなんて実在しているわけねーよな」

さっさと職員室に向かってください。
当直の瀬流彦先生が居るはずですので、あの人ならうまく誤魔化してくれるでしょう。
その隙に僕達は『ネギ先生、話が終わったのでマスターがコチラに戻られるそうです』って何ですと!?

エヴァさんが教室に戻ってくる?
明日菜さん達と鉢合わせしたらまずいじゃないですか。

『そのまま学園長室にいるように言ってください。
それと学園長に木乃香さん達が学校に来てるこ『ネ、ネギ先生、影の転移魔法(ゲート)が目の前で開きそうなんだが』……はい?』

聞きたくなかったですよ、龍宮さん。
エヴァさんですか。エヴァさんですよね。
力を少し取り戻してから空を飛んだり幻術で大人の姿になったり、いろいろ魔法を使ってましたよね。力を少し取り戻せたのが嬉しくて、はしゃいじゃってるんですよね。

学園長室から2－Aまで影の転移魔法で戻るなんて、何てモノグサな人なんですか。

ああ、転移魔法が開いちゃった……。

「待たせたな、ネギ！

やれやれジジイの話は長くて敵わん。まぁ、お前から贈られた指輪のおかげで最高に良い気分だ。そのぐらいは我慢してやろう！

くっくっく、最盛期に比べるとわずかなものだが、魔法を使えるというのはいいものだな。

改めて礼を言っておこう、ネギ！

？　そんな教室の隅で何やっている？　龍宮マナや桜咲刹那まで？

さぁ、私の家で宴会だ！　今日のチョコレートパーティーも旨い菓子が食えたのでよかったが、やはりこういう日は旨い酒を飲みたい気分だ。茶々丸、この前ジジイからかっぱらった日本酒を用意しろ！

今日は無礼講だ。相坂さよも龍宮マナも桜咲刹那もよかったら来るが……どうしたんだ？　そんな変な顔して？」

こっち見んな。

無理ですよね、思いっきり名指しされましたもんね。
くそっ！　結界を解かずにいるか、エヴァさんにも効く認識阻害の魔法を使っていたらこんなことには……。

「何事アルか！？」

「……ネ、ネギ先生（せんせー）からの指輪の贈り物？」

「ど、どういうトリックなのですか！？
今魔法といいませんでしたか！？」

「お、おい。今どうやって教室の中に急に現れた？
ドアは開かれてないぞ、マグダウェル……」

「……やっぱりせっちゃんやネギ君がこの部屋にいるんやね？」

「あー……、やっぱりあの怪しい隅っこでござったか」

「ちょ！？　何なのよ、いったい！？

ネギ！？　ネギはどこにいるの、エヴァちゃん！？」

「なぁっ！？　き、貴様ら何故ここにっ！？」

うわぁ、どうしよう？　収拾が全然つきません。
今僕達が認識阻害解いても火に油注ぐようなもんですし、静観するしかないんでしょうか？

「……き……」

ちょ！？　エヴァさん！？
何魔法を唱えようとしてるんですか！？

そもそも目の前にいるのは明日菜さんだから魔法は……。

「記憶を失えーーーっ！！！」

パシュウウゥゥッ！！！

「キャアアアアーーーーッ！？」

ちょ！？　明日菜さんの服が！？
エヴァさん、それ原作の僕（ネギ）ポジションですよ！！！

「何なのよ、コレーーー！？」

「ちょ！　アスナの服が吹っ飛んだぁ！？」

「馬鹿な！？　何故魔法が効かない！？」

「魔法！？　魔法って何なんだよ！？」

「魔法使いってやっぱりいたんでござるなー」

「何でそんなに落ち着いているのですか、楓さん！？」

「え？　“やっぱり”って……？」

「アスナ！　とりあえずこれ着るアルよ！」

わぁ、大惨事。

今度ばかりはエヴァさんのせいですけどね。

『姿見せましょう、皆さん。
エヴァさんに任してたら収拾がつきません』

『こ、このちゃんに魔法がばれてもうた……』

『いいんですか、ネギ先生？
さっきのお話だとオコジョになっちゃうんじゃ……？』

『いや、もう無理でしょう。
エヴァンジェリン様がしっかりネギお兄様の名前を呼んでましたし』

『というか紳士だね、ネギ先生。
こういう事態でもちゃんと目を瞑っているなんて……』

『……ウチのマスターが申しわけありません』

『いいんですよ、茶々丸さん。
とりあえず明日菜さんに服をお願いします。僕はそれまで目をつぶっていますので。
刹那さんは携帯で学園長と連絡をつけてください』

まさか、こんな形で魔法バレするとはなぁ……。
原作では魔法バレしても多めにみてもらえてたけど、この僕(ネギ)だったらどうなるんだろう？

あれ？
僕が魔法をばらしたら故郷(クニ)へ強制送還だけど、麻帆良の関係者に僕が魔法使いってことをばらされた場合ってどうなるんだ？
その場合も強制送還？

第二十一話　バレンタイン？　女子中学生は見た（後書き）

原作通り、明日菜の脱がされる運命は変わりませんでした。
脱がせた犯人は違いますけど。

そして魔法バレです。
考えてみれば、誰かのせいで魔法バレするのはあまりないのではないでしょうか？
真面目な話、麻帆良の関係者のせいで魔法使いってことをばらされた場合ってどうなるんでしょうかね？

ハーレム要員は基本的にこの話に出てくる女の子達です。
もしかしたら2、3人ほど後で増えるかもしれません。

というか魔法バレに２０話以上かけるなんて……。
長かったですねｗ
もちろん魔法バレしてもウェールズに強制送還するなんてことはないので、ご安心ください。

最近思い始めてきたのですが、ここのネギは“勘違い系”の分類に入るのでしょうか？
まぁ、“勘違い系”は“勘違いされ系”でも、“勘違いされ系”では

なくて“勘違いさせ系”ですが。

それと根っこが一番似てるキャラは、“めだかボックス”の“球磨川禊”？

“過負荷（マイナス）”じゃなくて、“異常（アブノーマル）”の球磨川ですかね。

第二十二話　魔法バレ？　クビ

――――近衛木乃香――――

「エヴァさん、正座」

「……」

学園長室に入るなりネギ君がエヴァちゃんに正座をするように言ったけど、教室での出来事といいエヴァちゃんの印象変わったわ。

何だか学園長室には女子中では見たこともない先生方がたくさんおって、ウチラが入るなり注目されてもうた。おかげでのどかなんか涙目になってしもうてる。

確かにちょっと怖いけど、ここはビクビクしたらアカン。強気で攻めな！

「おじいちゃん！　これはいったいどういうことやの！？」

「お、落ち着いてくれんかの、木乃香。
こうなってしまったからにはちゃんと説明する」

「せっちゃんやネギ君達はいったい何なんや！？

……というか、ネギ君の肩に乗ってる自分で動くお人形さんはホンマに何？」

「は、はい！　私は相坂さよといいます！！！」

「えええぇぇっ！？」

「人形が喋ったアル！？」

「ネギ先生の腹話術ですか！？」

「いえいえ。違いますよ、綾瀬様。
相坂様は人形に乗り移った幽霊です」

「ア、アルちゃんまで言葉をっ！？」

「おいおい、勘弁してくれよ。
マジモンのオカルトかよ……」

うわぁ、お人形さんに元気一杯に手を挙げて自己紹介されてもうた。しかもアルちゃんも人の言葉喋ってるし。

こんなときに何やけど、カワイイなぁ……。

「だから落ち着いてくれというに……。
どこから話そうかのぉ……」

「……僕達から説明しましょうか、学園長？」

「スマンの、お願いできるかの？
ネギ君とアルちゃんからの方がわかってくれるじゃろ」

「かしこまりました、学園長先生」

「わかりました。僕は木乃香さん達の担任補佐ですからね。
さて、それでは皆さん。単刀直入に言いますと、僕達は“魔法使い”です」

ま、魔法……。
確かにあのエヴァちゃんが急に教室に現れたのや、アスナの服を吹き飛ばしたのは魔法みたいやった。

……あ、アスナがプルプルと震えとる。
エヴァちゃんに裸にされたことを思い出してしもたんやろか？

「ほ、本当にネギ先生（せんせー）は魔法使いさんなんですか？」

「……周りの大人の方々が口を挟まないということは、事実みたいですね」

「魔法使いでござるかー。
やっぱりいたんでござるな」

「楓は気づいていたアルか！？」

「ハハハ……、もう笑うっきゃねーよ。
何なんだよ、この三文小説みたいなストーリーは……」

「……つまりエヴァちゃんは、その魔法で私の服を吹き飛ばしたのね」

マズイわ。アスナが殺意の波動に目覚めかけとる。
男の人が教室にいたら血の雨が降ってたんやろなぁ。

あ、ネギ君は除外やで。
ちゃんと目つぶってたみたいやし、そもそも一緒に寝てるくらいやからな。

「百聞は一見に如かずです。
ネギ先生、よろしければ目の前で魔法を見せてくれませんか？」

「別に構いませんが、どういうのがいいですか？
初級魔法の火を灯す魔法とかありますけど、手品みたいに見えますからね」

「な、何でもいいです。現代の科学じゃ出来ないことを見せてください」

「うーん、じゃあ、僕の得意な回復魔法をお見せしますか。
術式兵装『咸卦治癒（マイティガード）』」

ネギ君が両手に光の球みたいのを出して、それを一つにあわせるとネギ君の様子が変わってもうた。
別に怖いというわけやないんやけど……。

アレ？　女性の先生達が何かうらやましそうな顔でコッチみてくるんやけど、どうしたんやろ？

「怪我してる人はいませんから……長谷川さん？」

「な、何ですか？」

「額に治りかけのニキビありますよね。治してみせましょうか？ちょっと額に触れさせてください」

「え？　回復魔法ってそんなことも出来るのですか？想像していたのと大分違うです」

「そうだね。てっきり怪我とかそういうのしか治せないと思ったけど……」

「ああ、基本的にゲームやアニメに出てくる魔法を想像してもらっ

ても構わんよ。
ネギ君のアレはネギ君オリジナルでの。普通の回復魔法ではニキビとかは治せないんじゃが、ネギ君なら治せてしまうんじゃ。
はっきり言って、回復魔法でネギ君に敵うものは麻帆良に一人もおらんよ」

「へぇ、ネギ君凄いんやなぁ」

「魔法使いにも向き不向きがありまして。
僕みたいに回復魔法が得意なのもいれば、ゲームやアニメに出てくるような攻撃魔法が得意な人もいます。
それでは失礼しますね、長谷川さん」

「ちょ、ちょっと……あ」

何やの!?
その最後の「あ」って!?

……千雨ちゃんめっちゃ気持ち良さそうな顔しとる。

「……凄い。
よくわかんないけど凄い」

「これは怪我の治療、体力回復促進等の他に、美肌、シミ、ソバカス、肌荒れ、冷え性などにも効果があります。
欠点としては直接触れないと効果がないのと、どうも患者の方がリラックスしすぎるみたいです。エヴァさんや刹那さんも寝てしまうぐらいなんですよ」

「女性教師陣がコチラをうらやましそうに見ているのはそういうことですか」

「せっちゃんも寝てもうたの？
……もしかして、せっちゃんが顔を赤くしてエヴァちゃんの家から出てきて、お肌がツヤツヤになってたのって……」

「そ、そんなことまでご存知なのですか!?
その……正直に話しますと、ネギ先生の治療は気持ちよくてですね。気づいたらネギ先生におんぶされていて……涎を垂らして寝ていまして。
その日は恥ずかしくてネギ先生の顔が見れませんでした」

「だからあんなに慌てていたでござるな」

「そりゃあ確かに恥ずかしいアルな」

「なるほどねぇ、そういうことだったの。
ネギと変なことしてなくてよかったわ」

「……はい、終わりました。
誰か鏡持ってませんか」

「あ、ネギ先生（せんせー）、私持ってます」

「すまん、宮崎。貸してくれ。

……本当に治ってる」

凄いわぁ。
魔法って本当にあるんやな。

「治りかけだったからこんなに早く治せたんですけどね。
もうちょっと酷かったらそれなりに時間はかかります。
とまぁ、こんな感じで魔法が存在することは信じていただけましたか？」

「……信じます。こんなこと現代科学じゃ出来ないですよ。
うわぁ、何か肌の感じも違ってる……」

「いいなー、千雨ちゃん。
ネギ、私にも後でお願い」

「ウチも信じるで。こんなもの見せられたら信じるしかあらへん。
ネギ君、ウチもお願いな」

「ホ、ホラ、のどか！
チャンスですよ！！！」

「え！？　えええぇぇっ！？」

「（……女性教師陣の視線が怖いでござる）」

「はいはい、それはまた後で。
それでは僕達が“魔法使い”ということを納得していただけたものとして話を続けますよ」

それからのネギ君の説明は、ウチにとって衝撃的なものやった。
まさか、麻帆良が魔法使いの町とはなぁ……。

それに、せっちゃんがウチを影から守っていてくれたことなんか思いもせんかった。
やっぱりせっちゃんはウチを嫌いになったわけやないんやね。よかった。
……でも、

「何で？　何で言ってくれへんかったの？
ウチを危ない目にあわせとうない気持ちは嬉しいけど、せっちゃんと離ればなれになってまでそんなことして欲しくあらへん……」

「こ、木乃香お嬢さま……」

「木乃香さん、学園長や木乃香さんのお父さんの気持ちもわかってあげてください。
……明石教授、構いませんか？」

「いや、僕から話そう。

やぁ、皆。ゆーながお世話になってるね」

「……誰ですか？」

「あ、裕奈さんのお父さん……」

「ああ、明石のか。
ってことは、明石も魔法使い！？」

「ああ、違うよ。ゆーなは魔法関係者じゃない。
妻が死ぬまでは魔法を教えたりしてたけど、今はまったく魔法とは関係していないさ」

「……奥方殿が亡くなられるまで、ということは、もしかして魔法関係でお亡くなりになったでござるか？」

あ、そういえば、裕奈のお父さん好きは知ってたけど、お母さんのことは裕奈の小さい頃に亡くなったしか聞いたことあらへんかった。
そっか、そういうことなんやな……。

「うん。僕達の仕事は危ないこともあるからね。
だから、ゆーなには魔法とは関わって欲しくないと思っているんだ。ゆーなには魔法のことを秘密にしてくれるかい？」

「……約束するアル」

「はい、絶対言いません」

「ありがとう。僕も木乃香さんのお父さんの気持ちが良くわかるんだ。
黙っていられたことに怒るのはわかるけど、お父さんの気持ちもわかってあげて欲しい」

「……はい」

「そのことについては、今度婿殿とゆっくり話し合ってみるとええ」

「うん、そうするわ」

そうやな。まずはお父様と話し合ってみよう。
電話じゃ何やし、久しぶりに里帰りでもしよかな？
麻帆良に来てからあんまり帰ってへんから、丁度ええかもしれん

な。

「それでは次に、長谷川さん辺りが特に気になっているかもしれませんが、皆さんの今後についてです」

「やっぱりネギ先生はオコジョになって、皆さんは記憶を消されちゃうんですか？」

「ちょっと!?　どーゆーことなの、それは!?」

オコジョ!?　記憶を消す!?
どういうことやの!?

「ちょ、ちょっと待っておくれ、さよちゃん。そんなことせんよ。君らが魔法を知ってしまったのは、ワシらのミスじゃ。……ワシらというか、エヴァのじゃがの」

「……うぅぅ……」

「マスター、そう気を落とさずに……」

「……コチラとしては何も見なかったことにしてくれればよいのじゃがな」

「え？　それでいいんですか？」

「魔法をばらそうとしたりしなければ構わんよ。
いや、魔法をばらそうとしてもワシらにはその専門の対策機関があるし、そもそも信じてくれないじゃろうしの。
ちょっとはしゃぎたい年頃の女の子と思われるのがオチじゃろうて」

「あー、確かにそうアルな。
魔法は実在しているなんて叫んでも、誰も相手にしてくれないアルよ」

「あ、あの、ネギ先生（せんせー）がオコジョになっちゃうってのは……」

「あー、どうなんですかね、学園長？
こういう場合って、僕はやっぱり故郷（クニ）へ強制送還＋オコジョですか？」

「安心しなさい、ネギ君は大丈夫じゃよ。さっきも言ったとおり、今回の件は麻帆良(ワシら)側のミスじゃ。

……ぶっちゃけた話になるが、さっきの説明にあったようにネギ君はメルディアナ魔法学校という他校からの大切な預かり物での。

不用意に魔法をばらしたのがネギ君なら話は別じゃが、ネギ君がばらしたんじゃなくてエヴァがばらしてしまったからのう。

麻帆良関係者のせいでネギ君をオコジョになろうものなら、メルディアナ魔法学校と喧嘩になってしまうわい。

……というか、魔法のことは本当に秘密にしといておくれ。真面目にワシらがピンチなんじゃ」

「だ、大丈夫なん？」

「君達が秘密にしとくれたら大丈夫じゃ。

……あー、もし逆に「こんなこと忘れてしまいたい」という子がおったら記憶を消すぞい」

「結構でござる」

「ちゃんと秘密にするから、大丈夫アルよ」

「私も結構です」

「わ、私もです」

「私もいいです。
木乃香が覚えているのに、私だけ忘れるってわけにもいかないしね」

「……私もいいです。
忘れてしまい気持ちはありますが、記憶を弄られる方が嫌ですので」

よかったぁ～。
記憶消されたりしなくていいんや。ネギ君もいなくなったりしないみたいやし。

それにせっちゃんのこともわかることが出来たし、お父様やおじいちゃんには悪いけど魔法のこと知れてよかったわぁ。

「じゃあ、ウチラは無罪放免ってことでいいんやね？
ネギ君達も何か罰を受けたりしないんやね？」

「大丈夫だよ、木乃香君。
ネギ君には引き続き２－Ａの担任補佐を受け持ってもらうし、刹那君や龍宮君だって同じだ。
……エヴァはどうだろ？」

「……」

「マスター、そう落ち込まずに……」

「……ぎゃ、逆に２－Ａ生徒の面倒をみなければならんのが、ネギ君にとって罰かもしれんのぉ、フォッフォッフォ」

「ハッハッハ、否定できないのがつらいでござるな」

「居残り授業とかで迷惑かけてるからそう思われてもしょうがないアル」

「わ、私は最近ちゃんと勉強してるわよ！」

「アハハ、確かにアスナ君は最近頑張ってるみたいだね。
僕も安心したよ」

「あ……はい、ありがとうございます。……高畑先生」

アカン、アスナまだ失恋のショックが響いてるみたいや。
もう大丈夫かと思ってたけど、さすがに面と向かって高畑先生と話すのはまだつらいみたいや。

「……えっと。ハハハハハ、駄目ですよ、学園長先生。そんなこと言ったら、3年になってネギ君が担任になったらどうするんですか？」

「フォッ！？」

「え？　高畑先生が担任辞めて、ネギ先生（せんせー）が担任になるんですか？」

「うん。僕の出張がかなり溜まっていてね。
僕はＮＧＯの団体にも所属していて、それで今までよく出張に行っていたのさ。ネギ君が来てからは本当に楽になったよ。
ネギ君も立派に教師として頑張っているからね。正直、僕も教師とＮＧＯの二重生活は大変だから、教師としての仕事はネギ君に頑

張ってもらうことになったんだ。
もちろんネギ君一人に任せるようなことはしないよ。僕もこれからは非常勤として皆に関わっていくから、担任と担任補佐が入れ替わると考えてくれたらいいよ」

「そ、そういうことなんじゃよ。
といってもネギ君には修行としての最終課題があるがの。それが無事にすめば3年からはネギ君が担任となるのじゃ」

「……要するに、今とあんまり変わらないのですね」

「でござるな。今でも結局ネギ坊主が担任みたいなもんでござるし」

「そうアルね。高畑先生とは2週間振りくらいアルか」

「……いや、古菲さん。
確か月曜日に会った覚えがあります」

「あー、そうだったな。
月曜の帰りのＨＲは高畑先生一人だったな」

「……」

……アスナ、言いたいことあったら言った方がええよ。

「……え？　皆やけにアッサリしすぎてないかい？
本当に出張しすぎたかな」

「……フォッフォッフォ。
出張行かせてばかりですまんかったの、タカミチ君」

……怪しい。
何かおじいちゃん隠しとる。
ウチラに秘密にしておきたいことあるんやろか？

「……おじいちゃん？」

「な、何かの、木乃香？」

「何隠しとるん？」

「べ、別に何も隠してなんかおらんぞい！」

「アハハ、何を言ってるんだい、木乃香君。
別に隠してなんかいないよ。ねぇ、学園……学園長、何をそんなに冷や汗をダラダラ流しているんですか？」

「き、気のせいじゃ！」

「おじいちゃん！？」

何やろ？　高畑先生や他の先生方も不思議そうにしてる。どうやら他の人は知らんかったみたいやな。
おじいちゃんが一人で何か企んでいたんやろか？

「学園長、その態度では何かあるといっているも同然ですよ。
この際だから、言えないことがあるなら言ったほうがいいんじゃないですか？　それとも、やっぱり僕は故郷（クニ）へ強制送還＋オコジョですか？」

「ち、違うぞい！」

「だったらおっしゃってください、学園長。
他の先生方も不思議に思っているじゃないですか」

「……まいったのぉ。あまりこの場で言いたくないんじゃが」

「どういうことですか、学園長？
もしかしてネギ君について何かあるんですか？」

「まぁ、確かにネギ君についてなんじゃがの。
……他の生徒や保護者からクレームがきておるんじゃよ」

なるほどなぁ。やっぱり１０歳のネギ君が教師をすることに気分悪くする人もおるんやろな。

あれ？　でも、“他の生徒”ってどういうことや？

「おじいちゃん、保護者からクレームが来るのはわかるんやけど、“他の生徒”からのクレームって何やの？

ネギ君は他のクラスでも人気者で、他のクラスの子から悪い噂聞いたことないで？」

「私もないですね。
最初の頃はその奇特さからよく質問されましたが、今では逆に羨ましがられるぐらいです」

「そ、そうですよ！
ネギ先生（せんせー）を悪く言う子なんかいません！　「２－Ａが独り占めしてズルイ」とか言われるぐらいです！！！」

「うん。それじゃよ、まさにそれ。
他の生徒からは宮崎君が言った通りに、「２－Ａが独り占めしてズルイ」とクレームが来ておる。
木乃香達だって、違うクラスでネギ君が担任補佐しとったらズルイと思うじゃろ？」

え？　ソッチ方向のクレームやの？
まぁ、麻帆良のノリだったらしゃあないかなぁ。

「……でも、保護者の人はそう思わないと思いますけど。

正直に言いまして、１０歳の子供が教師をするなんておかしいです」

「長谷川君の言う通りじゃ。
保護者からのクレームは、あくまで“２－Ａだけ”に担任補佐がいることについてじゃな。ネギ君を寄越せとは言ってきておらんよ。

ホラ、昨今は少子高齢化で、生徒集めがどこも大変じゃろ？
麻帆良でも生徒集めのためにいろいろと手を打っておるんじゃが、その中の一つが“教師の数を増やし、よりキメ細かい教育を行なう”という試みじゃよ。
現在は１クラス３０～４０人を教師１人で担任しておるが、それだとどうしても教師の手の届かない生徒が出てきてしまう。それなら教師の数を増やせば生徒をもっと面倒みやすくなるからの」

「ネギ君が担任補佐をしているのは、それのテストケースとしてなんだ。
ちなみに、女子中（ウチ）では“生徒３１人を教師２人で担当する”というテストをしていて、男子中では“生徒１５人を教師１人で担当する”というテストをしているよ。
“生徒３１人を教師２人で担当する”と“生徒１５人を教師１人で担当する”は生徒と教師の比率は一緒でも、実際の指導方法は違うからね」

「そうじゃの。学園としては“生徒３１人を教師２人で担当する”の方がありがたいわい。
“生徒１５人を教師で１人で担当する”だと、教室や備品が一気

に2倍の量が必要になってしまうからの」

「学園の裏事情はわかったでござるよ。
しかし、保護者からのクレームがわからないでござる。あくまでこれはテストケースなのでござろう？」

「……自分達の成績の上がり方ぐらい考えてから言ってくれんかの。
成績が万年最下位だった2－Aが、担任補佐を置いただけで成績があっという間に上位クラス並みになったんじゃぞ。
その噂を聞いた保護者から、「2－Aだけ担任補佐がついてるのは他のクラスに不公平だ」とか、「むしろウチの娘のクラスにも担任補佐をおけ」とかクレームがうるさくての。
教師の数を一気に2倍近くに増やすことなんか出来るわけないのに……」

「そ、そんなに酷いことになってたんですか？
出張ばっかり行ってて気づきませんでした」

「僕も聞いてませんでしたけど？」

「ああ、ネギ君は別に悪いことはしておらんわい。教師としての仕事に励んだだけじゃから、気にすることはないよ。
ただ、3年になってもこのまま担任補佐でいるというのは無理じゃ。これ以上は他の子達と保護者の不公平感が抑えきれん。

かといって、3年になって「ネギ君今までありがとう。テストは終了したからもういいよ」とネギ君を放り出すことは出来んしの。そんなことしたら2－A生徒が暴動を起こすわい」

「だから高畑先生を非常勤にして出張に行きやすくし、担任をネギ先生にお任せするということですか」

「ネ、ネギ先生（せんせー）が担任に……エヘヘ……」

ネギ君は人気者やなぁ。
そういうクレームが来るなんて。

アレ？　でも何でおじいちゃんはコレを秘密にしておきたかったんやろ？

「……もしかして、高畑先生は担任クビなのアルか？」

「え!?　な、何を言ってるんだい、古菲君」

「……あー、ドッチが先なのかって話か？
“高畑先生の出張が忙しいから、ネギ先生を担任にする”んじゃなくて、“ネギ先生を担任にしなきゃいけないから、高畑先生を非常勤にする”ってことか？」

「アハハ、そんなことあるわけないじゃないか。
あくまで僕の教師とＮＧＯの二重生活は大変だから……。
ねぇ、学園長？　……学園長？」

「……これは“適材適所”というものなんじゃ！　タカミチ君!!!」

「学園長っ!?」

ゴメン、おじいちゃん。これは確かに秘密にしておきたいわ。
高畑先生の前で言いたくあらへんやったろうな。

「そ、そもそもネギ君が麻帆良に来る際に、ネギ君を２－Ａの担任にしようとしたことに異論はなかった筈じゃろうっ!?」

「それとこれとは話が違うでしょう!?
ネギ君に担任を譲るならともかく、これでは本当に僕が担任クビみたいじゃないですか!?」

「じゃ、じゃったら2－Aの生徒に、どっちが担任になって欲しいか投票でもしてもらうかの!?
それで多く投票された方が担任をするということで……。

こ、木乃香はネギ君よりタカミチ君のほうがいいかのっ!?」

ウ、ウチに振らんといてぇな!?
アカン。高畑先生が縋るような目で見てくるけど、……こ、答えられへん。

他の皆も目ぇ逸らしとる。
アスナもどう反応してええかわからんみたいや。

「……えーっと?
タカミチ、何というか……、ゴメン?」

「……いや、ネギ君が悪いわけじゃないよ。
僕は出張が多くて皆の面倒を見れなかったのは事実だからね。ネギ君なら僕よりもうまくやれるさ。

ウン、ネギ君に２－Ａの皆のことをお願いするよ。僕もネギ君を手伝うからさ。

「……ハハハ」

た、高畑先生が真っ白に燃えつきとる。

ネギ君がいなくならないのは嬉しいけど、この結果は胸が痛むわぁ。

第二十二話　魔法バレ？　クビ（後書き）

ネギはそのまま担任補佐をすることになりました。３年からは担任です。
この状況なら、別に甘いわけじゃないと思います。

「コノエモン、ネギは元気にやっとるかね？」

「あ、ごめん。麻帆良（コッチ）の関係者のせいで一般人に魔法バレしちゃった。
ウェールズに送り返すからオコジョ刑よろしく」

とかなったら、マジで戦争もんですからね。大人の事情により無罪放免です。

明日菜達も記憶消去とかはされませんが、その理由も次話以降で詳しくするので少々お待ちください。

そしてタカミチが２－Ａ担任をクビとなることになりました。
他の生徒と保護者からのクレーム処理が大変だったようです。

ネギを担任補佐のままにしておく
↓　クレームがもっと酷くなる。却下
ネギをクビにする
↓　２－Ａ生徒に殺される。却下
タカミチを非常勤にして出張に行かせ、ネギを担任にする
↓　みんなで幸せになろうよ。採用

学園長はどこまでも本気です。タカミチに合掌。

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた
カモ：去勢された
鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち
エヴァンジェリン：紅茶吹かされた
バカレンジャー：勉強地獄
学園長：初恋の人を成仏させると言われたせいで胃痛
さよ：知らないうちに成仏させられるところだった
魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という困惑
愛衣：幼児退行させられた
高音：露出狂の嫌疑かけられた
刀子：露出狂の嫌疑かけられた
バレーボール：破裂させられた
タカミチ：コーヒー吹かされた＋“担任クビ”　↑　ｎｅｗ！
刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任
明日菜：失恋

そしてこんな話を書いた直後に、勤めている会社で粛清（リストラ）が行なわれるかもしれないと発表されちゃいました。何てタイムリーｗ

そんなわけで、今月は週一更新が精一杯っぽいです。ご了承ください。

……多分大丈夫だと思うんですけどね。

作者としては、ハッピーエンドが好きなんですがね……。

第二十三話　魔法バレ？　斜め下

――長谷川千雨――

「さて、まだ他に細かいこともあるが、だいたい話は終わりじゃの。先程も言ったとおり、魔法のことは言わないでもらいたい。例え、家族や友人でもじゃ。

もし、不特定多数の人間にばらされてしまうなら、ワシらとしても対処せざるを得ん。ワシらだって生徒に記憶操作なんかしたくないからの。くれぐれも言わないでおくれ」

言わねーよ、こんなこと。

言ったって頭がおかしい女子中学生と思われるだけだ。

やれやれ、最初はどうなることかと思ったが、何とか終わったな。

まさかこんなコトになるとは思わなかったが……。

「今日はもう遅いですからね。

まず一晩寝て、ゆっくり個人で考えてください。もし考えた結果、黙ってることに自信がなくて記憶を消したいなら言ってください。

他に何か質問はありますか？」

「……明石教授の話を聞いた後でこんなこと聞くのは、とても不謹慎だとわかっているのですが……。
私達も魔法を使うことが出来ますか？」

「ゆ、ゆえ？」

「フォッフォッフォ、やはり聞かれてしもうたか。
気にすることはない。年頃の女の子なら仕方があるまい。
それに、内に疑問を秘めたまま帰られても困るからの」

「そうですね。
一応ほとんどの人は魔法を使うことが出来ます。もちろん個人差はありますが。
たまにタカミチのように体質的に魔法を使えない人もいますが、そういう人はあまりいませんね」

「？　高畑先生は魔法を使えないアルか？」

「そうだよ、僕は魔法使いとしては落ちこぼれなんだ。教師みたくね。
……ハハハッ」

もうやめてやれ、古。
高畑のライフは0だぞ。

それにしても魔法ねぇ……。
あのニキビを治してくれるような回復魔法には興味あるが、それでもこれ以上は関わりたくねぇなぁ。
それよりも早く帰って寝たいよ。今日はもう疲れた……。

「ちなみに魔法だけじゃなくて、“気”を使う人達もいます。
刹那さんや楓さん、それに古菲さんも無意識に気を扱っていますね」

「へぇ～、そういうのもあるんやなぁ」

「僕としては今から習うなら、魔法よりも気の方が良いと思いますけどね。
気を扱えるようになると、老化が遅くなって体の調子も良くなり、いつまでも若々しくいられますよ。
座学も多い魔法と違って、身体を動かすのが中心なので運動にもなりますからね」

「ぬぬ、それはまた魅力的な……」

「むぅ、是非とも気について詳しく知りたいアルな。
そうだ、ネギ坊主！　私魔法のこと黙てるから、また手合わせお願いするアルよ」

「だからくーへ、それ“お願い”やない。“脅迫”や」

「くーふぇ、先生方の目の前で脅迫しないでよ……」

「……どうします、学園長？
巻き込んだのはコチラですから、口止め料として何か1人につきお願いを1個聞くことにでもしますか？

皆さんの心情的にもその方がいいと思います。
魔法について黙っているだけだったらストレスが溜まりますけど、
「お願いを聞いてもらったから黙ってる」の方が自分を納得させることが出来ると思いますよ。もちろんあまりに大きいことだったら駄目ですが。
それに古菲さんだったら今日のことがなくても、いずれ自分でコッチ側に辿り着いていたかもしれないですからね。いっそのこと共犯にした方がいいかもしれません」

「そういうことなら拙者も是非お願いするでござるよ。
刹那がその“別荘”とやらで修行を積んでいるのなら、拙者も参加させて欲しいでござる。競い合える相手がいるなら、より良い修

行が出来そうでござる」

「ム、そうじゃの。
麻帆良武道四天王のことはよく聞いておる。というか、この場に全員おるんじゃな。

……確かに彼女達なら放っておくよりも、身内に取り込んだ方が面倒がないかもしれんの。巻き込んだのはコチラのミスじゃし……。
しかし、“別荘”についてなら所有者のエヴァに許可をもらわんといかんが？」

「……勝手にしろ」

あー……、あいつ等は元々半分以上アッチ側みたいなもんだしなぁ。

私もお願い1個聞いてもらえんのか？
でも、アッチ側に関わる気はねぇから、古や長瀬みたいに頼むことないや。

……新型ＰＣとか現金はさすがに駄目かなぁ？

「ネギ君は構わんかね？
古菲君は君との手合わせを望んでおるようじゃが」

「まぁ、そんなに頻繁に挑まれても困りますが、たまになら構いません。
中国拳法の使い手と手合わせするのは僕としても修行となりますし、刹那さんとしている修行も長瀬さんや古菲さんが参加するなら良い刺激になります。

……ああ、ただし今度の期末テストで合計点が平均を下回った場合は、勉強の方を優先してもらいます。魔法を習いたいという人も同じです。
学生の本業はあくまで勉強ですので」

「そのくらい構わないアル。
よし、約束アルよ！」

「わ、私達もいいのですか！？」

「まぁ、少し落ち着いてください、古菲さん、綾瀬さん。
ゆっくり考えたほうがいいですよ。１人につき１個限りですから。
何も今日決めなきゃいけない訳ではありません。
それと木乃香さんは魔法を習いたいとしても、一度お父さんと話し合ってからの方がいいと思います」

「え？　何でやの？」

「ええと、先程も説明したように、木乃香さんのお父さんは“関西呪術協会”というところの長でして、麻帆良が所属している関東魔法協会とその関西呪術協会は昔から仲が悪いんですよ。簡単に説明しますと……」

ふーん、オカルト側はオカルト側で大変なんだな。
古くからの西と、新たに住み着いた東。仲が悪くなるのは当然だな。

しかし近衛がお嬢さまだとはねぇ。
アレ？　でも、今の説明おかしくねぇか？

「すいません。
ちょっとわからないことがあるんですが」

「何ですか、長谷川さん？」

「東と西の仲が悪いのなら、何故学園長は東にいるんですか？　学園長だって“近衛”じゃないですか。

そもそも東と西両方の偉い人の子供である近衛がいること自体変じゃないですか？」

「ああ、そういうことか。

ワシは確かに西の出身なのじゃが、若い頃に先々代の長であるワシの父から西洋魔法を学ぶようにと言われたのじゃよ。これからは否が応にも日本の中だけに閉じこもっていることは出来ん、と父が考えての。

東としても、昔から日本に住んでいた西と誼を持ちたかったから受け入れられたんじゃ。

まぁ、要するにお互いのパイプ役じゃな。そのおかげで関東魔法協会の理事にまでなれたのかもしれんが。

関西呪術協会の方はワシの兄が継いだんじゃが、子供が出来ないまま亡くなってしまっての。

近衛の家の分家もあるが、その当時は長になれる適当な年齢の人物がいなかったのでな。亡くなった長の姪であるワシの娘が西に嫁ぎ、その相手が新たな長になるということになったのじゃよ」

「……政略結婚ってやつですか？

現代でもあるんですね」

「勘違いしないでおくれ。娘と婿殿は確かに見合いから始まったが、ちゃんと2人は愛し合っていたよ。
結婚するにあたって娘が出した条件は、“結婚相手は自分が決める”という条件じゃったからの。長になれるような家柄と実力を兼ね備えた若者20人以上と見合いして、最後に婿殿を選んだのじゃ。
何でも「浮気しそうにないから良い」と言っておったがの……」

贅沢な話だな。選ばれる側じゃなくて、選ぶ側に回ったのかよ。
20人以上の中から選ぶなんて選り取り見取りじゃねーか。

っていうか、そんな理由でいいのかよ?

「あー……、神鳴流である青山詠春さんが長になったのって、そういう理由だったんですか?」

「まぁ、あくまで中継ぎの長という感じじゃからの」

「……もしかして、お父様の一人娘のウチが次の長にならんとアカン、というわけやの?」

「そんなことはないぞい。
先代の長が亡くなった頃ならともかく、今なら近衛の分家の人材

も育っておる。次代の長はその者達が継ぐことが出来るからの。
じゃから、木乃香が無理して継がないといけないというわけではない……はずじゃったのじゃがなぁ。

……問題となったのは、木乃香の才能なんじゃよ。
祖父であるワシが言うのはなんじゃが、木乃香の才能は飛び抜けていての。
“関西呪術協会を建て直すためには先々代の長の曾孫であり、才能豊かな木乃香が次の長となるべきだ”、と考える輩もおっての。
そんな輩が木乃香が西洋魔術師となると聞いたら、何を仕出かすかわからんのじゃ。
木乃香が婿殿から離れて麻帆良に来たのは、そういう政争に巻き込まれないためなんじゃよ。婿殿は木乃香をそういうことに巻き込みたくはないのじゃよ」

「……何なの、それ？
木乃香のことを勝手に決めちゃって。そいつらは何様のつもりなのよ……」

「怒らんでくれ、アスナちゃん。西でもそういう考えをしているのは少数じゃ。
しかし、そういう考えを持つ人間が出てくるほど、木乃香は凄まじい魔力を秘めているんじゃよ」

「……そんな、ウチ……」

うわぁ、“事実は小説よりも奇なり”だな。
まさかそんなお話が現実にあるとは思ってなかった。
……ところで、何でネギ先生は不思議そうな顔をしているんだ？

「どうしたんですか、ネギ先生？
そんな不思議そうな顔をして？」

「え！？
……いや、何でもないですよ、長谷川さん」

「フォ？　何か不思議なことでもあったのかね、ネギ君？
聞きたいことがあるならこの際じゃ。何でも聞いてみるとええ」

「……えーっと、木乃香さんって魔力の制御とか学んでないんですよね？
魔力を封じる魔法具なんかつけてないですよね？」

「え？　ウチそういうのした覚えないで？
魔法具ってゆーもんは知らへんけど」

「そうじゃよ。木乃香は魔法関係の修行なんかしたことはないぞい。

魔力封じの魔法具も持たしておらん。
……それがどうかしたのかね？」

「ですよね。
だったら木乃香さんの魔力は、今の状態で感じ取れる魔力で全部なんですよね？」

“感じ取れる魔力”かぁ。
本当にゲームやアニメの世界の言葉だなぁ。
全然私には理解出来ねーや。

「そうじゃよ。ネギ君だって感じ取れるじゃろ。
木乃香の内に秘められた凄まじい魔力を」

「……木乃香さんから感じ取れる魔力って、“僕の半分ちょっと”ぐらいしか感じ取れないんですけど？
僕を“１０”とすると、木乃香さんは“５強”ですか」

「……。

……。

……フォッ！？」

「え？」

「なにそれこわい」

「えっ！？」

えっ？　何なの、この流れ？

――高畑・T・タカミチ――

一難去ってまた一難。
さて、ネギ君はいったい何を言い出すのかな？

……慣れてきてしまった自分が悲しいよ。

「……スマン、ちょっと待っておくれ、ネギ君。
木乃香の魔力が君の半分ちょっとしかないとは、どういうことかね？」

「え？　そのままの意味ですが……」

「素人が口を挟んで申しわけありません。
それはただ、ネギ先生の魔力が更に大きいだけなのではないのですか？」

「いや、綾瀬君。確かにネギ君の魔力は木乃香より大きいが、タカミチ君の見立てでは木乃香よりほんの少し上ぐらいと聞いておったんじゃよ。
……ネギ君。君の魔力を“１０”とすると、他の人はどの位なのかね？」

「えーっと、僕を“１０”としますと感じ取れる魔力量は、木乃香さんが“５強”、学園長が“３強”、タカミチが“２弱”、今のエヴァさんが“１弱”ってところですかね？」

「ネ、ネギ？　それは……」

「ああ、わかってますよ。
今のエヴァさんは封印されている状態ですからね。きっと元の状態の数％しか発揮できないんでしょう？」

「えっ！？　すっ、数％っ！？
いや、それは……その……」

さすがにそれはない。
いくら元のエヴァの魔力量が大きくても、今の１０倍以上なんてのはさすがにありえない。

今の数値からいくと、ナギの魔力量は“５”ぐらいになるな。きっと全力のエヴァが“５弱”ぐらいだと思う。いくら何でもネギ君はナギの2倍も魔力はないだろう。
ネギ君の魔力の制御が完璧になったら魔力がまったく感じ取れなくなったけど、初めて会ったときは“５．５”ってところだったはずだ。

「それがいったい何なのよ？
ネギの魔力が凄く大きいってことでしょう？」

「いやいや、違いますよ、明日菜さん。
今言ったのは、あくまで僕が感じ取れる魔力量です。
熟練の魔法使いは、僕のような見習い魔法使いが感じ取れる魔力の数倍の魔力を実は隠しているんです」

「フォッ！？」

ネギ君ってば、何だか凄い勘違いをしていないかいっ！？

「えっ？　僕、何か変なこと言いました？　魔法学校でそう習いましたよ？
“魔力の制御を学んでいくと、相手に己の実力を悟らせないことが出来るようになる。熟練の魔法使いになると、見習い魔法使いが感じ取れる数倍の魔力を隠している”って」

「魔法使いの世界でもやはりそういうものなのアルか。
私が故郷で拳法を教えてくれた老師も、見た目はただの優しそうなお爺ちゃんだたアルよ」

「そうでござるな。熟練者ほど己の実力を相手に悟らせないものでござるよ。どこの世界でも一緒でござるな。
となると数倍というぐらいだから、学園長の魔力は最低でも3倍の“１０”以上はあるということでござるな？」

「……あー、漫画やアニメでそういうのよくあるよな。
筋骨隆々の若者を、小柄で今にも折れてしまいそうな老人が倒すとかって」

「へぇ～、おじいちゃんって凄いんやねぇ」

「……あの、ネギ先生。
さっき言った魔力量が全てだということはないのですか？」

「やだなぁ、綾瀬さん。
僕はまだ１０歳の見習い魔法使いで、学園長は麻帆良最強の魔法使いですよ。
学園長の魔力量が僕の半分以下しかないなんてありえないじゃないですか。常識的に考えて」

お、お願いだから、ネギ君が常識を語らないでくれっ！！！

「そうよねぇ。大人っぽいって言っても、ネギはまだ１０歳だもんね」

「しかし、変な勘違いせずに真面目に修行に勤しむ、というのは良いことアルよ」

「ネギ坊主は真面目でござるからなぁ」

「す、凄いです。ネギ先生(せんせー)！」

「ええ～？
おじいちゃんって麻帆良で一番強いんか。凄いなぁ」

「……おい、何だか先生方が死にそうな目をしているぞ？」

「……ネギ先生、もしかして……？」

多分、僕も死にそうな目をしてると思う。
ガンドルフィーニ先生なんか頭を抱えて蹲っちゃってるし……。

「……ネギ君、スマンがちょっと席を……ああ、いや。ちょっと自動販売機で適当にこの子達の飲み物を買ってきてくれないかの。考えてみれば、休憩なしの飲み物なしは辛かろうて……」

「え？　もうだいたい話は終わりなんじゃ？」

「いや、もうちょっと話すことがあっての。年のせいか言い忘れていたことがあったんじゃよ……」

「……？　よくわかりませんが、とりあえずいってきます。どうせなら他の先生方の分も適当に買ってきますよ」

「ウン、頼んだぞい。フォッフォッフォ……。

……。

……。

……全員集合っ！！！

あ、悪いのじゃが、木乃香達はソッチのソファーにでも座って少し待っておくれ。ちょっと関係者で話し合いたいことがあっての」

「わ、わかったえ」

どうしてこうなったんだろう？

ネギ君は真面目な良い子だったはずなのになぁ……。

「……タカミチ君？」

「……ネギ君の目は本気（マジ）でした。

確かにネギ君は自分の魔力量を鼻にかけることはないと思っていましたが、本気であああいう考えをしているみたいです」

「……エヴァ？」

「あってる。ネギの言う通りだ。

近衛木乃香を“５強”で今の私を“１弱”とすると、ジジイが“３強”、タカミチが“２弱”であってる。

ただし、ジジイとタカミチは力を隠してなんかいないがな……。

ちなみに魔法先生の平均は“１．５”ぐらいで、魔法生徒の平均が“１”ぐらいだ。

あくまで魔力量だから、実際の戦闘力とは違うんだが……」

「……刹那君？」

「ネ、ネギ先生と行なっている修行はほとんどが基礎と剣の組み手でしたので、ネギ先生の魔力量が如何ほどなのかはちょっと……」

「……龍宮君？」

「……刹那に以前言った覚えがあるが、魔力総量は私が魔眼で見ても分からなかった」

「……アルちゃん？」

「も、申しわけありません。私もネギお兄様の全力を見たことはないのです。『千の雷（キリアキプル・アストラペー）』を平気で唱えていたので、てっきりそれぐらいかと……」

「……一度まとめてみるぞい。

1. ネギ君の魔力は木乃香の約2倍
2. ネギ君はその自分の魔力量がすごいとは思っておらん
3. ネギ君は他の魔法使いの隠している実力も見抜ける
4. ネギ君はその実力を“見せるための魔力”と思っている

5．他の魔法使いはその数倍の魔力を隠していると勘違いしている

……。

……。

……何でじゃ？」

「「「「「……」」」」」

誰も何も言えない。

当然だ、僕も何を言っていいかわからない。

何でだ？

何でネギ君はそんな考えをしているんだ？

「隠している実力を見抜けるのはまだいい。ソッチ方面の感覚がかなり鋭い奴なら、実在していてもおかしくはない。

あの年齢でそこまで出来るのは珍しいだろうが、珍しいだけでいないわけではない。

しかし、魔力量について何故あんな勘違い……あっ！？

おい、タカミチ。ネギの魔力は近衛木乃香よりほんの少し上ぐらいと感じたのはいつの話だ!?」

「何か思いついたのかね、エヴァ？
……確かタカミチ君がネギ君と初めて会ったときじゃったな。帰ってきたときにそう報告された覚えがあるぞい」

「ええ、そうです。初めて会ったときのネギ君は、確かにその位の魔力量でした。
さきほどの数値でいくと、“５．５”ぐらいだったはずです」

「以前、ウェールズでネギと2人でかくれんぼで遊んで、結局見つけることが出来なかったと言っていたな。
それはいつの話だ？」

「え？　確か初めて会ってから半年後ぐらいだったと思う。
ネギ君は会うたびに魔力の制御が上達していって、半年経った頃には魔法とは関係ない普通の子供のように思えるまで制御出来ていたよ」

「向こうの校長の話では、ネギ君は魔力の制御に失敗したせいで向こうの校長に大火傷を負わせてから、治癒魔法に力を入れて勉強していたと聞いた。
当然、基礎である魔力の制御にも力をいれて勉強もしておったじゃろうな」

「つまりネギは、タカミチが感知可能な魔力を半年で“５．５”から“０”にしたんだな？

……もう一度聞く。

ネギの魔力は近衛木乃香よりほんの少し上ぐらいと感じたのはいつの話だ？

ネギが魔法学校に入学してからどれくらい後の話だ!?」

「え？　確かネギ君がメルディアナ魔法学校に入学してから半年ぐら……い？」

「……まさか、タカミチ君に出会う前の半年で、感知可能な魔力を既に“１０”から“５．５”にしていたということかの？

更にそれからの半年で“５．５”から“０”にしたと……？」

「そして魔力の感知も他人の実力を見抜けるぐらい優れていたけど、魔法学校で習ったことを鵜呑みにして“見せるための魔力”と勘違いしていたのか？

ネギ君の魔力が“１０”とすると、他の大人は“１～２”ぐらい。

その数値を数倍にしてもネギ君より下だけど、ネギ君自身の魔力が大きいことは校長から聞いていたはずだから、今まで違和感を感じずに過ごしていた……？」

「……。

……。

……ネギだったらありえそう、と思うのは私だけか？」

「「「「「……」」」」」

ネギ君ホントにどうしよう？

……一度、ネギ君にシッカリと現実を教えた方がいいようだね。何だか“現実を教える”という言葉の使い方を間違っている気がするけど、気のせいということにしておこう……。

「お待たせしました、皆さん。

ハイ、好きなのをどうぞ」

「うわぁ～、缶ジュースが宙に浮いとる。
ホンマに魔法って凄いなぁ……」

「さすがに２０人以上の缶ジュースを手で持ってくるのは大変ですからね」

「ウム。ありがとう、ネギ君。

さて、ネギ君がジュースを買いに行っている間に話し合って決まったんじゃが、今回魔法を知ってしまった生徒達へのお願いは、基本的にエヴァが責任を持って叶えることとなった。
一番ドジ踏んだのはエヴァじゃからの。妥当なところじゃろうて。
それに古菲君や長瀬君のお願いはどちらにしろエヴァの協力が必要じゃからの。
もちろんワシらにしか叶えられないお願いの場合はワシらが聞くから、ネギ君もそのつもりでいておくれ」

「わかりました。それがエヴァさんへのペナルティということですね」

「ウム、この後エヴァの別荘に赴いて詳しい説明をするそうじゃ。
あの中でなら時間がかかってもせっかくの明日の休日に響かんし、何より目で見て納得しやすいじゃろ」

「そうですね、皆さん驚きますよ。映画に出てくるようなお城ですから。
よし、それなら行きましょうか。僕も一緒に行きます」

「ま、待っておくれ、ネギ君。
ちょっと君に話したいことがあっての……」

「え？　でも僕も行った方がいいのでは？
僕へのお話は後日では駄目なのですか？」

「いや、話を聞いておけ、ネギ。
魔法についての説明だが、女の私から説明した方がいいこともあってな。いくら子供とはいえ、男であるネギは遠慮しておけ。
（……まったくの嘘だがな）」

「そ、そういうのがあるんですか！？
そういうことならわかりました……」

「よし、良い子だ。では全員行くぞ」

そういえば、アスナ君にこんな形で魔法がばれてしまうとはなぁ。

何だか最近避けられていて話し合うことが出来ていないけど、本気で話し合いの機会を持った方がいいな。

『頼むぞ、タカミチ。ネギに現実というものを教えてやってくれ。封印されている私が言っても、おそらく信じてくれないだろうからな』

『わかってるよ、エヴァ。エヴァもアスナ君たちのことを頼むよ。正直、ソッチまでフォロー出来るかわからないから……』

『大丈夫だ。自分の仕出かした不始末は自分で始末するさ。気をつけろ、ネギは手強いぞ……』

『……わかってるよ』

ネギ君の説得か……。うまく出来るかな？

何でネギ君は、考え方と実力がアンバランスなんだろう？

自分の実力を過大評価するのも困りものだけど、過小評価しすぎるというのも困りものだよ……。

第二十三話　魔法バレ？　斜め下（後書き）

「（“紅き翼（アラルブラ）”の修行（ごうもん）で）魔力容量が増えたよ！！」

「やったねネギ君！」

さて、今回もオリジナル設定がかなり入りました。

“近右衛門が“近衛”なのに関東魔法協会の理事であること”

“刹那が裏切り者とされるのに、近右衛門にはそういう描写がないこと”

“東に敵対する行動まで起こす人間は、あくまで少数であること”

“関東魔法協会（このえもん）の理事の娘が西の長の妻だったこと”

“神鳴流の青山詠春が西の長であること”

“木乃香が麻帆良に行くことが出来たこと”

“木乃香が将来の西の長にならなくてもよさそうなこと”

“むしろ木乃香が西洋魔術師になってもよさそうなこと”

という疑問がたくさんあったのですが、これなら不自然ではないと思います。

“近衛”みたいな古い家なら、分家とかたくさんありそうですしね。

他の方のお話では、「近右衛門が西を裏切って東についた」ということでよく描写されます。

しかし、この作品では、

「逆に考えるんだ。

“近右衛門が西を裏切って東についた”ではなく、“西の人間である近右衛門が東の要職についた”と考えるんだ」

という発想ですね。

まぁ、近右衛門も大人ですから、公私混同はあまりせずに東の人間として生きていますが。

まとめますと、

“近右衛門が東にいるのは西も納得済み、むしろ偉くなって便宜図れ”

“詠春は中継ぎの長、そのために近右衛門の娘と結婚”

“近衛の分家としては、自分の家から長を輩出するチャンス！”

“一番楽なのは、木乃香と結婚して近衛本家に婿入り”

“でも、それだと神鳴流（えいしゅん）とか東（このえもん）とのしがらみも一緒についてきそう”

“だから木乃香を西に戻したいのは少数派、むしろ木乃香は東にいろ”

という、感じです。
これだったら近右衛門は西に対して貸しはあっても借りはなく、詠春に対して手厳しいことを言ってもおかしくはないのかなぁ、と。

例えるなら、

「父である社長の命令で、冷戦している相手とのパイプ役になるために相手の会社に入社したのに、父の跡を継いだ兄は後継者いない状況で死んじゃって、実家でお家騒動起きそうだったから娘を差し出したんだけどさぁ。
実家の下っ端は孫娘に対して良からぬ企みするわ、兄の跡を継いだ婿殿はその下っ端押さえつけられないわで最悪なんだけど。
文句言ってもバチ当たらんよね？」

って感じでしょうか？

ちなみに右大臣と左大臣だったら、左大臣の方が地位的には上です。
“近右衛門（このえもん）”に対して、“近左衛門（このざえもん）”って名前は変でしょうか？

ネギは近右衛門のことを“東の長”と言ってましたが、あくまで近右衛門は関東魔法協会の“理事”であって、“理事長”ではないんですよねぇ。
同格の理事が他にも数人いておかしくはないと思うのですが……。

“理事”というのは普通の会社だったら“取締役”のようなもので、社長である“代表取締役”に相当するのは“理事長”です。

まぁ、クライマックスな原作次第ではどうなるかわかりませんがね。

最近はマガジンの最新号をリアルで読めてないですし。

それと魔力量の数値もオリジナルです。

だいたいこんな感じということにしておいてください。

もし、新たな事実が判明したら、その度に修正していきます。

とりあえず、ネギの魔力は木乃香の魔力の2倍弱、としておいてください。

魔力容量は“トレーニングなどで強化しにくい天賦の才”ということですので、あくまで“しにくい”だけみたいで増やせないわけじゃないみたいですね。

“紅き翼（アラルブラ）”の修行（ごうもん）で元の倍以上に増えてたみたいです。

やったねネギ君！

そして遂にネギは、これから麻帆良関係者の前でも本当の実力を出してもよくなりました。
今まで打っていた数々の布石が見事に効果を発揮したようです。
麻帆良関係者はネギの実力を見たとしても、変に思わずに納得してくれ……納得？　変に思わず？

……。

……。

……「ネギ君だからしょうがないんだよっ！！！」
と、無理矢理にでも納得してくれるでしょう。

エヴァも魔法バレ連中の面倒を見なければいけませんが、基本的に無罪放免です。
学園長達からすると、
「エヴァの責任どころの話じゃねぇ！！！」
って状況ですので。

タイトルの“斜め下”は、皆様もご存知の“斜め上”とは少し違うものという感じでつけました。

“斜め上”が予想を裏切り全く予期できない、ありえない方向への発想ならば、
“斜め下”は予想を裏切り全く予期できない、だけどありえてもおかしくない方向への発想、という感じでしょうか。

何となくニュアンスはわかっていただけると思います。
予想よりは下回ったけど、それでも斜めな発想です。

言葉の上だけを考えるなら、別にネギは変なことを言っているわけじゃないんですがね……。

第二十四話　好感度ランキング　ネギ→乙女達

――――ガンドルフィーニ――――

「……というわけでネギ君の魔力量は、ワシらの数倍もあるんじゃよ」

「またまたご冗談を」

……おかしい、何だかさっきからネギ先生の後ろに猫の幻影が見えてきた。

それにしても、何で猫先……じゃなかった、ネギ先生は全然信じてくれないのだろうか？

「君は１０歳の見習い魔法使いだけど、熟練の魔法使いの数倍の魔力を持っていて、尚且つ魔力の制御や効率化も完璧で、身体能力も神鳴流とガチでやりあえる位優れていて、ぶっちゃけこの学園のトップクラスに強いんだよ」

と言っているだけなのに。

……。

……。

……すまない、普通は信じれないな。

「冗談はやめてくださいよ、学園長。
さっきから何度も言ってますけど、僕はまだ１０歳の見習い魔法使いですよ」

「だ、だからじゃなぁ、ネギ君は……ぬ……？」

「ど、どうしました、学園長？
急にお腹を押さえたりして……」

「何だか急に胃が痛くなってきおった。
せ、瀬流彦君。ワシの机に胃薬があるの……ぬぅぅ……
…」

「が、学園長、大丈夫ですか！？
治癒魔法いりますか！？」

「そ、そんなことよりネギ君は現実を知っておく……ガハァッ！！！」

「学園長っ！？
救急車だ！　救急車を早く！！！」

学園長ーーーーっ！？
吐血した！？　マズイぞ。ストレスで急性胃潰瘍にでもなったのか！？

――龍宮マナ――

「……って感じになっていることに餡蜜１０杯」

「賭けにならん。
そうなると思ったから龍宮まで来たのか」

「誰が好き好んであそこにいたいと思うんだ？
お前こそ、ちゃんと近衛と話は出来たんだろうな？　何せ同じ部屋で寝たんだからな」

「ま、まぁな……」

そんなに頬を赤く染めるな。
変な方向に勘違いされるぞ。

エヴァンジェリンの別荘に移動したあと、エヴァンジェリンの人形の従者から夕食が振る舞われ、部屋を与えられて各自就寝となった。
もう別荘の外の時間では夜だったから、体内時計を合わせるためだ。

……というのは口実で、おそらくエヴァンジェリンが精神的に疲れ果てていたからだろうな。

まぁ、無理もあるまい。

刹那は近衛と一緒の部屋に泊まり、夜通し話していたそうだ。
朝食のときに見た近衛は嬉しそうだったし、刹那もスッカリと晴れ晴れとした顔をしている。もう2人のわだかまりは解けたのだろう。

「それで？　近衛はどうするつもりなんだ？」

「まずは長と話し合ってみるらしい。魔法を学ぶのも学ばないのもそれから決めると。
……ただ、魔法を使ってみたいという気持ちは少なからずお持ちのようだな」

「ふむ、そうか。
つまり、古と楓はネギ先生やお前との修行。綾瀬と宮崎は魔法を習うこと。神楽坂、長谷川はまだ未定ということか。
そういえば、エヴァンジェリンが叶えてくれるお願いってのは私もアリなのかな？」

「エヴァンジェリンさんに言えるものなら言えばいいさ。
……長谷川さんはさっき、「新しいノートパソコンが欲しいんだけど、それはやっぱ駄目かなぁ？」って言っていたな」

「堅実な考えだな。
魔法を習おうとするよりはマトモだろう」

「中学生の女の子なら仕方があるまい。
……しかし、本当にいいのだろうか？　一般人に魔法を教えたりして……」

「今回のことは明らかに学園のミスだからな。しかも近衛も一緒に目撃してしまった。
近衛がいなかったら記憶消去という手もあったろうが、そんなことしたと知られたら近衛が許すとは思えん。
学園長も孫の記憶を消したり、嫌われたりするのは避けたいのだろう」

「まあ、そうだろうな」

「それとネギ先生のことで精一杯ということもあって、彼女達には手が回らないんだろうさ」

「……ネギ先生かぁ」

……あの子は何であんなにアホの子なんだろうか？
模擬戦の頃からどこかズレているとは思っていたが、あそこまでズレているとは思わなかった。
教師やっているのを見ていると普通に見えていたんだがなぁ……。

文武両道、成績優秀、品行方正など、修飾語をいくら付け足しても足りないぐらいの天才なんだが、それでもあのアホさ加減で台無しになっている。
それともあのアホさ加減のおかげで、嫌みったらしく見えないというのもあるのだろうか？

嫌みったらしい天才とアホな天才。
これはどっちが良いのだろう？

「そうそう、昼食のあとに皆で集まって話し合いをするそうだ。いつまでも水着姿で日光浴していないで、龍宮も来てくれ」

「わかったよ。
それにしても外の季節は冬なのに、日光浴というのは悪くないな」

「だったら夏になったら雪山に行ってみればいいさ。
摂氏マイナス４０℃だそうだがな」

さすがにそれは御免だよ。
もう４０℃ほど気温を上げてくれれば考えるがな。

―――――――――――――――――――――――――――――――――

「……というわけで、来週から相坂さよが２－Ａに入ることとなった。病気でずっと入院していたという筋書きらしい。各自覚えて置くように。
　わかっていると思うが、見ての通り相坂さよは人形の身体に入っている。何か不都合があったりした場合は私かネギに言え」

「よ、よろしくお願いします。皆さん！」

「よろしくね、さよちゃん」

「よろしくなー、何かあったら遠慮なく言うてな」

「よろしくお願いします」

「（……冷静になって考えてみると、幽霊がクラスメイトって……。まぁ、担任と担任補佐が魔法使いで、吸血鬼やロボットもいるんだから今さらか）」

それにしても、相坂のことは全然気づかなかったな。私の魔眼でも見えないとは、まったく影の薄い幽霊だ。

ネギ先生はクラス名簿に載っている生徒が、いつまでも経っても登校しないことを気にしたのがキッカケとして気づいたらしいが……。

「それと改めて紹介しておくが、この子はネギの使い魔であるオコジョ妖精のアルちゃんだ。

この子に言えばネギにも伝わるから、緊急時にはそうするといい」

「よろしくお願いします、皆様。

それと今まで黙っていて申しわけありません、アスナ様、木乃香様」

「本当にアルちゃん喋ってるわねぇ。

さよちゃんにはビックリしたけど、アルちゃんにもビックリした

わ」

「気にせんでええよ～。魔法のことは秘密にしとかなアカンかったんやろ。
それにしても凄いなぁ。まるでディ○ニーみたいや」

「オコジョ妖精ですか。失礼ですが、あまり聞いたことはありませんね。
アルちゃんも魔法を使えるのですか？」

「はい、人間の魔法使いが使う魔法とは違いますが、オコジョ妖精も魔法を使えますね」

「へぇ～、アルちゃんも凄いんだねぇ」

「（こいつの声帯どうなってるんだろう？ってツッコミしちゃ、いくら何でも空気読めてねぇよなぁ……）」

「ねぇねぇ、人間とは違う魔法ってどんな魔法が使えるの？」

「そうですねぇ。
変わったところでは『仮契約（パクティオー）』の儀式、人間関係の感知などが出来ます」

「『仮契約（ぱくておー）』？　……って、人間関係の感知ってどういうのなん！？」

「そのままの意味だぞ。人が他人に抱いてる好意を測る超能力があるんだ。
オコジョ“妖精”と名乗るだけあって、特殊なことが出来るんだよ。

……そういえば、ネギが私のことをどう思っているとかも出来るんだよな？」

「え？　出来ることは出来ますけど……」

……空気が変わった。
神楽坂や近衛、宮崎、エヴァンジェリンの目が輝きだした。

それにしても、あの“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”がここまで熱を上げるとはなぁ。

「……へ、へぇ～？」

「うわー、ウチってネギ君にどう思われてるんやろ？」

「は、はわわわわ……」

「……アルちゃん。
ちょっと見せてくれてもいいか？」

「み、皆様の目が怖いです。
ネギお兄様はまだ１０歳の子供ですので、おそらく皆様が期待するようなものは出てこないかと思いますが……。
ち、ちなみにこれが参考例の好感度ランキングですね！」

・

	友	親	恋	愛	色	計
ネカネ	１	１０	１	１０	０	２２
アーニャ・	７	９	１	９	０	２６
ドネット	３	３	２	３	０	１１

「各１０点満点のパラメータ５種類に分かれていまして、それぞれが“友愛”、“親愛”、“恋愛”、“愛情”、……“色欲”を表しています。
数値はニュアンス的に……そうですね、０＝無関心、１～３＝嫌いじゃない、４～６＝普通に好き、７～９＝かなり好き、１０＝

大好き、といった感じです。
“友愛”は友人として、“親愛”は親兄弟……要するに家族として、“恋愛”は恋人として、“愛情”はどのぐらい愛しているか、“色欲”……は０だから関係ありませんね。
合計値も表していますが、ネカネお姉様とアーニャお姉様を見ていただければわかるように、一番合計値が高ければ一番愛されているというわけではありませんね」

おいおい、勝手に見せていいのかい？　と思ったが、これなら問題ないか。
この表を見る限り、やっぱりネギ先生は１０歳の子供だなぁ。

「えーっと、確かネカネさんってネギの従姉のお姉さんで、アーニャちゃんは幼馴染の妹みたいな女の子だったわね。
……ネカネさんへの“親愛”と“愛情”が１０点ってのは凄いわねぇ」

「え？　アーニャお姉様の方がネギお兄様より年上ですけど……」

「やっぱり家族で母親代わりってのは強いんやなぁ……。
でも“友愛”と“恋愛”が１点ってことは、完璧に家族としか見ておらへんなぁ」

「全体的に“恋愛”と“色欲”の数値が低いですね。
……“色欲”って要するに、……いやらしいことですよね？」

「その“色欲”が見事に0点でござるなぁ」

「“恋愛”の1点と2点も似たようなものアルよ」

「10歳じゃ仕方がないだろ。
むしろ私はこの表見て安心したけどな」

「そうか？
10歳にもなってそういうことに全く興味がないというのは、逆にネギの将来が不安だがな」

「ムウ。ネギ先生が紳士ということはいいのですが、恋愛に興味を持たれていないというのは困りものですね」

「ド、ドネットさんって誰なんだろう？
この人は“恋愛”が2点あるけど……」

「ドネット様はメルディアナ魔法学校の職員でして、ネギお兄様の祖父である校長の秘書のような方です。
校長を通じて少し付き合いがありまして、ネギお兄様が言うには

“年上の綺麗なお姉さん”だそうです。

そして現在の皆様への想いはというと……あ、あら？」

な、何があった！？

おそらくネギ先生が私達をどう思っているか書かれているであろう巻物を見たアルちゃんが、慌てて巻物を閉じたぞ？

「ア、アルちゃん、どうしたの？」

「い、いえ、ちょっとこれは予想外というか……」

「……予想外？　もしかして、ウチラのこと何とも思ってへんのかなぁ？」

「そ、そんなことはあるまい。

……アルちゃん、見せてくれ！」

「ちょっと待ってください。

これはさすがに「茶々丸っ！」って駄目です！　離して下さい！」

「失礼します、アルちゃん」

おいおい、いいのかこれは？　といっても止める奴がいないな。
誰もがバツが悪そうな顔をしている中に、隠し切れない興味が混じっている。
まぁ、私もあのネギ先生が他人をどう想っているかということなら、少しは興味あるのだがな。

ゴクリ、と生唾を飲み込む音が複数聞こえた。
というか全員の目がマジだな。

「……よ、よし、開くぞ」

「待ってください、エヴァンジェリン様！　見ないでください！！！
アスナ様達もその巻物を見ないでください！」

「いいや！　限界だ、見るねっ！！！」

止める間もなく、バッ、っと開かれた巻物に書かれている内容へ釘付けになる私達。
そこに書かれていたのは……。

	友	親	恋	愛	色	計
明日菜	4	7	6	7	0	24
木乃香	3	8	5	7	0	23
エヴァ	6	3	4	5	1	19
刹那	6	3	7	6	0	22
茶々丸	5	4	3	6	0	18
のどか	5	4	4	5	0	18
千雨	4	4	4	4	0	16
マナ	4	2	3	3	0	12
古菲	4	2	2	3	0	11
夕映	3	2	2	3	0	10
楓	3	2	1	2	0	8
さよ	1	1	1	1	0	4

「……フッ、フハハハハハハハッ……。
私が“恋愛”においてトップだ！　やはりネギも私のことをそういう目で見ていたんだな！！！
“色欲”こそ0点だが、それでも私が……あ？」

「ちょ、ちょっと待ってよ、エヴァちゃん！　合計点は私の方が上でしょ!?
それに“愛情”が高い私の方がネギに愛されているんじゃな……
……い？」

「あや～、“親愛”が8点でこの中では一番高いわぁ。
ネギ君はウチのことを一番家族と想ってくれているんやなぁ、エヘヘ……え？」

「……違うんです。
これは違うんです。誤解なんです……」

「（マスターと同じくらい私に“愛情”を感じてくださっているのですか……）」

「は、はわわわわ……、い、意外と高い？
同じ魔法使いのエヴァンジェリンさん達や、一緒に暮らしているアスナさん達を除いたら私がトップ……そ、そんな、ネギ先生（せんせー）……」

「た、高くはないが低くもないな。全体的に“普通に好き”なのか。
まぁ、別に嫌ってわけでも嬉しいってわけでもねぇけど……
……って、おい？」

「“親愛”と“恋愛”が2点アルかぁ。
居残り授業で迷惑かけてばかりだったからアルかね？」

「の、のどか……。
嬉しがるのはいいのですが、衝撃的なことが書かれているですよ……」

「……拙者は“恋愛”が1点でござるな。
さよ殿は会ったばかりらしいから仕方がないとはいえ、拙者は恋愛対象外なのでござろうか？」

「はううぅ～～～。最低点です。
でも、月曜日からは生徒としてネギ先生と過ごせるので、これから仲良くなっていけるんです！」

私は……こんなものだろうな。
魔法関係で話をしたことは何度かあるが、特別に何かあったわけじゃない。それに別に成績のことで迷惑掛けているわけじゃないからな。

“年上の綺麗なお姉さん”であるドネットという人より“恋愛”が1高いのか。
フフフ、悪い気分ではないな。……まぁ、エヴァンジェリンの半分以下だがな。

それにしても、ネギ先生は見事に“色欲”が……“色欲”が？

「……せ、刹那、１０歳児に手を出すのはさすがにマズイと思うぞ？」

刹那への“色欲”が１点あるよ、おい？

「……おい、桜咲刹那？」

「……桜咲さん？」

「ち、違います！　エヴァンジェリンさん、神楽坂さん！私は何もしていないんですっ！！！」

いや、その言い訳は通らないだろう。
他の人は見事に“色欲”が0なのに、刹那だけが1点ある。
……アレか？　刹那がネギ先生をソッチ方面に目覚めさせちゃったのか？
刹那はネギ先生にいったい何をしたんだ？

「……せっちゃん？」

「嘘ではありません、木乃香お嬢さま！
わ、私は……」

「ほ、本当です。ネギお兄様と刹那様が修行するときは私も一緒にいましたから証言できます。
おそらくネギお兄様が刹那様を意識してしまっただけで、2人は別に変なことしたりしていないですよ！」

「……そうかえ。
何にせよとりあえず、ちょっと“ＯＨＡＮＡＳＨＩ”しようか、せっちゃん？」

「……は、はいぃ……」

……笑顔のはずの近衛が怖い。

というか、無表情の神楽坂が特に怖い。いつもバカっぽく朗らかな神楽坂があんな無表情になるとは……。

ああ、コッチにも来ないでさっさと帰ればよかった。

第二十四話　好感度ランキング　ネギ→乙女達（後書き）

好感度ランキングはズレていないでしょうか？
自分のＰＣではちゃんと見れるのですが、もしかしたら見にくい方もいらっしゃるかもしれませんが、何卒御容赦ください。

そしてこの好感度ランキングは実際の数値です。
アルちゃんにお願いして、数値を捏造したりはしていません。
原作では“親”のパラメータは「ネギに対して“親心”を感じているか？」という項目ですが、この作品では「“家族”として愛しているか？」という設定ですので、ネカネのことを娘と思っているわけではありません。
点数の目安は、０＝無関心、１～３＝嫌いじゃない、４～６＝普通に好き、７～９＝かなり好き、１０＝大好き、です。

やはり前世のエヴァへの初恋が残っているためか、“恋愛”はエヴァが多めです。
せっちゃんへの“色欲”については、せっちゃんに思いっきり恥ずかしがられたせいでネギも意識しちゃっただけです。

ちなみにこのネギの根っこは、仙人と幼児を足して２で割ったような感じです。

せっちゃんはまだ自分が半妖であることは言えてません。
というか、ネギの起こしたことのショックが大きすぎて、自分が半妖であること自体忘れてます。

そして参った。
アルちゃん視点が全然かけません。何書いても違和感しか感じられない……。
魔改造しすぎちゃいましたよ。

それと、とりあえずセーフでした。
来週からは週2更新に戻れそうです。……戻れたら良いなぁ。

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた
カモ：去勢された
鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち
エヴァンジェリン：紅茶吹かされた
バカレンジャー：勉強地獄
学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血　↑　ｒａｎｋ　ｕｐ！
さよ：知らないうちに成仏させられるところだった
魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という困惑
愛衣：幼児退行させられた
高音：露出狂の嫌疑かけられた
刀子：露出狂の嫌疑かけられた

バレーボール：破裂させられた
タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ
刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任
明日菜：失恋

※　木乃香の魔力が“５強”で魔法先生の魔力が“１．５”について

前回の内容から、「木乃香の魔力はもっと高いのではないか？」という感想を頂きました。……やっぱりそうですよねぇ。
確かにもっと多くても良さそうかな、とは思ったのですが、それですと青天井になりそうだったので止めておきました。
魔法を使うことについて“魔力容量”の他に、“精神力の強化”、“術の効率化”など様々な要因がありますし、量だけではなく質も重要だと思いまして……。

それと詠春は木乃香の力について「魔力を操る力が眠っています」と表現しました。「魔力が眠っています」ではなくです。
ですので木乃香は魔力も多いのでしょうが、むしろ“精神力”の方が大きいのではないでしょうか？

車で例えるなら、

“魔力容量”＝ガソリンタンク容量
“精神力”＝馬力
“術の効率”＝燃費

といった感じです。

“術の難易度”を坂道とすると、難易度が高くなるほど傾斜が上がっていきます。
それですとガソリンタンクの容量がどんなに大きくても、馬力がないと坂道を登ることは出来ません。

そしてスクナの召喚ですが、例えますと、

“１００ｋｇのバーベル”を持ち上げれる人が“５人”いても、“５００ｋｇのバーベル”を持ち上げられるかはわかりません。
何故なら、“５００ｋｇのバーベル”を持ち上げるには５人全員がバランス良く、全力を発揮しなければならないからです。
バーベルが小さくて３人しか持てなかったら？　５人の息が合ってなくてバラバラに力を入れたら？　持つところがバラバラで、バランスがとれなかったら？
きっとバーベルを持ち上げることは出来ないでしょう。

それと、“１００ｍ１０秒”で走れる人が“５人”集まったとしても、“１００ｍ９秒”で走れる人“１人”相手では、どう頑張っても１００ｍ走で勝つことは出来ない、という感じです。
リレー式にして専用の訓練をしたら、もしかしたら勝てるかもしれませんが、それでも５人の息を合わせるための訓練が物凄く必要になるはずです。

千草はスクナのことについて、「お嬢さまの力で制御可能」と言っていました。
“召喚”に必要なのは“魔力”なのでしょうが、“制御”について必要なのは“精神力”ではないでしょうか？

自分としましては6作目以降のドラクエの賢者みたく、ＬＶが上がると“魔力効率”が上がり、魔法発動に必要な消費魔力もドンドン減っていくと考えています。
そうでなければ、ネギは修学旅行からラカン戦までの間で、魔力が最低でも１０倍以上に増えてなきゃ駄目なように思います。
魔力容量は“トレーニングなどで強化しにくい天賦の才”ということなので、いくら何でもそこまで魔力が急激に増えることはないでしょう。

以上の理由から、木乃香の魔力が“５強”、魔法先生の魔力が“１．５”としました。

第二十五話　弟子入れられ（強制）

――――ガンドルフィーニ――――

「……本当、なんですか？」

「そうなんだよ、ネギ君。
だけど、たとえ君より魔力を持っていない魔法先生だとしても、
その魔法先生の今まで培ってきた経験は見習うべきだと思うよ」

「……え、ええ。それは承知しています」

……よかった、やっとネギ先生が信じてくれた。

危なかった。
他の先生は既に力尽きてしまい、もう私と高畑先生しか残っていなかった。
残った私達も疲労困憊していて、これ以上の抗戦は不可能だったろう。

「……タカミチの言うことはわかりました。
もう少し時間を貰ってもいいですか？　ちょっと今までのことを思い出しながら考えたいので……」

「ああ、それは構わないよ。
今まで思っていたことが間違っていたんだから、少し昔のことを思い出すのもいいさ」

「そうだな。今日はネギ先生の生徒に魔法がばれてしまうなど色々あったからな。
明日明後日の休日を使ってゆっくり考えてみるといい」

「わかりました、そうします。
……そういえばエヴァさんはもう説明し終わった頃ですかね？」

「まだじゃないかな？
電車も動いてないから、エヴァの家に行くのも時間がかかるだろうからね」

……冷静になって考えてみれば、“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”に生徒を任せてよかったのだろうか？
まぁ、学園長が復帰してから相談しよう。

ネギ先生がついていれば差し迫った危険はないだろうし、それに生徒には悪いけど今日はもう疲れた……。

「……ところで話は変わりますが、人払いをしていたはずの校舎に明日菜さん達が入ってきたのはいったい？」

「ああ、それはね。
秘密にしておいて欲しいんだけど、実を言うとアスナ君には特別な力があってね。
おそらくそれが作用してしまったと思うんだけど……」

……ふぅ、これでようやく家に帰れる。
娘はもう寝てしまっただろうか？　でも、寝ててもいいから顔を一目見たいな……。

――神楽坂明日菜――

「……というわけで、ネギお兄様は刹那様を意識してしまったのです」

「そうなのです。
私がネギ先生のことをとても恥ずかしがってしまい、ネギ先生もそれに影響されただけなんですよ」

「アスナ様や木乃香様だって、寝ているときにネギお兄様が身体を触ってきたら意識してしまいますでしょう？」

「ネ、ネギはそんなことしないわよ！」

「そうやなぁ。
ネギ君って、自分からはくっついてこないんよ」

そうなのよね。
私が落ち込んでいた最初の頃は背中を優しくポンポン叩いて慰めてくれたけど、最近は全然そういうことないのよねぇ。
恥ずかしがりやというか何というか……、無意識状態でないと

甘えてくれないし。

紳士なのは良いことなんだけどさ。

本音を言うと、もうちょっと甘えてきてほしかったりして……。

「“色欲”の1という数値は、相手に異性を感じてしまったらそれだけで出てしまう数値です。

ですので、あまり気になされる必要はないかと」

「……ちょっと待って、アルちゃん。

それって要するに、ネギって桜咲さん以外は女の子と意識していないってこと？」

「……なん、やて？」

「ち、違うのです、お嬢さま……」

「意識していないというより、まだそういうことがわからないのだと思います。

アスナ様や木乃香様のことは、家族で“姉”のようには認識していても、“女性”とは認識出来ていないのかもしれません。

私もネギお兄様の“色欲”が0点以外の数値が出たのは初めて見

ましたし」

「あー、１０歳ならしょうがないアルよ」

「そうでござるな」

「……しかし逆に言えば、ネギはそういうことに興味が出始めてきたということか？
それこそ１０歳なら仕方がないな」

「ネ、ネギが！？」

「そ、そうなん！？」

「え！？　……私は今後ネギ先生とどうやって接すれば？
もしかしてネギ先生は私のことを……」

や、やだ。そんなこと言われたらコッチも意識しちゃうじゃない。
桜咲さんと寝たときのネギもこういう気持ちだったのかしら？

……う、私の顔赤くなってるわね。

こ、今度から一緒に寝るときどうしましょうか？

「というか、私的にはアスナさん達がネギ先生と一緒に寝てることのほうが驚きなんですが」

「ネ、ネギ先生（せんせー）と一緒の布団で……」

「べ、別にいいじゃない！　一緒の部屋で暮らしている家族みたいなものなんだし。
ネギは弟みたいなものよ。だったら一緒に寝てもいいじゃない！」

「そうやで～。
ネギ君抱きしめて寝ると、あったかくて気持ちええんよな～」

そうなのよねぇ。
子供の体温は高いって言うけど、ネギってかなり高いのよね。
だから寒い日でも、ネギが一緒に寝るだけで全然平気だし。

……ああ、そうだ。

「今度からは刹那さんみたく、あの『『咸卦治癒（まいていがーど）』』を使ってもらってからネギと一緒に寝ようかしら。
私はエヴァちゃんへのお願い決まってなかったのよねぇ。魔法とか習いたいとも思わないし、学費とか生活費を払ってもらうというのはいくらなんでも悪いしね。
ネギしか叶えられないお願いは、ネギが叶えてくれるらしいし」

「あ！　それええなぁ！
ウチは魔法習うのをエヴァちゃんへのお願いじゃなくて、おじいちゃんに別口で頼めばええし」

「な、何だと貴様ら!?
それはずるいぞ！」

「そ、そうですよ！
ただでさえネギ先生と一緒に寝ているというのに、更にこれ以上ネギ先生へお願いするのはずるいのです！」

「そ、それだったら魔法を習うのはやめて、私もネギ先生（せんせー）と一緒に……で、でもそれはいくらなんでも無理だよぉ……」

へっへーん！
これはネギと一緒に暮らしてる人だけの特権だもんねぇ～。

「ま、待て！　綾瀬夕映、宮崎のどか！
貴様達の“魔法を習いたい”という願いはもう決定済みだ！　今更変更するなど許さん！！！

我が弟子として、貴様達2人は私が直々に鍛え上げてやろう！
我が配下に連なる化け物（モンスター）にふさわしい魔法使い……悪の小ボスにな！！！」

「えええっ！？」

「ちょ、ちょっと待ってくださいエヴァンジェリンさん！？
そんなの聞いてません！　弟子って！？」

「もう遅い！　中途半端は認めん！！！
やるならとことんまでだ！！！

ついでにネギと一緒に寝るなんかも認めん！　私だってそんなことしていないんだぞ！！！」

「私情入りまくりじゃないですか！？」

「あ、悪の小ボスなんて嫌ですよ～～～」

「尚、修行中貴様らの服は常に黒！
ゴスロリ服とす……いや、やっぱりいい。ネギは私のゴスロリ姿を可愛いと言っていたからな」

「ネ、ネギ先生（せんせー）はゴスロリ服がお好きなんですか！？」

「フン！　違うな、ゴスロリ服を着ていた私にそう言ったんだ。
私の金髪が黒のゴスロリ服で映えて、それがとても可愛いそうだ」

「な、ならのどかは白系のゴスロリで攻めるのです。
のどかの黒い髪が白いゴスロリに映えて、きっと可愛いと言ってくれるはずです！」

「誰がそんなこと許すかぁっ！
貴様らはジャージで修行しろ！！！」

「そ、そんなぁっ！？」

「……私はいつも寝巻きにジャージを使っていて、ネギ先生と寝るときもジャージなんですが。

そんなにジャージは駄目なんでしょうか？」

「駄目やよ、せっちゃん。女の子なんだからちゃんとお洒落せんとな。

そうや！　今度一緒に服を買いに行こうえ！！！」

「え！？　……は、はい、木乃香お嬢さま！」

「（ＰＣとかは無理そうだし、私はどうしようかな？　……あのガキと一緒に寝るのは恥ずかしいけど、あの回復魔法は惜しい。アレさえあれば、もうフォトショップを使わなくてよくなるかも……）」

考えてみれば別にお願いを使わなくても、ネギだったら普通に頼めばやってくれそうよねぇ。

やっぱりお願いはとっておいて、何かあったときのための保険にしておこうかしら？

それにしても、ネギがあんなに私のことを……その……す、好きなんてねー。

やっぱりまだまだ１０歳っていう誰かと一緒にいたい年頃なんだから、一緒に住んでる私のことを好きになるのはしょうがないわよね。ウン。

まぁ、木乃香のことも同じくらい好きみたいだし、ネカネさんやアーニャちゃん達には“親愛”と“愛情”は負けてるけど、“恋愛”は私の方が勝ってるもんね。

……エヴァちゃんには“恋愛”が1負けてるけどね。ムゥ。

それでも“愛情”は勝ってるし、“親愛”は私が4も上だから良いけどさ。

それにしてもネギったら、他にもたくさんの女の子のこと好きになっちゃって。まったくもう。

帰ったらネギとお話しなきゃ。

「フン！　この指輪を見てみろ！
これはネギが私に贈った指輪だ！！！」

「ネギ先生（せんせー）からの贈り物！？」

「そういえば教室でそんなこと言ってましたね！？」

「な、何やて！？
2人はそこまで進んどったんかい！？」

「いや、エヴァンジェリンさん。その指輪は……」

……それにしてもネギったら、エヴァちゃんに指輪のプレゼントなんかしちゃって。まったくもう。

帰ったらネギと“ＯＨＡＮＡＳＨＩ”しなきゃ。

ふぅ、落ち着いたわ。

茶々丸さんの紅茶は美味しいわね。お菓子も美味しいし。……ここにいたら太っちゃいそうで怖いわね。

とりあえず、ネギとはどうせ寮に帰ったら一緒に寝るんだから、そのときにいろいろとお話することにしましょう。

「ところで話は変わるのでござるが、ネギ坊主はどの位強いのでござるか？」

「うん？

……そうだな、とりあえず剣の腕や体術は私以上だ。１０歳ということもあって身体能力ではさすがにまだ私達の方が上だが、『咸卦法』などの技法を使われれば私達を上回るだろう。

魔法については本気で使っているのを見たことないからわからないな」

「ええ～？　ネギ君て、せっちゃんより強いんか？」

桜咲さんは剣道部でも強い方だったはずなのに……。

そういえばネギはくーふぇにも勝ったわよね。

ネギったら、強いのねぇ。

「私との試合は本気でなかたということアルか？」

「あー……、ネギ先生の実力は本当にわからん。アルちゃんが言うには雷系最強呪文の『千の雷（キリアキブル・アストラペー）』を使えるらしいな。

それと古、ネギ先生の本気と戦おうとするのはやめておけ。ネギ先生は武人というより軍人の類だ」

「……何でネギはあんな子供に育ったんだろうか？
やはりネギはナギより酷いぞ」

「ネ、ネギお兄様は素直で純真なんです」

まぁ、確かにネギは素直で純真よねぇ。
いつもニコニコ笑ってて、何か面白いことあるとコロコロ笑って、無意識に甘えてくるときは本当に幸せそうな顔をするし。

「おい、綾瀬夕映、宮崎のどか。
魔法を教える前に予め言っておくが、ネギのような魔法使いになれるとは絶対に思うな。
アレはバグキャラの類だ」

「そ、そんなにネギ先生は凄いのですか？
確かに学園長室での一件から魔力はたくさん持っておられるのはわかったのですが、６００年も生きておられるエヴァンジェリンさんにそこまで言われるとは……」

「へぇ～、ネギ先生（せんせー）って凄いんですねぇ」

「いくら模擬戦に負けたとはいえ、封印さえ解ければネギに負けはしないと思っていたがなぁ……。
何だかネギと戦うこと真面目に考えたら嫌になってきた。アイツ絶対、モビルスーツや『闇の咸卦法』以外にも隠し玉持っているぞ。
ネギとは戦いたくないな。何を仕掛けてくるか全然わからん。まぁ、どういうことを仕掛けてくるかには興味はあるんだが……」

「そうだろうな。
ルール無しなら武道四天王と呼ばれている私達全員が相手をしても負けるだろう。ルール有りの試合形式ならもしかしたら何とか、といったところか。

ちなみに古。お前が本気のネギ先生と戦おうと思ったら、空を飛ぶことが出来るか射程数ｋｍの飛び道具がないと絶対勝てないからな。
きっと始まると同時に空に逃げて、遠距離からプチプチと攻撃してくるぞ」

「それだたら私絶対に勝てないアルよ！？」

「そうなったら真名頼みでござるなぁ」

「“プチプチ”ィ？　ありえんな。
ネギだったら、それこそマグナム弾を使って『千の雷（キリアキブル・アストラペー）』を“ブチブチ”と虫を踏み潰すように連射してくるだろうよ」

「ネギ先生だったらそうでしょうねぇ……」

み、皆ネギに対してに言いたい放題言っているわね。普段見ているネギとはギャップがありすぎて違和感を感じちゃうわ。

ネギったら、エヴァちゃん達にいったい何をしたのかしら？

「ところでマグダウェルがさっき言ってた、『闇の咸卦法』って何なんだ？

何だか名前からして物騒な感じがするんだけど……」

「ん？　ネギ先生が開発したオリジナル技法だよ。

オリジナルといっても既存の技法を2つ組み合わせたものなんだが、その2つの技法は『闇の魔法（マギア・エレベア）』と『咸卦法』という究極技法（アルテマアート）と呼ばれるほど難易度の高い技法でな。

その2つを組み合わせるなんて、おそらくネギ先生にしか出来ないだろう」

「さっき学園長室で長谷川さんのニキビを治したのがそれですよ。

『咸卦法』は私達のような武人が使う“気”と、魔法使いが使う“魔力”という2つの相反する力を融合させ、爆発的な力を得ることが出来るものです」

「『闇の魔法（マギア・エレベア）』は私が６００年前に編み出したものだ。ネギは言い伝えに残っている私の逸話から自己流で再現したらしい。
簡単に言えば、攻撃魔法を自らの肉体に取り込むことによってのブーストといったところだ。ネギは主に回復魔法を肉体に取り込んでいるがな。
その２つを組み合わせた『闇の咸卦法』は、“気”と“魔法”を融合させて、自らの肉体に取り込むものだ」

「“気”と“魔力”ではなく、“気”と“魔法”ですか……？
いろんなものがあるのですね」

「それは追々教えてやる。
ただ、確かに長谷川千雨の言うように、“闇”と名がつくだけあって扱いが難しい。
私のような人外の闇の眷属でないと闇に飲まれてしまい、私と同じ人外の闇の眷属になってしまう可能性もあるな」

「ちょっと！？　そんなの使ってネギは大丈夫なの！？」

その“闇の眷属”っていうのがどういうものかはわからないけど、人間じゃなくなっちゃうって……。
ネギったら大丈夫なのかしら？

「安心しろ。取り込むのが回復魔法なためか、『咸卦法』を併用しているためかもしれんが、ネギ本人は至って健康だ。侵食されたような気配は欠片もない。
『闇の魔法（マギア・エレベア）』を扱うためには善も悪も全てを飲み込む度量が必要なのだが、ネギにはそういう度量はあるみたいだしな」

「ふーん、確かにネギ先生は度量というか度胸というか、悠然としている感じはあるな。
というか、ネギ先生は本当に１０歳なのか？　年齢詐称してるんじゃないかと思うときがあるんだが……」

「私もそれは不思議に思ったことあるが、正真正銘の１０歳だよ。しかも数えでな。
要するに、実年齢は今のところまだ９歳だ」

「アヤ？　それ本当アルか？」

「９歳でそこまでとは……。
ネギ坊主は凄いでござるな」

「おいおい、前から思っていたけど、ネギ先生ってマジでチートだなぁ。
何か欠点はないのかよ？」

大丈夫ならそれでいいけどさ……。
でもやっぱり心配ねぇ。ネギに確認しておきましょうか。

……それにしても、ネギの欠点ねぇ。
そういえば思いつかないわね。
私達に勉強教えれる位頭が良くて、桜咲さん達に勝てるぐらい運動神経が良くて、２－Ａの皆に好かれる位人当たりが良くて、料理も出来るし、裁縫も洗濯も……。

アレ？　私って、ネギに勝ってるところなくない？

「ネギ先生の欠点は、魔法関係者なのに魔法関係の常識を持っていないことだな」

「いや、一応常識は持っているだろう。
勘違いしていることが多そうだが……」

「やはり一度、ネギとは常識というものについて話し合った方が良いみたいだな」

「なら、そのときは拙者も同席させて欲しいでござるよ。
拙者は山奥で育った故に、裏の世界の常識には疎いのでござる」

「ん、そうだな。今度ネギを含めて、全員まとめて魔法の世界についての講義をするか。
記憶を消さないというのなら、関わる気がなくても知っておいたほうがいいこともあるからな」

「……私もかよ。
裏の世界について聞いたら、もう戻れなくなるなんてことはないだろうな？」

「そんなことはない。騒ぎ立てずに知らん振りしていれば平気だ。
裏の世界といってもピンキリでな。タカミチのようにＮＧＯに所属して軍人紛いのことをやっているのもいれば、魔法薬の原料に使う薬草栽培なんかで表の世界の農家とほとんど同じ生活をしているのもいる。
確か、ガンドルフィーニ……学園長室にいた背の高い黒人の男のことだが、奴の妻は一般人のはずだ。結婚するときに事情は話しているだろうがな」

「魔法使いの人でも一般人と結婚することがあるのですか？」

「そ、それだったら、ネギ先生（せんせー）も一般人と結婚する可能性も……

？」

「……あるにはある。

まぁ、どうしても最初は事情が話せないから、隠し事しているのと同じだからな。そのせいで浮気とか、変な風に勘繰られて喧嘩になりやすいらしい。黙っているのも罪悪感が沸くだろうし。

そのために、なかなか結婚まで辿り着けないらしいな」

「（……刀子さんは今のところうまくいってるみたいだけどなぁ）」

「それと、拒絶されるというのが怖いのかもしれないな。

もし、結婚するに当たって事情を話し、その結果拒絶されたり魔法使いの存在をばらされそうになったら、相手の記憶を処置しなければならん。

誰だって惚れた相手の記憶を弄りたくはないだろう？　結婚という最後の一歩を踏み出せずに別れることも多いらしい」

「……それは、悲しいです」

「そうやねぇ。

ウチだったら耐えられないわ」

「……あとは、そうだな。

葛葉刀子が西の出身だから、西洋魔術師とは違った視点から……
…いや、近衛木乃香。
お前は春休みに里帰りするな？」

「うん、そうやで。お父様とこれからのことについて直接会って話してみたいと思うんや。
せっちゃんが言うには、ネギ君とエヴァちゃんも着いて来てくれるらしいけど、本当なん？」

「まぁ、私は観光目的でお前の護衛はついでだがな。
それならコイツラ全員も連れていくか。西洋魔術師の視点でだけではなく、日本古来からの呪術師の視点からの意見も聞いたほうがいいだろう」

「大丈夫なのですか？
東西の仲は悪いのでは？」

「お前達は西洋魔術師からの被害者だからな。

「ひょんなことから裏の世界の事情を知ってしまったのですが、記憶を消されるのは嫌ですし、関東魔法協会の説明だけではそれが本当かどうかわかりません。
もしかしたら関東魔法協会にとって都合の悪いことは隠されて説明され、私達は騙されているかもしれません。
そこで関東魔法協会と仲の悪い関西呪術協会からも話を聞いて、本当かどうか確認したいと思います」

とでも言えば、むしろ嬉々として教えてくれるだろうよ。
へたしたら、逆に勧誘されるんじゃないか？」

主な加害者はエヴァちゃんだけどねぇ～。
服を弁償してもらわなきゃいけないわね。

それに京都かぁ～。
この前、ネギが京都旅行のパンフレット見てたっけ。

「……それは、確かにそうだな。
別にネギ先生を疑うわけじゃないけど、ネギ先生はまだ子供だからな。もしかしたらネギ先生も騙されているかもしれないし。
学園長達だけでなく、中立……というには敵対的だが、外部からの話も聞いておきたいな」

「ウム。冷静な考えだ、長谷川千雨。
旅費についてはジジイに頼めばいいだろう。嫌とは言うまいよ。
難しいことは考えずに、ただの京都旅行と割り切って楽しむのもいいさ」

「むしろその話を学園長にして、駄目だと言われたら学園長達は何か隠していると思ってもいいな。

何にせよ、学園長達が私達をどう思っているのか測る試金石になりそうだ。

……タダで京都旅行出来るのも美味しいし」

「よし、そのときは私も護衛として着いていってやろう。
なぁに、依頼料は学園長に請求するから安心しろ」

「龍宮、便乗しようとするな。
（……元から、里帰りのときのお嬢さまの護衛の手伝いを頼むつもりだったから丁度いいけど）」

「京都ですか。
神社仏閣巡りとか出来ますかね？」

「ゆえはそういうの好きだもんね～」

「日本人なんだから、西洋魔術ではなくて日本の呪術を学びたいと思っても構わん。
どうせ春休みまでは基礎中の基礎だけで精一杯だからな。取り返しがつかなくなるということはないだろう。
神楽坂明日菜や長谷川千雨も、願い事はそれまで待ってからの方が良いかもしれんな」

「じゃあ、春休みはここにいる皆とネギ君で京都旅行やな！？
うわ～、何か今から楽しみや」

「ネ、ネギ先生（せんせー）と旅行！？」

「（……これは、のどかとネギ先生の仲を進展させるチャンスですね）」

京都旅行かぁ。うん、いいわねぇ。
新聞配達の当番を休めるようにお願いしておかないと。

……それと、いいんちょ達にばれないようにしないといけないわね。
ネギも一緒に行くなんて聞いたら、絶対着いてくるだろうし。

第二十五話　弟子入れられ（強制）（後書き）

テレレレッレッテッテー！（ドラクエ風に）
ネギは現実を知ることが出来た（フリをした）。

もちろん、今までのことはわざとで、最初から知ってましたけどね。

本屋とゆえっちの強化フラグが立ちました。
明日菜よりは才能はないと思われるので、あくまでも小ボスクラスです。

京都旅行フラグが立ちました。
フェイトが西に来る前に終わらせる、というわけではありませんのでご安心を。

そしてハーレム要員が多すぎたかもしれません。会話文が多すぎますね。
今回、茶々丸とかさよとかセリフないですよね。さよはモブに脱落するかも。

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた
カモ：去勢された
鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち
エヴァンジェリン：紅茶吹かされた
バカレンジャー：勉強地獄
学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血
さよ：知らないうちに成仏させられるところだった
魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という“諦観”
↑　ｒａｎｋ　ｕｐ！
愛衣：幼児退行させられた
高音：露出狂の嫌疑かけられた
刀子：露出狂の嫌疑かけられた
バレーボール：破裂させられた
タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ
刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任
明日菜：失恋

第二十六話　好感度ランキング　乙女達→ネギ

――――ガンドルフィーニ――――

「……なるほど、『完全魔法無効化（マジックキャンセル）』とはこういうものですか」

「何でネギ君が『完全魔法無効化（マジックキャンセル）』を使えるのさっ!?」

「……えーっと、……“何となく”？
でも、僕の『完全魔法無効化（マジックキャンセル）』は、昔に本で読んだ『完全魔法無効化（マジックキャンセル）』とは何だか違いますね。効果が薄いみたいですし、意識しないと魔法を無効化出来ません。
もうちょっと練習すればうまくいくかもしれませんが。

……モビルスーツの装甲や盾は、無意識に『完全魔法無効化（マジックキャンセル）』を応用していたのかな？」

「“何となく”で魔法世界でも数少ないレアスキルを使わないでくれっ！
（あれ!?　でも血筋的にはおかしくないのか!?）」

すまない、娘よ。お父さんはここまでのようだ。
小学校にも上がっていないお前を残して逝ってしまうのを許して欲しい。
妻よ、私達の娘のことを頼んだぞ。
私は君達のことを愛していたよ。

「……グハァッ！！！」

「ガ、ガンドルフィーニ先生まで！？
僕を残して逝かないでください！　ネギ君の相手は僕一人じゃ無理ですよ！！！」

高畑先生、君も疲れたろう？　私も疲れたんだ。
何だかとても眠いんだ、高畑先生……。

「ガンドルフィーニ先生、こんなところで寝ると風邪引いちゃいま

すよ。
　他の皆さんも床に突っ伏して寝てますけど、お疲れなんですかね？」

「……ネギ君。お願いだから君はもう黙っていてくれ……」

　ゴメン、もう無理。

――綾瀬夕映――

「ぶっちゃけた話、ネギ先生はどう凄いのですか？
素人の私達にはよくわからないのですが……」

「んー、あれだ。
“片足が沈む前に片足を出すの繰り返してたら水の上歩けました”ぐらい凄いな」

その例えではよくわかりません。

「あー、そんな感じだな」

「ネギ先生は三段論法で物事を考えるところがありますからね。
『闇の咸卦法』を開発した時だって、

『咸卦法』は“気”と“魔力”の合成
←
『闇の魔法（マギア・エレベア）』は“魔法”を体内に取り込む
←
じゃあ、その二つを組み合わせたらどうなるんだろう？

という感じで開発したらしいですから」

「何でそれで「じゃあ～」という発想が生まれるんだ、ネギは？
というか、何でそれで『闇の咸卦法』を開発出来たんだ？」

「ネギ先生だからだろう。

私は理解するのは諦めた」

「……まぁ、柔軟な発想が出来るという点は、間違いなくネギの長所なのだがな。

『闇の咸卦法』は私にも出来ないし、特に『咸卦治癒（マイティガード）』は直接触れなければならないという制限があるとはいえ、治癒魔法としては最上級だろう。

お前達がどんな魔法使いになりたいのかは知らんが、治癒魔法だったらネギに習った方がいいな。私は不死身なせいで治癒魔法使わないから得意じゃないんだ。

適性もあるから、好みの魔法を使えるようになるかはわからんが」

フム、治癒魔法ですか。

ファンタジーのような魔法も使ってみたいとは思いますが、実生活に役立つのは明らかに治癒魔法の方ですね。

それにのどかの性格なら、誰かを傷付ける攻撃魔法というものは使いたがらないはずです。

治癒魔法を勉強するということは、ネギ先生から魔法を教えてもらえて、のどかの性格にあった魔法を学べる。まさに一石二鳥。

ハッ!?　治癒魔法を自らにかければ、睡眠時間を減らして読書の時間を増やせるのでは!?

「不死身、ねぇ。
それにしても、エヴァちゃんが吸血鬼ってどういうことなん？
何で吸血鬼が麻帆良におるんや？」

「そういえばそうだな。
何だかネギ先生のせいで忘れてたけど、マグダウェルは吸血鬼なんだったか。
さっきの話で“封印”とか何とか言ってた気がするが……」

エヴァンジェリンさん。
ネギ先生の説明では６００年を生きた吸血鬼の魔法使いで、ネギ先生が足元にも及ばない凄腕らしいのですが……。
あくまでネギ先生の説明なのですよねぇ。

「まぁ、いろいろあってな。
簡単に言えば、１５年前にネギの父親にこの麻帆良に封印されたんだよ。
『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』という、学校に強制的に登校させられる呪いをかけられてな。

３年経ったら解きに来る、とは言われていたが、結局解きに来ないで奴は死んだ。
それ以来ずっと中学生を繰り返している……」

「うわぁ、15年前ってことはウチらが生まれる前から。
それは辛いなぁ……」

「……エヴァちゃんも苦労しているのねぇ。
私だったら耐えられないわ」

「ネギ先生のお父さんに？
でも、エヴァンジェリンさんはネギ先生と仲が良いみたいですけど……？」

「まぁな。
ネギの父親、ナギがかけた呪いは誰も解くことが出来ず、ずっとこのまま中学生をしていなきゃならんのかと思っていたんだが、ネギが私の呪いを解いてくれることになっているんだよ。
さっきまでネギのことを悪く言ったかもしれんが、ネギには感謝しているよ。
麻帆良の外には出られず、警備員として飼い殺しになっていた私を助けてくれるんだからな。
完全解呪にはまだ時間がかかるみたいだが、春休みには京都旅行に行けるぐらいには改善できるみたいだし」

……なるほど、それをきっかけにネギ先生を狙うようになっていたのですか。
大浴場のときといい指輪のことといい、アスナさんに匹敵するの

どかの障害になる人です。

く、ネギ先生は本当に人気がありますね。

確かにのどか達の気持ちはわかるのですが、ネギ先生はまだ１０歳なのですよ。

というか、アスナさんは高畑先生のことが好きだったのでは……？

「それからはネギにこの別荘を貸してやったり、茶を飲みながら魔法について話し合ったりするような友人付き合いをしている。

……もっともネギは友人だけとは思っていないようだがな、フフフ……」

「……どういう意味かしら、エヴァちゃん？」

「さっきアルちゃんが見せてくれた、ネギが私に抱いてる想いを思い出せばいいさ」

「……ネギ坊主はもてるでござるなぁ」

「お前らなぁ……、ネギ先生は１０歳にもなっていないんだろ？
まぁ、宮崎みたいな奥手には丁度いいのかもしれないけどさ……
…」

「え！？　わ、私はその……」

「そんなこと言われてもな、長谷川千雨。
私にとっては学園長のジジイでさえ、５００歳以上年下なんだぞ」

「それでも１０歳相手にマジになるのはおかしいだろ。
４０歳と２５歳のカップルならおかしくなくても、２５歳と１０
歳のカップルなら犯罪なのと一緒だろ」

「別に今のネギをどうこうしようとは思っておらん。
ネギが食べ頃に熟すまで、最低でもあと５年は……」

「食べ頃言うな！　生々しすぎて笑えねーよ！
逆光源氏計画立ててんじゃねーよ！！！」

た、食べ頃！？
確かに５年もすれば、ネギ先生は今よりも格好良くなっているの
でしょうが！？

「まぁ、その前にネギが私を求めてきたら、答えてやるのもやぶさかではないがな」

「アハハ、ややわぁ、エヴァちゃん。
コッチにはネギ君から女の子と意識されてるせっちゃんがおるんやで？」

「お、お嬢さまっ！？」

木乃香さんまで参戦するのですか！？
しかも桜咲さんと共同戦線！？

の、のどかはどうすれば……。
いくらのどかが可愛い女の子でも、木乃香さん&桜咲さんのタッグに勝てる確率は低いと言わざるをえないです。
こ、こうなったら私がのどかと組んで……って、何を考えているのですか、私はっ！？

「おいおい、近衛も本気なのかよ？
というか桜咲を巻き込んでやるな」

「こ、木乃香お嬢さまがお望みならば、私は……」

「え？　いやいや、冗談やって、せっちゃん。
そんな本気にせんでもええよ。

でもそうやなぁ、……ネギ君はやっぱりまだ弟って感じやわ。
優しいしカッコええからネギ君のことは好きやけど、ウチもまだ恋愛についてはようわかっとらんからなぁ。近くにいる男の子がネギ君だけやから、ネギ君に対する気持ちが恋愛感情かと聞かれても比べる人がおらへんし。
……でも、ネギ君を誰かにとられちゃうのは嫌ってところやな。

……せっちゃんはネギ君どう思ってるん？
何か満更でもなさそうやけど？」

「ええ！？　わ、私ですか……？
しょ、正直に申し上げますと、ネギ先生のことは嫌いではありません。一緒に寝ることが出来るぐらいには……す、好きです。

しかし、恋愛感情かと聞かれると、それはわかりません。
私もお嬢さまと同じく、他の男性との付き合いはあまりないですから……」

「……あー、そうだったな。

ネギ先生は１０歳の子供だけど、考えてみれば私達も１４歳の子供なんだよな。しかも女子中育ち」

「ま、お前らぐらいの年頃ならそうだろう。
お前ら全員ネギに対して多かれ少なかれ好意を抱いているのだろうが、それを“恋愛感情ではない”とハッキリと断言できるのは龍宮マナと長瀬楓ぐらいじゃないか？
大浴場でネギと風呂に入ったとき、お前らネギの裸を見てドキッとしただろ？」

「……えーっと……」

「それは、まぁ……凄かったやね。
ネギ君の裸見たの初めてやったし……」

「ネ、ネギ先生（せんせー）の裸……」

「……ネギって顔は本当に子供っぽいのに、身体は筋肉質で大人っぽくてギャップが凄いのよねぇ」

「な、何アルか！？　ネギ坊主と一緒に風呂！？」

「水着着用で、でござるよ、古。

確かにネギ坊主の肉体は、磨き上げられたガッシリとした筋肉をしていたでござるなぁ」

……い、いや、私も正直ドキッとしてしまいましたが……。

あくまで水着着用でしたので、海に行ったのと同じようなものなのです。

それに裸といっても上半身だけでしたので、その……う、うぅぅ……。

「ネギもそうだが、お前らの年頃では“友愛”と“親愛”と“恋愛”の区別は厳格には出来んだろう。

……フム、アルちゃんの出番だな」

「え？　今度は皆様からネギお兄様への好感度ランキングですか？」

「そうだ。今のお前達は自分の気持ちがわからない状態だ。

アルちゃんの好感度ランキングは、あくまで無理矢理に数値化したものだからそれで全てというわけではないが、それでも自分の気持ちを理解するキッカケにはなるだろう」

「そういうことでしたら構いませんが……」

「面白そうアルな」

「まぁ、ネギ坊主の拙者達への想いを一方的に知るだけではなんでござるからな」

「うむ。今のお前達は丁度、大人と子供の中間ぐらいの年齢だ。そんなお前達が自分の気持ちを知るのは良い経験になるだろう」

「……良いこと言ってるみたいやけど、ライバル見極めるためとはちゃうよね？」

「……そんなことはない」

こっち見てください。

し、しかし、私もなのですか！？

別に私はネギ先生のことを恋愛対象とは思っていないので、わざわざそんな……。

「……はい、出ました。
えーっと、皆様のネギお兄様への好感度は……ハァ、エヴァンジェリン様？」

「……えっ！？　今度は私なのか！？」

「……見たらわかります、どうぞ」

・

	友	親	恋	愛	色	計
明日菜	6	9	7	9	6	37
茶々丸	8	6	7	8	7	36
エヴァ・・・	7	4	8	6	9	34
木乃香	7	8	5	8	5	33
のどか・・	6	3	8	8	6	31
刹那	8	4	5	4	8	29
千雨	4	7	4	6	5	26
夕映	5	3	5	4	5	22
古菲	6	3	3	3	2	17
さよ・	4	4	3	4	1	16
楓・	5	4	1	3	2	15
マナ・・	5	3	2	1	1	12

こ、これは……皆さんやけに“色欲”が高くないですか？　エヴァンジェリンさんの9点って！？
というか、私も“色欲”が5点！？　しかも、“恋愛”も5点！？
ち、違うのです、のどか。
私は別にネギ先生のことは恋愛対象とは思っていないのです！

「やったー！　私いっちばーーーん！
この中だったらネギは私のことを一番好きで、私がネギのことを一番好きなのよ！！！」

「グ、グヌヌヌヌ……。
“親愛”が低いの仇となったか。まぁ、私はネギのことを弟として想いたいわけじゃないしな。
……おい、茶々丸？　お前やけにネギへの好感度高くないか？」

「……いえ、大丈夫です。
マスターは“色欲”では一位となっております」

「というか、１０歳のネギお兄様に“色欲”が９点って……」

「あー、ウチは確かにこんなもんかなぁ。友達みたいに料理について話し合ったりするし、ネギ君のこと弟みたいに想ってるし……。

ウ、ウチもやけど、確かにネギ君に比べて皆やけに“色欲”が高いんやな。やっぱり一緒に風呂に入ってドキッとしたせいなんかな。

エヴァちゃんの９点とか……せっちゃんの８点とか？　……

……せっちゃんお風呂一緒に入ってへんかったよね？」

「５位だけど……“親愛”を抜かしたら、家族として一緒に暮らしているアスナさんと合計点は同点。

私、負けてないよね……」

「……違うんです。

これは違うんです。誤解なんです……」

「いや、桜咲。その言い訳は通らないだろう。

ネギ先生みたいな子供に対して“色欲”８点て……、本気でマズくねぇか、お前？

（……う、私が意外と高い。

別にあのガキのことは嫌いってワケじゃねぇし、２－Ａの連中に滅茶苦茶にされるのは見てられなかったから、いろいろ手助けしてたのが数値に出たのか。

……確かに風呂で見たあの裸にはドキッとしちゃったけどさ）」

「そ、そうです！
“恋愛”と“色欲”に5点もあるのは、大浴場でネギ先生の裸を見てしまって意識してしまっただけなのです！
他の皆さんも“色欲”が高いから、私が高くてもしょうがないのです！！！」

「楓も一緒に風呂に入ったのではないアルか？
私は……まぁ、こんなものアルかね。ネギ坊主のことは普通に好きアルし」

「確かに拙者も一緒に風呂に入ったでござるが、故郷の里には筋肉質の子供はたくさんいて慣れていたので平気でござったよ」

「私にとってネギ先生は恩人ですからー」

「……まぁ、妥当なところだろう」

……それにしてもアスナさんが本当に高いですね。
ネギ先生からの好感度も一番高かったですし、やはり一番の障害はアスナさんですか……。

しかし、何故アスナさんはここまでネギ先生のことを？
アスナさんの好みは“渋いダンディーなオジサマ”で、高畑先生のことが好きだったはずでは？
何故あそこまでネギ先生への好意を隠さないのでしょう？

いくら一緒に暮らしていて、アスナさんが落ち込んだときにネギ先生が慰めてくれて仲良くなったとはいえ、今までの意地っ張りなアスナさんだったら、

「わ、私がこんなにネギのこと好きなわけないじゃない！！！」

とか言いそうなのに……。
それとも委員長さんのように、ショタコンに宗旨替えしたのでしょうか？

「……アスナさん、何があったのですか？
アスナさんは高畑先生のような大人の男性が好きだったはずではないのですか？」

「え！？　べ、別に何もないわよ！」

「そういえばそうだよな。神楽坂は子供が好きじゃないとか言ってなかったか？
ネギ先生と一緒に暮らして情が移ったか？　それとも高畑先生に振られてネギ先生に走ったのか？」

「フン！　ありそうな話だな！
大方あの朴念仁に相手にもされずに振ら……れ……て……？」

……ア、アスナさん？
急に動きを止められてどうしたのですか？
な、何故だか寒気もしてきたのですが……。

「ア、アスナさん……？
顔が……能面みたく……」

「（だからその無表情はやめてほしいでござる！）」

「……」

「ア、アカンよ！　皆！！！」

……え？　マジですか？
高畑先生に振られてしまったのですか？
そういえばアスナさんが一時落ち込んでいたのは知っていましたが、どうして落ち込んだかは知りませんでしたね。

ネ、ネギ先生の性格なら、落ち込んだアスナさんを一生懸命励ますはずです。
もしかしてそれがキッカケで、ショタの道に走ったのですか！？

「ア、アスナ～？　大丈夫……アルか？」

「ワ、ワリィ。冗談のつもりだったんだが……」

「し、知らなかったんだ！
そんなことになっていたとは……」

「アスナ！　気にしたらアカンよ！！！
皆悪気はなかったんやし……」

「……。

……。

……う、うわあああぁぁーーーんっ！！！」

ア、アスナさーーーんっ！？
どこに行くのですかーーー！？

マズイです。
アスナさんが泣いて明後日の方向に走り去っていきました！？
ってか足早っ！？
さすがは春日さんと毎回短距離走で1、2位を争っているだけありますね！

「ア、アスナぁーーー！？
せっちゃん！　楓！　アスナを捕まえてーーーっ！！！」

「わ、わかりました！」

「あいあい、承知したでござるよ」

「足止めはまかせろー」パァッーーーーン！

何故に発砲音！？
龍宮さんはライフル銃を構えて何をしているのですかっ！？

「安心しろ、ただのエアガンだ」

「あ、アスナさんが転んだ」

何だか発砲音がエアガンらしくなかったと思うのですがっ！？
いや、別にエアガンとかの音を良く知ってるわけじゃないのですが……。

というか、転んだアスナさんが動かないんですけど！？

「ん!?　（弾種を）まちがったかな……」

そんな冷静に!?

と、とりあえず急いでアスナさんを助けないと……。

転んだままのアスナさんに近寄ってみると、ちゃんとアスナさんの泣き声がします。

……よかった。（精神的にはともかく身体的には）無事だったんですね。

まぁ、ふくらはぎに弾が当たったような赤い跡がありますけど……。

「……ヒック……ヒック……。

……いいもん。私にはネギがいるもん。ネギは私に優しくしてくれたもん……」

……うわぁ。アスナさんマジ泣きです。
どんだけ高畑先生からこっ酷い振られ方をされたんですか？

「……こうなったらネギのお嫁さんにしてもらうもん。ネギは私のこと魅力的って言ってくれたもん……。
だから……だから、高畑先生なんて……高畑先生なんて……
…ヒック……う、うわあああぁぁーーーんっ！！！」

「はいはい、辛かったやねぇ。
大丈夫やよ。ネギ君ならきっとアスナをお嫁さんにしてくれるで。
だから、ホラ。もう泣かんとき……」

「ご、木乃香（このか）ぁ～～～！！！」

「アスナさん！　大丈夫です！！！
アスナさんは魅力的な女の子です！！！」

「……うん。やっぱり今は思いっきり泣いてええよ。
考えてみたら、この失恋でアスナが泣くの初めてやね」

「……変な話題振って申しわけありませんです」

「マジで悪かった。……本当にごめん」

「あ、あ～……、泣きたくなったらこの別荘を使ってもいいぞ。いつでも遊びに来い。だから元気出せ、な？」

堰き止めていた想いが溢れ出したのか、アスナさんは全然泣き止む様子はなく、むしろどんどん酷くなっていきます。

いや、本当にごめんなさいです。

……こ、こんなアスナさんを見ていたら、のどかの応援をしづらくなりますね。

のどかもアスナさんを見て思うところがあるのか、涙ぐんで木乃香さんと一緒に慰めていますし……。

ああ、恨みますよ高畑先生。こんなのどうしろというのですか？ネギ先生に担任の座を奪われるぐらい出張行ってたり、魔法使いなのに魔法を使えなかったり、アスナさんをここまで泣かせたり……もう高畑先生はまるで駄目なオッサンでしかありませんね！

略して“マダオ”ですよ！

――――高畑・T・タカミチ――――

「それじゃあ、僕はエヴァさんの家に行ってみますね」

「……うん。アスナ君たちによろしく言っておいてね。土日は忙しいから、何か質問があったら月曜日に聞いてくれ、と伝えておいてくれ。

それと『完全魔法無効化（マジックキャンセル）』のことは他の人には秘密にしておいてほしい。魔法世界でも確認されているのが少ないレアスキルだからね。よからぬことを考える人がいるかもしれない」

「わかりました。まずは僕が自分で一通り調べてみてから、『完全（マジ）魔法無効化（ックキャンセル）』の詳細を明日菜さんに教えますね。

それじゃあ、おやすみなさい。タカミチ」

「……うん、おやすみ。ネギ君……」

……ようやく終わった。

家に帰ろう。そして土日は寝て過ごそう。

出張明けで土日は休みを貰っているから、ゆっくりと過ごせるはずだ。

僕だって、たまには自堕落な時間を過ごしてもいいはずだ。うん、そうしよう。

……これからは、胃薬を家と学校の机に常備しておこうかな。

とりあえず今は学園長の胃薬を貰っとこうか。

えーっと、……あったあった。これか“徳用胃薬”。

大容量な入れ物だな。学園長も苦労しているんだなぁ……。

第二十六話　好感度ランキング　乙女達→ネギ（後書き）

何か勘違いしていた人もいらっしゃるかもしれませんが、まだネギのバトルフェイズは終了していなかったぜ！

そして誰も覚えていられないかもしれませんが、一応ネギも『完全魔法無効化能力（ジックキャンセル）』を神様？から貰っています。（ママ）

タカミチは自分が知らないところでマダオとなりました。

タカミチの株価は現在、ロープレスバンジージャンプ中です。

ちなみにアスナは失恋していなければ、“友愛”以外の点数はそれぞれ2～4点は低かったです。

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた
カモ：去勢された
鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち
エヴァンジェリン：紅茶吹かされた
バカレンジャー：勉強地獄
学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血
さよ：知らないうちに成仏させられるところだった
魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という“絶望”

↑　ｒａｎｋ　ｕｐ！
愛衣：幼児退行させられた
高音：露出狂の嫌疑かけられた
刀子：露出狂の嫌疑かけられた
バレーボール：破裂させられた
タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ＋“マダオ就任”　↑ｎｅｗ！
刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任
明日菜：失恋

第二十七話　一段落

――――ネギ・スプリングフィールド――――

「ネギ～。早く寝ましょう」

「むぅ～。明日はうちの番やからな、アスナ。
……ウチもせっちゃん呼んで一緒に寝ようかなぁ」

はいはい、わかりましたよ。大人しくベッドの中で待っててくださいね、明日菜さん。

あの後エヴァさんの家に向かったら、明日菜さん達が寮に戻るところに出くわしました。
別荘の中で2日ほど過ごしていたそうです。
何を話していたかまでは。女の子同士の秘密らしいですが。

そして口止め料のお願いは、やはり宮崎さんと綾瀬さんは魔法を習うこと。長瀬さんと古菲さんは僕達との修行。

明日菜さん、木乃香さん、長谷川さんはまだ保留。春休みに僕達と一緒に京都に行き、関西呪術協会からも話を聞いた後で決めるそうです。

「術式兵装『咸卦治癒（マイティガード）』」

「へぇ、この前も見たけど、やっぱり凄いわねぇ」

「この前言うても、実際には4時間ぐらい前なのがおかしいやね。魔法って本当に凄いなぁ」

「……わかっていると思いますけど、他の人には言わないでくださいよ」

「わかってるわかってる。
ホラ、おいで。ネギ」

「大丈夫や、エヴァちゃんにもキツク言われたしなぁ」

明日菜さんやけに嬉しそうですねぇ。何か良いことでもあったんでしょうか？

それとも『咸卦治癒（マイティガード）』の効能が目的？

「それじゃ、電気消すで。
おやすみ、アスナ、ネギ君」

「おやすみ、木乃香」

「おやすみなさい、木乃香さん」

今日はいろいろなことがあって、僕も精神的に疲れましたね。まさか、こんな風に魔法バレするとは……。
宮崎さんみたいな人には、あまり危ないことに関わって欲しくないんですけどねぇ。

まぁ、これでもう猫被る必要なくなったから、これからは楽っちゃ楽なんですけど。
学園長達も僕のことを受け入れ（あきらめ）てくれましたし、京都編に向けて修行を頑張りますか。
今から鍛えれば、古菲さんも十分すぎるほど戦力になりますしね。

「エへへ～～～♪」

そして明日菜さんがご機嫌良すぎです。
抱きしめられて頬ずりされてます。

本気でどういうこと？

「アスナ～。ご機嫌なのはええけど、騒がれるとウチ眠れんよ」

「……ちょっとぐらいいいじゃない」

「明日菜さん、どうしたんですか？
何かいつもと違うんですけど……」

「あ～、エヴァちゃんの別荘でいろいろあってなぁ……。
（アルちゃんから好感度ランキング見せてもらったのは、絶対に秘密にしとかなアカンなぁ）」

「う～ん、『咸卦治癒（まいていがーど）』って本当に気持ち良いわねぇ。

桜咲さんやエヴァちゃんが寝ちゃうっていうのもわかる気がするわ」

「……そうですか」

「アスナぁ～」

「……とりあえず、木乃香さんに迷惑でしょうから、音が漏れないようにベッドに結界張りますよ。
それだったら木乃香さんも眠れるでしょう」

「え？　それだとアスナがネギ君に何するかわから

内外の音を遮断する結界を展開。
これで木乃香さんはゆっくり出来るでしょう。

「……あれ？　本当に木乃香の声が聞こえなくなったわね」

「振動は伝わりますから、暴れたりすると迷惑になりますけどね。
ところで明日菜さん、何かあったんですか？」

「別にぃ～。ただ『咸卦治癒（まいていがーど）』ってのが気持ち良いだけよ。ホラ、『咸卦治癒（まいていがーど）』は、くっつけばくっつくほど効果が上がるんでしょ？　ネギも私に抱きついてきなさいよ」

「え？　でもさすがに女性に抱きつくのは……」

「……桜咲さんには抱きつけるのに、私には抱きつけないのかしら？」

「喜んで抱きつかさせて頂きます」

殺気感じました。

アレ？　何で刹那さんと抱きしめあって寝てるの知ってるの？
刹那さん話しちゃったんですか？

というか、何で明日菜さんがそれで怒るの？

「ねぇ、ネギ？」

「何ですか？」

「私のこと好き？」

「……は？」

「だから……私のこと好き？」

「……えっと、明日菜さんのことは好きです。
というか、嫌いな人と一緒に寝れるほど人間出来てませんし……
…」

これは本当。
アスナさんのことが好きでしたが、明日菜さんのことも好きです。

クールで知的なアスナさんと、明るくて生き生きとしている明日菜さん。
２人ともそれぞれ違った魅力があって、どちらかなんて選べないぐらいに好きです。

アスナさんの微笑も明日菜さんのカラッとした笑いも、頭を優しく撫でてくれるアスナさんも頭を強く撫でてくれる明日菜さんも。
僕は2人の明日菜（アスナ）さんのことが大好きです。

「そう？
ありがとう、私もネギのこと好きよ」

「……はぁ、ありがとうございます」

タカミチとの一件から弟のように可愛がってくれるのはいいですけど、明日菜さん最近ブラコンの境地に達してきていますね。
かいぐりかいぐり、と頭を撫でられて抱きしめられて頬ずりされて、何というか揉みくちゃです。

「……明日菜さん、ちょっと苦しいです」

「あ、ゴメンね。
でもネギの方からもちゃんと抱きついてきてよ。恥ずかしがらないでいいからさ」

「わかりました」

「……恥ずかしがらなくてもいいけど、別に恥ずかしがってもいいのよ？」

「明日菜さんが何を言ってるのか本気でわからないんですけど？」

「別にぃ～。
桜咲さんに抱きつくときは顔が真っ赤になるぐらい恥ずかしがるのに、私に抱きつくときはそうじゃないんだなぁ、と思っただけよ」

「……初めて明日菜さんと一緒に寝たときって、そういうことを気に出来る状況じゃなかったと思いますけど。
それから最近までずっと一緒に寝てましたからね。もう慣れちゃいましたよ」

「う～……。それはそうなんだけどさぁ」

やっぱり刹那さん話しちゃったみたいですね。
これが女の子同士の秘密の話って奴ですか……。

怖いなぁ。女の子同士の秘密の話って。
女子中の教師やるときから覚悟は決めてましたけどねぇ。

「刹那さんが僕と寝ることで真っ赤になっちゃって、それにつられて僕も意識しちゃっただけですよ。
故郷の従姉とか明日菜さんとか木乃香さんはそういうのなかったですからね。あそこまで恥ずかしがられるなんて慣れていませんでしたから」

「ふ～ん。
そんなこと言うってことは、ネギにとって桜咲さんは特別なのかしら？」

「特別、ですか？　そういうつもりはありませんけど？
むしろ２－Ａの皆さんは僕にとって全員特別です」

「……そういう意味じゃなくて、桜咲さんに意識されちゃったからネギも意識しちゃったんでしょう？
やっぱりネギも男の子なんだから、桜咲さんのことを……えっちな目で見たりしたんじゃないの？」

「そんなことはないですよ。

抱きしめられるのは慣れていても、抱きつくのには慣れていませんでしたからね。正直、刹那さんに恥ずかしいと言う気持ちを抱いたのは確かですし、抱きついたときに“気持ち良いなぁ”、ぐらいは思いましたけど。
でも最近はもう慣れてきました」

「ふ～ん。
だったら、私に抱きついたら気持ち良い？」

「え？　それはまぁ……そうですけど」

「ちゃんとハッキリ言いなさい」

「……えと、明日菜さんに抱きついたら気持ち良いです。
明日菜さんに抱きついたら柔らかくてあったかいです。良い匂いもします」

「そ、そう！？
……じゃあ、もっと強く抱きついてきてもいいわよ」

はあ……。
本当に明日菜さんに何があったんでしょう？

とりあえず、言われた通りに強く抱きつきますか。
……そういえば、抱き枕には良くされていたけど、僕から明日菜さんには抱きついたことなかったなぁ。

――神楽坂明日菜――

……嘘ついてる様子はないわね。
もしかして、元々は桜咲さんに対する“色欲”は1以上あったのに、慣れてきたせいで1まで下がっていたのかしら？
それなら少し安心できるんだけど……。

私に抱きついてきても顔を赤くしたりしないし、やっぱりアルちゃんが言うようにそういうことにまだ興味がないのかしら？

「……エヴァさんの指輪ですか？

確かにアレは僕が贈ったものですね。エヴァさんには別荘の件でお世話になってますし、春になったら花粉で悩まされるみたいですからね。

あの指輪で魔力を少しでも出せるようになれば、花粉症とかに悩まされなくても済むはずです」

「でも何でわざわざ指輪なのよ？
魔法具って指輪しかないの？」

「いえ、腕輪型とかイヤリング型とかもありますよ。
でもそれらだと校則違反になるかもしれませんし、そもそも選んだのはエヴァさんですよ」

「……桜咲さんの言ってたことは本当だったのね」

「？」

「何でもないわよ」

エヴァちゃんたら自分からリクエストしたものなのに、あたかもネギが自分から選んでプレゼントしたような言い方しちゃって。
それに比べて私は毎日のように勉強見てもらってるし、こんな風に一緒に寝れるもんね。

「そういえばネギ。ドネットさんてどういう人なの？
アルちゃんに聞いたらネギのお祖父さんの秘書みたいな人で、“年上の綺麗なお姉さん”らしいけど？」

「ドネットさんですか？　そうですね、そんな感じの人です。
ドネットさんは出張で麻帆良に何回か来たことがあって、僕が麻帆良に来ることになったときに麻帆良のことを聞かせてもらったりしました。
明石教授の亡くなられた奥様とは友人だったらしく、裕奈さんが小さい頃に会ったこともあるらしいですね。裕奈さんが憶えているかどうかは知りませんけど」

「え？　ゆーなのお母さんの友達？
ドネットさんっていくつなの？」

「……直接聞いたことはないから正確な年齢はわかりませんけど、４０前後だったと思います。
僕の『咸卦治癒（マイティガード）』でアンチエイジングしたこともあって、２０代前半と言っても信じれますけどね」

「４０歳なのに“年上の綺麗なお姉さん”なの？」

「……明日菜さんは僕に死ねというのですか？
よくしてもらっていて若く見える女性に向かって、“おばさん”なんて言えるわけないですよ……」

なーんだ、ただのお世辞なのね。よかったよかった。
ネギってフェミニストだから、女性に悪い言葉は使わないからねぇ。

っていうか、『咸卦治癒（まいてぃがーど）』って本当に凄いのね。
４０歳の女性を２０代前半に見せれるなんて……。

それに気持ち良いし。
いいなぁ、これ。あったかーい。

ギュゥーっと、ネギを抱きしめれば抱きしめるほどネギの心地良さが伝わってくる。
それにネギも私に抱きついてくるから、もっともっと心地良い。
ネギが自分で抱きついてくるのって、これが初めてよねぇ。

無意識に抱きついてくるときもあるけど、擦り寄ってくる感じであまり強く抱きついてこないし……。

皆も言ってたけど、ネギの身体ってガッシリしてるわよねぇ。
プニプニと柔らかくて頼りない感じじゃなくて、弾力があるけど固くなくて感触がシッカリとわかる身体。

しかも、肌も荒れてなくて触ると気持ち良いのよね。ツルツルの卵肌というわけじゃないんだけど、シットリしてるというか。うらやましいなー。
特にこの脇腹辺りの感触が良いのよねぇ。筋肉の弾力と肌のシットリさとか一辺に味わえて。何気にお腹が割れているのもわかるし。
いいないいなー。

……あっ、コラ。身体を捩らないの。

身体の方は筋肉質でガッシリしてるけど、顔はプニプニして柔らかいのよねぇ。
頬ずりしたら気持ち良いし、シャンプーの良い匂いもする。
ああ、もう絶対に手放さない。ネギはずっと私の抱き枕にする。

……でも、明日は木乃香に貸さなきゃいけないのよね。
まぁ、エヴァちゃんの別荘では木乃香に迷惑掛けちゃったし、しょうがないか。むぅ～。

だから、今日の内にネギの感触を精一杯感じておきましょう。
あったかいなー。良い匂いするなー。気持ち良いなー。
ああ、もう大好き！

……いいもん。もうショタコンでいいもん。
ああ、いんちょの気持ちが今ならわかるわ。
私はあそこまで見境無しじゃなくて、ネギ一筋だけど。

ネギも私のこと好きって言ってくれたしね。
まぁ、“姉”とかそういう感じでしか見てくれてないのかもしれないけど、一緒にいれるならそれでいいもん。

――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル――

prrrrr……、prrrrr……、prrrrr……。

なかなか繋がらんな。何をしているのだ、タカミチは。

……お、繋がった。

「……何だい、エヴァ。こんな朝っぱらから」

「朝っぱらって、もう10時だぞ。吸血鬼(わたし)より遅く起きてどうする。昨日のネギの説得がうまくいったかどうか学園長室までジジイに聞きに来たんだが、ジジイがいなくてな。どこにいるか知ってるか？」

「出張明けであんなことがあったんだ。寝坊ぐらい勘弁してくれ。ネギ君の説得なら成功したよ。学園長は途中で血を吐いてリタイヤしたけどね。学園長は今頃病院じゃないかな？」

……カーペットの血を拭いた跡はそれのせいか。

ストレスで胃に穴でも開いたのか？

「そうか、結局あの後ネギとは会わなかったからな。どうなったのか心配だったんだ。
説得が成功したのなら何よりだ」

「……そうかい。ネギ君はエヴァの家まで行くようなこと言っていたけどね。途中でアスナ君たちに会ったのかな？
何にせよ疲れてるんだ。今日ぐらいは休ませてくれ……」

本当に死にそうな声しているな。説得に苦労したんだろう。
月曜の放課後から出張して、戻ってきた直後にアレだからな。無理もあるまい。

「わかった。説得に成功したなら良いさ。
ただ、もう一つ聞きたいことがあるんだが……」

「手短に頼むよ、……ファ……」

「電話の最中に欠伸をするな。
……聞きたいこととは、学園長室に倒れ伏している魔法先生のことなんだが？」

ガンドルフィーニとか葛葉刀子とか……あのとき揃っていた魔法先生が学園長室で倒れこんで寝ている。
いったい何があった？

「魔法先生？
……あー、いけない。忘れてた。
皆、説得の途中でバタバタと力尽きていったんだよ」

「“忘れてた”、ってお前……。
説得終わったら、途中で力尽きたコイツラを放って帰ったのか？」

「ゴメン、あのときはもう意識朦朧としていたから。
悪いけど、エヴァ。皆を起こしてやってくれ、頼むよ。それじゃ」

「お、おい！　ちょっと待「ブチッ！」て……」

……タカミチの奴、電話を切りおった。
あのタカミチがあんなに疲労するなんて、どれだけ説得が大変だったんだ？

それにしても今の頼み方はないだろう、マダオ風情が……。

「如何しますか？　マスター？」

「……茶々丸はお茶かコーヒーでも淹れて来い。
私はその間にコイツラを起こしておく」

「わかりました」

さすがにこのまま放っておくのは目覚めが悪いしな。
まったく、何で私がこんなことを……。

ホラ、起きろ。ガンドルフィーニ。
起きて他の起こすの手伝え。

「立った。娘が立った。
……まだ1歳なのに、もう立ち上がれるなんて凄いなぁ……
フフフフ……」

……気色悪い。寝ながらニヤニヤと笑ってるぞ、コイツ。

昔の夢でも見てるのか？

何か触るのは嫌だから、水でもぶっ掛けるか。

第二十七話　一段落（後書き）

……明日菜が壊れた？
（・３・）アルェー？　何でこうなったんだろ？
何か止まりませんでした。

まぁ、いいや。
安西先生、イチャイチャ甘い話が書きたいです。
アニメ版の化物語第１２話“つばさキャット　其ノ貳”とか大好物です。

ヤツベエ。モノスゴク甘イ話書キタイ。
洒落ニ成ラナイグラヰノ話ヲ。

そしてタカミチがマダオ道爆走中。

これにて一連の魔法バレについてのお話は終了です。
まだちょこっと期末テストとかありますけど、それが終わり次第に京都編に突入します。あと数話です。
それとエヴァとのデートは京都旅行後の予定です。

前回のネギに対しての好感度ランキングの“色欲”は、
“短パン、ランニングシャツ（裾捲くれてヘソ見え状態）のネギと昼寝させたら、いったいどういう行動をとるか？”
というシミュレートしたところこうなりましたw
“色欲”５点の人達：興味深々にネギが起きない程度に身体を触る
“色欲”６点の人達：興味深々にネギが起きない程度に身体をまさぐる
“色欲”７点の茶々丸：“ネギと触れ合いたい”、“ネギを感じたい”という気持ちが強い
“色欲”８点のせっちゃん：鼻血でネギを赤く染める
“色欲”９点のエヴァ：「エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マグダウェル、吶喊します！！！」

こんな感じですw
せっちゃんもムッツリスケベタイプだと思います。
明日菜は“色欲”よりも人肌恋しの気持ちの方が強いですから、まだ暴走はしませんね。

ちなみにネギが逆の立場だったとしたら、
「何やってんだか、この女子中学生は？」

と呆れる気持ちの方が強いですね。

第二十八話　立入禁止

――近衛近右衛門――

久しぶりにネギ君の顔を見る気がするの。
まぁ、半月ぐらい入院していたから当たり前じゃが。
もうワシも年かのぉ……。

「お久しぶりです、学園長。
お体の具合はよくなったのですか？　何でしたら『咸卦治癒（マイティガード）』で治療しますけど？」

「フォッフォッフォ、もう平気じゃよ。
先日はスマンかったの。みっともない姿を見せてしもうて」

「いえいえ、ご迷惑掛けたのは僕の方みたいですし、お気になされることはありません。
むしろ今まですっと勘違いしていた僕の方が謝らなければ……」

「構わん構わん。
１０歳の君が思い違いしたとしても誰も責められんよ。今の時点で思い違いを正せたことを喜ぶべきじゃろ」

……本当にのぉ。
いやぁ、あのときは本気で死ぬかと思ったぞい。目の前が真っ暗になって、気づいたら病院のベッドの上じゃったからな。

曾孫の顔を見るまでは死ねんというのに。

「エヴァさんが裏の世界についての常識を木乃香さん達に講義するのにも参加して、現実というものをようやく理解できたと思います。“幻想空間（ファンタズマゴリア）”での全力のエヴァさんと手合わせで、僕の強さというのも理解できましたし。

……僕って強かったんですね」

「ああ、“幻想空間（ファンタズマゴリア）”なら、今の封印されているエヴァでも全力を発揮できるからの。

……そして現実を理解してくれて何よりじゃ。いや、ホントに」

……先日エヴァから愚痴られたアレか。モビルスーツ禁止での戦い。

まぁ、愚痴3：惚気7といった感じじゃったがの。

接近戦に持ち込んだら神鳴流の技で互角以上に戦われるわ、
中距離で落ち着いて戦おうとしたら『居合い拳』飛んでくるわ、
遠距離で魔法合戦したら『千の雷（キリアキプル・アストラペー）』を釣瓶打ちされるわ、
障壁張っても『斬魔剣・弐の太刀』で障壁無視されるわ、
糸を使っても重力魔法で妨害されるわ、
苦労して良い一撃入れても『咸卦治癒（マイティガード）』で数秒で回復されるわ、
等々、踏んだり蹴ったりな目に遭ったというアレか。

結局、決着がつかずに引き分けに終わったというが、エヴァの話ではネギ君は全力を出していなかったらしいの。
無意識なのかエヴァの顔を狙わなかったらしいし、何よりもずっとカウンターを狙われている感じがして勝負に出られず、数十時間戦った挙句に最後にはエヴァの方から引き分けを提案したらしい。

豊富な魔力量と『咸卦治癒（マイティガード）』のおかげで、そのまま消耗戦を続けていたとしてもエヴァは負けるとこだったらしいしの。
やはりあの『咸卦治癒（マイティガード）』は反則じゃ。

というか、全体的に反則。
何で映像見ただけで、『神鳴流（婿殿の真似）』とか『居合い拳（タカミチの真似）』とか『重力魔（アルの）法（真似）』とか出来るんじゃ？

というか“闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）”と互角以上に戦う？
何なの、この“１人紅き翼（アラルブラ）”？
何なの、この１０歳児？

まぁ、初見だったからネギ君にいいようにやられてしもうたが、次の機会までにはエヴァも何かしらの対策をしておるじゃろうな。
エヴァは負けず嫌いじゃし。

「綾瀬君達はどうかね？」

「今はまだまだ基礎の基礎ですよ。魔力を感じることから始めなきゃいけないですからね。
来週に迫った期末テストの準備もありますし、初歩魔法をちゃんと使えるようになるのは春休みぐらい、という感じらしいです。

古菲さんと長瀬さんの修行は進み方が早いです。
長瀬さんは元から知っているみたいでしたし、古菲さんは無意識といえど以前から気を扱えてましたからね。少し教えたらドンドン上達していきました。瞬動も使えるようになりましたし。

刹那さんもいれた3人でかかってこられたら、僕でもちょっとヒヤッとするときが何度かありますね」

「（え？　あの3人がかりを“ヒヤッと”で終わらすの？）

そうかそうか。

まぁ、魔法の練習や修行に熱中するのは構わんが、学生の本分である勉強もちゃんとするように監督をお願いするぞい。

そうそう、婿殿と話したのがの。春休みの京都旅行は歓迎してくれるそうじゃ。

費用はワシが出すから、ネギ君も木乃香達と一緒に京都を楽しんできなさい。

婿殿もネギ君と会えるのを楽しみにしておるよ」

「いいんですか？　考えてみたら僕は西洋魔術師だから、僕が一緒に行くと木乃香さん達が危険なのでは？

“巨○ＶＳ阪○の直接対決で○神が3連敗してるときに、○人のユニフォーム着た人と一緒に道頓堀歩く”ぐらいに危険だと思うんですが？」

「……ネギ君も随分と日本に馴染んできたの。

麻帆良来てから、まだ2ヶ月ぐらいしか経っておらんよね？」

イギリスって野球はメジャーじゃなかったと思うんじゃが？

それにその比喩はいくら何でも違うん……いや、そんな

に的外れじゃないかもしれん。

アレ？　むしろソッチの方が危険度は高いんじゃ？

というかネギ君大阪行ったことないよね？　京都と大阪はかなり違うけど。

「まぁ、大丈夫じゃろ。

今回はちゃんと理由があって行くのじゃし、西だって西洋魔術師全てを嫌っているわけじゃない。

アッチが気に食わないのは“関東が伝統を忘れて西洋魔術に染まった”ということが原因でもあって、そもそも最初から西洋魔術師である外国人までにはそんなに敵愾心は抱いておらんよ。

……まぁ、“巨○が優勝して阪○がびりっけつになったシーズンの、○人の助っ人外国人選手に対する○神ファンぐらいの敵愾心”は抱いておるかもしれんがの」

「え？　それどう考えてもアウトでは？」

「大丈夫大丈夫。

確か西では今月から、イスタンブールの魔法協会から研修生を受け入れることになっておったからの。西洋魔術師と敵対する気があったらそんなことはせんよ。

内心では気に食わんのもおるのじゃろうが、それでも実際に行動に移すようなのはおらんじゃろ」

「……だったらいいのですが。
木乃香さんが麻帆良にいることを良く思っていない人もいるらしいですし」

「まぁのぉ、確かにそれは心配じゃが、今回の旅行の結果次第では木乃香が西に戻る可能性があるからの。
婿殿もワシと同意見なのじゃが、もうこうなったからには木乃香が魔法に携わりたいと言えば止める気はないし、それこそ西洋魔術ではなく日本の呪術を学びたいと言うたらそれでもよい。
それだと必然的に西に戻ることになるからの。

まさか、木乃香が自発的に西に戻りそうな状況で、無理矢理にでも西に戻そうとする馬鹿はおらんて。
そんなことしたら木乃香の西に対する心象は最悪になるからの」

「そう言われればそうですね。
まさかそんなお馬鹿さんはいないですよねー」

フォッフォッフォ、と笑うワシ。
アッハッハ、と笑うネギ君。

……大丈夫じゃよね？
いくら何でも、実家がそんなお馬鹿さんの巣窟になっているのは勘弁してほしいのじゃが。

「それと、何か近衛詠春さんに伝えることはありますか？
今回の旅行はあくまで、“魔法を知ってしまった麻帆良の生徒を関西呪術協会に案内する”という形になるので、公式に「生徒達のことをよろしくお願いします」ぐらいのことは言っておいた方が良いと思いますけど？
それでも他の内容は私信という形なら大丈夫ではないでしょうか？」

「そうじゃの。
旅行の日までに手紙を用意しておくことにしよう」

フム、親書とかは無理じゃの。
今回は麻帆良のミスに西を巻き込んでしまう形になるし。
それでもこういう貸し借りを頻繁にしていけば、きっと東西の仲は進展していくじゃろ。
今度は向こうのミスをコチラが助ければよいのじゃからの。

今のような冷戦状態よりも、どんなことでも東西のやり取りがある状態の方がよかろう。

「そうそう、それともう一つ。
実を言うと図書館島のことなんじゃが……」

「図書館島、ですか？」

「ホラ、木乃香達は図書館探検部じゃろ。
もし木乃香達に中学生が行くのが禁止されているような地下階層に行きたいと言われても、行かせないでほしいんじゃ」

「それはもちろんです。
魔法のことがばれてなくても、ルールを破ったりなんてさせませんよ」

「ウン、それならばよい。
それと図書館島の管理人がドラゴンを門番に飼っておるのじゃがな。
そのドラゴンと出会ったとしても、退治しないでほしいんじゃよ」

「……ドラゴン、ですか？　物騒な門番ですねぇ。
もちろん正当防衛と緊急避難は除いてもいいですよね？　それならば承りますが……」

「それはもちろんじゃよ。生徒があの地下まで迷い込むなんてないと思うがの……。
ああ、許可証がないとネギ君も入れない場所におるから、ネギ君も駄目じゃぞ」

「はい、わかりました」

……とりあえずは成功。
ネギ君の実力ならアッサリとアルのところまで行きそうじゃからな。
先に行っちゃ駄目なこと言うとかんと。
ネギ君は交わした約束はシッカリと守るから、一度約束したら安心じゃしの。
予め立入禁止のことを伝えておけばアルのところまで行ったりせんじゃろ。

……約束を守るところは信頼できるんじゃが、それでも何かウッカリやらかしそうで怖いんじゃよなぁ。

そういえば“紅き翼（アラルブラ）”では、母君のことはネギ君が一人前になるまでは言わない約束をしておるが、この子明らかにタカミチ君より強いよね？
この場合どうすんじゃろ？

「ああ、忘れてました。
僕達が京都に行ってる間の相坂さんのことなんですが……」

ム、確かに今のさよちゃんでは、遠出はまだ不安じゃの。
ネギ君達が京都に行っている間は、葛葉先生あたりにでも頼んでおこうか……。

――桜咲刹那――

「おやすみー。せっちゃん、ネギ君」

「はい、おやすみなさい。
木乃香さん、刹那さん」

「はい、おやすみなさいませ
木乃香お嬢さま、ネギ先生」

現在、私は木乃香お嬢さまたちの部屋にいる。
そして、ネギ先生を挟んで川の字になって就寝。
最初の頃は木乃香お嬢さまを挟んで川の字になっていたが、それでは私が『咸卦治癒（マイティガード）』の恩恵に与れないのでネギ先生を真ん中に挟むようになった。

ベッドはあくまで1人用のシングルタイプだから、もうほとんど3人ともくっついている状態だ。
むしろ朝起きたら、ネギ先生が私と木乃香お嬢さまに潰されていたことが何度か。

……まぁ、ネギ先生も木乃香お嬢さまの身体に潰されるのなら本望でしょう。

ネギ先生に変わった様子はない。
私に対して“色欲”が1点あったのは気になっていたけど、特に今まで変なことはない。

……わ、私の“色欲”８点は何かの間違いだ！
確かにネギ先生の身体にドキッとしたことはあるけど……。

「ギリギリギリギリ……」

「アスナぁー、歯軋りうるさいで。
ネギ君、結界で遮音してーな」

「……わかりました」

「え！？　それだと木乃香がネギに何するかわから

ネギ先生の結界術は相変わらず見事だな。
結界が今張られたのだろうが、全然気づけない。
遮音結界という難易度がそれほど高くはない結界とはいえ、これほどとは……。

というか、神楽坂さんはキャラ変わりすぎじゃないか？

「……最近、明日菜さんが精神的に不安定みたいなんですが、木乃香さんは心当たりあります？
タカミチの一件からようやく立ち直ってきたと思っていたんですが……」

「う、うーん。アスナはちょっといろいろあってなぁ。
ネギ君には悪いけど、アスナのことは邪険にしないで受け入れてほしいんやけど……」

「それはもちろんです。でも、明日菜さんが心配で……。
明日菜さんは本当に大丈夫なんでしょうか？」

「大丈夫大丈夫。
明日菜はネギ君のことは信頼しとるから、ネギ君が明日菜に応えてくれれば大丈夫なんや」

「そうですよ。神楽坂さんは今でも勉強を頑張っているじゃないですか。
きっと神楽坂さんなら立ち直れますよ」

「それならいいのですけど……」

魔法バレした後、よくこの部屋を訪れてネギ先生に勉強を教えてもらっているけど、一緒に教えてもらっている神楽坂さんの勉強の進み具合が凄い。

来週の期末テストではバカレンジャーの称号を返上しそうな勢いだ。

私も負けていられないな。何としてもバカレンジャーから脱退しなければ。

それに何だか最近は勉強自体が楽しくなってきた。

以前、ネギ先生の言っていたことがよくわかった気がする。確かに難しい問題を解いたときに達成感を感じることが出来た。

このまま勉強を続けていれば高校は大丈夫だろうし、もしかしたら大学も木乃香お嬢さまと同じところに行けるかもしれない。

……でも、本当に今の幸せな生活を続けることが出来るのだろうか？

エヴァンジェリンさんの別荘で木乃香お嬢さまと話し合った夜、私が半妖であり、禁忌の忌み子であることは言えなかった。

木乃香お嬢さまから「全部話して」と言われたのに！

……というか、ネギ先生のことや魔法のことを説明するので精一杯で、私が半妖であること自体忘れてた。
魔法がバレたときはもう全てをお話し、木乃香お嬢さまの目の前から消える覚悟もしていたのだが、ネギ先生の“魔力云々”の話の衝撃が大きすぎて忘れてしまっていた。
なんかそれ以来、言い出すタイミングがなくてズルズルと言えないでいる。

本当にどうしよう？

「ええなぁ～。こうやって皆でくっついて寝るんわ。京都に帰ったときも、皆で一緒に寝よな」

「はい、木乃香お嬢さまがお望みでしたら」

「せっちゃん。またお嬢さまって言うてる～」

「……あ、申しわけありません」

……幸せすぎる。
こんな日が来るなんて思っていなかった。

長の木乃香お嬢さまを裏の世界に関わらせたくない気持ちは承知していたし、私も木乃香お嬢さまのような優しい人は危険なことには関わってほしくないと思う。
だけど、今のこの幸せは否定できない……。

……ああ、こんな日が来るなんて。
木乃香お嬢さま、刹那はどうかなってしまいそうです。

「ネギ君はもちろん京都初めてやよね」

「はい。何でも死んだ父が京都に住んでいたことがあるらしいのですが、僕が生まれる前のことでしたからね。
刹那さんが修行したという、本場の神鳴流の道場も気になりますし」

……いくら何でも、看板持ってかれたりしないよな？
私ではネギ先生に敵わないけど、道場の師範代級ならネギ先生にも勝てるよな？

「ふーん、そっかあ。
……ネギ君が最近ずっと浮かない顔しとるんは、ウチのことを狙ってる人がいるからなん？」

「……う。まぁ、少し不安ですね」

「それは大丈夫なのではないですか？
学園長からお話を伺いましたが、長との話し合い次第では木乃香お嬢さまが西に戻る可能性もあるのですから」

「ウチは麻帆良から離れたくないけどなぁ。
でも、一度まっさらな状態でお父様と話して、今後のことを決めようとは思ってるんよ」

「はい。それは確かにそうなのですが。
しかしそれでは逆に、木乃香さんに西に戻ってきてほしくない人達が動く可能性があります。
具体的に言えば、関西呪術協会の次代の長候補として修行を積んでる人達ですね」

……ああ、なるほど。
確かに次代の長候補として修行を積んでる人からすると、木乃香お嬢さまが戻ってくるというのは面白くない話になるな。
今まで散々厳しい修行をしてきたのに、ロクに修行もしていない木乃香お嬢さまが戻ってきただけで次代の長となられたりしたら、彼らにとっては面白くないだろう。

「もしかしたら、そういう人達から妨害を受ける可能性もありますね。むしろソッチの方が厄介ですよ。
木乃香さんを次代の長にしたい人達は木乃香さんを誘拐とかしてそれを成功させる必要がありますが、木乃香さんを戻したくない人達は僕達を襲撃すればそれだけで成功ですからね」

「……う～。
それだったらウチは無理して西に戻らんでも……」

「それでは木乃香さんを西に戻したい人たちが収まりません。
何にせよ、準備だけはシッカリとしていった方が良さそうです。
期末テストが終わったら京都旅行についての話し合いをしましょう。僕も装備とか道具を整えておきます」

……程々にしてくださいよ。

何かネギ先生だったら、洒落にならないものを用意してくる気が……。

しかし、ネギ先生の考えは的外れというわけではないだろう。
私や学園長も、木乃香お嬢さまを西に戻したい者のことは考えていても、西に戻したくない者のことは考えていなかった。

この幸せに浸っているだけでは駄目だ。
京都に赴く際は、ネギ先生のように常在戦場の心構えで行かなければ。

それとネギ先生が１０歳ということは、もう考えないことにしよう。

「何でこんな考え方するんだ、この１０歳児は？」何て考えない。

うん、私の精神安定上その方が良いや。

第二十八話　立入禁止（後書き）

明日菜がまだ壊れてる。
（・３・）アルェー？

まぁ、京都旅行編が終わる頃には落ち着きますので、もうしばらくお待ちください。
そしてもちろん、“そんなお馬鹿さん”はいます。４人ほど。

学園長の出番は本来ありませんでしたが、それだと京都旅行終了まで出番無しとなる事に気づきました。
ヘタしたら“学園長死亡済み！？”と皆様から思われそうでしたので、急遽出番と相成りました。

……別にそれでも良かったかな？

第二十九話　惚れ薬

――――ネギ・スプリングフィールド――――

期末テストは無事２－Ａがトップをとって無事終了。
食券大量ゲットでウハウハです。

終了式の日にでも、僕の奢りでパァーッと打ち上げでもしましょうかね。
あ、その前にホワイトデーがあるな。それだったらホワイトデーにパーティーですかね。
それとバレンタインにはせっかく手作りの物を貰ったんだから、僕もジンジャークッキーでも作って皆さんに配るとしますか。

「ネギ先生、ちょっといいですか？」

「はい？　何でしょうか、長谷川さん？」

？　どうしたんでしょう？
何だか妙に神妙そうな顔してますね？

「……私も神楽坂達にやってる勉強会に参加させてほしいんですけど……いいですか？」

「それは構いませんけど。
……もしかして後ろに隠れている龍宮さんも一緒にですか？」

「え？　龍宮？」

「……相変わらず鋭いね、ネギ先生は。
私も同じ用件だったんだが、構わないだろうか？」

「げ……いつの間に？　というか何故気づけるんですか？
……これだから非常識人間共は」

まぁ、気配の察知には自信ありますからね。

しかし、何でまた長谷川さんと龍宮さんが？

あまり勉強に興味がないタイプの二人だったのに、何でこんなことを言い出すんですかね？

別に期末テストが悪かったわけではなかったのに……。

「ご存知の通り、放課後の居残り以外にもエヴァさんの別荘でやるときもありますので、事情を知っている長谷川さん達でしたらソチラの参加も歓迎します。

年をとってもいいというならですけどね。

……そんなに明日菜（バカレンジャー）さん達に負けたのが悔しかったんですか？」

特に明日菜さんは２００前半の順位でしたね。バカレンジャーの平均は３００後半でした。

佐々木さんは別荘での授業に参加していなかったのでそこまで上がってはいませんが、それでも５００前半に上がってましたしね。

エヴァさんも茶々丸さんも今回の期末テストは本気を出したのか、順位を大きく上げていました。

皆さん頑張っていましたからねぇ。

「……アイツラを馬鹿にするわけじゃないですし、アイツラが頑張っていたことも知ってはいたんですが……。
さすがに私も少し勉強頑張らなきゃって思いまして……」

「……刹那のあの勝ち誇った顔が……。
あやうくあの広いデコにエアガンをブチ込むところだった……」

オーケイ、そういうことなら歓迎しましょう。
これで正式に教師にもなれましたし、最近は良いことが続きます。
バカレンジャーに負けた釘宮さんや柿崎さんなんかは絶望していましたけどね。ハッハッハ。

あとは京都旅行の準備しないとなぁ。
フェイトはもういるだろうし、シッカリと準備しないといけませんね。

そうそう。そういえば“頭の良くなる魔法の本”の噂は流れませんでした。

おかしいなー。なにかげんさくとはちがうことしちゃったかなー？
がくえんちょうのごーれむとかついすたーげーむたのしみだったのになー。

そしてエヴァさんと今後についての打ち合わせ、という名目で放課後ティータイム。
うん。コーヒーも好きだけど、紅茶の方がやっぱり好きです。

「宮崎さんと綾瀬さんの修行の調子はどうですか？」

「まぁまぁだな。やはり基礎から始めるので時間がかかる。熱意はあるが、それでもやはりな……」

「それは仕方ありませんよ。焦らずにジックリと教えてあげてください。

僕も手伝えることがあったら手伝いますので、遠慮なく言ってくださいね」

僕が教えることは何故か学園長には止められましたけどね。土下座までされて。

僕が見習い魔法使いだということが理由でしたが、宮崎さん達が僕の影響を受けないようにでしょう。

……やりすぎたかな？

「何かあったらそのときは頼む。

まぁ、今は基礎の段階だからあまりないし、お前を参考に修行されても困るしな。

……いや、一つあったな。

綾瀬と宮崎だけでなく魔法バレした連中全員になんだが、少し魔法の怖さを教えてやろうと考えていてな」

「魔法の怖さ、ですか？

ああ、特に綾瀬さんなんかはファンタジーの魔法に憧れているみたく、あまり魔法の怖さを理解できていないみたいですからね。確かにそういうのも必要かもしれません。

しかし、具体的にはどうするのですか？
魔法バレ全員ということは明日菜さんや木乃香さん達もなんでしょうが、まさか模擬戦というわけにもいかないでしょう」

「そんなことはわかっている。
私が考えているのは、アイツ等が１４歳の年頃の少女だということだ。
現に神楽坂明日菜なんかは、錬金術や惚れ薬が実在するのかどうか聞いてきたしな」

「錬金術と惚れ薬ですか。
錬金術は一応出来ないことはないんですけどね。ただ、例えば１万円分の金を作るのに、費用が数百倍かかってしまうだけで。
惚れ薬は効果が高すぎるのは違法ですけど、確かに１４歳の女の子は興味を持ちそうですね」

「だろう？
だから、先手を打って人の心を操るというのはどれほど恐ろしいものかをわかってもらうことにする。
具体的には、惚れ薬を実際に飲ませてジジイに惚れさせる」

鬼ですか、あなたは？

「私は吸血鬼だ。
安心しろ。実際に惚れさせるのは、幻術をかけてジジイの真似をさせた相坂さよだ。
いくら私でも、実際にジジイに惚れさせるほど酷くはないぞ」

「相坂さんですか。そういうことなら安心ですね。
相坂さんも２－Ａに馴染んできたみたいですし、いろんなことをし始めてもいい頃ですね」

「人の心を操ることがどれだけ酷いことなのかを知れば、惚れ薬を作ってみようとは思わなくなるだろうからな。
そこでネギに頼みたいのは惚れ薬の効果の確認だ。一応作ってみたのはいいが、何分初めて作ったからな。実際の効果はわからん。
多分、大丈夫だと思うんだが……」

つまり僕に惚れ薬を飲めと？
そこはかとなく不安になるのですが……。まぁ、エヴァさんのお手製なら大丈夫かな？

それに、今まで惚れ薬って飲んだことないんですよねぇ。惚れ薬飲んだ自分がどうなるのか、ということには少し興味あります。
何か問題あったら『咸卦治癒（マイティガード）』で治療すればいいですしね。

「そういうことなら構いませんよ。
エヴァさんの腕を疑うわけではありませんが、安全を期するのに越したことはないですからね」

「そ、そうか！？

……なら、これを飲んでもらおうか。
効果は約３０分。惚れ薬を飲んだあとに初めて見た異性を好きになってしまうタイプだ。
あ、だから当日は来ない方がいいぞ。アイツ等全員に惚れられたら大変だろうからな。
それに生徒に惚れ薬で惚れられるというのは嫌だろう？」

「それは勘弁して欲しいですね。
今ですと、僕が惚れてしまうのはエヴァさんしかいないですけど良いんですか？」

「別に構わんよ。若さが暴走して襲われそうになったら反撃するからな。それに効果の程をこの目で見ないと落ち着かん。
まぁ、無理を言っているのはコチラなのだから、多少のことなら許すがな。
それと、お前はアイツ等と違って魔法抵抗力が高いんだからあまり我慢するなよ。効果が見れないとアイツ等に飲ませていいのかわからんからな」

「わかりました。それでは頂きます。

……甘。かなり甘いですね、コレ？」

「子供に飲ませるものだからなぁ」

カキ氷のシロップを薄めたような味です。
うわ、口の中に残る。紅茶飲んで口直し。

……駄目だ、舌に残った甘ったるさが全然取れません。

「……で、どうなんだ？」

「もうちょっと待ってくださいよ。
こういう薬系は、体内に吸収されるまでどうしてもタイムラグが生じますからね」

フム、まだあまり実感はありませんねぇ。
エヴァさん見てもドキドキしませんし。

いや、実を言うとやっぱりドキドキはするんですよね。前世の関係上。

正直な話、前世ではエヴァさんに惚れられてた駄目親父に嫉妬したこともあります。

もちろん前世のエヴァさんも好きでしたが、今僕の目の前にいるエヴァさんのことも好きです。

何だか獲物を狙う獣の目で見られること以外は関係は良好ですし、何よりエヴァさんは可愛らしい人ですからね。

以前、エヴァさんが体育の時間に足を捻ったらしいので、『咸卦治癒（マイテイガード）』で足をさすって治療しましたが、そのとき心臓ドキドキしましたもん。

気の応用で血流を操作して、すぐに落ち着きましたけどね。

気とかマジ便利です。

普段から心拍数とか血流とか交感神経とか諸々を一定に保っているおかげで、２－Ａの突飛な行動にも冷静に対処することが出来ます。

さすがに限度はあって、動悸が少し落ち着かなくなったり、顔が赤くなったりするぐらいはありますけどね。

エヴァさんの綺麗なおみ足を前にしたときなんかも。

エヴァさんの足ってスベスベしてるんですよね。
余分な贅肉がなくてスラっとしていて、雪のように白い肌で、触るとヒンヤリと少し気持ち良い冷たさを感じられるような足でした……って、何を考えているんだ、自分は？

……マズイ、惚れ薬が効いてる。
エヴァさんを見るとドキドキする。

顔が赤い。僕自身でも顔が真っ赤になっているのがわかります。
顔が熱い。まるで熱中症にかかっているみたいです。体が溶けてるみてー……ではないですけどね。

「ど、どうした、ネギ？　顔が赤いぞ？
そろそろ惚れ薬が効いてきたのか」

「……はい。効いてます。エヴァさんを見るとドキドキします。
僕は今、エヴァさんのことが好きになっています」

「そ、そうなのか？
私は、惚れ薬を飲んだことないからわからないが……、ど、ど

ういう風に私のことが好きなんだ？
正直に答えろよ。……コ、コレはあくまで実験なんだからな」

「全部好きです。
好きじゃないところはないです」

「……え？　……あ、あぅ……」

エヴァさんも混乱してるな。
安心してください。僕も内心では混乱中です。

マズイ、本気でエヴァさんのことが好きだ。
惚れ薬がこんなに凄いとは思わなかった。これは惚れ薬が違法になるわけだ。

――エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル――

落ち着け。落ち着くんだ私。
これはあくまで惚れ薬を飲んだから言っているだけなんだ。
とりあえず、今のところ計画通りだ。

惚れ薬を飲ませて私のことを意識させる。
もちろん、これで既成事実を作ったりはしない。あくまでも私を意識させるだけだ。

アルちゃんが見せてくれた好感度ランキングから考えるに、ネギは色恋方面のことは興味がないわけではなく、ただ単にまだ知らないか理解出来てないだけのようだ。
だったらまずはソチラ側のことを理解させなければなるまい。

飲ませた惚れ薬は効果が切れても、効いていた間のことは覚えているタイプのものだから、ネギの記憶には私に惚れたということが残る。
どうせ直ぐに消えてしまうものだが、ネギが“恋愛”というものを理解できる切欠にはなるだろう。
それを突破口にして、今度からは薬無しで私に惚れさせなければならない。

「もう一度言います。
全部好きです。
好きじゃないところはないです。
……エヴァさんに触れてもいいですか？」

「……あ、あうぅぅ……」

だから落ち着け！　落ち着くんだ私！！！
これはあくまで惚れ薬を飲んだから言っているだけなんだ！！！
これは予想外だった。
真っ直ぐに攻めてくるネギがこんなに厄介だったとは。

しかし、ここで許すわけにはいかない。
惚れ薬で既成事実を作ったなどと思われるのは、私としても納得がいかん！

「……ふ、触れるだけなら……」

って、そうじゃないだろ、私！？
何を口走っているんだ！？

「……それじゃ、失礼しますね」

「……あ……」

ネギの手が私の髪の毛を撫でる。
優しく、壊れ物を扱うかのように。

「好きです。このサラサラと流れるような金髪も」

ネギの手が私の手を握り締める。
相変わらずネギの手は温かい。厳しい修行をしているはずなのに、
柔らかさを失わない掌。
足をさすられたときも、温かく気持ち良かった。

「この白く細い、たやすく手折れそうな手足も」

ネギに抱きしめられる。
おんぶなんかで私から抱きつくことはあっても、ネギに抱きしめられるのは初めてだ。
ネギに抱きついてネギの温かさを感じるのとは、また違う気がする。

「強く抱きしめたら、壊れてしまいそうな身体も全部です」

やめろ、これ以上はやめてくれ。
戻れなくなる。このままでも良いかと思ってしまう。

これはあくまで惚れ薬を飲んだから言っているだけなんだ。
こんなので愛されるのは嫌だ。人形みたいなネギは嫌だ。

私はありのままの私を見てくれる人が欲しいんだ。
薬でおかしくなったネギでは嫌なんだよ……。

「ネ、ネギ、これ以上は……」

「大丈夫です。これ以上はしません。
したいという気持ちはありますけど、十分抑えられます」

「そ、そうか……」

「明日菜さん達に使う場合は、少し薄めるなどして効果を落としたほうがいいかもしれませんね。
魔法使いの僕でも結構我慢してますから、明日菜さん達には辛いかもしれません」

「……そうだな、そうしようか」

「効果が切れるまで、あと２０分以上ありますね。
それまでずっと立ってるというわけにもいきませんから、一度座りませんか？」

「う、うん……」

よかった。
あのまま進んでいたら、キスぐらいは許しそうになるところだった。

さすがに初めてのキスが惚れ薬のせいなんてのは嫌すぎる。

「それじゃ、コッチに……」

「……あ……」

そう言って、私が座らせられたのはネギの膝の上だった。
ソファーの上にネギが座り。そして私が横座りでネギの膝の上に座る。
しかも、ネギが抱きしめてくる。

……許すのはここまでだ。絶対にこれ以上は許さん……と、思う。

「……○(た)ってはいないんだな」

「え？　座ってますけど？」

「な、何でもない。忘れろ」

「？　……まぁ、いいですけど。
もうちょっと強く抱きしめてもいいですか？」

「……や、優しくなら」

やはりまだソッチ側は目覚めていないのか。
１０歳だから仕方がないかもしれんが。

でも、もし既に目覚められていたら、私はどうすればよかったのだろう？

「……あ……」

ギュッ、と先程より強く抱きしめられる。
私がネギの膝の上に乗っているために、私の顔の近くにネギの頭が、ネギの顔が私の首の辺りに当たる。

「ネ、ネギ。一度腕を解いてくれ。
……私もネギを抱きしめる……から……」

「ここまでしておいて言うのもなんですが、惚れ薬飲んでるとはいえいいんですか？」

「べ、別にこのぐらいなら構わない。あくまでコレは実験なんだからな。
……どうだ？　何かおかしなところはないか？」

「エヴァさんを好きになったこと以外はありませんね。お腹が痛くなるなんてこともないですし。
ああ、これが“惚れる”ということなんですね。惚れ薬が違法になる理由がわかります」

「そ、そうか……」

「好きです、エヴァさん。愛しています、エヴァさん
エヴァさんの事をもっと知りたいです。エヴァさんの事はみんな、全部知っておきたいです。
もっと力強く、潰しちゃうくらい抱きしめたいです。出来るならキスもしたいです」

「キ、キスは許さんぞ！」

「わかってます。そんなことはしません。
エヴァさんをもっと感じたいですけど、それ以上にエヴァさんのことが愛おしいです。エヴァさんを傷付けたくないです。
エヴァさんには僕だけを見て欲しいし、僕だけのものになって欲しいですけど、それ以上に今の気高いエヴァさんのことが好きです。
エヴァさんに変わって欲しくないです。
ああ、いろんな感情がごちゃ混ぜになってます」

「わ、我侭なんだな……」

「大浴場でも言ったじゃないですか。僕は独占欲が強いんですよ。
でも、エヴァさんを独り占めしたい気持ちも、今のエヴァさんから変わって欲しくない気持ちも全部本当です」

……本当にちょっと効果が強すぎたかな？
本の通りに作ったし、わざと効果を強めたりは別にしていないんだが。
まぁ、地下室にあった昔の本だったからなぁ。

「エヴァさんが麻帆良の外に素っ裸で出ろというのなら、やってもみせます！」

「それはやめてくれ」

……うん。アイツラに飲ませるときは、半分ぐらいの薄さに調整してから飲ませよう。

当日はネギは来ないから、アイツ等の面倒を私一人で見なきゃならん。

説明も無しでさよに惚れさせようと思っていたが、ちゃんと説明してからにしよう。

そうじゃなきゃ後始末が大変そうだ。

「エヴァさんって、良い匂いしますね……」

く、首に鼻を擦り付けて匂いを嗅ぐな。

ちゃんと事前にシャワーを浴びたから大丈夫だけど。

……惚れ薬の効果が切れるまで、まだ時間はあるな。

惚れ薬は金輪際作らん。
本気で抜け出せれなくなりそうだ。こんなことはこれっきりにしよう。

私が欲しいのは自らの意思で抱きしめてくれるネギなんだ。多分、今でも惚れ薬を使わなくても頼めば抱きしめてくれるんだろうがな。
しかし、ネギに頼んで抱きしめてもらうなんて、まるで私の方がネギに惚れているみたいではないか？

……まぁ、惚れ薬を使うのはこれっきりなんだから、今はこの時間を有効に使おう。少しでもネギを感じておきたい。
正面からネギを抱きしめるのは初めてだな。

ギュッ、と私からネギを抱きしめる。
ネギの温もりを感じる。『咸卦治癒（マイティガード）』を使った状態でくっつくのとは違う。ネギだけの温もりを感じることが出来る。
神楽坂明日菜や近衛木乃香は毎晩このようなことをしているというのか？　オノレ。

ギュッ、とネギからも抱きしめられる。
トクトクトク、とネギの心臓の鼓動が伝わってくる。
トクトクトクトクトク、と私の心臓の鼓動がネギに伝わっている。

心臓の鼓動が心地良くて落ち着くけど、心臓の鼓動を意識しすぎて落ち着けない。
ネギの温もりが気持ち良くて眠たくなるけど、ネギの温もりを感じるせいで目が冴えて眠れない。

……ナギとは助けてもらったときに手を握られたのと、最後に頭を撫でで貰っただけだったな。
こんなことは結局したことなかった。

失いたくない。今度はもう失いたくない。
もう一人になるのは嫌だ。この温もりと光は失いたくない。
一度知ってしまえば、これはもう手放せなくなる。

ナギの馬鹿者め。
「光に生きてみろ」なんて言っておき……ああ、そういえばナギが最後に言ってたのは「光に生きてみろ。そしたらその時お前の呪いも解いてやる」だったか。

ネギという光を手に入れると同時に、ネギが私の呪いをもうすぐ解いてくれるとはな。
まったく、どういう因果なんだか？

……フン、ナギはこうなることなんか、予想してなんかいなか

ったろうがな。

ありがとう、ナギ。
『登校地獄（インフェルヌス・スコラスティクス）』を解かずに死んだと聞いたときは恨んだけど、最高の置き土産を残していってくれて。
お前がしてくれなかったことは、お前の息子にしてもらうことにするよ。

その代わりネギは私が守ってやるし、ネギは私が最高の男に育ててやるよ。
天国か地獄のドッチにいるが知らんが、安心して寝ているといいさ。

第二十九話　惚れ薬（後書き）

「（惚れ薬を飲ませるなんて）大人の……やることかぁッ！？」

「大人だからやれるんだよッ！！！」

やっぱりネギはナギの生存をエヴァに言ってません。

っていうか、もう既にナギが生存してること自体忘れてるかも？

ちなみに期末テストの成績はマナは４００前半、ちうたんや釘みー達は４００後半です。

そしてネギの“色欲”が低い、最大の要因が明らかとなりました。

気の応用で心拍数とか血流とか交感神経とか諸々を一定に保っているため、“色欲”がわきません。

心拍数とか諸々を一定に保つキャラは結構いそうですけど、小さい頃からやっていたらこうなっちゃうのではないでしょうか？

そして、本人は全然このことに気づいてません。普通に気の扱い方の訓練してたら、副作用でこうなっただけです。たつみーですら完璧と言わしめた、気の制御技術が仇となりました。

気の扱い方のカンを取り戻せた7歳ぐらいの身体が標準となってますので、〇(た)たせようとしても無理です。

このことに気づかない限り、ネギは魔法使いをマジで卒業できません。

気による身体制御の他、２０年にわたる子供生活、“紅き翼（アラルブラ）”の修行（ごうもん）で恋愛する暇がなかったこと……などの様々な要因から、“色欲”がほぼなくなりました。

もう数年程このままの状態で過ごすと、おそらく“植物のような心”を手に入れることとなるでしょう。

そうすれば、激しい“喜び”も、深い“絶望”もない、“平穏な生活”を送れます。

……独りでしたらね。

将来的に苦労することになりそうです。

バレンタインデーの出来事から約３週間。

ちなみに刹那への“色欲”はもう０点に戻ってます。

それと明日菜の質問はあくまで興味本位デスヨ。イヤ、ホントホント。

原作デモ聞イテマシタシネ。

第三十話　QB3分コントラクティング

――近衛近右衛門――

……最近、木乃香達から冷たい目で見られるんじゃけど、ワシ何かしたっけ？
お見合いも今後はしたくないって言われたし……。

……やっぱり、魔法のことを黙っとったのが悪かったのかのぉ。
特にアスナちゃんからは虫ケラを見るような目つきで見られるし、ワシ泣いちゃいそう……。

――近衛木乃香――

「さて、来週には終了式。そして春休みには待ちに待った京都旅行です。皆さん、準備は出来ましたか？
あ、そういえば一昨日のジンジャークッキーどうでした？　味見もちゃんとしましたから大丈夫だと思うのですが」

美味しかったで～。
クッキーに生姜ってのもオツなもんやな。ココアとかバニラとか色んな種類あって楽しめたし。

それにしても、３１人分のクッキーを用意したのは大変と思ったけど、やっぱりエヴァちゃんの別荘って便利やなぁ。
ネギ君からホワイトデー当日朝のエヴァちゃん別荘使用禁止言われたときは意味わからへんかったけど。

「それではその京都旅行について、二つほどお願いがあります。
別にこのお願いを聞いてくれなくても問題はないと思いますが、念のために安全のために危険を避けるために出来れば承知してほしいです。デメリットも心情上以外はありませんし。
危険というのは、以前説明した関西呪術協会と木乃香さんの関係

上の話ですので省きますね」

……何か皆を危険な目に遭わせてしまいそうなんは悪いなぁ。ウチとしても、そんなこと起きてほしゅうないんやけど、コレばっかりは相手さん次第やからな。

「まず一つは今から皆さんに渡す、このボールペンとシャーペンを肌身離さず持っていてほしいということです。

ボールペンには科学的な発信機がついており、シャーペンには魔法的にマーキングしてまして、これを持ってさえいれば誘拐されたときでも居場所がわかります。

あ、二つのお願いとは別に、携帯電話持ってる人達はそれぞれ電話番号とか交換しておいてくださいね」

「……発信機なんてどこで手に入れたんですか、ネギ先生？」

「……秋葉原って凄いですよね」

「（イギリスにいるときから持ってたはずでしょう、ネギ先生）」

……せっちゃんから聞いとったけど、ネギ君はやっぱり用心深いんやなぁ。
ウチを脅迫する目的で誰かを誘拐なんてされとうないから、ウチからは何も言えないんやけど……。

「監視されているみたいで嫌だ、って人は持たなくても結構ですが、念のために持っていてほしいです。迷子のときでも大丈夫ですしね。
なお、京都は僕達が旅行に行く3月から観光客が増え始め、3～5月の間は一ヶ月につき４００万人の観光客が訪れるそうです。
真面目な話、関西呪術協会の件がなくても持っていてほしいのですけど……」

はえぇ～、それは知らんかったなぁ。４００万人も来るんか。確かに観光には丁度いい季節やもんな。
そういえば旅行のときって、桜は咲いとるかなぁ。

「それは凄いです。
観光するのにも一苦労になりそうです」

「一日当たり１０万人以上かぁ。
ゆえは神社仏閣に熱中して、周りのこと忘れないようにね」

「まぁ、そういうことなら拒否する理由はないわね」

「迷子防止のためにＧＰＳ持っていると思えばいいか。
……それはそれで逆に嫌だな」

「ネギ、私は携帯電話を持っていないんだが……」

「え？　……えーっと、それじゃあこの携帯を使ってください。
僕はプライベート用と仕事用の二つ持ってますので、一つお貸しますよ。
使い方はわかりますか、エヴァさん？」

「ム、馬鹿にする……いや、わからん。
だから後で教えてくれ」

「わかりました。
これが終わった後にでも」

「グギギギ……」

「……はっ！？
ネ、ネギ先生（せんせー）！　私と携帯電話の番号交換してください！」

アスナぁー、そう睨むのはやめとき。
それにしてもエヴァちゃんは細かいところから攻めていくんやなぁ。

ムゥ～、アスナやないけど、ウチもあんまりええ気分せんなぁ……。

「……皆さんに行き渡りましたね。これで一つのお願いは終了です。旅行のときに忘れないで持ってきてくださいね。
そしてもう一つのお願いなんですけど、もう一度言いますが、これは断っていただいても全然構いませんのであしからず。
そのお願いとは、僕と“お試し契約”をして、一時的に“魔法使いの従者（ミニストラ・マギ）”というものになってほしいんです」

“魔法使いの従者（ミニストラ・マギ）”？

それってエヴァちゃんとアルちゃんから聞いたことあるなぁ。
確か、魔法使いの戦闘のパートナーのことやけど、現在では戦ったりすることはないから恋人がなるのが一般的なんやってね。

“魔法使いの従者（ミニストラ・マギ）”になるためには『仮契約（パクティオー）』という儀式をするんやったっけ。
で、その儀式っちゅうのが、魔法陣上で魔法使いの人と……その、キスをするんやよねぇ。

……。

……。

……って、えええぇぇっ！？

「な、何言ってるのよ、ネギ！？
そういうのはちゃんとお互いを知ってからじゃないと……。
で、でもネギがどうしてもと言うならしょうがないわねっ！！！」

「ちょ！？　待てぇっ！　そんなことは許さんぞ！！！
それだったら私がネギのパートナーになる！！！」

「ネ、ネギ先生（せんせー）のパートナーに……。
よ、喜んでパートナーになりましゅっ！！！　……噛んじゃった」

うわぁ。
アスナとエヴァちゃんとのどかが凄い剣幕や。

「え？　皆さん“魔法使い（ミニストラ・マギ）の従者”については知ってるんですか？
あ～、だったら説明の仕方間違いましたねぇ。ごめんなさい。
落ち着いてください。別に僕と『仮契約（パクティオー）』をして貰おうというわけではないですから。
説明しますので落ち着いてください、というかジリジリと寄って来ないでください。いや、ホントにマジで……」

ん？　そんならどういうことなんかな？

ホラ、落ち着き、アスナ。

ウチもビックリしたけど、そこまで興奮することないやろ。

「えーっと、どこまで皆さんご存知かわかりませんので、最初から説明することにしますか。

まず、“ミニストラ・マギ”とは日本語で“魔法使いの従者”という意味です。ちなみに“ミニストラ”は女性の場合の呼び方で、男性の場合は“ミニステル”となります。

元来、魔法使いは呪文詠唱中は全くの無防備でして、その間に攻撃されてしまうと魔法は完成出来ません。魔法詠唱中の魔法使いを守る従者が“魔法使いの従者（ミニストラ・マギ）”です。

今では戦うことはほとんど無いので、恋愛対象がそのパートナーという感じですけどね。

“魔法使いの従者（ミニストラ・マギ）”は魔法使いの魔力により身体能力を強化出来たり、に対して念話、召喚などをすることが出来ます。

それと魔法使いの能力によっては、各従者毎に潜在能力をさらに引き出すことができる固有のアーティファクトが発現出来る事もあります。

ここまでは良いですか？」

ここまではだいたいエヴァちゃんとアルちゃんの説明通りやな。

「仮契約を行うと、契約者が描かれた“仮契約カード(パクティオー)”が出現し、
そのカードに従者の“称号”、“徳性”などが書かれています。
えーっと、ちなみにこれが僕の“仮契約(パクティオー)カード”ですね」

ゴソゴソとネギ君がポケットから取り出したのは1枚のカード。
白と赤の2色のカードで、中心にネギ君の姿が描かれとる。

ええなぁ〜、これ。カッコエエわ。

『仮契約(パクティオー)』したらこのカードが手に入るんか。
なーんかこのカード欲しさで『仮契約(パクティオー)』しちゃいそうやわ。アッハッハ……。

……。

……。

……何、やて?

「ネ「まずは裏に書かれている契約主の名前をを見てくださいっ！！」……わ、わかったえ」

「……ネ、ネギ先生（せんせー）には既にパートナーが……？」

「そ、そんな。ネギったら、私という者がありながら……。ギリギリギリギリ……」

「だ、誰なんだ!?　ネギと仮契約してい……って、おい、ネギ？
何で契約主と従者の名前が両方とも“ネギ・スプリングフィールド”なんだ？」

……あ、ホンマや。
裏面に書かれてる名前と表面に書かれてる名前が一緒やん。

これが契約主と従者の名前のとこなんよね？
あれ？　何でその二つが一緒なん？

「というか本気で何なんだ、この仮契約カード!?
契約主と従者が同一人物なんて聞いたことないぞっ!?」

「は？　エヴァンジェリン、ちょっと見せてくれ？

……本当だ。
ネギ先生、これはどういうことだい？
私もこの業界に長くいて『仮契約（パクティオー）』も過去にしたこともあるが、
こんなこと出来るなんて聞いたことないぞ」

「裏技使いました」

「「……ハァ？」」

「裏技？
魔法にもそういうのもあるんだな」

ほぇ～。
ゲームとかにもそういう裏技とか隠し技あるもんなぁ。

でもエヴァちゃんが知らないってことは、よっぽど隠れてたやり方なんやろうな。

「……まぁ、裏技というか力技というか、技ですらないというか……。
やった当時は大丈夫と思ったからやったんですけど、多分その内容をタカミチとかに話したら怒られると思います」

「またか？
また何かやったのか、ネギ？」

「聞かない方がいい、エヴァンジェリン。
どうせまた微妙な気分になるぞ」

「……ム。それはそうなんだが……」

「こういっては何ですが、僕以外には出来ないと思いますね。
もし出来るとしたら、エヴァさんぐらいですか。『闇の魔法（マギア・エレベア）』的に」

「何だそれは!?　何で『闇の魔法（マギア・エレベア）』が『仮契約（パクティオー）』と関係が……
……やっぱりいい。
確かに微妙な気分になりそうだ。というか、もう既に微妙な気分だ」

「キーワードとしては“『闇の魔法（マギア・エレベア）』”、“ワザと肉体を魔族化して別人判定”、“霊体と変化した肉体間で無理矢「言うなっ！　それ以上言うんじゃない！！！」……まぁ、そんなわけです」

「……何か今物騒な発言があったような」

「やめろ、刹那。
これ以上掘り返すんじゃない。

忘れるんだ。
大事なのはネギ先生が『仮契約（パクティオー）』を自分と自分の間でしてることだけだ。
それ以外のことは考えるな」

「ちなみにこのカードを見るのは、アルちゃん以外では皆さんが初めてです」

……え、ええんかな？
本当に突っ込まないで……。

というか、アルちゃんが何かを思い出したのか、神さまにお祈りしながら部屋の隅でガタガタ震えて命乞いしとるんやけど？

「……儀式を手伝ってくれたアルちゃんには、ちょっと刺激が強すぎたみたいでしたので……。

まぁ、この『仮契約（パクティオー）』によって、僕もアーティファクトを持つことが出来ました。

『来れ（アデアット）』、“空飛ぶゲタ（サブフライトシステム）”、“白紙仮契約（おためしけいやく）カード”」

ポン！　と出てきたのは、仮契約カードと同じ大きさの真っ白な紙、それと人が数人乗れそうなぐらい大きくて平べったいフヨフヨ浮いとる板。

何やのコレ？　ＵＦＯ？

「コッチの“空飛ぶゲタ（サブフライトシステム）”は名前の通りというか見ての通りというか、簡単に言うと乗って空を飛べます。

簡易的な認識阻害、微弱な魔法障壁も常時発動しています」

「……これはモビルスーツと同じ飛び方なのかい？」

「そうですね。魔力をジェット噴射のように噴出してます。出力上げれば瞬動のように移動出来ますし、出力弱めれば柔らかい機動が

可能です。
モビルスーツのスラスターはこの“空飛ぶゲタ（サブフライトシステム）”を参考にしてますね」

「面白そうね～」

「話が終わったら乗ってみますか？
風を切って空を飛ぶのは気持ちいいですよ」

あ、ええなぁ。
ウチも空飛んでみたいわ。

飛行機とかも乗ったことあらへんし、空飛ぶなんて初めてやわ。

「で、コッチが本命なのですが、僕のもう一つのアーティファクト、“白紙仮契約（おためしけいやく）カード”です。
見ての通り、契約主と従者の名前欄が空白である以外は、真っ白で何も書かれていない仮契約カードです。

“契約者と従者のどちらかに、ネギ・スプリングフィールドの名

前を入れること”、
“名前欄に、自分の血で、自分の名前を、自分で書くこと”で契約成立です。

なお、“契約者と従者を交換して、同じ人間で相互に主従となるのは不可能”、“契約者と従者を交換する場合は一度契約を破棄すること”、等の制約があります。
ただし、“この“白紙仮契約（おためしけいやく）カード”と“本当の仮契約”を使用して相互に主従となるのは可能”で、しかも“何枚でも作成可能”という利点があります。

詳しい効果としましては、
“従者への魔力供給”、“従者の召喚”、“念話”、“防御力アップ”は使用可能。
“潜在能力の発現”、“アーティファクトの召喚”“衣装の登録”は使用不可能です。

アーティファクトの召喚こそ出来ませんが、それでも十分使える能力です」

「……何ともまぁ、変則的なアーティファクトだな。
つまりネギの狙いは“従者の召喚”“念話”機能か」

「確かにその二つがあったら、何か事態が起きても楽になるな」

「それもありますけど、一番の狙いは“防御力アップ”ですね。“従者への魔力供給”による身体強化も大きいですが。

本来の仮契約なら、『来れ（アデアット）』でアーティファクトを出すことまでしなければ“防御力アップ”は出来ないんですが、これならカードを手に持つだけでＯＫです。
僕の魔力容量なら長時間、ここにいる全員に魔力供給して身体強化しても支障はないですし。
まぁ、実際にどれだけ魔力供給で身体能力が上がるのかを見てもらいましょうか。

行くよ、アルちゃん。
『契約執行（シム・イプセ・パルス）　６０秒　ネギの従者（ミニストラ・ネギィ）　アルベール・カモミール』」

あや？　アルちゃんもネギ君と“お試し契約”しとるんやな。
何かアルちゃんがうっすら光って見えとる。これが魔力なんやろか？

そんでネギ君は空手の試し割りで使われそうな木の板取り出して、アルちゃんの前に差し出した。
木の板を前にしたアルちゃんは後ろの２本足で立って、ボクシングのファイティングポーズをとった。
……やっぱ、カワエエなぁ。

「ハァッ！！！」

バキィッ！！！

おお！　アルちゃんの掛け声と共に繰り出した拳が、木の板を真っ二つに割りよった。
アルちゃん凄いなぁ。

これが魔力供給による身体強化なんか～。

「と、このように非力なアルちゃんでも、こんな木の板を割るぐらいに身体能力を強化できます。防御力も車に撥ねられたとしても、悪くて骨折で済むようになるぐらいに上がりますね。
契約を破棄する際はカードを破くだけでいいですし、破棄しても再び契約することはもちろん可能です。
それと“空飛ぶゲタ（サブフライトシステム）”も“白紙仮契約（おためしけいやく）カード”で契約したら操縦可能になります」

便利そうやねぇ～。
でも、これがあったら確かに皆安全やなぁ。

「……危険はなさそうだし、いつでも辞めれるなら京都旅行の間

だけなら問題ないかな。
血文字を書くってのオカルトっぽくて嫌だけど、傷は先生が治してくれるんだろ？」

「それはもちろんです。
指先にちょっと切り傷つけるぐらいでいいですし、傷跡が残るようなことはないように念入りに治癒魔法をかけます。
安心してくださって結構ですよ、長谷川さん」

「本当に“お試し”契約なんだなぁ。
『本契約』の劣化版である『仮契約』とは、本当に違う意味での“お試し”だ」

「……スマナイが、私は断らせてもらうよ、ネギ先生。
確かに私は護衛だが、例え“お試し”といえどネギ先生と契約するのは依頼のうちには入っていない」

「わかりました。龍宮さんの実力ならお試し契約をしなくても問題ないでしょう。
あ、それと木乃香さんは立場上、僕の“魔法使い（ミニストラ・マギ）の従者”になるのは止めておいた方がいいと思います」

「え？　ウチだけネギ君と契約出来ひんの？」

「同感です、ネギ先生。
木乃香お嬢さま、お嬢さまが東西どちらの道を歩まれるかわからない現時点で、“お試し”とはいえ西洋魔術師の従者になるのはマズイかと……」

う～、確かにそうやけど……。
ウチだけ仲間ハズレみたいで嫌やなぁ。

……そうや！
逆に考えるんや。
ウチは立場的な問題で、ネギ君の“魔法使い（ミニストラ・マギ）の従者”になるのが駄目なんなら……、

「ネギ君がウチの“魔法使い（ミニステル・マギ）の従者”になればいいんや！！！
……っ！？　ウチがネギ君のご主人様っ！？」

「え？　ソッチですか、お嬢さま？」

「……それなら問題ない……んですかねぇ？
黙っていればいいのかな？」

「問題ありまくりだ、近衛木乃香」

「そうよ～、そんなの駄目に決まってるじゃない、木乃香ったら」

「だ、駄目ですよ！　木乃香さん！」

ええ～、ええやん。
それやったらウチがネギ君呼べるからなぁ。
それに皆だけネギ君と契約するのはズルイわぁ。

第三十話　QB3分コントラクティング（後書き）

さて、次話から京都編に突入します。
長かった……。

今回もほとんど説明だった気がします。
なお、フェイトは修学旅行の前の月に研修で来たらしいので、今回の旅行のときにはちゃんと京都にいます。

もちろん、『闇の魔法（マギア・エレベア）』を利用して自分と自分の間で『仮契約（パクティオー）』するのはオリジナルです。
それと茶々丸が『仮契約（パクティオー）』出来るのなら、アルちゃんも出来ますよね。アーティファクトは選ばれた者にしか与えられないらしいので、アーティファクトまでは無理でしょうが。

そして学園長は出番無かったほうが幸せだったかもしれませんね。
まぁ、これはネギの被害者というわけではないので……。

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた
カモ：去勢された＋“『仮契約（パクティオー）』儀式の手伝い”　↑　ｎｅｗ！
鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち

エヴァンジェリン：紅茶吹かされた
バカレンジャー：勉強地獄
学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血
さよ：知らないうちに成仏させられるところだった
魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう?」という絶望
愛衣：幼児退行させられた
高音：露出狂の嫌疑かけられた
刀子：露出狂の嫌疑かけられた
バレーボール：破裂させられた
タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ＋マダオ就任
刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任
明日菜：失恋

第三十一話　京都編？　新幹線

――絡繰茶々丸――

「おはようございます、エヴァさん、茶々丸さん。
２人とも早いですね」

「おはよう、ネギ」

「おはようございます、ネギ先生」

はい。マスターのご意向で、新幹線発車２時間前には到着していましたので。
駅を発着する新幹線を、ワクワクした顔で眺められるマスターはとても可愛らしいお姿でした。

ネギ先生のご尽力もあり、無事にマスターが麻帆良の外に出ることが出来て何よりです。
ただ、指輪による魔力封印が効いており、マスターは全力が出せ

ない状態です。もしも何かコトが起こった場合には、ネギ先生の魔力をお借りする予定になっています。
マスターの2倍以上の魔力を持たれるネギ先生なら平気でしょう。

「他の皆さんはまだ来ていないですよね」

「仕方ないだろ。
事情を知らない他の奴らについて来られないように、時間差をつけてバラバラに来るのだからな」

「新幹線発車まで後一時間。
皆さんの位置関係は発信機で把握しております。あと30分以内には皆さん到着されるでしょう」

「そうですか。
それにしても、今日が晴れで何よりです。
天気予報見ましたけど、京都も今日は晴れみたいですよ。昨日は雨が降ったみたいですけど、雨雲はもう過ぎ去ったようですし」

危険なことがある可能性もあり、他の2－Aの方々について来られるのは好ましくないので、大宮駅に現地集合といたしました。
名目も、長瀬さんや古菲さんは泊りがけの修行、木乃香さんは里帰りでアスナさんと桜咲さんはその付き合い等々、他の方々に感づ

かれないようにバラバラです。
ネギ先生も学園長の依頼でお使いという名目を、２－Ａの皆さんに予め説明しております。

……目的地はデタラメなことを言っていましたが。

ある程度情報を開示しておき、自分達の意思でついて来られないようにしてもらうのがネギ先生のやり方だそうです。

「コントロール出来ない平和よりも、
コントロール出来る騒乱の方が好みです」

とはネギ先生のお言葉。
この言葉を聞いた桜咲さんや龍宮さんは顔が引き攣っておられ、マスターは「もう何も言うまい」と黄昏ていました。

……ちなみに私達は特に名目などは作っておりません。
元から他の方々とはそんなにお付き合いがありませんでしたので……。

超鈴音や葉加瀬の他は、超包子のシフトを変更するぐらいでしょうか。
猫さん達のことはハカセ達にお願いしておきましたので、きっと大丈夫でしょう。

「茶々丸さん、認識阻害の方は問題ありませんか？」

「はい、問題ありません。
一般人から奇異の視線で見られることもありませんし」

「スマンな、ネギ。
茶々丸に認識阻害の魔法具をくれて」

「問題ないなら何よりです。
茶々丸さんには美味しい紅茶をいつも御馳走していただいてますので、そのお礼ですよ」

認識阻害の魔法具である髪留め。
ガイノイドである私が目立たないようにするために、ネギ先生から頂きました。

麻帆良以外の場所では私のようなガイノイドは存在しておりませんので、京都に行ったら私は目立ってしまうでしょう。
そのためには認識阻害が必要です。

アスナさんの反応からすると、ネギ先生からアクセサリーのようなプレゼントを頂いたのは、マスターと私だけのようです。
さよさんに贈られる予定の幻術がかかる魔法具は、春休みの終わり頃に届くそうですし。

……ネギ先生からの、プレゼント……。

「……あ。
木乃香さん、アスナさん、桜咲さんが駅構内に入られました。
尾行護衛をされている龍宮さんもその１００m後方に、長瀬さんは違う入り口から3人より先回りして入り、前方の安全を確保するようです」

「了解です。今のところは予定通りですね。
このまま問題なく進めばいいのですが……。
（やはり見られてます。
木乃香さんが西に戻るのに賛成な方か反対な方かまではわかりませんが、少なくとも殺気は感じませんね）」

「……やはりネギは何か起こると考えているのか？

正直、考えすぎだと思うのだがな……。
（そうだな。
……近衛詠春からの派遣された護衛ということはないよな？）」

「考えるだけならタダなのでいいんですよ。
対抗手段は最悪の2、3歩手前までしか用意してませんし。
（学園長からはそんな話は伺っていません）」

「……ちなみにその“最悪”とは？
（どうする？　始末するのか？）」

「東西全面抗争で「やっぱりもういい」……そうですか？
ちなみに最悪の2、3歩手前は、木乃香さんを長にしたくない人達による“木乃香さん暗殺計画”です。
西だって組織的に最悪なことはしないでしょうけど、個人的にはどうかまではわかりませんからね。個人がどう考えるのかまでは、その個人を知らない限り予想がつきません。
（まだ放置しておきましょう。
もし駅構内で仕掛けられても、エヴァさんの家に準備させてもらった転移陣へ瞬時に転移できます。新幹線での移動中ではさすがに無理ですが）」

「……まぁ、確かにそれはそうだな。
（仕掛けてくるなら観光が終わった後にして欲しいものだ。
……というか、始末する可能性は否定せんのか）」

人の心とは難しいです。
クラスメイトとして少しは知っていたアスナさんが、何故あのように変わったかすら理由がわからない私なら尚更です。
ネギ先生はまるで私のことをニンゲンのように扱ってくださいますが、それでも私は魂を持っていないただの機械です。

……だから、私はネギ先生と“お試し契約”を結ぶことが出来なかったのでしょうね。

――天ヶ崎千草――

あれが木乃香お嬢様、どすか。
確かに極東一と噂されるだけのことはありますなぁ。
こうやって見るだけでお嬢様の凄さがわかりますえ。

……お嬢様が西に戻ってきてくれさえすれば、東にいる裏切り者達にデカイ面させないですむというのに……。

そりゃあウチかて明治、大正、昭和という、激動の時代を甘く見るつもりはあらへん。

一歩間違えば日本の呪術どころか、日本という国そのものが亡くなっていたかもしれんということは重々承知しております。

それにこの国際化の時代、一般人が西洋の生活習慣に変わったように、ウチら日本の呪術集団もある程度は西洋との妥協をせなアカンのもわかっとります。

こないだ研修で来た新入りも西洋魔術師やしな。

しかしそれでも、伝統を忘れて西洋魔術に染まり、外国人を日本に呼び込み、我が物顔で関東で好き勝手するのは気に食わんなぁ。

それにしても、まだ修行をしとらんというのに木乃香お嬢様のあの力。

今回の旅行は麻帆良で裏のことを知ってしまい、今後のことについて父親である長と話し合うために里帰りなさるということやけど、是非とも西で日本呪術を学んで頂きたいものどすえ。

それにしても話では、木乃香お嬢様と一緒に裏のことを知ってしまったご学友も来はるということやったけど……。
アレで全部かいな？　随分と外国人が多くありまへんか？

赤毛でスーツを着た大人びた坊やと西洋人形みたいな金髪のお嬢ちゃん。中華服来た子は……中国人どすか？　それともファッション？
そして背の高い褐色の肌の女。……引率の麻帆良の魔法先生やろか？
魔法先生が1人来ることになっとるらしいし。

加えて気をつけておくのは木乃香お嬢さまの護衛の神鳴流剣士と、あの背の高い目の細い女やな。
アレも魔法先生かいな？

……アレ？　魔法先生は1人のはず？
どちらかがお嬢様のご学友？

……んなわけありまへんな。
あの背といいスタイルといい、どう考えても大人の女や。

……というか、あのロボットみたいな女の子は何なんや？
麻帆良では魔法と科学の融合ということをしているらしいから、それ関係かいな？

それにそもそもあの坊やは何なんやろ？
木乃香お嬢様は女子中に通っておられるから、男の同級生はいるはずがないし、何よりどう見たって小学生くらいやろ。ウチの小太郎や新入りと同じくらいやし。
でもそんなこと言うたら、金髪のお嬢ちゃんもどう見たって小学生やなぁ……。

……あ！　もしかして赤毛の坊やと金髪のお嬢ちゃんは、引率の魔法先生が担当している魔法生徒かいな？
観光も兼ねてるという話やし、京都を観光するために連れて来たのかもしれまへんな。
今の時期の京都は観光の外国人で一杯やし、まだ小さい子供で学校は春休み。それなら連れて来てもおかしくないかも。

というか、金髪のお嬢ちゃんは新幹線をキラッキラした目で見とったからなぁ。
アレはどう見ても完璧に観光に来た外国人の子供やった。
やっぱり外国人の目から見ても、新幹線は凄いものに写るんやろうなぁ。

他の子達は木乃香お嬢様のご学友やろ。
お嬢様と楽しそうにお喋りしとるし。

そろそろ発車時刻やな。
お嬢様達は乗車位置からして……グリーン車か。

……ウチは普通席なのに。
まぁええ。さっさと乗りましょか。

さて、これからどないしようかなぁ？
木乃香お嬢様を西に戻すためにいろいろ企んでいたけど、この旅行で自発的に戻ってこられるかもしれないというのなら、ウチがここでチョッカイかけるのは逆効果やしなぁ……。

とりあえず、式神を使うて情報収集といきましょか。
魔法先生らしき人も2人いるみたいやし、新幹線の中での会話から、お嬢様が今後どのような道を選ばれるおつもりなのかわかるかもしれまへん。
魔法先生が良からぬことを企んでいるとすれば当初の予定通り、無理矢理にでも木乃香お嬢様は西に戻ってきてもらうことにしましょ。

『……おおおぉぉーーー！
凄いぞ、ネギ！　外の景色を見てみろ！！！』

『はいはい、落ち着いてください、エヴァさん。
周りのお客様のご迷惑になりますから、少し静かに……』

感度良好や。小ザル式神がうまく潜り込めたようやな。
西洋魔術師なんていうても大したことあらへん。

それにしても、子供は元気あってうらやましいどすなぁ～。

『それにしても、京都に帰るんは久しぶりやなぁ。
中学生になってからは帰っとらんかったし』

『木乃香と刹那さん以外は京都初めてなんじゃない？
楽しみね～』

『今日は真っ直ぐ木乃香さんの実家に向かう予定でしたね。
アチラから話を伺うこともあって、観光に出られるのは最低でも
明後日以降となりそうですね』

『何だと！？　せっかくの京都なのに、明後日まで観光はお預けだ
というのか！？
話を聞くのはお前達だけでいいだろう！？　私は明日から神社仏
閣巡りをするぞ！！！』

『だからエヴァさん落ち着いて……。
ああ、もう……』

……ザザァッ！……ザァッ！……

結界を張られた！？
式神に気づかれたんか！？

……んなわけあらへんな。
あのお嬢ちゃんがうるさかったから、周りの客に迷惑掛けないよ

うに結界張ったんやろ。

えーっと、もうちょい出力上げて……。

『……りましたから。
皆さんには僕がついていますから、エヴァさんはどうぞ明日から観光してください』

『ム、ネギは来ないのか？
だったら……でも、せっかくの京都……』

繋がった繋がった。
さて、せっかく結界を張って秘密の話を出来るようになったんやから、いろんな話をしてもらいたいどすなぁ。
木乃香お嬢様が今後どうするのかとか。

あ、販売員のおねーさん。
お茶……えーっと、そのペットボトルのやつおくれやす。

『それにしても関西呪術協会ですか。
いったいどんなところなんですか、桜咲さん？』

『そうですね、？昆神社という古い神社が関西呪術協会の本拠地です。
京都だから大きい神社は観光地にされてしまいそうですけど、さすがにそこは観光地にはなってないですね』

『神社アルかぁ。
まさしく日本の呪術集団の本拠地、って感じアルな』

『ところで本屋ちゃん達は結局魔法を習うみたいだけど、西洋魔術か東洋呪術にするか決めたの？』

『いえ、まだです。
ネギ先生（せんせー）の言う通り、やはり関西呪術協会の方からもお話を伺ってからと思って……』

『私ものどかと同じです。
でも、東洋呪術を習うとすると、麻帆良から引っ越さなきゃいけなくなるかもしれないのがネックなのです。
麻帆良から離れたくないというのが正直な気持ちですね』

あら、残念どすえ。
若い子が入ってくるなら大歓迎やったのに……。
ウチらは先祖代々続いての呪術集団な分、新規の若手がぜんぜん入って来まへんからなぁ。

『それに私は使うとするなら攻撃魔法とかじゃなく、治癒魔法の方がいいですし……』

『そうですね。
一通りのことは勉強するつもりですが、今の時代では攻撃魔法を使う機会があるとは思えません。
日常生活でも使える治癒魔法の方が私達にあっていると思うのです』

『そうやなぁ。
ウチも魔法を習うことにするんなら、危ないのよりはネギ君みたいな治癒魔法とかの方がええわ』

『僕の使うような治癒魔法とは違いますけど、ちゃんと東洋の呪術にも回復系の術がありますよ。
まぁ、僕が少し調べた感じでは、西洋の“外科”に対して、東洋

は“内科”という印象を受けました。えーっと、日本に漢方とかありますけど、それに近いニュアンスを感じましたね。身体の芯から治すような感じです。
僕の『咸卦治癒（マイティガード）』でも似たようなことは出来ますけど、東洋呪術の方が専門的だと思いますよ。
いつまでも健康に長生きしたいと思うなら、東洋呪術の方がいいかもしれませんね』

『ふーん、そういうのもあるんやなぁ。
……でも、ゆえの言う通り、西を選ぶことになったら皆と離れ離れになってまうのが嫌やなぁ。
せめて中学は麻帆良で卒業したいわぁ』

へぇ～、あの坊やは治癒術師どすか。
なかなか勉強しとるみたいやし、坊やは木乃香お嬢様を西洋魔術に引っ張り込もうとは思っておらんようやな。
素直そうな坊やみたいやし、幸せに育った甘ちゃんかな？

そして木乃香お嬢様は治癒術師志望どすか。
まぁ、今まで裏のことを知らなかった女の子ならしゃーないな。
おっとりしてそうな御方やし。

『そういうのも含めて、今回の旅行でお父さんと話し合ってみればいいですよ。
ぼくはちょっとトイレに行ってきます。ついでに新幹線の中を見回りしてきますね』

『うん、気をつけてね』

『迷子にならんようにな～』

『アハハ、新幹線の中でどう迷子になれと？』

『いってらっしゃい、ネギ先生（せんせー）』

『お土産よろしくお願いアル』

『ああ、悪いけど、ネギ先生。
帰りでいいから缶コーヒーお願いしていいかな、無糖の奴』

『わかりました。
他に何か買ってくるようなものはあります？

……ないなら行ってきます。
１０～２０分で戻ってきますので』

……。

……。

……あの坊やが“先生”？

え？　どういうことなんや？

どー見たって１０歳くらいの子供やないかい！？

というか、あの背の高い女達はホンマに中学生なんか！？

『……そういえばくーふぇと楓って、ネギ君と修行してるんやよね。

どんな感じなん？』

『どんな感じといわれても……自らの力不足を恥じるばかりでござるよ』

『……まだ一本も取れたことないアル。
というか、ネギ坊主は酷いアルよ。

「椅子に座ったままでも古菲さんに勝てますよ」

なんて言われて試合してみたら、ネギ坊主は椅子に座ったまま空に飛んで逃げたアル。
それからは手の届かない空から魔法で滅多打ちだたアルよ……』

『……嘘は別についてねーな』

……それはまた、けったいな戦い方する坊ややなぁ。

『だから前に言っただろう、古。
ネギ先生に勝とうとするなら、空を飛ぶことが出来るか射程数ｋｍの飛び道具がないと絶対勝てないとな。

こんなジョークがある。

「イギリスでは“法で禁止されてなければやってもよい”
ドイツでは“法で許可されていなければやってはいけない”
フランスでは“法で禁止されていてもやってよい”
ソビエトでは“法で許可されていてもやってはいけない”」

……とな。

まぁ、古のときは狙ってやったんだろうが、このジョークはイギリス人のネギ先生らしく感じないか？』

『……わかる、龍宮。何かわかるぞ、それ。
そうか。国民性の違いというものもあるのかなぁ……』

『……話の流れ的に魔法無しと思ていたアルよ。
まぁ、そのあとに虚空瞬動とか実演して見せてもらたので、今はそれを練習中アル。
瞬動はなかなかうまくいくようになてきたけど、虚空瞬動の方はまだまだアルね』

『ネギ坊主は瞬動とか、そういう力の制御が凄くうまいでござるよ。ずっと1人で修行していたせいで、基礎訓練ばっかりやっていたらしいでござるから。
何でもない、普通のはずの動作がコチラに対して必殺の一撃になるでござるし』

『さすがは“スプリングフィールド”ということか。
“蛙の子は蛙”とはよく言ったものだ』

『……いや、ナギもあそこまで出鱈目じゃなかったと思うぞ……』

!?　“スプリングフィールド”!?　“ナギ”!?
大戦の英雄!?

あの坊やは“千の呪文の男（サウザンドマスター）”とやらの息子かいな!?
“先生”やってるのも、それと何か関係あるかもしれへんな。

『しかし、改めてアスナ殿や木乃香殿たちを見ると、やはりネギ坊主の本領は癒しだと思うでござる。
最近ますます肌ツヤが良くなったでござるなぁ』

『あ、やっぱりわかっちゃうわよねぇ。
クラスでも他の皆に聞かれちゃうしさ～』

『アレやなぁ。若さにかまけて、お肌のお手入れとかは特別な事とかはしておらへんかったからなぁ。
そりゃ洗顔とかはちゃんとしとったけど、まさかネギ君のおかげでここまでお肌が綺麗になると思っとらんかったわぁ』

『それについては同感だな。
口止め料の代わりというわけじゃないが、私も何度かやってもらったけどさ。本当に肌の感じが違ってくるんだよ。
魔法とかには関わりたくないと思っていたけど、アレをしてもら

うためなら関わってもいいような気になってきた。
（おかげで最近はフォトショップ使わないで済むようになったしな）
』

……何か、随分とうらやましい話をしとりますなぁ。
あの坊やの治癒魔法はそんなに凄いんどすか？

それにしても治癒魔法が得意ってのは英雄らしくないなぁ。
まぁ、英雄の息子といっても親と子は別モンどすから、坊やが英雄らしくなくてもしゃーないか。

『あれ？　でも楓達はネギにしてもらってないの？』

『普通の治癒魔法はしてもらったことはあるでござるが、『咸卦治癒（マイティガード）』での治癒はないでござるな。
ネギ坊主はそこら辺のところ、シッカリしてるでござるし』

『？　そこら辺って？』

『アスナ殿や木乃香殿は普段から世話になってるから、刹那は神鳴

流の手ほどき等、ネギ坊主はお礼として3人に『咸卦治癒（マイティガード）』をしているでござる。

千雨殿は……おそらく関西呪術協会から話を聞くまで何も無しというのは不公平だからでござろう。

この旅行が終わってお願いを聞いてもらったら、多分もうしてくれないと思うでござるよ。

拙者達は既に、魔法を黙っている代わりに一緒に修行してもらうというお願いを決めたでござる。要するに、もう貸し借りはない状態でござるよ。

まぁ、頼めばしてくれると思うが、頼まなかったらしてくれないでござろう。

もちろん、『咸卦治癒（マイティガード）』でしか治癒出来ない傷などは別でござるが……』

『く……、アレをしてもらえなくなるのは辛いな。

こうなったらお願いを使ってでもやってもらおうかな……』

『……で、では私達も駄目だということに……』

『う～、でも元々ネギ先生（せんせー）と一緒に寝ることなんか出来そうにないから……』

『別にウチはネギ君と寝るぐらいは気にせんけどなぁ。

湯たんぽ代わりに丁度ええし。なぁ、せっちゃん？』

は？
あの坊やは木乃香お嬢様と一緒に寝てるんかい？
……まさか東の連中、坊やを餌に木乃香お嬢様を東に留めて置くつもりやないやろうな？

それに長と“千の呪文の男（サウザンドマスター）”は盟友だったはずや。
だったら坊やと木乃香お嬢様が許婚だとかの話があってもおかしくあらへん。

『え、ええ……、最初は意識してしまいましたけど、今はもう平気になりました。
でも、たまにネギ先生が木乃香お嬢さまと私に潰されていることとかありますし、やはりあのベッドに3人はキツイのでは？』

『そうやなぁ。
でも新しいベッドを部屋に入れるわけにもいかんしなぁ』

『……言っておくが、私はネギ先生と一緒に寝てないぞ。前のときみたく、手でしてもらってるからな。
というか、昨日もしてもらったんだけどネギ先生が愚痴ってたぞ。

「何かたまに明日菜さん達の目が怖いときがあるんですよ」

って、……お前ら少しは自重しろよ』

『……別に変なことしてないわよ』

『目ぇ逸らすな、神楽坂』

『え？　“達”ってことはウチも？』

『……きっと旅行の準備の買い物のときに、ネギ先生を着せ替え人形にして遊んだのがマズかったのでは？』

『な、何だそれは!?　ネギを着せ替え人形にだと!?　何故私を呼ばなかった!?』

『……やっぱりスカートはマズかったんかなぁ』

『ネギ先生（せんせー）にスカート!?』

『何ですか、ソレはっ!?』

……あの坊やは坊やで大変みたいやなぁ。
話みたいな治癒魔法が使えるなら、引っ張りだこになってもそりゃしゃーないわ。
しかも女子中の教師みたいやし、きっと学校でもオモチャにされとるんやろ。

……不憫な。

しかし、木乃香お嬢様はどうやら、西洋魔術の方に心が傾いておられるようやなぁ。
正確には、魔術についてはこだわりは持っておられへんようやけど、ご友人達や今までの生活が気に入っておられるみたいや。

これだと自発的に西に戻ってもらうのは厳しいかもしれまへんなぁ。
やはり強硬手段に出るしかないどすか。
元からそのつもりやったから、計画を変更しないでもいいんやし。

……さっきまでの会話を聞いとったら、お嬢様とご友人の仲を裂くのは悪い気がしますけど、生まれのせいだと思って諦めてもらうしかありまへんな。

……あ、販売員のおねーさん。
駅弁一つおくれやす。

まぁ、ええわ。どーせウチはもう止まれんのや。
京都駅では人目があって無理やし、本山に入られたら手が出せん。
となると、本山に着く前に仕掛けるしかありまへんな。

腹ごしらえしたら、小太郎達に予定通りに決行することを連絡せんとな。

……あ、しもた。お茶全部飲んでしもたんや。
さっきの販売員のおねーさんに一緒に頼めばよかったわ。
このミルクティーじゃ駅弁とあわへんし、ウチはやっぱり緑茶の方が好……ミルクティー？

……ウチ、ミルクティーなんか買った覚えあらへんけど？
？　ミルクティーの缶にメモ紙が貼り付けられとる？

「お勤めご苦労様です。
ペットボトルは空ですので捨てておきますね。
このミルクティーはプレゼントです。

ネギ・スプリングフィールド」

……。

……。

……いつの間に？

第三十一話　京都編？　新幹線（後書き）

原作でも茶々丸との『仮契約（パクティオー）』は力技で無理矢理成功させていたので、力技が無理な“白紙仮契約（おためしけいやく）カード”による契約は不可能です。さすがにレンズ洗浄液で“お試し契約”を結ぶのは無理でした。

そしてネギはもちろんわざとです。ネギとしては

「コントロール出来ない平和よりも、
コントロール出来る騒乱の方が好みです」

ので、京都で一連の事件は旅行中に全部終わらせます。放っておくと、麻帆良に来られるかもしれませんからね。

ネギは夏休みの宿題はさっさと終わらせるタイプです。

第三十二話　京都編？　賭け

――犬上小太郎――

「……というわけで、当初の予定通りに仕掛けるで！」

「？　何怒っとんのや、千草姉ちゃん？」

「何でもあらへんわ！！！」

おー、怖。

そんなにコケにされたのが気に食わんのか？

それに、知らないうちにミルクティーをプレゼントされて、お茶のペットボトルを捨ててもらってたっちゅーことは、おそらく千草姉ちゃんの顔は見られてるやろうからな。

それやったら今更引けんのやろ。上からの命令無視して監視してたなんてこと知られたら、後でどんな罰食らうかわからへんしな。

ま、俺としては戦えりゃそれでいーんやけどな。
でも話からすると、半分は素人で男は1人だけかいな。

しかもその男は俺と同じくらいの年らしいけど、治癒術師らしいやん。
千草姉ちゃんを出し抜けるぐらいやし、瞬動とか使えるらしいからそれなりに出来るかもしれんけどなぁ……。

「……で？
どこで仕掛けるんだい？」

「街中で仕掛けたら邪魔が入るかもしれへんし、本山の麓で仕掛けるわ。本山の侵入者防止の仕掛けを利用させてもらうで。
本山の中には手出せんけど、外側の仕掛けならウチでもいじれるやさかい。
『無間方処の咒法』で閉じ込めて、そこで木乃香お嬢様を頂戴するんや」

「本山の間近で仕掛けて大丈夫なん？」

「危険なのはわかっとるけど、そこでしか勝負するところがあらへん。

本山の術者相手でも、２０～３０分ぐらいなら入れないようにしてみせるわ」

「千草さんの見立てで邪魔になりそうなのは、背の高い女性２人とウチと同じ神鳴流剣士がお１人。それと“大戦の英雄”の息子さんと魔法生徒のお嬢ちゃんがお１人。あとは中華服の拳法使いらしきお嬢さん、どすか～。

そんで残りは皆素人さん。……ロボットの女の子はどうなんやろ？

……まぁ、ウチとしては是非とも神鳴流の剣士さんとやりあいたいどすえ～」

「あー、それだったら俺は英雄の息子っちゅーのをやるわ。女殴るは趣味やないからな」

「だったら、僕と千草さんで残りかい？」

「……うーん、それはちとキツイかもしれまへんなぁ。相手にするのは出来ても、木乃香お嬢様を攫うには人が足りまへん。かといって、式神に命令させて木乃香お嬢様を攫うのは危ないし……」

「……なら、最初に千草さん達３人に出て彼らの目を引き付けてもらって、隙を突いて僕がお姫様を攫おうか？

千草さんの負担が大きいけど、式神を大量に使えば何とかなるだろう？」

「……それしかあらへんかなぁ。
小太郎は女殴れへんから、女の護衛のついとるお嬢様を攫わせるのは無理やろうし……」

ほっといてくれんか。
嫌なモンは嫌やっちゅーねん。

「かといって、月詠はんにお嬢様を任せるのは危ないしなぁ」

「え～、ウチは斬りたいどすえ～」

「わかっとるわ。
しゃーない。それでいきましょか。

……新入り、わかっとると思うけど、木乃香お嬢様に怪我させたらあきまへんで」

「……わかってるよ」

……コイツもわからん奴やなぁ。
何でもイスタンブールっちゅーところから研修に来た西洋魔術師らしいけど、何でこんなのに参加してんだか？
いつも無表情で人形みたいやし。

ま、ええ。
頭脳労働は千草姉ちゃんの仕事や。
何か妙な真似したらブン殴ればいいやろ。

さーて、英雄の息子っちゅーのに、少しは骨があればいいんやけどなぁ。

「あ、小太郎。
あの坊やには、“空を飛ぶことが出来るか射程数ｋｍの飛び道具がないと勝てない”らしいで」

……。

……。

……何、やて？

「距離を置いての魔法戦が得意みたいやな。空飛びながら、魔法をバンバン撃ってくるらしいわ。

西洋魔術師の定石やな。

今回は『無間方処の咒法』で閉じ込めるし、木乃香お嬢様を置いて逃げたりはしなさそうな子やったから、そんなに気にしなくてもいいかもしれへんけどな。

いつも通りに距離を詰めて、魔法を詠唱する暇をあたえんようにな。

体術もそれなり……というか、ウチに感づかれずに近寄れるぐらいのことは出来るみたいや。アンタは油断する癖あるから気ぃつけなアカンよ」

「お、おう！

任せてや！！！」

あ、あれ？

確か本山の仕掛けの『無間方処の咒法』って、半径５００ｍぐらい範囲あらへんかったっけ？

あんまり空中戦はやったことないんやけど、大丈夫やろか？

――古菲――

……これが京都アルかぁ。

京都駅は麻帆良みたいに都会だたのに、電車とバスでちょっと移動しただけでこんな山になるとは……。

私の故郷をどこか思い出すアルね。

あそこも古さだけだったら京都にも負けないアルし。

「ここが？昆神社ですか。

伏見稲荷大社に似てるですね」

「千本鳥居だね～」

「ここから境内まで少し歩きます。
上り坂ですが一応舗装されていますし、途中で休憩所もありますので大丈夫ですよ」

「……そりゃありがたい。
今日は新幹線に電車にバスと、乗り物に乗りっぱなしで疲れてるからな」

「長谷川は運動不足アルね」

「お前らと一緒にすんな」

いや、確かに私達は鍛えてるし、本屋達も図書館探検部の活動で平気みたいだけど、長谷川の運動不足は致命的アルよ。
というか運動不足よりも、座りぱなしによる腰痛の方が辛そうアルね？

「大丈夫ですか、長谷川さん？
何でしたらおんぶしましょうか？」

「……いくら魔法使いといっても、さすがに１０歳の子供におん

ぶしてもらうような真似は出来ないです」

「ネ、ネギ！
私は疲れてしまったぞ！！！」

「ちょっと、エヴァちゃん抜け駆け！？
ネギ！　私も！！！」

「え！？　えええっ！？
ネギ先生（せんせー）、私も……その……」

「え？　……この状況で僕にどうしろと？」

……ネギ坊主も大変アルねぇ。

アスナとエヴァにゃんも変わったし、本屋も好感度ランキング見てから積極的になてきた気がするアルよ。
おそらくネギ坊主からは嫌われていないことがわかたし、むしろ好かれている方だとわかたから積極的になたアルね。

「というか、エヴァさんは戦力の1人なんですから、僕がおんぶするのはちょっと……」

「……そういえば、そんな話もあったな」

「……忘れてたんですか？
エヴァンジェリンさんも一応、木乃香お嬢さまの護衛ということで学園長から旅費が出ていますので、仕事はしていただかないと困るんですが……」

「でも、ここまで安全に来れたんやから、もう平気とちゃうんかな？」

「そうですか？　僕的にここら辺が一番危険な場所だと思うんですけど？

人目につかず、派手なことをしても関西呪術協会が揉み消してくれる。

確かに関西呪術協会本山の近くですから、何かあっても本山から5分もあれば駆けつけてくれるでしょうが、逆に言えば5分で終わらせれば問題ありません。

本来、誘拐などは時間をかけずにサッと終わらせるものです。それこそ車で擦れ違いざまに誘拐すれば一瞬で終わりますから」

「……相変わらず子供らしくない考え方をするね、ネギ先

生は。
私達の横を通り過ぎる車を警戒していたのはそのためか」

「だから、何でネギ坊主はそんな考え方をするアルね？
というか、何で誘拐の手口について知ってるネ？」

「ええ。しかも見た感じここからは脇道等は無い狭い一本道。これだと前後で挟まれたら逃げれません。
僕だったらココで仕掛けますね。

それと誘拐の手口については、ボディーガード派遣会社の教育資料でです」

「……ふむ。確かにそう言われればそうでござるな。
少しは用心した方がいいみたいでござる。せっかくここまで何も無しで来たんだから、最後まで気を抜かない方がいいでござるよ。

そして古。もういろいろと諦めた方がいいでござるよ……」

「フォーメーションを決めましょう。
まず非戦闘員の明日菜さん、木乃香さん、宮崎さん、綾瀬さん、長谷川さんの5人を中心とします。
もちろん刹那さんは木乃香さんの護衛を最優先。古菲さん、茶々丸さんは非戦闘員の皆さんの守りを優先して離れないように。
そして僕が前衛、龍宮さんが中衛、エヴァさんは後衛で前を進みます。長瀬さんは最後尾について、後方を警戒してください。

もし敵らしき人が来たら、明日菜さん達を囲んで障壁を張りますので、明日菜さん達はその場から動かないようにお願いします。
それと神鳴流が敵にまわっている可能性があります。『斬魔剣・弐の太刀』使ってくる人の場合、龍宮さんは最優先でその人を妨害してください。その隙を突いて僕が速攻で潰します。
あ、それと明日菜さん達は『契約執行(シム・イプセ・パルス)』は相手が手を出してくるまでしないでくださいね。手は相手側から出させますので」

「……そこまで警戒する必要ないんじゃないかな～、と思うんだけどさ、ネギ？」

「念のためにです」

やはりネギ坊主はどこかおかしいアルよ！？
言てることは決して間違ていないはずのに、違和感しか感じないのはどういうことネ！？

「それに新幹線の中でも関西呪術協会らしき人がコチラの様子を伺っていたみたいですし……」

……新幹線でのアレか。

いきなりネギ坊主が中空に魔法で文字書いたから何かと思えば、どうやら監視がついているということだたネ。

そういうことなら用心するのはわかるケド、それなら何故その人にミルクティーをプレゼントしたアルか？

というより、その場で何とかした方が良かたのではないアルか？

……ああ、どうせ正当防衛ということにしときたいアルね。

「……あ、アレが休憩所ですね。

いったんここで休憩しましょう。自動販売機とかお手洗いもあるみたいですし。

休憩所周辺に結界張りますけど、目の届かないところには行かないでくださいね。

龍宮さん、長瀬さん、２人でまずお手洗いの中を調べてください。

他の皆さんは安全を確認したあとにお願いします」

「了解」

「承知したでござる」

「……ようやく休憩所か。助かった……」

「……木乃香が小さい頃、山奥で育って刹那さん以外の友達がいなかったということがよくわかるわ」

「……実を言うと、木乃香さんのお父さんが木乃香さんの面倒を学園長に丸投げしていたことをあまり良く思っていなかったのですが、これで納得出来たです。
私が木乃香さんのお父さんの立場なら、次代の長云々という事情がなくても麻帆良に送るですよ」

３０分ぐらい歩いたけど、休憩所があることからこれで半分ぐらいアルかね？　となると全部で５～６ｋｍぐらい？
確かにこんな山奥で子供独りは寂しいアルね。

自動車は狭い石畳の上に鳥居が邪魔するから通れないし、そもそも入り口の階段で駄目ネ。
自転車で坂道降りたら面白そうアルけど、登りが地獄ヨ。そもそも石畳のせいで上手く走れないだろうし、結局歩きしかないアル。

「到着予定時刻を遅めに関西呪術協会に伝えておいて正解でした。
えーっと、それでは15分後に出発としましょうか。それでもさっきよりペースを少し落としても間に合いますから、ゆっくり休んでください。……あ、もしかして自動販売機の缶にも何か仕込んでたり……。
飲む前にちょっと僕に貸してください。魔法で毒とか入っていないか調べます」

「……あの、ネギ先生。いくら何でも「刹那、もう気にするな」……そうだな。
やっぱりいいです。それでネギ先生の気が済むのなら……」

「……自販機は120円か。
こういうところなら、ぼったくり価格があると思ってたのに……」

「あ～、富士山の自動販売機とか有名やね」

「あれは違うだろ。
山に登って自販機の中身補充するための人件費が高いから、ああ

やって値段に反映にされるんだろ。
ぼったくる気持ちも少なからずあるんだろうけどさ」

「……ここの自動販売機の中身の補充って、誰やってるんだろ？」

「業者の人……はここまで来たりしませんよね。
……もしかして関西呪術協会の人が？」

「……イメージと大分かけ離れてるでござるなぁ」

トイレも綺麗だし、人の手がちゃんと定期的に入っていそうネ。
巫女さんが自動販売機の中身を補充する絵を想像したら変アルけど。

しかしこの調子だったら、どうやって食料とか必要なものを本山に運び入れているアルかね？

「……しかし、ここまで過剰に警戒しておいて、結局「何もありませんでした」となったら、とんだ骨折り損のくたびれ儲けだな。左右は竹林で見るところがないから別に構わんが……」

「警戒するのは悪いことじゃないと思いますけど」

「それはそうなんだがなぁ。せっかくの京都旅行なのに……」

「明日から京都観光出来るんだからいいじゃないですか」

「だけど、明日はネギは木乃香達についてるんだろ？

……そうだ、ネギ。あとで血を吸わせてくれ。明日の観光中に襲われたら困るからな。一応このネギがくれた指輪で力は少し取り戻してるが、それでも万全ではないからな」

「……僕としては、少なくとも初日の今日だけは万全の状態でいたいんですけどね。夜襲でもされたりしたらコトですし。

いくら『咸卦治癒（マイティガード）』で回復するといっても、一時的に弱体化するのは間違いないですから」

「うーん、ネギが言ってることはわかるんだが……っ！？

……な、なら賭けをしないか？」

「？　賭けですか？」

「そうだ。私は“これから本山に着くまでに敵が襲ってこない”方に賭ける。

つまり“これから本山に着くまでに敵が襲ってこなかったら”、血を吸わせろ。

明日はどうせ本山に詰めっぱなしなんだろ。それなら本山の連中がいることだし、多少ネギの力が弱まっても平気なはずだ。

それよりも私が観光に出たときに、魔力不足のせいで捕まって人質にでもされたら大変じゃないか？」

……観光に出なきゃいいのでは？　と思うのは気のせいアルか？

それに、“幻想空間（ファンタズマゴリア）”とやらでエヴァにゃんがネギ坊主と戦うのを観戦したガ、いくらそれより弱体化してるとはいえエヴァにゃんを人質にするのは無理だと思うアルよ。

というか、ネギ坊主はホントに何なのネ？

あの戦い見たら、私が１０００人いても勝てないアルよ。

「ハァ……。

それですと、“これから本山に着くまでに敵が襲ってきたとした

ら”どうするんですか？」

「フム、何が欲しい？」

「いや、特にないですけど」

「そうか。ならどーしよーかなー。

……うん、そうだ。

それなら“これからほんざんにつくまでにてきがおそってきたら”、きすしてやろう。

……正確には、“これから本山に着くまでに敵が襲ってきてそれを撃退したら”、キスしてやる」

ガタタッ！！！

ヒィッ！？　ビックリしたヨ！？

アスナとコノカと本屋が急に立ち上がったネ！？

「……エヴァちゃん、ちょっとトイレまで来てくれない？」

だから、アスナのその無表情は怖いアルよ！！！

「フン！　これは私とネギとの賭けだ。関係ない奴は黙ってろ」

「……そもそも僕とエヴァさんがその賭けをする意味がないんですけど？」

「いやいや、違うぞ。

“これから本山に着くまでに敵が襲ってこなかったら”、さっき言った通り私に危険がある。だが血を吸えば対抗策になる上に、私の食欲も満足出来る。

そして“これから本山に着くまでに敵が襲ってきてそれを撃退したら”、初めての実戦を潜り抜けたネギへの褒美だ。お前はまだ模擬戦以外したことないだろう？

お前の実力なら襲われてもやすやすと退けられるだろうが、褒美があった方が気合が出るだろう。

私が賭けに勝ったら私が嬉しい。ネギが賭けに勝ったらネギが嬉しい。

実に公平な賭けではないか。

……それとも何か？
私からの褒美のキスは嬉しくないとでも言うのか？」

「いえ、それは嬉しいですけど……。
何か根本的に間違っていませんか？」

「べつにまちがっていないぞ。
よし、これで賭けは成立だな！」

「……そうなのかなぁ？」

ソレってドッチに転んでも、結局はエヴァにゃんの勝ちアルよ。
やはりネギ坊主はまだまだ子供アル。全然エヴァにゃんの思惑に気づいてなさそうヨ。

……しかし、エヴァにゃんの印象がこの1ヵ月でとても変わたアル。
以前までは人間嫌いの気難しい女の子と思ていたガ、今のエヴァにゃんは同性の私から見ても、ただの可愛い恋する乙女アルよ。

「ちょ……ちょっと待ったぁっ！！！」

「そ、そうですよ！
ネギ先生（せんせー）は教師なんだから、生徒とキスなんて駄目ですよぉっ！」

「ムゥ～、エヴァちゃんそれはずるっこやで。
……ネ、ネギ君てキスしたことあるん？」

「え？
まぁ、従姉に頬とか額にされたことならありますけど……」

「ネ、ネギはファーストキスはまだなのか……。
いやぁ、私も最初は頬とか額にしてやろうかと思ったが、そういうことなら口にしてやろうかなぁ？」

……恋か。どういうものなのアルかね？
私はまだ経験してないからわからないアル。

結婚するなら私より強い男と決めていたから、考えてみればネギ坊主はその候補に相応しいアル。
ネギ坊主のように強い男は初めてだし、その強さも腕力などの身体能力ではなく、技術で裏打ちされた強さアル。
将来的に筋力で男には負けてしまうであろう、女の私が目指すに相応しい強さネ。

精神的に年上のはずの私達より落ち着いているし、“心技体”のうち“心”と“技”の2つは、既に完成されていると言っても過言ではないアルよ。
それに“体”の方は10歳だから仕方ないアル。おそらくもう数年もすれば素晴らしい身体になるアルよ。

「だ、駄目っ！　だったら私も賭ける！
……本屋ちゃんは、教師と生徒だからしないのよね？」

「えええっ!?　そんなぁ!?」

「負けちゃ駄目です、のどか！」

「あ～、やったらウチも賭けに参加するわ」

「……あの、僕の意見は？」

コノカまでも参加するアルか。

コノカはいつもはネギ坊主に普通に接してるけど、誰かが抜け駆けしようとすると参加するアルな。

前に言てた“誰かにとられちゃうのは嫌”という気持ちからアルかね？

……最近は中武研なんかで組み手しても、組み手相手をネギ坊主と比較してしまうようになたし、正直ネギ坊主のことは嫌いじゃないアル。

でも、あの中に入るのは大変そうだし、そもそも古家の婿には来てくれなさそうネ。

それにアルちゃんの好感度ランキングじゃないけど、ネギ坊主への私の想いは“恋愛”という感じじゃないアルよ。

……真名や楓達もそうだろうガ、“諦め”とか“呆れ”とかの項目が好感度ランキングにあたら、多分８点以上はいくアルね。

恋とはどういうものなのアルかねぇ……？
そして私はネギ坊主のことをどう思てるネ？

「んじゃ、ウチが勝ったら“ネギ君に和食の作り方を教えてあげる”え。
あくまで家事の手伝いをしてもらうためやからな。ウチにメリットはちゃんとあるで」

「わ、私は“ネギ先生（せんせー）のオススメの恋愛小説のベスト１０”を教えて下さい！」

「うーん、私はそうねぇ……こ、今度“２人っきりの付きっ切りで勉強教えて”！
負けの場合は、全員エヴァちゃんと一緒の奴ね！！！」

「そうやなぁ。
ウチを襲ってきた人たちから守ってくれるんやから、お礼するんは当然やね」

「は、はい！
ネギ先生（せんせー）が頼りです！」

「……僕の、意見……」

……やはり、ネギ坊主は何だかんだ言っても子供アルね。あんな風に皆にオモチャにされるネギ坊主も新鮮アル。いつもは手玉に取っている方だから、あんなネギ坊主は初めて見たヨ。

ネギ坊主も年相応に子供っぽいところもあるネ。

「……しかし、ネギ坊主があんなにタジタジになるのは初めて見たでござるな」

「初めて私と一緒に寝たときはあれより混乱してたけどなぁ」

「あー……、私の感じた印象だと、ネギ先生はちゃんと理性で計算して物事を進めるタイプだからな。あんな風にわけがわからないまま力押しされると弱いんじゃないか？

理解出来ることには滅法強いけど、理解出来ないことにはとことん弱いタイプだと思う」

「……随分とネギ先生のことをわかってるですね、長谷川さん」

そう言われれば、確かにネギ坊主はそんな感じアルね。やはりネギ坊主も“心”の修行はまだまだアルか。
それといつも手合わせでは“技”で挑んどいたガ、今度は力押しも試してみるアルかね？

『咸卦法』とか使われたら駄目アルけど。

――――天ヶ崎千草――――

……何とか間に合った。
本山の侵入者防止の仕掛けをいじって、展開しても本山に様子が伝わるのも遅くしたで。

小太郎や月詠はんはこういう作業に向いとらんから、ウチ独りでやらなアカンかったわ。

「で、木乃香お嬢様達はどうや？」

「まだ休憩所で休憩中や。
結界張られたから何喋ってるかまではわからんかったけど、今荷物まとめてるとこやから、もうすぐ出発するんやないかな」

「そか。『無間方処の咒法』は休憩所から３００ｍほど進んだところの広場を中心に仕掛けたわ。
……新入りは？」

「フェイトはんなら木乃香お嬢様達の後ろ側に移動しましたえ～。
計画通りに行動するらしいどす～」

「……あ、動いたで」

「よし、ならウチらも行きますえ。『無間方処の咒法』を仕掛けた広場で勝負や。
それと最初は攻撃したりしたらアカンよ。新入りが木乃香お嬢様を攫うチャンスを作るんどすえ」

小太郎があの坊や、月詠はんが木乃香お嬢様の護衛の相手をする。つまりウチが残りを相手するんやけど、背の高い女2人と金髪のお嬢ちゃんとロボットの女の子と中華服の女の子の5人も相手にせなアカン。

熊鬼と猿鬼を手強そうな背の高い女2人にあてて、残りを子ザル式神使って数で攻めるしかあらへんな。

さすがにキツイと思うんで、新入りには早めに勝負してほしいわ。

木乃香お嬢様達がコッチに近づいてくる。

もうすぐや。もうすぐ東の裏切り者共に一泡吹かせてやれるで。

……先頭を歩いてる坊やと目あっとるの気のせいかな？

もしかして気づかれとる？　隠れてるのに？

……あ！　よ、よし、『無間方処の咒法』の範囲内には入ったわ。これでいつでも木乃香お嬢様達を閉じ込められる。

いくら気づかれないように術式をいじったとはいえ、展開した瞬間に本山の連中に気づかれる可能性はあるから、『無間方処の咒法』を展開するのは戦闘になる直前やな。

……それと、やっぱり坊やと目あっとるんやけど？

ええい！　構わへん！！！
今更こんなところで引けるかいな！！！

「行くで」

「おうよ！」

「了解ですえ～」

隠れていた崖の上から3人で飛び降りる！
新入りに気づかれないよう、ウチらは派手にいかんとな！！！

「おおーっと、ちょっと待「「「「キターーーッ!!!」」」」」…
……な!?　何なんやっ!?」

「……皆さん、何で賭けに負けて喜ぶんですか?」

え!?　何でこの子達、襲われて喜んどるの!?

第三十二話　京都編？　賭け（後書き）

原作でもネギ達が３０分ぐらい走ってから、ようやくちびせつなが罠にかかったことを確信してましたので、実際に入り口から境内までは結構距離があると思います。

関西呪術協会の本山というからには侵入者防止の仕掛けなどは当然あると思いますので、それを利用したことにします。

そして『無間方処の咒法』は、原作では出ることは無理でも入ることは可能みたいですが、ココでは千草がいじったために出入りの両方とも不可能という術式にしています。

ここら辺はオリジナル設定ですのであしからず。

さて、ついに千草達がネギ（あくま）と対峙します。

千草達の運命は如何に！？

そしてネギは前世も含めて２０年間、ファーストキスはまだでした。

第三十三話　京都編？　直訴

――龍宮マナ――

「「「……」」」

「「「「「……」」」」」

「「「……」」」

「「「「「……」」」」」

「……お、おおーっと、ちょっと待っていただけますかえ？
木乃香お嬢様にお目通りお願いしたいと思いまして……」

「何者だ、貴様らっ！？」

「いや、もう無理だから」

「「うぐっ！？」」

冷静なツッコミだ、長谷川。そして恥ずかしがるな、刹那。
まぁ、相手の気勢を削げたのは悪くないんだがな。

敵は３人。
変わった着物を着てる女が１人。中心に立っていることから彼女がリーダーだろう。
そしてネギ先生ぐらいの男の子と私達ぐらいの女の子が１人。女の子は刀を持っていることから神鳴流か？

数ではコチラが有利だが、コチラには守らなきゃいけないのがいるからな。

……アレ？　いつの間に近衛達の周りに障壁が？

『コチラからは手を出さないでくださいね。戦闘になるにしてもアチラから出させます。それと真ん中の人は新幹線で僕達の様子を探っていた人です。
敵対意思はありそうですが、殺気までは感じません。あくまで予想ですが、無理矢理にでも木乃香さんを西に連れ戻したい人でしょう。残りの2人は傭兵みたいな感じですね。
茶々丸さん、録画の方は大丈夫ですか？』

『問題ありません。
ハイクオリティな映像をお約束します』

『数がコチラよりも少ないのに仕掛けてきたということは、腕に自信があるか彼女達は陽動の可能性があります。というか、僕達の後ろにもう1人隠れてますね。
エヴァさんは障壁の周囲で警戒を、茶々丸さんは障壁内部で映像を撮りつつ木乃香さん達の護衛。無茶はしないでくださいね。この映像は重要な証拠になるのですから。
他の人はまだ動かないでください』

ネギ先生か。……障壁が張られたことに気づけなかった。
しかも魔力の糸を使った有線念話？
相変わらずネギ先生は多芸だな。どうせ“便利そうだから”とい

うことで開発したんだろうが……。

それに私達の後ろにもう一人？　私にも全然わからないんだが……？

そして、汚いなさすがネギ先生きたない。

映像という証拠をバッチリ残しておいて、関西呪術協会との交渉材料にするつもりか？

『ええ、その通りです。

これで木乃香さんは東西どちらでも選べることになるでしょうね～。

東を選びたいときは「こんな人達がいる西になんか行きたくあらへん！」って言えばいいですし、西を選びたいときは「直訴してでもウチを西に戻したい人達の心意気に打たれたわ！」って言えばいいですから。

ドッチにしても関西呪術協会の弱みをゲットです』

……人の心を読まないでくれ。

そしてモノは言いようだな。

「「「……」」」

「「「「「……」」」」」

「……つ、続けてええどすか？」

「「「「「どうぞどうぞ」」」」」

「コホンッ！
では改めまして、関西呪術協会の天ヶ崎千草と申します。この度は木乃香お嬢様にお願いがありまして、お目通りを願ったのどすえ。
危害を加えるつもりはありまへんので、どうぞその障壁を解いていただけないどすか？」

『……木乃香さん。残りの2人も名乗るように言っていただけませんか。そうすれば障壁を解くと。
解いたとしても、コンマ秒で再び張れますので安心してください』

『了解や』

ああ、着々と証拠が集まっていく……。
どうしてこう腹黒いんだ、ネギ先生は？

「……天ヶ崎千草さん、どすか。変わった着物やなぁ……。
それで他の2人はドチラさん？　名前も知らない人とは仲良くは出来ないえ」

「これは失礼しました。ホラ、2人も名乗りぃな」

「……犬上小太郎や」

「ウチは神鳴流の月詠いいます～。よろしゅうに～」

残り2人の名前もゲット。
偽名の可能性もあるが、私達を侮っているようだし、おそらく本名なんだろうなぁ。

『●ＲＥＣ』

『……あの着物って、京都では普通なんですかね？
露出も多いし、何だか日本の女性のイメージが崩れていきます……』

『ち、違いますよ、ネギ先生！
勘違いしちゃ駄目です！！！』

『そうやで、ネギ君！
天ヶ崎って人が変わった趣味を持ってるだけなんや！！！』

『……もしかして、アレが関西呪術協会の正式な制服だったり？』

『ええぇっ！？　それやったらウチ絶対西に戻らんわ！！！』

刹那と近衛も大変だな。
生まれ故郷が変な風に思われるのは嫌なんだろうが……。

それにネギ先生のせいで、近衛の中では関西呪術協会が変態集団になっていくぞ。

――天ヶ崎千草――

やばいわ。お嬢様達の反応に呆気にとられてしもうたわ。障壁も張られてしもうたし、これだとアッチのペースやんか。

何とかして新入りが木乃香お嬢様を攫う隙を作らな……。

「（何か変な感じになってしもたな。……やっぱ千草姉ちゃんの着物って変だよな？）」

「（実を言うとウチもずっと変だと思ってましたわ～。……雇い主さんの趣味やから言わへんかったけど）」

……アンタラは黙っとき。

特に月詠はん！　アンタのゴスロリだって変やろ！？

「……年の問題じゃないのかなぁ？
それで木乃香さん、障壁どうします？」

「？　年がどうしたん、ネギ君？
……まぁ、ちゃんと名乗ってくれたんだし、一度解いてええよ。
それで？　天ヶ崎さんはウチに何の用？」

「お目通りを許していただきまして、おおきに。まずはお礼を言わせていただきます。
聞くところによると、木乃香お嬢様は関西呪術協会や関東魔法協会など裏のことを知ってしまい、この旅行で東西ドチラを選ぶかをお決めになるとか……。
そこでウチは、是非とも関西呪術協会を選んでいただきたいと思って参上したんどすえ」

「……アンタと一緒のトコは選びたくないわ」

えっ！？　思いっきり木乃香お嬢様の目が冷たいんやけど！？

ウチ何かした!?

それにあの坊や。ウチの心読んだ!?
っていうか、誰が年やっ!?

「な、何か失礼をしましたでしょうか?」

「いや、失礼も何も……何なん? 何なん、その着物?
思いっきりネギ君に日本のこと勘違いされるやろ。日本の伝統壊してるのアンタやろ。
それとも何? 関西呪術協会の人は皆、アンタと同じ格好してるん?」

「やっぱりあの着物って何か違いますよねー?
それと表情と目線を見てたら、考えてることはだいたい予想はつきますよ」

「ネギ君は見たらアカン!
勘違いしたらアカンで。普通の着物は前にウチが着てたような服で、あの変なお姉さんが着てるのは着物やないで!!!」

「そもそも木乃香お嬢様の前に出てくるのに、その露出は何なんだ、

貴様！？
肩や胸元をそんなに曝け出して恥ずかしくないのか！？
おい！　犬上小太郎といったな！　スマンが学ランの上着を天ヶ崎千草に貸してやってくれ。
その女は木乃香お嬢様やネギ先生の目に毒だ！！！」

「うえっ！？　わ、わかったで。
……ホレ、千草姉ちゃん」

「お、おおきに……」

……アカン。何か泣きそうになってきてしもた。小太郎達にもボロクソに言われるし、坊やには簡単に考えてること予想されるし……。
ウチのファッションセンスってそんなに変なんか？
完璧に木乃香お嬢様に嫌われてしもうたみたいやし、ホントどないしよ？

「……まぁ、落ち着いてください、木乃香さん。
天ヶ崎さんがせっかく直訴に来たのだから、話ぐらいは聞いてあげていいんじゃないですか？
……アレ？　でも竹の棒とか持ってらっしゃいませんね？」

ハ？　竹の棒？

「？　日本の直訴ってそうなんじゃないですか？
「直訴でござる！　直訴でござる！」

って、竹の棒の先に直訴状を挟みこんでお殿様に差し出すのでは？
いやぁ、天ヶ崎さんは凄いですねぇ。死を覚悟してまで直訴するなんて……」

「はぁっ！？　“死”！？
千草姉ちゃん死ぬんか！？」

「え？　違うんですか？　直訴する人は死罪を覚悟して行なうようなことＴＶの時代劇でやってましたけど？
だから天ヶ崎さんは、この直訴に勝っても負けても死ぬしかないんじゃ……？」

「そ、そういえばそんな話聞いた覚えあるわ。
……千草姉ちゃん、そこまで覚悟を決めてたんか」

「……そうなんか。
だったらウチも話ぐらいは聞いてあげなアカンな。
死を覚悟してまで直訴するなんて、生半可な覚悟やないわ」

何かどんどん大げさになっていっとる!?
いや、確かに長の娘を誘拐なんかしたら死罪になってもおかしくはあらへんけど、この子達が言うとるのは絶対どこか間違うとるわ!!!

っていうか、小太郎も信じてるんじゃないわ!!!

「……でもなぁ、そもそもウチに関西呪術協会を選んでほしいと本当に思ってるかどうかわからんしなぁ。
もしかしたら実は西に戻ってほしくない人で、ウチに危害を加えに来たのかもしれんし」

「そ、そんなことあらしまへん!

ウチは木乃香お嬢様に、是非とも次代の長になってほしいと思っております！」

「……修行も何もしてないウチが次代の長て……。他の次代の長候補の人達って、修行も何もしていないウチよりも駄目なんか？」

「え！？　……駄目、というワケやありまへんが、力不足は否めまへんな。

正直な話、最近の関西呪術協会は東に比べて落ち目どす。関西呪術協会を立て直すためには、やはり木乃香お嬢様のお力が必要なんどす」

「……ウチのような素人が長になっただけで、関西呪術協会を立て直せるとは思えへん。

それこそ長となるための修行を積んできた人達の方が立派に組織をまとめれるんやないの？

ウチは今まで普通の女子中学生やったから、帝王学なんか学んだことないで」

「いえいえ、細かいコトはウチら下々の者にお任せくださいませ。木乃香お嬢様は今は眠っているそのお力をウチらに貸していただければ、それだけで結構ですえ」

「……黙って聞いていれば、天ヶ崎千草！

どう考えても木乃香お嬢様を操り人形にする気ではないか！？」

ちっ！　うるさい小娘やな。

……まぁ、ウチもどう考えても、今の理由は苦しかったからしゃあないか。

しかし、木乃香お嬢様はおっとりしてそうな方と思ってたのに、実際に話してみると頭が回りますな。

残念や。自発的に西に戻ってきてくれたら、素晴らしい長になれたやろうに……。

「あの～、天ヶ崎千草さん。

危害を加えるつもりは無いと言うのなら、僕達の後ろに隠れている人は誰ですか？

伏兵を置くなんて、どう考えても危害を加えるつもり満々だと思うのですが？」

「な、何のことどすか！？」

新入りのことがバレとる！？

新入りが隠れていることを知っているウチでさえも、新入りがど

こに隠れているかわからへんのに！？

「だから表情と目線でわかりますって……。
僕達の後ろを探るように見たことが何度かありましたし、そもそも今の焦り方は自白しているのと同じです。

というわけで、障壁を再び張らさせていただきます。そんな人の前に木乃香さんを無防備で立たせて置くわけにはいきません。
そして茶々丸さん、学園長を通じて関西呪術協会に連絡を」

「うぐっ！？」

「へぇ～、お前、ネギって言ったな。やるやんか！
治癒術師と聞いてたから期待してへんかったけど、結構楽しめそうや！」

「千草はんは駄目どすなぁ～」

……もう、ウチ泣いてもええよね？
どうせウチなんか……。

くそっ！

もうこうなったら力ずくでいくしかあらへん。本山に連絡をされたらマズイ。

……よし！

『無間方処の咒法』発動や。これでもう逃げられへんで、坊や達！！！

「ええいっ！

こうなったら力ずくで木乃香お嬢様を頂戴いたします！」

「大丈夫かい、千草さん？

……僕にはファッションセンスというものはわからないから、何とも言えないけど……」

「気にせんといて……って、何でコッチに来るんや、新入り！？」

水たまりを媒体にした転移術で、コッチに新入りが来よった！？

『無間方処の咒法』で閉じ込めてるし、素人が5人もいるから後

ろに逃げられる心配はあらへんけど、ここはどう考えても挟み撃ちにするところやろ！？

「……無理だよ。

彼は僕のことに気づいていたから不意打ちは無理だし、お姫様達を守っている障壁は後方部がとても厚くなっている。前方部は薄いからワザとだろうね。

千草さんと話している間にも、彼らの影で千草さん達から死角になっている障壁後方にトラップがどんどん仕掛けられていってたし……。

あそこまでやられると面倒だ。それならコッチから攻めた方がいい」

「……気づかれちゃったか。魔法の隠蔽には自信があったんだけどなぁ。

……？　……ッ！？」

可愛い顔してホンマにけったいなことしまんなぁ、あの坊や。

アレ？　新入りの顔みて驚いてるけど、何かあったんやろか？

もしかして知り合いか？

「……ちょっと聞いていいかな？
何で君がここにいる？」

「……何で、とはどういうことだい、ネギ・スプリングフィールド君？
僕は今まで君と会った覚えはないけど」

「ああ、僕も君と会ったことはないね。
しかし、多分君は僕が知っている人……イヤ、違うな。年齢があわない。少なくとも子供ではなかったから、弟とか息子？

……君は“アーウェルンクス”だろう？」

た、確かに新入りの名前は“フェイト・アーウェルンクス”のはずや。
何でこの坊やが新入りの名字を知ってるんや？

「天ヶ崎さんの表情を見る限り、当たりのようだね。
もう一度聞く。何で君がここにいる？」

「……君が僕の何を知っているか知らないけど、まぁ教えてあげよう。僕の名前はフェイト・アーウェルンクス。

ここにいる理由は研修だよ。イスタンブールの魔法協会から日本の関西呪術協会へ、日本の呪術を学びにね」

「……戯言をよくも。

……天ヶ崎さん！　あなたは彼が何者か知っているんですか！？」

「な、何のことや！？」

「彼は……アーウェルンクスは、

“見た目5～6歳の女の子”を“誘拐”して、
その女の子を怪しげな“儀式”の“生贄”にして、
“世界を滅ぼそう”とした、
“魔法世界全土に指名手配”されている
“秘密結社”の一員ですよ！！！

今度は木乃香さんを何かの儀式の生贄にする気かっ！？
そんなことはさせない！　木乃香さんは僕が守るっ！！！」

……。

……。

……な、

「「「「「「「「何だ(や)ってーーーっ！？」」」」」」」」」

「……人聞きの悪い言い方をしないでくれないかい」

女の子を生贄に！？　新入りも否定せんし！？
何で新入りがこんなことに参加したのか不思議やったけど、木乃

香お嬢様を生贄として狙っていたんか！？

第三十三話　京都編？　直訴（後書き）

別ニ嘘ツイテナイデスヨ。
チャント本当ノコトダケ言ッテマスヨ。

部活巡りでのちうたんとのときを思い出していただければわかりますけど、ネギはなるべく嘘つかないようにしてますし、嘘をつくにしても必要なこと以外は嘘つかない、キルアみたいな嘘のつき方しますよ。

……僕（ネギ）は悪くない。
だって、僕（ネギ）は悪くないんだからっ！

木乃香の長い沈黙部分では、ネギからの念話を聞いています。
これでいろいろと関西呪術協会にチクることを確保しました。

それと“直訴”についてですが、実際は“直訴したから死刑”、ということは少なかったそうです。
ちゃんと正当な理由があったら、もしくはその直訴に勝訴したら無罪放免だったらしいですね。詳しくはＷｉｋｉで。

……もちろんネギは知っててやってますがね。
ネギ君絶好調。

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた
カモ：去勢された＋『仮契約（パクティオー）』儀式の手伝い
鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち
エヴァンジェリン：紅茶吹かされた
バカレンジャー：勉強地獄
学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血
さよ：知らないうちに成仏させられるところだった
魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という絶望
愛衣：幼児退行させられた
高音：露出狂の嫌疑かけられた
刀子：露出狂の嫌疑かけられた
バレーボール：破裂させられた
タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ＋マダオ就任
刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任
明日菜：失恋
関西呪術協会：変態集団疑惑　↑　ｎｅｗ！
天ヶ崎千草：勝っても負けても“死”？　↑　ｎｅｗ！
“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”：“ようこそ（コズモ・エンテレケイア）誘拐犯”　↑　ｎｅｗ！

第三十四話　京都編？　正正堂堂！

――――近衛近右衛門――――

ついさっきネギ君達から連絡があった。
茶々丸君経由であらかじめ決めておいた暗号が送られてきたのじゃ。

“敵襲アリ”
“敵は４名”
“関西呪術協会に連絡求む”
“場所は本山麓”
“待ち伏せされた”
“結界で隔離される可能性アリ”
“今のところ怪我人ナシ”
“戦闘の可能性大”
“犯人はおそらく木乃香を無理矢理にでも西へ連れ戻したい一派”
“殺気までは感じず”

暗号を解読するとこんなところじゃ。
解読といっても、数字とアルファベットの羅列を旅行前に渡された暗号表で照らし合わせるだけじゃったがの。

……ネギ君から念話傍受などの可能性があるからと暗号表を渡されたときは大袈裟と思ったが、実際に必要になるとはの。
ワシの見通しが甘かったということか。まさかこんな馬鹿なことを仕出かす奴らが実際におるとは……。

「ガンドルフィーニ君、君は用意しておいた長距離通信用の魔法符でネギ君との連絡を試み続けてくれ。ただし、戦闘中の可能性があるので邪魔にならないような出力で頼む。
ワシは関西呪術協会にこのことを伝える」

「ハッ！」

どうやらネギ君達は結界に閉じ込められたらしく、連絡がとれなくなってしもうた。
やれやれ。ガンドルフィーニ君に無理言って学園長室に詰めてもらっていて助かったわい。ワシ1人じゃ手が足りんからの。

prrrrr……、prrrrr……、prrrrr……。

……何をしとるんじゃ、詠春は？　せっかく詠春個人の携帯にかけているというのに。

本来なら公式回線で関西呪術協会へ連絡しないといかんが、緊急事態だから仕方あるまい。今は一分一秒を争うのじゃ。

……イヤ、向こうでも本山麓で結界を張られたとなると、気づかぬわけあるまい。

それの対応に手間取っておるのか？

「……心配ですね」

「なぁに、ネギ君なら大丈夫じゃろ。エヴァもついておることじゃしの。

あの子達に勝てる者など、麻帆良でも数えるぐらい……というか誰も勝てんよね？」

「た、確かにそうですが……」

「……フォ、フォッフォッフォ、安心せい。ネギ君ならきっとうまくやってくれる。
あの子なら、むしろうまくやりすぎることの方が心配じゃな。フォッフォッ……アレ？
これってマジでやばいんじゃないかの！？」

「……っ！？　ソッチの方が心配ですねっ！？」

マズイ！　ネギ君が何を仕出かすか全然わからんぞ！？
“正当防衛”という名目が十分すぎるほどにある！
ネギ君なら木乃香達の安全を最優先として、尚且つ関西呪術協会に怒られないぐらいで事態を収めてくれるじゃろうが、ネギ君はその収め方の判断基準がギリギリすぎる！
きっとネギ君のことだから、関西呪術協会にとって“文句を言いたいけど、理由があるから文句は言えない”ギリギリレベルまでのことを仕出かすぞい！！！

婿殿！　詠春！　早く電話に出ておくれ！！！
本山が！　京都がピンチなんじゃ！！！

お！？　繋がった！？

「お待たせしました、お義父さん」

「おお、詠春か！？　ソチラでは事情を把握しとるかの！？　木乃香達が本山の麓付近で襲われているらしいのじゃ！」

「……やはりそうでしたか。先ほど侵入者防止用の『無間方処の咒法』が勝手に発動したらしいです。おそらく邪魔が入らぬように犯人が利用したのでしょう」

「うむ！　実は少し前にネギ君達から連絡があっての。敵は４名。待ち伏せされていたらしく、連絡が来たときは怪我人はいないらしいが、今ではどうなのかわからん。おそらく『無間方処の咒法』のせいなのじゃろうが、ネギ君達と連絡がとれなくなっているのじゃ！　そして犯人はおそらく木乃香を無理矢理にでも西へ連れ戻したい一派らしいが、殺気までは感じなかったらしいぞい！」

「詳細な情報をいただき、感謝します。
今部下がありったけの結界破りの装備を用意しているところです」

「悠長にしている時間はないぞい！
ネギ君が、ナギの息子が『無間方処の呪法』に閉じ込められておるのじゃ！！！」

「落ち着いてください、お義父さんっ！
確かにネギ君のことは心配ですが、話に聞いているネギ君なら私達が到着するまでは持ちこたえてくれるでしょう。
他に刹那君もいますし、お義父さんが依頼してくれた護衛がいるのでしょう？　逸る気持ちはわかりますが、こんなときだからこそ落ち着いて行動しないと……」

「これが落ち着いていられるか！
考えてもみい！　ナギが『無間方処の呪法』に閉じ込められたとしたらどうする！？」

「は？　ナギがですか？
……そうですね。あの単純馬鹿のことですから、力ずくで無理矢理破ろ……お義父さん？」

そうじゃろうなぁ。
ナギなら力ずくで無理矢理破ろうとするじゃろうなぁ……。

そしてネギ君は、そのナギの……

「……ネギ君はやっぱりナギの息子なんじゃよ」

「……いやいや、仮にも関西呪術協会本山の侵入者防止用の『無間方処の咒法』ですよ？
そんな簡単に、１０歳の子供が力ずくで破るなん「ドォーーーーンッ！！！」……え？」

……何、今の音？
電話の向こうから爆発音が聞こえたんじゃけど？

「……が、学園長、今ネギ先生と一瞬だけ連絡が取れました。
“全員無事、ただし犯人除く、まだ手が離せない、コチラから連

絡し直す”、……だそうです」

……間に、合わなかった？

え？　犯人生きてるよね？　いくら何でも木乃香達の前では殺人は犯さないよね？

「……詠春？」

「すいません。今すぐ私も現場に向かいます。ネギ君達の無事を確認し次第、コチラからあらためてかけ直「ピーポー！ピーポー！ピーポー！」……何で本山でパトカーのサイレン音が！？」

「……明らかにネギ君じゃなぁ」

「はぁっ！？

と、とりあえず現場に向かいます！　それでは失礼！！！」

……どーせ、アレじゃろ？
一般人に聞かれたとしても、問題ない警戒音だからじゃろ？
あんなもん本山の麓で鳴り響かせたら、本山から術者がすっ飛んでくるじゃろうからな。

……う、また胃が痛くなってきた。胃薬を飲まんと。

「学園長、水を持ってきます。
……それと私にも胃薬をください」

「……すまんの。好きなだけ飲むとええ」

……明日はガンドルフィーニ君を休ませんといかんな。代わりに他の先生を呼ばんと。

念のため、明日は2～3人来てもらおうか。
……道連れは多い方がええしのぉ。フォッフォッフォ。

――桜咲刹那――

「生きている人、いますかー？」

「ピーポー！ピーポー！ピーポー！」

……さ、参道が……鳥居が……。
ネギ先生、いくら何でも今のはオーバーキルでしょう？

ネギ先生がとった行動はこうだ。

まず、アーウェルンクスという白髪の少年に敵味方全員の注目が集まった瞬間、ネギ先生を含めた私達全員を障壁で防御する。

そして次に鳥居もスッポリ覆うぐらいの回廊状の結界で、『無間方処の呪法』範囲内の参道を全て覆う。これは敵を逃がさないためだ。

ここで奴らもネギ先生のしていることに気づいた。

しかし、障壁があった上、ネギ先生得意の高速詠唱による魔法の前に妨害が間に合うはずもなく、私達を防御している障壁の外、つまり奴らを閉じ込めている結界内でネギ先生の攻撃魔法が放たれた。

奴らに向かって放たれた『雷の暴風』は『無間方処の呪法』のせいで、威力がなくなるまでに１０周はループしてたぞ……。

しかもネギ先生が張った障壁と『雷の暴風』はおそらく特殊な術式にしていたんだろうなぁ。私達を守っていた障壁にぶつかって『雷の暴風』の威力が減衰するようなこともなかったし。

……あ、向こうの空間に光の亀裂が見えてる。

『無間方処の呪法』の術の基点は、壊れた鳥居のどれかにあったのかな？

っ！？　じゃあ、威力がなくなって攻撃魔法が消滅したんじゃなくて、『無間方処の呪法』の外に飛んでいったのか！？

……ハハハ。長になんて言おう、この惨状。

っていうか、何？　このパトカーのサイレン音？

「ふむ、さすがはアーウェルンクス。こんなんじゃ倒せないか。犬上小太郎君も無事か。けど、これで残り2人だ」

「……やってくれたね、ネギ・スプリングフィールド君。有無を言わずに先制攻撃か。そんなところは君の父親に似てるね」

「ムッ、取り消してくれ。僕はあんな出鱈目でバグキャラな父親と似てるわけないじゃないか」

「ないない。それはない。っていうか、ナギよりお前の方が酷いわっ！！！」

生きてる!?　良かった、無事だったんだな！
敵の心配をしなきゃならないのが意味不明だが、木乃香お嬢様の前で死人を出すわけにはいかないからな！！！

しかし、アーウェルンクスという少年は無傷か。障壁で防御したらしいが……何だ？　あの曼荼羅のような障壁は？　あれでネギ先生の攻撃を防いだのか？
犬上小太郎はところどころ焦げているが、そこまで大きなダメージはないようだな。でも、もう疲れ果ててヘロヘロになってる。気を使い果たしたようだな。……あ、ボロボロになった護符を捨ててる。

……天ヶ崎千草と月詠は……焦げてる。真っ黒に。
何か痙攣もしているぞ？　大丈夫か、アレ！？
天ヶ崎千草は後衛の術者だし、月詠は速度重視の剣士で防御力が低そうだったからああなったみたいだな。

天ヶ崎千草は咄嗟に式神で防御したようだったけど、３週目ぐらいのループで式神が全部やられてた。
何というか見てて切なかった。前にテレビで見た、雪崩に飲み込まれる瞬間の人を見てる気分だった……。

月詠はいくら速度重視でも、閉じ込められて逃げ場がどこにもない状態だったらどうしようもなかったみたいだ。
天ヶ崎千草の後ろに隠れたみたいだったけど、天ヶ崎千草が倒れ

たあとは為す術もなく攻撃魔法に飲み込まれた。

「ガンドルフィーニ先生と連絡がとれたことから、『無間方処の呪法』もちゃんと破れた。これで本山からの応援も直ぐに到着する。鳥居も随分壊したけど……ま、しょうがなかったということで」

「明らかに駄目じゃねーかっ！？
どーすんだよ、この惨状！？」

「お、落ち着いてください、長谷川さん！」

それは私が一番突っ込みたかったですから……。

「正当防衛、正当防衛。
『無間方処の呪法』を破るにはこれが効果的だったんですよ。どうやら『無間方処の呪法』の術式の基点を鳥居に仕掛けていたみたいですから。
それにあのアーウェルンクスは危険です。最低でも全力のエヴァさんと同等クラスと思って相手してください」

やめて！　そんな人達が本山の近くで戦わないで！！！
本山が消滅しちゃうでしょう！！！

「……まぁ、犯人をちゃんと確保して、言い訳出来るようにしときましょうか。
僕1人でいいです。皆さんは防衛に専念してく……早いな、もう応援が来た」

「……逃げるよ、小太郎君」

「ま、待てや！
ここまでコケにされておいて、このまま帰れっちゅーのか！？」

「無理だよ。君も限界だし、このままだと本山の応援と挟み撃ちにされる。
僕が千草さんと月詠さんを「させないよ」……転移魔法？」

あ、天ヶ崎千草と月詠の下に魔法陣が現れたと思ったら、2人の姿が消えた。
ネギ先生の転移魔法か。

それに本山の方向からこちらに向かってくる人影が見える。
……さすがにあんなことしたら本山の術者も気づくか。

「ネ、ネギっ!?　2人をどこやったんや!?」

「ランダム転送だから知らない。転移先とかの指定すると時間かかるからね。
この場から半径5km以内にはいるだろうから、運が良ければ逃げるときに会えるんじゃない？
彼女達は、君達が逃げたあとにゆっくりと回収させてもらうよ」

「……ということは、逃げてもいいということかな？」

「うん。いいよ」

「ちょっ!?　ネギ先生!?」

「言いたいことはわかってます、刹那さん。

しかし、さっきも言った通りアーウェルンクスは危険です。これ以上、木乃香さん達非戦闘員がいる状況で戦うのは避けたいです。追撃は関西呪術協会の人達にお任せしましょう。

……“ょぅι゛ょ誘拐犯”を野に放すのは心苦しいですが、ここは安全策をとるべきです」

「……お言葉に甘えさせてもらうよ。行こう、小太郎君。それとその“幼女誘拐犯”というのはやめてくれないかい」

「チィッ！　……ネギっ！！！
この借りは絶対返すからなっ！！！」

……とりあえず、危険は去った、のか？

あの2人（しかも1人は“幼女誘拐犯”らしい）を逃がすのは不安だが、確かにこれ以上木乃香お嬢様を危険な目に晒すのは避けたい。

しかもネギ先生が言った通り、あのアーウェルンクスとやらがエヴァンジェリンさんと同等クラスの力を持っていたとしたら、これ以上ここで戦うのはマズイ。

いくらネギ先生でも木乃香お嬢様達を守りつつ戦うというのは難

しいだろうし、引いてもらえるのなら引いてもらった方が良かっただろう。

……でもこの惨状、本当に長に何て言おうか……。

……まぁ、過ぎ去ったことは仕方がない。

とにかく今は木乃香お嬢様達を安全な本山にお連れするのを優先しよう。そのためにはまずこちらに向かってきてる本山からの応援と合流して……。

「……まぁ、追撃（ついげき）は関西呪術協会にお任せしますけど、追（お）い撃（う）ちぐらいはしておきますか。

ラス・テル・マ・スキル・マギステル……」

っ！？　やめてぇーーーっ！　本当にもうやめてください！！！
これ以上、本山を滅茶苦茶にしないでぇーーーっ！！！

「……走れよ　稲あっ！？　……チッ！
水たまりから転移された。昨日降った雨が仇となったか」

……よかった。
あやうく『千の雷』が本山間近で放たれるところだった。さすがにあんな魔法撃たれたら、隠蔽工作が更に大変になったろうし……。

ああ、もう！　少しは自重してください、ネギ先生！！！

――フェイト・アーウェルンクス――

いや、困ったね。
まさかこんなことになるとは……。

僕が関西呪術協会に潜り込んだ目的は2つ。
“麻帆良に封じられているであろう、彼の詳細な情報の入手”
“東西の対立激化による、麻帆良のダメージ”

……だったんだけど、まさか“千の呪文の男（サウザンドマスター）”の息子が邪魔するとは。
千草さんからネギ君の名前を聞いたときはそれほど重要視していなかったけど、こうなったからにはネギ君に対する認識を改める必要があるみたいだ。

彼が麻帆良に封印されていることは確実。
それでも詳細な情報が手に入れれるなら手に入れたいから、近衛詠春あたりから情報を手に入れたかったのに……。

近衛詠春が彼のことを知らないということはないだろう。

近衛詠春は“千の呪文の男（サウザンドマスター）”の盟友で、麻帆良のトップである近衛近右衛門の娘婿であり、関西呪術協会の長。
何かあったときのために、少なからず事情は聞いているはずだ。

それと麻帆良に封印されている彼を復活させるとき、麻帆良の力が強いとイレギュラーが発生するかもしれない。そのためにも出来うる限り、麻帆良の力は今のうちに削いでおきたかった。
だから日本の東西の組織を争わせてみようかと思って、千草さんに協力をしたんだけど……。

……いや、困ったね。
まさかネギ君が“完全なる世界（ぼくたち）”のことを知っていたなんて……。

さて、これからどうしようか？
このまま尻尾を巻いて逃げる、というわけにもいかないね。

これで“完全なる世界（ぼくたち）”がこの件に関わっていたことが知られたから、東西の対立激化は無理だ。もしかしたら逆に東西が融和して、麻帆良の力が増すかもしれない。
そうなったらわざわざ僕が来た意味がなくなる。

ここは一つ、もう少しばかり引っ掻き回すべきだね。

最低でも西にダメージを与えて、麻帆良に味方出来る余裕をなくすぐらいは必要だ。

となると、やはり千草さん達を助け、内紛扱いで西にダメージを与えた方がいいか。

それとネギ・スプリングフィールド君についても、少し調べる必要がありそうだ。

少し対峙したぐらいだけど、もしかしたら彼はイレギュラーになるかもしれない。

せめてネギ君の実力がどのようなものかぐらいは調べよう。

……それにしても、

“見た目5～6歳の女の子”を“誘拐”して、

その女の子を怪しげな“儀式”の“生贄”にして、

“世界を滅ぼそう”とした、

“魔法世界全土に指名手配”されている

“秘密結社”の一員、か。

……別に嘘は言われてないけどさ。

第三十四話　京都編？　正正堂堂！（後書き）

フン！　くだらんなあ～。一対一の決闘なんてなあ～～～っ。
このネギの目的はあくまでも“平穏”！　あくまでも“平穏”に生きること！！！

小太郎君のような戦士になるつもりもなければ、ロマンチストでもない……。
どんな手をつかおうが……最終的に……、
勝てばよかろうなのだァァァッ！！！

ょぅぃ　ぉょ誘拐についての反論？　させるわけないじゃないですか。
こういうのはレッテルを貼ったモン勝ちなんですよ。

前哨戦はネギの勝ち。
もちろんまだまだ終わりじゃないです。
もう一波乱か二波乱はあります。

というか、戦闘にすらなっていないですね。

そしてフェイトが関西呪術協会に潜り込んだ理由はこのように致しました。
他に理由が思いつきません……。

それと今回のことでの被害者リスト入りはありません。
一応は戦闘という状況でしたので、被害者加害者の関係ではないからです。……ないですよね？

それと次の木曜更新は仕事が忙しいため無理そうです。
もちろん木曜日に更新出来たら更新しますが、おそらく次の更新は日曜日になりそうです。ご了承ください。

……多分、日曜日なら大丈夫？　のハズです。

第三十五話　京都編？　はじめてのチュウ

――――ネギ・スプリングフィールド――――

「アーウェルンクスじゃと!?」

「はい、ネギ君からいただいた映像を確認したところと、私達が２０年前に戦った本人ではないようですが……確かに似ています。本人も否定していませんでしたし、おそらく間違いないかと……」

現在、詠春さんと一緒に学園長に報告中です。
何とか一段落つきました。

無事に本山に到着出来ましたし、天ヶ崎千草と月詠もちゃんと回収出来ました。まだ座敷牢で寝てますけどね。

え？　２人はランダム転送だから場所わからないはずなんじゃ？

別に嘘ついてませんよ。
転移させる前に、彼女達の衣服に発信機を先に転移させておいたんです。そうすれば茶々丸さんが居場所を特定出来ますからね。
まぁ、衣服も大部分焼け焦げて、ちょっとあられもない姿になってましたけど。

「……ムゥ、しかし何故に奴が関西呪術協会に……」

「そこまではまだ……。
主犯である天ヶ崎千草の目が覚めたら事情を聞くつもりなのですが……」

「えーっと、僕の見立てでは明日までは起きれないでしょうねぇ。
怪我は治しておきましたけど……」

ごめんなさい、ちょっとやりすぎました。
『無間方処の咒法』で『雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）』があそこまでループしたのは予想外でした。
小太郎君たちのことを考えて威力を弱めにしたのが逆に仇となったようです。

それにフェイトも悪いんですよ。
フェイトの曼荼羅障壁で『雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）』が減衰してましたし、もしかしたらそのフェイトの後ろに『無間方処の咒法』の基点があったのかもしれないのです。
だいたい、あの『無間方処の咒法』を準備したのアッチですからね。
僕はただ『雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）』を放っただけです。ループについては僕の責任じゃありません。

だから、僕は悪くない。

「だ、大丈夫なのかね？
スマンの、ネギ君が迷惑掛けたんじゃ……？」

「ハハハ、確かに物損被害はかなりありましたし、ネギ君から先制攻撃を仕掛けたみたいですが、アーウェルンクス相手では仕方がないでしょう。
しかも『無間方処の咒法』で閉じ込められ、戦闘が避けられない状況でしたから尚更です。
何より木乃香を守るための行動でしたしね。犯人が力ずくで木乃香を攫おうとしていたのも確認出来てますし」

「そ、それなら良いのじゃが……。
本当に何か問題はないのかね？」

「……まぁ、あると言えばあるのですが……」

「な、何がじゃ！？」

「いえ、映像で天ヶ崎千草が、

“次代の長候補は修行も何もしていない木乃香よりも駄目”とか
“次代の長候補は力不足”とか
“最近の関西呪術協会は落ち目”とか、

散々言いたいこと言ってまして。しかも“木乃香を次代の長にする目的”で行動していたことまでシッカリ言ってました。
おかげで一緒に映像を見てた次代の長候補の身内達が激怒しちゃって、彼女が起きたら大変だなぁ……、と」

「ああ、確かにビキビキと青筋立ててらっしゃいましたよねぇ」

「……うわぁ……」

「逆に木乃香の株は上がりましたね。
天ヶ崎千草とのやり取りも冷静にこなし、現在の自らの立場をち

ゃんと理解していることなど、それこそ一緒に見てた次代の長候補の身内達からも称賛の声が上がりましたよ」

すいません。裏で糸引いてたの自分です。
木乃香さんは腹黒くなってないですから安心してください。

「フォッフォッフォ、それは不幸中の幸いじゃの」

「ええ。これで木乃香が東西どちらを選んでも、特に問題は起きなさそうです。
西を選んでも家督争いが起きなさそうなことを理解してくれましたし、東を選んでもこの件のおかげで文句は言われないでしょう。
さすがにこんなことがあって、“それでも西に来い”なんて言える人はいないはずです」

「おお！　それは何よりじゃ！」

「今のところはこれぐらいですね。
何かわかり次第、あらためて連絡します」

「ウム。それではネギ君やウチの生徒のことをよろしく頼むぞい。
ネギ君もシッカリとな」

「はい、学園長」

「お任せください。それでは……。

……うん、改めてありがとうございます、ネギ君。木乃香を守ってくれて」

「いえいえ、コチラこそやむを得なかったとはいえ、参道とか鳥居とか壊してしまいまして申しわけありません」

原作でも小太郎君とか結構壊してましたし、別に問題にされないと思いますがね。

まぁ、社交辞令ということで謝っておきましょう。

「ハハハ、気にしなくていいですよ。

君達に怪我がなくて何よりです」

「ありがとうございます。
それではこれからしばらくの間、生徒と一緒にお世話になります」

「歓迎させていただきますよ。
予定では、今日1日はゆっくりする予定でしたね。
関西呪術協会の視点から見た裏についての説明は明日に。説明が長引かなければ明後日以降は京都観光と聞いていましたが……」

「ええ。……しかし、アーウェルンクスが捕まっていない以上、迂闊にここから出るのは危険だと思います。
かといって、これから麻帆良に戻ろうとしたら途中で襲撃されるかもしれませんし、何より皆さん移動で疲れています。せめて今日1日は休ませてあげたいですね」

「その方が良いでしょう。
その間に何としてもアーウェルンクスを捕まえます、……と言いたいところなのですが、奴は強敵です。生半可な追っ手では返り討ちにあってしまうでしょう。
奴に対抗出来そうな使い手は、関西呪術協会にも数えるぐらいしか……」

そうでしょうねぇ。
僕は前世で結局会わなかったから今日で初めて会ったんですけど、

確かに強いですね。今の僕ほどじゃありませんが、駄目親父クラスの力は確かに持ってます。

それに僕なら勝てるとはいえ、それはあくまでタイマンでの話であって、素人５人を守りながらというのはつらいです。

前世で僕がした修行は１対１か１対多ばっかりで、多対多は修行しませんでしたしねぇ。

……“ぼっち”とか言うなっ！！！

あれ？　何か変な電波が……？

まぁ、最悪の場合は転移魔法で帰ればいいだけです。

京都一麻帆良間を１０人ぐらいで転移するのは疲れますが、出来ないわけじゃありません。

エヴァさんの家に転移先となる魔法陣も用意してますしね。

「今日は休んで、明日は予定通り説明をしていただきながら様子を伺い、アーウェルンクスの出方を待つのがいいですかね。
諦めて京都から逃げてくれれば、それに越したことはないですし」

「そうですね。まずは身体を休めることでしょう。
……生徒の皆さんは大丈夫ですか？」

「今のところは特に問題はなさそうです。
心配（ちうたん）してた人は戦闘が怖かったというより、僕への突っ込みに疲れてたみたいですし。

……というか、全員が僕のとった行動に疲れてたみたいです。
特に刹那さん」

「ハ、ハハハ……、彼女にもお礼を言わなければなりませんね。
よくぞ今まで木乃香を守り続けていてくれました。

それでは私はこれから部下から現在までの状況の報告を受け、新たな指示を出さなければいけません。それが済み次第、皆さんに改めて挨拶に行きますので、もうしばらく休憩していてください。
ネギ君は木乃香達のことをよろしくお願いします」

「はい、わかりました。
確か木乃香さんが昔使っていた部屋でしたね。僕もそこに行きます」

「ええ、場所は部屋の外に待機している者に聞いてください。
……それにしても、ネギ君を見ているとナギを思い出しますね」

「そうなんですか？
確かに顔は父親似と言われますが……」

「フフフ、顔は似ているけど、性格はナギと正反対……のように感じますが、やはり根っこはナギと同じですよ」

ゲェッ！？
あの駄目親父と同じ！？

勘弁してくださいよ、詠春さん……。

「（え？　何で微妙そうな顔？）
それにしても、よくアーウェルンクスのこと知っていましたね。魔法世界の雑誌なんかはコチラに持ち込めないはずになってますが……」

「ま、そこは蛇の道は蛇、と言いますか。祖父にいろいろお願いしまして……。
“紅き翼（アラルブラ）”の資料を手に入れたとき、“ようしゃ（コズモ・エンテレケイア）誘拐犯”についてのことも載ってましたから」

「（……何か変な感じが？）
ああ、確かにそうですね。
“紅き翼（アラルブラ）”と“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”は切っても切れない関係ですから、“紅き翼（アラルブラ）”について調べれると自然に彼らにも辿り着きますか。
そういえばネギ君は、私の映っている映像を見て神鳴流を習得したと聞きましたが……」

「え？　……えーっと、何と言いますか。
技を盗むような形になってしまいまして……」

「ハハハ、まぁ、そういう形でなら仕方がないでしょう。こう言っては何ですが、盗まれた私の方が悪いわけですから。
しかし、いったい誰がそんな映像を？
“紅き翼（アラルブラ）”の映画や映像が魔法世界で出回っているのは知ってま

すが、技を盗めるほどの詳細な映像を誰が？」

「え？　誰も何も、“紅き翼（アラルブラ）”のジャック・ラカンさんですよ？」

「！？　あの筋肉馬鹿ですかっ！？」

「え？」

「あっ！？　いや、ゴホン！　失礼しました。
……そうか、あの馬鹿かぁ。あいつだったらあり得るな。
それに“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”を
“見た目5～6歳の女の子”を“誘拐”して、
その女の子を怪しげな“儀式”の“生贄”にして、
“世界を滅ぼそう”とした、
“魔法世界全土に指名手配”されている“秘密結社”
なんて言うのはあの馬鹿ぐらいだな……」

ゴメン、筋肉達磨（ラカンさん）。
あなたのこと言い訳に利用させもらいました。

……まぁ、納得されるのも、自らの日頃の行いが悪かったということで。

それと技の映像を撮ったのがラカンさんとは言いましたが、“幼女誘拐犯”云々についてはラカンさんの映像とは言ってませんけどね。

別に勘違いされても構わないことですから放置しますけど。

「……えーっと、それでは、僕は木乃香さん達のところに行きますので」

「え？　ええ、お願いします。後で顔を出しますし、夕食は皆さんとご一緒しましょう。

それでは君、ネギ君を木乃香達のところへ……」

「かしこまりました」

さーて、本当にこれからどうしましょうねぇ。？

これでフェイトがこれで諦めて帰ってくれるならそれで良いですし、本山を攻めてきたとしても関西呪術協会の人達に任せればいいですよね。

僕が動くのは関西呪術協会の人達が全滅した後。それまでは木乃香さん達の護衛を最優先です。

“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”は人死にをなるべく出さないようにしてますから、気休め程度には安心できますしね。

……原作で、エヴァさんには平気で殺す攻撃してたようですが。ま、腹を貫かれるぐらいなら僕でも平気です。頭と心臓さえ無事なら『咸卦治癒（マイティガード）』で大丈夫ですし。

……というか、『咸卦治癒（マイティガード）』発動中なら心臓潰されても平気かな？　さすがに試したことないけど？

というか、今回の転生ではまだ大怪我したことないですからね。せいぜいが腕を切り落とすぐらいで……。

腹を貫かれるまではしたことありませんから、どうなるかわかりませんね。

……それになーんかまだ忘れてることがあるような気がします。

何だったかなぁ……？

「ネギ先生、こちらが木乃香お嬢様のお部屋です」

「あ、ありがとうございます」

「はい。
それではネギ先生の分のお茶をお持ちいたします」

「お願いします」

……改めて見ると、ここにいる人達って本当に巫女さんなんだよなぁ。
前世のアスナさん、木乃香さん、刹那さん、マナさんの巫女服姿を思い出します。
あれは眼福でした……。

まぁ、いいや。

過去を思い出すには、僕はまだ若いでしょう。

「失礼します。お待たせしました、皆さん。
学園長への報告は無事に終わ……おや、長谷川さん？」

「お帰り、ネギ君。
そうなんや、千雨ちゃん寝てもうてな。疲れてたみたいやから、
そっとしといてあげて」

あらあら、長谷川さん横になって寝ちゃってます。
まぁ、移動の疲れがあるでしょうし、魔法の戦闘なんか見てしまったら精神的にも疲れるでしょうね。
ファンタジーが嫌いな長谷川さんなら尚更です。

……でも、思ったより僕に対しては忌避感とか抱かれてないようなんですよねぇ。何ででしょ？
魔法バレの仕方が仕方でしたから、原作と違って嫌われると思ってましたのに、意外と普通に付き合ってくれてます。

仲良くしてくれるには越したことはないんですがね。

「お父様やおじいちゃんとの話し合いはどうやったの？」

「とりあえずは予定通りに日程を進めることにしますが、皆さんの意見を聞いてから最終的に判断します。
逃げた“ょぅι゛ょ誘拐犯（コズモ・エンテレケイア）”の足取りがわからない以上、麻帆良に帰るために今から本山の外へ出るのは危険です。
関西呪術協会の人達が“ょぅι゛ょ誘拐犯（コズモ・エンテレケイア）”を捕まえてくれるのを期待しましょう」

「確かにそうでしょうね。
この関西呪術協会の本山なら安全でしょう」

「そっかぁ。
せっかく里帰りしたのに、とんぼ返りになるんわ嫌やからそれがええわ。

……それじゃあ、ネギ君。
一段楽したところで、約束守ろーか」

ハ？　約束？
僕、何か木乃香さんと約束してましたっけ？

あれ？　何で明日菜さんと宮崎さんとエヴァさんが僕にジリジリ寄ってくるんですか？
あれ？　何で綾瀬さんが襖を閉めて、茶々丸さんと刹那さんが僕の肩を押さえて、僕が逃げられないようにしてるんですか？

――近衛詠春――

筋肉馬鹿（ジャック）の馬鹿野郎。
ネギ君がどこかズレていることはお義父さんから聞いてましたが、まさかジャックの映像が原因じゃないだろうな？

しかし、木乃香が魔法を知ってしまったと言われたときには、こんなことになるとは思いもしなかったですね。
木乃香が襲われたことはよくありませんが、これで木乃香の自由にさせられることが出来る。瓢箪から駒です。

それにしてもネギ君とはまだ少し話しただけですけど、本当に顔はナギの面影が強いですね。まぁ、性格はナギに似ずに礼儀正しくて真面目みたいですが。
でも、根っこはナギに似ている。やはり親子なんですね。

……根っこもあまり似ててほしくなかったなぁ。

……さて、あの子達に改めて挨拶をしておきましょうか。
夕食の時間にはまだ少し早いから、顔を出すぐらいですが。

先ほどは事後処理があったので、ほとんど事務的なことしかネギ君とは話せませんでしたし、何より木乃香ともあまり話せてません。
それと木乃香がお世話になっていることに対して、木乃香のお友達にお礼を言わねば。
うん、父親らしいこともようやく出来ますね。

それにしてもあの年頃の子供の成長は早い。小さかった木乃香があんなに大きくなって……。

お友達もたくさん出来ているようですし、やはり木乃香を麻帆良に送って正解でした。

魔法バレしたせいで刹那君とも再び仲良くなれたらしいですし、良いタイミングで魔法のことを知ってもらえたようです。

……考えてみれば、木乃香のお友達に挨拶するなんて初めてですね。

刹那君のことは木乃香の友達になってくれる前から知ってましたし。

参りました。何だか緊張してきましたね。

木乃香に恥をかかせないようにビシッと。だけどお友達を怖がらせてもいけない。これは匙加減が難しい。

世の中のお父さんは娘のお友達にどんな風に接しているのでしょうか？

しかし、木乃香の面倒を今まであまり見れなかったとはいえ、これでも私は木乃香の父。挨拶もしないままではいきません。

さて、木乃香の部屋はここですね。久しぶりにこの部屋から人の気配が感じられます。

木乃香が麻帆良に行ってからもこの部屋はちゃんといつでも使えるようにしておきましたが、ようやくそのことが実りましたね。

……しかし、人の気配はしますが、やけに静かですね？

「フハハハハハハ！
お前達がキスした場所は神楽坂明日菜が額、近衛木乃香が左頬、宮崎のどかが右頬だったよなぁ。
だが、ネギの初めての唇をもらったのはお前達ではないッ！　このエヴァンジェリンだーーーッ！！！」

「「「アアアァーーーッ！？」」」

「さすがマスター。皆さんが出来ないことを平然とやってのけられ

ます。
そこに痺れませんし、憧れません」

……何事？
今の叫びには木乃香の声も混じっていましたね？

「……ロマンチックとはかけ離れたファーストキスでした。
というか、エヴァさんいきなり何するんですか？」

「……エ、エヴァちゃん、何してくれやがるのかしら？」

「ウチは頬にだったのに……」

「ネ、ネギ先生（せんせー）の初めてが……」

「……ファァ……うるさいなぁ。
いったい何なんだよ？」

「……い、いやぁ。
エヴァにゃんが“ズキュゥゥゥン！！！”という感じで、ネギ坊主の唇を奪ったアルよ」

「順番を最後にしたのはこういう狙いがあったんでござるなぁ……」

「ネ、ネギ先生！　この墨汁で口をすすぐです！！！」

「あ、ソレ木乃香お嬢様が習字の練習に使ってた8年ぐらい前の墨汁ですけど……」

「もう固形化してるんじゃないのか？」

え？　本当に何ですか、この状況？

第三十五話　京都編？　はじめてのチュウ（後書き）

この嘴広鴻が、甘酸っぱくて思い出に残るようなはじめてのチュウなんぞネギにさせると思っていたのかァーーーーッ！！！

私は『読者を笑わせるため』にこの話を書いている！

『読者に笑わせるため』、ただそれだけのためだ　！

単純なただひとつの理由だが　それ以外はどうでもいいのだ！！！

……まぁ、このネタを予想してた人いたでしょうねぇ。

特にＤＩＯ＝エヴァは。

ネギは参道とか鳥居とか壊しましたけど、別に文句は言われません。

「関西呪術協会の人が襲ってこなかったら、僕もモノ壊したりしなくてすんだんですけどねぇ」

って言われたら反論できませんからね。

まぁ、心の中では言われているかもしれませんが、これぐらいな

ら“文句を言いたいけど、理由があるから文句は言えない”レベルでしょう。

そしてネギの中では、“腕を切り落とす”＝“大怪我じゃない”となっているようです。

やっぱりネギはどこかズレてます。

あと木乃香みたいなお嬢様だったら、習字の練習は墨から磨りますかね？

小学校の頃、一度墨から磨って墨汁作ったことありますけど、ああいうのって何故か磨っただけで何かもう満足しちゃうんですよねｗ

良い墨と良い硯を使えば違うらしいですが、もう１０年以上書道なんてやってないなぁ……。

それと現実での仕事が忙しくなりそうなので、しばらく週一更新が限度です。

仕事が片付き次第、週２更新へと出来るだけ早く戻したいと思いますが、９月いっぱいは週一更新となると思います。ご了承ください。

第三十六話　京都編？　地獄への扉

――――犬上小太郎――――

くそっ！　まんまとやられてもうた！
何とか俺らは逃げることが出来たけど、千草姉ちゃんと月詠は捕まってしもうてるやろな。

今は隠れ家の一つで潜伏中や。
どうせ追っ手が出てるやろうし、このまま計画を続けるか京都の外に逃げるか決めなアカンけど……。

「これでしばらくは大丈夫だろう。周りを確認してきたけど追っ手の気配はないよ。
……これからどうする、犬上小太郎君？」

「決まってんやろ！　千草姉ちゃん達を助けてネギに一泡吹かせるんや！　あそこまでコケにされて、このまま引き下がれるかい！
それに千草姉ちゃんが処刑されるのを黙ってみているわけにはい

かんやろ！！！

……新入り、お前はどうすんや？
というか、ネギの言ってたことはホンマなんか？　お前が日本に来た理由は、あの木乃香って姉ちゃんを手に入れるためなんか？」

「……まぁ、嘘はついてないね、彼は。
とはいえ、詳しくは話せないけど僕達にも言い分があるし、何より意味もなくそんなことを企んだわけじゃない。
そして日本に来た理由は探し物があったからだよ。今回のことに乗ったのは麻帆良に対してダメージを与えるため。西洋魔術師側も一枚岩じゃないってことさ。
別に僕達は女の子の誘拐を目的としているわけじゃない。別にあのお姫様が目的じゃないさ。

……いや、もちろん誘拐する必要があるなら誘拐するけど、それはあくまで手段であって目的じゃない。

というわけで、もう少しの間協力させてもらうよ。
僕は僕の目的のために君を利用する。君は君の目的のために僕を利用すればいいさ」

敵の敵は味方っちゅーわけか。
個人的にはコイツのことは気に食わんけど、俺1人で千草姉ちゃん達を助けれるとは思えへん。
今は猫の手でも借りたい状況や。コイツが何企んでるかはわからへんけど、贅沢いってる場合やあらへん！

「ところで君は動けるのかい？
ネギ君の攻撃から身を守るために、かなり力を消耗したようだけど……」

「こんなん何ともあらへん……って言いたいところやが、正直へトへトや。
治癒術師って聞いとったから油断したわ」

「そうかい。……なら、千草さんの奪還は明日以降にしよう。今日はもう休むんだ
京都中に網を張られているだろうし、本山も警戒しているだろうから今動くのはマズイ。
それに明日以降なら、逃げた僕達を探すために人手を使うために逆に本山の守りは薄くなるかもしれない。いくら何でも僕達が本山に攻め入るなんか考えてないだろうからね。その隙をつかせてもらおう。

それに千草さん達は重傷だった。今助けたとしても、逃げる途中で怪我が悪化して死んでしまったりしたら本末転倒だ。
取調べのためにもある程度治療はされるだろうから、本山の人達に治療を任せよう」

「……まぁ、確かに今すぐ動くっちゅーのは無理やな。しかし、本山に攻め入るなんか出来るんか？」

「大丈夫。僕に任せてくれ」

……コイツ、無表情やけど何か怒ってへんか？

“幼女誘拐犯”呼ばわりされたらしゃーないかもしれんけど、そんなん自業自得やない……あ、そういえばネギが「弟とか息子？」っちゅーてたな。

もしかしてコイツ自身が誘拐犯やなくて、親兄弟が誘拐犯やったんかな？

親兄弟がそんなこと仕出かしたもんやから、結局コイツ自身もその一味と思われてしもうて迫害されてきたんやろか？

迫害されたことから世の中全てを恨んでもうて、そして遂にはテロリストになったんか？

……そう考えれば、西洋魔術師に敵対しとる理由がわかるな。

何せ自分を迫害してきた連中や。麻帆良にダメージを与えたいってのは復讐のためかい……。

くぅっ！　きっとコイツも苦労してきたんやな！

「よし！　わかったで！
一緒に千草姉ちゃん達を助けて、西洋魔術師に一泡吹かせてやろうやないかい！！！

……あ、でも千草姉ちゃん達は大丈夫やろか？
直訴に失敗してもうたし、もしかしたら即刻処刑なんてことにならへんかな？」

「僕が事前に勉強してきた日本の歴……いや、何でもない。
まぁ、即刻処刑ということはないだろう。少なくとも背後関係を確認するために取り調べは行なうはずさ。
千草さん達の怪我もあるし、治療や取調べで2～3日は大丈夫じゃないかな。
（そして無性に君を殴りたくなったのは何故だろう？）」

「……そっか。そうやな。
なら、今は身体を休めなアカンな」

「そうした方がいい。
……そういえば周囲を見てきたときに飲み物を買ったんだけど、君もいるかい？」

「おお、スマンな」

結構気が利くやないか。
無表情で何考えてるかわからんから不気味に思ってたけど、考えを改めなアカンな。

え～と、これはコーヒー（無糖）でこれはコーヒー（微糖）、これもコーヒー（加糖）でこれがコーヒー（低糖）……。

って、全部コーヒーやないかいっ！？

――――神楽坂明日菜――――

「ハハハ、しかし木乃香も本当に大きくなりましたね。
どうです？　今日は私の部屋で一緒に寝て、麻帆良での暮らしのことを聞かせてくれないですか？」

「ゴメン、お父様。
皆と一緒の部屋で寝るわ。エヴァちゃんがネギ君に何仕出かすかわからんから見張っとかんと」

「……そうですか」

「こ、木乃香お嬢様……」

ちっ、競争相手が減ると思ったのに……。
大きな部屋を一つ借りることが出来たから、皆で一緒に寝ようっ

てことになったけど、ネギの隣に誰が寝るかはまだ決まっていない。
木乃香がお父さんと一緒に寝てくれれば、その分ネギの横で寝れる確立が上がるのに……。
せっかく里帰りしたんだから、今日ぐらいお父さんと寝ればいいじゃない。

え？　私はいつもネギと一緒に寝てるじゃないかって？

細かいことはいいのよ！
とりあえず、エヴァちゃんだけは絶対ネギの隣で寝させられないわ。何仕出かすかわかったもんじゃないもの！

……っていうか、ああ、もう！
ネギのファーストキッスがぁぁ～～～っ！！！

こんなことだったら寮のベッドで一緒に寝てる間にコッソリしておけばよかった……。
ううう～、せっかくじゃんけんで勝って、おでこにだけど一番手でネギにキスしたのに、最後の最後でエヴァちゃんに引っ繰り返されたわ。

ああ、もう！
飲まなきゃやってられないわよ！！！

……っていうか、これ本当にお酒？

「話には聞いていましたが、本当に日本の関東と関西では味付けが違いますね。
特にこの野菜の炊き合わせなんかは麻帆良で食べれそうにない味です」

「はっはっは、そうかそうか。ネギはこういう味付けが好きなのか。なら今度ウチに来たときに作ってやろう、茶々丸がな。

……しかし、なんだな。無理矢理キスした私が言うのもアレだが、随分と平然としているな。
ネギはファーストキスだったんじゃないのか？」

「いやぁ、確かに唇にキスされたときは驚きましたけどね。
今は何だか自分でも不思議なくらいに落ち着いてます。突飛過ぎて現実感がない、というわけなんでしょうか？　自分でもよくわからないです。
（何だか最近は心が乱れることが本気でなくなってきたなぁ）」

「……そ、そうなのか。
（くっ、失敗した！
惚れ薬の件でそろそろ目覚める頃合だと思っていたのだが、ネギはまだ色恋についてわかっていなかったみたいだな……。

やはり焦らずにもう少し待てばよかったか……）」

むぅ～、ネギはネギでキスされたことに全然動じていないみたいだし……。

１０歳の子供ならそういうことがわからなくても仕方がないのかもしれないけど、キスしたんだから少しは私達のことを意識してくれてもいいのに。

はぁ～～～、それにしてもネギの言った通りに本当に襲われるなんて思わなかったわ。やっぱりコッチの世界には危険なことがたくさんあるのね。

ネギが大袈裟すぎるだけと思ってたけど、アレがコッチの世界での普通なのかしら？

でも龍宮さん達も大袈裟に思ってたみたいだし、やっぱりネギが変わってるっぽいわね。

……そういえば、木乃香のお父さんの詠春さん。

どこかで会ったことある気がするのは気のせいかしら？

前に皆と一緒に魔法の世界についての説明をしてもらってから変なのよねぇ……。

ネギのお父さん達のことが書かれてる雑誌をネギに貸してもらったけど、写真で見たネギのお父さん達ともどこかで会った気がしたし、今日詠春さんの顔を実際に見たらますます会った気がしてきたのよね。

夢で麻帆良じゃない風景を見たこともあるし……。

なーんか最近変なのよねぇ。

あ～、美味しかった。

ネギも言ってたけど、確かに関西の味付けは関東の味付けとは違ったわね。

関東の味付けもそれはそれで好きだけど、関西の味付けもいいわね。

「さて、皆さん。

とりあえず今日はもう寝るだけなのですが、寝る前にこれからのことを話しあっておきましょうか」

「これからのこと？
ネギ君の隣で寝るのは、ウチとのどかの2人やで？」

「ふ、ふつつかものですが、よろしくお願いします。ネギ先生（せんせー）……」

「頑張るですよ、のどか……」

「……いえ、そういうことではなくてですね……」

くっ、あのときチョキを出しておけば……。
でもいいわ。まだ明日があるもの。

「お前ら、少しは真面目にやれ。
ネギ先生が言ってることは昼間に私達を……というより、近衛を襲ってきた連中についてだろ？」

「その通りです、長谷川さん。
襲ってきた4名のうち2名は既に捕縛済み。残りの2名も関西呪術協会の人達が追っているはずですが、正直捕まるとは思えません。
犬上小太郎君の方は問題ないのですが、もう1人の白髪の少年。アーウェルンクスが強敵です。

以前の魔法関係についての講義のときに話したと思いますが、僕の父であるナギ・スプリングフィールドは世界を救った英雄といわれています。
で、何故世界を救ったと言われているかというと、アーウェルンクスが所属している“ようぃ〝よ誘拐犯(コズモ・エンテレケイア)”の企てを阻止したからなのです」

そういえば、そんな話も聞いたわね。
まさかそんな相手が木乃香を狙っているなんて……。

「し、しかしネギ先生。何故その“ようぃ〝よ誘拐犯(コズモ・エンテレケイア)”とやらが関西呪術協会に？
長である詠春様はネギ先生のお父上の盟友であり、“紅き翼(アラルブラ)”として“ようぃ〝よ誘拐犯(コズモ・エンテレケイア)”と戦った関係です。
そんな詠春様がおられる関西呪術協会に、何故奴らは潜り込んできたのでしょう？」

「さぁ？　それは本人に聞いてみないとわからないです。

……龍宮さん、長瀬さん。外からこの部屋の様子を伺っている人はいませんよね？」

「？　何だい急に？
……特に怪しい気配はしないが」

「そうでござるな。
この部屋は別に監視とかはされていないでござる」

「わかりました。ちょっと結界張って内緒話にしましょう。
ああ、詠春さんから魔法の使用許可をいただいていますので問題はありません。……アーウェルンクス対策の名目でですけど」

……ネギってそういうところちゃっかりしてるのよねぇ。“バレなきゃ犯罪じゃない”的な考え。
カワイイ顔して意外とエグイ考えをするのよ。

「……はい、結界張りましたので、好き勝手に喋っても大丈夫です。

それでなんですけど、あの変な着物着ていたお姉さん。天ヶ崎千草はアーウェルンクスのこと……名前はフェイトというらしいですが、フェイト・アーウェルンクスのことを本当にただの研修生と思っていたようです。

それと彼女がこんな暴挙に出た訳は、彼女の両親が２０年前の大戦で亡くなったのが大きな要因みたいです。

実はフェイト・アーウェルンクスが所属している、“ようし（コズモ・エン）゛よ誘拐犯（テレケイア）”があの大戦引き起こした原因なんですけどねぇ」

「……おい、ネギ。

確認するのも嫌なんだが、確認しておかなければならんことがある。

“何故お前がそれを知っている？”」

「彼女達の怪我治すとき、ついでにコッソリと記憶を読んでおきました」

「やっぱりかっ！？」

「ちなみに千草って人は関西呪術協会の構成員だけあって、関西呪術協会の内部情報についての記憶も一緒に読んじゃいましたね。

このことは関西呪術協会の人に言わないでくださいよ。いくらソ

ッチの情報が主目的でなかったとはいえ、結果的に“巨○の選手が阪○球団の内部情報盗んだ”ようなものですから、バレたら流石にマズイです」

「ネ、ネギ先生……、何ということを……」

「あ～……、だから結界張って内緒話にしたアルね」

うわ、それは確かにマズイわ。
木乃香のお父さんには絶対話せないわね。

「バレなきゃいいんですよ。バレなきゃ。

僕の勘ですけど、多分アーウェルンクス……名字長いですね。フェイトでいいや。フェイトはここに攻めてくると思います。少なくとも僕はフェイトが攻めてくるという前提で物事を進めようと思います。
関西呪術協会の人も警戒してますから、今日のところは大丈夫だと思いますけどね。

それでなんですが、あんな戦闘に巻き込まれるのは怖いから麻帆良に帰りたいっていう人はいますか？

いたら転移魔法で麻帆良まで送りますけど」

「私としてはネギ先生の物の考え方が怖いんですけど……
まぁ、いいや。
ネギ先生個人としてはどうしたらいいと思うんですか？　ネギ先生お得意の大袈裟すぎる危機管理意識で考えた意見をまず聞きたいんですが？」

「え？　僕の考え方のどこが怖いんですか、長谷川さん？
それに結局襲われたんだから、僕の考えがあってたんじゃ……」

「考え方があってたとしても、ネギ坊主の考え方は１０歳の男の子の考え方じゃないからでござるよ……」

「私の感じるネギ先生の考え方って、
“石橋を叩いて確認して強度がＯＫでも、その隣に更に頑丈な鉄橋を架ける”って感じなんですが」

「え？　ソレって石橋叩く意味ないんじゃ？　僕はそんな無駄なことしな……アレ？
……まぁ、いいです。僕の意見としましては、

？　このまま今すぐ転移魔法で麻帆良に帰る。
？　明日の裏についての説明を受けてから麻帆良に帰る。
？　予定通りに観光まで終わらせてから麻帆良に帰る。

の大まかな3通りの選択肢があると思います」

……そうね、そんなところね。
その3つだと、それぞれメリットデメリットがあるわね。

?のメリットは確実に安全なこと。
デメリットはせっかく京都に来たのに夕飯だけ食べて帰らなきゃいけないこと。
まぁ、安全を考えたら間違いなく?だけど、いくら何でもそれだと勿体無いわねぇ。

?のメリットはこの旅行の一番の目的は達成できること。元々そのために来たんだしね。
デメリットは今日、それと明日の説明が終わるまでは危険があること。この本山から出なければ安全とはいわれているけど、ネギの考えでは本山も襲われるかもしれないみたいだし。

?のメリットは観光ね。せっかく京都に来たんだから、少しぐらいは観光してみたいわ。
デメリットは?~?の中では危険が一番あること。さすがに襲われる可能性があるのに観光なんかしている場合じゃないし。

簡単にまとめるとこんな感じかしら?

「……何よ、皆して私の顔見つめて？」

「……神楽坂、お前本当にバカレンジャーじゃなくなったんだな？」

「どういう意味かしら、龍宮さん？」

「いや、だって……、なぁ？」

「（これでネギ先生に熱を上げていなければ、まともなクラスメイトが増えたのに……）」

「……まぁ、明日菜さんは今まで勉強、というか脳みそを使うことをサボってましたからね。

人間の身体構造上、筋肉だろうが脳みそだろうが使わなければサ

ビ付いていくものですから」

「ネギ、あとで話があるから」

「うぅ……、アスナが立派になって……。
ウチもこれで安心出来るわ」

「よかったですね、木乃香お嬢様」

何で木乃香が涙ぐんで喜ぶのよっ！？
そんなに今までの私は酷かったわけ！？

……確かに酷かったかもしれないわね。

「そ、それでネギ先生としてはどれが良いと思うのですか！？」

「え？　ああ、はい。
そうですね。？と？の組み合わせが良いかと思います。

具体的に言うと、明日の関西呪術協会からの説明は予定通りに受けます。
せっかく京都に来たのですし、説明はコチラからお願いしたことですからね。
関西呪術協会の構成員に襲われたので、僕達が帰ると言ったとしても問題はないと思いますが、あまりアチラも良い気分はしないでしょう。

そして観光する予定の明後日の朝までに、関西呪術協会の人達がフェイト達を捕まえられなかった場合は観光を止めて麻帆良に帰り、捕まえることが出来た場合は予定通りに観光する、という感じです」

「……ふむ、確かにそんなところでござるな」

「だな。せっかく京都まで来たんだから、このまま帰るのは勿体無い。かといって、あの連中が捕まっていないのに京都観光っていうのも不安だからな。
……うん、私はネギ先生の意見で良いと思うぞ」

そうね。私もそれがいいと思うわ。
あの人達が捕まってくれれば、それで安全になるんだし。

「……反対意見はないようですね。じゃあ、これで行きましょう。今日はもう遅いので、明日の朝に詠春さんにそう伝えることにします。
もし、それまでに気が変わって麻帆良に帰りたいという人がいたら、遠慮なく言ってくださいね」

「フン！　なら私は明日から京都観光に出るぞ！！！
せっかく京都に来たのに観光も出来ずに帰るなんてなったら、わざわざ京都に来た意味がないからな！！！」

「うーん、まぁエヴァさんなら大丈夫ですか。ちゃんと茶々丸さんも連れて行ってくださいよ。
何かあったら携帯で僕を呼んでください。多分、僕が本山にいると念話は通じないでしょうから。

……それと観光に行くというなら、ちょっとエヴァさんにお願いがあるのですが……」

「……お前のお願いなら聞いてやろう、と言いたいところだが、まず内容を話せ。
というか、その前に何か企んでいるようなその笑顔を止めてくれ」

「え？　別に僕はいつもこんな顔だと思いますけど？

……まぁ、いいです。お願いというのは、天ヶ崎千草の記憶を読んだときに彼女が立てた今回の計画について読んだのですが、そ

れに対する対策です。
彼女を捕まえたとはいえ、フェイトがその計画を実行する可能性があるので、“念のため”にですが用意しておいた方がいいかな、と思いまして。
お願いというのは、ある場所にある物を用意しておいて欲しいんですよ」

簡単なことです、お手は煩わせませんよ。と、ニコニコと笑いながらエヴァちゃんにお願いするネギ。
……まーた何か企んでいるのね。
ネギの笑顔は好きだけど、このちょっと怖い感じのときの笑顔はちょっと嫌だわ。

第三十六話　京都編？　地獄への扉（後書き）

千草のための“天国への扉（ヘブンズ・ドアー）”ならぬ“地獄への扉（ヘルズ・ドアー）”が開かれるようです。
記憶を読めるって便利ですよね。

あと小太郎のフェイトへの好感度が上昇中。
しかし、フェイトは何故か小太郎を殴りたくなったようですｗ

そしてネギパーティーの中では“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”は“ようい（コズモ・エン）ょ誘拐犯（テレケイア）”として認識されました。南無。

第三十七話　京都編？　逆効果

――瀬流彦――

昨日の夜にいきなり学園長から連絡が来て、今日の朝から急な仕事があるということで学園長室に来たんだけど……。

「……現在の状況はこんなところじゃ。スマンが今日一日この部屋に詰めてもらうぞい。もちろん休日手当てはちゃんと出すからの」

「わ、私は今日、彼との約束が……」

「フォッフォッフォ、すまないのぉ。やはり西に関することなら葛葉先生は外せないのじゃ。それに君が剣の稽古をつけた刹那君も京都に行っているのじゃぞ。心配じゃないのかね？」

「……うぅ……」

「ぼ、僕もせっかく春休みなんで、娘と出かける約束がありまして……」

「フォッフォッフォ、明石教授の娘さんというと、ネギ君のクラスの明石裕奈君じゃったの。
ネギ君に何かあったら娘さんも悲しむじゃろうなぁ……」

「……“ネギ君に何かあったら”じゃなくて、絶対に“ネギ君が何かしたら”ですよねぇ」

……まーたネギ先生が何か仕出かしたのか。

いや、別にネギ先生から仕出かしたわけじゃないらしいんだけどね。でも一度お払い受けた方がいいんじゃないかな、あの子？
麻帆良に来てからまだ2ヶ月ちょっとのはずなのに、何でこうまで騒動に巻き込まれるのかな？

いや、わかってるよ。
別にネギ先生が悪いことしてるわけじゃないんだよ。

ネギ先生に秘密にしておくはずの魔法関係者のことがバレたときだって、あれはエヴァンジェリンがおんぶされてるうちに寝ちゃったせいで、ネギ先生が彼女を集合場所に送り届けに来たからバレちゃったんだ。
今一緒に京都に行っている生徒達への魔法バレだって、エヴァンジェリンが転移魔法で転移したところを目撃されて、記憶を消そうとして消せなかったからバレちゃったんだ。

……アレ？　両方ともエヴァンジェリンのせい？

ま、まぁ、今回の京都旅行でも、最初は関西呪術協会のお家騒動に巻き込まれたのかと思ったら、実は魔法世界の指名手配犯が関わっているということだからね。

別にネギ先生から積極的に騒動を起こしてるわけじゃないし、ネギ先生自体は真面目な良い子なんだよ。
特に個性的な子が多い２－Ａでちゃんと先生もやっていけてるし、万年学年最下位だった２－Ａを学年トップにするという偉業まで達

成しているぐらいなんだ。

真面目で良い子なだけでなく、大人顔負けの能力持っているんだ。

……それでもあんまり関わりたくないなぁ。

学園長みたく胃潰瘍で入院することになりかねないし、そもそもネギ先生なら1人でも大丈夫じゃない？

「というわけで、学園長。

僕も彼女との約束があ「瀬流彦君、彼女いないじゃろ」……

……そうですよ、その通りですよ」

やっぱり無理だよね、ハハハ……。

ま、冗談だけど。
ネギ先生は大丈夫かもしれないけど、一緒にいる生徒達は大丈夫とは限らないからね。さすがにここで帰るわけにはいかないさ。
遠く離れた麻帆良から出来ることはそんなにないだろうけど、それでも出来ることがあるならやらなきゃ……。

「大丈夫じゃ。ネギ君ならシッカリやってくれるだろうて。ワシらはもしものときに備えておくだけじゃ。
それに……ちゃんと胃薬はたくさん用意してある。持ち帰りもOKじゃ」

「「「……」」」

……やっぱり帰ったら駄目かな？
くそ、高畑先生さえ出張中じゃなければ……。

――宮崎のどか――

身体が軽い。
こんな幸せな気持ちで目覚めるなんて初めて。
もう何も怖くない。

「……のどか。
いくらネギ先生と手を繋いで寝れたからといって、妙なフラグを立てるのはやめるです」

「フラグ？　何のこと？」

「あれ？
……すいませんです。何か時空を超えて電波が届いたというか……？」

変なゆえ？
どうかしたのかな？

それと身体が軽いのは本当だよ。
ネギ先生（せんせー）がせっかくだからということで、『咸卦治癒（マイティガード）』を発動した状態で手を繋いで寝てくれたから、本当に体の調子が良いの。
こんなにスッキリとして目が覚めたのは久しぶり。長谷川さんや桜咲さんが凄いって言ってたのがよくわかった。

でも残念だったのは、ネギ先生（せんせー）の手が心地良くてあっという間に寝ちゃったこと。
布団に入ってネギ先生（せんせー）と手を繋げたときは、もう心臓がバクバク鳴って落ち着かなくなっちゃって、こんなんじゃ絶対眠れないと思ってたんだけど……。
ネギ先生（せんせー）の手から伝わってきた温もりで落ち着いて、いつの間にか寝ちゃってたの。

もう少しネギ先生の手を繋いでいたかったなぁ。
スッキリして目が覚めたら、ネギ先生は朝の運動しにいったらしくて布団にはいなかったし……。

でも、まだこの手にはネギ先生の手の感触が残っている。
木乃香さんやアスナさんが“弾力があるけど固くなくて感触がシッカリとわかる身体”、って言ってたのがわかる手の感触。
私がネギ先生の手をギュッと握り締めたら、ネギ先生も私の手を握り返してくれた……。

エヘヘ、ネギ先生……。

ネギ先生と手を繋ぐなんて初めて。
初めて会った日にお姫様抱っこされたけど、あれは緊急事態だったし。

……いいなぁ、木乃香さんやアスナさん。毎日あんなことしてるなんて。
しかもアスナさんは手を繋ぐだけじゃなくて、ネギ先生を抱きしめながら寝ているらしいし……。

ネ、ネギ先生を抱きしめて……。

ううぅ……、うらやましいけど、私には無理だよぉ。
手を繋いで寝るだけでもいっぱいいっぱいだったのに、ネギ先生（せんせー）を抱きしめて寝るなんて、考えただけで恥ずかしくて死んじゃいそう。

「……のどか、もうすぐ朝食です。
いつまでも“頬に手を当ててイヤンイヤン”としていないで、お風呂に入りに行きましょう」

「え!?　う、うん、そうだね」

や、やだ、私ったら……。
そうだね、朝食の前にお風呂に入って身支度を整えなきゃ。

髪の毛を触ってみるとちょっと寝癖がついてるし、ネギ先生（せんせー）に会う前に何とかしなきゃ。

……あれ？

よくよく考えると、私が起きる前にネギ先生（せんせー）が起きてたんだから、私の寝顔とかもネギ先生（せんせー）に見られちゃってたってこと？

私、変な顔して寝たりしてないよね？

――

「それではエヴァさん、いってらっしゃい。
何かあったら連絡してくださいよ。

……それと昨夜お願いしたこと、よろしくお願いします」

「……あのぐらいなら構わないがな。魔法が使える今の状態なら、大して手間ではないし。
でも正直、そこまで準備する必要はないと思うぞ」

「あくまで“念のため”ですよ。
無駄になったら無駄になったで、それは平和だったということなんですからいいんです」

「そういう慎重すぎる性格を褒めればいいのか、それとも大袈裟すぎると怒ればいいのか……。
……まぁ、今回の旅行ではネギの予想が尽く当たってたからな。最後までネギの直感を信じるのも良いだろう。
じゃあ、行ってくる。行くぞ、茶々丸」

「はい、マスター。
夕食は食べてから戻ることになると思いますので、マスターの分の夕食は結構です」

エヴァさんが京都観光に行った。
私達と違って、襲われたとしても対抗することが出来るらしいから大丈夫だとは思うんだけど、それでも心配だな……。

だって、あの襲ってきた人って、過去に小さい女の子を誘拐した人なんだよね。
それでこの私たちが住んでいる現実世界とは違うところの、魔法世界ってところで指名手配されている。

エヴァさん本人の前で言ったら怒られるけど、エヴァさんはまるで絵本に出てくるようなお姫様みたいに小さくて可愛いから、あの誘拐犯さん達が狙うには絶好のターゲットなんじゃ……。

ネギ先生やくーふぇの話では、エヴァさんも凄く強いらしいんだけど、それでも心配なものは心配だなぁ。

「それでは僕はちょっと詠春さんと今後について話をしてきます。
１０時から予定通りに、関西呪術協会から見た裏の世界についての説明がありますので忘れないでくださいね」

……やっぱりネギ先生も、エヴァさんみたいに可愛らしい人が好きなのかな？
アルちゃんが見せてくれた、ネギ先生からの好感度ランキングでもエヴァさんが一番“恋愛”が高かったし、エヴァさんの家でよくお話しているし。

……何よりネギ先生のファーストキスがエヴァさんに奪われちゃったし。
私だって、ネギ先生の右頬にキスしたけど、さすがに唇になんか出来なかったよぉ……。

ネギ先生の好みのタイプって誰なんだろう？

あ、そうだ！

「……ね、ねぇ、アルちゃん？
ネギ先生（せんせー）が私達のことどう思っているかの好感度ランキング、見せてもらってもいいかな？」

「え？　宮崎様、いきなり何ですか？」

「……いいわね、それ。
昨日のキスで、ネギが私達のことをどう思ったのか知りたいわ」

「あー、面白そうやなぁ。
バレンタインのときに1回見たっきりやったから、この1ヶ月でどんな風にウチらへの想いが変わったか見てみたいわ」

「……エヴァンジェリンさんがいないのですが、いいのでしょうか？」

「むしろ好都合なのです。
不意打ちでネギ先生の唇を奪うような人は脅威なのです」

「お前ら、少しは自重しろ……。
（……くそ、何で私は昨日寝ちゃったんだよ。
ネギ先生も可哀想に。年上の女の子に囲まれた状態で無理矢理唇を奪われたりして……）」

ごめんなさい、長谷川さん。
こんな方法でネギ先生（せんせー）の気持ちを知るなんて、本当は悪いことだってわかってます。
けど、それでもネギ先生（せんせー）の気持ちが知りたいんです！

「3月の初めに私が確認したときは、以前のものとそう違いはありませんでしたし……まぁ、問題ないですかね。
昨日の皆さんからのキスのせいで、ネギお兄様が心の中では実は悩んでたりしてるかもしれませんし。

ここにはいませんけど、エヴァンジェリン様の分もお出ししますか。
えーっと……、はい、出ました。皆さんどうぞ」

うぅ……。
ネ、ネギ先生（せんせー）の気持ちは誰に向いてるんだろう？

	友	親	恋	愛	色	計
明日菜	5	8	2	9	0	24
木乃香	4	9	2	8	0	23
エヴァ…	7	5	2	8	0	22
刹那	7	5	3	7	0	22
茶々丸	6	7	2	6	0	21
のどか…	5	6	2	7	0	20
千雨	5	6	3	6	0	20
古菲	6	3	1	5	0	15
楓…	6	5	0	4	0	15
夕映	4	4	1	5	0	14
マナ…	5	4	1	4	0	14

……。

……。

……え？

「……あれ？　私への“色欲”が０点になってる？」

「刹那様への“色欲”なら、３月の初めに見たときには０点になってましたよ。
もう慣れてしまわれたんじゃないでしょうか？」

「……それは喜んでいいのかな？　女としての魅力がないと言われているも同然では？
いや、ネギ先生は１０歳なのだからしょうがないのか？」

「そうですよ、ネギお兄様は１０歳ですからね。
でも、私が３月の初めに確認したときより大分変わってますね。
……っていうか、あら？」

うん、刹那さんの“色欲”が０点。
これはいいの。

……これはいいんだけど。

「……ちょっ！？　ちょっとこれはど「落ち着け！　ここは麻帆良じゃないから騒ぐな！　素数でも数えて心を落ち着かせろっ！！！」……ごめんなさい。
１、２、３、５、７……」

「う、うん、ごめんな。千雨ちゃん。
ウチもアスナみたいに叫びそうになったわ……」

「……いや、私も大声出して悪かった。
とりあえず順番に考えていくぞ。

宮崎、フリーズすんな。再起動しろ
……それと神楽坂、“１”は素数じゃないぞ」

「……ハッ！？」

ア、アレ？
いけない、何してたんだっけ？
……そうそう、ネギ先生（せんせー）からの好感度ランキングを見てたんだよね。

「まずは一番簡単な“色欲”からだな。
見事に全員が０点」

「それはそれで問題なんやけど、ネギ君が１０歳ということ考えたらしょうがないなぁ」

「うん、それはいいのよ。
ネギはそういうことがわからないだけなんだから、前のときに刹那さんに１点でもあった方がおかしいのよ」

「ネギ先生は“恥ずかしがられる”ということに慣れていなかったみたいですからね。
故郷の従姉のお姉さんはもちろん、アスナさんや木乃香さんはネギ先生に対して恥ずかしがられていなかったようですし」

「慣れてしまたらこんなものアルか」

「アーニャお姉様は恥ずかしがられてましたけど、それは最初からでしたからね。
ネギお兄様にとって、あのアーニャお姉様がデフォルトでしたし……」

うん。刹那さんだけを女の子として見てるわけじゃないことがわかった。
むしろ全員がそういう風に女の子として見られていない、というのはショックだけど、ネギ先生（せんせー）は10歳だからしょうがないよね。

それにキスのせいで、エヴァさんに対しての“色欲”が増えるなんてことはないみたい。
それは良かったんだけど……。

「あー……、次は“友愛”、“親愛”、“愛情”か？
全員増えてるといえば増えてるな」

「ふむ、見たかぎり“友愛”は拙者達、修行仲間が増えているでござるな」

「“親愛”、“愛情”は全員そこそこ増えているな。
まぁ、元から関係者だった私や刹那、エヴァンジェリン以外の全員と、隠し事しないで付き合えるというのが良かったのかな？
いくら大人びているとはいえ、やはりネギ先生はまだ子供だ。秘密にしているということで、知らないうちにストレスが溜まってたんじゃないか？」

「そういえば、ネギが最近は結構伸び伸びとしてる感じがするわ。
麻帆良に慣れてきたからだと思ってたけど、そういうこともあるのもしれないわね」

「確かに学校でのネギ先生と魔法関係でのネギ先生は違う感じがしますね。
学校でのネギ先生はどこか、“教師”という役柄を演じているような気がしますし……」

「……だな。いくら修行とはいえ、考えてみりゃ１０歳の子供には大変すぎだろ。
私達に魔法バレしなくてもしばらく大丈夫だったかもしれないけ

ど、数ヵ月後にはネギ先生が参ってたかもしれないな。
そう考えたら私達に魔法バレしたのは、ネギ先生にとっては良かったんじゃないかな。

……それで“恋愛”、……なんだが……」

そうなの。

……何で“恋愛”が減ってるの？

前のときは確かに私への“恋愛”が4点あったはずなのに、今は2点しかない。

……アスナさんや木乃香さん、エヴァさんも2点だし。

「な、何でなの！？　何で前のときより下がってるのよ！？
私は前のときは6点あったはずよ！！！」

「ウチは確か5点で、エヴァちゃんが一番高くて7点やったはずや。

そんでのどかは4点。
その“恋愛”の点数が高かったウチら4人が何で2点まで下がっとるん？

……それに何でせっちゃんと千雨ちゃんが3点って一番高いん？」

「ご、誤解です、木乃香お嬢様！
私はネギ先生と何もしておりません！！！」

「あー……あれじゃないか？　昨日のキスが原因なんじゃないか？
それと私と桜咲は“何もしてない”から、点数の下がり方が少なかったんじゃないのか？」

え？　昨日のキスが原因？
どういうこと？　キスしたおかげで“恋愛”が上がるっていうのならわかるけど、下がるってどういうこと？

「いや、ネギ先生が「キスは従姉に頬とか額にされたことならある」ようなこと言ってただろ。そしてお前らが昨日キスした場所はその額と頬だったんだよな？
お前らにキスされても従姉のお姉さんと同じように想われて、“

恋愛”が上がらずにむしろ下がったんじゃねーのか？」

「……ああ、それはありえるかもな。
刹那への“色欲”がなくなったことからも言われていたように、ネギ先生はソッチ方面がまだ理解出来ていない。だったらキスされたとしても、“恋愛”ではなく“親愛”の方が上がるかもしれん。
そもそも欧米人にとって、キスや抱擁は挨拶の一種でもあるからな。

しかし、キスを唇にしたエヴァンジェリンも同様なのか？」

「な、何よそれ？　キスは逆効果だったの？
……だ、だったら一緒にお風呂に入るぐらいしないと……」

「アスナさん、それこそ駄目なのでは？
きっと従姉のお姉さんとお風呂に入ったことを思い出されますよ」

「うわ、何やそれ？　つまりスキンシップしたら“恋愛”がどんどん減ってくってことなんか？
ううぅ……、“恋愛”が減るのは嫌やけど、スキンシップ出来ないっていうのはもっと嫌やなぁ」

「こ。こうなったら、のどか！
ハルナが描いていた漫画に載っていた、し、ししし、しし舌を絡ませるキ「落ち着けぇっ！」あぶっ！？」

スパーーーーンッ！　と良い音がしてゆえが千雨さんに叩かれた。

っていうか、もしかして舌を絡ませるってディープでフレンチなキ、キキキ、キスのこと！？

そんなこと出来るわけないよぉっ！！！

「そこまですりゃ確かに効果はあるかもしれないが、１０歳児にそんなことしようとすんな。

これでわかっただろう。ネギ先生はまだ子供なんだ。

お前らの基準で進めようとしても、逆効果になることだってあるんだ。

だからこれからはもう少し深く考えてから行動しろ」

「……わかったわよ」

「そうやなぁ。

ウチもそうやけど、特にアスナは最近ネギ君に依存してたからな

あ……。

やっぱりネギ君のこともちゃんと考えんとアカンわ」

「エヴァにゃんがいなくて良かったアルね。

いたら絶対もっと凄い騒ぎになってたアル」

「確かにそうですね。

エヴァンジェリンさんもネギ先生のことを露骨に狙っているですし、あの結果見てたらネギ先生に問い詰めに行きかねなかったです」

ううぅ……、ネギ先生にまだ好きな人が出来ていないってことがわかったのはいいんだけど、これだと自信なくしちゃうなぁ。

……元から自信あるわけじゃないんだけど。

で、でも大丈夫！

まだ時間はあるんだし、この旅行を通してもっとネギ先生と仲良くなればいいんだから！！！

「しかし、千雨。

アスナやコノカ達以外の面々も“恋愛”の点数が下がってるのは

どういうことアルかね？」

「うーん、そうだなぁ。
……“恋愛”が下がっただけと考えず、“友愛”、“親愛”、“愛情”に置き換わったと考えれば良いんじゃないか？
総合点で見ると極端に下がったりしてないだろ」

「ああ、なるほど。
そういう考えもあるですね」

「“恋愛”が別の想いへと変わったんか。
女の子というよりも、家族や友達として強く想ってもらっとるということかな？　それだったら悪い気はせぇへんけど」

「（木乃香お嬢様の道のりは険しそうだなぁ……というか、木乃香お嬢様はネギ先生の事は本気なのだろうか？）」

「……というか、拙者への“恋愛”が０点ってどういうことでござるか？
拙者は完璧に“恋愛”対象外ということでござるか？

……何で皆目を逸らすのでござる？

……別に参戦する気はござらんが、ここまで意識されていないというのは癪でござるな」

……えーっと、……ネギ先生（せんせー）は１０歳なんだからしょうがないんじゃないかな？
それか“仲間”として強く想われるようになった……とか？

第三十七話　京都編？　逆効果（後書き）

別にのどかがマミったりする予定はありませんのでご安心を。ただのネタです。……ホントにネタですよ。いや、ホントホント。

そしてネギは仙人への道を順調に歩んでいるようです。
せっちゃんとの同衾、惚れ薬、はじめてのチュウなど、麻帆良に来てから心が乱れることがたくさんありましたが、それらさえも乗り越えてしまったのがまずかったみたいです。
“色欲”も“恋愛”も昇華されて、“愛（アガペー）”へと到達しそうです。

それとのどかが原作の修学旅行時期に比べて、大分積極的というかハッチャケてる感じがします。
最近の原作ののどかの影響を受けちゃったのか……。というか最近の原作ののどかって変わりすぎですよねｗ

明日菜はいくらバカレンジャーを卒業したとはいえ、まだまだ勉強が足りません。
期末テストは範囲が決まっていたので大躍進出来ましたが、さすがに1ヶ月ぐらいで平均的な中学生レベルまで学力を戻すのは無理です。

……本当にマミったりしませんからね。
大事なことなので3回言いました。

第三十八話　京都編？　襲撃開始

――――フェイト・アーウェルンクス――――

「ホンマにお前の予想通りになったようやな。本山の守りは薄くなっとる。
やっぱり俺らが逃げてると思って、街中に人数散らしてるようやな」

「しょうがないよ。
残った僕達2人だけで本山に攻め入るなんて、普通の人なら考えもしないだろうからね」

僕達は今、関西呪術協会本山の屋敷が見える位置まで接近している。周りが木だらけだから隠れる場所には困らない。
屋敷の敷地内には警備が少しいるみたいだが障害にならない程度だ。
僕がアーウェルンクスとわかっている以上、近衛詠春も生半可な追っ手では返り討ちに遭うとわかっているだろうからね。動かせる手錬の全員を追っ手に回したようだ。
おかげで本山の守りは薄い。

ま、逃げているはずの僕はこんな本山間近にいるわけだけど。
確か日本ではこういうことを、“灯台下暗し”って言うんだったかな？

「……小太郎君、体調は大丈夫かい？」

「んー、7割ってとこやな。
まぁ、夜には全快になるで。狗族の治癒力なめんなや」

「そうかい。
日没は18時頃。……攻め入るのは21時にしようか。
あちら側も夕食が終わって一息ついている頃だから、きっと気が緩んでいるだろう。

……特にネギ・スプリングフィールド君」

「あ～、そやな。警備担当とかはプロやからそんな油断はせぇへんと思うけど、ネギは別にプロってわけやないからな。
夕飯はどうせ一緒に来た姉ちゃん達と食うんやろうから、俺らを待ち構えてるなんてことはないやろ。

……たぶん」

それはそうだろう。

彼は関西呪術協会の人間ではなく客人のようなものだから、本山内部で積極的な防衛体勢をとるなんてことは出来ないだろう。

そんなことしたら、“関西呪術協会は信頼出来ない”と言っているようなものだ。

今の彼の立場ではそのようなことは出来ないだろう。麻帆良の一員として西に来ているのだから、関西呪術協会というアウェイでは勝手なことはしないはずだ。

……きっとね。

「それよりどうやって千草姉ちゃん達を助けるんや？

居場所は座敷牢やろうからわかるけど、気づかれないように千草姉ちゃん達を助け出すのは無理やで。どうすんのや？」

「大丈夫だよ。ちゃんと手は考えてある。

本山に潜り込んだら君は千草さん達の救出に向かってくれ。その際にはこの護符を肌身離さず持っておいてほしい」

「護符？

……何か変わった護符やな。お前の手作りか？

いったい何する気なんや？」

「なに、大したことじゃないよ」

ちょっとばかり、ネギ君の真似をしてみるだけだから。

――綾瀬夕映――

……疲れたです。

学校の勉強よりも興味深い内容で純粋に楽しむことも出来ましたが、さすがに朝からぶっ通しで行なわれた関西呪術協会から見た裏の世界についての説明は疲れたです。

大まかには麻帆良でネギ先生やエヴァさんから受けた説明と同じでしたが、それでも細かいところは違いましたね。

さて、東西ドチラの道を選ぶかなんですが、やはり西洋魔術になるですね。というか、麻帆良から離れてまで東洋呪術を学ぶ理由がないと言ったところですか。

のどかも同じく西洋魔術を選ぶようですし、離れ離れになることがなくて何よりなのです。

……まぁ、のどかはネギ先生と離れたくないというのが一番なのでしょうが。

「ふぃ～、やっぱり寮の大浴場みたいな南国的なお風呂もいいけど、こういう木で出来てる和風のお風呂も新鮮で良いわよねぇ～」

「アハハ。オジサン臭いでぇ、アスナ」

「寮のお風呂も凄いけど、ここのお風呂も凄いよね～。
昨日入ったときはホントにビックリしちゃった」

「さすがは関西呪術協会の本山といったところですか」

「……いや、こんなところで関西呪術協会の本山であることを感心されても困るのですが」

確かに良いお湯です。
アスナさんの言う通り、この木の芳しい香りもリラックス出来ていいですね。麻帆良は全体的に洋風建築が多いですので、こういう和風の建物自体が新鮮です。
今日の夕食も美味しかったですし、麻帆良では体験出来ないことを体験出来ました。

……これで京都観光も出来るのなら満点なのですが。

「残念ながらそれは無理でござるよ、夕映殿」

「そりゃそうだろ。あの“幼女誘拐犯”がまだ捕まってないんだからな。
アイツラが京都から逃げたってことが判明すれば観光も出来るけど、さすがに京都の街中に潜伏されてたら観光なんて暢気に出来ないだろ」

「ま、明日の朝までに捕まるのを期待するんだな。
私としてもせっかく京都に来れたので、有名処の甘味を食べてみたいとは思っていたのだが。
……せっかく下調べもして来たというのに」

今日から観光に出ているエヴァさんがうらやましいです。
このまま京都観光出来ずに帰ることになりそうですね。

エヴァさんは夕食も何処かの料亭で食べてくるらしく、２０時を過ぎた今でも戻ってきてません。
おかげでネギ先生が私達に付きっ切りになってくれたので、むしろ観光に出てくれてありがとうございます、という感じなのですが。

それにしても、ネギ先生には困ったです。
あそこまで恋愛に興味がないというか、恋愛を理解出来ていなかったとは思ってもいなかったです。
のどかのキスも逆効果になってしまったし、これからどうやってネギ先生を攻めればいいのでしょうか？

当初、のどかはこの旅行でネギ先生に告白するつもりだったらしいのですが、朝にアルちゃんから見せてもらった好感度ランキングを見る限り、時期尚早と言わざるをえないです。
となると、やはりまだ待つしかないですね。

ネギ先生は１０歳ですし、中学卒業までは丸一年あります。中学を卒業してからも魔法に関わっていればネギ先生との関わりも無くならないでしょうから、まだ時間はたくさんあるのです。
焦らずにゆっくりとコトを進めていくほうがいいでしょう。

「ふっふっふ、今日は私がネギの隣で寝るもんね」

「むぅ～、せっかく2日連続でジャンケンに勝てたのに、今日はお父様と一緒に寝なきゃいけないやなんて……。
せっちゃん。せっちゃんがウチの代わりにネギ君の隣に寝て、アスナが変なことせんように見張っといてな」

「お任せください、木乃香お嬢様。
……それとせっかく里帰りなされたのですから、少しは親子の語らいを長となさった方がよろしいかと……」

「お前らは麻帆良に帰ったらネギ先生といつでも寝れるだろう。旅行中ぐらい自重出来ないのか？
というか、その話聞いたら親父さん泣くぞ、近衛」

むぅ、のどかのライバルはアスナさん、木乃香さん、エヴァさんの3人。
残念ながらのどかは他の人より一歩出遅れている感があります。

家族として同じ部屋で暮らしているアスナさんと木乃香さん。同じ魔法使いとして関係を持っているエヴァさん。
対するのどかのネギ先生との関係は、まだ教師と生徒という関係でしかありません。それにその教師と生徒という関係は、アスナさん達も同じなのです。
このままではアスナさん達にリードを許し続けてしまうことになるですね。早く何とかしないと……。

やはりのどかがネギ先生の“特別”となるには、『仮契約（パクティオー）』ぐらいしないと駄目なのかもしれません。
しかし、『仮契約（パクティオー）』するにはネギ先生と親密にならないといけないという問題もあります。

……あれ？

ネギ先生と仲良くなるためには『仮契約（パクティオー）』が必要で、ネギ先生と『仮契約（パクティオー）』するにはネギ先生と仲良くならなければいけない？

駄目じゃないですか、それ。

お風呂から上がってネギ先生を探してみると、どうやらネギ先生はお茶を片手に夜桜を見ているようでした。

これはなかなか絵になる光景ですね。

外国人の子供が浴衣をピシッと着て、お茶を片手に夜桜を見上げている。

これでネギ先生の頭上に満月でも浮かんでいれば更に絵になったのでしょうが、残念ながら今日は三日月なのです。

「お帰りなさい、皆さん。夜になると一段と寒いですから、身体を冷やさないでくださいよ。

残念ですが、このままですと明日は麻帆良に戻らなければいけなくなりそうです。

……新学期早々の修学旅行の行き先が京都でしたら、近いうちにまた来れたのですがね。

さすがにいくら何でも、修学旅行の日まで“よう（コズモ・エンテレケイア）ぃ〝よ誘拐犯”が京都に潜伏し続けているなんてことはないでしょうから」

「あー、そういえば修学旅行は結局ハワイになったのよね」

「ハワイはハワイで面白そうアル。
京都ならいつでも来れるだろうから、夏休みにでもまた旅行に来ればいいアルよ」

「それもいいでござるな。
せっかくの旅行が“よう（コズモ・エンテレケイア）ぃ〝よ誘拐犯”のせいで台無しになったゆえに、夏休みにでもまたこの面子で旅行に行きたいでござるな」

「アハハ、それもいいですね」

グッジョブです。くーふぇさん、楓さん。
これで夏休みに再びネギ先生と旅行することが出来るです。

「木乃香さんは詠春さんのところに？
それと刹那さんは僕達と一緒の部屋で寝るんですよね？」

「あ、はい。
いくら護衛とはいえ、さすがに久しぶりの親子水入らずの場面に立ち入る気はありません。
長がいらっしゃるなら私が護衛する必要もないでしょうし」

「そうですか。
それでは部屋に行きましょうか。皆さんがお風呂から上がったばかりなのに、いつまでも外にいるわけにもいきませんから」

「そうね、部屋に戻ってトランプでもして遊びましょう。
それと今日は私がネギの隣で寝るからね～」

「……あ、逆隣には私が寝ます。
本来なら、ジャンケンで勝った木乃香お嬢様が寝る予定だったのですけど……」

「はいはい、どうぞご自由に」

……しかし、ネギ先生は隣に女性が寝ても全然気にしないですね。今もアスナさんに抱きしめられていますけど平気にしているです。

“１０歳だから”といわれたらそれまでなのですが……。

それによく考えてみたら、刹那さんものどかのライバルになるのでしょうか？

今は０点になったといえ、ネギ先生が刹那さんに対して“色欲”が１点あったことは事実です。それに寮でも木乃香さんと一緒に、ネギ先生を挟んで川の字で寝ている関係です。

木乃香さんがネギ先生のことが好きなのは確実。

といっても、まだ“男女”としてではなくて“家族”や“姉弟”としての“好き”の方が大きそうですが、それでも恋愛感情を抱いていないというわけじゃないはずです。それはキスの件からもわかります。

そして刹那さんは木乃香さんのことをとても大切に思っているです。

もし木乃香さんがネギ先生のことを本気で好きだということになれば、刹那さんは全力で木乃香さんのことを応援するでしょう。

そこで怖いのが、木乃香さんも刹那さんのことをとても大切に思っているということです。刹那さんもネギ先生のことが好きだった

としたら……。

というか、実際に刹那さんのネギ先生を見る目が満更ではなさそうなのが怖いです。

もし木乃香さんがネギ先生のことが本気で好きで、刹那さんもネギ先生のことが好きだということになったら、木乃香さんはいったいどういう反応をするでしょうか？

“刹那さんにネギ先生のことを諦めるようにお願いする”？

“刹那さんのことを考えて、木乃香さんがネギ先生のことを諦める”？

……それとも、“ネギ先生を2人で分け合いっこする”？

木乃香さんの性格なら、“分け合いっこする”の可能性が一番高いのは私の気のせいなのでしょうか？

そうすれば木乃香さんは、ネギ先生と刹那さんの2人といつまでも一緒にいることが出来るのです。

木乃香さんは独占欲とかはあまりなさそうですし、“皆でいつまでも一緒にいれるならそれでええよ”みたいな考えに落ち着きそうなのです。

刹那さんも木乃香さんのお願いなら、“分け合いっこ”を受け入れそうなのです。……むしろ望むところ？

そ、そうなったら、木乃香さん&刹那さんタッグという強敵にのどか1人で立ち向かわなければいけなくなるです。

……マズイです。ピンチです。勝率は極めて低いと言わざるをえないです。

……よくよく考えれば、エヴァさんにも茶々丸さんという従者がいるのでした。

茶々丸さんがガイノイドとはいえ、ネギ先生はそんなこと気にしなさそうですし、最近の茶々丸さんは本当に人間のようになってきているです。

ネギ先生が来る前に比べたら、それこそ“アナタ誰?”と思うぐらいに……。

……こ、こうなったら、私がのどかについてネギ先生を一緒に……って、何考えているですか、私は!?

私は別にネギ先生のことなんて……。

「それでは何して遊びます?

“ポーカー”?“大富豪”?“ダウト”?“七並べ”?」

くっ！　いつもニコニコと平然としているネギ先生の笑顔が今は憎いです。
私がどれだけネギ先生の鈍感さで苦労していると思うんですか！？

「昨日やったときはネギの1人勝ちだったわよね。
……魔法なんて使ってないわよね？　前に見せてくれた幻術とか？」

「いや、私も疑いを持ったので魔眼で監視してたが、ネギ先生が幻術を使っていたということはなかった。
身体強化の魔法で視力を強化していたということもなかったはずだ、が……正直言って、ネギ先生のことだから何かズルしていたと思っている」

「……結局“大富豪”でも平民以下にはなりませんでしたよね」

「っていうか、“ダウト”で2を最後まで残しておいて、前の人でダウトコールするのやめにするアルよ。
それやられたら、簡単に勝たれて面白くないアル」

「ハッハッハ、バレなきゃイカサマじゃナイデス……あれ？」

「……ネギ先生？」

？　おや、ネギ先生？
いきなり部屋の外の方を向いてどうしたのですか？

「……っ！？
『契約執行（システィス・メアエ・パルテース）』　時間無制限　ネギの従者（ミニストラ・ネギィ）　全員！！！」

「ネギ先生、何をっ！？」

くうっ！？　ネ、ネギ先生の魔力が全身に！？
旅行前に何度かこの魔力供給を練習したことがありますけど、こ

のこそばゆい感じは慣れないです。

それ以前にいきなり何を!?

外に何か……って、障子の隙間から白い煙が!?

敵襲ですか!?　まさか“ようこそ誘拐犯（コズモ・エンテレケイア）”が!?

第三十八話　京都編？　襲撃開始（後書き）

フェイト襲撃開始です。
さて、悪魔（ネギ）ＶＳ“ようⅰ〝よ（コズモ・エンテレケイア）誘拐犯”の対決はいかに？

ちなみにネギはカードゲームのとき別にイカサマしていません。
単純にカードをガンパイしていただけです。チートの身体能力マジパネェ。

それと修学旅行はハワイになりましたが、描写することはないと思います。

だって作者がハワイ行ったことないんだもん！！！
……というか、パスポートすら作ったことないや。

第三十九話　京都編？　本山壊滅

――犬上小太郎――

……フェイトも無茶しやがんなぁ。本山全体を石化させる煙で覆わせるなんて大胆なことしやがって。
ネギの真似ってのはこのことかい。

これなら逃げ場もないし、本山にいた連中のほとんどを石に出来てるやろうな。
というか、チラホラと石になってる奴らが見えとるし。

さて、暢気にしとる場合やあらへん。早う千草姉ちゃん達を助けださんとな。
本山の外にいる連中が異変に気づいて駆けつけるまで、長く見積もっても３０分。どうせ異常があったことは本山の連中が連絡してるやろうし、それまでに２人をつれて逃げ出さんと。

お、ここが座敷牢や！

「助けに来たでっ！
千草姉ちゃん、月詠！　無事……じゃあらへんな、全然」

2人とも座敷牢の中にちゃんといた。まだ処刑とかされてなくて何よりや。
でも生きてるのなら何とかなるはずやけど……2人とも石になっとるから本当に無事なのかはわからんな。

さすがにフェイトだって、千草姉ちゃん達だけを石にしないなんて器用なことは出来んだろうから仕方ないか。
詳しいことは石化治療してからじゃないとわからんが、パッと見た感じは怪我も治されてる。

まぁええわ。2人を回収できたらこんな所に用はあらへん。
さっさと逃げ出さんとアカンけど……千草姉ちゃん達が重いなぁ。石になってるからこれも仕方ないんやけど。

俺じゃこの石化治せんし、このまま担いでいくしかあらへん。

フェイトは陽動も兼ねて、遠距離からの魔法ではレジストしてそうな長や、まだ本山に残っているかもしれない腕利き連中を至近距離から石にしてくるみたいやけど、大丈夫やろか？
それとネギは俺の手でブン殴りたいから、出来れば残しておいて欲しいもんやで。

ま、それも千草姉ちゃん達を安全なところまで運んでからの話やな。
とりあえずフェイトとの合流地点まで急ぐか。

――桜咲刹那――

「全員無事ですね！？
僕と刹那さんで木乃香さんのところにいきます。皆さんはこの部

屋から出ないでください！
龍宮さん達は明日菜さん達の護衛、それとエヴァさんと麻帆良に連絡を！
『来れ（アデアット）』！　龍宮さん、緊急事態ですので“白紙（これ）仮契約カード”で今だけでいいので契約してください！」

「“お試し契約”か。……わかった、事態が事態だ。
すまない、余計な手間をかけさせた。ネギ先生が私の周りに結界を張ってくれなければ私も石になっていたな」

「刹那さん、気を抑えて僕の魔力で身体強化してください。『咸卦法』が使えなければ気と魔力が反発します。
皆さんに供給する魔力で対石化耐性をエンチャントしてますので、この煙の中でも石になったりしません」

「わ、わかりました、『契約執行（シム・イプセ・パルス）』！」

まさかネギ先生の言った通り、本当に“ようこそ誘拐犯（コズモ・エンテレケイア）”が攻めてくるとは……。
外を見渡す限り、この石化させる煙が本山内に充満している。私達はネギ先生の魔力供給と結界で石になることは防げたが、本山の術者達は大多数が石化してしまっただろう。
……こんな大胆な手段で攻めてくるなんて。

それにしても『仮契約（パクティオー）』の機能というのは本当に便利そうだ。ネギ先生の服が浴衣から一瞬でいつもの戦闘用の服に変わった。こういうときは楽で良さそうだなぁ。

私がネギ先生と交わしている“お試し契約”では、『仮契約（パクティオー）』の機能である“衣装の登録”がないから、私は風呂上りの浴衣のままだ。

それでもネギ先生が襲撃を警戒していたために、私もいつでも戦えるようにと下にサラシとスパッツをしていたので着替えなくても戦える。……それでも動きづらいのは確かだが、今は着替える時間がない。

そんなことより木乃香お嬢様を助けに行かないと！

いくら長でもこの石化させる煙を自らと木乃香お嬢様2人分のレジストをしながら、“ようしゃ誘拐犯（コズモ・エンテレケイア）”を相手にするのは難しいだろう。

あのフェイトがネギ先生やエヴァンジェリンさんと同等の力を持っていたとしたら尚更だ。早く援軍に行かないと。

ネギ先生が皆を守る結界を部屋の中心に張る。これで皆のことは一安心だ。

ここに置いていくのは心配だけど龍宮達がいるなら大丈夫だろうし、何よりこれから行くところの方が危険だ。

「気をつけてください、ネギ先生(せんせー)！」

「木乃香のことをよろしくお願いね！」

「はい、皆さんも気をつけて、勝手な行動をとらないように！龍宮さん、長瀬さん、古菲さん、明日菜さん達をよろしくお願いします！
行きますよ、刹那さん！」

「ネギ先生、長の部屋はコッチです！」

「了解でござる」

「アスナ達のことは任せるアルよ」

私達が泊まっていた部屋から出て、長の部屋まで急ぐ。
時折、石になった本山の術者がチラホラと目に付く。この様子だ

と、無事な者はほとんどいないだろう。

くっ！　木乃香お嬢様は絶対に攫わせない！

“よう（コズモ・エンテレケイア）し〟よ誘拐犯”なんかに攫わせて、何かの儀式の生贄になんか絶対にさせるもんか！

木乃香お嬢様……このちゃんは私が守る！！！

「次はドッチに！？」

「コチラです！

この角を曲がれば長の部屋が……長っ！？」

「ネ、ネギ君、刹那君……」

長の部屋まであと一歩といったところで長と廊下で出くわした。

長も身体の半分近くが石化しており、その石化もどんどん広がっていっている。

長が1人でここに居られるということは、木乃香お嬢様は……。

「も、申し訳ない、２人とも……。本山の守護結界をいささか過信していたようですね。
平和な時代が長く続いたせいでしょうか。不意を食らってこの様です。
襲撃されるかもしれないことをネギ君から指摘されていたというのに……情けない」

「長っ！　木乃香お嬢様はっ！？」

「アーウェルンクスに連れ去られました。
それほど上級ではないですが、彼は使い魔として悪魔を連れています。
それと他にも犬上小太郎が来ているはずです。別行動で座敷牢の天ヶ崎千草達を助け出すようなことを言っていました。気をつけて……。

ネギ君なら、“千の呪文の男（サウザンドマスター）”の息子である君なら何とか出来るかもしれません。学園長には……君のことだからきっと連絡済ですね。
すまない。木乃香を頼み……ます……」

「長……」

「……？」

ピシピシ、と音を立てて、長が完全に石化してしまった。

不意をつかれたとはいえ、まさか長がこんなにたやすく破られるなんて……。

ネギ先生が言った通り、あの少年が全力のエヴァンジェリンさんと同等クラスの力を持っているというのは本当らしい。

おのれ、“ようじょ誘拐犯（コズモ・エンテレケイア）”。

貴様らの思い通りなどさせるものか。木乃香お嬢様は絶対に助け出「パァーーンッ!!!」って、何っ!?

フェイト!?　いつの間に私達の背後に!?

クッ!　ネギ先生が気づいて迎撃してくれなければ、今ので終わっていた!

「……今のは高畑・T・タカミチの『居合い拳』？

そういえば君は高畑・T・タカミチと同じく、麻帆良で教師をしているんだったね。その関係で『居合い拳』を教わったのかな？
『居合い拳』といい今の僕のことに気づいたといい、やはりどうやら君はただの魔法使いじゃないようだ」

「いや、タカミチが見せてくれたのを自己流で修行しただけだよ。……刹那さんは詠春さんを守ってください。石になってる状態で戦闘の巻き添えになったら、治せるものも治せなくなります」

そうだ。ここには石化された長がいる。
石化されているから当然動けないし、石になった身体は戦闘の余波でたやすく壊れてしまうかもしれない。石になってるだけなら後で治せるが、この状態で身体が壊れてしまうと“死”すらありえる。

長だけじゃない。
今の本山には石になった人達が他にも大勢いる以上、本山内で激しい戦闘は出来ない……。

「それにしてもよく僕に気づいたね。
気配は完璧に殺していたと思ったけど……」

「詠春さんから得られた情報が多すぎる。
君が悪魔を連れていたことだけならともかく、別行動の犬上小太郎君のことまで言っていたのは変だ。
どう考えても君が故意にバラしたとしか考えられない。
故意にバラしたとなると、君の行動がだいたい予想出来る。
偽情報で混乱させようとしているか、……もしくは今のように情報を囮として不意打ちするか」

「……君が本当に１０歳なのか疑問に思うね」

……それは私も常々疑問に思っているけど、その１０歳らしくないネギ先生のおかげで助かった。
っていうか、“ようい（コズモ・エンテレケイア）〝よ誘拐犯”でもやっぱりそう思うんだな。

「……木乃香さんは君の悪魔が連れて逃げていて、君はその足止めか。
それに詠春さんに言ったことが正しいなら、犬上小太郎君が座敷牢の２人を回収するための時間稼ぎでもあるのかな」

「まぁね。隠してもわかるだろうから言うけどね。
君もわかっているだろう。ここでは派手なことを出来ないということを。人質をとるようで卑怯だけど、君を甘く見る気はない」

「しかし、君だっていつまでもここにいるわけにはいかないだろう。既に麻帆良へは連絡済だ。それに本山の外に出て君達の捜索をしているはずの術者もこの事態に気づく」

「そんなことはわかってるよ。あくまで今の僕の目的は君の足止めだ。

昨日のことといい今の反応といい、ハッキリ言って関西呪術協会の術者全員よりも君の方が警戒に値する」

「それはそれは。
高く評価してくれてありがとう」

……駄目だ、動けない。
この状態では少しでもどちらかに動きがあれば、そこから戦闘が始まる。

戦闘が始まったら、私は長を担いで戦場から離れるしかない。
悔しいことに私はフェイトの眼中にないようだ。彼はネギ先生のみを見ている。

実際そうなのだろう。私はネギ先生との修行の際でも、ネギ先生

に全力を出させたことはない。
エヴァンジェリンさんと同等の力を持っているかもしれないフェイトにとって、私は塵に等しく警戒するにも値しないのだろう。

だがそれなら逆に、私が長を連れて逃げても追撃はされないはずだ。もし追撃されたとしても、ネギ先生が何とかしてくれるはず……。

それにうまくいけば、ネギ先生がフェイトを抑えてくれているうちに私は木乃香お嬢様を連れ去ったという悪魔を追い、木乃香お嬢様を助け出すことも出来る。

今私がしなければならないことを間違えるな。
私は一人じゃない。私にはネギ先生がいる。

ネギ先生との今までの修行のおかげで、お互いの動きや考えはだいたい把握出来ている。
だからネギ先生が次に取る行動は……。

タァーーーンッ！　カキィンッ！

「なっ！？」

「刹那さん！」

「はいっ、ネギ先生！」

この銃声！　龍宮か！？

ネギ先生のことだから、電話線ならぬ念話線を部屋に置いてきた皆と繋げたまま行動していたと思っていたけど、やはりその通りだったみたいだ。

龍宮が援軍なら頼もしい。

龍宮の放った銃弾は、フェイトが咄嗟に張った曼荼羅のような障壁に防がれてしまったが、それでもネギ先生しか見ていなかったフェイトにとっては不意打ちだったらしい。

おかげでフェイトに隙が出来た。

その隙をついて私は長を担いでこの場から離脱し、ネギ先生はフェイトに向かって突撃。

キュキュキュン！

そして『居合い拳』が放たれる独特の音。

対するフェイトは曼荼羅障壁を全開にしてネギ先生の『居合い拳』を受け止めようとするが、

パパパパパンッ！

ネギ先生の『居合い拳』はその障壁をすり抜けてフェイトの身体を撃つ！

「……クッ、馬鹿な？
僕の障壁をすり抜けて？」

「『居合い拳　弐の拳』ってとこかな。剣で出来るなら拳でも出来るさ。僕相手に硬いだけの障壁なんか役に立たない！
『断罪の剣（エンシス・エクセクエンス）』！　神鳴流奥義、『斬岩剣　弐の太刀』！」

詠唱魔法もモビルスーツも使わないときの、ネギ先生得意の接近時での戦い方。
威力は小さいけど障壁をすり抜け、弾速が速くて数が撃てる『居合い拳　弐の拳』を左手で放って相手の体勢を崩し、攻撃力を重視

した右手の魔法の剣で大技を放つ。
単純だが、障壁頼りの西洋魔術師には効果的な戦い方だ。

……私も何度あの戦い方に苦しめられたことやら。
神鳴流は対妖怪用の大きい野太刀を扱う分、ああいう小回りの効く相手は苦手だ。

ザンッ！

ネギ先生の剣がフェイトの身体を真っ二つにする……が、あれは幻像？
本体じゃないのか！？　いつの間に入れ替わっていた！？

「……なるほど。これで君の力を少しは知ることが出来た。『居合い拳』に加えて『神鳴流』まで使うなんて、やはり君は危険だね。
もう少し戦ってみたいところだけど、これで時間稼ぎも十分だし失礼させてもらうよ」

「待てっ！」

パシャァ！

真っ二つになったフェイトが水の塊となって地面に飛び散る。

……くそっ、逃げられた！

確かに最初から時間稼ぎが目的だったらしいが……。

「……大丈夫かい、ネギ先生、刹那」

「大丈夫です。援護ありがとうございます、龍宮さん。
刹那さん、詠春さんは？」

「……無事です。
相変わらず石になってますけど、肉体に欠損などはありません」

「それはよかったな。
まさか念話線を結界と繋げていたとはな。説明する時間がなかったからしょうがないとはいえ、いきなり結界内にネギ先生の声が響いたときは驚いたよ。

……さて、これからどうする？」

「決まっている！　木乃香お嬢様を救い出す！」

「落ち着いてください、刹那さん。そんなに焦らなくても大丈夫です。

奴らは木乃香さんを攫っていきましたが、そのまま木乃香さんを連れて雲隠れするということはないはずです。

そうすると体勢を立て直した関西呪術協会と、理事の孫娘が旅行中に攫われた関東魔法協会の２つの組織から追われることになります。そんな最終的にジリ貧になることはしないでしょう。

……まぁ、天ヶ崎千草の記憶を読んだおかげで、だいたい奴らの次の行動は予想出来てます。木乃香さんを攫った理由も。

それに天ヶ崎千草と月詠の衣服に発信機を仕込んだ上に魔力マーキングもしておきましたので、居場所もだいたいわかります」

「……そ、そうなんですか」

「……よ、用意周到で何よりだ」

……ツッコミたい。

フェイトと同じようにツッコミたい。

もう気にしないでおくと決めたはずなのに、どうしても気になってしまう……。

「何にせよ、奴らを倒すだけでなく、木乃香さんも無事に救出するということなら僕達3人だけでは手が足りません。
他の人達にも手伝ってもらいましょう」

「そうだな。
しかし、いくら奴らが逃げたからもう危険はないかもしれないといっても、神楽坂達のような非戦闘員を彼女達だけで今の本山に放っておくのはマズイ。煙は術者がいなくなったせいかどんどん薄れてきているが……。
古か楓のどちらか、いや……古にはここに残ってもらって、念のために彼女達の護衛してもらった方がいいと思う」

「……それは、確かに。
となると私達4人。それともうすぐ応援に来てくれるエヴァンジェリンさんと茶々丸さんの6人で何とかしなければ……」

敵は4人。
フェイト・アーウェルンクス、犬上小太郎、月詠、天ヶ崎千草。
……これなら何とかなるか？

強敵のフェイトはネギ先生に抑えてもらい、犬上小太郎は楓。
月詠は……私だな。自分の手で木乃香お嬢様を救い出したいとは思うけど、それよりもまずは木乃香お嬢様の救出が最優先だ。
神鳴流の相手は私がした方がいいだろう。

天ヶ崎千草は龍宮に任せる。
式神使いの天ヶ崎千草はもしかしたら切り札となりうる式神を用意しているかもしれないが、龍宮なら簡単には負けないだろう。
エヴァンジェリンさん達もそちらに回ってくれれば、誰か1人は手が空いて木乃香お嬢様を助け出すことが出来る！

それにしても、こんなことになるなら体面なんか気にしないで、ネギ先生と木乃香お嬢様に“お試し契約”をしてもらっておけばよかったな。
とはいえ、今更うだうだと考えている暇はない。まずは楓と合流して、それから奴らの追撃を……。

「え？　アハハ、やだなぁ。
他の人達って言ったじゃないですか」

……ネギ先生？

あの、ビーム・マグナムを取り出して何やってるんですか？

え？　何で長に銃口を向けるんです？

え？　え！？　えええぇぇっっっ！？

ちょ、ちょっと待ってください！？

第三十九話　京都編？　本山壊滅（後書き）

おいッ！
どこ狙ってやがんだよ、敵は“ようｌ〝よ誘拐犯（コズモ・エンテレケイア）”だぞッ！！
おいッ！！
やめろオォ～～～ッ！！！
……以上、せっちゃんの心の叫びでした。

今回、オリジナル技が出ました。

『居合い拳　弐の拳』

そのまんまですね。単純ですが、普通になかなか厄介な技だと思います。

今月から週2更新に戻れる……かな？　微妙です。

第四十話　京都編？　追撃

――近衛近右衛門――

ぬ、ぬおおおぉぉっ……。
今日はもう無事に終われると思っていたのに……。
瀬流彦君も葛葉先生も帰してしまったぞい。

よりにもよって、“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”のせいで関西呪術協会の本山が壊滅じゃと？
しかも木乃香まで攫われてしもうている。

急いで応援の手配をしないといかんな。
こんなことだったらタカミチの出張を何としても延期させておけばよかったの。

麻帆良から直接西洋魔術師を応援に向かわせるのは後々面倒なことになってしまうが、今はそんなことを言っている場合じゃない。
それと本山以外の関西呪術協会支部の連中にこのことを伝えねばならんの。

まったく、年寄りをこんな遅くまで働かせるものじゃないぞい。

「学園長、聞こえますか！？」

「む、ネギ君かの？
聞こえとるよ。大変なことになってしもうたの。
何か状況に変化は？　あいにく応援が到着するのは早くても明日になってからじゃぞ！」

「応援については了解しました。
今から“ようい〝よ誘拐犯（コズモ・エンテレケイア）”の追撃に入ります。
僕らが勝つにしろ負けるにしろ、明日には決着がついていると思います。もし明日になっても僕からの連絡がなかった場合、僕達が負けたと判断なさってください」

「……相変わらずシビアじゃのぉ。
そういうことは考えたくないが、責任者としてはそう判断せざるをえないじゃろうな。気をつけるんじゃぞ」

「はい！　それとなんですが……、

どこまでやっていいんですか？」

……うわぁ……。

このセリフ、本来なら「１０歳の子供が調子に乗るんじゃない！」とでも叱らんと駄目じゃが、ネギ君が調子に乗るわけないしの。わかってて言ってるのが末恐ろしい……。

いや、末恐ろしいんじゃなくて、既に恐ろしいの……。

というか、何でこの子はこんな状況でも冷静なんじゃろ？

「……程々にの。

細かいところはネギ君を信じて任せるが、くれぐれも程々にの。

もちろん君達の身の安全を最優先なのは当たり前じゃが、出来れば人死にや環境破壊は程々に抑えてくれるとありがたい」

「了解です！　それでは失礼します！」

……ネギ君なら大丈夫じゃな。

というか、まだ無事に終わるとは限らないのに、木乃香やネギ君達の身の心配より後始末に対しての心配の方が大きいのは何故じゃろう？

いかんの。責任者としては最悪な事態になることも考えておかんといかんというのに。

だから、ネギ君が負けたときの……ネギ君が、負け……？

……。

……。

……何でネギ君が負けるところを想像できないんじゃろ？

おかしい。あの子はまだ１０歳のはずなのに。

……応援の手配が終わったら、まずは勝ったときの後始末の準備をしておくかの。
とりあえず、手の空いている魔法先生（道連れ）を呼び出さなければ……。

――ネギ・スプリングフィールド――

皆と手早くこれからについての打ち合わせをした後、まず僕がデルタプラスで先行して時間稼ぎをすることに。刹那さん達は着替えとかもありますしね。
それと本山に置いてきた明日菜さん達にもちょっとしたお願いをしておきました。

デルタプラスはさすが“巡航機”。速い速い。
瞬動やＭＭ－Ｄ発動時ユニコーンガンダムの瞬間的な速度には負けるとはいえ、変形した状態での飛行は杖で飛ぶより数段速いです。

……あんまりフェイト達は本山から離れていないなぁ。
5分ぐらい前から移動してないし。

天ヶ崎千草にしておいた魔力マーキングは生きていたけど、さっきまでは衣服に仕込んでおいた発信機の反応がありませんでした。
本山を壊滅させたフェイトの『石の息吹（プノエー・ペトラス）』で、発信機ごと天ヶ崎千草達も石になってたのかな？

となると、さっきから動いていないのは石化回復するためでしょう。
その結果として発信機の反応も生き返ったんだからコチラにしてもありがたい話です。

……あ、今度は魔力マーキングが消えた。フェイトに気づかれたか。
わかりにくいようにしていたとはいえ、さすがにフェイトは気づくか。

でも発信機はまだ生きてるもんね。
仕込んだ発信機は衣服の生地の間に挟みこめるぐらい薄い奴だから、いくらフェイトでも気づけないはずです。僕と違って電波を計測する魔法なんか開発しているわけないだろうし。
まぁ、服を変えられると駄目だけど、今はそんなことしてる場合じゃないですからね。

文明の利器バンザイ。

おー、見えてきた見えてきた。
ちゃんとフェイト達４人全員いますね。それと木乃香さんは……
……えーっと、バルバリシア……でしたっけ？　フェイトの使い魔に捕まってます。
口はテープで塞がれてるみたいですけど、身じろぎしているから意識はあるみたいですね。

っていうか、コラ！　スカルミリョーネ！　……だっけ？
木乃香さんをお姫様抱っこしてんじゃない！　それと木乃香さんを持つならお尻じゃなくて、膝の裏で持て！！！
とんだエロ悪魔ですね、カイナッツォ？風情が！

あ、フェイトが僕に気づいた。
ここまで接近すればわかりますか。スラスター音が静かな夜空に響き渡ってますし。

フェイトがルビガンテ？に僕の迎撃を命じたみたいですね。迎撃というより、時間稼ぎみたいなもんでしょうが。
天ヶ崎千草が猿の着ぐるみのような式神出して、カルコブリーナ？から木乃香さんを受け取りました。
よし、ファルファレルロ？みたいな人型の悪魔より、ファンシーな着ぐるみの方が木乃香さんも怖がらなくて済むでしょう。
そして木乃香さんを渡して自由になったドラギニャッツォ？が、空を飛んで僕に向かって突撃してきます。

フン、無駄なことを。

まずは向かってきているグラッフィアカーネ？が持ってる鉈みたいな剣を、モビルスーツの羽根に取り付けているビームライフルで撃って真っ二つに折る。
そして初っ端から武器を失って驚いているリビコッコ？の目前で変形を解除。それと同時にビームサーベルを左手に装備して、今度はチリアット？の身体自体を真っ二つにぶった斬る！

それで言い訳つくだろ！　還っちまえ！

１秒も持たせられなかったアリキーノ？は地面に落ちる間もなく、風に溶けていくように消えていきました。

時間稼ぎが目的ならせめて１２体は用意すべきだったのに、たった独りで僕に突っ込まされるとは、……ああ、なんて可哀想なマラコーダ……でしたっけ？

マレブランケの悪魔の名前のどれかだったのは覚えてるんですけど。

……ま、いいか。そんなことはどうでも。

さて、僕の目的は時間稼ぎ。刹那さん達が“空飛ぶゲタ（サブフライトシステム）”で追いついてくるまで、ちょっと時間がかかりますね。

まずは　Ｏ　Ｈ　Ａ　Ｎ　Ａ　Ｓ　Ｈ　Ｉ　からしてみましょうか。とりあえずモビルスーツを解除して、彼らの目の前に降り立ちます。

“和平の使者なら槍を持たない”って言いますしね。それに加えて親しげに呼びかけ、話し合いの余地があることをアピールしましょうか。

「フェ～イット君っ！　あっそびっましょっ！」

「……」

うわ！？　心底嫌な顔されました！

“憎悪”とかじゃなくて、本気で“嫌悪”している顔ですよ。

具体的に言うなら最近のアスナさんが学園長を見る目をしてます。

フェイトの売りは、笑っているときでも無表情を貫き通すという感情表現の無さでしょう！

それがどうしてこうなった！？

誰なんですか！？

フェイトがここまで感情を表すようになってしまうほどの嫌がらせした人間は！？

……イヤ、僕なんですけどね。
少しやりすぎたか。

……っていうか、何で僕がこんなにイラついているんだろ？
僕ってこんな風に直接的に嫌がらせするような人間でしたっけ？
何か落ち着かないなぁ。ちゃんと気で身体制御してるはずなのに。
本当の意味での初めての殺し合いのせいで落ち着いていないのかな？

「冗談だからそこまで嫌な顔しないでよ」

「……追ってくるとは思っていたけど、随分と早かったね。
千草さん達から妙な魔力の反応があったからさっき消したけど、
それを目印に追ってきてたのか」

「まぁね。
“こんなこともあろうかと”と思って、いろいろと用意しておいて良かったよ」

発信機のことは秘密。わざわざバラす必要ありませんからね。

木乃香さんが僕の姿を確認できてホッとしてますね。良かった良かった。

それとやっぱりさっさとフェイト達を潰しておけばよかったかな？　木乃香さん達に不安を与えてしまったことに、今更ながら罪悪感が……。

木乃香さんに声掛けて、少しでも安心させておきますか。

「安心してください、木乃香さん。
怖いでしょうが、絶対に助け出しますのでもう少し待っていてください。
刹那さん達ももうすぐ来ますし、詠春さんや明日菜さん達も無事ですよ」

「ン～、ンン！」

木乃香さんが安心したように頷いてくれました。

皆が無事だということもわかったのが大きいのでしょう。あとせっちゃんが来ることがわかったからでしょうね。

「さて、フェイト並びに天ヶ崎千草さん達一同に勧告します。降伏してください。

確かにフェイトによって本山にいた術者はほとんど石化させられて壊滅状態になってしまいましたが、腕利きの人達はフェイト達捜索のために元から本山から出ていましたので無事です。

その人達には既に連絡済ですので、1時間以内に援軍に駆けつけてくれるでしょう。

麻帆良にも連絡済ですので、明日になったらありったけの西洋魔術師が応援にやってきます」

「……は？　本山壊滅っ！？

小太郎、新入り！　あんたら何やったんや！？」

あれ？　天ヶ崎千草が驚いている？

……ああ、そうか。

石化から回復したばっかりで、詳しい事情はまだわかっていなかったのか。彼女達は昨日捕まってから一度も目を覚ましてなかったから、状況がわからなくて当然か。

月詠は何だか目の焦点が合ってないような感じがしてるし、まだ本調子じゃないんだろうなぁ。

「えーっと、フェイトに小太郎君。
天ヶ崎さん達に今までのことの説明してもいいよ。コチラとしても時間稼ぎになるから助かるし」

「時間稼ぎって……随分とハッキリ言うね。強さ云々よりも君は考え方が厄介すぎるな……。
とはいえ説明しないわけにもいかないか。時間をかけるとネギ君の思い通りになるから簡単に説明するけど、

・本山の参道でネギ君達と相対したのは昨日のこと
・ネギ君の魔法で千草さんと月詠さんは気を失って捕まった
・僕と小太郎君は逃げることが出来た
・今日になって僕達が本山を襲撃、壊滅させた
・そして千草さん達を連れてここまで逃げてきた

以上、わからないことは？」

「え？　ちょい待ち。……うん、昨日のことは覚えとる。
……よし、だいたい状況がわかったわ。……って、あんたら無茶しよんなぁっ！？」

「状況がわかったのなら結構です。

改めて言いますが、降伏してください。1時間以内に援軍が……
……お？」

キィーーーン！　と“空飛ぶゲタ（サブフライトシステム）”の飛行音が聞こえます。
ようやく刹那さん達が到着したようですね。

「木乃香お嬢様ぁっ、御無事ですかっ！？」

「待たせたね、ネギ先生」

「どうやら戦闘はまだ始まっていないようでござるな」

「さぁ、木乃香を助けるアルよ！」

「良いタイミングです、皆さん」

これでコッチは僕、刹那さん、龍宮さん、楓さん、古菲さんの５人。

数の上ではこちらが有利です。

「とまぁ、援軍がこのように1時間以内に到着します。
あなた達に勝ち目はありませんので、どうか降伏してください」

「貴様らぁっ！　今すぐ木乃香お嬢「刹那さん！　今は僕が話をしています！」……も、申しわけありません」

「落ち着け、刹那。ここはネギ先生に任せるんだ。
今のお前よりはうまく進めてくれるさ」

「……失礼。
あなた達の勝ち目はないです。ですので降伏してください。
降伏していただけるなら、命だけは助けてもらえるように詠春さんへの口添えはします」

「何言うてんのや！
直訴に失敗した以上、降伏しても処刑されるだけやないか！」

「あ、あ～～～……。あのな、小太郎。
直訴に失敗したら処刑云々というのはあの坊やが間違ってるだけで、実際にそうなるとは……」

「……でも千草さん。
僕と小太郎君で本山を壊滅させてしまったよ」

「……あ。
もう無理やな。今更降伏しても許してくれるとは思えへん」

ですよねー。
これで降伏したら命だけは許してあげるなんて言っても信じてくれるわけないですよねー。

……天ヶ崎千草も可哀想に。
あのまま座敷牢にいたら、そこまで重罪にはならなかったのに……。

「となると千草さん。
計画通りにお姫様の力を借りて何とかするしかないと思うけど？」

「……ク、こうなったら行くとこまで行くしかないか。
小太郎達は悪いけど、あの坊や達の足止めお願いな。ウチはあの場所までお嬢様を連れていくわ」

「（……それでいいよ、千草さん。とりあえずこれで目的は達成か。まだ少し付き合って、ネギ君の力を詳しく調べるけどね）」

「交渉は決裂、ということでしょうか？」

「そういうことや。
坊やがどんなに強くたって、あの場所まで行きさえすれば……。
召喚も1時間あれば充分やしな。

……とはいえ、あの坊やは厄介やな。
ここは一つ、お嬢様のお力をお借りします。小太郎達がウチのお札さんを持ってきてくれて助かったわ。
……お嬢様、失礼を。

オン　キリ　キリ　ヴァジュラ　ウー「猿飛佐助！？」ンブフォッ！？」

「ど、どうしたんや、千草姉ちゃん！？」

あ、呪文途中で止めちゃった。
どうやら不意打ちだったみたいですね。

というより、何で意味わかるの？　２０年以上前のですよね。
天ヶ崎千草ってやっぱり結構年食ってるのかな。

考えてみれば、２０年前の大戦で両親をなくしたのをキッカケでこんなことを仕出かしたというなら、２０年前には既に物心がついていなきゃ駄目ですよね。
ということは、どんなに小さくても５歳以降、……普通に考えたら１０歳くらい？
つまり天ヶ崎千草はもうアラサーということに。

……３０歳であの服に露出度？　……ハッ、ねぇわ。

「ち、違うんや！
昔、ああいう風に漫画やアニメで真言を軽々しく扱うのに対しての抗議をしようっちゅー話が出たんや！　そのときのことを聞いたことあるから知ってるだけや！　別にウチが見てたというワケやあらへん！

……そ、そんな生暖かい目で見んなぁっ！！！」

「……ア、アカン。
千草姉ちゃんとネギが言ってること全然わからん」

「ネ、ネギ先生。

いったい何を言ってるんですか？」

「っていうか、それこそ何で外人の坊やが知ってんのやぁっ！？」

「千草さん、落ち着いて。
時間稼ぎを目論んでる彼の手だ。早く千草さんはあの場所へお姫
「火遁の術とか使わないんですかぁ？」「うっさいわっ！！！」…
……頼むからネギ君は黙れ」

「……ハァッ、ハァッ、ハァッ！
……いや、落ち着け。落ち着くんや、ウチ」

やっべ、この人からかうの面白すぎだ。
打てば響く鐘のような人ですね、天ヶ崎千草って。

……あ、木乃香さんの魔力で鬼が大量に召喚された。
１５０体ぐらい召喚されましたけど、このメンバーなら楽勝です
ね。

「……交渉決裂ですか。ま、いいです。

実力で木乃香さんを取り戻すことにしましょう。
フェイトの相手は僕がします。楓さんは小太郎君。龍宮さんと古菲さんは鬼の相手をしてください」

「承知でござる」

「了解。
弾代は全額学園長持ちだからな。気楽なもんだよ」

「わかったアル。
ネギ坊主との修行の成果、存分に見せ付けるアルよ」

「刹那さんは月詠さんの相手を。１０秒で終わらしてください。その後は鬼の始末を手伝い、鬼の掃討完了次第に木乃香さんの奪還へ。僕はフェイトの相手で手一杯になるかもしれませんので、その場合でも僕に構わず木乃香さんを」

「はいっ！　……って、１０秒ですか!?
さ、さすがにそれは無理っぽいのですが……」

「大丈夫です。今なら勝てます」

「な、舐めとんのか、坊や！
その木乃香お嬢様の護衛が神鳴流だからといって、月詠ハンだって同じ神鳴流や。たやすく勝てるなんて思うとるのか！？

月詠ハン！　ここは月詠ハンの力をあの坊やに……月詠ハン？　さっきからやけに静かやけど……」

「い、いえ。……あのー、小太郎はん。

……ウチのメガネ持ってないですかー？」

「「「「「……え？」」」」」

「メ、メガネ！？

隠れ家にそんなもんあらへんかったぞ！？　座敷牢にも見当たんなかったし……」

「……いえ、ウチも隠れ家に用意した記憶はないから仕方ないんですけどー」

……だから言ったでしょう。今なら勝てます、って。

月詠を治療したのは僕ですよ。治療のときにメガネを没収するなんて簡単なことです。

普段メガネかけてる人がいきなりメガネなくすと、目の焦点とか上手く合わなくなりますよね。

本当に原作知識って便利ですねぇ。

原作知識さえあれば、月詠の無力化なんて簡単です。

ま、『雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）』のせいで元からフレーム歪んじゃってますから、かけてても戦闘できなかったでしょうけどね。このメガネ。

「探し物はコレですか？」

「……それは、もしかして月詠のメガネ？
ネギ先生が持ってらしたのですか？」

「えー、坊やがウチのメガネ持っとるんですかー？
返してくだ「ミシィッ！　ミシミシミシィッ！　パリィーーーンッ！」……な、何の音ですーーー！？」

……脆いなぁ、このメガネ。身体強化してないのに簡単に握りつぶせましたよ。
せめて超強化プラスチックで作った方が良いんじゃないですかね。
神鳴流みたく接近戦で戦うなら尚更です。
それと外れないようにゴーグルタイプにするとか……。

「……というわけで、もう一度言います、刹那さん。
１０秒で終わらしてください」

「わ、わかりました、ネギ先生」

「言っておきますが、情けは無用です。
敵は倒せるときに倒してください。あなたが見逃した敵が木乃香さんを、あなた自身を殺すことになるかもしれません」

「……わかりましたから堪忍してくださいぃ……」

いや、別に刹那さんを怒ってるわけじゃないんですよ。
だからそんな萎縮しないでくださいよ。

「天ヶ崎さんも行っていいですよ。というか行ってください。
木乃香さんを戦闘に巻き込んでしまうわけにはいきませんからね。
安全なところに避難してください。

木乃香さんはもうちょっと待っててくださいね。この人達をすぐ片付けてから後を追いますので」

「……ち、千草姉ちゃん、急ぎぃっ！！！」

「わ、わかったわ！」

あーあ、急いじゃって。
転んで木乃香さんを落とさないでくださいよ。

さて、それでは狐狩りならぬ、猿狩りの開始です。

第四十話　京都編？　追撃（後書き）

……おかしい。なんか本気でネギが悪魔になってきた。
せっちゃんにも怯えられてるし。

ただ普通に原作知識を活用してるだけのはずなのに、どうしてこうなった!?　やってること自体はそんなに大袈裟なことじゃないのに!?
“月詠のメガネを没収”しておくなんて、別に大袈裟なことじゃないですよね!?

ちなみに、ネギの「猿飛佐助!?」発言についてわからない人は“まんが猿飛佐助”を調べてください。それと千草が鬼の召喚に使った呪文を。
ルビガンテの名前については“マレブランケ”ですね。ＦＦ４の四天王達の元ネタにもなってるやつです。

【ネギの被害者リスト】

メルディアナ学校長：燃やされた
カモ：去勢された＋『仮契約（パクティオー）』儀式の手伝い

鳴滝姉妹：悪戯し掛けて返り討ち
エヴァンジェリン：紅茶吹かされた
バカレンジャー：勉強地獄
学園長：ストレスによる急性胃潰瘍にて吐血
さよ：知らないうちに成仏させられるところだった
魔法先生一同：「この子ホントにどうしよう？」という絶望
愛衣：幼児退行させられた
高音：露出狂の嫌疑かけられた
刀子：露出狂の嫌疑かけられた
バレーボール：破裂させられた
タカミチ：コーヒー吹かされた＋担任クビ＋マダオ就任
刹那：勉強地獄＋バカホワイト就任
明日菜：失恋
関西呪術協会：変態集団疑惑
天ヶ崎千草：勝っても負けても“死”？
“完全なる世界（コズモ・エンテレケイア）”：“よう（コズモ・エンテレケイア）ぃ〝よ誘拐犯”
ルビガンテ：名前忘れられた　↑　ｎｅｗ！
月詠：メガネ壊された　↑　ｎｅｗ！

モビルスーツ紹介（Ｗｉｋｉから抜粋＋個人的感想）

非変形タイプの百式改系列の量産機とは異なり、設計をΔ（デルタ）計画案本来の可変タイプ（デルタガンダム）まで差し戻し、量産を前提に再設計した試作機。
Ｚ系列で培われたＴＭＳ技術をフィードバックさせることにより、初志を実現し完成させた機体。

デルタガンダムと同様に巡航形態（ウェイブライダー）への変形が可能となっている。

この巡航形態では単独での大気圏突入と１Ｇ重力下での飛行が可能。
メインスラスターが背中にないＭＳとしては珍しい設計で、未だ試作品ゆえに編成の組み込みづらい規格外の機体。

カッコいいとは思いますけど、出番少ないですよね。
これで全部一回はモビルスーツ使ったぞー。

それと今度の日曜はＦ１観戦しに鈴鹿まで行きますので、日曜日の更新はありません。その代わり月曜日に更新をします。
あと来週の木曜は出張に行くことになりましたので、これまた更新はありません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2195r/

テンプレ通りに進めたい

2011年10月5日21時04分発行